THE CENTRAL REVIEW

中央公論

臨時增刊

世界大觀號

第三十一年第八號　第三百三十三號

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨を御附記乞ふ

最大の幸福は腦を患はぬ人!!

島村博士證明

健腦丸

腦病良藥

KENNOGWAN

主効

□腦充血□腦貧血
□腦膜炎□卒中
□逆上症□鬱憂
□神經痛□頭痛
□眩暈□便秘
□健忘□癲癇

特長

本劑を少量宛常用せば逆上を引下げ便通を快し恐る可き腦充血を快治し中風卒中を未發に防ぎ記憶力の增進を促す特効あり

價

一日半分	二十錢
半週分	四十錢
一週分	七十錢
二週分	一圓卅錢
五週分	二圓仐錢
十週分	五圓

本舖 丹平商會藥房

大阪 東京

全國海外信用藥店ニ販賣セリ

腦を患はぬ人、健腦丸服む人!!

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告は掲載謝絶す

文學博士 井上哲次郎氏序
東洋大學教授 境野黄洋氏序
印度カルカッタ梵語大學出身 木村龍寛氏著

■印度思想の寶庫■

優波尼沙土物語（ウパニシャッド）

■總洋布最上製 ■紙數五百四十頁
▼定價壹圓八拾錢 ▼小包料拾貳錢

タゴール聖詩は本書の爲に序詩を寄せらる

ウパニシヤッドは印度哲學の精髓を示せる古聖典にして「梵」の眞意義を說けるもの。タゴールを生めるは實に此の書にして『生の實現』は此書の近代的註釋に外ならずと稱せらる。唯だ原本極めて難解、容易に近づく可からず。本書卽ち平易なる語を以て之を物語風に書き碎き、精密なる解說を附し懇切なる註解を施し、以て何等準備知識なくして何人も容易に其の眞意義に徹することを得せしむ。

境野教授曰く

優波尼沙土は印度哲學思想の結晶である。婆羅門教の何れの宗も印度教の何れの派も苟も其根柢に於て優波尼沙土に連絡して居ないものは一もない。佛教とても同じことで其根本的立脚地は決して優波尼沙土と違つたものではない。然るに斯る重大な優波尼沙土が未だ十分に日本に紹介せられて居ないといふことは大なる學界の恨事でなければならない。今此木村龍寛君の著は其內容として優波尼沙土の一般的解說を以て其大體を示し進んで優波尼沙土中の主要なるもの九部について其の精神を明かにしたので頗る從來の學界の缺點を補ひ得たものであると思ふ。木村君は久しく印度に留學して其の蘊蓄は極めて深い。

東京市牛込區矢來町中の丸 新潮社 電話番町二二二三番 振替東京一七四二番

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

山岳文學の大權威全部完成

日本アルプスは日本本州の中央大山系即ち越後、越中、信濃、甲斐、美濃に跨がり高山深谷白雪森林等の大自然に富み最も複雜なる構造と高調の色彩を有すれども古來人跡殆ど全く到らず從來の地理、文學、繪書より削除せられたる境域なり、本書は著者が十數年來この地を探檢踏破して齎らし來りたる紀行文及びスタデーにして每卷論文、創作の二篇を收む。每卷挿入の六大書伯のスケッチは稀世の珍品。

小島烏水君著

日本アルプス 全四冊

每卷讀切各冊菊大判三百餘頁　金線美術的裝幀函入
全四冊正價各冊金貳圓五拾錢　普通小包料各冊拾貳錢

本書の寫眞は日本山岳會員諸氏の高山深谷を跋渉して親しく撮影したる中最も印象的なる者を選擇して精巧なるコロタイプ版、亞鉛版、寫眞網版等に作り學術的說明を要する者は木版圖を刻せり意匠に三色版に又印畫に全冊を擧げて純山岳的に裝飾したるを以て日本アルプスの無盡藏なる大繪卷物を展開する如く山光水色紙上に滿つるを覺ゆべし、第一卷には白峰山脈臆測地圖を插入したり。

田山花袋先生著

增補 日本新漫遊案內

增補第六版

總クロース
美本全一冊
價壹圓拾錢
郵稅八錢

邦人の手に成れる浮世繪研究の大著

小島烏水先生著　中澤弘光先生彩畫

浮世繪と風景畫

菊版五百餘頁木版畫摺鳥の子裝幀函入無類の美本全一冊價參圓五拾錢郵送費十八錢

挿繪五拾葉は著者多年蒐集の原版畫より錦繪、繪本、草雙紙、短册、張交、狀袋、表紙、摺物、千社札等を精巧なる美術製版に複製せり。

歐米に於て全盛なる浮世繪研究は本邦に於ても勃興時代に入れり本書は系統的に本邦人に研究されたる唯一且最初の浮世繪史也、內容は近代歐洲印象派の新藝術に大影響を與へたる風景畫家歌川廣重を中心とし北齋豐國以下の天才を周圍とし江戶末期時代を背景とし豐富なる材料と美麗なる文章を以て精細に記述論評したる風景版畫史也、木版美術史也、日本山水論也、江戶時代文明史也、一面精巧なる浮世繪版畫集也

橫山健堂先生著　小杉未醒先生裝幀

文藝地理 東海道五十三次

最新式裝幀
函入全一冊
一圓六十錢
郵稅十二錢

發兌元　東京市京橋區中橋廣小路　文榮閣
振替四一〇九　電京三七七

信用なき店舖及び卑猥なる賣品の廣告揭載は謝絶す

簡野道明先生新著

論語解義

內容見本贈呈

著者半生の蘊蓄を傾倒して大成せられたる新著にして、章毎に（譯讀）（章旨）（字義）（直解）（考異）（餘義）の六項に分ち、極めて精細親切に之を講述せられ、且つ至便至益なる（語句索引）を附す。考證博大、解釋嚴正、論斷穩健、本書出でて論語の眞價と光輝とは現代的に發揮せられたりといふべし。

菊判クロス天金全一冊

定價　金貳圓五拾錢

（小包料拾貳錢）

世評一斑

萬朝報 論語の意義長きや今に至つて讀者を絶たず。此書は斯學に造詣深き著者が、内外の註疏を參考し、而も自ら發明する所を加へて、毎章・譯讀・章旨・字義・直解を示し、力めて又考異・餘義を掲げ、以て最も精細に孔子の精神を闡明するもの。蘊蓄まことに淺からず、初學新たに據る所を得たりといふべし。

東京朝日 古來、論語を解するもの丶中、最も簡明にして其要を得たるもの、即ち訓詁に泥まず、性理に偏せず、考證に拘らず、能く其中を得て、しかも簡傑平明を期し、今時の學者に恰適せしめんと努めし所、十分に其苦心の跡を見るべし。内容は本文を擧げて、其の下に、譯讀・章旨・字義・直解・考異・餘義の六項を設け、異本字句の異同より異説の取捨に至るまで、容易に解明論斷を與へ、讀者をして惑なからしむ。論語解釋書中、最も見るべきもの也。

東京神田錦町一丁目十番地　株式會社　明治書院　振替東京四九九一番　電話本局二四四八番

岡田播陽著

明けむとする夜の叫び

（最新刊）

□！挿畫！□

泰西名畫三●鏑木清方一
大谷句佛一●北野恒富一
喜二郎三●晩花二
爾保布一●溪仙一
夢二二●著者自畫像
三色版三枚、表裝八度刷
木版！十數枚の挿畫は
內容と相俟つて意味深遠

夜は明けむとして黎明は未だし暗黒の裡に呼ぶはこれ神か果た惡魔か！

人生の大波瀾を泳ぎ人情の甘酸を嘗め盡し肉と靈とに暗黒と光明極惡と極善怒罵と熱涙とを盛れる天下の奇才茲に男女性戀愛結婚を藝術に表現して至らざる無し是魔女を顫はせ眞人を泣かしむる大破壞と大救濟!!

價六十錢
郵稅六錢
出版界未曾有の美本

カーペンター著 三浦關造譯

新刊

生に徹する藝術

人生と藝術とを說く近代唯一の名著也！新時代を告ぐる預言也！眞に生の眞實に觸れたる見解は讀み來つて知らず靈感に顫へしむ譯筆亦流麗森嚴なりと評せらる。

○讀賣新聞評＝本書を眞摯なる讀者に奬む

價一圓二十錢
不要郵稅
挿畫十枚
樂譜三十

發行所 東京本郷元町二の四七 振替東京二四〇二七番 更新文學社

大賣捌 ○東京、東京堂、上田屋、東海堂、北隆館 其の他大阪盛文館、福音社其の他

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

一 當會社の保險料は低廉にして且つ利益金の百分の五十以上を五箇年目毎に契約者に分配す

一 當會社の保險料拂込方法は保險證券訂正の煩を要せず其變更契約者の隨意とす

一 當會社は拂濟保險の便法を設けあり

古河家經營

博愛生命

社長 男爵 中島久萬吉

專務取締役 小原元美

專務取締役 鈴木市之助

常任監査役 安達仁造

本店 東京市日本橋區本町四丁目十五、十六番地

電話本局一八五六、五一五〇、一二八七番

振替貯金口座東京一七一七番

支店 大阪市東區本町一ノ一二三（電長本局二三一一番）

一 當會社は低利なる金融機關の設あり

一 當會社は被保險者の年齡範圍最も廣く滿九年七箇月以上滿六十年六箇月迄契約す

一 當會社の保險金支拂は最も迅速なり是れ保險契約の目的を遂行せんが爲なり

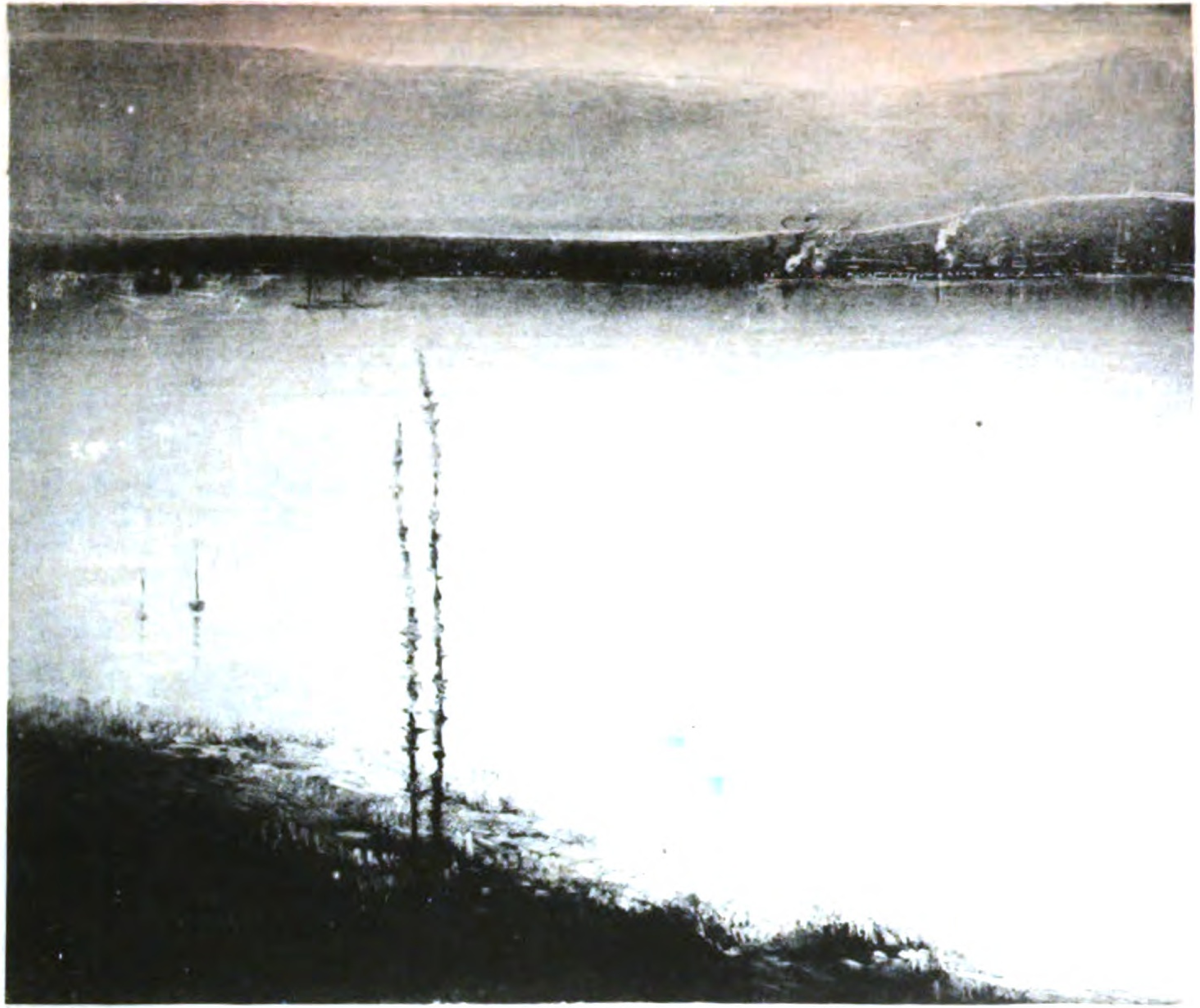


▼說苑



商品目錄御入用の方は
郵券六錢御送附を乞ふ

LÉON DABO



The Hudson River

中央公論



第卅一年第八號
世界大觀號
第三百三十三號

世界に於ける日本の位置

(一)

熟々宇内を大觀すれば七八强國各々雄を一方に稱し又は其分属を各方面に有し以て中古時に於ける封建割據の形勢を現出せり、今や各國内の封建制度は遠く既に廢れ、我邦の如き東洋の一隅に偏在して世界の進運に伴はざると數百年、以て獨り各國に後れて封建制度を存持したりしも、王政維新と共に之を一掃してより既に五十年に垂んとす、斯くて全世界中一國も封建制度を持するものなきの今日に當りて、世界そのものは正に列國割據の全盛を示しつゝある亦頗る奇ならずや、全地球上の陸地、南北の極地を除く外は、悉く列國の分割に委せられ、豆大の無人島も各國爭ふて之を占有せんとす、南太平洋サモア

群島の分領問題及び阿弗利加分割會議の如き尙ほ吾人の記憶に新なる所にして、又一九〇四年英佛協約して多年の懸案たる埃及問題と摩路哥問題とを交換帳消にして却て獨逸の憤怒を買ひ、軈てカイゼルのタンヂール訪問となり、又たパンテル艦のアガヂル派遣となり、此間獨佛危機を叫びしも一再ならず、アルゼシラス列國會議より獨佛伯林條約に至るまで年を閱する六年、幾多迂餘曲折の末に遂に彌縫を以て局を結ぶを得たりしも、治らざるものは獨帝の肚裡腹底なり、遂に巴爾幹形勢に藉口せる陸軍の大擴張(五億圓臨時費支出)を敢てして以て今次大戰開始の一大兵因を爲せり、翻て他の方面を觀れば日清日露の兩役の如き其原因の朝鮮半島に對する勢力競爭に在りしは今更絮説を待たざる所、又た北米合衆國の大々的海陸軍擴張の如き一方亞細亞方面に對する威嚇の意味もあるべく更に中、南米に對する歐洲の領土的野心に備へんと欲するなるべし、抑も列强國の外小國なるもの多しと雖も多くは是れ自發的に他の大國の保護の下に立つを餘儀なくせらる、葡萄牙が英國と秘密條約を結びて其保護に依賴し、暹羅亦英國に賴り、白耳義の英佛の後援に待つあらんとする皆な自發的に出づと云ふべく、之に反し中米南米諸邦が北米合衆國の庇護の下に立つは是れ自發的ならず、北米合衆國のモンロウ主義に餘儀なくせらるゝの觀あるが故に寧ろ他發的と言はざる可らず、其他の各小國に付いても歐洲大戰の影響を受け其の獨立を維持すること益々困難となり、和蘭、丁抹、那威、瑞典等は徒らに獨立の名ありて其實は各自或る强國の傘下に隱れ苟安を貪るに至らん歟、此間獨り大國にして强國たらず世界の富國たるべくして尙ほ貧國たり、列國共同して其獨立保全を公約せるに關はらず時々刻々分裂の危機に臨めるが如き觀あるものは支那なり、支那の問題は今は所謂我對支政策に屬し、列强も殆んと手を拱いて萬事我邦の斡旋に待つ

に似たれども、若しも一朝歐洲の爭亂平定せば我對支交渉は寧ろ對列國交渉と化せざるを得ざるべく若し支那の要路若しくは先輩にして今にして能く政權を統一して速に秩序の回復を謀るとなくば、異日列强の勢競進高潮し來らば遂に分割の問題を惹起するなきを保す可らず、想ふに歐洲大亂の起源地と云はれし摩諾哥の問題已に解決し土耳古問題亦た大戰爭の終結と共に解決すべく、各地の獨領殖民地の處分亦た平和條約の規定を待つて決定すべし、然れども支那問題は依然として存續すべく、終に列强第二の爭亂地たらんとするに非ざるなきか、今や世界は方に戰國割據の狀態に在り、故に自强し能はざるものは獨立保全す可らざればなり。

（二）

曾て各國内に於ける封建制度、一變して郡縣統一に移りしが如く、全地球上に於ける今の列强割據の形勢亦た遂に一變し一大聯邦組織を見るべきや、或は各種の同盟聯合により又は仲裁條約の規定により今の戰國爭亂の狀態を緩和して公法の制裁を實現するに至るべきや否や、若しも歷史上封建の勢一變して郡縣となりし先例に基きて前途を望めば、永久に現在の殺伐なる狀態を存續すべしとも思惟せられず寧ろ世界の各國漸く老成するに從ひ正義仁道の制裁を實現する日あるべきを期待せざる可らず、然れども斯の如き緩和、改善の必ず來るとするも之を近き將來に見るべしとは殆んど思はれず、蓋し列强割據の形勢は今正に闌なれば少なくとも向ほ當分は此形勢の持續することとなる可し、而して此形勢の持續せらる間に於て只一國のみ正義仁道を唯一の盾として或は兵備を怠ることあらんか乍ち列强の侮蔑翻弄する所となるは必然にして假令孔孟を地下に呼起して國政を托するも亦た强兵を備へて萬一を慮るの擧に

出でざるを得ざるべきなり、況んや孔孟に非ざるものに政治を托せざるを得ざる場合に於てをや、試みに支那の實例に付て之を觀るに孔孟の道德知勇を以てするも遂に時世を救ふ能はず、天下は益々亂麻の光景を呈し、遂に强兵刑法を治道の唯一方便となし書を燒き儒を坑にし、卒然孔孟仁義の理想を度外したる秦始皇を待て統一と秩序の回復を見るを得たりき、爾來漢、唐、明、淸、孰れも孔廟に祭り孔裔を貴むを忘れずと雖も支那の政治は、其治道最も擧る場合と雖も、王覇併用の範圍を出でず、即ち始皇の覇道亦た周公の王道と共に永く支那の思想界を支配し來れるを記憶せんことを要す、近世歐洲に於ても社會主義者あり、平和論者あり、、非戰論者あり、仲裁主義の主張者あり、孰れも國際競爭の熾烈を緩和し平和の把持に努むるの點に於て大に吾人の尊敬を價すと雖も、彼等は毫も列國割據の形勢を變化し得ざる耳ならず、若しも一朝平和論の感化を受けて兵備を怠ることもあらん乎乍ち國家緩急あるに際し非常の不覺を取るに至るべきは這般開戰當時の英佛の狀態を觀て知るべし。然らば則ち吾人個々の理想に付て觀ば戰爭を喜ばず平和主義の實行を熱望するもの多かるべしと雖も、國家の兵備を必要とする點に於て何人も異論ある可らず、何となれば國亡び同胞奴隷となるの日は文明も人道も亦語るに足らざればなり。

歐洲大戰後の人情に付ては自ら二樣の觀察あるを免る可らず、一方の觀察に曰く古來戰爭の慘澹今日の如きはあらず、各交戰國を通じて死傷者の合計數は恐らく一千萬人の多きに達すべく、文明、生產、財政の破壞に至りては殆んど之を計數に問ふと能はず、人道の上より見、經濟の上より見、文化進步の上より見て蓋し愕然として驚動し慄然として恐懼せざるものある可らず、故に平和克復後の歐米は必ずや

非戰論平和論の風靡する處となるべしと、此れ確かに一說なり、然れども事實然るべきや否やに付ては大に疑なき能はず、吾人は寧ろ戰後の歐洲各國は益々敵愾心を昂上し、同胞の死傷、經濟文明の破壞を痛傷すると同時に斯の如き損害を與へたる敵國人の無情を怨憤し、斯の如き損害を再びすること無らんが爲めに國防充實を主張するに至るべきを思ふ、別に之を言換ゆれば戰後の世界は到る處國家觀念激昂し富國强兵の道を講ずるに於て從前に倍一層するの奇觀を呈するならんか、現に過般巴里に開催されし聯合諸國經濟會議の目的も平和克復後に至り今の敵國に對して經濟戰爭を繼續するを目的とするもの丶如く、此れ獨墺が經濟同盟を締結して聯合各國に當らんとする大覺悟あるを看取し之に對抗報復せんと欲するに在りと知らる。我邦が戰後支那及び露國と直に舊交以上の溫情を恢復し、普魯西が墺太利に對し數年ならずして同盟を締結せし先例は恐らくは今次の戰後に於て之を學ぶ能はざるべく、寧ろ獨佛戰後千秋の深仇を結ぶに至りしが如く、聯合諸國と中歐同盟とは其孰れが勝つとするも敗者は再擧を期し勝者は大に之に備ふるの覺悟を爲すべし、斯くて列强割據の形勢は益々險惡を加へ來り此より當分國際公法を說き平和仁道を論ずるものあるも孔孟が支那戰國時代に於けると一般、蓋し事情に迂濶にして實務に適せずとの冷評を招くに過ぎざらんか、形勢既に斯の如し假令非戰論を主義とし正義仁道を理想とする人あるも、實際政治の問題として容易に兵備の緩和を說くを得ざるべきなり、何となれば一身を以て理想に殉するは必ずしも不可なしと雖も假令仁義を理想とするとは云へ、天下國家を擧げて强ひて之に殉せしめんとするは、不仁不義たるを免れざればなり、ジョン・ブライトの英國政界に處するや屢々廣翁の下に內閣に列せしも彼は英國の開戰を餘儀なくせらるゝ每に必ず其職を辭したり、即ち其非戰主

義に殉したるなり、然れども彼は時に戰爭を必要とする英國民多數の意向と爭はず又た平生陸海軍の兵備を解くべきを主張せざりしなり、是れ彼れが解兵を主張するも無効なるを知りて主張せざりしに非ず、寧ろ列國の事情に鑑みて英國が獨り解兵の擧に出づるを危險なりとして、自己の主義之を許さざるも他人局に當りて國防を努むるを利便としたるに非ざるなからんや、而して一たび國防を必要となりと許す以上、十分の國防を要するは言を待たず、不十分の國防は寧ろ國防なきに如かず、是れ却て敵を挑發するの危險を含めばなり、故にトルストイは非戰論を唱へ立國の基礎を否定し愛國心を以て罪惡なりと極說せり、然るに杜翁の一子は軍職に就き往々にして帶劍のまゝ父母の食卓に陪席せりと云へり、極端の說を唱ふるは可なりと雖も時に人生の事實に愚弄せらるゝを覺悟せざる可らず、ブライトが開戰每に必ず辭職せしが如き杜翁の軍人たる愛子と相見るを拒む能はざりしが如き共に是れ一生の奇緣と謂ふ可きか。

斯くて何れの方面より之を觀るも國防の缺く可らざるは何人も否定す可らず、而して世界戰國の間に處する我日本として益々强兵の策を講ぜざる可らざるは火を見るよりも明なり、但だ其程度問題は自ら假想敵國の如何に因る、而して假想敵國如何は我國家發展の理想に因ること亦忘る可らず、別語之を云はんに若しも我國勢の現狀大に開展發揚に利あらず寧ろ已に占據せる處に停留して現在の國境を防禦するを主一の目的とせば兵力を要する必ずしも多からず周圍の列强少なからざるも必ずしも悉く假想敵國と認むるの必要なかるべければなり、西班牙の現狀の如き卽ち停止を利とする狀態に在りて兵備の要亦從つて多からざるに似たり、然らば事實如何と云ふに我邦の現勢は毫も停止の徵候を示さず右に伸びる

ことを得ざれば左に伸び前に進むを得ざれば後に發展すべく、止めんと欲して止む可らず制せんと欲して制す可らず、唯だ國政の局に當らんものは自巳の功名に急にして猥に事を構へ又は國勢進展の方向を誤りて徒らに爭亂を惹起するなからんことを要する耳、例せば獨逸が近年其隆々たる進運に乘じ却て自制して信義を列强に保つことを努めず頻りに横暴を敢てして今日の大難を醸もすに至れるが如き、亦以て我が政界一部野心家の殷鑑となすに足れり。

（三）

試に列强割據の形勢を觀るに多くは其重立ちたる屬領、殖民地、勢力圏を本國に近き方面に求め、或は大陸の上に連續し又た一衣帶水を距て呼び應へんと欲するの地域に在り、即ち露國が其版圖を中央、北部、東北方の亞細亞大陸に擴大して殆んど九百萬方哩に及ぶも其中一地方として陸路により達し能はざる所なく各屬領之を總合して一大集團を爲すが如き、又は佛國が最近五十年に亘り頻りに殖民地を獲得して世界第二の殖民帝國を拓くことを得たるも其主たる領地は阿弗利加大陸の西北一圓を包有しマルセーユよりアルヂールスに到らんには海上三十時間を出でず我が鶴賀港より露領浦鹽須德に到るの距離に似て之よりも短かし、而して一たびアルヂールスに到れば西、チウニスに行くにも東、摩路哥のタンヂールスに行くにも、又は南方サハラ大沙漠を横ぎりてデウエルデ岬に出でんとするにも皆な陸路を經べく毫も海路に由るを要せざるなり、而して佛國の殖民領土中には此外にマダガスカル、印度支那ありて頗る重きをなすも殖民地經營の主體はアルヂリヤ摩路哥を中心とする阿弗利加西北部に在りと云はざる可らず、其他北米合衆國のキユバ、ポルト・リコ、巴奈馬運河地帶を初めとして中米南米諸邦に對する、若し

もモンロー主義の關係上此等の諸邦が一種の意味に於て北米合衆國の勢力圏内に在りとせば、此れ皆ナ地形上最も便利に集團を爲すものと云はざる可らず、此外布哇嶋、菲律賓に至りては頗る本國と隔離せるの恨あるも、後者已に他日の獨立を公約せられ前者は蕞爾たる小嶋素より重きを爲さず伊太利のトリポリに於けるも亦佛國のアルヂリヤに於けるが如く一衣帶水を距つるに過ぎずして頗る地の利を得たり、之に反して本國と其殖民領土の遠く隔離して一旦緩急ある場合頗る防禦に不便なるを英國及び獨逸とす獨逸は中部阿弗利加の東西兩方面に廣大の地域を領有する外、ニユウ・ギニーの一部を領有し又たカロリン群島、サモアの一部及び支那青島に脚地を有す、青島を除くの外は阿弗利加に於ける領土の如き其經營毫も成功なく寧ろ失敗の跡歴々として蔽ふ可らずと雖も、而も獨逸が其殖民地を見ること頗る重く、之を根底として更に大殖民帝國を開拓せんと欲するの雄志蔽ふ可らず、然れども斯くの如く世界の各方面に隔離して尚ほ本國の保護に浴せんは一に海軍の勢力に依賴せざる可らざるも、不幸にして獨逸に取り目の上の瘤と云ふべきは英國なり、英の絶對優勢の海軍は何時にも獨艦隊の出動を北海に喰止むるを得べく、而して本國海軍の援護なき獨逸殖民地は宛も嚢中の鼠の如く何時にても他の攫得に任す、現に今次大戰爭開始後の獨逸殖民の狀態如何は吾人の見聞する所の如し。

獨り殖民領土を地球上各方面に棊布し其面積優に他の列强を壓し、而して其防禦の方法亦た宜しきを得て益隆運に向ふを大英帝國となす、若しも地勢の一點を以て觀れば露國又は佛國の集團的にして防禦し易きに若かざるが如くなるも、實際は必ずしも然らず、加奈多、濠洲、印度、南阿弗利加、埃及、孰れも尨大なる地域を包有し今や獨立國の態を爲して其政務の費用を自辨して累を本國に及ぼさず、又不

十分ながら各多少の防備を有す、殊に加奈多、濠洲、南阿に至りては本國と同種同文なるを以て常に相呼應して大帝國の安危を以て念とするや頗る切なり、今次の國難に際して南阿殖民地は兵を派して其隣境なる東西獨逸殖民地の征服に從事して已に大半其目的を達して毫も母國を煩はすに及ばず、加奈多、濠洲は疾くに援軍を送りて北佛の野に轉戰せしめつゝあり、印度埃及は人種宗教を異にするが故に英帝國中の最も不安なる方面と思惟さるゝに關はらず印度は加、濠と同じく疾に援軍を歐洲戰場に派遣せる耳ならず、又たユウフレチス盂地にも派遣して高加索方面より突出し來れる露軍と策應し土耳古軍の背後を攻擊しつゝあり、埃及亦た土耳古軍の襲來に備ふる耳ならず最近メッカのカリフを煽動して土耳國より獨立せしめしが如き亦能く努めたりと云はざる可らず、吾人は印度埃及近時の狀態を觀て其人情比較的に能く英本國に歸服するを認め、英人統治の法頗る其道を得たるを想はずんばあらず、更に地勢に就て觀るに加奈多を別として南阿、印度、濠洲の三方面は共に三角形を成じて各其一角を占めて中間に印度洋を抱有す、今後各領土益發達するに至らば互に緩急相援くるを得るに至らんことと想像するに足れり、且つ此方面の英帝國地勢上の改善に關しては今次の戰爭終結と共に大に注目に價するもののあるべし、抑も此方面の地勢上の一大弱點と云ふべきは埃及を中繼とする印度南阿の陸上關係に於て中間杜絕の憂あることに在り、即ち南阿と埃及の中間に東方獨逸阿弗利加あり、埃及と印度との中間には土耳古領アラビヤ、ユウフレチス盂地及び南方波斯ありて、此等の中間地域あるが故に從來連絡鐵道の敷設を見ることと能はずして、印度、埃及、南阿の關係只だ之を海路に待つの外如何ともす能はざりしなり、シセル・ローヅの在世中阿弗利南北貫通鐵道を企畫し幾度か獨逸政府と交涉し又ローヅ親しく獨帝に見へ

て勸誘大に努めしも、何時も獨逸の故障に因り謀成らず以て今日に及べり、蓋し獨領東阿は南阿より埃及に至る大幹線の中間に於ける唯一の他國領土にして、此領土内を通過すべき延長約四百五十哩に及ぶ、此を通過せざれば到底阿弗利加南北貫通の目的を達する能はざるなり、今や南阿方面よりする遠征軍已に獨領東阿に入り其大半を征服したれば日ならずして全く其目的を達すべく、大戰後に於て英國が必ず之を領有し決して獨逸に還附することなかるべきは疑を容れず、又埃及印度の連絡に付ても南波斯は既に一九〇七年の露國との協約に由り英國の勢圏に入り、又アラビヤ及びユウフレチス盂地も既に事實上英國の有に歸せり、是又た大戰後の平和條約に依り永く英國に保有せらるゝに至らんこと疑を容れず、斯くて兩方面に於ける一切の障碍は取除かれて、ケープ・タウンよりカイローに至り更にカルカッタに及ぶ無慮八千哩の交通上大動脈の貫通して二大陸の開發に資する日あるべきは期して待つべきなり、英國今次の大亂に臨み國家を賭して獨逸に對抗しつゝある所以のもの豈徒だ白耳義の中立維持の爲めとのみ云はんや、豈徒だ獨逸軍國主義の破壞とのみ云はんや、實に英帝國の數百載の基礎を定めんと欲するもの亦其一大目的たるなり、而して佛や露や各々其版圖の擴大を目的とするは言を待たずして、佛はアルサース・ロルレーンの恢復の外、東方地中海の沿岸に領地を求め又た西阿獨領の一部を割取するに至らん、露も亦た墺國よりガリシヤを收め、獨國よりバグダット鐵道の權利を獲得し、君府に門戸を求めメソポタミヤを經て地中海の東北岸なるアレキサンドレッタに出でんと欲するなるべし。

以上の豫測は聯合諸國が略ぼ其希望する如くに獨墺を屈服せしめ得べしと假定して立てたるものにして、若しも戰略上の目的を十分に達すること能はずとせば素より吾人の想像に終るべきは言ふ迄もなし

然れども昨今の戰局に就て觀察を下せば獨軍は依然として勇猛なりと雖も漸く兵力の補充に艱み來れるは爭ふ可らず、若しも聯合諸國にして堅忍能く終局の目的を期して渝ることなくば遂に獨逸を屈する蓋し不可能に非ざるべきか、而して最終の勝利遂に獨逸に歸せず却て聯合諸國側に在りとせば吾人が前述ぶる所の大戰後の豫想蓋し中らずと雖も遠からざるべきなり、斯くて獨逸は悉く其殖民地を奪はれ歐州中部の國境內に封鎖せられ、戰時發行の公債に加へ白耳義に對する賠償を負擔し非常の悲境に陷る可し、然れども如何に悲境に陷ることとあらんも此により獨逸人民が終に其英氣を挫かれ復た起つこと能はざるに至るべしと想像するが如きは大なる誤見ならん、吾人を以て之を觀れば假令聯合諸國の優勝は果して其希望するが如く、獨逸の屈辱亦た聯合諸國の希望するが如くにして毫も遺憾なしとするも、獨逸國民は必ずや十年を出でずして其國力を恢復し再び四隣に向つて舊時の威力を振ふに至らん、蓋し此れ吾人の私見に非ず英佛露伊は毫も戰局の前途を悲觀するものに非ずと雖も戰後獨逸が經濟上試みんとする競爭を恐るゝこと尋常ならず、爲めに過般の經濟會議を開催せし一事を以て察すべし、即ち今次の戰爭が不幸にして獨逸の屈服に終らずして互角引分に終るが如きことあらば尙更らの事なり、假令聯合諸國に取り中分なき勝利に終るべしとするも、列强間の競爭は戰前に比して毫も減ぜず必ずや軍事に實業に依然たる戰國狀態を呈せん、而して我日本も亦た戰後直に最も激烈なる競爭の渦中に投ずべき運命の下に立てることを覺悟せざる可らず、試みに經濟實業の上に就て見んに、今や列强大戰に沒頭するに際し我邦は多少の餘裕を得て、或は或種の生產に就き利する處あり輸出入總額に於て聊か增加の跡ある耳ならず、多年朝野を惱殺せし輸入超過の狀態一變して輸出超過と爲れるが如き大に人意を强ふすべきが

如きも、戰後久しく此狀態の持續せらるべしと期待するが如きは蓋し一種の空想ならんのみ、殊に東洋各市場に於て歐洲の輸入殆んど廢止し爲めに我邦の製品を歡迎するも、戰後に至らば歐洲諸國は必ず舊時の得意先を回復せんとして大競爭を開始せん之に對し我實業家は果して能く應戰して十二分の勝算ありとなすか、勝算あるも無きも競爭は必ず來らん、經濟實業に限らず陸海軍國防の上に激烈の競爭あるべし領土を延長し勢力圏を擴大する點に於ても亦た多大の競爭あらん、此間に處する我日本は實に一大難局に處するなり、其立つべき處に立ち行くべき處に行き、國際間に於ける去就進退の節を擇むは決して容易ならず、是實に今よりして我朝野官民最も愼重の考慮を要する所以なり。

（四）

前段論ずる處により列國割據の狀態を見るに露佛は集團的にして其版圖擴張の狀態は蠶食的なり、即ち其最も手近き方面より着手し最少抵抗の方面に向ひ突出を試みるものなり、之に反し英獨は散布的にして其勢力の發展を謀るの狀寧ろ之を鷲攫的と云はざる可らず、即ち大鷲が天空より地を瞰下し大凡そ餌餉に足るものゝ中より最好なるを擇みて之を一攫し又た彼を一攫し去るが如く汎く宇内形勝の地を擇み之を併吞して以て版圖に入るゝを云ふなり、但し散布的鷲攫的方法は最も大膽にして横着なる方法にして、獨り全世界の制海權を掌握する國にして始て無難に此方法を用ゆるを得べく、もしも己れより以上更に優勢の國ありとせば此方法に依ることと極めて危險なり、如何となれば宛も一の鷲が己れ以上の大鷲に覷まれては其捕獲物を之に捧げざる可らざるが如く、如何に大膽なる計略も己れ以上の優勢者の前に在りては之を實行す可らざればなり、是れ獨逸が「太陽の照らす地域」を求めて只管英國を僞り事毎に

英國の邪魔に遇ふて志の成らざるを恨みし所以にして、英國また只だ獨逸を以て前途恐る可きの强敵となし、遂に兩鷲相搏つに至れる所以なり、若夫れ戰局の前途獨逸の大敗を免れずとせば今後大英帝國の基礎は從前に比して一層の鞏固を加ふべきこと想像するに足れり、玆に於て戰後我日本が列强割據の世界に處して執るべき態度、國勢擴張の方針は露佛を學んで蠶食的なるべきか英獨を學んで鷲攫的なるか蠶食的ならんとせば漸進を主とし歩一歩着々として脚地を固むるを要す、例令一時多少の退却を餘儀なくせらるゝも、退却したるだけの退却に止まり、根底より覆さるゝの憂あらず、之に反し若し鷲攫的方法を取らんか頗る大膽にして目覺ましく、必ずや盛んに國民の英雄心を煽動するに足るべきも不幸にして一敗地に塗みるにも至らば終に國家百年の大業を破碎するの恐れなき能はず、曾て聞く日露戰爭の未だ發せざるに際し一派憂國の人士等伊藤侯を中心とする元老の態度を姑息優柔なりとして成敗を度外にして開戰の決心を爲すべく迫りしことあり、此時の公の返答は至誠國家の重に任ずる公共人にして始めて言ふを得べきものなりと思ふ、曰く外難已に生じ國家存亡の機に迫らば自ら別事なり、好んで事を起し國家の存亡を度外視するが如きは余の敢てせざる處なりと、今や我帝國は方に一大發展の機會に遭遇す强ひて危計奇謀を用ひざるも自ら前途の進運期して待つべきなり、素より局部的に國家の現狀を觀察せば憂慮すべきことゝ歎息すべきこと一にして足らず、近年對支外交の失敗の如き其一にして、内地政界の現狀の如き亦た其一なり、然れども此等局部的の憂患は自ら之を解除するの途なきに非ずして、若しも大勢を達觀せば悉く樂觀の理由ならざるはあらず、之を個人の身體に譬へんに若しも體力强健にして元氣旺盛ならば假令局部に疾病あるも强ひて憂ふるに足らず、病は以て療養すれば即ち治す以て天壽を

全ふするを妨げざるなり、即ち我邦の前途は之を大體より觀察すれば頗る樂觀すべし、其局部の憂患の如き之を解除するの途一にして足らず、斯の如き場合に處し苟も冒險危計を以て國家の經綸に代へんとするは吾人の同意する能はざる所なり。

請ふ更に少しく具體的に吾人の所思を開陳せしめよ、吾人の前に今横たはれる二大問題あり此二大問題に對し如何の解決を與ふべきかは我邦今後の位地を理解する上に於て致命の關係ありと云はざる可らず、二大問題とは何ぞ、支那問題及び日英同盟問題即ち是なり、論者或は云はん支那問題に關しては我邦の態度終始一貫し門戸を開放し領土を保全して日支親善を把持せば即ち足る、日英同盟は尙ほ數年を繼續すべきは條約の規定により明白にして、一九二〇年を以て滿期に至らば之を更に繼續すべき耳、亦何ぞ此兩問題を改めて論ずるを須ゐんやと、如何にも形式に拘泥して觀れば論者の言の如し、然れども近時支那問題に關しては一種の豪傑論ありて頗る一部政客の間に重きを爲すに至れるは否む可らずして試みに昨春日支交渉開始以來今日に至るまでの支那の出來事に對して仔細の注視を拂はんか我が對支外交は果して日本國家の外交なるか支那浪人の外交なるか殆んど堙別に苦しむの感なき能はず、袁氏歿後に至り政府が宛も一朝にして迷夢より覺めたるものゝ如く從來の國是に立歸りしが如き觀あるも、昨春以來殆んど一年間我對支策に更に統一なく一政府の外交に非ずして數派の外交たるの趣あるを免れざりき、甚だしきに至りては歐洲大戰の紛擾に際し我邦は支那に於て是非とも一仕事をなすべしとさへ論ずるもの少なからざりき、此の現象たるや吾人が觀て以て頗る憂慮すべきものと做せし所なりしが我政府は最近頗る覺醒せるが如きは吾人の滿足する處なり、同時に今後常に正道を歩して毫も岐路に入ること

なからんことを哭々も希はずんばあらず、更に日英同盟に關しても近來識者仲間にも少數ながら悲觀論者を生じたるは否む可らず、曰く日英同盟は片務的なりと、蓋し歐洲開戰以來の經過に付てのみ觀察せば或は英國を利すること多く我邦を利すると少なきの觀あるを免れざるに似たり、然れども日露戰爭當時にありては寧ろ我邦に利益多く英國の利せし處却て少なかりしが如きの觀ありしに非ずや、吾人は時々に餘りに自我的に利巧ならざらんことを要す、世界は方に戰國時代に在りて列國は富强を競ひ力の福音を信ずるが如きも、道義の觀念未だ全く地を拂ふに至らざることを記憶せざる可らず、素より露國を敵として起りし日英同盟は近年日英孰れも露國と大に親善なるに至りしからには同盟當初の目的に多少の變狀あるべきは論を待たずと雖も、吾人が曾て屢々論ぜしが如く日英同盟あればこそ英露協約も日露協約も成立するを得たるなれ、此の同盟なかりせば兩國とも今日の如く露國に畏敬せらるゝこと能はざる可きは察するに難からず、故に吾人は我邦が期限滿了に際し同盟繼續を希望すべき耳ならず英國亦た同一の希望に出づべきを毫も疑はざるなり、最近の日露協約は戰後現出すべき日英佛露伊の五國同盟の前提と觀るを以て至當とすべく、吾人は我邦が此種の同盟の一員として能く其信義を貫徹し以て獨逸軍國主義をして再び其横暴を逞ふするなからしめんことを要す、若夫れ我邦が支那に於ける特種の位置の如き又は濠洲南阿加奈多に於ける人種問題の如き寧ろ横暴を以て解決す可らずして却て正義に依り解決するを容易とするに非ざるなからんや。兎に角强兵を擁して極東方面に特種の優位を占むる我邦は今後益々各方面より歡心を求めらるべきは必然にして此場合愈々堅忍して正義の把持に努めんか自然東洋問題に對し最終の發言權を握るに至らんこと疑を容れず、斯くて北米合衆國の如き亦た我邦に對する問題に

關しては必ず道理の言に聽かざるを得ざるに至らん。

之を要するに世界に於ける日本の位置は極めて有望にして極めて好運なり、地勢の然らしむる處亞細亞洲中唯一の强國として自ら特種の位置あり、若しも能く國是政策を誤らず信義を以て列强の間に伍せば東亞の問題に對しては益々重きを爲すべく、濠洲の如きも亦遂に我邦を度外する能はざるに至らんこと一點の疑を容れず、吾人は彼の浪人政客、策士の小策を厭ふ、大勢を辨知せずして小局に沒頭し功を急ぎ奇計を弄し往々國家を誤らんとするを歎息す、然れども皇天もし我邦に幸せば必ずや前途の發展最も樂觀に足るものあらん。

民族心理國家哲理より統觀したる世界の新局

茅原華山

一 愛蘭暴動と三黨首領會同||日露關係とタゴールとスミス

愛蘭のダブリンに暴徒が起つた、サア、ロージャー、ケースメントが獨逸の汽船から上陸する所を英國官憲の手に捕縛された、獨逸の手がこの暴徒の懷の中に潜んで居つたことは言ふまでもないことだが、獨逸の意味する所は單にこれだけであつたのであらうか、英國をして西、愛蘭海峽の彼岸を顧みて驚かしむるだけであつたのであらうか、實は獨逸は米國に向つて、殊にウイルソン大統領に向つて、一個の示威運動を遣つたのである、實物教訓を示したのである、潜航艇が何うの斯うのいつて、獨逸に對して餘りに強いことは言はれまいぞ、英國が獨逸に宣戰した結果は此通り内亂である、米國には幾多の愛蘭系米人のあるを記憶せよ、幾多の獨逸系米人のあるを記憶せよ、幾多のフハイフエネート、アメリカンのあるを記憶せよ、そして此兩系米人が常に聲息相通じてゐることを記憶せよ、米國が獨逸に向つて宣戰するとせよ、その直接の結果は兩系米人が主動者と爲つて米大陸に一大内亂の起ることで

あると。

同志會總理加藤高明氏、政友會總裁原敬氏、國民黨總務犬養毅氏が三浦梧樓氏の肝煎で一堂に會して或約束を取結んだのは何の爲めであらう、大隈首相に向つて最う善い加減に引込めといふ暗示若くは公示であらうが、我々は何うしても此三人者を取圍んで其處に機運といふものが動いてゐることを看取されないであらうか、次ぎに首相の私邸に陸海軍の重立が一會を開いた、薩長が分裂した結果、長の陸軍といはれた陸軍、薩の海軍といはれた海軍とが又從つて分裂した、これが大隈首相を中心として互に胸懷を披瀝する、其處にも亦機運といふものが動いてゐることを看取されないであらうか、大隈首相は功成り名遂げて急流に勇退するに方つて、果して世に傳へられるが如く加藤男を其後繼者として閣下に推薦するであらうか、それとも一般からは意外と言はるゝかも知れないが、寺内正毅伯を推薦するであらうか。

歐洲戰爭の原因は日露戰爭でないといふものがあつたならば、そは歷史の潮がいかに流れてゐるかを解らない人である、私は今反對の方面から說明する、若し日露戰爭で露西亞が日本を大陸から驅逐して自ら蒙古、滿洲、朝鮮を經營することに爲つたならば、果して歐洲戰爭なるものが起り得やうか何うか、露西亞が其主力を極東に用うるに方つて、佛國は能く獨力にて獨逸と開戰すべきか、或は獨逸が東顧の患なきに乘じて、佛國や英國に向つて暴慢無禮の態度に出でゝ、戰爭は免れ得なかつたかも知れないが、果して歐洲戰爭――日本まで參加したる世界戰爭なるものが起り得やうか、日露戰爭に敗れて、佛人の語を藉りていへば、露國が歐洲に還へつた、露國が歐洲に還へつたことが抑も世界戰爭の原因ではなかつたのであらうか、露國は戰に敗れて痲痺容易に癒え難しと取られたのが、墺國のボスニヤ、ヘルツエゴヴイナを合併した思惑なのではないか、ビユロー公が豫見した如くに、歐洲戰爭は墺國が巴爾幹方面に於ける東方展開運動から起つた、墺國が盛んに東方展開運動を始めたのは、無論獨逸の後

援を頼んだのであらうが、同時に露國能く爲すなしとしたからではないか、然しながら露國は歐洲に還へつてゐた、獨墺兩國が眼底に露國なきの態度には憤慨に堪へないものがあつた、其處でニコラス皇帝も七年有半の忍辱を破つたのである、歐洲戰爭は是の如くにして起つたが、戰熱が冷えた後、瀾收まり濤靜つて後、歐洲列國は長く露國の歐洲に還へつてゐることを喜ぶであらうか、諺に汝に出でたものは汝に還へるといふ、日露戰爭に出でたるものは日露戰爭に還へるといふことがなからうか。

アート、スミスが、一道の火龍中天に躍る、東京の夜の空で宙返へりを遣つて間もなく、中央停車場にタゴール尊者が到着した、私はスミスを呼んで米國主義(アメリカニズム)の代表者といふ、機械文明の爲めの機械文明、科學文明の爲めの科學文明の一青年代表がスミスである、彼れが天才であるにせよ、ないにせよ、親思ひであるにせよ、ないにせよ、彼れは宙返へりの爲めに宙返へりを爲し、横轉逆轉の爲めに横轉逆轉を爲し、デッスダイヴの爲めにデッスダイヴを爲すのである、それ以下だとは言はないが、同時にそれ以上だとは言へない、私は更にタゴールを呼んで「亡國印度の象徵」であるといふ、その英語は上手なものだ、その英文は詩的の措辭を以て滿ちてゐる、その聲は銀の如くに宛轉する、去れども其思想を研究して見れば、彼れは到底偏精神的である、偏精神的であるから、消極的なる精神主義である、靈を見て肉を見ない、印度はそれが爲めに亡國と爲つたのである、私が彼れを呼んで亡國印度の象徵といつても必ずしも過酷ではあるまい。

大隈伯その他の名士が輕々しく『東西文明の調和』といふが、試みに問はん、何うしてタゴールとスミスとを調和する積りか、何うしてサムマーソルト(宙返へり)と南無阿彌陀佛とを調和せしむる積りか。何うして此二者が肝膽相照らし意氣相投じ得やうか、之を札幌の病院に困臥してゐるスミスに問へ、之を或人の別莊に臆病な鳥のやうに退いて詩想に耽つてゐるタゴールに問へ。

日本人はスミスに醉つてゐた、その醉ひが未だ醒めやらぬに早く已にタゴールに醉ひ始めた、日本人は醉陶するを好む、醉陶するを好むといふは、無批判、無研究の生活を好むといふことではないか、これで果して歐洲戰爭よりして必然打開し來るべき第二十世紀の世界の新局に順應し得やうか。

二　日本を中心とする世界の聲

（タゴールの所謂歐洲の提出した問題）

タゴールは歐洲の提出した問題として『個人對國家』『資本對勞働』其他を數へ上げたが、彼自身は其著書に於ても其講演に於ても之を解決してゐない、恐らくタゴールには解決し得られまい、支那は國家ではない自治の一大社會であることは今や遍く人に知られてゐるが、印度も亦國家ではない自治の一大社會である、この印度を代表するタゴールに歐羅巴の提出した『個人對國家』『資本對勞働』の問題の解決される譯はないではないか、或米國の婦人が彼れの講演を聽いて『始めて亞細亞の聲を聽いた』と言つたさうだ、個人對國家、資本對勞働の問題の解決の可能ない亞細亞の聲は死んだ亞細亞の聲である、冥途から來る亞細亞の聲である、我々にして若し此等歐洲の提出した問題を解決するの研究と決意とあつて、果して之を解決し得たならば、そは最早亞細亞の聲ではなくして世界の聲である、日本を中心とした世界の聲である、日本は亞細亞の子であつて、現に亞細亞の心であるといふやうな御世辭を受くるは誠に心苦しいのである、亞細亞の子であらうが、同時に現代の日本は善かれ惡かれ歐羅巴の子であることは否まれない、我々日本民族は世界の子であつてそして世界の心に爲りたいのが其抱負である、日本が明治中興以後、一意知識を外に求めたのは、亞細亞の聲を發する亞細亞の日本たるが爲めではなくして、世界の聲を發する世界の日本たるが爲めであつた、若し日本が長く亞細亞の子であるに甘んじて居つたならば、日本は印度に爲り支那に爲るより外はない、それは我々の御免蒙らんとする所である。

三　世界が歸趣か國家が歸趣か

（寐てゐる民族と死んでゐる民族）

西人から亞細亞は消極的だといはれた、その消極的の亞細亞を代表するものが支那と印度とである、支那は偏物質的の極端を代表し印度は偏精神的の極端を代表してゐる、共に完全に墮落した民族である、共に既に民族としては死んだ民族である、請ふ私を以て大早計の斷案を下すものと爲すを休めよ、私には斯かる大膽なる斷案を下すだけの根據がある、土耳格の諺に『人間は走つてゐるよりは步るいてゐるのが樂、步るいてゐるよりは立つてゐるのが樂、立つてゐるよりは寐てゐるのが樂、寐てゐるよりは死んだ方が樂だ』といふことがある、支那民族は寐てゐる民族で印度民族は死んでゐる民族である、支那人が個人主義であるといふことは誰しも承知してゐる、承知してゐながら、支那人は乃木大將夫妻の自殺を聞いて『定めし山の如き負債に苦しめられたのであらう』といつたといふので、支那人は解らないといふ、私はそれだから支那人位解かり易いものはないといふのだ、苟も哲學的文明史的の觀察があつたならば、支那人位解り易いものはない、個人主義が立つて步るけば英雄主義に爲り貴族主義に爲り超人主義に爲るが、若し之が寐れば唯物主義に爲り之が死ねば唯心主義に爲ることは故らに深刻なる思索を爲すまでもない自明の理である、私は支那民族は寐てゐる民族と言つた、それだから唯物的個人主義に爲つたのである、日本人と支那人及び朝鮮人とを比較すれば、直ちにその相異が發見される、日本人には一種愛樹本能ともいふべきものがある、朝鮮にせよ滿洲にせよ、日本人の居る處は必ず樹が植ゑてある、一部落、一集團を爲せば必ず學校を建てる、日本人が由來南洋人種に深い關係があるのは人種學者の既に公に認むる所である、熱帶の生活は樹がなくては不可能である、日本人の愛樹本能は熱帶生活を今に遺傳して居るのであらう、支那人、朝鮮人は皆北方より南下したのである、支那、朝鮮の山岳峯巒多くは禿してゐるのは、今

までは惡政の結果とばかりいはれてゐたが、北方人は暖を取るに急、樹あれば直ちに折つて焚く、支那人が生活に困んだのは決して近世に始まつたのではない、或學者の說に從ひ、バビロンを出てから、天山南路に徘徊してゐる時代から、その未だ黃河の邊りに定住しない以前からして具さに北地生活の苦を嘗めたのである、支那の個人主義は少くとも黃帝とその起原を同じくしてゐるといつても不可はあるまい、私は幾回か支那人と議論をしたことがあるが、支那人に國家思想がないといふことは彼等が明に自ら認めてゐる所である、そして彼等のいふには、支那で國家どいふのは春秋戰國の時代に齊といひ楚といひ周といひ魯といひ秦といつたものであつて、支那が國家であるとは一般の支那人に考へられないことだと、支那は天下であつて國家ではない、國家とは其天下から分裂した場合に始めて成立するのである、私は此理が直ちに現代の世界に應用されると斷言する、世界的國家などいふものがあるが、大國家といふ意味ならばいざ知らず、世界を統一して渾然たる一國家を爲すといふことは全く空想である、世界が統一された時は即ち國家が全然滅亡する時である、國家は世界が分裂した結果である、其處で國家が目的であるか世界が目的であるかといふ議論が産れて來る、支那で儒教が大成され刑名學が發達したのは春秋から戰國に掛けてゞある、世界に於て儒教の如くに完全に國家道德を組織したものはない、今日の哲學から批判すれば、固より議すべきもの一にして足らずではあるが、君臣、父子、夫婦、兄弟、長幼より師弟の道に至るまで說いて餘蘊のないものは唯儒教を然りとするのである、蓋し道德といひ法律といひ皆國家の産物である、加藤弘之氏は道德は國家の産物であるといつて、人道を忘想であるといつたが、サア、ヘンリー、メインが其古代制度史に於て、人間が部落戰爭を出でゝ、人間は皆兄弟であるとを覺つたといつたのに同意する、故に人類社會に人道のあるを信ずるが、人道は平等槪の上に立ち、國家道德は差別觀の上に立つものであるから、從つて私はプラトンが國家を

最高の道德だといつたに同意するものである、支那に道德の起り法律の起つたのは支那が幾多の國家に分裂した時代だとすれば、國家ある生活が道德の生活であり法律の生活であり、之に反して國家なき生活は無道德、無法律の生活であることは分明である、秦か天下を統一して間もなく亡びたのは、苛政苛法の爲めである、商鞅の法といつて後世の物笑ひと爲つてゐるが、それは支那の歴史家の意見であつて、苟も文明史的に觀察すれば、秦の亡びたのは天下を統一した後までも國家主義を以て天下を治めやうとしたからである、民と共に休息すといふことは支那歴代政治家の標語である、幾多の國家が分裂して互に競爭角逐するに方つては、苛政苛法も決して苛政苛法ではない、獨逸國民は種々食料を制限されてゐる、平和の日に在つては無類の苛政苛法であるが、四面に敵を引受けて居る今日では、何人も之を苛政苛法だとて訴へるものがない、秦は國家としては苛政苛法を行つたのではないが、天下を統一して民と共に休息せねばならぬにも拘らず、國家と國家とが對立した時代の政を以て天下を治めやうとしたから、忽ちその政が苛政苛法に變質し、法三章の漢の高祖が代つて天下を取つたのである。

外に出て活動すればこそ我々は衣服をも整へるのである、進退應酬皆節に合するやうにするのである、その家に歸つて休息するに方つては、帽子も袴も羽織も一切無用である、熱い時などは上衣も下衣も一切無用である、道德法律は國民が緊張した生活に於ける必要條件である、弛緩した生活に於ては唯享樂のみ逸豫のみが目的である、然るに支那に於ては天下の統一が常であつて分裂が變であつた、そして支那民族其物が由來荀子の語を藉りていへば性惡の個人主義である、支那人が個人主義であつて世界主義であつて、從つて唯物主義であつて、衣――食――住――色が其生活の目的であつて、享樂主義の權化と爲つたのは之が爲めである、印度に佛敎が亡びた如くに支那に儒敎の亡びたのも之が爲めである。

元の耶律楚材が一利を興すは一害を除くに若かずと

いつた、支那に禁物なのは積極的善政である、宋の王安石も之が爲めに失敗した、支那の政治家は租税を減少して民と共に休息する消極的善政を施すを以てその理想とせねばならぬ、これ支那が自治の一大社會である所以である。

印度と支那とは亞細亞の双生兒である、その印度が支那と異る所は、印度は支那を逆に行つた點である、タゴールの說に從ふも、印度は亦猶支那の如く一大聯邦である、印度は亦猶支那の如く各民族を社會的に統一した國である、印度が支那の如く天下であつて國家でないことが之で解る、印度の武士は戰の爲めに戰ふのである、英國の士官に指揮されて白耳義佛蘭西の國境に戰ふのは卽ちこれが爲めである、絕えて印度の爲めに戰はねばならぬといふ思想がない、日本の軍人が日本國家の爲めでなければ戰はぬといふのと全く其選を異にしてゐる、支那人は現世に執着する、その解放を求めるにも小國寡民――莊子――武陵桃源――陶淵明――で何處までも現世を離れない、印度人は現世を厭離する、故にその解脫するや、直ちに絕對無に還へり宇宙に還らんとする、現世に執着するから個人主義と爲り、衣――食――住――色を以て命とする、現世を厭離するから一切が空と爲る、一は飽くまで靈を拾てゝ肉に就かんとし、一は飽くまで肉を拾てゝ靈に就かんとす、一は外に墮落し、一は內に墮落し、一は肉に墮落し、一は靈に墮落し、一は量に墮落し、一は質に墮落す、其墮落たるや一である。

支那民族は寐てゐる民族である、事實支那人程寐るを好むものはない、最も晝寐を好む、客を引いて會話するにも寐ながらする、印度民族は死んでゐる民族である、往生の敎は其源を印度から發したのである、唯物主義の民族たる寐てゐる支那民族に國家がなく、唯心主義の民族たる死んでゐる印度民族にも國家がない、是に於てか人生に於て國家が歸趣であるか將た世界が歸趣であるかといふことは決して閑人の閑問題ではなくなる、今までは國家は世界的理想に達する階梯であるといはれて來た、此論は世界は國家より大なり

といふ唯物的見地から來た嫌ひのあるのみならず、若し果して國家が世界的理想に達する階梯ならば、我々が國家を説くの熱も力も權威も消滅する、消滅しないまでも減却する、寧ろ單刀直入世界主義を高調力論した方が合理的である。

支那、印度に鑑みても、休息し厭離するのが世界主義である、印度の如く個人を絶對に沒せんとするものは論なく、支那の如きは明に個人主義は人間の墮落であることを證明してゐる、我々は死ぬことを願はないが、走り歩るき立つよりは坐はり寐ることを好む、個人主義即世界主義は人をして坐はり寐ることを思はしめるのである、民族的國家的の角逐競爭あつて始めて我々は立ち歩るき走らんとするのであるとすれば、我々は向上せねばならぬ、我々が道德生活、法律生活を爲すのは即ち我々が向上する所以であるとすれば、世界的生活が我々人生の歸趣ではなくして、國家生活が我々の歸趣であると斷言し得られる、國家は世界が立體的に分裂したものであつて、世界生活が若し實現すればそは人類が平面的に生活するのである、人類が時間的に生活するが國家、人類が空間的に生活するが世界生活、我々は明かに亞細亞は農業的で歐羅巴は商工的である、齊しく個人主義と言つても、支那は消極的、歐羅巴は積極的であることを知つてゐるが、個人主義の歸著は到底自治の社會的生活を爲さんとする世界主義である、無國家、無政府である、無政府主義者が「最善の政府は最惡の政府なり」といふは、是に於て始めて世界主義の上から見て道理のあることが解かる。

四　中央歐洲帝國の實現

（質量一致の新思想の勃興）

歐洲戰爭は如何なる新局を世界の表面に現出し來るべきか、印度の如く個人主義が死んで唯心主義と爲る世界を現出し來るべしとは考へられない、故に問題は個人主義が立つて歩るいて國家主義に爲るか將た個人主義が寐て世界主義に爲るかといふことに限局されて來る、何人も必ず兩傾向の發生して來るといふに相異

ない、社會主義、民主主義、國際主義、世界主義、平和主義が更に大に唱へ出さるゝに相異ない、然しながら孰れが重なる世界の潮流と爲るであらうか、而して日本は國家主義に支配されるであらうか夫れとも世界主義に支配されるであらうか、これは我々が徹底的に客觀界を觀照し且つ日本人としての自我を內省して歸納して來ねばならぬ所である。

日本は姑く置き、世界の大勢の變化は獨逸が勝つか英國が勝つかに依つて決する、私は敢て言ふ、獨逸が勝てば個人即國家が世界の主潮と爲り、英國が勝てば個人即世界が世界の主潮と爲ると、世界は既に大に獨逸化されてゐる、米國に於て軍國主義が著るしき勢を以て勃興したのは、其裡面には殺人器製造業者の煽揚があるにもせよ、米國の獨逸化であるといふを妨げない、英國は個人あつて國家なきの國であつたが、近ごろは王室中心主義さへ唱へられる、これも亦固より英國の獨逸化といふことが可能る、私は一千九百十四年の八月、中央公論に於て、獨逸は必ず勝たんと豫言したものであるが、二年後の今日に於て之を取消すことの必要を感じない、獨逸側にせよ、英國側にせよ、所謂最後の勝利を獲らるゝや否やは姑く置き、獨逸の敗因として數へられたものは一も敗因を爲して居らぬことは益々明瞭に爲つた、我々は苟も國敵であるものを推稱するのは苦痛ではあるが、私は日本が同時に進退兩難の境に立つてゐることを明かにして置かねばならぬ、思想上からいへば日本の先達は相率ゐて個人主義に反對してゐるから世界主義にも反對してゐる、即ち彼等は舊式ながらも國家主義なのである、獨逸を敵としてゐるが、獨逸が多少なりとも苟も勝つとすれば、それは少くとも思想上に於ては彼等の勝利である、英國の味方をしてゐるが、若し英國が勝つたならば、彼等は思想上の敗者と爲らざるを得ない、英國にして勝つ、獨逸化した英國が還元して世界は個人主義と世界主義との洪水を來すであらう、日本も亦此洪水の中に漂はねばならぬ、日本の軍國主義は抑壓されるであらう、日本の海軍は其擴張を

制限されるであらう、そして日本は英國の後塵を拜して世界の現狀維持の力持ちをせねばならない、所謂外交上からいへば英國を尊重するのが當然であるかも知れないが、內日本の民心を指導する上からいへば、獨逸の國家精神、道義精神を皷吹するのが得策ではないか、私は日本は世界の表面に孤立しても可い、區々同盟協商をいふは日本國民の雄心を殺ぐ所以である、寧ろ內に日本民族を覺醒するに若かずとするものである、第十九世紀に於ける列國の外交政策の中心は殖民政策で今も尙然りとする、而して日本の外交政策から殖民政策を取り去り日本の國民から殖民思想を取り去つたのは全く日英同盟の爲めではないか、露國は亞細亞土耳格の一部を奪略し英國は阿非利加に於ける獨逸殖民地の大半を席捲した、南洋の獨逸領は英國と日本とに經略されたといふも、歐洲に於ては白耳義の九分以上と佛國に於ける工業の中心たる東北部とは全く獨逸に占領せられ、塞耳比亞もモンテネグロも亦獨逸側の蹂躙に委し、殊に露領波蘭とリボー其他の地方も亦獨逸の掌握する所と爲る、而して我々が最も張膽明目して觀察すべきは、獨逸が略々宿昔の志たる『伯林バグダット』中央歐洲を縱斷して亞細亞に達する帝國を樹立するの目的を實現したことである、獨逸の戰略に幾多の失敗ありしは掩はんと欲して能はぬ所であるが、覇を中央歐洲に稱して更に東、亞細亞を席捲せんとする宿志さへ遂げれば、それだけでも獨逸は此戰爭を悔ゆる必要はあるまい、唯物主義の支那に於て兵の勝敗を決するものは數である勢である、旌旗千里、舳艫相含といへば、敵は逭がれ去る、唯物的の歐洲も亦戰爭の勝敗を數で豫言したものである、第一に獨逸は糧食に窮すべしといふのであつた、獨逸に於て或糧食品の不足は爭へないが、その科學的應用とその勤勉とは戰時の飢餓を滿たすに不足はなく、既に伯林コンスタンチノープル間の聯絡を確實にす、獨逸は復た糧食を憂ふるを須ゐず、土耳格より輸入する肉のみを以ても優に二十年を支へ得べしといふ、獨逸にて女が食品暴動を起すは、食品が不足の爲めではなく、商人が更

に高く賣らんとして賣惜みを爲すからであると傳へらる、第二、獨逸は財政に窮して和を請はざるを得ざるに至るべしといふのであつたが、獨逸の正貨は益々增加し、英國が今尙兌換制度を維持するに及ばずとするも、獨逸人の所謂「戰爭は戰爭を養ふ」の實あり、國債は增加するも、爲めに財政に依りて戰爭を中止すべき虞は全く之なきばかりか、封鎖益々嚴なれば正貨の國外に流出すること愈々少くなることに爲る、第三、獨逸は遂に軍需品に苦しむに至るべしといふものありしも、その前古無比の大ヴエルダン要塞攻擊戰に徵するも全く空頼みなることを知られる、第四、獨逸は經濟上、破產せざるを得ざるべしといふも、獨逸の工場は開戰と同時に大抵軍器軍需品製造場に變化し、船舶業者銀行業者の如きは大なる損失を招けるも、利益配當を增加したる會社は決して寡からず、勞働者の預金は戰後增加したとのことである、獨逸大藏大臣（先きに內務大臣に轉じたりと報ぜらる）ヘルフリッヒ氏議會に演說して、獨逸は其富よりいへば實かに英國に及ばず、又富の人頭額に於ては佛國に若かず、然るに獨逸が戰爭に於て財政上經濟上好果を收めしは、その貯蓄額のみにあらずして、獨逸の全經濟機關である、殊に戰役に從事し、戰爭の爲めに生產に從事する獨逸國民の活潑なる勞働である、戰爭に於て消費せらるゝものは貴金ではない、國民が地上に存する諸要素を集めて常に新に生產する軍需品及び糧食である、貨幣は全く使用されないとは言はないが、固より消費されるのではなくして、宛も鐵道の如く輸送の用を爲すに止まり、戰費支辨として國庫を出でし貨幣は更に戰時公債として國庫に還元すといつた、私は日露戰爭の經驗に徵して、ヘルフリッヒ氏の言が眞にその實經驗より出でたものなるを信ぜざるを得ない、顧ふに獨逸は此戰爭の爲めに財政上經濟上の破產を爲す所ではなく、反つて幾多科學工業上の新發見を爲し、戰後一旦失つた世界市場に於ける商權を恢復するが爲めに莫大なるダンピング（投資）を遣る用意をして居ると信ずべき理由がないではない、第五は兵の補充艱難といふのが最も英國側に

於て喧傳された所であるが、兩軍の兵力を比較するには、兩軍の人口を以てする譯には行くまい、佛國は既に兵の補充に艱難を感じてゐる、英國は三百萬の大軍を有すと稱し、更に既婚者まで强制的に徵して兵と爲すといつてゐるが、常に守勢を取つて曾て攻勢を取らないから、或は全く計算に入れぬ方が適當であるかも知れない、英國の大兵といふは旌旗千里流ではなからうか、露國に至つては獨逸に優さる萬々である、露一國を以て獨墺土勃に相當ることが可能る數ではあるが、其壯丁の六割が無敎育であつて、且つ軍器が到底行き渡り得ない、或筋の調査に依れば、その損害數約三百萬を除き、現在の獨逸兵は其數約五百萬人にして、千九百二十年に徵集すべきものを加ふれば、今後七百二十五萬乃至八百四十五萬を得べしといふ、若し夫れ獨逸が攻勢を取るの力盡きて、專守防禦に出でたりとせよ、現在の兵數の三分の一を以て足れりとするであらう、英國側の所謂最後の勝利なるものが伯林を圍み城下の盟を爲し獨逸の軍國主義なるものを破壞するに在りとすれば、それは到底出來ない相談ではないか。

是の如く觀察し來れば、數を中心とする思想は容捨なく破壞され、數を包容したる質といふ思想の時代が此戰爭より胚胎し來るべきは多言を俟たない、英國側では專ら『量』を以て勝敗を觀測して來た、一市一城が圍まるゝといふ場合には量のみを以てしても勝敗を觀測することが可能やうが、强國間の大戰に於ては質量一致の上から觀測せねばならぬ、而して量は質を生じないが、質は能く量を生じ得る、量――物質が質――精神を生じ得るのではなく、質――精神が量――物質を生じ得るものだとされるとすれば、世界の思想界は茲に明に新局を打開し來つて、質を主として而も飽くまで量を追求する、精神を主として而も飽くまで物質を追求するといふ思想が世界思想の主潮と爲るに相異ないではないか、これは軈がて舊式の國家主義ではないが、所謂世界主義でもなく、個人即國家の思想ではないか、私は非戰、平和を中核としたる思想が戰爭から來る反動と疲憊とからして勃興するに相異ないと信

ずるが、それさへ内容と色彩とを換へて來ねば、耳を藉すものが少くなると信ずる。

ベンザムの最大多數の最大幸福などゝいふ說が行はれて、英國は數と量との强國であつた、そして第十九世紀の世界は何といつても英國を中軸として廻轉して居つたのであるから、事實英國が世界を統一して居つたのだ、故に思想の上からいへば量主義唯物主義が世界思想の主潮であつた、これが第二十世紀に於ては戰爭の結果として、質を主として而も飽くまでも量を追求する、精神を主として而も飽くまで物質を追求する思想上の新局が打開し來るとすれば、これ實に超古凌前の思想生活の打開ではないか。

第十九世紀は英國を中心として個人が富の上に横に寐て居つた、戰爭に刺激されて個人が富を踏んまへて起たねばならなくなつた、これが第二十世紀の大勢であるとすれば、これ實に世界の復活である、知らず孰れの民族が果して此復活の大勢に順應するものぞ。

五　歐洲戰爭の終結如何

（英國は時に及んで飜然其態度を一變するなきか）

歐洲戰爭は果して何時如何にして終結するであらうか、何時といふことは容易に豫言されるものではないが、如何にして終結するかは必ずしも豫言するに艱難ではない、私は先づ英國人に爲つて打算して見る、倫敦の猶太の資本家が何時まで英國の戰費を支へるかは姑く言はずとして、英國としては寧ろ他人の血で戰つてゐる、持久しても必ずしも不可はない、大陸の强國が最後の一人まで戰へば、大陸は荒凉凄慘なる荒野と爲る、それでも英國人として辛抱し得ないでもない、辛抱して見やうじやないか、然しながら自分の血で戰つてゐる大陸の强國が英國が辛抱し得るだけ辛抱するや否や、これも打算に入れて見ねばならぬ、それから斯ういふことも考へられないことはない、各强國が事實上占領する土地を其儘として事實上休戰狀態に入

り、交戰國双互の間に平和條約を結ばず、獨逸側は獨逸側にて經濟同盟を作り、英國側にて經濟同盟を作り、專ら經濟戰爭を遣ることにする、英國側からいへば、兵力を以て獨逸を壓迫することが可能ないから、經濟同盟にて永い間獨逸の經濟上の發展を制限して遣らうといふのである、巴里の經濟會議にも之に類する意味があつたやうにも取られるが、これも英國にては兎に角辛抱が可能やうが、露國が獨逸と開戰してから、その莫大の國産たる小麥を賣る個處がなくして弱つてゐる、露國が思ふやうに軍器軍需品の買入れられないのは、小麥を金に換へられないからである、北伊太利は工業地であるが、その資本の大半は獨逸の有である、英國がチャムバーレンの遺策を奉じて殖民地と本國との關稅同盟を實現して、保護主義を採用すれば、英佛の溫かい關係が冷却するのは、疾くに識者の間に唱へられた說である、英國が佛國の輸入品に關稅を賦課せざるを得ざるからである、否、英國が一旦保護主義を取れば、大陸の各强國と粗隔するに至るは避け難きことゝされてゐる、そして此經濟戰爭に於て獨逸は必ずしも大に苦しむのではない、獨逸は事實ナウマンの著たる中央歐洲（ミッテル、オイロッパ）卽ち中央歐洲經濟同盟を實現してゐる、故に此經濟戰爭なるものも必ずしも長く繼續するものではない、英國側では飽くまでも第十九世紀思想の主潮たる量を以て最後の勝利を博せんとしてゐるが、戰爭は到底戰爭を以て終結するより外はあるまいではないか、然しながら單獨不講和條約に加入した英國側の强國が最後まで之を墨守して居るとすれば、戰爭を以てしても戰爭を終結する見込さへなくなる、そして此單獨不講和條約なるものが亦英國の利益であることは言ふまでもない、英國は露國が單獨講和を爲さんとしたのを遮止したのは既に世に知れ渡つた事實である、英國は始め日本に對して日英同盟のあるからには倫敦宣言に加入の必要はないと通牒したが、後、日本に非日英同盟論あり日獨同盟論があるのを聞いて、假に日本を誘ふて之に加盟せしめたと傳へられる、私は飛耳張目子ではないから、敢て斯かることを

詮索することを好まないが、兎に角これから推測しても中央歐洲に於ては獨逸が主人であるが如く、聯合軍側に於ては英國が主人であることが明になる、而して英國は孤島自ら守り多く力を大陸に用ひない、且つ大陸强國の疲憊困頓は必ずしも直接自家に影響しないから、持久するに多くの障害はないが、大陸の强國は果して、英國と利害を同じくするであらうか、若し聯合軍側に乘ずべき間隙があるとすれば、それは卽ち此處に在るのであらう。

さらば戰爭の終結は兩交戰國の間に單獨講和が行はれなければ來ないとすれば、如何なる形成で所謂講和が行はれるであらうか、私は何にも責任を以て言ふものではないが、例へば露西亞が墺國と戰つてガリシヤに勝つとする、露西亞はそれで聊か花を持つ、墺國からして露西亞に單獨講和を申出させる、露西亞が之に應ずる、ヴェルダン要塞の陷落——寧ろ消滅は時間の問題である、これが果して佛蘭西の致命傷であるや否やは別問題として、佛蘭西も殆ど戰勝の見込がなくなる、若し斯かる場合に露西亞から佛蘭西を誘へば、渡りに舟で之に應じないとも限るまい、斯かる單獨講和は實は單獨講和であるとしても名は決して、單獨講和ではない、斯くして背信の責を免れて大陸の交戰國が單獨講和をするとしたならば、英國も亦單獨講和に勧誘される、其處で單獨講和が全體講和と爲る。

これは固より一箇の空想に過ぎないが、斯んなことにも爲らなければ、歐洲に平和を克復するの期がない、獨逸が若し早く佛蘭西と和したければ、佛蘭西人民が獨逸を怨む標的たるアルサス、ロードリンゲンを佛蘭西に返附して、其代償として交趾支那を貰うといふやうな餌を以てするかも知れない、佛蘭西は殖民する必要のない國である、獨はアルサス、ロードリンゲンに持て餘してゐる、佛は交趾支那に持て餘してゐる、これを交換しやうといふやうな話しの出ないともいへない。

此戰爭で損をするものは佛蘭西であるが、露亞西も決して損をするに於て佛蘭西に負けない、縱しガリシ

ヤ全部が露の有に歸するとしても、波蘭を失はねばならない、そして露西亞百年の大計たるミリユコフの所謂「自由の海」に出づることは到底望まれない、コンスタンチノープルを領有することは既に絶望であるといつて可いであらう、去らば波斯灣に出づるかといへば、此處には英露協商がある、露西亞が英に與みして中央歐洲と戰ひつゝあるに方つて、俄に鋒を轉じて英國と開戰する譯には行かない、故に戰爭が現今の勢を以て終結するとすれば、露國は更に未來の敵を胸中に描いて置かねばならぬ、コンスタンチノープルに出づるには伯林を通過せねばならない、言ひ換ゆれば獨逸を敵とせねばならない、波斯、印度に出づるには英を敵とせねばならない、獨を敵とせん乎、英を敵とせん乎、露西亞が最少抵抗線を取るとすれば、そは英である、露西亞は英露衝突を描いて講和するのではなからうか。

英國は斯かる場合に如何なる態度を取るであらうか、一人に爲つても最後の勝利を得るまで獨逸と戰ふといふであらうか、それとも形勢は最早戰爭を持久するに堪へずと見て取つたならば、忽ちその態度を一變するであらうか、當つても當たらないでも、最も面白い推測である、獨逸が英國に入寇する、蘇士を超へて埃及に入るといふやうなことが起れば、こんな推測は川のないことであるが、歐洲大陸に單獨講和が行はれんとするに方つては、英國は最早獨逸に對して最後の勝利を獲るに絶望せねばならぬ、そして英國は獨力大陸で戰ふものではないとすれば、私は英國の態度が飜然として一變して、反つて英獨接近の勢を追出して來るのではないかと疑はざるを得ない、英國が獨逸に接近するは極めて容易である、塞耳比亞は言はず、白耳義に對する最大の責任者は佛蘭西ではなくして英國である、白耳義の獨立を克服せねば英國の面目は何うしても立たぬ、獨逸をして之を承諾せしむる交換條件としては、英國は佛蘭西も露西亞も持たない戰利品を有つてゐる、それは英國が奪つた亞非利加である、獨領南洋群島である、勿論獨領阿非利加は南阿のブアが奪つたので

あつて、必ずしも英國の命ずるがまゝに獨逸に返却するや否やは解らないが、英國が獨逸に與へても損のないそして獨逸に好意を示すべき戰利品を有つてゐるは事實である、斯くして英國は早くも獨逸と接近するの計を講ずるかも知れない、その場合に最も窮するのは表南洋の獨領と青島とを攻略した日本であることは議論するまでもあるまい。

六　獨逸の世界的帝國とは何ぞ

（獨逸最も日本を惡む――英獨利害の一致）

偖てこれから私は獨逸の心になりカイゼルの心になつて獨逸の遠圖長計を編み出して見ねばならない、カイゼルは此戰爭が獨逸の意の如く速に終結に到着しないのは英國と日本とがあるが爲めと見做してゐるに相異ない、カイゼルの心孰れを憎むかといへば、それは英國よりも日本に對して猛烈なるものあるを疑ふ譯には行かぬ、英國のエドワード七世が大陸の列强を聯ねて獨逸を壓迫したのが、此戰爭の起る一大原因であつたのに相異ないが、英獨兩國は地球上に兩立せぬと言はれた國で、機會があつたなら、双方で一撃を加へんと待ち構へたゐたのであるから、英國が百方策を講じて獨逸を窘しめんとするに不思議はないが、日本は三國干渉の記憶を除斥しては、殆ど國際上俄に敵として相見るべき理由はなかつた、それにも拘らず、日英同盟に於ける信義を口實として起ち、いきなり最後通牒を叩き附けて開戰し、青島を略し南洋を取つたのである、日本あるが爲めに獨逸がその戰略上の齟齬を來たしたことは決して一にして足らずである、獨逸が太平洋に派遣した艦隊が日本の爲めに全滅されたのは、一面には印度を蜂起せしめ英國に反抗せしむる獨逸の計畫を破壞さした、一面には米國を牽制して、米國の内に在る獨逸系米人愛蘭系米人と相應じて、米國が聯合軍に各種の援助を與へるとを防止しやうとした獨逸の計畫を破壞さした、軍器軍需品は獨り米國が之を聯合軍側に供給するのみならず、日本も亦之に供給する、若し露國をして單獨講和を思ひ止まり飽くまで戰爭を

繼續せんと決意せしめたものありとすれば、それは日本が直接軍器軍需品を露國に供給することに爲つたからである、日本は英國と共に飽くまで大陸の列強を戰はしめてその疲憊困頓を待ちつゝあるものであるとしてゐるに相異ない。」

私は疾くより日獨同盟論を提唱してゐるものであるが、日本の政府が皆此反對に行つてゐる、私をして卒直に言はしめれば、今日に於て最も憎惡心の強い獨逸が最も憎惡するものは、或は英國ではなくして日本であると疑はれないでもないのだ、そしてカイゼルにして若しその世界的帝國の雄圖遠略を實現せんとならば、英國より先づ日本を處分せねばならぬとしてゐるかも知れない。

歐洲戰爭に於て最も明白に爲つた事實は英國は到底海上の帝國である、獨逸は到底陸上の帝國であるといふことである、英國は到底兵を大陸に用ゆる國柄ではない、獨逸は到底海陸兩方面にその全力を擧ぐることは不可能であるといふことを覺らざるを得なくなつた、獨逸は戰後に於て更に復び海陸兩軍を整理し擴張するに堪へない、獨逸は勢ひ其の力を專ら海に川ゆるか將た陸に川ゆるかを決せざるを得ざるに至る、南部を保護するが爲めに必要なる海軍以上に更に英國と對抗するの海軍を造るはその艱難とする所であらう、蓋し獨逸の世界的帝國なるものは墺國、勃牙利、土耳格を經て小亞細亞に出で、更に波斯、印度を經略し、和蘭をその聯邦に加へて、爪哇、蘇門答剌南洋一帶の島嶼とマレー半島、佛領交趾支那を併せて、世界の最も富める地方を掩有するのである、この世界的帝國の理想を實現するに海を主とすべきか將た陸を主とすべきかは一目瞭然ではないか。

私は斯かる見地からして英獨は或は戰後に於て一時なりとも利害の一致を發見するであらうといふことを惧れてゐるものである、英國は此戰爭に於て飽くまで獨逸を疲憊せしめやう——若し露骨に言へば、飽くまで獨逸と露國とを疲憊せしめやうとするに無理はないが、戰後に於て英國は依然海を支配し、而して獨逸は

大陸の主人と爲るといふことに爲つたならば、獅子と鷲とか提挈し得ないことはないといふことに爲りはせまいか、由來英獨の軋轢は其商業上の競爭、カイゼルの海軍政策が主と爲つて生じたもので、其以外に於ては英獨が其利害を一にするの例は決して寡くはない、露國が巴爾幹半島に下り、コンスタンチノープルをツアールグラードにするを拒絶せんとするは英獨共に然り、その波斯、印度に下るを拒絶せんとするは英獨共に然り、而して露國を極東に驅逐するに於ては英獨共に一致してゐる。

戰後は英露の波斯印度方面に於ける衝突であるといふことの前提を容認して見れば、英國は新に獨逸と結びて重ねて露國を極東に驅逐するの計を講じないとは斷言が出來ない。

七　戰後の强國は獨英露日本

（獨逸の對英露日米態度）

それから獨逸から言つて、若し此戰爭に於て英國に入寇して倫敦城下の盟を爲さしめ得たならばいざ知らず、然らざるに於ては世界の表面に於て差當り獨逸が折衝し合縱し連衡し得べき國は數へ來れば米國と英國と露國と日本との四國を餘すのである、米國は別に解說するとして、獨逸は英、露、日三國に對して如何なる態度に出づべきか、我々が日獨露三國同盟を唱ふるは固より斯かる根據があるのだが、獨逸は先づ露國を極東に驅逐するを中心の目的として露國と提挈するを策することがないとはいへない、そしてこれ波斯、印度の安全を保障するのであるから、英國も異議がないであらう、獨逸が和蘭を合併して其南洋諸島をして自動的に獨逸の有たらしむるに方つて、目の上の瘤と爲るものは日本である、英獨の反對に會しては露國は重ねく南下するの志を就し難く、且つ露國は宛ら鐵檻中の虎の如く唯その出口を得んと焦せるのであるから、或は獨逸の誘ふまゝ再び西伯利亞、黑龍兩鐵道を利用して東迫し來らないとも限らない、斯うなれば汝に出でたものは汝に還へる、日露戰爭から胚胎し來つ

た世界の波瀾は歐洲戰爭を共絶頂點として更に日露戰爭に戻つて來るのではあるまいか。

日露再戰は露國を透しての日獨戰爭である、露國に於ける獨逸種には固より異議のありやうはない、戰爭のある度に內に不統一を示す露國も案外に國論の統一を見るであらう、そして獨逸は盛んに軍器軍需品を露國に供給し、場合に依りてはその軍器の使用法を教授するが爲めに其軍人を貸してやらう。

日露新協約の出來た今日に於て日露再戰など云ふ事は皮相の見解しか持たぬ一般人に取つては殆んど妄想としか受取れぬであらう。然し今日世界の表面に儼存するものは米、英、獨である、誰か英國よ汝は海を支配せよ、獨逸よ汝は陸を支配せよといふことに爲らぬと保障し得るものぞ、獨逸は通商上の或特權を得て波斯の獨立、印度の安全も保障して、和蘭を其聯邦に合併することを英國に承認せしめ、英國がその代償として、獨逸の援助を得て、濠洲、ニュー・ジーランドを始め、英國の海外植民地を防禦することに爲ることもあらう。

八　歐洲民族の心理

（戰後其遠東本能の燃燒）

歐洲民族は戰後に於て如何なる態度に出づるであらう、請ふ私をして民族心理からして之を論定せしめよ、東洋の民族はそれが寐てゐる支那人でも死んでゐる印度人でも一つの共通なる性情がある、內自ら滿足して敢て進んで外に求めないといふことである、支那人に膨脹主義のない如くに印度人にも帝國主義がない、琉球は琉球で滿足してゐる、瓜哇は瓜哇で滿足してゐる、蘇門荅剌は蘇門荅剌で滿足してゐる、殆ど例外といふべきものがない、若ありとすればそは唯海賊を出した日本人であらう、故に通商貿易があつても遠く海外には行はれない、唯重に國內で有無相通ずるのであるが、それさへ極小スケールで行はれたものだ、私はその原因を詳かに論述するの餘裕はない、又必ずしも本論の目的でもない、唯東洋は一般に內自ら滿足して敢て進んで外に求めなかつたといふ事實を指點す

れば足りるのである、同時に之に反して歐洲人は內に滿足しないで敢て進んで外に求める民族である事實を指點せねばならぬ、近代歐洲はチユートン民族の歐洲である、第十五六世紀及び其以後に於ける歐洲民族の運動は總て歐洲を出でゝ外、全世界を獵さる(exploit)運動であつた、ルネサンスは個人と世界とを發見したといふ、コムバスの發見以來、歐洲の航海は最早地中海及び歐洲の海岸には限られなくなつた、其結果として現はれたるのはバーソロミユ、ディズが喜望峯に達したことである、それからヴアス、コダ、ガマは喜望峯を迂回して印度洋を航してカルカッタに到着したことである、更にゼノアの人コロムブスが米國を發見したことである、セルジユク、タルクが陸路歐洲より小亞細亞を經て亞細亞に達するを遮止したが爲めに海上の迂路を取つたのであるといふが、孰れにしても其動機が通商貿易に在るを疑はれない、蓋し亞細亞は農業本位の國である、そして概して氣候は南國的、從つて孰れの國も孰れの島も自給自足してゐたのである、歐洲は然らず、殊に近世の歐洲を支配するチユートン民族は北方の森林に住して、農牧を以て自ら滿足する能はず、その掠奪的バロンの心が進んで通商貿易の精神と爲り、進んで全世界を開拓するに至つたのである、米國が何故に日本を開いたか通商の爲めである、印度、支那、朝鮮の眠を攪擾したのも亦固より通商貿易の動機である、若し印度は天人の關係――人生と宇宙との關係を究むるに沒頭して遂に宇宙に還へつたものとすれば、近世の歐洲は人と世界との關係は唯物主義に在りと爲し、橫に平面的に世界を征服して、現在の如く逆自然の文明を打開して來たのである、印度人が徹頭徹尾立體的にして立體にして絕えて平面に進むの工夫がなかつたとすれば、歐洲人は徹頭徹尾平面的にして絕えて立體に戻るの工夫がないといへる、偏立體的偏精神的、亡びざるを得ない、偏平面的偏物質的、亦亡びざるを得ない、私は印度が如何にして地上に復活すべきかを知るに苦しむと共に、西歐の文明も若し此際一大廻轉をせねば亦運命附けられてゐるを信ぜざ

らんと欲するも得ない。

然しながら哲學上の議論は議論として、歐洲民族の心理は內自ら滿足せずして敢て進んで外に求めるのであるとすれば、戰後に於て何人も此心理が猛烈に復活して來るといふことを否定し得ないであらう。

私は嘗て歐洲人の『還東本能』なるものを明にしたことがある、歐洲人は本、亞細亞より西方に驅逐され移住したものであつて、彼等は亞細亞に還りたいといふ本能があるのである、この本能から二個の現象が生じて來る、一は熱心に亞細亞に憧憬するのである、一は亞細亞人を恐怖し輕蔑する心である、ヴアスコ、ダ、ガマが印度への航路を發見したのもこの還東本能の然らしむる所でなる、コロムブスの阿米利加を發見したのも亦この還東本能の然らしむる所である、印度といひ支那といひ亞細亞は天與の寶庫であることは昔しから西洋に知られて居つた、彼等は亞細亞に還りたくて堪らないのだ、所が昔しは亞細亞人は歐洲人よりも强かつた、エリアン民族を歐洲の磽确貧寒の地方に驅逐したものは亞細亞人である、十字軍は名は宗敎的であるが、歐洲の基督敎徒が東方の回々敎徒を憎惡した結果である、それが數百年に亘つて行はれた、近世に於ては土耳格人が歐洲に於ける東方の代表者として憎惡の中心に爲つてゐた。

我々日本人は亞細亞といつても、東海の表に孤立してゐて、兩大陸の風雲とは毫末も交涉がなかつたが、歐洲民族には東方に對して眞實斯かる心理を有つて居るといふことを忘れてはならない、ナポレオン戰爭の結末を附けた維納會議の後、歐洲が競ふて世界を獵りに出かけたことは屢々近ごろ日本で論ぜられてゐるが、苟も眞面目に歐洲民族の心理を研究し來つたならば、何人も歐洲の列强が世界史上未曾有の大戰をげ幾年かに亘つて歐洲の內地に於て戰ひ、無數に人を損じ物を損じ資を損じた揚句、依然として白人自ら白人の國に兄弟鬩墻の痴態を演じて居るべしと主張するものはあるまい、私は玆に歐洲に『歐洲合衆國』が現出しやうとか、歐洲に『超國家組織』が成就しやうとい、

やうな表面的なことは言はない、唯歐洲民族は戰後その還東本能を發揮し來るは、歐洲合衆國が現出しやうがしまいが、超國家組織が成就しやうがしまいが、歐洲民族に取つて自ら抵抗することの可能ない勢であり理である數である情であるといふのだ。

九　日本を唯一の巖礁として歐洲勢力の奔注

(日米關係如何)

戰後歐洲の政治的商業的勢力は一大潮流を爲し、それが三道より進んで東洋に肉迫し來る奔騰飛舞して來るといふ警告を與へても必ずしも所謂驚魂動魄者流(アラーミスト)の群に投じたものではない、輸入超過の日本がこの戰爭の爲めに俄に巨額の輸出超過と爲つたことは知らず何を意味する、世界の空氣が歐洲の戰場に凝集して歐洲以外の世界は眞空の狀態に爲つたといふことではないか、一旦兵氣銷して日月の光と爲れば、この歐洲の戰場に凝集した濃厚なる空氣は暴風と爲り颶風と爲りて或方角——私は東方だといふ——に吹き出さねばならぬといふと爲る、米國紐育の或レストウランで多數の米人が寄り集つてゐた、一人が『チッヘラリー』(英國の軍歌)を唱へた所が、一大喝采が起つた、然るにその喝采が止むや、反對の呻きや呪咀の聲が起つた、然るに更に一人が『ラインの守り』(獨逸の軍歌)を唱へ出した所が、同じく一大喝采が起つたが、その喝采の退くや、更に反對の呻きや呪咀の聲が起つた、そして一人米國の國歌たるスター、スパングルド、バンナーを唱へ出すものがなかつたといふので、米國の一新聞紙は米國人には米國がない、皆共歐洲に對する系統に由りて兩分して、一は英國側に與みし、一は獨逸側に與みしてゐると悲憤して居つた、私には米國の新聞紙や米國人が『我々はプロ英國ではないプロ獨逸でもない、プロ阿米利加でなければならぬ』と言ふを聽いて實に不思議で堪らない、日本人がプロ日本人であり米國人がプロ米國であるのは先天的であると思ふが、それが米國の國狀である。

支那人が事を好む袁世凱を好まなかつた如く、米國人も亦事を好む大統領を好まない、ルーズヴェルトが大統領の候補者に爲れないのは少くとも二つの理由がある、一は三たび大統領に爲るといふことは、華盛頓以來米國の人民に深く刻まれた傳說に反してゐるといふこと、一はルーズヴェルトが世界第一の市民であることを容認して、その世界第一の市民たること即ち動もすれば難を外國に構へやうとする心あるを危むからである、私は今尙米國人民が平和を以て其主命とするものなるを信じて疑はない、且つ米國も仲々の事である、米墨の風雲時々急を告げるのは、獨逸の力もあらう、米墨を開戰せしめて、米國をして軍器軍需品を歐洲に輸出するなからしめんとするのであらう、南米の各共和國獨逸の勢力浸潤せざる所なく、殊にブラジルが其中心である、米國では汎米主義などゝ言つてゐるが、中南諸國一として米國に對して好感情を有するものはない、若し米國が墨國を併呑するが如きことあらば――米國の兵力では隨分艱難ならんも――中南米の各國は一致して之に反抗するであらう。

が、我々は米國が歐洲戰爭に依つて驚くべき富を集積したことを忘れてはならない、紐育が世界金融の中心と爲るとまで言はるゝのである、米國が驚くべき富を集積したとすれば、日本の成金が骨董品を買ひ込むが如く、米國は陸海軍の擴張といふ骨董品を買ひ込むに相異ない、現に紐育及び其他の都會に於けるプレペアドネス、パレード（軍備運動）は實に盛んなものである、殺人器製造業者が煽揚したといふこともあらうが、歐洲戰爭に刺激されたことを見逃す譯には行かぬ、それから獨りハーストの新聞ばかりではない、幾多の新聞紙に日米戰爭談のないことはない、中には種々な繪畵さへ挿んでゐる、李鴻章が鎭遠定遠を中心とする北洋艦隊を建造するや、流石に平和を愛好する支那人も日本と一戰したく爲つた、骨董品の積りで買ひ込んでも、幾多の超ドレッドノートが出來た、英國に次いで世界第二位の海軍國と爲つたといへば、獨逸の後推しもあり、時には一戰して「我武維れ揚る」と歌

つて見たいといふ途方もない慾求が起らないとも限らない、現に米國人はマッキンレーを促がして西班牙と開戰せしめたではないか、彼の時戰熱の米國に勃興したことは、米國のプレーリーを燒く野火のやうであつたといふ。

　歐洲戰爭以後に於ては米國は復た巨額の軍器軍需品を歐洲に輸出することが可能なくなる、反つて歐洲より輸入するものが米國から輸出するものに超過するといふ戰前の形勢に戻るかも知れない、米國の資本家は既に之を見越して、如何に其資本を利用すべきかに就いて組織的に調査してゐる、アメリカン、インターナショナル、コーポレーションといふやうなものも出來てゐる、米國の商業的政治的勢力が亞細亞に向つて進出して來るのも亦自然である。

　果して然らば歐洲民族の內自ら滿足しないで常に外に向つて物質を追求せんとする慾望は一大潮流を爲し、分れて二派と爲り、一は北米大陸を經、巴奈馬運河を經て、東方より亞細亞に奔注し、一は蘇士、新嘉坡を經、西伯利亞鐵道を經、伯林バグダット間の鐵道を經て、西方より亞細亞に奔注し來るではないか、亞細亞は積衰積弱、自ら起ち自ら步み自ら走り得るものはない、唯日本あるのみである、日本は即ち此歐洲民族の心源より迸發し東西に分れて奔注し來る大潮流の衝突し來る唯一の巖礁なるなからんや。

　英獨若し一時なりとも相和すとすれば、ヴイルヘルム、ストラーサ（伯林外務省の在る處）が一たびバトンを推せば西は米國に於ける各種の歐洲民族を一致せしむることが可能る、露國も亦その籠蓋する所と爲る、獨逸と日本とは南洋群島、マレー半島、印度、波斯を隔てゝ近く相對峙してゐる、歐洲民族を背景としたる獨逸と全然孤立する日本、歐洲よりする大潮流、克く日本といふ巖礁を打碎くや、若くは日本といふ巖礁、克く歐洲よりする澎湃たる大潮流を推し返へし跳ね返すことを得るや、獨逸にして地上に消滅すれば已む、唯獨逸が地上に消滅するは、容易に期することの可能ない希望である。

十　生活的帝國主義＝代議政治の破滅

（タゴールとスミスとは斯くして結び附く）

日本が智識を世界に求むるを以て其精神としてから、日本人の眼は常に外を以て内に律するやうに爲つた、日本人の言動云爲の公標準は自己の内に在るのではなくして外に在るやうに爲つた、肉眼は瞬いて外に向つてゐたが靈眼は全く内に閉されて了つた、私は嘗て私の父から聽いたことがある、彼理の黒船が横濱の本牧沖に碇泊して居つた時、潮の上下に依り、進退したのを見て、幕府の役人は其度毎に黒船が進んだ退いたと急使で江戸に注進に及んださうだ、我々は決して幕府の役人を笑へないのである、西洋では自治制度、我々にも西洋の自治制度、西洋では二大政黨、我々も二大政黨、日本の論壇でも文壇でも皆光を外に求めた、即ち歐洲に求めた、光を歐洲に求めたといふことは、哲學でも藝術でも皆我れの外に在りとするのであるから、哲學も藝術も亦皆物質化し機械化して了つた、西洋の哲學、藝術を紹介するに無批判を以てするのであるから、日本の哲學家、藝術家なるものは實は皆外化し物質化し機械化してゐるのである、日本人は今や我れに還らねばならぬ時が來たのである、人間とは何ぞや、それは外國人歐洲人ではなくして日本人であると自問自答せねばならなくなつた、日本人たる我々は何ぞと自問自答せねばならなくなつた、日本人たる自我の權威を樹立するには、總て我れより發すべきもので、戰後歐洲民族の世界に於て民族主義、國家主義が勃興すべきか將た民主主義、社會主義が勃興すべきか、若し前者ならば前者に随はん、後者ならば後者に随はんといふは、最も卑鄙庸陋なる奴隷的態度として之を擯斥せねばならない、日本は天下的でない世界的ではない、狹く限られたる地上に人口の過剰に苦しんでゐる國である、人口が過剰なのではない、土地が過小なのである、（人口僅に五千三百萬）我々の生活を積極的に解決せんとすれば、内自ら盛に充實して更に

外肉を攫まねばならないとすれば、『生活的帝國主義』我が我々の中心の最大要求に爲らなければならない、我以外の一顰一笑一張一弛は我々の相關する所ではない、ハイネの言ふが如く、獨逸帝國の根柢は哲學に在るのである道德に在るのである、その根柢の權化たるものはカントである、獨逸は先づ靈に充實して更に肉に充實せんとした、これ獨逸が平面的に世界に膨脹し始めた所以である、顧ふに今回の戰爭の如きこれ亦內、靈に充實して更に外、肉を攫まんとする要求の爆發したものではあるまいか、私は獨逸の成敗利鈍を眼中に置かないで言へば、獨逸民族はチユートンであるが、流石に他のチユートンとは其選を異にしてゐると謂はざるを得ない、況や他の歐洲民族に於てをや。

精神生活を精神生活とすれば、其生活は個人として民族としての死である、宇宙觀を打つて端的に人生觀と爲し、之を民族的にし之を國家的にし、現世に於て立體的、時間的の生活を爲さんとするの勇猛精進の決意ありて、始めて無限に物質、機械、科學を追求しても、毫も物質、機械、科學に累はされないで、自由自在に之を驅使して我用と爲すことが可能るのである、印度人は何といふか露西亞人は何といふかは構はない、私は日本人として精神的生活の歸趣は消極的に宇宙に還へるのではなく、人間として積極的に現世に向上するのである、人間として現世に向上せんとすれば、平面的、空間的に世界的生活をするのではなくして、立體的、時間的に民族的國家的生活を爲すに在りとするものである、國家は果して世界の歸趣である。

これでタゴールとスミスとが結び附くではないか、亡國印度の象徵が興國日本の象徵と爲り、米國凡俗主義の象徵たるスミスが英雄的日本の象徵と爲るではないか。

これで日本は始めて日本を以て世界の中心と爲つて世界の聲を發し得るではないか、戰後獨逸若し健在ならば、東西相對して眞劍の勝負を遣つて見やうではないか。

歐洲戰爭に於て暴露した一個第十九世紀の現實は

「代議政治には一人の愛國者もないといふ」ことである、――從來立憲政治と代議政治とは異字同義に用ひられて來たが、私は日本には日本の立憲政治がなければならないと主張するものであるから、代議政治を非認否定するからといつて、同時に立憲政治に反對するものでないことを御斷りしておく――既にジャック氏が米國のアトランチック、モンスリーに述べた如く、代議政治なるものは階級の競爭から起るもので、階級代表政治である、階級の利害の按排調和に是れ忙しくして、政治家は其全精力を國内の問題に吸收されて、國家を中心として世界的經綸を講ずるの餘裕がない、是れ代議政治には一人の愛國者もなしといふ所以である。

獨逸には國家學があつて政治學がない、あれば外から輸入されたものである、英米には政治學があつて國家學がない、あれば外から輸入されたものである、國家といへば他の國家と對立し角逐し競爭するを豫想する、國家あれば政治がなければならないが、政治の在る處必ず國家があるとはいへない、日本では代議政治といつてはゐるが、まだ英國のやうな代議政治には爲つて居らぬ、去れども日本の政黨政治家は個人と個人の利害、地方と地方との利害、黨内に於ける黨の利害の調和按排に全精力を銷磨してゐるではないか、政府の大臣も亦黨派を操縱するを唯一の任務としてゐるではないか、代議政治のあつたが爲めに、英國の政治家が全然無準備で大英帝國を戰爭に投入した如くに、日本も今日の儘で進んで行けば、日本を英國にせずにはおかないであらう、その動機を臆測するを止めよ、三黨首領の會同も、大隈首相を中心として海陸の當局者が會同したのも、皆機運が彼等を圍つて動いてゐるからではないか、それが極めて小乘的であり姑息的であるは言ふまでもないが、大隈首相に接近してゐる永井柳太郎氏は大隈首相が現在の政黨には愛想を付かしてゐることを説いてゐる、日本は早晩ソムマーソルトを遣らねばならぬ機運に會してゐる、私は大隈首相が功成り名遂げた後は加藤男を推薦しないで反つて寺内伯を推

應するであらうと豫言するも一理のあることであらう、民族心理から觀察しても國家哲理から觀察しても、戰後世界は新局を打開して來る、日本が自發的獨創的に亦之に順應するの計がなければならないとすれば、日本人は個々に自己革命を行はねばならない、ヂレタント、デカダンの時代が既に過ぎた如くに、新しい女、女權擴張、男女平等、女の社交奬勵などゝいふ時代も亦既に過ぎた、私は清朝の史家趙翼の言を引いて此長篇を結ぶ「天意早く已に新局を開き、人情猶故見に狃る」

法律の社會化

現代法律の基礎觀念としての『公の秩序、善良の風俗』

法學博士　牧野英一

小引

瀧田樗蔭君が來て、同僚吉野君に付き、僕が如何なる感想を持つて居るかといふことを訊ねたことがあつた。予輩が其の時答へた中に、『吉野は十九世紀から現代にかけての政治現象をエマンシペーションといふ語で說いて居ると思ふのであるが、僕は最近の法律現象をソシアリゼーションといふ語で說いて居る。吉野が政治史家として現代の政治現象を敍說批評するに方つて抱持して居る理想は、僕が法律學の學究として現代の法律を分拆綜合するに用ゐて居る標準と同じやうであるので、此の點に於て、僕は、いつも吉野の說を傾聽したのであつた』といふ一節があつた。それは中

央公論六月號に在る。そこで、穆陰君が又重ねて訪ねて來て、予輩の所謂法律のソシアリゼーションといふのは、どういふ主張であるのかといふ問を發した。

ソシアリゼーションといふ語を假りに譯して社會化とする。此の語は好んで社會學者の用ゐる所であつて、而して又、法律を社會學的に研究する者の屢用ゐる所である。予輩の知る所では、此の語を法律學の範圍に於て多く用ゐるのは、特に佛蘭西學者である。法律の社會化 Socialisation du droit といふ語は、近時の佛蘭西法學者に依て用ゐられることが、特に多いのである。此の社會化といふ語は、必ずしも精確な一定の意義を持つて居るものとは謂ひ得ないやうであるし、殊にそれが一般社會學に用ゐられた場合と、法律學に於て用ゐられた場合とに依て、多少、趣を異にするものゝあることを認めねばならぬのでもある。併し、予輩は、此の語を以て、法律の最近の趨勢を言ひ顯はすに極めて都合の良いものであり、少くとも極めてサッゼスチーヴなものであることを信ずるので、佛國學者の其の例に倣つて、此の語を用ゐることにして居る。

社會化といふ語は、少くとも譯語として、或は生硬であるとの譏があるかも知れない。實は、法律には、別に『公の秩序、善良の風俗』といふ語が用ゐてあるのである。予輩の理解する所では、此の『公の秩序、善良の風俗』といふことが、現代の法律組織に於て、最も基本的な原則であつて、而して、法律が此の原則を以て、最も基本的なものとすることは即ち予輩の所謂法律の社會化といふことに該當すると思ふのである。

つい先達て、予輩は、或教育會の席上で『公の秩序、善良の風俗』といふことを題にして、通俗的な講演をした。今、穆陰君が、法律の社會化とは何の謂ぞやと糺されるのに對して答へんとするには、其の折の講演の要旨を以てすることが或は

適當であらうかと考へる。乃ち、其の折の筆記に基いて、次の如く說いて見ることにした。

一

『公の秩序、善良の風俗』といふことを演題にして、お咄を申上げる約束をして置きました。

此の語は、現行の法律中に屢見えて居る所である。例へば、民法第九十條には『公の秩序又は善良の風俗に反する事項を目的とする法律行爲は無效とす』とある。商法第四十八條には『會社が公の秩序又は善良の風俗に反する行爲を爲したるときは裁判所は檢事の請求に因り又は職權を以て其の解散を命ずることを得』とある。法例第二條には『公の秩序又は善良の風俗に反せざる慣習は法令の規定に依りて認めたるもの及び法令に規定なき事項に關するものに限り法律と同一の效力を有す』とあり、又同法第三十條には『外國法に依るべき場合に於て其規定が公の秩序又は善良の風俗に反するときは之を適用せず』とある。其の外、單に『公の秩序』とだけ規定してある場合があるし（例へば民法第九二條、第二八〇條）、『公益を害すべき行爲』といふやうに規定してある場合があるし（例へば民法第七一條）、『不法の條件』などゝいふ例があるし（民法第一三二條）、『不法の原因』といふのがある（民法第七〇八條）。予輩は是等の諸語を以て、結局は同じ意義を有するものと信ずるのであるが、兎に角、『公の秩序、善良の風俗』といふ語、又は之に類する語が現行法の所々に見えて居るのである。

此の言葉は、いかにも漠然たる意義のもので、精確明瞭を尙ぶ法律上の用語としては、不都合なものであるとも言へるのである。併しながら、右述べたるが如く、實際に、法律の上に用ゐられて居るのみならず、予輩の立場から申すと、之は現代に於ける法律組織の中心を爲して居る所の思想を示して居るものである。法律といふ觀察點から、現代文明の意義及び價値を論ぜやうとする者に採りては、甚だ重要なものであるのである。

來、法律と道德とは、全然違つたものゝやうに、多くの人から解せられて居る。吾人より見れば、法律も道德も、共に、吾人の心意の働きと行動の向ふ所とを規律するもので、其の間に性質上の差異をつけることの出來るものでないのであるが、世上一般の用語に於ては、法律家といふことは、一種厭惡すべき聯想を伴つて居るし、權利を持つて居るといふことは、他人の利害を考慮するに及ばぬといふやうなことを他面に包含して居るやうに見えるのである。併しながら、予輩の見る所では『公の秩序、善良の風俗』といふ謂はば道德的な用語が、實は法律組織の中心になつて居るので、法律は決して道德と背馳するものでないのみならず、道德も亦、現代に於ては、從來考へられたよりもモ少し明瞭な輪廓を持たねばならぬと考へられるのである。而して法律と道德とが斯の如く相接近乃至合一する所に、現代文化の下に於ける法律の意義及び價値が明瞭にされ、又法律の此の意義が明瞭にされることに因りて、現代文化の意義及び價値が明瞭にされると信ずるのである。

二

從來、法律と道德とは、如何なる點に於て差異あるものとされたかに付き、先づ一言したいと思ふ。其の區別の標準とされたものに二つある。第一は、法律は權利を論ずるものであるが、道德は義務を論ずるものであるとする見解である。第二は、法律は外部行爲を論ずるもので、道德は内部心意を論ずるものであるとする見解である。

權利といふ觀念は、法律の賜であると思ふ。併し、法律の發達を繹ねて見ると、權利といふ觀念は、沿革上寧ろ新らしいものである。羅馬法の如き發達したる法律に於ても、權利の觀念はあまり明瞭でなかつたとされて居る。又羅馬の學者には、法律學を以て權利を論ずる學なりとするやうな考がなく、權利を中心にして法律といふものを理解すべしとした最初の學者は、「ライブニッツ」であると謂ふことである。

沿革は兎に角暫く別論として、法律を理解するに方りて、權利の觀念を基礎とすることは、今日の通說である。法律は吾人に一定の權利を與へる。吾人は此の權利を主張して吾人の社會的生存を全うするのである。殊に、今日の法律組織に於ては、個人が獨り他の個人に對してのみならず、又實に國家に對して權利を有するといふことを認めるのである。之は所謂法治國の思想であつて、十九世紀の法律觀念が其以前の法律觀念に對して有する差異の最も重要なるものゝ一とされて居る所である。

既に、法律が吾人に一定の權利を認めて居るとする以上は、吾人は、其の權利を行使するに付いて自由である筈である。卽ち、權利の行使として吾人の爲す行動は、其の動機乃至目的が奈何なる點に在らうとも、法律上は適法なこととされねばならぬことになる。又反對に、吾人が、道德上如何に不正なことを考へて居ても、それが行爲に現はれて、現實に他人の利益を害するに至らざる限りは、法律上以て之を不法の行爲、卽ち他人の權利を侵害したものとすることが出來ないことになる。玆に於て、法律の支配する所は、吾人の外部行爲に止まるのであるといふことが、法律は權利を規定するものであるといふことのコロラリーとして主張されることになつて居る。

斯の如く、法律現象を理解するに、權利といふことを以てするときは、他人に對する義務といふ思想は薄らがねばならぬことになる。之が、世上多くは、法律を以て道德に背馳するものとする一の點である。又法律を以て、行爲を支配するものとし、之を以て人の心意に及ばざるものとするときは、動機の道德的評價といふが如きことは、法律から除外されねばならぬことになるので、之が又、法律といふ語を以て、吾人の耳に不快に響くものとするに至らしむる他の點である。

併しながら、法律を以て權利を論ずるものとし、單に人の外部行爲を支配するものとする思想は、予輩は、之を以て現代の法律を說くに適當なものと考へることが出來ぬ。此の思想は固より今日の通說又は多數

說と見るべきものではあらうけれども、それは只、それが從來の法律現象を說くに適當であつたといふ關係から、惰性的に今日に行はれて居るに過ぎないものと考へる。それで、予輩は、此の思想が如何にして近世の學界に認められたかの理由を少しく論じて見たいと思ふ。

三

謂ふまでもなく、十七八世紀から十九世紀に亘つて、個人の覺醒といふ大事實が歷史の上に現はれて居る。此の個人の覺醒といふ事實は種々の方面から觀察され得るので、例へば哲學を論ずる者は哲學の上から、文學美術を論ずる者は文學美術の上から、經濟產業の事を論ずる者は經濟產業の上から之を論ずることを得るのであるが、予輩、法律學の研究に從事して居る者の眼から見ると、又其の特別なる立脚地よりして、近世に於ける個人の覺醒といふ事實を認めるのである。その著しきものを擧げて見ると、次の如く四箇の事柄が特に吾人の留意を促がすのである。

第一は、近世の國家が警察國から法治國に變遷したといふことである。學者は、中世に於ける法律と近世に於ける法律とを比較して次のやうに說明して居る。中世では、法律は、國王が官吏に下したものである。法律は、官吏が行政をやるに方り、其の據る可き準則として國王が下した訓令である。それで、人民に法律上一定の權利が認められて居るといふ思想がない。例へば一定の事項に付て裁判を求めるにしても、それは言はゞ官吏に對して恩惠的處分を求めることになるのであるし、又官吏が法律違反の行爲をやつた場合に於ても、人民はこれを以て自己の權利を侵害せられたとすることが出來ない。それで、官吏の法律違反は、只其の官吏に訓令を下した國王に對して責任を生ずるに過ぎなかつたのである。斯く、法律は官吏に對する執務の準則に過ぎないといふやうな考は、維新後第一の刑法たる明治三年の新律綱領などにも明白であるので、其の上諭文には「朕刑部に勅して律書を改選

せしむ云々内外有司其之を遵守せよ」とあるのを見るのである。然るに、近世の法制に於ては、法律は主權者たる國家から官吏と人民との上へ平等に下つたものである。人民は其の法律に依て如何なる權利が認められて居るかといふことを主張することが出來る。獨り個人間に於て其の權利の主張を爲すことが出來るのみならず、又國家の機關たる官吏に對して之を主張することが出來る。官吏は人民の權利を尊重するに付て、獨り主權者に對する訓令違反の責任を負ふばかりでなく、人民に對しても亦其の責任を生ずることになる。之は官吏に責任を生ずると謂つては不完全なので、國家自身に責任を生ずるといふ方が正しい。即ち國家は自己の定めたる法律に依て行動せねばならぬとし、其の國家の機關たる官吏が其の法律に違反したる場合に於ては、其の權利侵害に付て人民に對し責任を負ふことになるのである。されば、個人が國家に對して權利を有すといふ思想は、近世の法律に於て初めて明かにされた所で、斯の如くにして行政裁判の制度などが發達することになつたのである。昔は官吏の不法行爲に對し、救濟を國王に求めるといふやうなことは、不都合な行爲であるとされた。所謂義民が駕籠訴をすることは犯罪の大なるものとされた。併し、今日の法治國といふ思想に於ては、國家と人民とは平等に法律に依て支配されて居る。國家と人民との關係は法律關係である。人民は法律上國家に對して權利を持つのである。それで憲法第六十一條にも「行政官廳の違法處分に依て權利を侵害せられたりとするの訴訟」といふことが規定されて居る。之は所謂行政裁判である。國家を相手方として訴訟を提起することが出來るといふ思想は、實に法治國の思想の特色であるといふことが出來る。

第二は、法律が秘密法から公示法に進化したといふことである。昔の法律が秘密法であつたといふことには二つの意味があらうと思ふ。其の一は法律が成文で出來て居ても、其の成文が一般民衆に秘密にされたといふことである。其の二は法律が一定の正文には出來

て居ないで、官吏が其の時の宜しきに從ひ任意に事務を取扱つたといふことである。前者の意味に於て言へば、例へば德川幕府の刑法たる所謂御定書百箇條などが其の最も明らかなもので、之は奉行の外は見ることの出來なかつたものである。百箇條の末文を見ると「右之趣達上聞相極候奉行中の外不可有他見もの也」とある。一體、御定書百箇條は、之を以て犯罪の總ての場合を網羅したものとされたのではなく、只奉行の一應の心得として制定されたものであるに過ぎなかつたと學者は說明して居る。それで、其の規定に入らざる行爲は罪とならざるものであるといふ譯のものではなかつたのであるので、從て、それが秘密の法律として取扱れる特別の必要があつたのでもある。固より當時の法律には公布されたものが少くない。併し、公布されたもののみが法律である、法律ならば必ず公布されねばならぬといふ考はなかつたのである。所謂、民は依らしむべし知らしむべからずであつたのである。而して歐洲の中世に於ても同様であつたやうに學者が說明をして居るのである。又、斯樣に法律の正文が獨り官廳内の秘密のものであつたのみならず、重要なる事項の外は法律の正文がないのであるから、官吏が實際の仕事をするに方つては、自分で法律を作り、自分で其の法を行つたといふ場合が少くなかつたのである。裁判といふことは、今日では司法を意味するので、既定の法律を適用するといふことであるけれども、其の當時に於ては今日の司法と行政との間に見るが如き明瞭な區別は考へられて居なかつたのである。斯樣な譯合で、警察國時代――法治國に對して斯樣な時代を警察國と稱する――の法律は甚だ明確を缺いて居るものであるが、それが近世に至りては、全く一變して、法律は總て公示されねばならぬといふことになつた。而して種々の法律が公布された結果として、司法の上にも、行政の上にも、慣習とか條理とかの適用せられる範圍が狹くなり、又自由裁量の餘地とが餘程狹くなつたのである。

第三に、專制政體が立憲政體になつた。立憲政

いふことには三つの意味がある。其の一は所謂三權の分立であつて、立法、行政、司法の三者が異つた機關の手で營まれ、議會と政府と裁判所とが別々のものとされるといふことである。其の二は成文憲法である。成文憲法を制定するに在つた趣旨は、一方に於ては三權分立の主義を明かにするに至つたのであるが、他方に於ては、人民の一定の權利を以て、侵すべからざるものとするの點に在るのである。我憲法に付て言へば、其の第二章に臣民の權利義務といふことが規定せられ、臣民の一定の利益、即ち、居住移轉の自由、逮捕監禁審問處罰、住居の安全、信書の秘密、所有權の不可侵、信教の自由、言論著作印行集會結社の自由の如きは、法律を以て規定するに非ざれば其の制限を爲すことが出來ぬとなつて居る。而して其の法律といふのは、議會の協賛を經た法律といふ特別な意味を持つて居るのである。其の三は議會制度である。法律の制定、豫算の成立に關する協賛は、民選の議會に於て之を爲すといふのである。此の三箇の思想は、人民が國家乃至官吏に對し、最早受働的のものでなく、自己の獨立なる地位を有し、且之を主張し得るものなることを明かにしたのである。

第四は、刑法に於ける應報刑主義と罪刑法定主義とである。應報刑主義とは、刑罰を以て犯罪に對する應報なりとするのである。刑罰は、善因に善果あり、惡因に惡果ありとの原則に基きて科せられるものとするのである。又罪刑法定主義とは、如何なる行爲を以て犯罪と爲し、之に如何なる刑罰を科するかといふことを以て、常に豫め法律に定められてあらねばならぬとする主義で、舊刑法第二條に所謂「法律に正條なきものは何等の所爲と雖も之を罰することを得ず」である。さて、斯の如く刑罰を以て道德上の應報なりとする思想は、警察國時代の刑法に於ては明瞭でない。警察國時代に於ては、一方に於ては刑罰の合理的基礎如何といふことを哲學的に考へるやうなこともなかつたのであるが、又他方に於ては、國家、國王乃至官吏は自己の統一を謀り勢力を維持するが爲めに、苛酷な刑

罰を科するに躊躇しなかつたのである。中世の刑法を今日の刑法に比べて見ると、一體に刑罰の峻烈であつたこと、殊に死刑を科する場合が非常に多かつたこと、又死刑の種類が多かつたこと、殘酷な死刑の執行方法がいろ〳〵あつたことなどは、例を擧げて特に玆に說明するまでもないことである。加之、法律が多く秘密であつたといふ關係やら、例の民は依らしむべし知らしむ可からずの原則やらで、裁判官は所謂權力階級の便宜の爲めに適宜裁判をしたと思はれることが多かつたのである。又刑事訴訟の手續に於て拷問が屢適用されたといふことは、東西共に其の轍を一にして居るので、被告人たる個人の利益を顧慮するといふやうな考は極めて薄かつた。然るに歐洲に於ては十七八世紀の哲學と共に刑罰の合理的基礎といふことが研究され、犯罪は自由意思の主體たる人間が、理性の要求に反して爲したる所のものであるから、玆に刑事責任を生ずる。其の責任に對し應報として刑罰を科するのである。故に權力階級が自己の便宜のために濫りに刑罰を科するのは不都合であるといふことになり、同時に罪刑法定主義が明かにされることになつた。初めて罪刑法定主義を法律の上に明かにしたのは一七八九年の佛國大革命に於ける人權宣言である。即ち、其の當時の憲法とされた人權宣言の第八條には、之が明白に規定され、「將來何人も犯罪に先立ちて制定公布せられ且適法に適用せられたる法律に依るに非ざれば處罰せらるることなし」といふことになり、それからして各國の刑法に此の主義が明文を以て揭げられることになつた。吾舊刑法第二條の事は先に述べた。維新後と云つても、舊刑法（明治十五年から實施された）までは此の思想は明白でなかつたので、現に新律綱領には不應爲律といふことがあつたのである。即ち「凡律令に正條なしと雖も情理に於て爲すを得應からざるの事を爲す者は笞三十事理重き者は杖七十」といふことが規定されて居たのである。我邦の現行刑法には、罪刑法定主義の明文がない。併し、憲法第二十三條に「日本臣民は法律に依るに非ずして逮捕監禁審問處罰を受くる

ことなし」とあるから、刑法には特に明文を置く必要がないとされたのであるといふことになつて居る。

四

近世に於ける個人の覺醒といふことは、之を法律の上から見ると、右の如く四箇の點に於て特に著しく現はれて居るのである。さて、個人の覺醒といふことが、何故に近世の社會に與つたかといふことに付ては、特に予輩が說明するまでもないことである。第一は、近世に於ける經濟の發達である。第二は近世に於ける學問の勃興である。經濟の發達は、近世の社會をして農業時代から商業時代に進ましめた。學問の勃興は、民衆をして舊來の基督教文明以外に文明のあることを知らしめた、斯樣にして、封建時代の諸侯の下に、王權時代の國王の下に、殆ど奴隷視されて驅使された民衆は、自ら覺醒し、自己の獨立なる人格、自主的な地位を悟ることになつたのである。

近世文明が個人の覺醒といふことに起因してゐる關係からして、近世の法律現象は甚しく個人主義的のものであつたといふことが著しく感ぜられるのである。法治國の思想に於ては、個人が國家に對して權利を有すといふことが其の骨子になつて居る。法律を以て常に公示せらる可きものとすることは、個人が法律上不意打を受けることがないといふことを根本として居る。立憲制といふことも結局は個人の權利自由の尊重といふことに歸着するのであるし、刑罰の應報主義非刑法定主義といふことも、所詮は個人の庇護といふことを主眼とするものたるに外ならないのである。

近世の法律組織が個人主義を基本としたことに付ては、更に他の一例を擧げることが出來る。それは民法が特に重要視されたといふことである。民法はいふまでもなく、個人相互の法律關係を定めるものである。個人を中心としたものである。而して「ナポレオン」法典（民法は特に民法に重きを置き、其のコード・シヴィル（民法典）は法律中第一の法律なりとせられ、以て、第一に制定されたのであつた。佛國の民法には前加編とい

ふものがある。之は我邦の法例といふ法律に該當するもので、種々の法律全體に亘つての規定である。從て、それは獨り民法にのみ關係するものでないのであるから、之を民法の劈頭に置くことは論理上當を得て居らぬ。それで我邦では法例といふ特別の法律を以て之を規定することにしたのであるが、學者は佛國民法を說くに方り、其の前加編と稱せらるゝものが論理上體裁を爲して居らぬことを非難するのである。併し、之は「ナポレオン」乃至當時の一般の思想から謂へば、必ずしも咎むべきことではないのである。民法を以て法律中第一の法律とするといふのであつて、之は諸種の法典の中で順位上第一に在るべきものである。その民法の前加編として劈頭に各種の法律全體に亘る規定を爲すといふことは論理上決して不當とはいへないので、否、寧ろ斯くあらねばならないものと見られるのである。之は近世の法律組織が個人主義を基本として居るといふことを考へて見ると、容易に氷解し得られるのである。

法律の權利思想、法律の行爲本位論といふものは、正しく此の個人主義の結果である。個人の人格、個人の地位を主張するからには、個人を權利の主體として之に一定の利益を主張することを認めることにし、明白に行爲として外部に現はれたるものに因るの外、責任問題を生じないといふことにせねばならぬ。今日から見ると、權利思想や行爲本位論は道義的でないといふことが云はれるのであるけれども、吾人は此の思想、此の原則が、近世劈頭に於て中世の暴虐なる政治から個人を救濟する所以のものであつたことを回想せねばならぬ。此の意味に於て、此の思想、此の原則は、偉大なる道義的意義を包含して居るので、其の當時に於ては正に吾人の理性の要求する所、所謂無上命令の命ずる所であつたのである。獨逸の法學者「イエリング」は彼の有名な權利爭鬪論を書いて、吾人は吾人の權利のために自己の主張を維持し、權利の侵害に對しては飽迄も爭はねばならぬとし、それは吾人が吾人自身の人格に對する義務なりとしたのであつた。「イ

エリング」は其の書物に於て、其の確信のいかに鋭きかを示して、人若し其の所說に反對を試みんか、其の人は必ずや自己の愚を世に曝露するに過ぎざらんといふ意味のことを書いた。又「カント」の語たる「人既に自ら昆蟲となり果てたらん日には脚下に蹂躙せらるるとも怨むべき道理がない」といふことや、又「他人の脚下に自己の權利を抛つ者は又自己に對する義務を破るものである」といふことを主張したのであつた。「イエリング」の此の學說は廣く世の是認する所となり、又、其の書は幾度か版を重ねた上、諸國の語にも飜譯された。我邦に於ても此の書は廣く讀まれて居る所であるし、又其の和譯は予輩が知れる所では二種も行はれて居るのである。吾人は從來の法律思想が、其の時代の爲めには、重大なる道義的意義を有するものであつたことを考へねばならぬ。

五

併しながら、此の思想は最早や今日では維持することが出來ぬ。法律は權利本位からして新なる他の本位に變らねばならぬことになつた。それは時勢が變化したからである。丁度、中世から近世にかけて時勢に著しい變化があつて、個人の覺醒といふことがあつたやうに、近世から現代にかけて、十九世紀から二十世紀にかけて、また重要な變化があつて、玆に、新らしい社會現象が起らねばならぬことになつた。而して若し近世の現象を稱して個人の覺醒と呼ぶことが正當であるならば、予輩は現代の現象を稱して社會の覺醒と爲さんと欲する。

新らしい時勢の變遷は之を二箇の方面に別けて考へねばならぬ。第一は列國關係に於ける國民的自覺である。第二は大工業の發達に於ける貧民階級の自覺である。其の一は國際問題で、其他は國內問題である。

國際關係に於ける列國角逐の模樣などは玆處で予輩の述べ立てるべき限りではない。兎に角、十九世紀の經過に於て各國の國民的自覺が甚だしく發達した。或は帝國主義と稱せられ、又此の頃は軍國主義と稱せら

れて居るが、要するに一の國が他の國に對して優越なる地位を維持し又は取得せんとする所の國民的欲求、國民的主張は、發達しつゝある何れの國にも共通にして且蔽ふべからざる事實である。さて、此の事實は疑もなく從來の個人主義とは相背馳する所のものである。個人が個人としていかに繁榮であつても、其の個人と個人との間に楔子が缺けて居ては、其の個人の集團たる國家には何等の力がない譯である。既に個人と個人との間に楔子を打込まねばならぬといふことになれば、最早個人主義は許されないことになる。個人は國家の一員としてのみ其の生存の立場を保つことが出來ることにならねばならぬ。さういふ見地からして見ると、個人の關係を規律する所の民法が法律の基本的なものであるといふやうな思想は之を捨てねばならぬことになるのである。吾人は先づ個人と國家との關係を第一要義とせねばならぬことになるのである。

されば、帝國主義では、個人が國家に對して權利を持つといふやうな思想は之を第二次に置いて、先づ個人が如何に國家に寄與せねばならぬかといふことを考へねばならぬことになる。個人が國家に寄與する所あらんとするには、個人は其の爲し得る全力を國家に對して盡さねばならぬことになる。徵兵然り、納稅然り、全國皆國家のために産業を爲し、國家のために警察を爲さねばならぬことになる。斯く國家は個人に對し、其の全力を盡すべきをことを要求することが出來ねばならぬとすると、又他方に於て國家は其の個人に對し其の全力を盡して寄與貢獻を爲し得べき機會を與へねばならぬことになる。國家が法律を以て個人に權利を認むるといふのは、個人が國家に對して自己の勝手氣儘を主張し得るために然るのではない。個人をして自由に發展せしめ、自由に活動せしめ、自由に其の力を盡さしめるためである。現代の帝國主義の下に於ては個人の權利は、個人が國家に對する義務を盡す爲めに與へられて居る所のものであると解せねばならぬことになるのである。

更に轉じて國內關係に於ける大工業の影響を考へて

見たい。蓋、社會上の階級鬪爭は殆んど如何なる社會にも免れないものである。羅馬の古い歴史には貴族と平民との爭のことが誌されて居る。歐洲の封建の歴史には地主たる大名と小作人との爭のことを見ることが出來る。一七八九年の佛國大革命は市民階級が權力階級に對して加へたる大打擊であつたのである。さて、此の佛國大革命は、市民階級と權力階級との墻壁を打破して、所謂「平等（エガリテ）」を社會の上に實現せしめたと信じたのであつたが、十九世紀の經過に於ける經濟狀態は、自然科學と其の應用との發達につれて非常な變化を受けた。大工業の發達は市民階級の外に貧民階級といふものを生ぜしめたのである。現代に於て市民階級と貧民階級との爭、其の一方の富と其の他方の數との爭は、或意味に於ては、歴史上未だ曾て見ざりし所の大きな階級爭鬪となるといふことになつて居るのである。——所謂社會問題である。

固より現在の社會制度を根本的に覆へして、新たに理想的な團體を組立てんとするの過激な思想は排斥すべきものであると思ふ。併しながら、大工業の發達に基き日に日に貧富の懸隔が甚だしくなりつゝある以上、吾人は貧民階級の不平と要求とに耳を傾けねばならぬものがあることは疑はない。其の不平を聞き、其の要求を正當に容るゝに非ずんば、吾人は新しき意義乃至形態に於て、更に新世紀の佛大革命が爆發するといふことを待ち設けねばならぬ。

所謂社會政策——吾人の思惟する所に於て、此の新しき階級爭鬪を解決すべき唯一の實行的方法たる社會政策は、茲に於て如何なる基本礎石の上に構成されねばならぬかの問題を生ずるのである。富裕階級が其の富に對する所有權を主張し、貧民階級が其の人格に基く生存權を主張する間は此の問題は到底解決の付くものではない。從て、社會政策は兩者の權利の單純なる妥協互讓を基礎とするものではいけない。全く新しい思想の上に成立せねばならぬ。此の新しき思想を一派の學者は社會協働論 Solidarité sociale と稱して居る社會を組織する各個人の協働によりて成立し維持され

て行くものであるから、各個人の關係は連帶的である。各個人は社會に對して先づ一人前の働きをなし、而して其の社會から一人前の利益を享受して行かねばならぬといふのである。先づ義務を認め、然るのちに權利を認むるのである。富者は其の富に因る權利を主張する前に、又は勞働者は其の人格に因る權利を主張する前に、其の富なり人格なりを社會の共同利益の爲めに提供せねばならぬ。富者には其の富を利用する義務がある。勞働者にはその人格を發現する義務がある。富は個人の私慾のために使用せらるべきものではない。富は社會の爲めに利用せらるゝことに因りて更に社會に對して一種の權利を持つのである。丁度勞働者は懶惰であつてはならぬ、而して其の勞働は社會の爲めに利用せらるゝから茲に社會に對して一種の權利を生ずるやうに――換言すれば、其の富者の權利は、其の富が社會の爲めに更に利用せられねばならぬといふ權利である。丁度、其の勞働者の權利は、其の勞働が社會の爲めに更に働き得るといふ權利であるやうに。

六

右樣の次第からして十九世紀の末尾から二十世紀へかけて社會の制度は大きな變遷があつたのである。而して其の變遷には二つの種類がある。

其の一は從來の法律組織には嘗て見ることの出來なかつた新たな立法が澤山出來たことである。所謂勞働保護に對する新法律即ち所謂社會的立法が夫れである。今將に實施されんとする工場法は其の最も著しきものゝ一つである。簡易保險法も亦それに加へて見ねばならぬ。其の他種々の保險法やら年金法やら、いろいろの制度があるので、是等の諸種の社會的立法は、既に歐洲に於ては餘程發達して居るのである。勞働者の保護は最早單純なる恩惠的施設の問題ではなくて、立派な法律的制度である。權利として勞働者に一定の主張を許す所のものとなつてゐるのである。併し、予輩が茲に論ぜんとするのは此の問題ではない。

其の二、即ち予期が茲に論ぜんとする所のものは從來の法律組織が大に變更を受けねばならぬことになつたことである。此の中にも自ら二つの區別がある。一は法律其者が變更を受けるやうになつたことで、他は法律の運用が自ら變更を受けるけうになつたことである。此の兩者は明白には區別の出來ぬことであるけれども、自ら其の間に差異があるやうに思ふのである。

法律其者が變更を受けた例としては、行政法の範圍に於ける助長行政の擴大といふことがそれである。個人の權利自由に重きを置いた時代、即ち十九世紀の初に於ては、國家は出來るだけ個人の活働に干渉しないことにせねばならないとされた。それで行政事務は殆んど只警察に過ぎないとされた。警察といふのは、社會の安寧秩序を維持するといふのに過ぎないのであるから、言はゞ消極的のものである。所謂助長行政といふことが今日の如く廣く經營せられ、積極的に國家が社會の幸福の爲めに活働するといふことは、比較的に新しい事なのである。殊に近頃の現象として、國家は國家として權力を以て助長行政を經營する外に、又個人と全く同一の資格に於て事業を經營するのである。社會全體の福利に關することで、大企業や獨占的の事業やは、國家自ら經營することが少くないことになつたのである。我邦の鐵道は其の最も著しい例である。斯樣なことは五十年百年前に比して大きな變遷と謂はねばならぬ。

又工業所有權や鑛業權などの規定に注目すべきものがある。それは此等の權利が權利にして、同時に義務たることである。例へば鑛業法第四十條には「鑛業權者正當の理由なくして登錄の日より一箇年內に事業に着手せず、若くは一箇年以上休業したるとき、又は施業案に依らずして採掘を爲したるときは農商務大臣は鑛業權を取消すことを得」とあるし、又特許法第四十七條には「正當の理由なくして特許權發生後三年以上其の發明を帝國內に於て適當に實施せず又は三年以上其の實施を中止したる場合に於ては特許局長は利害關係人の請求に依り又は職權を以て其の特許を取消すこ

とを得」といふことになつてゐる。元來工業所有權や鑛業權の類は所有權のやうなもので、一種の所有權と云つて差支へないものである。而してそれが權利である以上はそれを行使すると否とは權利者の勝手でなければならぬ。權利といふことは權利者が其の權利の一定の範圍内に於て如何なることにても爲し得るといふことを意味するもので、又同時に其の權利を行使しないことも其の權利者の勝手たることを意味するものである。然るに工業所有權や鑛業權は權利でありながら之を行使せさるときは其の權利が取消されるので、換言すれば、行使せねばならぬ權利であるといふことになつてゐるのである。之は、工業所有權や鑛業權が公益的意義を有するものであるといふ關係から、固より當然な規定ではあるが、既に權利と稱しながら之に行使の義務ありとすること、即ち行使の義務ある權利といふことは、矛盾した思想を含んで居るものといふことが出來ると思ふ。少くとも斯の如き權利は純粹なる權利でないので、即ち予輩の解する所では、斯の如き思想は權利思想が義務思想に轉化しつゝあるものと見ることが出來るのである。

之に對して所有權は純粹に個人的なるものとされて居た。憲法第二十七條にも「日本臣民は其の所有權を侵さるゝことなし」とあつて、所有權不可侵の原則は餘程重要視されて居た。併しながら何が故に、所有權が認められて居るかといふ點を考へて見ると、それに關する思想が餘程變つて來た。即ち、今日では舊來の個人主義が大分變更を受けねばならぬことになつて、公益上所有權が種々の制限を受けねばならぬことが多くなつて來たのである。公用徴收とか徴發とかいふ特別の場合でなくとも、所有權は種々の制限を受けねばならぬ。今日では最早自己の所有物であるから勝手に處分しても宜い、自己の土地であるから如何なる工作物を建築しても差支へないといふことは謂はれなくなつた。所有權は漸次公益上の一の制度といふことになりかけてゐるのである。

さて右は從來の法律制度に於て、法律其者が變更

受けつゝあるもの、例であるが、此の外に從來の法律が今日なほそのまゝで（少くとも大體に於てそのまゝで）ありながら、其の規定が、運用上、新しき精神に依りて新しき解釋を受けつゝあることを注意せねばならぬ。それは公の秩序善良の風俗といふ觀念が法律の適用の上に及ぼして居る影響である。法律の明文がどんな風に出來て居ても、公の秩序善良の風俗といふ觀念の適用として、當然場合に依つては一定の制限を受け、或は一定の補充を加へられねばならぬことになつて來たのである。固より新らしい法律で、公の秩序、善良の風俗といふことの適用を明にして、特別の明文を設けてゐる場合がないのではないけれども、其の少數なる明文に依つて指示されて居る根本的思想が、法律運用の全體の上に著しい影響を與へてゐるのである。

七

第一に、公の秩序、善良の風俗といふ思想からして大きな影響を受けるものは、契約自由の原則である。契約の自由といふことは「ナポレオン」民法々典の基本となつて居る大原則である。之は近世に於ける個人の覺醒が齎らした大原則である。「ナポレオン」民法々典は一八〇四年に制定されたのであつたが、それが、其の後、諸國に於ける近世法典の模範になつたのである。我民法に於ても、規定の形式から論ずれば、契約は自由なものとなつて居る。只例外として、民法第九十條に「公の秩序又は善良の風俗に反する事項を目的とする法律行爲は無效とす」と規定してあるのである。併しながら、今日では大に此の例外を重んずるのである。若し之を單に例外的規定として考へれば、當事者の法律關係は、原則として其の契約に依て定まるものである、其の意思に依て定まるものであるといふことになる。併し、予輩は、民法第九十條を以て、例外規定でないと考へて見たいと思ふのである。一般の契約は、それが單に契約、即ち當事者の意思の表示であるが故に有效なものであるとは考へないのである。個人間の一般關係は、其の當事者自身の發意に依て之

原則の一の適用であるといふことになるのである。之を以て例外的規定なりとすると、其の適用を出來るだけ狹くするといふのが一般のことになる。法律解釋の格言として、「例外法は狹く解釋せよ」といふことがある。予輩は、論理上精確な立場からすれば、此の格言は不當なものである。例外法と雖も、其の例外の趣旨は十分貫ぬけるやうに解釋運用せねばならぬので、特に之を狹く解釋せねばならぬといふ筋合のものとは思はぬのであるが、法律解釋に於ける心理作用から論ずれば、例外法が兎角狹く解釋されることは疑ないのである。されば、民法第九十條を例外法として解釋するか、又は、原則の適用であるとして理解するかは、實

を定めることが、公益と卽ち公の秩序を計り善良の風俗を維持するのに最も適當であるからである。されば、當事者の意思を尊重することに依て、却て公の秩序、善良の風俗が害せられる場合に於ては、其の意思は之を尊重すべきものでないことになるのである。從て、民法第九十條の規定は、例外的の規定ではない、

際上影響の少なからぬことゝ考へるのである。我邦の裁判所に於ては民法第九十條の適用をした例が甚だ少ないのであるが、歐洲の判例には、それが澤山ある。而して之に依て、公益と契約との調整を爲すことが出來るのである。工場法には、契約の自由に制限を加へ、假令當事者に於て、承諾した場合と雖も、少年や婦女を使用してはならぬとか、又一定の時間以上勞働者を働かせてはならぬとかいふが如き規定があるが、此等の明文ある場合以外に於ても、民法第九十條が適當に運用されるならば、公益上の目的が達せられる譯である。娼妓稼業の契約などは、此の適用を受けねばならぬものである。婦女子が任意に娼妓稼業を爲すことは、今日の程度では、違法の行爲でない、併しながら、娼妓稼業を契約上の義務とすることは許されない。從て、所謂雇主に於ては、娼妓の所謂自由廢業を不法なる行爲とすることは出來ないのである。外國の判例では、賣淫を爲すの場所とする目的を以て家屋の賃貸借をした場合は、其の賃貸は無效である。賭博の

資金と爲す目的を以て金錢を貸借した場合に於ては、其の貸借は無效であるといふやうなことがある。勞働者に過大の負擔を負はしめるやうな雇傭契約も同樣に無效である。我邦の判例では、藝妓稼業の契約に於て、債務者をして如何なる事情あるも契約期間は解約を爲すの餘地なからしむるやうな法律行爲は無效であるとされて居る。

第二に、法律行爲の解釋といふことに付て考へて見たい、甲乙兩者が契約をしたといふ場合に、其の契約の條項が如何なる意味のものであるかといふことに付て爭を生ずることがある。其の場合には、其の契約を如何なる標準に依て解釋すべきかといふことが問題となるのである。佛蘭西民法第一一五六條に於ては、之が規定されて、契約の解釋に方りては、當事者の意思が實際如何であつたかを探求し、必しも其の文言に執着することを要しないとしてある。之は明かに、法律關係の基本として當事者の意思に重を置くとの思想に出でたものである。之に對し獨逸民法第一一五七條に於ては、契約の解釋は、誠實 Treu und Glauben を基礎として爲すべきものであるといふことになつて居る。誠實を基礎とするといふことは、實際に於て當事者がどう考へたかといふことに重きを置くのではなくして、社會の通念から論じて（獨逸民法の同條には mit Rücksicht auf die Verkehrssitte といふことが書いてある）、其の契約を誠實に解釋すると、どういふ意味になるかに依て定めやうといふのである。或學者が之を說明して、契約は當事者が之を欲したるに因りて正當なりとされるのでなく、正當なるが故に當事者が之を欲したるものと解するのであると謂つてゐる。我民法に於ては契約の解釋に關する規定がないのであるが、予輩は、無論、獨逸民法の規定するが如き原則に依らねばならぬものと考へる。

法律行爲の解釋といふことに關聯して茲に借地契約のことを少し許り考へて見たい。地主と借地人との衝突といふ問題が大都會に起つて居る。之は大きな社會問題の一である。それは、建物を建築するために土地

を賃借する、而して其の賃借期間が二年とか三年とか極めて短いことになつて居る。そこで地主は其の期間滿了に際し地代の値上げをする。其の値上げが法外に甚だしいといふので借地人が承諾せぬ。さうすると地主の方で賃貸借期間滿了を理由として土地の明渡しを請求するのである。それが爭になつて、屡裁判所の問題になるのである。予輩の考ふる所では、之は二重の意義に於て大きな社會問題である。第一にいふまでもなく地主が借地人を壓迫するといふ意味に於てさうである。地主が土地の價格の自然增加を理由として地代を無暗に上げて行くのである。土地の價格の自然增加には、寧ろ借地人の土地利用といふことが與つて力あつても、地主の方には何等寄與した所があるのではない。それにも拘らず、地主が其の自然增價を理由とするは公平の原則に適合して居るとは思はれない。又第二に、若し「値上げが厭なら土地を明渡せ」といふ地主の要求を常に正當なものとするならば、一度建築されたる家屋が二年三年にして取拂はねばならぬことになる。よしそれが普通の木造である場合に於ても、家屋をさう屡取拂つたり建てたりすることは、社會なり國家なりの立場から見て、果して適當な事とされ得るであらうか。實は家屋の建築といふことが非常に必要であるので、家屋を建築する者、即ち借地人の方が弱者の地位に立つのである。此の弱者の地位を無視するといふことは家屋の建築を無視することになる。家屋の建築を無視することは延て都會の繁榮を無視することになると思ふ、斯樣な二重の意義に於て之は社會問題であるのであるが、予輩は、其の借地契約なる法律行爲を解釋するに方りて、公の秩序善良の風俗といふ標準を以てしたいと思ふ。それは先づ家屋建築といふことを並べて考へて見る。單純な形式論理からいへば、借地の目的と、二年なり三年なりの短期々間といふことと此の兩者は決して矛盾した思想でない。併し、現代の思想を以てすれば此の兩者は到底兩立しない。家屋を二年三年で改築するといふことは出來ないことである、少くとも許されないことである。そこで或一定の

土地が賃借された場合に於て、その上に家屋を建築することが其の土地の利用として適當なことであるかどうかを考へねばならぬと思ふ。土地は土地としての社會上の作用を營まねばならぬ。而して其の土地の上に家屋を建築することが土地として適當に社會上の作用を營ましめることになるならば、土地の此の利用は之を保護せねばならぬ。從て吾人の立場から其の土地の賃貸借契約を解釋すると、二年三年といふ短期の約款は、公の秩序善良の風俗の上から、土地の賃貸借其の者と兩立せざるものと謂はねばならぬことになるのである。借地人は適當な地代を支拂ふの義務がある。併し無暗に立除きを要求される筋合のものではないと思ふのである。借地問題は今日の所ではまだ解決されて居ない所で、之に關する法律案なども議會へ提出されたることがあるし、一部の人士に於ても熱心に研究して居る所である。或程度までは建物保護法（明治四十二年法律第四十號）などで保護されて居るが、まだ十分でない。不正なる借地人に對して相當なる制裁を加へることは固より當然のことであるが、社會問題として一般的に考へるときは、判例の現在の程度は吾人を滿足せしむるまでに發達して居らぬと思ふ。

第三に權利の濫用といふことを考へて見たい。右の借地問題に關聯して言つて見ると、地主は內實は借地代の値上げを唯一の目的とし、只借地人を威嚇するが爲めに土地の明渡しを請求するのである。固より借地期間を三年とすれば、其の期間滿了の時に於て地主は土地の明渡しを請求する權利を有することになるであらう。併し、斯樣なのは果して權利の正當な行使といふことが出來るかどうかと問題になるのである。

權利の行使が一定の程度を超えると濫用になる不法なる行爲になるといふ思想は新らしい思想である。個人主義、自由思想の從來の見解に於ては、權利者は權利を行使するに付て、自由であるのである。其の權利を如何に行使するかに付て制限を受ける譯のものでないのである。然るに權利の行使が一定の程度を超えることに因て、それが濫用となるといふことになつたの

である。蓋、權利を以て公益の爲めに認められたものであるとするならば、權利の行使は權利が認められた趣旨の範圍内に於てのみ適法であるとせねばならぬ、故に此の範圍を超えたものは之を權利の行使として保護する譯にゆかないことになるのである。

獨逸民法は此の問題に關して二つの明文を設けた。其の第二二六條に依れば、權利は他人を害するの目的を以て行使さるべきでないといふことになつて居る。又其の第八二六條に依れば、善良の風俗に反した行爲に因り、故意に他人に損害を生ぜしめた者は、損害賠償の義務を負ふといふことになつて居る。瑞西民法にも、其の第二條に、「各人は其の權利の行使、義務の履行に於て誠實なるべし、權利の明白なる濫用は法律の保護を受くることなし」といふ規定がある。佛蘭西民法にも我民法にも、斯の如き特別な規定はないのであるが、之は特に明文を待つまでもないことである。否、獨逸民法が、善良の風俗に反する行爲の爲めに因るの賠償義務を、單に故意に出でたる場合に限り、瑞西民法が、權利の濫用を以て、其の明白なる場合に於てのみ法律の保護を受けざるものとするのは、不十分である。權利の行使が公の秩序、善良の風俗に反する場合に於ては、それは最早權利の適法なる行使でないのであるから、當然不法行爲である。適當の理由なくして、無暗に高い家を建てる、深い穴を掘る、大きな音響を出す、甚しい臭氣を發散せしめるといふことがあれば、其の行爲は當然不法である。以て土地の所有權や、營業の自由の範圍に屬するものとすることが出來ぬのである。故に、それに因て他人に損害を生ぜしめると、賠償の義務がある。佛蘭西の判例では、之に關して興味ある多くの事例を見ることが出來る。

予輩は更に進んで權利の不行使も亦不法行爲たり得るものなりと考へる。從來の考では、權利は之を行使することを得るものであると同時に、之を行使せざることを得るものであるとされた。併し、法律が權利を認めた趣旨は、社會の各個人をして、其の權利に依り、社會的生存の爲めに十分に活動せしめるに在りと

すれば、權利の不行使は一の懶惰として不法行爲とされねばならぬと思ふ。工業所有權や鑛業權に付て、其の不行使に付き制裁のあることは既に述べたる所であるが、殖民地法では、土地の所有權に制限を置いて、土地所有者に開墾の義務を認め、一定の期間内に於て開墾を爲さないときは、其の所有權を剝奪するといふやうなことがある。土地家屋の通常の所有權に付ても、其の物の不當なる放置、即ち權利の不行使に因て、他人に損害を生ずれば、所有者は損害賠償の責任を免れないものと考へる。

第四として、原因的責任 Kausalhaftung のことを述べて見たい。原因的責任といふ語は、過失的責任といふのに對するものである。從來の考では、他人に對して損害賠償の責に任ずるのは、其の損害を引起した本人に過失あることを要すといふとになつて居る。我民法第七〇九條には、「故意又は過失に因りて他人の權利を侵害したる者は之れに因りて生じたる損害を賠償する責に任ず」となつて居る。其の故意と過失とを併せて、法律學上廣義の過失とする。此の過失を以て法律上の責任の根據とすることが、今日一般に認められて居る所の原則である。然る所、大工業が發達した結果、此の原則では解決することの出來ない問題が發生して來た。先づ吾人の注意を促したのは大工業に於ける勞働の災厄 Accident du travail である。大きな動力は當然危險を伴つて居る。其の動力が現在の科學の指示するやうに管理されても、爆發とか破裂とかいふ事故を生ずることは免れない、若し從來の理論に從つて、此の問題に臨むならば、其の事故に因る勞働者の死傷は、法律上所謂不可抗力に因る損害であるから、企業家資本家の側に於ては、それに對し損害を賠償するの義務を負ふことがないのである。併し、事業本來の性質が既に危險を伴つて居るものであるとするならば、其の危險より生じたる損害は、企業家資本家の當然負擔せねばならぬ所であると思ふ。斯樣なことからして、從來の過失的責任論に對し、新たに原因的責任論、即ち一定の損害に原因を與へた者は、當然、其の

損害を賠償せねばならぬといふ理論が唱導されて來て、獨り勞働災厄の場合の外、餘程廣く適用されることになつた。此の點に付ては佛國の判例の變遷が餘程興味あるものとなつて居る、佛國民法第一三八二條には「他人に損害を生ぜしめたる行爲は、其の損害を引起したる過失の本人をして、損害賠償の義務を負はしむるものとす」と規定されて居るのであるが、此の過失 Faute といふ語は、從來は故意又は不注意といふ主觀的の意味に解せられて來たのであるが、今日では、一定の客觀的のものに解せられるやうになつて來た。同一の規定が、昔は過失的責任論を示すものとされたのが、解釋上今日では、原因的責任論にも援用されることになつて居るのである。危險を伴ふ事業を經營することは、事業其自體が適法で、許されたものであつても、其の事業から生じた損害に付ては、矢張責任があるといふのである。事業の執行たる行爲其者は許されながら、其の行爲の結果たる損害に付て賠償責任があるといふことは、從來は、理解し得られなかつた所である。行爲が權利の行使ならば、其の行爲に因りて賠償責任が發生するといふ理はない。從來はさう考へた。併し、斯樣な考は、今日では餘りに個人主義、權利本位の思想である。公の秩序、善良の風俗といふ思想からは許されざる所である。我民法の解釋として此の新原則が如何なる程度まで主張し得られるかは問題である。鑛業法第八十條には「鑛夫自己の重大なる過失に因らずして業務上負傷し、疾病に罹り又は死亡したるときは鑛業權者は。命令の定むる所に從ひ鑛夫又は其の遺族を扶助すべし」との規定があり、又工場法第十五條にも同樣の規定があつて、今日では企業者に扶助義務を認むるに止まり、賠償義務を認むるまでに至つて居らぬやうである。併し佛國の判例が、古い規定の下に、其の解釋として新らしい思想を運用して行く所を見ると、我判例の進歩といふことも、亦待ち設け得らるゝことゝ思ふ。鑛毒事件などは此の點からも論究することの出來る問題である。先頃大阪の或會社の工場の煙突から出る煙が、附近の畑の農作物を害す

るといふので、農家側から賠償請求の訴が提起されたことがあつた。裁判所は農家側に同情のある判決を下したことがあつたやうに記憶して居る。其の他自働車といふ新現象が矢張同様の問題を生ずる。自働車に因りて他人に損害を生ぜしめた者は、當然賠償責任があるといふことにならねばならぬのである。現にさういふ趣旨の立法例が外國にはある。判例の發達を待つて居るのは待ち遠いから、特種の問題に付ては、新法律を以て、解決の方法が認められることになるであらう。さうすると、其の新立法の精神が古い法律の解釋に影響して、立法的に解決せられなかつた他の諸種の問題が判例上同様に解決せられることになり、斯の如くにして新主義が確立するといふことになるのである。

○○第五として行爲の違法性といふことを説きたい。形式上權利の行使でも、公の秩序善良の風俗に反するときには、これが不法行爲となるといふことは、權利の濫用として曩に説明した。それと反對に、形式上不法なる行爲でも、それが公の秩序善良の風俗に反せざるときは不法行爲にならぬといふのが、茲に説かんとする趣旨である。即ち一定の行爲が不法行爲とされるが爲めには、他人の權利利益を侵害するとの事實の外に、其の行爲が公の秩序、善良の風俗に反して居らねばならぬのである。行爲が斯く公の秩序、善良の風俗に反するといふことを、行爲の違法性 Rechtswidrigkeit と稱するのである。民法に付ては此の點に付て直接の明文がない。併し、明文がなくとも、之は當然のこととされて居る。刑法に於ては或程度まで明文がある。刑法第三十五條に「法令又は正當の業務に因り爲したる行爲は之を罰せず」とあるのがそれである。人を殺すのも、戰爭で敵兵を仆すのは固より犯罪にならぬ。それは刑法の第三十五條に依るのである。執達吏が法律上財産を差押へるのは窃盜にはならぬ、これも刑法第三十五條に依るのである。そんな明瞭な場合はいふまでもないとしても、一體に公の秩序、善良の風俗に反せずして爲せば、犯罪にならぬのである。どう

せ世の中の事には、お互に利害の衝突することが多いので、此方の一定の行爲は彼方の利益を害することになる。併し其の場合に、此方の行爲が公の秩序、善良の風俗に反して居なければ犯罪にはならないのである。家宅侵入とか秘密漏洩罪には「故なく人の邸宅に入りたるもの」「故なく人の秘密を漏洩したるもの」といふ規定がある。その「故なく」といふのは、行爲の違法性を指した語である。刑法には其の他「不法に」「濫りに」などの副詞を用ゐて居ることがあるが、其の趣旨は公の秩序善良の風俗に反して他人の權利利益を害したとき、茲に初めて犯罪が成立するといふことを明かにしたものである。從來は、此の行爲の違法性といふことが明白でなかつたのであるが、今日は明かに理解されることになつた。それで刑法の規定と社會上の思想とが、解釋適用上よほどよく聯絡を持つことになつて來た。刑法に關する此の理論は民法にも不法行爲や債務不履行に關して適用されるのである。

第六として刑法の人格主義といふことを説きたい。

刑法の人格主義といふのは事實主義といふことに反對する說である。從來は刑罰を以て犯罪行爲に對する制裁であるとしたのである。犯罪行爲をしたといふことが刑罰を科する理由になつて居たのである。之に對して人格主義といふのは刑罰を以て犯罪を爲すに至つた人格に科するものとするのである。舊刑法に於ては殺人は必ず重く死刑又は無期刑で、竊盜には累犯と雖もそれまでではない、懲役五年以下、重くとも七年まででよいといふことになつてゐる。之は事實主義に依つたものである。所が新刑法では殺人と雖も重きは死刑より輕きは懲役三年、之に酌量減輕をすると一年六ヶ月、さうすると之に刑の執行猶豫が出來るといふことになつた。竊盜は重き場合には懲役十年累犯になると二十年に至ることを得ることになつた。何故に刑法の主義が事實主義から人格主義に遷つたかといふことは、直接に公の秩序、善良の風俗の思想と交渉する所はないやうであるが、或觀察上からすると、矢張り同一の基本思想から出てゐるものといふことが出來るの

である。

人格主義といふことは二箇の原理を豫定してゐるのである。第一は刑罰は犯人に對し社會を防衛するものであるといふことである。從來の見解に於ては、犯罪は犯人の自由意思から出たもので、之に刑罰を科するは、善因に善果あり、惡因に惡果ありとの原理に基く應報であるとされた。併しながら、吾人に採つては、この應報といふことが只それ自體のみでジアスチフアイされるものと認むることが出來ないのである。吾人は刑罰を以て犯人に對し社會を防衛するものであると解するので、初めてジアスチフアイされると考へられるのである。故に、累犯者の如きに對しては、犯罪事實が極めて輕微であつても、社會防衛の立場から云へば重く處罰する必要があるのである。又第二に刑罰は犯人に必要なる限度に止めねばならぬ。固より刑罰の作用としては、刑罰の一般豫防作用、即ち刑罰が一般社會を威嚇する作用を尊重せねばならぬが、犯人に必要なる限度を越えて、唯單に社會を威嚇するだけの爲めに刑罰を科することは、不當に個人の利益を無視するものであると思ふのである。予輩は、刑罰の一般豫防的作用を度外視するものではない。併し其の作用は刑を犯人に必要な限度に止めて置いても尚十分に之を實現し得らるることと思ふ。刑の執行猶豫を濫用するのは不都合であるといふ論者がある。濫用は何事によらず固より惡いが、犯罪の事實が大きい場合に執行猶豫をするのは刑の一般豫防的作用を無視するものであるといふ論には服することが出來ない。刑の一般的豫防作用は刑を科するに其の理由を明にすることに依つて最も良く其の目的を達することが出來る。惡性の强い犯人に重い刑を科すると同時に、執行猶豫を言渡すべき犯人にそれを言渡すことは、若し其の理由が明かにされるならば、社會をして刑法を輕んぜしむるものとはならないと思ふのである。而して、吾人は、別に刑事政策を發達せしめて犯罪豫防の策を更に徹底せしむべきであると思ふのである。

刑法の此の新主義は一方に於て社會を尊重すると同

時に、他方に於て個人を尊重するものである。社會防衛の必要を其の最大限度に於て充たすと同時に、個人利益の剝奪を其の最小限度に止むるものである。而して此の思想は正しく民法に於て『公の秩序善良の風俗』といふことが基本原則とされる所に符合するのである。民法も、一方に於てはどこまでも個人の活動を自由ならしめんとすると同時に、他方に於て又、社會の共同生活をどこまでも保持せんとするものである。予輩は之を個人と社會との調和と呼んでゐるのであるが、之が予輩の見る所を以てすれば現代法律の理想とされてゐる所であるのである。

明治十三年に制定せられ、明治十五年から實施された舊刑法は、疑もなく舊主義の下に制定されたものであつたが、新主義が理解されるに從つて、それが此の新主義の下に運用されたのであつた。而して我邦は斷然刑法を改正することにして明治四十年に新刑法を制定し、翌年一月一日から之を實施することにした。佛蘭西伊太利では新主義に依て單行法を制定して其の刑法を部分的に改造して居る。獨逸、墺太利、瑞西に於ては刑法法典其者を改正することにして、其の草案が公にされてゐる。

八

法律の解釋といふことを論じて見たい。法律の適用に付ては、多くの場合に於て、其の規定の解釋を要するのである。一見以て何人にも疑義を容るゝ餘地のないと思はれる規定でも、其の實際の適用に當つて見ると、解釋を要することが多いのである。然らば、法律の解釋とは如何なることであるか。通常は、立法者の意思を探究することであるとされて居る、いかにも、法律は、立法者の命令といふ形式の下に出來て居るものであるから、立法者の意思を探究するといふことが法律の解釋であるとするのも一理あることである。併しながら、此の見解には二箇の不都合がある。第一には其の所謂立法者とは誰をいふのであるか。議會を通過したる法律を想像して見る。之は政府が其の案を提

出したのであるとすると、政府の部内に其の起案者やら審議者やらがある。次に議會が之を協贊する。其の議會には上下兩院があつて、其の各院に數百の議員がある。然る後樞密院へ諮詢があるといふことになり、結局御裁可を經て公布されるのである。さうすると、何人の意思が所謂立法者の意思であるとなるか。若し、憲法上其の法律の制定に與つた總ての人の意思がそれであるとしたならば、其の總ての人の共同の意思といふものはいかにして之を明にするか。一體其の前に、如何にして其の共同の意思といふものがあると云ひ得らるゝかゞ問題になるのである。法律其者を以て立法者の意思なりとすることは、勿論、意味の取り方に依りては正しい見解であるに相違ないが、其の一定の法律に依りて表示せられたる立法者の意思は、其の法律其者以外にはないのである。其の法律を離れて立法者の意思なく、又其の立法者の意思は、其の法律に示さるゝ限度に於てのみ成立して居るのである。故に其の法律を解釋するに方りて、其の法律以外の又は以上の立法者の意思に遡るといふことは不當な見解であると思ふ。第二に一歩を讓りて、立法者の意思といふものが法律を離れて成立するものであるとしても、其の立法者の意思は只其の法律の限度に於てのみ表示されて居るものである。吾人は法治國の制度の下に生息して居る。吾人を羈束する法律は、法律として表示されて居る範圍內に於てのみ法律としての效力を生ずべきである。法律以外の或ものが、立法者の意志たるの故を以て、法律と同一の效力を有するといふことはあり得ない。此の意味に於ても立法者の意思を探究するといふことは意味を爲さないと考へる。

されば、法律の解釋といふことは、矢張、單に法律其者の意味を明らかにするといふことに過ぎない。そこで法律其者の意味は如何にして定まるかといふ問題が起る。一體、人の意思の表示は、其の表示に用ゐられた言語其自體だけで、完全に意味を爲すものでない。其の表示と相並んで、其の當事者間に豫定されて居る多くの思想があるので、其の豫定されたる思想を

大前提とし、其の表示を小前提とし、茲に其の結論たる一定の意味が定まつて來るのである。法律も亦然り。或時代の或國の法律を了解するには、其の國の其の時代の一般思想を理解する必要があるのである。それを理解することに依て、一見、吾人には非論理的と見える法律が極めて、論理的なものになる。其の吾人に非論理的に見えるといふのは、吾人の思想を以て其の法律に臨むからである。そこで問題が起る。吾人の有する吾人の法律は如何なる思想を前提として之を解釋すべきであるか。

斯樣に考へて來ると、法律の本質を了解するに二樣の見方があることを考へねばならぬ。其の一は、法律を歷史的產物として見ることである。其の二は、之を社會的規範として見ることである。

謂ふまでもなく、法律は歷史的產物である。或一定の法律は、歷史的に發達し來り、更に發達して行かんとする社會的思想の、其の一定の時期に於ける表現である。羅馬には羅馬の法律がある。德川時代には德川時代の法律がある。十九世紀には十九世紀の法律がある。故に、其の法律の眞意義は、之を歷史的產物として觀察することに依りて之を明かにすることが出來る。併し、それは、法律を客觀的に見ることである。法律を他人の法律として見ることである。或一定の法律が事實上しかく〳〵の意味を有して居るといふことを明かにするに過ぎない。一定の法律が事實上しかく〳〵であつたといふことは、其の法律が吾人に對し、規範として或權威を持つことの根據にはならない。

謂ふまでもなく、吾人の有する法律は、吾人の社會的規範である。吾人は、共同生存を營むに付て、此の規範に依り。行爲の羈束を受けるのである。故に法律は、事實上しかく〳〵の意味を有するものであるといふだけでは意味を爲さないので、別に、理論上、それが正當とされるものでなければならぬ。ジヤスチフアイすることの出來ない法律は、法律として吾人に何等の權威を有せぬのである。法律を解釋するといふことは、一定の法律の內容がジヤスチフアイされつゝ確定

されることでなければならぬ。予輩は之を法律の主観的観察と名付けたいと思ふ。そは、吾人の現在の法律を、吾人自身の立場から理解するの意である。

現行法は之を同時に以上の二箇の方面から観察することが出來るのである。現行法は過去の或時期――それは佛蘭西民法の如く百幾年前の過去であることもあらうし、又、獨逸民法や我民法のやうに二十年位の比較的近い過去であることもあらうが――に於て出來たものである。之を歴史的の產物として考へるときは、其の内容は、其の制定當時の一般思想に依て理解されることになるのである。併し、現行法は、同時に現在に於ける吾人の社會的規範である。現在の共同生活を規律せねばならぬ所のものであるのである。さうすれば、其の内容は、其の法律を適用する現在の一般思想に依て、之をジャスチファイし、之を確定せねばならぬのである。

予輩は、玆に於て、法律の具有する一種特有の性質を認めねばならぬ。自然界を支配する因果の法則と、精神界を支配すべき善惡の規範とは、根本的に差異するものとするのが一般の見解である。因果律は意思の作用の必至的なることを認むることに因て初めて成立するもので、規範は意思の自由なることを基本とすることに因て初めて理解されるものである。從て、自然界の或因果律がどうであるとも、それは吾人に對する規範のどうでなければならぬかの問題と沒交渉であると云ふことが出來るのであるが、現行法の解釋といふことは、此の沒交渉なるべき二箇の事項、論理上全く相背馳する所の二箇の事實が全く合一されねばならぬことを豫言するのである。法律は一なり。而も一の事實としては、因果律に支配せられて居る。而して同時に一の規範としては、吾人は其の合理的基礎を明かにせねばならぬのである。

法則(因果律)と規範との差異を說く人は多い。併し、其の交涉を論ずる人は少ない。法則と規範とは、如何に區別されねばならぬものであつても、それが法律に於ては合一して居るのである。同一物なる法律が

同時に因果律に支配せられ、且、規範的意義を有するものと解するに非ざれば、法律の本體は之を會得することが困難であるし、而して之が實に法律の具有する一種特有の性質なのである。

法律を解釋することは、即ち、論理上背馳する此の二箇の事實を、實際上調和することである。それは、歷史上の成果たる法律を現在の爲めにジャスチファイすることである。事實はそのまゝでは當然ジャスチファイされぬ。併し、ジャスチファイされるものは、法律解釋の當局者たる法曹のファンタジーであつてはならぬ。法律が事實にして且規範たる所に、法律解釋が學問として特別な意義を有し得ることになるのである。

換言すれば、法律の解釋は、過去の思想の下に成立した法律を、現在の思想の下に運用することである。吾人は、法律が如何なる思想の下に成立したかを其の歷史的研究に因りて理解すると同時に、法律を、現在の爲めに、現在の思想の下に運用せねばならぬ。

所謂自由法運動の奧義は玆に在るのである、自由法運動 Freirechtsbewegung といふのは、法律の解釋を、從來の論理的定型から離して、自由な立場に置かんとする運動である。從來の法律解釋では、法律の意義は一定せるものと爲され、其の適用は單に演繹論理の應用に因て之を爲し得るものとされた。それで、法律學は、言はば算術の例題を取扱ふやうなものに過ぎないとされたのである。併しながら、吾人は法律の意義が常に豫め一定されて居るといふことに異論を挾むのである。法律の意義が一定されて居るといふことは、制定當時の社會思想から見て、それが一定されて居るといふに過ぎない。若し法律の背景——若し背景と謂ふことが許されるならば——を現代の社會思想に移すならば、法律の意義——其の實際的運用は自ら變更を受けねばならぬのである。法律の背景を擇ぶに方りて、傳來的な思想から解放されねばならぬといふのが、自由法運動の自由を叫ぶ所である。

惡法も亦法である。法律の意義を以て動搖するもの

とすることは、法律の法律たる所以を無視するものである。所謂自由運動なるものは、社會に於ける法律的確實 Sécurité juridique, Rechtssicherheit を蹂躙するものであるといふ議論がある。予輩は二點に別つて之に答へることにしたい、第一に、吾人は法律の意義の變遷（適切に謂はゞ進化）を認める。併し、法律其者の動搖を認めるのではない。法律は嚴として法律である。法律が在存する以上は、吾人は之を尊重せねばならぬ。只、既に述べたるが如く、法律は單に其自體だけで完全に意義を爲すものでない。背景の變遷が法律の運用に影響を及ぼし、而も同時に法律其者は尊重されねばならぬとのことによつて、社會上の進化が常に平穩に圓滿に運行することになるのである　第二に、法律的確實といふことは一定の事項が法律上常に一定の解決を見るといふことに依て實現されるものではない。或時代の或事情に於て一定の關係が甲の解決を見るべきでも、他の時代の他の事情に於ては同一の關係が乙の解決を見ることに依て初めて公平が維持されることがある。法律的確實は同一の現象が同一に解決されるといふ杓子定規を意味するものでなくして、法律上の解決が常に公平の結果に到達するといふことに在らねばならぬ。此の意義に於て、又論者の法律的確實論には與することが出來ない。

斯の如くにして、百幾年前の佛蘭西民法は、今日尚社會規範として存續して居るのである。佛蘭西民法の背景は個人主義權利思想であつて、今日の背景は公の秩序、善良の風俗である。併し、此の百幾年に代ふるに二十年を以てすれば、獨逸民法や我民法の運命がまさしくそれである。國家社會の生存としては、二十數年、固より永しといふべからず。然れども、十九世紀末から二十世紀にかけての社會の變動の、何ぞ爾く甚だしきや。自由法運動といふことは獨逸に於ても爭はれてゐるのである。吾人は我邦に於て大に爭ひつゝあるのである。

九

以上論じ來つた所を約言すると次のやうなことになる。

一　權利といふ思想は近世文明の大きな賜であつて、吾人は之を尊重せねばならぬ。併し權利を尊重するといふことは權利の主體たる個人の完全なる生存を期することである。併し、個人の生存は個人が社會的生活を爲すことに依て初めて之を實現し得るのものであるから、權利の尊重は社會の成立存續といふことによりて、自ら制限を受けねばならぬ。之を更に他の方面から見ると、社會は個人の生存が圓滿なることに依りて圓滿に成立するのである。個人の圓滿なる生存は個人をして其の權利を主張し得しむることに依て、之を實現せしめ得るのである。故に、社會的統一の目的は個人の權利の尊重といふことから始まらねばならぬ。さういふことを獨逸の「イエリング」に謂はしむれば、權利を主張することはこれ個人の義務なりといふことになるし、佛蘭西の「コムト」に謂はしむれば、義務を盡すことが各個人の權利であるといふことになるのである。

二　自由といふ思想は近世文明の重要な産物である。併しながら十九世紀當初の意義に於ける自由と二十世紀に於ける自由とは其の意義が違ふ。十九世紀當初に於ては、人間は元來平等なりといふが如き思想、個人の權利は正義に依て定めねばならぬといふが如き思想、人間には天賦人權と稱すべきものがあるといふが如き思想――而して其等の思想は總てアプリオリな思想であるが、――を其の基として自由といふ思想が定められた。併し、吾人は社會を以て平等な人間の集合とは見ないで、多數の個人の有機的な結合と見るのである。個人の權利は正義に依て定めらるべきであると考へるよりも、寧ろ個人の利益が實際的に公平に定められねばならぬと考へるのである。人間には天賦人權があると思ふよりも、寧ろ、各人の權利は各自の發展の程度に從ひ、社會よりの要求及び社會に對する要求を適當に調節すべき點によつて分配せられねばならぬと思ふのである。斯の如き差異の生ずるのは、昔は

個人のみを見て社會を見なかつたのに對し、今日では、個人は社會を待つて初めて圓滿な生存を遂げるとが出來るといふことを認めたからである。されば新しい意義に於ける自由は、昔のそれと意味を異にするといふ可きではなくして、昔のそれを更に徹底せしめたものといふべきである。昔の夫れが單にアプリオリな思想に基いて居るのに對し、今のは事態をポジチーヴに觀察して、それに昔の思想を適用したものである。此の意味に於て、新らしい意味に於ける自由は、昔の意味に於ける夫れに對して進化である。換言すれば十九世紀の法律が二十世紀の法律に進化したのは、文明のノルマルな發展であるといふことが謂へる。

三、文明の進歩に於て社會の活動は本能的から自覺的に移るといふことが謂はれる。無意識的から意識的に移るといふことが謂はれる。個人の覺醒といふことは近世に於ける自覺運動の第一歩である。自己の權利を主張することは、之を自己が單に權力階級の庇護の下に生活するのであると考へた時代に比して見ると、明に意識的な活動である。併しながら權利を主張するといふ思想では、自己を自覺し意識することはあつたけれども、自己の周圍を意識するまでに至らなかつた。自己の周圍も亦自己と同じく其の自己を認識したる別の自己であると考へ、自己は其の多數の自己の間に介在して居るものなることを考へたときには、自己を其の他の自己との關係に於て更に深刻に意識する必要があるのである。吾人は權利を主張することを以て一の義務とせねばならぬといふこと、吾人は義務を主張する權利を有するといふことは、自己が自己自體に於て意識せられたのみならず、自己と他の自己との關係に於て自他を更に深く意識したといふことになるので、自己の意識が更に一歩を進めたものといふことになるのである。自己を自己のみに付いて意識し理解するとき、之を個人の解放と稱することが出來る。自己を他の自己との關係に於て會得し、自覺するとき、之を社會の統一といふことが出來る。統一運動は解放運動の當然の結果である。解放のない統一は徹底したる

統一でなく、統一のない解放は眞の解放でない。

四　文明の進歩に從て、社會の活動はます〳〵分化することになる。社會が既に自己を自覺するに至るならば、其の活動は、其の自覺されたるそれ〳〵の目的に從て適應されねばならぬのである。活動が目的に適應することは、活動の能率が高まるといふことである。活動の能率が高まるといふことは、吾人の活動が常に有意義のものになるといふことである。此の意味からして、民事責任と刑事責任との分化は甚だ興味ある現象である。古い法律に於ては、民事責任即ち損害賠償と刑事責任即ち刑罰との間に區別がなかつた。十九世紀當初の法律に於ては、之が區別されては居るけれども、共に過失（廣義に於ける）を本位とするものであつた。併し、十九世紀の經過に於て、而して二十世紀に至つて、民事責任には原因的責任論が發達して、所謂客觀説が漸次勢力を得ることになつた。損害といふ客觀的な事實に重を置き、損害を引起した者の過失といふやうな主觀的な或ものに重を置かないのである。之は民事の關係に於て公平な結果を得る所以である。刑事責任に於ては、惡性論が起つて、所謂主觀説が廣く認められることになつた。犯人の犯罪性といふ主觀的な事柄を基本として論じ、損害の大小には重きを置かないのである。之は刑事の關係に於て、刑罰の目的を最もよく達する方法なのである。之に由りて民事責任の制度は民事責任の目的を達し、刑事責任の制度は刑事責任の趣旨を全うするのである。吾人は斯の如く了解することに依りて、吾人の活動の新思想を見出すことが出來ると考へる。

五　法律が、斯の如き新傾向に於て進化しつゝあることが、最近の現象である。斯の如き新理想に向て發展せしめざるべからずとすることが、最近の主張である。法律自身の語を以て謂はば『公の秩序、善良の風俗』といふことが其の進化の標的で、其の發展の理想であると謂ひ得るのである。稱して個人と社會との調和と爲すも不可なし。又稱して權利と義務との合一と爲すも不可なし。或は之を以て法律の道德化 Ethisie-

ung des Rechts と稱することも出來やう。吾人は、斯の如き點に新らしい意義に於ける正義の觀念を看取し、個人を社會に同化せしめんとする此の現象を稱して法律の社會化の稱するのである。(完)

濠洲論

若宮卯之助

一

日本對西洋、日本人對白人の關係は、何時も日本及び日本人が受太刀として、西洋及び白人が侵擊者として始まつたものでありましたが、此の點に於て唯だ一つの例外を成すものは、濠洲對日本の關係であります。濠洲對日本の關係は、その昔十七世紀の頃、今の新南威斯州なる農事協會から、只だ一度、日本の皇室へ其の特產羊毛を献上に及んだことがあると云ふ濠洲側の記錄を除外すれば、全く日本の積極的態度に依つて始まつたものと謂はねばならず、日本は物質的にも精神的にも、濠洲の壓迫を感じたことも無ければ、日本人は濠洲白人の野心に對して不安の夢を見たことも無いのであります。

三十年前兼松濠洲翁が、天下に率先して日濠貿易を開始した許りの時代に於ては、其の貿易總額は僅かに三十萬圓に止まつて居りましたが、今や百倍に近いて將に三千萬圓を算へんとするのであります。其の進步の速度は如何にも驚くべく喜ぶべきが如くに見えますが、之を濠洲貿易の總額、十六億圓に比較しましたなら、殆ど比較にならぬ程の少額となるではありませぬ乎。勿論、歐洲戰爭に特殊の刺戟を得た日濠間の貿易は、今や前代未聞の勢を以て進むで居ます。若し

其の指導を誤らず、其の努力を怠らなかつたならば、此の勢は戰後に於ても、或程度まで之を持續するは、餘りに六ケしくも無さゝうです。濠洲有志家數百名は、昨年二月シドニー市公會堂に於ける會合にて、一種の對獨政策として濠洲人の實行すべき、數項の條件を議決しましたが、其の中には、特に注意すべき左の一項があります。『我等は第一に自國品又は英國品を使用すべく、次ぎには同盟國の商品を購入すべく、最後に中立國商品を購入すべく、敵國商品は斷じて使用すべからず。』今や日本商人は日英同盟の關係に依り、此の議決の示すが如く濠洲貿易に於て、中立國商人に優つた權利を持つて居るのであります。唯だ此の一事を見ましても、日本人が今日まで罪惡的に閑却して來た濠洲が日本に對して如何に重要の意味を有するかゞ、明かにならうと思ひます。然し濠洲が一個の論題として日本國民の興味を喚起しまするのは、單に此の貿易上の關係に止まるのでは無いのであります。

二

大陸と言へば最小の大陸で、島とすれば世界最大の島である濠洲は地球の十七分の一を占めて、東西二千四百哩、南北約二千哩、全歐洲の四分の三に匹敵して、アラスカを除外した米國より大きいのです。日本を之に比較すれば、方に其の二十分の一に相當します。日本の中央には、日本を縱斷する一連の山脈があつて、其の耕作すべき反別を甚だしく減少して居るが如く、濠洲の中央には一團の砂漠が横つて、其の開發利用の障礙を成して居るのであります。然しながら濠洲は噴水井其他の科學的方法を應用しましたならば、四億の人口を養うて猶ほ餘りあるの國となれることは、人の多きに惱まずして、却て其の少きに苦むで居る濠洲自らの善く識つて居る通りであります。此の地球陸土の十七分の一を占めて、世界の何れの大陸からも懸け離れて大洋上に屹然と控へて居る濠洲が、其の豐富なる天產と地勢とに依つて、行く〳〵は自ら一個の新文明の中心となり、政治的、經濟的、學藝的に南洋の權威となるべきことは、宜しく合衆國の已に米大陸に雄視

するが如く、日本が將に極東に光輝を放たんとするが如く、其の當然の使命となるべきであるに拘らず、動もすれば自ら進んで退嬰卑屈を求むるが如き徴候を示すのは、如何なる理由でせう乎。

濠洲が地球陸土の十七分の一を占めて居りながら其の人口が世界總人口の三百分の一にも足らないと云ふ土地と人間との不釣合は、殊に濠洲白人の不安の原因となるのであります。何故と申しますれば、濠洲白人が其の人種上の偏見から、所謂有色人種として其の入國を堅く禁じて居りまする者の總數が、世界人類の半數、即ち八億に達して居りまして、此の八億の所謂有色人種は、其の人口僅かに五百萬の避妊的濠洲の警戒者となり、羨望者となり、圍繞者となつて居るが爲であります。

三

濠洲が大いに發展すべくして發展せず、盛に雄飛すべくして雄飛するを得ずに居りまする根本の原因は、何人も御存じの通り、白人の增上慢に在りと謂はねばならず、一種の先取特權を振りまわして白人以外の一切の人種を排斥し、所謂白人濠洲を建設しやうとする彼等の迷信が即ち濠洲文明の停滯不振の病原であります。此廣い世の中にて、何者が身の程知らずと謂つても、所謂白人濠洲の鼓吹者の如く身の程を知らぬ者は恐くは有りますまい。否、其白人濠洲も、事實上に於ては英人濠洲の積りで其の所謂『好ましからぬ移民』の內へ南歐よりの移民をも數へて之を或度まで排斥して居るのであります。昔しは藩閥政治家と云ふ變な種族が日本にも居りまして、日本の政權を永遠に其手に收めて行かうとしたのでありますから、單に之を大仕掛にしたゞけの白人濠洲否英人濠洲の背理と非常識とを、左も珍しさうに辯難するのも或はどうかと思はれますが、日本の藩閥政治の已に過去の一夢に了れると同樣に、所謂白人濠洲の未來も、亦恐くは單に人間の愚かさと淺ましさの一證となるだけであらうと思ひます。

所謂白人濠洲の根本原理が、色と慾との二筋道であると聞かされたなら、諸君は或は不思議な思を爲され

るかも知れませぬが、此處に色と申すのは、皮膚の色のことで、慾と言ふのは勞働賃銀のことを指すのであります。此の皮膚の色の道からの排斥は、我が開國當時に突發しました彼の「降るあめりかに袖は濡らさじ」と歌つた遊女の意氣と同樣に原始的感情に本づいて居るのでありますが。勞働賃銀の高きを欲する所から、成るべく同類の數を制限しやうとする利己一遍の慾の道からの排斥は、歐洲西部の製造工場に於て講究されたストライキ的哲理から來て居るのです。

此の色と慾との二筋道の排斥は、其の性質に於て、此の如く非文明なものでありますが、此の非文明の勢力が何故なれば、自ら世界最高の文明を誇つて居る英人の子孫に依つて、所謂白人濠洲の如き發的結晶物となつたのでありましやう乎。

四

世界の最も豐饒なる部分に移住した濠洲白人は、或意味より申しますれば、最も不幸なる人民の一種であります。彼等は不幸にして其の出來心を制裁すべき歷史的、保守的勢力を有して居りませず、且つ其の性格を釣合よく訓練すべき適當なる刺戟をも缺いて居ります。彼等は或意味に於て、其の移住の當初から本國の寵兒でありました。北米移民の失敗に懲りた英國が、植民地を以て母國の利用物の如く看做して居た古き政策を放棄した後に開けた濠洲の事でありますから、濠洲人は母國との軋轢を經驗して居りませず、此の軋轢の爲に、無益の煩勞を免れたのは、いゝやうなものゝ、而も濠洲人は此の軋轢の副産物であるべき志氣の砥勵と云ふ事をも經驗することが不可能でありました。

米大陸の植民地は其の植民時代に於て歐洲各國の植民的競爭が熾でありましたから、其の競爭に如何なる惡弊が伴つて居りましたにせよ、其の植民者は各々之に依つて其の性格を鍛錬し自ら制するの美德をも養ふことが出來ました。其の古さは飽くまで古きにせよ、新しき人に對しては全く一種の迷信であるにせよ、米大陸の植民は、必ずしも單一なる利己的動機に依つてのみ行はれ無かつた處に、一種の性格の閃きが見えます。

而して濠洲移民には是等の何物も無くて、其の有るものは、歐洲西部の煤烟的都會に發達した一種の社會的理論、即ち一種の勞働哲學だけであります。此の勞働哲學は、世界の舊邦たる歐洲の如く、先例の力強く、故格の勢の張れる、階級的社會に於ては、其の社會的疾病に對する一種の適藥であるかも知れませぬが、濠洲の如き原始的社會に對しては殆ど何の用をも爲さず、啻に用を爲さぬ許りで無く、或は往々にして不測の災を持ち來すこともあるのであります。勞働者が其の結束の力に依つて其の社會上の地位を高めよと云ふ理論は、其の全社會の各員を殆ど悉く勞働者として居る國土に於て用を爲すの理由が無いではありませぬ乎。勞働者全盛の濠洲が、其の未來をも思はず、其の發展の徑路をも考へずに、外國移民の排斥を以て、其の安寧と幸福と、自由と、進歩との、唯一保障の道と誤認するに至つたのは、人口稠密なる歐洲舊邦に於ける都會工場の經驗と、其の稀薄なる、歷史無き草創の社會と必要とを混同した結果であらうと存じます。

五

我等は序を以て社會の階級制度にも尚ほ一種の利益の存することを陳べやうと思ひます。階級制度も印度のカーストの如く餘りに固定し過ぎたものは、固より之を論外に措きますが、此の制度は一般に人間の精力を一定の通路に於て之を使用するの結果となりましたが、壓制は固より壓制に相違はありませぬけれど、人をして其の精力を知らず識らず一事に集中させるに至つた効果は、人類文明の歷史に於て、恐くは容易に其の比類を見出すことの出來ない大事件の一つであつたらうと存じます。即ち人をして一種の技藝に秀づるの機會を得せしめたものであります。日本が今日世界に誇つて居りまする古代職人の藝術品が悉く此の階級制度の庇護の下に、若くは壓迫の下に、成就されたものであることだけを考へて見ましても、此の點は十分にに諒解が出來るでしやう。

此の階級制度は、理論上、今日の文明國に於て全く廢つて居りますけれど、其の惰性が今も尚ほ社會の有

力なる要素となつて居る事は、少しく觀察力を有する人の、悉く御承知の所と存じます。即ち今日の文明國には此の階級的、歷史的壓力が控えて居りますので、靑年客氣の徒の俄注文に應ずるが如き急激の變化は、努めて之を避けて居りますと共に、社會の大多數の追隨し得ざるが如き大變革は決して突起することの出來ない狀態があるのであります。然るに所謂白人濠洲には此の歷史的、階級的、保守的勢力が悉く缺けて居ます。それですから濠洲の進步は、守る一脚と動く一脚との相互的進步で無くて、動もすれば餘りに急に餘りに速く進まむとして却て困頓しやうとするの勢が見えるのです。所謂白人濠洲の失敗、即ち避姙的濠洲の失敗、勞働者全權的濠洲の失敗、村落生活忌避の濠洲の失敗、有色人種一掃的排斥の濠洲の失敗は、其の何よりの證據ではありませぬ乎。恐くは何人でも國際間の新しい國としての濠洲の失敗を思ふ者は、自然に、此の過渡的日本に於ける所謂新しい女達が其の無先例の途を辿らんとして續々失敗しつゝあるの事實を思ひ出さずには居れますまい。

六

今の濠洲人は、單なる偶發事件に因つて占領するを得た其の領土を擧げて、一部の英人の墳墓と爲し、其の個人主義其の國民暴利主義、其の色慾二道の純英人主義をも、此處に葬る積りでありましやう乎。今の濠洲人は其の色道に依つて他の有色人種の入國を拒む許りで無く更に其の慾道に依つて己れの種族の繁殖をも拒いで居りますのは、果して其の本氣の沙汰でありましやう乎。濠洲に於ける新マルサス主義の勢力、即ち避姙法の流行は、其の愛國的官憲をして已に悲歌慷慨、絕望的哀音を出さしめて居るのであります。濠洲の人口生產率は、其の富の開發、文化の發達に反比して益々減退の一方許り、人口一千に付漸く十二と云ふが如き生產率は、必ず新進氣銳とならねばならぬ一切の外的條件を具備して居る濠洲の人口狀態として、受取ることが出來ましやう乎。新西蘭の社會的立法は、一部の人々からは模範的として稱讃せられて居るのも事實

なに、實際上新西蘭が其の點に於て、非常の大踏歩を實現したのも亦誤り無き所ではありまするが、其の新西蘭と誰も人口狀態は濠洲と異る所が無く、其の模範的新マルサス主義の試驗所たるに於て何等の軒輊は無いのであります。此處數年間は新西蘭に生產の增加を見ましたのは、一見すれば、人口狀態の改善のやうに受取れますが、よく〳〵其の原因を探ぐりまするると、これ全く一時の偶發事で、單に新來の移民の花嫁が、新マルサス宗の信者とならぬ前の、初回の出產に於て一時的增加を示したゞけであることは直ちに分明します。古人は衣食足りて禮節を知ると申しました。倉廩滿ちて而して新マルサスの避姙法を奉ずるに至る者は、白人濠洲の禁止令を提げて、平氣で日本人を排斥する文明の野蠻人等であります。

七

白人濠洲は避姙の濠洲であると同時に、癌腫の增加と發狂者の增加との濠洲であることを知るときに、諸君は如何なる考を起されます乎。天が羊の國、牛の國小麥の國、黃金の國の住民に滿腹を與ふると共に不治の病と發狂とを與へて居りますのは、これ實に自然の皮肉ではありますまい乎。癌腫は之を省きますが、發狂者の增加は、直ちにこれ白人濠洲の破產宣告のやうにも受取れます。

濠洲官憲の發表しました統計の圖表を見まするると、出產率減退の線と發狂者增加の線とが、互に反對の方向に走り、或點に於て交叉して居ります。此の二つの間に如何なる關係があるかと云ふ大なる問題は、之を避けますが、其の發狂の根本原因は、濠洲熱帶部に於ける白人の抵抗力の薄弱、即ち一種の風土病と視るのが至當であるやうです。元來、皮膚の色は、黑き程熱帶に對して强きが如く、白き程熱帶に弱いのが、一般の原則であるやうです。歐洲に於ても北部の白人は南部の白人よりも其の色の白さと共に、其の熱帶に對する抵抗力は遙かに南部人に劣つて居ます。同樣に熱帶に對しては白人よりも黃人が强く、黃人よりも黑人が强いのは、到底爭はれない事實であります。されば白

人が熱帶に近くと共に益々其の活力を減殺されて、或は不治の病に罹かり、或は發狂者を出すに至るのは、決して怪むには足りますまい。白人對熱帶の關係が、巳に此の通りであるとすれば、一部の熱帶を控えて居る濠洲に於て、白人濠洲の旗を翻へさすの不條理は殆ど之を自明の理りと稱しても宜しいでしやう。

八

白人濠洲は今や全く勞働者全權の濠洲であると謂はねばならず、濠洲に於ける政治上及び社會上の一切の問題は、一に勞働階級の向背に依つて定まると云ふやうな有樣を呈して居ます。此の勞働者の偉大なる勢力は、如何なる事情の下に成立したかと云へば、世の一切の物價と同樣に、其の供給の不足に伴うて生じた必然の結果であります。總人口五百萬の大半は子女其他他人の扶助を受くべきもので、官廳學校、其他の公職に在る者十五萬と通信運輸に從事する者同じく十五萬と、販賣商業に從事する者約三十萬とを除きますれば、農耕、牧畜、鑛業其他の原始的産業に從事する者五十八萬と、製造工業に從事する者五十六萬とを合せて百十三萬、これが直接生産に從事して居る人の總數となるのであります。而して此の一百萬餘の濠洲勞働者は、今や其の地球陸土の十七分の一に相當する廣大なる領土に於て、其の御意の儘に振舞うて居るのであります。彼等は勞働賃銀の低廉を怖れて移民の制限を要求します。移民の制限は勞力の代價を高むると共に、生産費の騰貴を誘導して、物價の騰貴は其の結果となり、生活費の高上となり、生活費の高上は賃銀增加の要求となり、賃銀增加の要求は製造業に影響して其の一般の不振となり、其の製造業の一般的不振は、外國製造品の要求となるの當然の結果であります。若し濠洲人が自國工業の保護の目的の關稅の障壁を高く築きますると其の結果は循環的に、生活費の增加となり、賃銀增加の要求となり、而して製造業の不振となるに至るのも亦必然の結果であります。現に濠洲の硝子製造會社は、日本製ラムネ壜の競爭に堪へずして、其の肥料會社は同じく日本製の過燐酸肥料の壓迫に堪へずして、此の

特定品に對して關税の引上げを要求して居るやうな始末であります。此の如き傾向は、繼續すべきものでしやう乎、繼續するの力を有するものでしやう乎、繼續して而して濠洲の繁榮を期することの出來るものでしやう乎。白人濠洲の失敗は、此の點に於ても最早一點の疑が無いのであります。

九

勞働者のストライキ的哲理は、勞働者以外の大勢力の熾なる歐洲の舊邦に於てこそ、一種の反對作用として其の社會體の健康を資くるでありましやうが、歷史無き、先例無き、勞働者以外の勢力無き濠洲のやうな社會に於ては、適々國を誤るの結果を導くに至る許りであります。

濠洲勞働者の賃銀的哲理が、濠洲的で無くて寧ろ歐洲的であると同樣に、其の勞働者としての性格も亦歐洲の舊都に於ける製造工場の職人的のものでありまして、原始的濠洲に適應すべき性格では無いのであります。彼等は都會生活の憧憬者であります。彼等は一日も熱鬧せる都の紅塵に浴して一醉を貪らずには暮せ得ない人間であります。彼等は斯くして都會に住むにあらざれば都會の附近に住み、都會との交通の至便を最大の要件として住むのであります。此の理由に於て濠洲の附近に住むにあらざれば海岸に住むで居るのであります。斯くして濠洲內部の資源は、毫も世界人類の用を充たさゞる一種の死物となつて居るのであります。世界の進步は何時まで此の濠洲の罪惡的怠慢を寬容するでしやう乎。白人濠洲の不可能は此の點に於ても亦一點の疑がありますまい。

若し濠洲にして天產に缺乏した、若くは人間の棲息に適せざる不毛の土地か、瘴霧の世界でありましたならば、世界の嫉視と羨望とを免れて、其の罪惡的怠慢と、其の避妊的人口制限と、其の利己的移民排斥との所謂白人濠洲を其儘に持續するは、或は極めて容易の事でありましやうが、濠洲は、白人濠洲の爲には不幸にして世界の寶藏であります。其羊毛は其の質と量とに於て天下一品であり、其の小麥も亦其の質に於て世

界一の名聲を博して居ます。其の他の農産と鑛産とは一々此に說くまでも無く、濠洲が現に五百萬の人口と百萬餘りの直接生産者とを有する許りで尙ほ年額八億圓の輸出力を示して居ると云ふ事實を擧げましたなら、是等の點は、他の一切の點と共に、自ら想像に上るであらうと想像します。此の如き世界の寶藏を、此の如き天下の怠け者の手に委ねて、世界は何時まで無言の行を守るでしやう乎。白人濠洲は失敗である。

十

最後の問題は、國防の問題であります。今日の濠洲が世界の何れから襲はれても、能く自ら守るの力を具へて居らないのは、濠洲自らの自覺であります。今や濠洲は、大英帝國の有難味を痛切に感じて此の對獨戰爭の爲に最善を盡くして居りますが、濠洲は其の自らの防備を恃まずに、單に大英帝國の海軍に依つてのみ其の獨立を保たうとするのは、決して永遠に出來得べき事では無いのであります。其の最後の手段及び最善の手段としては濠洲自らが進むで其の强さを求むるの外は無いのであります。而して其の强さを求むるの第一の方法は、言ふまでも無く、適當なる人口の繁殖を圖り、複雜なる社會的要素を統一して社會の彈力性を增すに在ることは言ふまでも無いのであります。之を具體的に言へば、其の愚昧なる移民制限の政策を放擲して、質の標準に於て、淘汰的に移民を吸收することが、濠洲發達の最大にして最急なる要件と謂はねばなりませず、特に日本は此點に關して特殊の使命を帶びて居るのであります。濠洲に對して其の開放を要求すは、友邦としての日本の義務である。

新東洋趣味

木下杢太郎

新東洋趣味とは實は私の貰つた課題で、私自らが命名したものではない。だから決してさう云ふ標榜を以て或る新しい何事かを提唱しようと云ふのではない。近頃の生活様式の一寸した幾徴を批評しようと云ふまでのことであるが、私の考では新東洋趣味などと云ふよりは寧ろ東洋趣味の復興とか覺醒とか名稱した方が一層適當して居ることゝ思ふのである。東洋趣味といふからには無論西洋趣味に對照させて云ふのであらうが維新以來我々が果してどれほど徹底的に西洋趣味を容れたかと云ふのが、新東洋趣味を云々する前に先づ問題になるのではあるまいかと疑はれる。

衣食住演劇藝術遊技等に大分歐風様式は入つて來て居る。然しこれが趣味と名付くべきほどに入つて來て居るのか。その程度はどの位であるのか、先づ考へて見なければならぬ。

様式の輸入といふ丈の事を以て直ちに趣味を云々したくない。趣味といふ言葉にもつと深みを與へたいのである。

趣味といふ字は上田敏博士の造語であるといふことであるが、英語の Taste また獨逸語の Geschmack を飜譯した最も適切な字である。是れは Interest とは違ふ。インテレストなら唯對象に利害を感じ、之に注意する丈であるが、趣味はもつと深く味ふのである。即ち官能的、生理的又精神的生活――それら生活の萬端また其特殊の一部分の自覺的味樂である。唯著、唯食し唯住み、唯婚姻し、唯勞働し、唯休息するのでなくしてさう云ふ生活の諸相を嚙みしめて味ふのである。畢竟其根本は美き生活の欣求といふ所にあつて、外物の

如何ではない。

が然し趣味の事たる、人間の直接生活が、之を圍む外物と交渉を爲す地點に於て發現するやうに見えるのである。

此處に皿がある。果實を盛り菜肉を盛る道具である、人間であればこそ皿鉢があるのであるが犬猫馬猿のやからには無い。彼等はまだ石器時代を持たない。況んや鐵器時代乃至更に進歩したる工業時代をやで、皿鉢のありやうが無いのである。それ故に彼等は口または掌を以て皿に代へるのである。然しながら私がかう云つたのは眞實ではない。實は人間が其手掌の代りに皿鉢を用ゐるのだと謂ふべきである。そこで陶磁器の趣味と云ふことも結局延長または補足せられたる人間の手を自覺的に味ひ樂しむと云ふことであつて、畢竟人間生活の直接根元に參してゐるものに外ならぬのである。而して單にインテレストと云へば、是等全過程の一部に過ぎないのである。

卽ち知る、我等の外物に對する趣味は、其焦點を人間本體の深奥所に結んで居ることを。而も其焦點を結ぶ人間の意識なるものは、時、場所等を超絶する抽象的絶對的個人ではなくして、歴史と傳説とを有する社會的我である。趣味の問題は個人の生活樣式と離し考ふること能はざると等しく、又民族又國民的自覺との交渉を絶することが出來ないのである。

現代の趣味に對する批評は卽ち現代の生活樣式と並に現代の國民的文化の自覺に對する批評になるのであつて、隨つて又道徳的社會的等の實際的方面との關係をも生じ來るものである。（六月號「新日本」中拙稿「國民的文化自覺とは何ぞや」參考）

○

それでなぜ私は新東洋趣味と云ふ文字を回避しようとするのかと云ふに、何等の新を見出さないからである。

今の世に全く新しい物が出て來ると云ふことは殆どない。昔ならば安南國から流がれ寄つた珍寶は全く新しいものであつたかも知れない。應神天皇の時に始め

て百濟から阿直岐(アチキ)が來たやうな破天荒のことは餘り類がない。東漢孝明帝の時蔡暗が印度から歸つたのも是れほど突然のことではない。日本でも其後司馬達、慧灌、玄理、僧旻、空海、支倉、伊藤博文等の來朝歸朝を迎へた時とて、もう阿直岐來朝の時ほどの不思議ではなかつたのである。

今や東洋に於ては隱くれたる文明世界はない、全く新しい東洋趣味が無垢のまゝで來やう筈がない、で新しいと云ふことは、主として合成(シンテシス)に由つてのみ獨り可能であると稱して不可なるを見ないのである。

何物と何物とを併せ新成するか。不幸にして日本と云ふアルケミストは未だ西洋趣味と舊來の趣味とを合せて、新しい煉金を造つて居ないやうである。恐らくば、その新物を造るほどに深く西洋趣味を容れて居るのではなからうと思ふ。

吾人は日本に於ける西洋趣味輸入の沿革を考へ、其九州の邪敎徒及び支倉六右衛門のことに至る毎に喟然長嘆するを禁ずることが出來ない。古昔の耶蘇敎宣傳に政治的陰翳(諸外國の殖民地政策)の附隨してゐたのは頗る不愉快なことである。が使徒サビエエと其一派並に本邦に於ける歸依者の心事は之を諒としなければならぬ。蓋しサビエエ等は深く歐洲の精神文化に參してゐる學僧であつた。而して布敎の手段として外國語の習得は彼等の義務であつて本邦の語にも通じてゐたから、歐洲の耶蘇敎的精神と歐洲の生活樣式の趣味感情は、幾分は確かに傳達せられたことゝ思ふ。當時の衰へた佛敎と弛緩した道德の間に、彼等は一新生活感情の曙光を持ち來したのに相違ない。然るにそれもあの始末である。

支倉六右衛門に至つては其悲劇的境遇は一層憐むべきものがある。私はこの若き同學の師友と共に仙臺に往き其序に支倉の墓と稱するものを見たが、其荒廢一市民のものに劣つてゐる。之が文藝復興の迹を受けたる盛時の羅馬に使しし、其華美爛熟の文化に親炙した人の紀念であるかと疑はしめるほどのものであつた。奸黠多智の獨眼龍に見拔かれて羅馬に使するほど妙を得

であつたから、其凡庸の徒でなかつたことは推量するに足りる。彼や青春氣鋭の時此文化に置かれたのだから、禮讃とまでは行かなかつたにしろ、歐洲文化なるものゝ全局に對して相當の理解をばしたのに相違ない。羅馬宮庭歡待の記憶未だ去らず、得意滿腔にして故國に歸れば、政府の忌諱に觸れて蟄居するの巳むを得ざるに及び青葉城下の陋屋に起臥す。目に見る所は倭小の商家と蕭條たる荒田のみ。海さへなき土地には彼岸をしのぶべき便りだになく、空しく七本山の雲峯を眺め暮すのみであつた。之を昔年の洋行者僧旻、吉備眞備、等に比して、其逕庭の何ぞ太しきや。

維新以前の西洋趣味輸入は、かくて早くも塞へにせられて、和蘭陀又支那の商人を通じて微かなる漣のうち寄せたばかりである。遠眼鏡、南蠻鐵、多少の火藥織物ぐらゐが、西洋趣味を暗示する位のもので、比較的この方面の代物を漁るに苦勞する我々の眼にも、南蠻時鐘、山田右衛門作が作畫、西川如見先生の著書、朗世寧、沈南蘋の幾分洋風の畫、降つて司馬江漢、亞歐堂等が版畫、忠臣藏演劇の歐風遠見くらゐが、幾分西洋趣味を香はすものに過ぎないのである。

天保十三年には既に市中の招牌より羅馬文字を撤するの布令が出たさうであるが、當時市民の歐洲風物を見るは唯無知蒙昧の驚嘆である、京橋鈴木利兵衛氏所藏する所の諸印畫、また堺屏風、長崎土產(輸入草紙)大倉博物館中の蘭人犬を率くの堆朱、或は今春國民美術協會に陳列せし伊滿里茶碗の蘭人模樣(以上孰れも邦人の洋人を寫せるもの)等を見れば其一般を推すことが出來る。

日本に於ける洋風輸入はそれ故にまづ福澤諭吉氏又明治十五年の洋行歸朝の伊藤博文以來を以て數ふべきである。

日本の文化史は一方から言へば日本洋行史とも留學史とも見做すべきものである。佛教の樹立にせよ、大化革新にせよ、禪道、茶道にせよ、文化上の大流は孰れも洋行歸朝者に負うて居る。維新以後の歐洲的文化輸入の如きも亦此類例から漏れるものではない。

現代に於ける我邦の歐洲文化の狀態は實用的と云ふ性質を以て特徴として居る。今の變つた生活狀態に於て是非必要である位の程度に於て有形的又無形的の歐風生活樣式が行はれて居るのであつて、まだそれが、我々の內心に最も快適の味樂を與へるといふ程ではない。それを與へるとしては(私が後に解說せんとする)或一物が缺けて居るからである。

例へば建築なども明治初年に外國人の建てたものは純粹の洋風である。後に之に倣つて日本人の建てたものも亦殆ど純粹の歐風のものである。さう云ふ建築物が古來の寺塔、橋梁等と相混淆して存する市街は決して統一的の美觀を保ち得るものではない。それにも拘らず多くの場合(建築それ自身にまづい所がないならば)我々はそれを以て不愉快には感じないのである。から云ふ時代交錯(アナクロニズム)の印象が不愉快を惹起しないのは何故であるかと云ふと、それは美といふものが實用性を超絕して考へまた味ふことが出來ないからである。昔高山林次郎が京都人は嵐山にも鐵橋を架けるやうにするだらうと歎じたことがあつたが、それは尤で、嵐山といふやうな、或る趣味を中心とした一地域では、纒つた美的統一を要するのであるが、若し衆議院の中といふやうな所であるならば、だらけた袴羽織の姿よりも洋服の方が適當である。

衣食住の人生重要條件中、住の一事に於ては、其歐風樣式は今の所は、むしろ斯く健全の狀態にあるのである。成程日本橋京橋の大通などの廉い西洋建築は極めて不樣(ぶざま)なものであつて、之を舊風の黑塗土藏、海鼠壁にしたならば、美觀の統一があつて愉快には相違あるまいが、金が餘計掛つて其の割に便利ではないのである。人間の外物に對する趣味なるものは、私が嘗に言つたやうに、人間の手足の延長の使ひ好い、また感じ好いのを喜ぶと云ふ實用主義先づ其根本となつて來るようであつて、必しも傳統的美觀に絕對的價値を置くものでない。

即ち現代の輸入文化の有象無象には、其性質實用的であればあるだけ我々の生活に對して好い感じを與へる

のである。

此事に關してはまだ少し解説を附する必要がある。明治に於て俄に西洋の文物の入つて來つたのは、之を推古朝に佛教が入り、奈良朝に唐風の入つたのとは少しく其趣を異にする。先の時代に於いは文物は其基底の精神的大潮流の象徴として入つたのである。當時入り來りしものは實に印度的或は支那的精神の大潮流であつて、各種文物は其上に浮ぶ異郷樹技、貨物等の破片の如きものであつた。無論維新後の歐風輸入にもこの精神的潮流を缺いては居ない。然し時代が違つてゐるのであつて、此時の精神なるものは物質の奴隷であつた。即ち物質主義的精神であつたので、其關係が異るのである。古渡りの文物は、文物そのものとしてはさして必要のものではない。佛像伽藍唐制の如き、それ自身が直ちに生活の用となるものではない。然るに近時輸入のものは鐵器でも、火藥でも、歐風工學でも兵學でも、また法律書でも醫療器械でも、直ちに日常必須の生活用具となるものばかりであつた。それらの運轉手として必要のものは技師であつて、必しも昔日の如く學僧であり、哲學者であることを要しなかつた。

昔は慧慈、慧灌等の入朝僧又玄理、僧旻等の入唐僧によつて、三論、法相等の諸宗が輸入せられた。而して是等の原理的信念が實に社會改良の根元であつたのである。福澤諭吉伊藤博文等は之に反して哲學者でも僧侶でもない、彼に由て輸入せられたる文化は實に富國强兵社會整理の術であつた。歐洲文化はばらばらに疊んだ屋臺骨として持つて來られたが、決して其生々とした根元精神と共に輸入せられたのではない。尊王攘夷とか自由民權とか云ふやうなことは、征韓論、非征韓論などと同じく、唯それら屋臺骨の材料の名に過ぎなかつた。決して奥底に磅礴する哲學的精神から出たものではない。鹿鳴館裡の洋風耽溺も亦決してそんな根元的精神から出たのでない、一時の建て付けであつたから、やがて取外されたのである、而して西洋精神として入つて來たものは、モオルスに由つて進化論が主なものであつた。中江兆民加藤弘之の如き

實にこの時代の精神の博物館的代表者である。

次に藝術であるが、歐風藝術が眞に我國に輸入せられたるのは、私は黒田淸輝氏の歸朝から之を數へたい。その前の川上時代、フォンタアジ時代、十一會時代などはまだ其前階級に過ぎなかつた。が然し繪畫其他の洋風藝術は、亦全く屋臺骨の一部分而も餘り重要ならざる一部分に過ぎなくして、當時の歐風輸入の根本需要にさして觸れて居るものではなかつた。

豐臣末德川初期の歐洲文化の輸入は之に反して耶蘇敎的精神先づ入つたのである。是が我國に榮えなかつたのは幸とすべきか、不幸とすべきか、私は今その運命の不思議に就て論議を插まうと欲するものではないがもしこの精神が榮えたならば、我國の歐風趣味は、必ずや其もつと深い根元に參してゐるべき筈であつた。

そこで又この比較として思ひ出さるゝのは欽明朝の佛敎渡來のことである。吾人が當時の歷史を讀み、深く印象せらるることは實に佛像のことである。其十三年の（皇紀一千二百十二、西曆五百五十二年）に百濟の國王が金銅の佛像並に經論を献じたのである。稻目が佛像を貰つて之を安置禮拜した。其前應神天皇の朝には王仁は論語と千字文とを献じた。それは問題にはならなかつたが、佛像は問題になつた。

稻目の貰つた佛像は其後投棄せられたから今之を見やうはない、然しどう云ふ佛像であつたらうか。普通推古朝の佛像と云はれるものは小さい金佛で蓮坐に腰かけて居るやうな形が多いやうに思ふ。法隆寺金堂の釋迦三尊は鞍作鳥の作であるから、まづその類のものであつたらう。是等の佛像は今の我々の目にはさして深大の印象を與へぬ。然し少し時代が遲れたものでは藥師等觀音、繪の方では金堂壁畫の諸佛、更に遲れて天平彫刻の諸佛像がある。是等のものを見ると、今の我々とても或る印象を受ける。其印象は甚だ藝術的のものであるが、それに更に何か或一物が混じて居るやうである、而して後にかくの如く大なる佛像を作るに至つたとすれば、最初渡來の佛像とて、また必ずや偉大なる印象を與ふるものに相違なかつたことを推斷

することが出來る。而して彼の稲目及び其一族は先づ佛像の藝術的印象に其感情の移入を促され而して後始めて其の包藏する所の基底精神に參するに至つたのである。(私はこの解釋を以て一番良い解釋と考へる)當時舶來の汪勃たる精神は實に最も完全なる形體的表現を得たのである。當時の佛像は後世のものの如く寺院を飾る道具ではなくして、內に、活精神を滿せる非死の形相であつた。

かかる種類のものを偶像と見做すのは、既に像と共精神とが分離したる後世の思想より見る考へ方で全くプロテスタント以後の事に屬する。昔は西洋に於ても東洋に於ても宗敎的形像と宗敎的精神とはかかる傷ましい分離をなさないで、渾然融合してゐたのである。然るが故に稲目、物部等の爭に非生の佛像が重要な役目を演じたわけである。(是れほど意味深い小道具を何處の劇曲家が能く使ひこなし得ようぞ。歷史は既に往々にして、第一流の戯曲家である。)即ち佛像からして宗敎的方向を抽象することが、不可能であつたやうに其藝術的方向をも、また實行的社會的方向をも分つことが出來なかつた。當時稲目及び其一族は、まづ佛像の藝術的方面より參したのであるが、而も佛像は後世に於けるが如く、單に一藝術品として取扱はるべきものではなかつた。美と實用性とは實に宗敎的意義に由つて全然合一したのである。

次に後世の禪道輸入に關しても同じことが云へるだらうと思ふが、是れは略す。

是れよりして考ふるに、古昔の輸入文化は、其象有ると之れ無きとを問はず、全く相融和せる有機體的關係に於て存して居たのである。之を維新後の輸入文化の單に器械的道具的の性質を帶べると比較すると其間太しい逕庭が存すると謂はねばならぬ。

私の言ふ所が大部岐路へ外れたが、そこで私が緒に解說するのを控へた一物を指示することが出來る。即ち現代に於ける歐洲文化の狀態は唯低級の實用性に止まり、其向心的焦的即ち全精神的(宗敎的、藝術的、道德的)パアスペクティヴを缺いて居るのであると。

部分的の實用があつて根本の大精神がないのである。

即ち近時輸入の歐洲的文化は我々の生活の道具に使用せらるゝばかりである。決して我々の全人間的（民族的）生活が之れに依つて覆されたのではない。敢てタゴオル氏の心配を要しないのである。

それ故に現代日本の輸入文化は其性質が實用的であればあるだけ健全の狀態に在ると稱すべきであると云ふ、前述の結論に達するのである。而してまた實際のところ、今までも今も現にさう云ふ狀態に在るのである。

即ち諄く云ふやうであるが、明治後歐洲から入れた物質的文化の元締めをする思想は進化論又功利主義であつた。この主義の爲めに、舶來文化が自己を實用性に自縛して入つて來たのであつた。別に日本主義と云ふ大精神が實際儼然として存して居たものかどうか分らぬが、兎に角輸入文化は或る主體に使役せられて滿足して居たのである。

然し今後のことは分らぬ。今現に或る變徵が見える。何であるか。輸入文化が漸く使用人の狀態から轉じて主體の位置に立たうと欲する傾向である。

歐洲近代の文化は人間の團體（人類國家等）が或る中間體（科學器械、工業）を使つて自然を征服し、以て自己の活動領域を廣くしようとする努力であつた。が其非常に複雜なオルガニゼエションの爲めに却つて人間が道具となるやうになつた。古昔は外物は人間の延長で、個人としても國家としても、同時に自己の道具としての外物を味樂することが出來た。今や一大人間群（國家）と云ふものは主體であるが、個人としての人間は往々自己を道具にしてしまつたのである。

現代の歐洲文化の惱む所は、今や亦吾人の惱む所となり始めた。そこでかう云ふ疑問が漸く喧しくなつた。

「我々は働いて居る。抑も何の爲めに？」

即ち時に應じ、需めに隨つてばらばらに輸入された文物が複雜になるにつれて、之にパアスペクチイヴを附けようと云ふのが、單に衒學的ではない必須の要求

となつたのである。

明治後半の靑年はそこで明治前半の靑年とは全く別の問題で懊惱した。前半の人は手足の勞に忙はしかつたが心は安じてゐた。後半のものは外見拱手無爲にして內心で煩悶してゐる。

明治の外物輸入には物質先立つて精神が遲れたのである。

で年少のもので割合に日本在來のトラヂシヨンに染着しないものは、或る系統の西洋的精神を無條件に認容することが出來た。夫等の精神はマツクス、スチルナ、ニイチエと云ふやうに系體的のものであつたのもありボオドレエル、ウエルレエヌ等のやうに氣分を主とするものでもあつた。がかう云ふ思想精神は明治前半の靑年(今の老年)から力强く壓迫せられた。彼等は明かに自覺しないが或る國民的の根本精神に參して居、そしてそれを以て輸入文化を支配することが出來ると信じたから、それと別の方角に焦點を有し、使用せらるべき歐洲文化から第二次的に發した精神の爲めに其主體を毀損せらるるを恐れたからである。

が彼等とて、漸く有機體化され始まつた輸入文化が其精神を產出せしめることを拒むことは出來なかつた。そしてそれを調停せしめる爲めに考へたことは**東西兩文明**の調和と云ふことである。

然し恐らくばこの考へは甚だ便宜主義のお坐なりに近きものである。そして嚴密なる考察の試煉に堪へ兼ねるものである。旣に田中王堂氏の如きも、屢この說の缺點を道破されたやうに思ふ。

が然しこの低級妥協の精神が或時代に存しまた現に存するといふことは、有形的の社會現象から之を證明することが出來る。彼の三敎徒會同の如き、亦此顯著なる一例ではないか。昔は行基乃至最澄、空海は本地垂跡の說を立てた。調和も此に至つては寧ろ太だ徹底して居るのである。三敎徒會同は全くの會同で、昔印度のアクバル王が諸宗を打つて一丸としようと欲したほどの大規模のものでもなくまたそれほど專制的のものでもなかつた。

然しこの種の妥協的精神は亦趣味の上にも現はれてゐる。上野精養軒、奈良ホテルの建築、明治神宮の設計圖案のやうに二つのものを混合調和せしめようと欲したが、一樣式にはならなかつた。三越で募集した裾模樣にはポプラ樹に夕鳥が飛ぶやうな圖案もあつた。是等のもののうちで最も流行して既に抜くべくもないやうになつのは蓋し女の廂髮とセル地の袴ぐらゐであらう。また食物に於ても現はれて居る。帝國ホテルで薄茶入のアイスクリイムを拵へたが多くの西洋人は食はなかつたやうである。我々にもさう甘くは感ぜられなかつた。が豚肉のカツレツと云ふやうなものは今や準日本食となつた。

奈良朝では多く支那風を輸入したから、腰掛高卓のやうなものがあつて、樣式は歐風と異るが、用途は全く西洋のに等しい。それ故社會趣味改良家の石井柏亭君は久しく奈良趣味の家屋と器具との設計を心に抱いて居たがまだ建設せられないやうである。で今の我々は書生の分際から衣食に器具に、和洋兩種のものを用意しなければならなかつた。

が然し實際を見るに、趣味の上では西洋趣味は十分よく在來の趣味に調和しなかつた。調和しないのみならず、西洋趣味として其純粹を保つことさへ困難であつた。之を藝術演劇に見るが可い。歐風の繪畫を除く外には、歐洲趣味の滲透は甚だ覺束ない有樣である。さう云ふものに偶々雜じ込んで來る西洋趣味は、往々鋸の目立を聽く時のやうな不快感を與へるのである。實例を擧げるまでのことはない。嘗つて獨逸の劇場監督ドクトル・ハアグマン氏が來朝して日本に於ける歐風演劇を見て顰蹙したのは、未だ吾人の記憶に新しいことであるが、かかる不快の經驗は獨りハアグマン氏に限らず、我々自身にも之を感ずるのである。

○

そこで趣味の上にまづ反動が起つた。そして茲に謂ふ新東洋趣味の如きも亦其反動の一部分である。

此反動は決して純粹なる西洋趣味に對する反動ではない。寧ろ不純にして不快なる便宜的の和洋折衷に對

する反動である。隨つて新東洋趣味（又新日本主義）と謂ふよりも寧ろ東洋（又日本）趣味復興と謂ふべきであつた。（茲で一寸言ふべきは日本趣味と東洋趣味の差別である。がその解明には歴史的顧慮を要して複雑になるから今は曖昧に兩者を混じて東洋趣味として論ずる。）

演劇に於ては飜譯劇は勿論新派劇も勢を失して、歐阿彌其他の舊作家の作に係る純粹なる舊劇が盛になつた。謡曲能樂等も亦人の好む所になつたが、やや年取つた年配の人々の間には茶道の如きも昔日に見ざる流行をなして居るやうである。富力の膨脹と云ふことも加つての結果であるが、今日ほど骨董取引が世人の注意を引いた年はあるまい。伊達、榊原兩家の入札を始めとして東京又關西に幾多の古美術品の羅賣が行はれ未曾有の好況を呈してゐる。

が此際注意を怠つてならないのは是等の好愛者の種類である。

書畫骨董古美術を愛するものは、昔も今と變らなかつた。而して昔日の好愛者は亦今日の好愛者である。が其外にまた別の一階級を納れて居る、それは一部の青年好愛者である。（明治後半の教育を受け、歐風文化を其哺乳的養育者としたる年配の人を假に青年と名付ける。）例令ば陶磁器界に於ける後藤大河内、奥田諸氏、繪畫界に於ける美術院一派の如きものである。何故かかる比較的年若き一群を注意するかと云ふに、彼等は習慣的惰性的のアマチユア若しくば鑑賞家でなくして自發的のものであり而して反動と云ふことが、此に最も顯著に現はれるからである。

今私は廣く證據を擧げて東洋趣味復興の狀態を說明するの煩を避けて、恣に概括的論斷を與へよう。東洋趣味復興はまづ江戸趣味として現はれた。それから段々時代を逆流し徳川初期、室町に及び、而して漸く支那趣味となり、更にまた奈良（天平）に遡り或は印度に走るに至れるものである。無論必しも凡ての人が此順を取るものではないが、まづ大體こんな風な經過である。

趣味の事たる、其發現、藝術に於て尤も顯著である。今茲に一例として夭折の異才今村紫紅を擧げて其趣味變遷の經歷を考へるのも亦興がある。まづ三十五年頃の「十字軍」などと云ふものが和洋折衷時代のもので、それから宗達風(獅子)のものに移り、土佐風となり、更に南洋趣味(熱國の卷)支那趣味(蘇州の夕)に至り而して「寒夜」の如き南畫風のものになつてゐる。氏に於ては浮世繪風の時代は顯著でない。又横山大觀氏は印度趣味の時代から脱して今や南畫的立體派的の繪をかいてゐる、美術院の爾餘の人々も多くは是等の範疇に屬してゐる。

別に寺崎廣業氏があつて、餘り混り氣のない、古風の樣式で畫いてゐる。王建章の人物樹木を見たことがあるが、廣業氏筆致のうちに太だ之に似たものがある。獨り王建章と限らず和洋古今の大匠は必ずや廣業氏の研究の對象であらう。而して氏は今の多くの具眼者から甚だ敬重せられて居るのである。

又洋畫家のうちでも小杉未醒氏の如き、又日本支那の古畫の影響を受くることが多い。又作畫からの影響でなく、印度支那等の直接風物の影響も今の繪畫界に缺けてゐない。觀山、大觀、青邨等は支那印度朝鮮に遊びそこの景物を畫いてゐるが、南薫造氏、和田三造氏等も現に印度に遊びまたそこから歸つて居る。彼等の繪必ずや印度趣味を容るること多大であるだらう。

然し私は繪畫界に於ける是等古代日本趣味、新古東洋趣味を見て、直ちにそれらに貫流する或特徴を見透すことが出來たのである。それは何であるかと云ふに是等趣味は全く畫品の裝飾的構成の資となつて居ると云ふことである。

紫紅の南畫趣味は之を德川の文人畫家、竹田、半江華山、杏所等のものと比するに其趣大に異るものがある。即ち筆墨掃染の味には稍似たる所があるが、其精神には逕庭が有る。古人は筆墨形象を藉りて氣分(支那的哲學的精神より流出せる)を現はさむと欲したるに反して紫紅はチャイコフスキィの樂曲に支那趣味のあるやうに、全裝飾的畫品の裡に支那的要素を容れた

のであるからである。

又直接に支那景物を畫くものにも廣業大觀のものと雪舟周文等のものとは全く其質が異る。概して今人の支那山水には雲谷派風の堅剛の線がない。即ち雪舟周文の畫の主題は支那山水自身ではなくして、それを藉りて當時の禪的或は哲學的の精神を現はしたのであるが、廣業大觀のものは、現代裝飾的感覺的畫趣の材料として支那山水を藉りたのである。

即ち是等の現代東洋趣味の藝術は畢竟不純にして不快なる和洋混淆の樣式に對する反動であることは確かであるが、必しも西洋的藝術の精神に對するの反動ではない。今の西洋の繪畫はセザンヌ等一二のものは之を除き、概して感覺的裝飾的と云ふことを以て其特色とする。而してこの點に於ては新東洋趣味のものと雖も全く同じであるのである。

繪畫界に於ける所謂新東洋趣味が甚だ徹底的でないことは上述の如くである。而して各種藝術中繪畫が最も進歩してゐるものであるから爾餘の藝術（音曲、演劇、彫刻の類）は以て推察すべきである。

又茶道の如き、頃者一茶入に五萬圓の價がある位であるから其流行は之を知ることが出來るが、果してどの位の深さに於て味はれてゐるか、是れは門外漢たる我々には分らぬ所である。唯私は時事新報の高橋箒庵の茶道記の愛讀者である。是を以て臆測を逞しふすれば、近頃の茶會の如も珍奇骨董品購求の經驗談を語り合ふ無害の鬱散であるかに見える。

其他劍道禪道の如き、恐らく之と一般であらう。

甚だ考察の基礎が薄弱であるが、まづ是等のことから推論を下して見ると、現代の東洋趣味復興といふものゝ如きも、一は和洋混淆の不純藝術に對する樣式上の反動であつて、二には現代の歐風器械文明の齎らした煩はしさから、舊袍繼々故人の意ある所のトラヂショナルの舊趣味の裡の安住の欲求である。孰れにしても未だ深く背後の精神まで參して居るものではない。

が然しここに注意すべきは、是程の趣味に就くものに青年階級のものが多くなつたと云ふことである。彼

等の或物は多少深く歐洲文化の精神に觸れて居る。而して後轉じて東洋趣味に走つたとすれば、そこに習慣惰性に由つて之に就く老成人と趣を異にした所がなくてはならぬ。

而して又別に、彼等が東洋趣味に就いたことが、多少、國民的文化の自覺と云ふ根本問題に抵觸して然るのであると云ふことを考ふべき理由がある。

老人連は少く精神的問題に沒頭する青年を目して凡てデカダンだと思つて居る。德富蘇峯の分類に據る煩悶青年である。奚ぞ知らむ、煩悶青年は凡てデカダンではない。彼等は老成人と異つて自家の精神統一を欲求する念が深かつた許りである。而してこの欲求と其時代の與ふる所に得ることが出來なかつたから煩悶したのである。[redacted]つて自ら求むべく動き出したのである。そして其一部分のものは自國民族の歷史、自國文化の發展の研究に於て、現代生活の意義を求めようと努力して居るのである。故井上侯や益田氏や其他歷々が骨董品を蒐集するのと今の青年が書畫陶磁器をいぢくるのとは其間自ら逕庭がある。

まづ我々は在來の東洋趣味または文物遺迹の裡に其根元精神を確實に摑む工夫をしなければならぬ。其努力のない古物古趣味の好愛は今の老人連の骨董趣味と選ぶ所がない。然る後に諦視するを得たる日本、支那印度の精神が吾人に失望を與へるか希望を與へるかは未だにはかに知るべきではない。

無論我々の先覺者にはこの精神の奧底に參したものがある。聖德太子とか吉備眞備とか空海とかと云ふ古い所は措いても、近世の雪舟、又五山諸僧、更に近く華山等の如きそれであるが、然し今の青年には、彼等よりも更に廣い世界文化史的の大觀をなす便宜がある。[redacted]

既に私の友人なる一獨逸批評家クウルト・グラアザア氏の如きは其「東亞藝術論」に於て、及ばずながら此種文化史大觀を東亞藝術の上に施して其根元精神を摸索しようとして居る。

即ち私は、たとへ現代の精神中に新東洋趣味又は東洋趣味復興といふやうな傾向があつたとした所で、それが自國文化の自覺といふ深奥所から出たものでなければ意義が少いといふことを唱道するものである。而して今の傾向は必ずしもそれほどのものではないが、兎に角さう云ふ方向にあるものであるといふ樂觀をなすことが出來るだらうと思ふ。

○

　而して吾人の所論は始めて其核心に達した。東洋趣味云云のことは唯序論であつて、其本論は自國文化の自覺の問題であつたのである。

　而して此者は決して排外的のものではない。西洋文化と云ふものに或範疇を與へ、而して之に對立し之に反抗して東洋的文化を樹立せしめようと云ふのは、タゴオルの論である。

　我々國民の過去文化の迹を尋ねてゆくと、タゴールの結論と同ずる精神を其背後にもつて居るものがあるかも知れない。

　吾人は雪舟の繪に於て甚だ剛堅の筆致と縹渺極りなき氣韻を見ることが出來る。堅剛の筆致は何を表はすか。彼の或理想に到達せむとする實際的、道德的努力を表はすのである。而してその縹渺たる氣韻は即ち彼の[redacted]摑まんと欲したる理想の影である。然し今吾人の有する分析的メソヂックを以て更に其縹渺たる理想の本能に肉薄せむか、恐らくば吾人は支那的又印度的の傳統的精神――無爲安住の隱遁欲を搜し出すに至るだらう。

　雪舟に於ては理想であつた。又唯縹渺たる氣韻であつた。然し理想は決して空漠たる蜃氣樓ではない。蜃氣樓は空漠として天上に浮ぶが實は實際都市風景の反映である。同樣に理想は之を現實に還元することが出來る。雪舟畫中の氣韻は、即ち近世科學のメソヂックを以てすれば、印度又支那民族の具體的生活に復するを得るのである。道教的又波羅門的文化が實に其根蒂となるのである。其間或はタゴオルの思想に近きものがあるかも知れない。

で今の東洋趣味中では(一)現代生活の煩雜から逃れて之を欝散の資にする程度のものもあり、また(二)和洋混淆の不純樣式から原始的純粹 (Stammreinheit) を保護しようと云ふ努力が主なものであつたが、未だ嘗つて(三)全然西洋的文化に反抗する意味で之を復活しようと云ふほどに大膽に考へるものはなかつた。それは今やタゴオル氏に由つて代表されて居るのであるが其論の善惡は別として最も徹底的な主張であると謂はねばならぬ。然しながら我々はさう云ふ說に同ずるものではない。(四) 我々に在つては東洋趣味と云ふものは、我國民族の過去の經驗として意味がある。而してこの過去の經驗たる、未だ現代の分析的明視を經て居らぬものである。東洋趣味の勃興も自國文化の自覺途上の一驛亭でなければならぬ。

東洋趣味復興のことの如きも、十分批評的のコントロルの下に置くべきものであつて、安逸的なる回顧趣味になつてはならぬ。

我々に取つては現代が何よりも重要なる時機である。

(この論に於て私は現代の東洋趣味の細目を吟味批評する積りであつたが、かう云ふ問題に就て考へて行くうち、つひ抽象的に根本問題を取扱ふやうになつた。)

日本國民の天職

大町桂月

五十年前、歐米人は世界に日本あるを知らざるもの多かりしなるべし。近く二十年前までも日本人を支那人と混同せしものさへ少なからざりき。然るに日淸戰爭を經て、日本の名世界に現れ、日露戰爭を經て益現れ

たり。今や歐洲にて相鬪へるは、獨墺二國に對する英露佛伊の四國にして、これ歐洲に於ける六大强國也。この外に强國を求むるに、歐洲には無し。遠く離れて我日本と米國とあるのみ。今の處、日米獨英露佛墺伊を世界の八大强國とするは、公平の見なるべし。版圖より云ふも、六十六國がひろまりて、南は臺灣に及び北は樺太の南半に達し、西は雞林八道に至り、なほ南滿洲も我勢力範圍となれり。さても發展したるもの哉。之を譬ふれば、田舍漢が都に飛び出して、見る〳〵第一流の富豪となりたるが如し。人或は之を成上り者と云はむ。されど、何處の馬の骨とも知れざる成上り者には非ず。田舍にこそ住ひたれ、素性正しく、敎育もある門閥家の子孫也。我日本は萬世一系の天皇を奉じ來りて、三千年の歷史を有す。神ながらの道あり。敷島の道あり。武士道あり。印度の文明思想をも吸收したり。支那の文明思想をも吸收したり。四百年の昔、既に西洋の文明思想の一部分を入れり。德川氏以來國を鎖したりとは云へ、唯徒に眠りたるに非ず。文を錬り、武を鍛ひ、盛に頭腦を養ひて、日本獨得の文明を產出せり。されば一朝國を開いて、歐米と伍するも、僅々數十年にして、殆んど之に追付くに至れり。世界一般より見て、或は成上り者と思へど、我にありては三千年來の素養つもり〳〵、機に觸れて、自然に發展を遂げたるまでの事也。

建國上より云へば、我國は世界中最も古き國也。歐米の物質的文明に接觸せる上より云へば、最も新しき國也。これ日本の特徵也。印度や、支那の如くに老朽せず、埃及や、波斯や、希臘や、羅馬の如くに枯死せず、佛や英や既に盛を過ぎたり。世界中多くの未來を有するもの、西に獨逸あり。東に日本あるのみ。獨逸は歐洲中にては、新しき國なるが、我國よりは古し。我日本、國を開いて米に學び、佛に學び、英に學び、露にも學びしも、哲學に科學に醫事に軍事に政治に最も多く獨逸に學びたり。學びたりと云へば、意氣地なきやうなるも、後進國にして發展を希ふものは、先進國に學ばざるを得ず。學ぶは恥に非ず、出藍の語もあ

ることにて、學ぶものが、必ずしも敎ふる者より劣れるものにはあらざる也。青島の一擊、もとより云ふに足らず、露よりは手答へあれど、獨と戰うて、我れ豈に敗れむや。今や我國は聯合軍に加擔して、獨逸の勢力を東洋より追ひ拂へり。今後獨逸は東洋に於て兵力を以てしては、我に敵すること能はざるべし。知らず平和の戰爭に於ても、我國能く勝を制するや否や。

今の處、我國は東洋の盟主也。進んで世界の盟主となるは、前途遠しと雖も、空想には非ず。神功皇后は三韓を征伐し給ひき。中古の學者僧侶の優秀なるものは入唐したりき。八幡船は支那近海に横行したりき。秀吉は征明の師を起したりき。暹羅には日本町榮えたりき。日本國民は進取の遺傳を受く。殊に島國の土地には限ありて、人口の增殖は世界中優秀也。況んや東洋の盟主となれるに於てをや。退けば死滅す。進むの外なし。世界今や我國の强兵を恐れ、忌み、若しくは嫉む。兵は最後の手段也。農を以てし、工を以てし、商を以てし、學問を以てし、藝能を以てして進まざるべからず。唯金を握むことをのみ目掛けて進みては、これ日本國の面よごし也。論語に云へるあり「居處するに恭しく、事を執りて敬み、人と與にして忠ならば、夷狄に之くと雖も、棄つべからざるなり」と。これ異に世界に發展する者に取りての金科玉條也。又論語に「君子敬にして失なく、人と恭にして禮あらば、四海の內皆兄弟なり」とあり。又論語に、「子、九夷に居らむと欲す。或は曰く、陋なること之を如何せむと。子曰く、君子之に居らば、何の陋か之あらむ」と。日本人は論語を讀みて、始めてこれらの金科玉條を解せるに非ず。國民性自ら然らしむる也。我國は支那より云へば、九夷の一なる東夷なりき。而して本家本元の支那よりも孔子の敎が實行せられたる國也。論語の感化も大なれども、論語入らざる前、美なる國民性あり。孔子來らずとも、既に君子ありて、決して陋ならず、東海の君子國とさへ稱せられたりき。日本國民は一日片時も君子國といふことを忘るべからず。君子國の人民たるに負かざるものにして、始めて眞に世界に横行濶

步するを得べき也。その心掛けは、論語を讀まずとも卷烟草をのみさへすれば、わかるべし。今は「敷島」がおもに行はるゝが、なほ「大和」あり。「朝日」もあり。「山櫻」もありき。元來烟草は人をして沈思せしむ[redacted]有名なる本居宣長の「敷島の大和心を人問はゞ朝日ににほふ山櫻ばな」の歌より出でたるとは、三尺の童子もなほ知れる所なるべし。唯「朝日ににほふ」の「にほふ」の語に就いて、少し沈思せよ。「にほふ」とは、いきほふ也、光る也、映發する也。朝日に映發する山櫻花が大和心の象徵也。つゞめて云へば、にほふ心が、即ち大和魂也。人苟くもにほふ心を有すれば、はれやか也あたゝか也、淸く、正しく、また勇まし。親に對して心ににほへば孝子也。君に對して心ににほへば忠臣也。國に對して心ににほへば愛國者也。官職に對して心ににほへば良吏也。會社に對して心ににほへば良員也。苟くもにほふ心を有するもの、外人に對すれば、外人にもにほふべく、外國に行けば、その土地にもにほふべき也。

人或は曰く、忠君愛國を鼓吹すれば、日本人の海外發展を妨ぐと。これ杞憂のみ。忠君愛國の本體は、にほふ心也。己れの親をばぶんなぐるもの、人の親に對してはなほ更の事なるが、己れの親に孝なるものは、人の[redacted]眞の忠君愛國の心を有するものは、他國に行くも、なほ孝子が人の親に於けるが如く、郷に入つて郷に從ふとも、うはべに止まらずして、眞情の掬すべきものあらむ。

從來歐米人は基督敎を奉ぜざる國民は、道德を知らずと思へり。それについて、人或は曰く、日本は基督敎を奉ずる方が都合好からずやと。信敎自由の世の中、基督を難有しと思ふものは、基督敎に入るも可なれども、基督敎は云はゞ佛敎中の眞宗と大同小異のものに過ぎず。佛敎は深淵博大也。眞宗の外、禪宗もあれば、日蓮宗もあり。又我國には神道もあり。武士道もあり。日本化したる儒敎もあり。基督敎のみにて安心立命が得らるゝといふ次第には非ず。唯歐米人の氣に入らむが爲めに基督敎を奉ずるといふ事は、大和魂を有する

もの丶爲す能はざる所也。よしや之を爲すとも、眞か僞かは直に歐米人の目に付くべく、歐米人の氣に入らむとして、却つて嫌はるべし。そのやうなる拙なる小細工をなすよりも、三千年來の大和魂を發揮すれば、それで十分也。否、進んで歐米人の心をして大和魂に映發せしめざるべからず、天にありては太陽、地にありては日本、日の丸の國旗の往く所、あまねく我恩威を光被するは、我國旗に對しても盡さゞるべからざる日本國民の天職也。

在來日本人にして海外に赴くもの丶多くは所謂喰ひはぐれの徒也。內地にありては金を得ず、海外にて金を得むとす。金を得るが唯一の目的にて、その國人と親しまず、その土地とも親しまず、其國民、其土地、其風俗、其人情に就いて、何等の同情なく、何等の研究もせず、云はゞ、じつと坐らずして、絕えず浮腰なるもの比々皆然り。これ日本人が大に海外に成功せざる所以の一大原因たらずんばあらず。よしや喰ひはぐれたりとも、君子國の人民なりとの自信を失ふべからず。大和魂を有せざるべからず。我國がなほ條約改正に苦心せし際、小野梓以爲らく、歐米人が我國を侮れるは我國の來歷を知らざるに由る。今日の急務は完全なる國史を作りて、之を西洋諸國の語に翻譯するに在りとて、政府に建議して、費用の補助を乞ひしことあるがこれ當時の急務なりしのみならず、今後とても、矢張り必要なること也。外國人にゝ國史を知らしめざるべからず。況んや日本國民をや。海外に發展するにつれても、先づ國史を知れ。少くとも『言靈の幸はふ國』と『細戈千足國』の我國の異名を解するや否や。子音なく抑音なくして、母韻の連續より成れる我國有の國語ほど優美なる言語は、日本獨特也。これ優美なる國民性の發露にて、日本國民自身も國語の美妙に打たれざるを得ず。古人歌つて曰く、『敷島の大和の國は言靈の幸はふ國ぞ眞幸くありこそ』と。國語は一種の靈を有す『眞幸くあれ』と云へば、その通りに、『眞幸く』あるぞとの信念を有せり。純潔にして無邪氣なる信念ならずや。この頃來朝せるタゴール翁を喝采するも、この優

雅なる國民性の發露也。タゴール翁は、この點に於て我國民と共鳴す。されど、一方に武健の氣を缺く。印度はいつまでも亡國なるべし。我日本國民は一方に斯ばかり優雅あれど、一方に『細戈千足の國』の異稱あり。武器の精鋭にして國民武健也。文明進めば、國民は弱くなりて、自ら倒るゝが古來の常例なれども、我國民は文明進みても、武健の氣を失はず。今の語にて云へば知識を得る上には、灰殼なれども、身を處するには蟹殼也。盛者必滅と云へど、『言靈の幸はふ國』にして、兼ねて『細戈千足の國』たるを失はずんば、國運長久天壤と共に盡きざるべしと信ずるもの也。

帝國政府の支那時局に對する好意的調停の政策を評す

京大教授　矢野仁一

六月十四日の朝日新聞に、支那の形勢は長く帝國をして傍觀的態度を持することを許さず、積極的に時局の收拾に一臂の力を貸さゞるを得ざらしむるものあり、帝國政府は十三日の閣議に於て、支那の爲め南北兩派を調停し、速かに時局を收拾し、日支親善の機運を促進すべしとの方針を決定するに至りたることを報じ、越えて十六日の同新聞に帝國の支那に對する方針は、黎總統を援助し、南北を妥協せしめ、速かに時局を收拾せむとするにあり、帝國政府は南北兩派の妥協に關する豫備の交渉に對し、他國の內政に干渉せざる程度に於て、双方に對し、好意的斡旋の政策を執るに至るべしとの說を傳へて居る、此の朝日新聞の說が果

して眞に帝國の方針、帝國政府の政策を説明して居るものとすれば、それは一見所謂他の奇無さ、平凡至極のもので、到底かの高論崇議を以て得意として居る多數支那論者の望を飽かしむるものでないと云ふことは甚だ明かである。

然し我輩は帝國内外の形勢に於て、帝國の支那に對する外交は、今日のところ、此平凡な方針以外に出づることが出來ないと云ふことを信ずるものであるから、此點に於て一般支那論者と見解を異にし、此次帝國當局者の支那時局に對する措置の穩健適當なることを讃揚するに躊躇しないものである。

我輩は帝國の支那に對する方針は、支那の平和と保全と繁榮との中に、帝國の利益を增進すると云ふことを以て標準としなければならず、隨て支那に對する外交の成功――とか失敗とかを批評する標準もまた之に求めなければならぬと云ふことを信ずるもので、既に昨年本誌上に於て、帝政問題を論じ、日支交渉を批評したる時にも述べたる如く、支那の騷亂を利用し、支那人の感情を害し、各國の猜疑を顧みず、一時の利益を圖る樣な短見陰險及政略は、決して日本の眞の利益となるものではない、多數の日本人の中には、支那の騷亂を以て日本の利益である如く誤解し、之を喜び若くは之を煽動する樣なものが、たまにはあるかも知れない、それ等が原因となつて、外國人幷に支那人をして、日本の野心を疑はしむるやうなことになるとすれば、これは世話に言ふ痛くも無い腹を探ぐらるゝもので、當局者としては、どうしてもさう云ふ日本人の誤解謬見を解き、そんな詰らない考を止めさせる樣にして、支那の平和、保全、繁榮は日本の利益である、日本は支那の平和を希望こそすれ、決して騷亂を希ふものではないと云ふことを、支那人幷に外國人に徹底せしむる樣にしなければならぬと云ふことを主張するものである。

昨年末支那に於て未だ此次の排袁騷亂が起らなかつた當時、帝國政府は袁政府に對して、帝政の實行は騷亂を惹起す虞があると云ふ理由で、帝政實行の中止を

警告したのであるが、帝國政府が騒亂の起らぬ前に、起つては大變であると心配した騒亂が、現に起つて大變となつて居るのに、大變とも思はず、冷然として何等の手段をも取らず、之を傍觀すると云ふことは考へられないのである、其冷然として傍觀する様に見えたのは、帝國政府には未だ適當な手段を取るべき適當な時機に達して居ると云ふ見當がつかなかつたゝめであらう、帝國政府が支那に於て帝政を實行すれば、必ず騒亂を免れない形勢のあることを確信した以上は、支那の平和を顧念する衷情として、帝政の中止を警告したと云ふことは、當然の措置であつて、これに對しては、支那人の中にも、日本人の中にも、随分兎角の批評を試むる者もあつたが、いづれも帝國の誠意を理解しない僻論か、否らざれば暴論たるを免れないのである、其中にも日本の此警告は革命黨に聲援を與へ、騒亂を誘起するに至つたものである、日本が支那を騒亂に陥るゝために、故らに此警告を發したものであると云ふ様な議論は一部の支那人に依て唱へられ、日本にも多少の反響を與へた様であるが、此議論ほど平和を顧念する日本の誠意を理解しない議論はあるまい、單に日本の警告に依て此の如き大騒亂になると云ふ筈もなく、若し單に日本の警告に依て、此の如き大騒亂になつたとすれば、帝政を實行することの騒亂を惹き起す所以で、平和を求むる所以でないと云ふことは、それだけでも證明さるゝ譯ではないか、帝國政府が支那の騒亂に乘ずると云ふ様な、そんな禍心を包藏するものでないことは、聯合諸國と共に警告打切の際に、帝政問題に關し、將來變動なきかに就て、執るべきことを宣言したその監視的態度を、變動が起つてから數月の後までも執て、別に何等の手段方法を取らなかつたことを見ても、知らるゝのである、かう云ふ議論は毎に猜疑の眼を以て日本を見るの習慣に捉はれ、日本の誠意を理解することが出來ない支那人の偏見邪推に過ぎないものであることは、見え透いて居るのである、又一方には、日本があんな警告を發して、變亂が起つたから、よかつた様なものゝ、若し變亂が起らなかつた

ならば、隨分不體面の話であるが、當局者はどうして其時の體面を立てる積りであつたらうかと云ふ樣な議論も往々聞く所であるが、これまた支那の平和と云ふことがどれほど日本の利害に大切な關係があるかと云ふことを知らず、隨て此平和を重要視する日本の誠意に對して少しも理解を有たない議論で、若し變亂が起らなかつたならば、成程當然日本の誠意を理解しない袁世凱や、其一派の支那人は日本に銜む所のものがあらうから、今後の日支親善の上に、惡結果を來たすと云ふことは必ず無いと限らず、警告をしない方が、却てよかつたと云ふことになるかも知れないが、日本の顧念する所のものは、支那の平和であつて、此平和の攪亂さるゝことを恐れたればこそ、警告もしたのである、それが觀測を誤まつて、餘計な心配で濟み、平和が攪亂さるゝに至らなかつたと云ふこととなれば、これに越した幸は無いではないか、若し日本の警告が觀測を誤まつて、さうしてそれが日本の失敗と云ふことになるならば、それは平和を顧念する餘り、大事を取り過ぎた爲めの失敗で、支那政府に日本の誠意が貫徹せぬ爲めに、一時不利益の地位に陷ることがあつても、それは如何とも仕方の無い譯で、日本の擧々顧念して居る支那の平和は幸に攪亂されずに、濟んだことであるから、之を究竟の利益として、滿足し、之を尊重して、つとめて其中より利益を收獲すると云ふことを考ふれば、何の一時の不利益位が辛抱の出來ぬことがあらうか、帝國政府は一方に是非帝政でなければ支那が治らぬと云ふ證據が無く、而かも一方には帝政の實行は革命黨に口實を與へて、一時たりとも騷亂を惹起す危險が豫想せらるゝから、之が中止を警告したので、苟くも帝國政府の誠意を以てしたる警告に對する誠意を以てする考がある支那政府であるならば、必ず飜然として此警告を容れて、帝政の實行を中止するであらうと考へたまでゞある。

さて變亂が起らぬ前に、變亂が起つては大變であると云て、警告を發したと云ふことは、變亂が起ると云ふことを確信した以上は、已むを得ざることで、平和

を顧念する日本として、何人が局に當ても、是非これは執らなければならぬ當然の措置であるが、支那政府が日本の誠意を理解せず、警告に應じなかった爲めに、愈々變亂が起って、日本の專心顧念して居る平和が擾亂せらるゝこととなった場合に、日本として如何なる手段を取るべきであるか、內藤(虎次郎)博士は五月十五日の外交時報誌上に於て、日本の如き帝政が騷亂を惹起することを恐れて、豫め警告をさへ必要とした國に取ては、かゝる騷亂狀態の繼續は、實に堪へ得べからざる所であらねばならぬ、然るに騷亂に陷ゐる前には、非常に憂慮して警告を發した日本政府が、其騷亂の際限なき繼續を傍觀しながら、何等の方針を立てず、而して或種の人々が支那がどうなるだらうかなどと、呑氣至極な觀測をして居るに至っては、日本國民たる者の無責任に驚く外國人も少くはあるまいと思はるゝのであると云はれて居るが、日本としては、對支警告の論理上の結果、袁世凱の支那の平和破壞の責任を問ひ、平和を回復するに就て自ら適當と思惟する手段を取るに、何の差支が無い筈であるのみならず、平和は既に日本の支那に對する政策の根本方針であるからには、歐洲の戰亂に依て、諸外國が何れも支那の平和競爭に手を延ばしかねて居る今日こそは此平和の利益を最も多く收穫すべき絶好の機會でなければならぬ筈であるから、何等かの手段方法を執りて、一日も早く平和を回復したいことは、山々であるが、さて此平和を回復するに就て、何等かの手段方法を執ると云ふとは、一見容易なるに似て、實は非常に困難な事柄なのである、變亂の起らぬ前の警告ですら、一部の人から干渉であるとの非難を受けたほどである、既に起つて居る變亂を抑止し、大勢の未だ熟して居らない平和を無理に回復するが爲めに、何等かの手段方法を干渉と云ふ非難を受くることとなしに執ると云ふことは實に至難なことゝ云はなければならぬ、昨年十二月十二日頃の紐育「タイムス」紙に、帝政の結果支那に動亂起らば、日本は其機會を利用して、更に其手を延ばすことを豫知し得べく、日本は滿洲蒙古方面のみならず、

支那全國の上に、商業的及び政治的優越權を獲得せむとしつゝありと云ふ様な、西洋人の日本に對する猜疑心を代表した議論を述べて居る、帝國政府は既に英國其他の諸國と聯合して、帝政問題に關し、將來の變動なきかに就き監視的態度を執るべきことを聲言して居るのであるから、袁世凱が帝國其他の誠意を以てしたる警告を無視し、帝政を實行して、騷亂を惹起した責任を問ひ、其退位を强制することの出來る地位に立つて居る譯であるけれども、さて之を實行すると云ふことになれば、支那に於ける人心の傾向即ち大勢と云ふことも考へなければならぬ、外國人の思惑と云ふことも顧慮しなければならぬ、權利があるから何時でも實行して宜しいと云ふものではない、支那に於て袁世凱を退位せしめなければ、どうしても平和を回復することが出來ず、又袁世凱を退位せしむれば、直ちに平和回復をすることが出來ると云ふことが出來ると云ふ大勢が未だ確定して居らず、隨て英國其他の諸國がこれまで久しい間袁世凱でなければ、支那の秩序ある平和を維持することが絶對に出來ない様に思ひ込で居る習慣を、一朝にして直ちに捨てると云ふことの出來ないことは、仕方も無い譯で、此等の國が猶ほ多少の望を袁世凱に屬して居る時に、其感情を害しても構はぬと云ふ覺悟のない限りは、容易に手を下し得べき筈が無いのである、日本一部の社會には、英國の鼻息を窺ふと云ふことを快しとせざる議論もあるが、所謂賢明なる我が當局者は之を不謹愼の言論として斥け、英國其他の諸國が支那に手を延ばしかねて居る時に、日本獨り拔驅けの功名をすると云ふことは宜しくない、さう云ふことをして諸國の感情を害すると云ふことは、將來の外交に於て日本を孤立せしむる所以で非常な不利益であると云ふ考から、支那に對する政策に就ては、英佛其他の諸國と相談の上で定めると云ふ方針を執り、現に帝政中止の警告に就ても、英佛露伊の四國と聯合して居る程であるから、此方針が惡いと云ふことならば格別、此方針を是認する以上は、帝國政府が容易に支那の平和回復に就て有效な手段を執ることの

出來なかつた事情も亦た察しなければならぬ、然し日本は固より支那に於て際限なく騒亂續いがて、何時までも平和回復の望が立たないと云ふ場合に、猶ほ安閑として傍觀すると云ふことは出來る筈でない、諸外國と雖も、支那に在る自國の臣民が騒亂の爲めに何時までも生命財産の安固を望むことが出來ないと云ふことは實に堪へ難き所でなければならぬ、少くも日本が平和回復の方法に就て、何等かの提議をなす場合には、之を拒絶すべき理由がない譯であるから、縱令袁世凱が死なゝかつたにしても、日本が早晩或機會を捉へて、平和回復に就て、相當な手段を取ることになつたであらうと云ふことは想像し得らるゝのである、然るに袁世凱の死に依て幸に南北妥協の大勢が頓に促進せらるゝことになつた、諸外國人も最早袁世凱を賴むと云ふことは、出來ない譯であるから、南北の妥協に依て、平和の回復を望むと云ふ外、仕方が無くなつたのである、日本が干涉と云ふ非難をどこからも受くることなくして、妥協の大勢を促進し、或は此の大勢を破壞せむとするものがあれば、之を排除しても、速かに時局を收拾し、平和を回復するがために相當の手段を取るべき時機が正に到來したのである、帝國政府が積極的に南北兩派の妥協に對して好意的斡旋の政策を執らむとするに至りたるは、誠に當然のことで、我輩の贊成を吝まざるところである、帝國政府が妥協の大勢が出來上つて、平和の曙光が見え始めた今日に於ても、猶ほ徘徊躊躇して觀望的態度を取る樣では、却て諸外國をして、帝國の專ら平和を顧念する政策に疑念を抱かしめ、時局の紛糾を利して、別に何等か圖る所あるが如く邪推せしむる餘地を作るもので、甚だ不賢明な次第と云はなければならぬ。

然し帝國政府がさきに帝政中止の警告を發したのも、必ずしも支那の政體は共和でなければならぬ、共和政治でなければ永久の平和を望むことが出來ないと云ふ樣な考を以てしたものでないことは言ふまでもないことである、支那人が第一革命の時に、種族革命ではない、政治革命であると言て、共和政治を創建しな

から、今更共和政治では永久の平和を望むことが出來ない様に言て、帝政を回復すると云ふことは、如何にも矛盾の甚だしきもので、矛盾でなければ詐僞であるが、帝國政府は何も他人の矛盾や詐僞に腹を立てゝ干渉するものではない、支那人が自から共和政治を行つて見たが、到底共和政治では治まらないことを悟つたから、帝政にすると言ふのに、帝政では治まらないから、現に共和政治になつたではないかなどゝ反駁をする必要もない譯である、支那人が共和政治では大總統の選擧の時に、必ず騷亂を免れない、永遠の平和はどうしても帝政でなければならぬと言ふ時に、日本は大總統の改選の際に、決して騷亂が起らないと云ふ保證の出來る譯でないから、絕對に帝政の實行を思ひ止まるべしと云ふ様な警告は固よりしない筈である、只だ當時の形勢、帝政を實行すれば騷亂を惹起す危險があつたから、中止すべしとの警告を發したまでゝある、日本は固より支那の永遠の平和を願ふものであるけれども、帝政であれば必ず永遠の平和が望まるゝと云ふ確實證據が無い限り、帝政の實行が必ず騷亂を免れず、騷亂の結果は却て帝政の實現を困難ならしむるものであることを確信した以上、之を以て警告したと云ふことは、無理も無いことゝ云はなればならぬ。

又此次帝國政府が南北の妥協を促進して平和を回復するが爲めに、好意の斡旋をなすと云ふことも、何も之に依て、支那の永遠の平和を回復することが出來ると云ふ考を以てするものではないと云ふことも、これ亦た言を須ゐざる所である、妥協を促進する爲めに、好意の斡旋をなすと云ふことは、支那の永遠の平和を妨ぐる所以であるとか、或は却て妥協を妨ぐれば、支那の永遠の平和が望まるゝと云ふ歷然たる證據が無い限りは、縱令永遠の平和が望まれないまでも、一時の平和でも望まるゝ手段として、妥協促進に就て、好意の斡旋を爲すと云ふことは、專心平和を顧念するものとして、當然のことゝ云はなければならぬ。

我輩は最近の外交時報誌上に於て、妥協が支那の大勢であることを論じ、次の如き意見を述べたのである、

多數の支那論者の中には、妥協は自然の大勢であつても、之を自然の發展に任せてはならぬ、日本から進で此妥協を促成すると云ふことは、猶更いけないと云ふ妥協反對の意見は少くないが、其理由とする所は、妥協は決して時局を收拾する所以でない、何れも力の上では反對者を滅ぼすことが出來ないから、妥協となるのであつて、其結果は兩方の不滿足であり、而かも此不滿足を屈服せしむる力が無いのであるから、妥協で一時の收局を求むるは、將來に絕えざる禍根を貽すものである、殷鑑遠からず第一革命にある、だから武力に依て最後の勝敗を決する様に、妥協を妨げなければ、眞の解決は出來ない、眞の平和を望むことが出來ないと云ふにあるのである、成程妥協に依て一時の時局を收拾するは、永久の平和を確立する所以でないと云ふ論據には賛成であるが、支那の大勢と見らるゝ妥協を妨げて外力の援助に依て、無理に支那人の好まざる武力解決を押し付けて見ても、何の最後の解決にならうか、支那問題の最後の解決、支那の永久の平和の基礎は、結局權力ある政府の樹立に待たなければならぬ、權力のある政府は、眞に全國の人心を支配し、若しくは威壓する實力あることを條件とする、權力のある共和政府は、是非とも全國人民の自由なる共和擁護の精神に依て保持せらるゝものでなければならぬ、眞に國民の自覺に基かざる共和政府が、外力の强制に依て出來上つても、それが權力のある政府、眞に民心を支配する實力のある政府であらうか、我輩は支那の時局は、妥協に依て一時收局するとしても、また武力解決に依て收局するとしても、どちらにしても、當分支那の永久の平和を確立する望みがないと云ふことを確信するものである。

帝國政府が南北兩派を調停し、時局を收拾するが爲めに、好意的斡旋を爲すと云ふ考は、若し之に依て支那の永遠の平和を圖ると云ふことであるならば、其誤謬たるは明かであつて、支那は妥協に依て、永久の平和を望むことの出來ないことは、猶ほ妥協せざることに依て、永久の平和を望むことの出來ないと同様であ

る、支那の永久の平和は如何なる方法を以てしても、到底望むことが出來ないとすれば、我輩は繰返して言ふが、妥協に依て一時の平和でも圖ると云ふことは、實に支那の利益で、又實に帝國の利益である、專心平和を顧念する帝國として、支那の時局に對して是非取らなければならない方針は此を措て外に無いのである。

印度の現在及將來

日印協會幹事　副島八十六

一、印度、英吉利、日本の關係

印度といふ名稱は古來世界に聞えて居るが、其實體は一の謎である。然し兎に角一の寶庫と認められて居ることは確實である。單に英國の寶庫と云ふばかりでなく、亦實に世界の寶庫である。

英國は近年に於て、毎年殆ど三億萬圓の利益を印度から本國に取上げてゐる。今回の戰爭に於て英國が既に數百億の軍資を費しながら猶綽々として餘裕を示し、獨逸の武力の强いのも豫想外だが、英國の富力の大なるも亦實に豫想外だと感嘆されて居るのは、英國が多年印度から吸收した富の蓄積に依ることも亦決して尠くはない。英國は地球表面の約五分の一を領有し、太陽曾て英領内に沒せずといふ彼の有名なる傲語を發せしめた程であるが、其廣大なる領土の中に於ても、經濟的及地理的の關係上、印度の領有が殊に其大を爲す所以の樞軸である。故に英國が印度を領有すると否とは、直に列强のバランスに大變動を生じ、忽にして英國々力の盛衰を來す所以となる。そこで其重要なる

印度の平和を維持せんが爲には、是非とも東洋に於ける日本の地位勢力を認めて、之と同盟を結ぶの必要を感じた。打算に明かなる英國政治家が腹の中では馬鹿にして居る新興國を相手にして日英同盟を締結したのは、即ち主として此の理由からである。

斯くの如く觀來れば、日英印三國の關係は極めて密接微妙のものであつて、日本は英國に亞いで、否英國にも增して、十分に印度を理解せねばならぬ譯である。然るに一部專門の人士を除けば、日本人ほど印度の實情を知らぬ者は世界にない。是れ我輩が不遜を顧みず、此の世界の謎たり、世界の寶庫たる印度に就て、聊か識者に訴ふる所以である。

二　印度の地理、人種、宗敎、風俗

夫れ印度は其本土と、緬甸と、外に錫蘭島とを加へて、面積約百八十三萬方哩、人口約三億二千萬にして、悠久四千年以上の歷史を有する古國である。從つて人種にも、言語にも、宗敎にも、風俗にも、氣候にも、多種多樣の差別を生じてゐる。

普通に印度と云へば、誰しも熱帶地を聯想する。如何にも印度には熱い所が多い。殊にガンヂス河域の夏季の如きは、室內の溫度が百二十度にも達し、日本人などには到底堪へられぬ所がある。然し北部の高原地方に行くと、年中ストーヴを焚かねば寒さの凌がれぬ所もある。地味の上から云つても、非常に豪腴な所もあれば、殆ど不毛の瘦地もある。(印度總面積人口中土王州は其三割餘即ち約六十八萬方哩を占め、人口七千萬を有し、尙更に之を小別して六百七十五國となし、ハイデラバッドの如き面積八萬二千方哩人口千三百萬の大國もあり、又我國の一郡位に相當する極小國もある。)

又普通に印度人と云へば、誰しも赤銅色の皮膚を聯想するが、中にはそれ以上、亞弗利加の黑人と見まがふ程のものもあるかと思へば、又中には歐洲の最も白い人種に劣らぬ程のものもある。言語に至つては、之を大別して凡そ九種といふが、若之を細別すれば二百二十種といひ、甚しきは五百餘種と云ふ。現に印度の郵便

局で區分してゐる文字の種類だけが七十餘を算してゐるのでも、其複雜の度合が分る。(英語は印度の全部に通用するものゝ如く一般に考へられてゐるが、實は全人口の二十分の一位しか之を解する者はない。印度の全部に涉つてほゞ一般に通用されるものはヒンドスタニー語で、是が先づ支那に於ける北京官話の如き者である。)

宗教に至つては、印度敎徒が最も多くて二億二千萬、次が回敎徒で六千七百萬、次が佛敎徒で一千萬、其他、基督敎徒三百九十萬、シーク敎徒三百萬、ジャイナ敎徒百二十萬、パーシー敎徒十萬、猶太敎徒三萬、無神敎徒三十萬、不明百六十萬といふ統計が示されてゐる。更に是等諸宗敎の中に、又それ〲複雜なる分派があつて、就中印度敎はそれが最甚だしく、一方に極端なる難行苦行派があれば、一方には淫猥なる享樂主義者がある。

風俗の複雜な事は到底日本などは同日の談でない。支那は大國で人種の別も多く、從て風俗の差も可なりに甚だしいが、印度に比べるとまだ〲單純である。印度人の風俗は、其體格容貌が偉大と倭小と、獰惡と溫雅と、極端より極端に亘つてゐると同じく、殆ど何等の共通點をも有して居らぬかに見える大差別がある。一例を婦人に取れば、或部分には歐洲の社交界に活躍せるハイカラ女に劣らぬ程のアバズレもあるかと思へば、又終生戶外では他人に顏を見せぬと云ふ女も甚だ多い。

斯くの如く、印度は要するに、人種、言語、宗敎、風俗、氣候、產物の大展覽會とも謂ふべく、從つて其複雜なる社會狀態を察知するには、特殊なる注意と努力とを要する次第である。

三 印度の不穩と日本の勃興

印度の歷史は日本、支那、歐洲諸國の如く精密に之を知ることが出來ぬ。此國には歷史の記錄が比較的に乏しい。哲學宗敎に於て優秀を示した此國は、政治に於て餘り立派では無かつた。只比較的近代に於てモゴール王朝の統治が稍見るに足るものであつた。そして印度は遂に英國の植民地となつた。

然るに植民地としての印度には大いなる特色がある。凡そ歐洲の新舊大小の諸國は、亞弗利加に、亞細亞に、亞米利加に、濠洲に、それ〳〵多くの植民地を作つたが、それ等は大抵、皆野蠻未開の土地で、殊に人民の數もさして多くないので、人間に對する征服よりも寧ろ自然に對する征服に多くの努力を費したのである。然るに印度は古い歷史と文明とを有し、殊に稠密なる人口を有してゐたので、其征服の困難苦心は全く他と趣を異にした。そしてそれを巧に成し就げた所が即ち英國の偉い所である。

印度は何しろ吠陀、優波尼沙士の經典を有する國である。實に宗教哲學の淵叢である。現代の文明諸國は皆直接間接に其思想上の影響を受けてゐる。東洋諸國殊に支那日本の如きは其影響を受けることが最も多い。そこで印度は今、英國支配の下に呻吟してゐるが、一部上流の知識階級の間には、猶此古來相傳へたる高遠の思想が貯へられてゐる。日本では此高遠なる思想が國民の實際生活に結びついて其向上心を進めてゐるが、印度では現實世界が餘り掛け離れて居るので、それが却つて首枷となつてもがき惱んでゐる。此社會狀態の間からタゴールの如き人物の出たのは不思議のない事で、彼は即ち印度の古い思想と新しい要求と、理想世界と現實世界との矛盾扞格に煩悶して居る代表的人物である。

斯くて印度には、英國征服以來、絕えず反亂が起つた。殊に二十年前、アビシニア人が伊太利人に勝つたといふ事實に依つて、東洋人も亦必ずしも西洋人に劣らぬといふ希望が示され、更に日露戰爭に依つて日本の優秀が確認されたので、彼等は多大なる刺激を受けざるを得なかつた。印度は昔日支那日本に文明を與へた古國である。然るに其日本が今は歐洲人と對立して遜色を示さぬ地位に在る。印度人たる者、自信自重の念を起さゞるを得ぬ譯である。彼等が近時漸く日本を慕ふに至つたのは、即ち暗に英國に反抗するの意味である。印度近來の不穩は確かに日本の勃興が其動機の一を成してゐる。英國人が此現象を喜ばずして暗に日

本に憚る氣味のあるのも亦一應尤もの次第である。

四　英人政治の功罪

印度に於ける英國の政治は、クライヴ、ヘスティングス以來、隨分甚だしい虐政も行つた。然し英人中でもマコーレー初め之に反對した仁人義士も少くなかつた。殊に外人中には頗る批難が多かつた。英人横暴の一例を擧ぐれば、汽車中に於て先取權を有せる印度人の座席を奪取するが如き、或は印度人の租税を以て英國人の市街を自由に修理しながら、土人市街の荒廢を顧みざるが如き階級政治を行ひ、婢僕の如きに對しては同室内に於て言語を交ゆる事すら許さぬ位である。されば近年に至るまで、英人の印度で暗殺された者が多く、三代前の總督カーゾン卿の如き敏腕の政治家すら土人の反抗に依つて其地位を去らざるを得ざるに至つた。其後の總督は此失敗に鑑み、稍緩和の手段を取り、爾來漸く印度人の一部に參政權を與へたが、然し印度人の議員は少數で、多數は官選の英人であるので、印度人の主張は容易に通過する事が出來ぬ。

然し複雜なる印度を統治するには、到底單純なる政治論や人道主義のみを以て之を律する譯に行かぬ。大體に於て英國なればこそ今日まで能く遣り通して來たものと思ふ。英人は傲慢な中にも寛大な所がある。他の歐米人が異人種に對する態度から察すると、若英人以外の歐洲人が印度を支配したとせば、其壓迫は或は一層激しかつたかと思ふ。英人の長所は、宗敎、風俗習慣等に手を觸れずして、印度人自身の狀態に放任した點に在る。尤も英國の宗敎家は基督敎を以て印度を感化しようと試みたが、そこには又政治上の見地を離れて有らゆる困難を排し、世界同胞の觀念を普及せしめんとした熱心と努力とを買つてやらねばならぬ。

然し又一方から見れば、英國が印度に對して常に自國の利益勢力の擴張を主眼としたのは、蔽ふべからざる事實である。宗敎、風俗、習慣を放任したと云ふ反面には、益々迷信を深くして墮落を促したと云ふ事實を見逃す譯に行かぬ。又印度人に對し餘りに甚だしく差別的待遇を與へて、僻み根性の強い亡國民を一層苛

立だせたと云ふ罪も輕くはない。印　人の生活狀態の改善、衛生設備の不行屆なども責めねばならぬ。殊に其教育を閑却した如きは、最甚だしき罪惡である。現時印度人中普通教育ある者は、男子に於て千人中百六人、女子に於ては更に其十分の一の割合である。

尤も普通教育の割合からすれば、或種の高等教育は比較的に施設の見るべき者がある。然しそれも徒に月謝のみ高く、少數なる富豪の子弟の外は、到底恩澤に浴する事は出來ぬ。殊に其學科は普通高等の教育を通じて、理科工科の如き實學を等閑に附してゐる。是は一面には印度人に政治上の自覺を生ずるの危險を防ぎ、一面には印度人間に產業の勃興して本國の產業（及び印度に在る英人の產業）を侵害するの危險を防がんが爲であるが、英人とも云はるゝ者としては餘りに狹量な仕方である。それよりは印度人をして、早く政治上にも社會上にも經濟上にも自覺せしめて、それを英人の手足と爲し、母國と提携して相共に進歩するの大度量があるべきである。

五　ブライアンの印度論を批評す

茲で我輩は米國前國務卿ブライアン氏の英國の印度統治策に對する評論に一瞥を與へようと思ふ。

ブライアン氏は印度に於ける一箇月の滯在中主として印度各階級の不平家と會見して、それで以て印度の眞相を知り得たものゝ如くに思惟してゐるが、凡そ其國の歷史、風俗、人情等に對する十分の理解なくして、旅程匆々の間に能く其眞相に到達する事は出來ぬ筈である。殊に口辯の達者にして辭令に巧なる印度人との初會見に依つて得たる知識は、洵に淺薄皮相の者と謂はねばならぬ。我輩は固より英國を辯護する者ではないが、事實は事實としてブライアン氏の誤りを正さねばならぬ。氏の批評は一般の印度革命家に金科玉條視されてゐるが、喧嘩の相手の言葉であるから、それだけに割引して聞かねばならぬ。

氏曰く、英國は印度の爲にあらずして英國の利益の爲に印度を奪へりと。我輩と雖も、勿論此事實を認めぬ者ではない。然しペルリ提督が初めて日本の門戶を

叩いた時、それが米國の利益の爲であつたとしても、其結果として日本が自然の利益を得た事實を否定する譯に行かぬ。國家は慈善事業でない。自國の利益を捨てゝ他國の利益のみを計る國家のあるべき筈がないではないか。國際間の事を單純なる正義論で律しようとするは餘りの迂愚である。

氏又曰く、印度に於ける英人は、占領當時諸君主間を中傷して其間に自己の利益を收め、以て今日に繼續して居ると。如何にもそんな事實はあつたに相違ない。然し東印度會社以來、印度は巨利獲得の舞臺として冒險的男子の邁往奮進した處である。其冒險男子の一言一行に對して、普通の道德を以て律する事の出來ぬは寧ろ當然である。若印度が彼等の中傷に依つて亡びたとすれば、其責任は寧ろ印度人自身が英人をして其虛に乘ぜしむるの弱點を有した所にあると見ねばならぬ。但し英國の政府と輿論とが該英人等の行動を是認すると否とは自ら別問題である。

氏は又、パーシー種の印度人ナオロジーが英國急進倶樂部の集會に提出した決議文を是認し、英國が印度帝國の建設及維持の爲に直接多大の富を本國に引上げて濫用したる事、更に英國が諸種の方法を以て年々三億萬圓の富を引上げ居る事、其結果として英國が多數の印度人を極度の窮乏に陷れたる事等を擧げてゐる。如何にも英國が自己の利益の爲め巨額の富を引上げ、印度人の窮乏を忘れてゐる事實はある。然し印度人の窮乏は種々複雜なる歷史的及社會的の原因から來てゐるので、單純なる金錢計算を以て一言の下に之を決定せんとするは餘りに速斷である。

氏は又、曩にヴィクトリア女王が印度人を官吏に採用するの口約を爲しながら、遂に幾許も之を實行せぬ事を難じてゐる。然し今日の印度人の知識及道德を以て、之を高級官吏に採用した場合、其結果は知るべきである。却つて諸人種間の軋轢を增す位が落である。現にカルカッタの停車場で印度人が長距離の切符を買はんとする時、決して印度人の驛吏には近寄らず、必ず英人の官吏を賴る。是は印度人の驛吏が屢々長距離

の代金を受取つて短距離の切符を與へるが如き不正を爲すからである。下級官吏でも此通りである。若多數の印度人を高級官吏に採用せば、其危險は實に想像に餘りがある。

氏は又、土人州に於て土人の君主が政治を行つて居る例を以て、英國の直轄地にも自治を與ふれば立派に政治が出來ると論じてゐる。然し今日の土人州の狀態に於て、英人の監視なしに、四圍の刺戟なしに、其政治が完全に行はれてゐると思はゞ大なる誤りである。我輩は廣い意味に於て印度に自治を與へることを、英國政府に對して熱望するものであるが、それはブライアン氏と根本の見地を異にした上の議論である。日本人が最近五十年に長足の進步をしたからと云つて、歷史と國民性とを異にする印度人に其前例を適用しようとするのは大間違である。

其他ブライアン氏の攻擊點は猶多いが、要するに氏は短き觀察と淺い硏究と空想を加へて論議したものであつて、決して眞に印度の英國政治を批判し得たものではない。

然し我輩は此ブライアン氏の批評に對しても、英國たるものは亦大に反省すべきであると思ふ。我輩の英國政府に望む所は、今少しく利害の着眼點を高處に置き、列强勢力の推移、文明發展の方向に對して、英印間に共通せる大利害のある事を自覺し、少くとも他の植民地たる加奈陀或は濠洲との密接なる關係の善例に則り、英印間に於ける精神上及物質上の結合を鞏固にするの根本的方策である。然し世界大勢の急激なる變動、殊に歐洲戰後に於ける列國均勢の變化を豫想して右の如き悠長なる根本方策を取る事が出來ぬとするならば、如何にも印度は英國に取つて禍の種である。然らば其禍を除くの道は如何といふに、唯一つある。即ち東洋に於ける平和の維持者たる日本に對して、腹の底を打明けたる寛大の態度を以て、印度を中心とした政治上及經濟上の、日英利害の契合點を見出し、そこに鞏固なる提携の基礎を作る事である。

六　日印貿易の趨勢

我輩は是より少しく日本と印度との間に於ける經濟關係を說述せねばならぬ。

明治二十年頃、日本の紡績業が興隆した時より後、日印間の關係は漸く密接を加へ、日清戰爭の際、日印間の直通航路が開かれてより、印度の棉花は初めて日本船に依つて輸入される事となつた。そして三十五年頃に至り、漸く輸入四千九百萬圓、輸出五百萬圓の統計を示したが、四十年には輸入七千四百萬圓、輸出一千三百萬圓に增加し、更に大正二年に至り、輸入一億七千三百萬圓、輸出二千九百萬圓の大增加を爲した。大正三年は戰爭の影響を受けて、輸入一億六千萬圓、輸出二千六百萬圓に減少したが、大正四年は更に輸入一億四千七百萬圓、輸出四千二百萬圓に增加した。此最近の輸出入を比較するに、開戰前に在つては、輸出は輸入の五分の一乃至六分の一といふ狀態であつたが、昨年に至つては輸出の割合頓に增加し、輸入の三分の一弱を占める事になつた。是は主として獨墺白の商品が杜絕し、及び英佛其他の商品が減少した結果、其代用品を日本に求めたからである。

更に昨年度に於ける百萬圓以上の輸出入品を檢するに、輸出に於て砂糖百六十五萬圓、樟腦百二十五萬圓、燐寸五百四十九萬圓、絹綿毛糸二百三十六萬圓、羽二重五百四十萬圓、綿布二百八十二萬圓、莫大小肌衣類三百十八萬圓、茶箱用板百六十六萬圓を擧げ、輸入に於ては、大宗たる棉花の一億三千九百七十萬圓に次で黃麻の百二十八萬圓、鐵の百二十三萬圓等を擧げねばならぬ。更に本年一月より五月末迄の輸出入を、前二年間の同期の分と比較するに左の如し。

輸出	大正五年	二三、〇〇〇、三七〇圓
	大正四年	一四、四六〇、〇〇四
	大正三年	一〇、九五四、四五三
輸入	大正五年	八五、六六〇、六一九
	大正四年	七〇、七五二、四六五
	大正三年	九六、九三五、一七五

右の勢を以て見れば、本年は昨年に比し、輸入も增加して二億萬圓を超過するであらうが、輸出が大增加して七千萬圓を越えるといふ豫想も出來る。誠に喜ぶ

べき現象である。

然るに茲に一つ憂ふべきは、戰爭の永びくに從ひ、或は英國が兌換停止を爲すの已むなきに立至らぬとも限らぬ。若さうなると折角發展しかけた我國の印度貿易が、殊に輸出に於て打擊を受けねばならぬ事になる。此點は今後我々の大に講究すべき所である。一體、日本商人の態度、取引上の不備等に就ては、別に我輩に說があるが、それは今秋發刊する筈の我輩の小著「帝國南進策」の中に詳述するから此には省く事とする。

然し兎に角戰前に於て、獨墺白だけで印度に對し約一億一千萬圓の輸出を爲して居つた。そして之を各品目に就て見るに、原料及製造能力の關係上、全然日本で製造し得られぬものもあるが、半分以上は我より代つて輸出し得るものである。其他英佛等の減退品中の一部も亦我より代つて輸出する事が出來る。

又輸入に於ても、日本の工業が益々發達するに從ひ、太糸紡績に適する印度棉も、細糸に適する米國棉も、共に輸入を增加するに相違ない。印度棉の如きは、或は三億に上るかも知れぬ。勿論原料品の輸入增加は我が生產業の發達を意味するのであるから、必ずしも憂ふるに足らぬが、然し少くも輸出入の平均する程度迄には最近に於て是非とも漕ぎつけなければならぬ。

そこで少しく海運力の事を一考して置く必要がある。目下日本郵船會社は孟買航路、カルカッタ航路を有し、定期船の外に臨時船をも出だし、大阪商船會社も同じく孟買航路に定期船臨時船を有し、外に社外船が活動ある。然し日印貿易の大勢から見れば、船腹は頗る不足を告げてゐる。最近我が海運力は大に增加し、殆ど二百萬噸に近き船舶を有してゐるが、其大部分は世界各方面に活動する必要があるので、印度方面にのみ其力を注ぐ譯に行かぬ。然し日印の關係が此際特に重大の意義を有する事を思へば、今後大に日印間の海運力を增加するに努めねばならぬ。是も我輩の特に警告して置く所である。

七　英獨經濟力に對する日本の覺悟

印度の棉花は大部分日本に輸出されてゐる。日本は

印度に取つて實に世界一の棉花の華客である。印度棉の相場は殆ど全く日本に依つて支配されてゐる程である。英國は固より印度の領有者として其貿易の大勢を支配してゐる。斯の如く印度に對して重大の關係を持つてゐる日英兩國が經濟上に種々なる衝突を起すは止むを得ざる所である。

一例を擧ぐれば、印度は英國より三億萬圓の綿織物を輸入してゐるが、日本も今後該地の綿織物の發達に伴ひ、此輸入の中に割込んで行く事は決して困難でない。現に開戰以後、日本人が次第に多く印度人と直接の取引を開始し、廣く印度内地に其手を延ばすに至つたが、之も英人には不平の種である。

又先年日本が印度の沿岸貿易を開始しようとした時、英本國及在印英人は之に對して不平を唱へたが、今では船腹の不足の爲、其聲靜まり、日本船は印度に於ける一部の沿岸を航海して居る。是につき先年英人チロル氏は、他の不平論者に反對して、寧ろ日本に有利の說を發表したことがある。曰く、日本は外國船に沿岸貿易を禁じて居るが、印度は是に就て何等の禁止なき國であるから、日本に對しても之に干涉すべき理由がないと。そこで我輩は考へる。日本と此際沿岸航路の禁を撤して自由に英人の沿岸貿易を許すべきである。

又去三月一日、英國は印度に於ける關税を改正し、多數の輸入品には從價七分五厘迄の税を課し、又從來の無税品をも有税としたのもある。右の課税は、今日に於ては左程の高率でもないので敢て恐るゝに足らぬが、若將來印度と英本國との間に關税同盟が成立する場合があるとすれば、それこそ日本に取つて大打擊である。殊に棉花に對する課税の如きは我が紡績界に取り大々的打擊である。是は豫め十分に警戒して防禦の策を講ずべきである。

或論者は日英の經濟同盟を主張し、産業に於て彼は精製品を主とし、我は粗製品を主とするが故に、兩國の利害は衝突せず、故に我は英の資本を利用して我産業の基礎を固むべしと說いて居る。然し日本の産業が

進歩すれば、次第に多く精製品を取扱ふ事となり、從つて英國と競爭の起るは避くべからざる所である。誠に英國の立場から紡績事業を觀察すれば、支那及印度は久しく其主要なる市場であつたが、今日では既に日本品が滔々として支那に入込み、更に印度に押寄せんとしてゐる。支那は猶忍ぶべしとするも、自國の領土たる印度を日本の蹂躙に委するは忍び得ざる所でなければならぬ。

現に英國は曾て印度内地に於ける紡績事業の發達に苦しみ、内地税を課して本國の紡績業を保護したではないか。今後印度の棉花に輸出税を課する場合がないと、誰が請合ふ事が出來よう。政治上には同盟國でも、經濟上の競爭國たる事實は如何ともする事が出來ぬ。日本の當業者は深く此點に警戒せねばならぬ。

獨逸は今日商賣も中止してゐるが、戰前に於ける其商權擴張上の努力を思へば、戰後の捲土重來は眞に想察に餘りがある。日本人は特に之に對抗するの用意が無ければならぬ。

要するに日本の商工業者は、此好機會に於て十分の覺悟を定め、十分の準備を整へ、各方面が提携聯合して商權擴張の大策を確立すべきである。

八　印度人の腐敗と其救治策

最後に我輩は印度人の品性に就て一言を費して置く必要を認むる。我輩の常によく人に語る所であるが、日本人と支那人と印度人とを比較して見れば、固より何れにも長所があり、短所があり、殊に外國人間の事は單純に斷定しかねる場合もあるが、然し大體から見て、日本人中の劣等の者も支那人中の上等のものに比して、猶品性が上にあり、支那人中の劣等の者も印度人中の上等の者に比して殆ど士君子と云ふべき程である。加之支那人中には多少の例外もあるが、印度人中には殆ど例外がない。亡國といふ事が個人の骨髓まで腐らせた程度は、其邊の經驗なき日本人の到底理解し得ざる所である。

彼等の不信、不義、忘恩、猜疑、嫉妬、陰險、陋劣な實例は、一々こゝに列擧するに堪へぬが、只日本人

の特に注意すべきは、彼等が極めて辭命に巧にして人の感情をそゝるの才を有する事である。ブライアン氏が表面の交を以て印度人の眞相を知らぬやうに、義俠なる日本人も或は輕々しく彼等の口車に乘せられまいにも限らぬ。

印度の革命運動の不成功も、人種や言語や習慣の相違の爲め一致提携の出來ぬのも一理由ではあるが、それよりも同志相互間の嫉妬猜疑と、臆病にして利己心强きとが、一層重大な理由である。

印度の亡國には深い歷史的の原因がある。印度人の悲境に陷つた罪は、之も英國の政治に歸するよりも寧ろ彼等自身に歸すべきである。彼等の中から此墮落せる品性を矯正するに足るべき偉大なる人傑が現はれて、一般人民を指導誘掖して自治を要求せしむるに至らざる限りは、印度人の將來は駄目である。自ら治める能力のない者が悲境に沈淪するに當然である。徒に過去の歷史を回顧して其宗敎哲學に誇りつゝ、續々として現實界の亡者を出しつゝあるのは、矛盾も亦甚だしい。殊に靑年にして外國の空氣に觸れた者は、自國人の產業さへ勃興すれば國運は直に進步するかの如くに考へ、徒に日本興隆の實例を見て猿の物眞似を試み、日本の歷史と國體と國民性との特殊なる所以は夢にも知らないのである。

印度が人口面積に於て支那の下位に在りながら、支那の二倍以上の貿易を營み、產業も金融も交通も發達し、一般に國として支那以上の進步を示して居るのは、英人を主として、其他の外國人が文明的組織、建設的設備を輸入した結果であつて、決して印度人の力と見る事は出來ぬ。

然し我輩は決して漫に印度人を罵倒して快を取らんと欲する者ではない。我輩は此の歷史ある古國に於ける三億の人民が、斯くの如き墮落の淵に沈淪すればするほど、之に對する同情の切なるものが存するのである。故に我輩は天國に勸告しない。英國が若眞に本國の利益を計るならば、眞に印度を强大な國にしなければならぬ。印度人の國民性を根本的に改善し、印度人

の精神を根本的に陶冶して、之を近代文明の域に導かねばならぬ。印度人の勃興は英國の統治權を危くすると考へるは大なる誤りで、英國の世界に於ける地位實力は如何に進步したる印度人をも統治し得べき筈である。若英人にそれ丈の能力が無いとするならば、印度人の反抗が無くとも英國の將來は危いのである。英國たる者、宜しく世界進步人類向上の見地よりして、眞の人道主義を以て印度に臨むべきである。我輩が印度人の改善を說く、亦實に將來に於ける東洋の文明、及世界の文明に寄與する所あらんとする微衷に依るのである。

九　タゴール翁に望む

尙我輩は目下來遊中の詞宗タゴール翁に對して一言の希望を述べ、以て此一文を終らうと思ふ。

翁の來遊に就ては、我輩は寧ろ其中止の噂の眞ならんことを希望して居た。翁は日本を買冠つて日本に來遊し、日本は又輕薄なる歡迎を以て翁に酬いる事とならば、其結果は恐らく双方の失望に終らんことを信じたからである。然し翁今や旣に我國に來遊して居られる。我輩は只相互に眞の理解を交換して相別れんことを希望するのである。

翁は詩人である。哲學、政治、經濟等の上に於ける精細の論議を望むは固より間違である。然しながら世人の多くは餘りに翁を誤解してゐるかに見える。翁の數回の講演は、只其美聲と麗句とを以て聽衆を醉はしめたに止まり、世人は猶單に翁を以て心靈を說き、精神を說き、神秘を語り、冥想を語るものと解してゐる。然し翁は決して單純なる詩人ではない。純粹なる精神主義者ではない。翁は亦實に國を愛し、民を憂ひ、世を救ひ、人を導かんと欲する仁人義士である。翁は歐洲の物質文明の弊を呪ふてはゐるが、其物質文明の强き力は十分に之を認め、猶歐洲に於ける精神文明の存在をも認めてゐる。翁は東洋の精神文明を高調すると同時に、其精神文明の多くは萎微して振はざる現狀を認めてゐる。翁が故國の衰亡を奈何ともすること能はず、切に新興の日本に憧憬して自己の理想の光明を此

に認め、以て纔に自ら慰めんとするの心事は、我輩の深く敬意と同情とを捧ぐる點である。

故に我輩は敢て日本人士に望む。既に翁の美音と温顔とに接して其理想に共鳴したる以上、必ず翁に代り印度人に代りて其理想を實現するに勉め、以て自ら東洋の爲に氣を吐くの任務に當らんことを。

同時に我輩は又敢てタゴール翁に望む。翁既に日本の依るべきを見、東洋の起つべきを信じたる以上、永く日本人士と提携し、殊に將來日本の思想界を指導するの原動力となるべくして、而も尚隱れて多く表面に現はれざる眞の識者賢者と接觸して、精神上にも物質上にも、現實に印度國民の啓發と指導と改善とに努力し、更に一層世界人類の進歩に貢献せられんことを。



家庭醫學叢書

お産の話	吾妻醫學博士述
小兒病の話	唐澤醫學博士述
耳鼻咽喉病の話	千葉醫學博士述
神經衰弱の話	山田醫學博士述
肺結核の話	額田醫學博士述
皮膚病の話	岡村醫學博士述
婦人病の話	佐藤醫學士述
淋病の話	廣川醫學博士述
黴毒の話	佐藤病院長述
肛門病の話	森肛門病院長述
ヒステリーの話	杉江醫學士述
胃腸病の話	南醫學博士述
病人看護の話	森醫學士述
精神病の話	中村醫學士述
脚氣とリウマチの話	菊地醫學士述
寄生蟲病の話	齋藤ドクトル述
小兒傳染病の話上巻	豐福醫學博士述
小兒傳染病の話下巻	豐[illegible]醫學博士述
感冒と肋膜炎の話	竹中ドクトル述
有益な食物と危險な食物の話附食合せの話	岡崎病院長述
男子生殖器病の話	[illegible]久津[illegible]士述
良薬と毒藥の話	森醫學士述
姙娠と避姙の話	高橋醫學士述
便秘と下痢の話	杉本醫學博士述

□各一册定價十五錢ヅヽ（郵稅各册二錢）
既刊前揭二十四册……以下順次刊行

目次無代進呈

希望者は往復ハガキにて申込を乞ふ

發行所 東京市銀座通新橋際振替東京二〇〇〇番（電話新橋一九九一）

新橋堂

蘆花 德富健次郎著

みゝずのたはこと

（六十三版）

批評抄

（東京朝日）現代の最もポピュラーなる文筆を代表する唯一の人の作として讀者を喜ばしむるに足る。（時事）どの頁を開いても面白く何れの章を繙きても倦む事を知らざるは本書の特色なり。（國民）一讀正に神往き魂飛ぶの感なくんばあらず。（東京日々）自然に宿る人生の力、人生に働く自然の力を氏が獨特の象徵に富む觀察と集注力ある筆致とに任し、興味趣味併せて著者の人格に交感せしむ。（萬朝）躍蹶として生活に忙殺せらるゝ都人寒村僻地の農民の爲に向上の伴侶たる可し。（讀賣）筆つきは更に地味な重々しさを加へて居る。（中央）一度著者の筆に載る時は路傍一纖の草、一掘の土悉く無韻の詩となつて無限の教訓と眞理を傳ふ。（二六）作家の筆は年と共に惑はざる境に達して居る。（東京毎日）清新の文字、純潔の生活讀者を魅了せざれば已まざらむとす。

定價壹圓 郵稅八錢

消夏絶好の讀物

德富健次郎著 黑い眼と茶色の眼（定價壹圓廿錢）
高濱虛子著 柿二つ（定價壹圓十錢）
長田幹彦著 自殺者の手記（定價六十錢）
櫻井大尉著 十字路（定價壹圓十錢）

各部共送料無料

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

高濱虚子
河東碧梧桐
兩先生序

（特價提供）

新撰俳諧辭典

岩本梓石
宮澤朱明
共著

▼訂正第四版▲

□四六判六號三段詰裝釘頗美麗全一冊
□紙數九百餘頁挿畫二百餘個貳千部限り

特價金貳圓
正價金貳圓五拾錢
郵稅 內地十六錢 臺樺卅五錢 朝支四十錢

■諸君は俳壇に一の完全なる辭書なきを遺憾なりとせずや!!

本書は宗鑑守武の創始時代より現今に至る三百有餘年の間に行はれし著名の俳書を涉獵して季題用語二萬餘を蒐集し直截簡明なる註解を施し以て一面古今の俳書を繙くに難解の恨なからしめ一面句案に際して取材の淵函たらんことを期す加ふるに精細なる連句作法、季寄、書引等を以てしたれば其索引至便を極む更に附錄俳諧人名譜に至りては古今の作者を網羅すること二千餘、前人未發の新史料多く史的研究家の好資料たり本書は實に斯道無上の寶典なり今回二千部を限り破格の特價を以て發賣す請ふ速かに俳士は一本を坐右に供へらるべし

■十七文字の流れを汲む者は必ず机上に備へられよ!!!

內藤鳴雪翁題

東京日本橋角
大倉書店
振替東京二一三八

（中付一の二）

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告は掲載謝絶す



實話 モルガンお雪

關露香

「自働車と電車と衝突して、お雪は上顎に傷を負ひ、それが爲め性來の美貌も損はれ、遂に入院したれば事件は法律の問題になるだらう」といふのがお雪の消息を語る最近の巴里電報である。

○

夫モルガンの客死の地方から漸く巴里に歸つたかと思へば今又此の椿事で京都では一方ならず心配して居る、殊に今年八十になつた實母のお琴は金よりも何よりも一目お雪の顔見て死たいといつて居る、姉の繼香（つぎか）や兄の音次郎なども落藉金の四萬圓に潤（うる）はふて今では

別に慾の皮も張らず、俊さんも彼の通り〇〇銀行の重役になつて陰ながらお雪の健康と幸福とを禱つて居る、それに何時までも巴里に居たなら諺にいふ女やもめに花が咲き遺産金の溫味で蟲が着く、扨ては亡夫モルガンの名にもかゝるやうなことがあつてはと餘計な心配や種々な取越苦勞で京都まで一方ならず氣を揉むで居る、何には兎もあれ此際一先歸つたらと皆んながさういふて居る。

一　胡弓の名人

花なれば未だ蕾の十四の春に、お雪は繩手の貸座敷尾野亭を見習茶屋として舞妓に出た、顏といひ、舞といひ、一點非難のない、姉繼香の流を汲むで、年齡には似合はぬ胡弓の名人、それが第一に呼物となつて祇園新地は廣しといへ、お雪に追付く舞妓は一人もなかつた。

明治三十四年六月五日、じと〳〵と降る雨漸く霽れて、圓山公園の新綠一際目立つ午後五時から六時の頃に、お雪は錢湯から歸つて鏡臺に對ふとまもなく見習茶屋であつた尾野亭から口が掛つた。當時十九になつたお雪の湯上り姿は、東山の新綠よりも鴨川の淸き流れのソレよりも遙かに美しかつた、お雪は平常の通り胡弓提げてトン〳〵と二階へ上つて行つた、其の途端に仲居のお高が「お雪ちやん異人さんどすぜ」といつた、御座敷にはお雪よりも先きに五六人の舞妓も藝妓も居た、三人の異人さんは褞袍を着て氣樂さうに兩足を投出したり、キチンと行儀よく座つたり、肘枕で横になつたり、胡座をかいたりして、三味線や踊りに見惚れて居た、お雪が胡弓を取出して十八番の鶴の巢籠を一曲彈くと、三人の視線が悉くお雪の顏に引締められて恍惚として居た、十時頃お雪はお座敷を了ふて屋形に歸つた。

二　一聲五十圓の祝儀

翌六日の未明に也阿彌ホテルの印袢纏を着た車夫が威勢よく尾野亭の前で梶棒を下した、「旦那此家だつか」といつてドン〳〵戸を叩いて見たが何うしても起きて來ないので、俥の上に居た御客がもどかしがつてすぐと車から飛び降り太い洋杖の先きで破れる程戸

を叩き續けた、漸つとのことで十二三のオチョボが眼を擦りながら潛戸を明けに來た、「お高はん昨夜の異人はんがまた來やはりまつたぜ、早うおきておくれやす」と眠氣半分ひよろめく足を踏みしめながらおちよぼは仲居のお高を起しに往つた、お高はふくれ面して前を掻き合せながら出て來るとお客は昨夜の胡弓の藝妓を連れて十時頃に圓山の溫泉に來てくれといふのであつた、お高も斯んなに早く叩き起されたが不平でたまらなかつたけれども昨夜の纒頭に免じて容易く請合つた。

お雪は仲居のお高に連れられて溫泉で待つて居ると、荒い縞羅紗の背廣を着た三十二三の昨夜の御客の中では一番年の若い異人さんが、ニコ〳〵顏でさも嬉しさうにやつて來た、けれどもお雪には英語は解らず、御客の方では充分に日本語が話せず、お互にモジ〳〵と睨合あつてるうちに料理が出たので三人共無言の業で箸を下したり上げたりして漸つとのことで食事をしてしまつた、歸がけに御客は上衣の內ポケットから祝儀の入つて居るらしいものをお雪に渡した。

お雪は屋形に歸つてそれを開けて見ると十圓札で五十圓あつたのに驚いた。

「お母はんどないしやう五十圓おすぜ」

「えやないか取つておきいな」

「でも薄氣味惡いさかい返したらどうどす」

「それはおまはんの心しだいにおしやす」

と實母のお琴は承諾の裏書してもお雪の胸には何ともなくそれが末おそろしい約束の手形でも受取るやうな氣がしてオイソレと其儘には受取れなかつた、それ故にお雪は仲居のお高を訪ねて祝儀を無理にお客へ返へしてしまつた。

三　モルガンの日本趣味

也阿彌に宿泊つて居たモルガンは飽くまでも日本趣味を味いたいといふので閑靜な景色のいゝ岡崎公園の附近に下女のお松を連れて一戸を構へた、家にはお松より二つ年したの仲居あがりのおきよといふのも居た、お松は若狹國三方郡西鄕村字松原の田中といふ百姓の娘で十九のときから中京の〇〇商店に五年間奉公して

奥の人たちにもお松々々といはれて非常に調法がられて居た、お松は百姓の娘に似合はず氣轉が利いて居る上に女としては可なり判斷力に富むだ、肉つきのいゝ色白の顔も十人並の女であつた、おきよはお松の姪で其頃は富小路萬壽寺下る料理店魚寅に仲居をして居たのをお松がモルガンには表向き垢の他人といふので雇ひ入れたものであつた、お松とおきよはモルガンに連れられて毎日〳〵臺所の道具や室内の装飾品などを買ひに出た、モルガンは金に任せて何んでも乎でもお松の言ひなりしだいに買つてやつた、家は何所までも紳士的の日本風に出來あがつた、四季を通じてモルガンの日本服もお松の見立で大丸や高島屋から持つて來た、當時三十二歳のモルガンは金椽眼鏡に日本服を着て脇息に倚り奥座敷の八疊から雅趣に富むだ庭先を眺めて喜むで居た、萬事萬端斯した工合で手落ちなく取揃へられたけれども尙此の家には何にか一つの不足した者が未だ摑まらずに何所かに逃げて居た、お松自身では奥さま氣取りなんかで萬事を扱つて居たに拘はらず、モルガンの胸にはアリ〳〵と胡弓の藝者お雪の姿が撮影つて居た。

お雪は尾野亭と圓山の温泉でモルガンと知らずに綠香に行つたきり其後は病氣して二た月余も稼業を休むで居た、それとも知らずにモルガンは此所彼所の貸席を漁つてお雪に口をかけて見たが何時でも病氣々々と許りで一向要領を得なかつた、始めは外國人の自分を嫌つて假病の鐵條網を張つて居るのだと獨りで合點して居たが、本當の病氣と知つてからはそれが自分の邪推であつたと悟つてそれから我心に幾分かの落付を見た、それまでといふものは少しもぢつとして居られないで、毎日幾回となく家を出たり入つたり、鎖細のことに腹ばかり立てゝ居た、お松は戀に捉はれたモルガンの此の狀態を充分に了解して居たが可能ならば人手にかけず自分でそれを療治して見たいと思つて居た。

四　お雪は始めてモルガンの氣を知つた

お雪の病氣中モルガンはお松に内證で帳場の車夫に托し、病氣見舞として洋菓に香水一打を斷つた、お雪は

此時始めてモルガンの名を知つた、そして共人が世界一の金滿家の息子で、病氣中は諸方のお茶屋から幾回となく口をかけて與れたことも仲居の誰彼から聽された、病氣が全快してから祇園新橋の貸座敷菱里樓から口が掛つた、お雪のほかに浪龍、笑葉と舞妓の手鞠、靜子、光勇、光千代、友千代に幇間の梅八、丈八の二人も招かれて居た、お客は共所に居ないで一同が俥で岡崎の或る別莊に行くのだといふのであつた。

俥は威勢よく玄關に着いた、主人公のモルガンは羽織袴に金椽の眼鏡を掛け頭髮も綺麗に撫でつけて玄關に出迎へ「おゝきに御苦勞さん」といつた、座敷には三人の外國紳士も居た、モルガンは座敷開きを兼ねて此等の紳士を饗應するといふのであつたが、其の實はお雪を招んで見たかつたのである、そして何時かは斯いふ風に二人でお客をして見たいといつた風の謎を我れと我心にかけて解いて居たのである、お雪は病氣見舞のお菓子のことや、自分の病氣中は諸方から幾度も御座敷を知らせてくれたことのお禮を述べた、モルガンは花のやうなお雪の姿を見たり、天使のやうなお雪の言葉を聽いて、身も心も何所かに掻浚はれて行かれるやうな氣がした、「あなた病氣なをりましたか、私大變悅びます」とモルガンはいつた、饗宴は夜の九時迄で續いた。

五　日本語の研究

モルガンの日課は日本語を研究するのと英字新聞を讀むのとお雪を招むで晝食や夕飯を共にするのと此の三つを除いては先づ何にもないといつてよかつた。それ故にお松は殆んど每日のやうにお雪を呼びに行つた、それは自分を踏みつけるやうに思はれてお松には頗る癪だつた、けれども主人の命令であるから仕方がなかつた、斯うしてモルガンがお雪と一所に居るうちは上機嫌で浮れきつて居ても、小雪が歸つてしまへば茫然と瑣細のことにも小言ばかりいつて居た、然しながらお雪の來ない時にはお松はモルガンと一所に食事をして居た、お松は下女であつてもサンづけにされて居た。

「お松さん」とモルガンの呼ぶ聲を聞いてお松は「それ始つた」と臺所で自分の下駄を踏み鳴らして「あほらしい又呼びにいけいといふのやらう」とおきよに不平を洩すことも度々あつた、「そんなに戀ひ焦れても對手のお雪さんには一向應つておまへんのや」とお松は嫉妬とじれ氣味で窃に罵つて居た。

モルガンは何時々々夕食を濟ますと英語の歌を口吟むで、椽側を行つたり來たり二三十分間も運動するのが習慣であつた、そして其の後でプイと出たつきり夜半になつても歸らなかつたことゝあつた、或時には翌日の十時頃になつて氣まり惡るさうに茫然と歸つて來たこともあつた、お松も始めのうちはモシャと思つたが、モルガンの此の行動はお雪には關係なしに、何所か他方面にあることゝ思つて深くも研究しないで其儘打棄てゝ置いた、何となればお雪のモルガンに對する素振がお松をして自分の判斷力に充分の信用を置かしめたからであつた。

六　お雪の所謂藝者道德

或日のことモルガンはお雪に對ひ

「私アメリカに歸ります、貴女決心つきましたか、」

と今日こそは眞劍の決答をお雪に促したやうであつたけれどもお雪は例のやうに

「私には旦那がおます御親切は難有ございますけんど」

と風に柳と吹き流して居た、モルガンは飽くまでも自分の金力に信頼してお雪の此の決心を飜さうと努力した、けれどもお雪の胸に燃えて居た俊さんの戀の情火は江河滿溢の水でも容易に消止めることが不可能ない程熾烈であつた、お雪は勿論モルガンを通り一遍のお客として取扱つて居なかつたけれども、而も金力ばかりが自分の意思を自由にし全然それを征服しきれるものだと思つて居なかつた、が愛嬌を賣るのは自分の商賣である以上は可能るだけ對手を怒らせず、成るべく對手に滿足を與へてやりたいといふのがお雪の常に心掛けて居た藝者道德といふのであつた。

明治卅四年九月廿日モルガンは下女のお松に萬事を

托して亞米利加に歸つた、出發の前夜モルガンはお雪を招むでお松と三人で名殘の晩餐を共にした、お雪はモルガンに餞すべく珍らしく胡弓を取出して鶴の巣籠を一曲彈いた、此の悲しき哀れな曲にモルガンは身も心も熔けんばかり恍惚として、竟には其の悲哀に耐え得ないでほろ／＼と涙を流した、お雪も矢張り弱い女であつた、彼女はモルガンの斯の如く切なる心情に絆されて我が眼に涙の湧き來つたのを覺えなかつた、お雪は「モー止めときます」と胡弓を自分の前の卓上に置いた、傍に居るお松も矢張り女であつたと見え主人の心を察して何うしても泣かずに居れなかつた、モルガンはせめてもの思ひ出でに胡弓をお雪の手から讓受けて歸つた。

七　兄が細工の贋手紙

お雪は五人兄弟の末子である、第一の姉のおうたは本年五十一歲で祇園新橋の貸座敷加藤樓を經營して居る、其次の姉おすみは末吉町に藝者屋をして居る、其の次のおなをは西陣の帶地商に緣付いて居る、兄の音次郎は三條富小路に今では可なり大きな散髮屋を開いて可なり繁昌して居る、兄の音次郎はお雪がモルガンを取逃して金の蔓を切斷してしまつたとお雪に會ふ度每其の腑甲斐なさを罵つて居た、モルガンはお雪と別れる時に英字で自分の所番地を書いた二十枚の西洋狀袋を渡して置いた、そしてお雪から約束の消息が必らず屆くものだと信じ切つて居た、モルガンは橫濱から乘船するときにも、桑港に着いたときにも、無事に紐育へ着いたときにも金釘流の片假名でお雪の許へ手紙を送つた、手紙の文句は極めて簡短であつたけれどもお雪を思ふモルガンの溢るゝ熱情が片假名の廻らぬ筆の跡にもアリ／＼と認められて居た。

お雪はモルガンから渡された狀袋を誰にも知らさず自分の用箪笥の中へ大切にしまつて置いた、それが何時の間にか音次郎に見付け出されて一枚だけ何時の間にか拔き出されて居たのであつた、音次郎はモルガンとお雪の間に立つて何にか一攫當演つて見たいと豫てから思つて居た、幸にアドレスの書いてある狀袋を見

つけ出したので、音次郎はニヤリと心の裡で笑つて早速それを利用してモルガンに手紙を送つたのであつた、手紙の意味は「都合に依て義理ある旦那と綺麗に手を切つたから可能ならば直ぐに日本へ來てくだされ」といふやうなものであつた。

八　口から出任せの四萬圓

神ならぬ身のお雪は自分の兄が斯んな手紙を送つたとは夢にも知らなかつた、そしてモルガンは此の手紙を見るや否や取るものも取り敢へず、直に出發の準備を整へ尚お雪の許にも此旨を認めて明治三十五年一月二日に紐育を出立し一月二十四日に横濱へ着いたのであつた。

ホテルに入ると間もなくモルガンはボーイを呼むでお雪に電報を打つた。

「今横濱に着いた、明日午後澤文で會たい」

驚いたのはお雪であつた、畢竟これは兄音次郎の細工に相違ないと思つて用箪笥を調べて見ると果して状袋が一枚不足して居た、意外とはいへ餘りの意外に呆氣に取られたお雪は此際如何して我身を處置したらよかららうかと、暫らくは茫然と思ひ惱むだ末に兄の音次郎へ人を走らした。

お雪は電報を兄の前に突きつけて、必らずこれには覺へがあらうといつた風の顏付で音次郎を凝つと見詰めて居た、音次郎はお雪の此の狼狽へかたを心の奥で冷やりと笑つた。

「それが何うしたといふのじや、お前だつて何時までも藝者して居らるもんやないし、今のうちに足洗ふて年とつたお母はんや私に安心させたはうがなんぼえやないか、洋人さんといふた所でもモルガンさんなら男もよいし、金もあるし、こんな結構なことが何所へえたとてありやへん、先方では當方のいゝなり次第お金を出すといふのやないか」

音次郎は敷島を啣へながら一向動ずる氣はいも見せなかつたのでお雪ははたと當惑した。

「なんぼお金を出すとおいやしても私はモルガンさんに身をまかすのは嫌どすぜ、兄さんが勝手に手紙

をだしやはつたので、こないなことになつたのや、明日にもモルガンさんがお越しだつたらお前がいて何んとか此の始末をつけておくれやす、私は死むでも嫌やどすぜ」

と力をこめてお雪は兄の忠告や勸誘を刎ねつけた、流石の音次郎も「こりや困つたナ」と腕を組むで思案投首の體であつた。

明れば一月二十五日の早朝に銕屋町二條下る旅館澤文から「今澤文に着いた直ぐ來て下さい」と名刺の裏に片假名で書いたものを携つて出入りの車夫がお雪を迎へに來た、お雪は吃驚仰天して起つても居てもおられず、「少しぐあいが惡いので寢て居ますさかい後からお伺しますといふておくれやす」と車夫を返へしたあとで早速音次郎を迎へにやつた。

「さあ此の通り愈々モルガンさんがお越しや、兄さんどないしてくれる」

お雪はモルガンの名刺を兄の前に投つけたので音次郎は

「何にもそんなに騷ぐことはない己れが行つてチヤンと話をしてやる」

と一も二もなく大安請に請合つたもの丶敵手は何分毛唐やから始末に終へぬ」と囁きながらお雪の家を出た、去ながら音次郎の立場としては之れこそ所謂寶の山に登つて寶を得ずして歸るといふものだ、何んとか善い工風のないもんかと只それのみを考へ込むで側目もふらず澤文に行つた。

「私兄さん知りません、兄さんに用ありません、お雪さん病氣なら此の毛布にくるまつて車でも籠でも乘つて來て下さい」

と取次の女にプン／＼怒つて音次郎を追返してしまつた。

「お雪、やつぱりお前が行かんと納まらぬわい」

「それ見たことか言はんことやないし兄さんどないしてくれる」

「どないもこないも乃公じや駄目や矢張お前いてくれ、先方やてアメリカ三界から態々きたのやないかお前もその邊の所をちと思ふてやれ」

お雪は故と頭髪を亂し如何にも病人らしく見せかけて母のお琴と兄の音次郎に連れられ澁々ながら澤文に行つた、取次の女中は母と兄には用はない何所かに待せて置いてお雪さんのみ奥に通して呉れとモルガンさんがそないにいふて居るといつた、此の挨拶を聞いてお雪は進まぬ足を靜々と奥の一間に運むだ、雨に惱む海棠のそれよりも尙濃艶なお雪の姿を一目見てモルガンは「お雪さん」と一言いつたばかりで其の手を堅く握りつめた、そして暫ばらくは何んとも言得ないで電氣に打たれた人のやうに五體をブル〱ふるはして居たが軈て詞を次いで「あなた約束の旦那と手を切りました、私大變悦びますモー構ひせん」と嬉しさの餘りモルガンは顏の造作を崩し魂を宙に飛ばしてしまつた。

お雪は彼の手紙は兄の細工で造りあげた眞赤な噓の贋手紙であつたとは今更口にも言ひ出しかねて、何んでも之れは大袈裟に吹かけて金で愛想づかしをやるより他に仕方がないと覺悟した、「旦那と別れる話つきましたけんど四萬圓ちうお金がないと妾の身が自由になれまへん」といつた、お雪は咄嗟のうちに只譯もなく此位なら先方も定めし驚いて必らず尻込みするに違ないと思つたのであつた、流石のモルガンも四萬圓と聞いて驚かずには居られなかつた。

「東京でも一萬圓一番高價いと聞ました、それに四萬圓、それをあんたは何うするのです」

「三萬圓は旦那の手切金であとの一萬圓は妾の借金や其他の費用に」

お雪は我が心にもなき申出をしたのであつた、モルガンは暫時思案に暮れて沈つと考へて居たが「宜しい私考へて置きます」といつて別室に待せてあつた母のお琴や兄の音次郎を我が室に呼び入れてお雪の紹介でお互の挨拶を濟した、モルガンは自分の好きな魚の鯛と鰻の料理を命じ、四人一緒に種々と面白き世間話などして夕方まで樂しく其の日を暮らした、七時頃になつて母と兄とはお雪より先きに家に歸つた、それと入れ違ひに下女のお松は柳行李や合財袋を提げて若狹から急いで出て來た、モルガンは京都に着くと直ぐ驛か

らお松に電報を打つてあつたのであつた、お松は自分より先きにお雪の此所に來て居たのを不平面で眺めた、夜の九時過お雪はモルガンの强いて引止めるのも聽かず「明日また來ます」といつて無理に末吉町の屋形に歸つてしまつた。

九　二千圓と四百圓の指輪

お雪の歸りを今か今かと待ち倦むで居た兄の音次郎はお雪の歸りが餘り遲いので歸つてしまつたが、翌廿六日は朝早くからお雪の所に來て、母のお琴とお雪と三人で何にか頻りに話し合つて居た、十時前にお松はお雪を呼びに來た、「旦那は貴女のお越しが遲ひによつて迎へにいて來いと私を追ひ出すやうに攻め立てますので私はお迎ひに來ました」とお松は迷惑さうにいつた、お雪はお松に伴れられて進まぬ足を澤文に運むだ。

モルガンはお雪の顏を見るより「四萬圓のこと昨夜から種々考へて見ましたが今直ぐと返事できません、二月十二三日頃相談する人來ます、其の上で極めます」といつた、それを聽いてお雪は漸つと胸を撫で下し、座敷の隅にあつた碁盤を引張つて來て、退屈まぎれに何時もモルガンのする五挺列べを勸めた、晝飯はお松さんも一緒にとお雪の差圖で三人食べた、それが濟むでお雪が歸らうとするとモルガンは床の上にあつた鞄から、「お雪さん貴女にお土產あります」と中から取出した二個の指輪は價格二千圓の大きなダイヤ入りのものと今一つは純金に唐草模樣を彫刻した寶石入りのもので價格は四百圓だといふのであつた、お雪も女として殊に藝妓の身としては咽喉から手の出るやうに慾しかつたらうが、只さへ義理の重なる上にそんな物を貰ふては自分で自分を縛るやうな者だと再三再四斷つて見たけれどもモルガンは何うあつても承知しないので遂にそれを貰ふとにした、勿論お雪も其時には夫れ程金高のものでないと思つて居たのであつたが、懇意の時計屋や姉さん株の誰彼れに見て貰つたら「お雪さんこれはあんた大したものでおますぜ、とても五百圓や千圓で買へまへんぜ、それにあんたがモルガンさんに兩手を取られて此の指と此の指に嵌められやしたら、

それは日本でいふ結納とおんなしものやと私共(わたいら)聞いてます、あんたは之れで愈々モルガンさんに身を任したといふやうなことしになりますぜ」と岡焼せられぺチヤクチヤと雀の囀づるやうに諜舌りつけられたのでお雪は吃驚仰天し、早速車に乘つて澤文へ飛むで行つた、そしてお雪は兩手から指輪を拔取つて「斯んな立派なものを私が嵌めてるとどんな災難に遇ふやら分りまへんさかへ一先づ御返し申します」とモルガンの前に二つの指輪を差出した、モルガンはお雪の此の處置を見てムツとした、そして顏色を變へて「お雪さんそんな心配ありません、私折角亞米利加から持つて來ました、貴女私の顏つぶしますか、私少し腹が立ちます」とモルガンは稍々不安の體で無理にもそれをお雪に押つけやうとした、けれどもお雪は何うあつても再びそれを受取らうとしなかつた、斯して押問答したあとで結局お雪は價格の安い方を一つだけ貰ふことにして屋形に歸つた、其後お雪は隔日位に澤文に行つた。

十　四萬圓即金で押通す

モルガンは下女のお松と仲居上りのおきよとを呼び寄せて澤文の奥座敷二室を占領して殆んど一家族のやうに宿泊(とま)つて居た、其所にお雪が加はつて他愛もなく日を送つて居るうちに、二月八日の朝突然横濱からモルガン宛にて電報が届いた、電文は「今着いたビゲロー」といふ至極簡短なものであつた、けれどもモルガンには極めて重大な關係のあつたものと見えて渠は此の電報を手に取るや否や狼狽して横濱へ出發した、翌九日の夜にモルガンはビゲロー博士夫妻を伴れて京都に返つて來た、ビゲロー博士は紐育の辯護士でモルガンの依頼を受け報酬五千圓の契約でお雪落籍の法律上の顧問として態々米國からやつて來たのであつた、博士夫妻は都ホテルを宿としてモルガンと毎日のやうに往來した、其の結果落籍金は即金で貳萬圓、あとの貳萬圓は二千五百圓づゝ八ヶ月間に實母のお琴に支拂ふてお雪はモルガンと一緒に亞米利加へ連れて行かれるといふ一方の相談だけは首尾よく纏つてしまつた。

口でこそ四萬圓といつたものゝお雪の胸には何うし

て此の大した金が現金で自分の手に渡さるゝであらうか、何んぼ金持でも之に愛想が盡きて落籍は必らず中止になるだらうと我れと我心に極めて居たのに、條件附とはいへ兎に角四萬圓出すといふのでお雪も吃驚仰天した、最早此上は四萬圓即金說を固持して飽くまでも此の難境を脫れ出んものと、内と外との大敵を引受けながら彼女は逃られる所までは逃げ通うさうと決心したのであつた。

十一　お雪の情夫は大學生

そぼ降る雨を衝いて威勢よく馳け來つた俥の幌の中から「最う此の邊でよろしい」と女の聲がした、俥は南禪寺町の、とある長い築地塀の角で梶棒を下した、半分すぼめた蛇の目の傘に顔を隱してコートの濡れるのも厭はず、兩側の生垣に沿ふて小徑を東に二三町步つたかと思ふと女の姿は消えてしまつた。母家から二三間隔つた離れの西窓の半障子を外から窃つと一寸ほどあけて家の樣子を窺つて見たが誰れも居ないやうであつた、東に廻つて椽側の隅に足駄を重ねて八疊の座敷の障子を明けて見ると、床の間には書籍や新聞や雜誌などがだらしなく散亂して机の傍の火鉢に火も消へて居た、次の四疊半には新聞を擴げて塵のかゝらぬやうにしたる飯臺があつた、其の傍の炭取とマッチを持つて來て折詰の空箱で頻りに火をおこさうと女は焦心つて居た所へ、三十一二の少し苦味走つた顔に八字の髯を蓄へた書生風の男が手拭に石鹼を包むで口に煙草を啣へながら庭石を傳ふて、一段高い切石の上に足を踏み掛けて今しも傘をすぼめやうとする途端に、渠の視線は銳く椽側の隅にあつた女の下駄に注がれた。

障子を明けると室内に濛々と立籠つて居た煙が逃口を見付けて椽側の天井裏から軒下を傳ふて庭の植木を烈しく咽ばせて居た、「留守に來て斯んなことをすると彼の口喧しい母家の下女に咎められてどんなよを言はれるか分つたもんじやない」と男は叱るのではないが稍々重い調子の小聲で女の不注意を詰るやうにいつた。

「斯んな寒いのに一人でぼんやり待つて居らりやへん」と女は少し不平面で答へた、男は机の前の大きな

座布團に坐つて女を凝つと視詰めながら「今日は又何うしてそんな服裝して來たのか」と折かへして問ふたが、女はせつぱ詰つた苦しい心のうちを知りもしないでそんな小言らしいことがよくも言へたことか、といつた風の顔付で返事もしないで默つて俯いて居た、「例の一件か」と男は追かけて問ふたが女は未だ返事もしないで默つて居た、女は心の中で殘らず打明けて言つてしまはうか夫れとも飽くまで隱して自分獨りで所決しやうかと取つ置いつの烈しい爭闘に思ひ惱むで居た、けれども今日の新聞にあんなに書かれてしまつたからには最早何にもそんなに隱す必要もないと覺悟して、「あんた今日の新聞をお見やしたか」「見たけんど嘘だと思ふて別に驚きもしなんだ」と男は答へた。

「四萬圓といふたら吃驚して尻込するやらうと思ふたらそれだけ出すといわはるので最うのつぴきならぬことになつてしまひました」

「それでお前は何うしやうといふのか」

「そやさかい貴君はんに相談しやうと思ふて來たのどす」

「己だつて此の場合お前に何うせよ斯うせよと指圖がましいことはできない、それはお前の心一つで極めるがよからう」

「それでは貴君はんは何うでも善いといふのどすか」

「何うでも善いとはいはんが己もお前から學資を貢がれて謂はゞ飼犬同然の今の身の上であつて見れば、それを判然と斯うせ彼うせと命令する權利も何にも無い、卒業までは己も何んとかしてやつて行く積りだからお前一人りで處決したら可い」

「あほらしい私へはそないな水くさいことを聽に來たのやおまへん、何うでも四萬圓卽金やないと旦那と手が切れまへんと言ひ切る積りなんどす、そしてもう一度亞米利加に歸むでもらう積りなんどす、そしたら何日のまにか忘れはるやらう、私は殺されても身を任かすのは嫌やどす」

斯うして女は身も心も一切男の意の動く通りに任せ切たと宣言してから、暴風の空のやうであつた彼女の胸

も忽ち晴れ渡つて靜かにどつしりとした落付が來たのであつた、「川上さん私もう歸ますわ」と夜の八時頃に女の影は此所から消えてしまつた。

川上は鹿兒島縣の士族で明治三十年頃東京〇〇省の腰辨であつたが、公用で京都に來て圓山公園の平野家でお雪の舞妓姿を見たのが始りで、其後大阪の保險會社や銀行の社員となりソレ以來足繁くお雪の許に通ひ、遂には未來を契る夫婦約束の證書まで取替して、之より一奮發と京大法科に入つて南禪寺町の或家の閑靜な離れを借りて自炊して居たのであつた。

十二　澤文の奧座敷で落花狼藉

京阪の諸新聞紙は筆を揃へてお雪も四萬圓で到頭モルガンに落籍さるゝことになつたと事實みたやうな想像を加へて旺んに書き立てゝ居た、そして此時から四萬圓藝妓の名が一時にパッと擴つた、四萬圓といふレーコド破りと對手が外國人だといふので花柳界は勿論のこと、何所でも彼所でも寄ると觸ると總て此話で持ち切つて居た。

音次郎とお松とは事件の蔭に隱れて旺んに何事かの計劃を廻らして居た、下女のお松は隱然お雪落籍の排斥者であつたけれども、澤文の二階で音次郎と密會してから兩者の間に何かの秘密條約が結ばれたと見えて、お松の態度ががらりと變つてしまつた、お松はこれまで何かにつけてモルガンとお雪を引離さうと考へて居たのが、近頃になつて裏面からお雪の落籍をモルガンに勸めるやうになつたといふのに就ては何か曰くがなくてはならなかつた、お松の斯うした態度は色氣を離れて慾氣に岸を變へてしまつたのであつた、音次郎はお雪の四萬圓即金說が到底ピゲロー博士の容るゝ所でないと悟つてからは、三萬圓即金で後は月賦といふのでお雪を說服せしめ、お松はモルガンに說いて音次郎の折衷說に聽かんことを勸めた、そして若し之が首尾よく成功した場合にはお松は四萬圓の三分の一即ち一萬三千三百三十餘圓のコンミッションを音次郎から直接受取るべく充分の協議が纏つて居たのであつた、それ故にお松はモルガンに勸めて毎日のやうにお雪

を澤文に伴れて來た、一方音次郎はお雪の屋形に日參して兄の威光を振翳し「愈お前が皆んなのいふとを聞かなけりや川上にも會はさないやう此の兄が仕向けてやる」と啖呵を切つて脅迫した、お雪はお座敷も受けないで只泣いてばかり居た。

巧妙なお松の運動が漸く成功してモルガンは愈々即金三萬圓を何時でも音次郎に手渡しせうといふことになつた、お松は天にも昇るやうな氣分になつてお雪を連れて來た、モルガンは愈々お雪を掌中の玉と握る氣運の漸く熟し來つたのを大に悦むだ。

「お雪さん兄さんやお松さんのいふ通り私三萬圓即金出します」

エーと顏色を變へたお雪は

「私そんなこと未だ承知しまへん、兄やお松さんが何んといやはつても私は何うでも四萬圓即金やないと旦那に言譯ありまへん」

決然お雪は席を蹴立てゝ逃げ歸らむとするので遉のモルガンも嚇と急ぎ上げ顏色忽ち土の如くなつて、「それ貴女何んといひます」と五體をブル／＼顫はしながら突然襖を突き破り、狂氣のやうになつて何んでも手でも手當次第投げ散らし蹴散らす騷ぎに、お松もおきよも呆氣に取られて逃げ迷ひ、此の上如何なる椿事が起りはせぬかと只ガタ／＼と顫ひ怖れて居るばかりであつた、其のうちにお雪は漸くモルガンに取縋り胸に顏押し當てゝさめ／＼と泣いて居た、モルガンも漸く氣を取直し怒を鎭めてお雪の肩を撫で、「私、大變悪るい、最う泣くこと入りません」と宥め賺して「今日は此の話やめます、そして貴女の一番上手な鶴の巣籠聞きませう」と昨年歸國の際お雪から讓受けた胡弓を取出してお雪の手に渡した。

お雪はそれを見て何んと思うたであらうか、モルガンは何所に行つても此の胡弓をお雪と思ふて片時も離さず、歸國中を我が書齋に懸けて只それ許り眺め暮らして居たといふのである、流石にお雪もそれと聞いては泣かずに居れなかつた、お雪はそれやこれやを思ひ煩ふて心は糸の如くに亂れた、そして手に胡弓を取り

げるだけの勇氣も出なかつた、彼女は雨に惱む花のやうに重たく頭を垂れて、今しも心の苦痛にウト〳〵と寢入るやうな茫うとした氣分になつた。

　モルガンは一時の感情に激して狂人のやうに猛り狂ふた我が粗暴を頻りに詫びて居た、そして乞食の物乞ふやうに「胡弓を胡弓と」頻りに賴むで居た、戀に捉はれた男といふものは總じて斯んなものかとお松は心のうちで冷やかな笑をもらして居た、金鐵も熔けさうな熱い涙がお雪の臉を張切つてポロリと一滴膝の上に落ちた。

　お雪は胡弓の音締を整へて漸く彈き始めた、一高一低の樂調は神を喚び妙に入り、最も悲しく哀れに聽へた、モルガンは魔の如き胡弓の威力に飜弄されて、其れが夢か現かと聞き惚れて居た、斯くしてお雪は一曲を奏し終つたので、情に熱したモルガンの心は恰も炎々と照る暑の日に聚雨一過後の爽けさを覺ふるやうになつた、お雪の心も一轉して重い惱の裡に咲き出した蓮の花を見るやうな氣がした、お雪はモルガンと晩餐を共にして家に歸つた。

十三　お雪自殺を計る

　夜の十時頃にお雪はフイと家を出た、而して夜半の一時頃になつても歸つて來ない、母のお琴は狼狽し始めた、三條の音次郎に聞いても知らぬといふ、西陣の姉に使を出しても來ないといふ、加藤樓の姉に聞いたら一寸來て歸つたといふ、澤文に電話をかけたら八時頃に歸つた切りだといふ、夫れでは必然り情夫の川上だと見當をつけたが川上も居ないので駈落だと極めてしまつた。

　草木も眠る午前の三時か四時の頃にお雪は霜を履むで茫然りと歸つて來た、「まあ、この寒いのにお前はんは何所に」と老母のお琴は涙ぐむで訊ねた、けれどもお雪は一言の返事もせずに長火鉢の前に默然と坐つて居た、島田もガックリと根落して蒼白いお雪の頰に髮の毛が五六本亂れて居た手足も氷のやうに冷くなつて身體にも顫ひが來て居た、「早う火燵に入つてお寐んか」と老母の切なる情を酌み取つてお雪は其儘轉ろりと寐

床にころがつた。

兄の音次郎の壓迫やモルガンの切なる情や、情夫の川上の將來などを思ひ浮べてお雪は此際何うして我が身を處置すべきかに迷ふた、而して此等の大問題を彼女自身で適當に消化させるだけ夫れ丈け彼女の意力も能力も充分でなかつた、彼女は此の世に於ける自分の存在が消滅すれば其れと同時に此問題も自然に解決するものだと考へた、其れ故に彼女は他所ながら此の世の名殘りを川上に告げやうと思つて無斷で屋形を出たのであつた。

四隣闃として聲なき夜半に獨りインクラインの水の音のみ轟々と疏水のダムに湧き返つて居た、漸く東山の空を離れた月は玉と碎けて其所に飛び散つて居た、森々と晝尚暗き松の繁みを縫ふて疏水に近く人影が認められた、間もなく「お雪さんお雪さん」と世間體を憚る壓つけた重苦しさうな聲で男は呼び止めながら追跡して來た、女は狼狽して立ち止つたかと思ふ間に男の手は女の右腕を鷲掴みにして粟田口の方へ引張つて行つた、而して二人の影は智恩院境内の何所かで消えてしまつた、半時餘り經つて影は再び祇園新地の末吉町に現はれた、お雪は無事に我が屋形に送り屆けられたのであつた。

十四　お松は色氣より慾氣に岸を變へた

日頃の烈しい感情と昨夜の苦しい悶えとに勞れ切つてお雪は火燵の中で四五時間も氣持よく眠り通うした、寐返りを打つてもう一寐りと思ふ際どい瞬間にお松の聲がしたので、彼女の胸が俄かに波打つた、「どないしやう」と母のお琴が小聲で窃つと知せに來た、「お上りといふとくれやす」とお雪は答へて其儘起きた。

色氣よりも慾氣に勝味を占められたお松は進むでお雪を迎へに來た、然ながら肝心の本人が飽くまでも我を張つてはモノになりさうかなどお松は思つて居た、お松は有らむ限りの智慧を絞つてお雪に說いて見たが餘つてお雪の話を聞いて見ると兄が關係して居る以上は縱しモルガンが三萬圓即金で出すといつた所でそれはお雪の手に一文も落ないで音次郎に皆攫はれてしま

う、それよりは最う一度モルガンに歸國を勸めて其中ゆくりとお松と相談して兄との關係を斷つたら、四萬圓の半金はお松と折半にしやうとお雪からの相談を持ちかけられてお松も一應それは最もだと心を動かし始めた、けれども只つた今落籍のことのみ勸めて未だ其の舌の根も乾かぬうちにモルガンに一先づお歸りなさいとはお松としては如何にも言出しかねた、お松は智慧袋の底を掻浚つて持つて來た策はビゲロー博士夫人を利用するにありと考へた、それ故に彼女は澤文に足を向けないで都ホテルにと取つて返へした。

通辨の井上と一緒にお松は應接所で博士夫人に會つた、お松はモルガンの不品行を居卸して外國の紳士として顔にかゝるやうな事件の發生しない前に最う一度モルガンを連れて歸つて貰らいたいといふのが博士夫人に頼むだ大體の主旨であつた、お松の語る所ではモルガンは東京の新橋では南金六町の藝妓眞島とよと紅葉館の女中お鹿と、而して京都では島原の雛窓太夫大井太夫薄雲太夫、祇園では鈴香の外に五人の娼妓を敵手として錢を湯水の如うに費ひ扱てはお雪の落籍話に殆んど毎日のやうに新聞種を供給して紳士としての體面を汚し居ることとなれば今一應主人モルガンに反省を促がすやう、何ソレにはモルガンを日本から離してほとぼりを冷すより外に途はないと力説したので、博士夫妻は早速電話でモルガンをホテルに呼び寄せお松から聽取つた一部始終をモルガンに告げて一先づ歸國したらばと說き勸めた、モルガンは今までの我が私行を忌憚なく曝露されて顔から火が飛出るやうな思をした、が何故かお松を叱責らずに、通辨の井上を出拔けに廊下で敲つて眞蒼白になつて澤文に歸つてしまつた。

お松はモルガンの尋常ならぬ樣子を見て不安に思つたが主人の自分に對する態度は別に異つて居ないで大に安心した、「お雪さん未だ來ませんか」とモルガンは心配さうにいふた、お松は「お雪さんは御座敷で家に居あはりません」と答へたのでモルガンは落膽りした。

十五　扨ては短銃自殺か

博士夫妻は歸國の準備を整へて横濱へ出發した、モ

ルガンは見送の爲め博士と同行したが翌日直ぐと京都へ引返して來た、澤文の自分の客室に充てられた一室が留守中に山口農商務省技師の一行に占領されて居たのに憤慨して女中のおてるが夕飯の膳部を運むで來るのを引捉へ其儘それを隣室の襖に投つけてしまつた、それ以來モルガンは一室に立籠つて外出もせず欝々と思ひ惱むで四五日を經過した。

三月六日になつて久振りでお雪が譯文に來た、モルガンは非常に悅むで「お雪さん決心つきましたか」と膝擦り寄せて問ふて見たがお雪は「四萬圓現金やないと旦那はんと手切るゝと難しうおます、貴君はんが京都にお居やすと何にかにつけて都合が惡るいさかい、一先づお國へ歸はつたら其の後でお松さんと私と相談してきつと都合のよい手紙あげます、私可愛さうとおもはつたら克く聞分けて是非歸んでおくれやす」と詞を盡して熱心に說き勸めたのでモルガンは非常に失望し、「私兩親と朋友に對して會す顏ありません、貴女の手紙噓でないと思つて來ました、それに今獨りでは歸られません、ビゲローさんにも恥かきました、モー私決心しました」と鞄の中から短銃を取出すより早く我と我が咽喉と銃口向けてアハヤ一發引金を惹かんとする刹那、お雪はアレと一聲叫むで飛鳥の如くモルガンに飛びかゝり短銃を奪ひ取りながら聲を顫はし「貴君危い何うなさる」と其儘に泣伏して暫らくは顏も得あげなかつた、斯うしたモルガンの神經昂奮が驕ては純粹の發狂に導く徑路を今は一歩づゝ辿つて居るやうに思はれた、お松とおきよは買物から歸つて來た、そして此の尋常ならぬ二人の樣子を見て「またか」といつたやうな顏付きで別に氣にも止めなかつたが、短銃の轉がつてあるのを見てお松にギクリと胸を轟かした。

十六　七百五十圓の女持金時計

花の國に來てもモルガンは我が思ふ花も手折れず、徒らに意外の花に戯れて遣瀨なき欝をやつて居たが、竟に意を決し三月九日神戸解纜の膠州丸で獨逸の伯父を訪ねた上、六月紐育に歸り九月再び京都に來てお雪落籍の最後の活劇を試みん豫定で下女のお松おきよの

外旅館澤文番頭等に手廻りの荷物を托し、九日早朝神戸へ出發せしめた其の後でモルガンはお雪を呼び、晝飯を共にし、名殘の胡弓を聽き、河原町二條下る寫眞館盈科園にお雪の寫眞を督促し漸く其を受取つた後で、モルガンは餞別として鞄の中から兩蓋十八金の女持懷中時計に三尺餘の純金鎖(時價七百五十圓)を添えてお雪に與つた、お雪は嬉しくもあり懼しくもあつたが、兎に角手に取つて時計の蓋を開けて見るとコハ抑も如何に其の裏には自分の定紋である扇伏蝶が彫刻してあつたのに驚いた「何うして貴君はこれを」とお雪は訊ねたら「昨年歸國のとき貴君から譲受けた胡弓の縮緬の袋にそれが染拔いてあつたのを紐育の時計屋に賴むで彫刻させた」とモルガンは得意の顏に笑を洩らしながら答へた、お雪は女として斯くまでに心盡しのモルガンを不憫なりと心に思はないことでもないが、何にしろ自分には川上といふ未來を契つた法科大學生があり、そして自分は其の戀の王國に俘虜となつて鐵の手錠や足枷を嵌められてからは我が身でありながら我が體が自由になれなかつた、それとも知らずにモルガンはお雪の所謂旦那といふのは普通の所謂旦那であると思つて飽くまでも其の旦那と手を切らせうと焦つて居たのであつた。

如何に別を惜むでも遠慮なく刻むで行く時計を引止むる譯には行かなかつた、モルガンは旅館の門までお雪に送られ三人曳の腕車に飛び乘つて戀の活劇舞臺の京都から遂に其の姿を隱くしてしまつた、お松は五百圓おきよは百圓の餞別を貰つて鄕里の若狹に歸つてしまつた。

十七　戀に破れたお雪の狂態

四萬圓の藝妓とかモルガンお雪とかいふ冠詞を被つた祇園新地の藝妓お雪の名が全國の諸新聞紙に依て藻汐燒く漁村の隅々までも撒つた、而已ならず京都では芝居や二輪加にまで仕込まれお負けに西陣ではモルガンお雪織といふ帶地や反物までも織出す騷ぎとなつたそして川上俊介も着物の裏地や芝居の道具として是非なくてはならぬことゝなつた、事情を知らぬ鹿兒島の

川上の兩親が覆返るやうな此の世評に驚いて俊介の歸郷を促がすことが愈急であつたことも强ち無理でもなかつた、俊介は兎も角も兩親に安心させやうと思つて親戚の某女と婚約を結むで京都に歸つた、そして間もなく大學を卒業して法學士の稱號を荷ふた。

斯うしてお雪と俊介の戀は結局不成立に終つた、お雪が血を吐く思ひをして人知れず學資を貢いだことも、貞操を固守してモルガンに其身を賣らなかつたことも、苦悶に堪え兼ねて幾度かの自殺を謀つたことも、素人の服装(みなり)をして川上の自炊を助けたことも、嫌な座敷に笑顔を作つて努力奮闘したことも其他何にも乎も今は全く一夜の夢と化してしまつた。

斯うなつてはお雪の操行も若しくは其の心理狀態も已むなく變調を來さねばならなくなつた、それ故にお雪は今まで嗜むで居つた酒もガブ／＼と飲むやうになつた、別に可笑しくもないのにゲラ／＼と笑ひ出すこともあつた、悲しいこともないのにクス／＼と泣き出すこともあつた、そして夜などは不意に寝床から飛び起きてモルガンの名を呼むだり、川上の惚氣を言つたりして老母お琴の涙を搾らしたこともあつた、彼女は斯ういふ病狀の下に四ヶ月あまり稼業を休むで居た、それにも拘はらず、四萬圓藝妓の顔を一度なりとも拜みたいといふ信者が益々殖へて來た、彼女が再び左褄を取つて「へイ今晩は」と言ひ出したときに、九州の石炭王貝島某は祇園新地の大嘉樓に陣取つて四萬圓藝妓が居らぬといふなら要所々々に網張つて否が應でも引捉へ來いと、金の威光で殆んど美人に極つた溺死女を捜索するやうな大騒ぎを演じたこともあつた、斯くして石炭王は數日間大嘉樓に流連したあとで遂に老妓おえんの執持ちで二人は大津の石山方面へドロンを極めた、其れに次いでは上州の絹布王下橋某といふ老人は旅館杉の井を根據としてお雪の尻を追かけ廻したがこれは到頭ものにならなかつた。

十八　雛窓太夫の落籍

卅六年六月横濱阜頭に三度びモルガンの姿は現はれた、お松は自分の横濱下着まで何にもしてはいけない

との返電をモルガンに打つて置いて其の足で若狹を出た、モルガンは前回のお松の不平に懲りてお雪よりも先きにお松へ知らせた、お松はお雪と約した落籍金四萬圓の折半を首尾よくお雪い手から受取れるか何うかと不安に思ふて最早其れを斷念して居た、それ故にお松は今度こそは一回もお雪に會さず、戀に燃ふるモルガンの心を他に轉換させて、自分は矢張りモルガンに吸ひ付いた蛭のやうにジリ〳〵と血を吸ひ取らうと思つて居たのであつた、「お雪さんに電報打ちます」といふモルガンの詞を捉へてお松は「いけません、貴君お雪さんに知らせると直ぐ又新聞に出ます、さうすると出來る相談も出來なくなります、今度はそつと內證でお雪さんの様子を見た上でのとにしませう」との忠言を納れてモルガンはお松と一緒に京都に來て再び旅館澤文に投宿つた。其夜お松は島原の角屋に電話をかけた、用件は雛窓太夫を聘むで置いて貰らいたいといふのであつた。

角屋では四萬圓大臣のお越とあつて何から何まで手落ちなく準備した、當時二十一歲の雛窓は花なればパツト開いた許り色も白い肌も餅肌だ、眉も濃く、眼は涼しく、そして未だ廓に慣れぬ素人臭い愛嬌を頰の何所かに漂はせ、燃え出しさうな緋縮緬の湯卷を煽つてぽつてりと肥太つた股のあたりを散らつかせながら心落なくモルガンを待遇した、斯して彼女の動作は勿論渦き切つたモルガンの情慾を唆り出したに相違ない、「雛窓さん大層綺麗になりました、久振りでしたな」とモルガンは非常に滿足して翌日澤文に歸ると間もなくお松を伴れて南禪寺附近の明別莊を捜しに出掛けた。

雨に洗はれた東山の新綠を眺めてモルガンは新たに借り入れた南禪寺橋畔の中村氏別莊の緣側に其の身はソファに横えながら今までにない雛窓太夫が待遇振を惚氣半分お松に戯つて居た、お松は此所ぞと突込むで「日本の女かてお雪さんのやうに薄情の人ばかりでもおまへん、もつと美うて親切な人幾らもおます、お雪さんには情夫があります、何んぼ貴郎が戀ひ焦れてお慕ひやすかて、夫りやあきまへん」と罠に罹つたモル

ガンを此の手で絞めつけやうと試みて居た、別莊にはお松の外に例のおきよ、お瀧、おちえ、そして高等淫賣上りのお梅といふのも居た、此の五人の中でお梅は年も若く其上一番愛嬌があつて而も顏は綺麗で肉附きも良かつた、お松の心の中ではお雪に對するモルガンの心機轉換策は外では雛窓太夫、內では何れでも撰り取りの大安賣だといふやうな献立をして居たのであつた、そして自分は飽くまでもお雪を排斥して一家の主婦であるやうに振舞ひたかつた、雛窓がモルガンの氣に入つて萬一落籍さるゝやうになつてもお雪に比べたらより以上に自分を尊敬するに相違ないと思ひ込むで居たのであつた。

モルガンは殆んど毎晩のやうに島原に通つた、お松は稍不安に感じたが自分の蒔いた種子に折角芽生の來たのを無殘にも踏みにじらうとはしなかつたが、折に觸れてはモルガンに意見の一つもして見たい氣がした、雛窓は遂に落籍されて別莊に引取られた。

十九　化物屋敷のモルガン邸

お雪はモルガンの京都に來て居るとも知つて居たそして南禪寺橋畔の中村氏別邸には種々と取合せた妙な女で毎日賑つて居ることも知つて居た、左樣いふちに時日は遠慮なく經過して卅六年も押し詰つた十二月の中旬となつた、或夜のことモルガンが覆面の强盜に脅迫されて俄かに怖氣たち、歸國するか轉住するか、何れか思ひ迷つて居ることもお雪は新聞で讀むで知つて居た、モルガンは堅く門を閉ぢて一歩も足を外にせず毎日欝々と何か考へこむで居る樣子もお雪は風の便りで薄々知つて居た、然しながら今となつてはお雪もお松の手前もあり世間體もあつて自から進むで南禪寺方面に足踏み向ける譯に行かなかつた、モルガンの斯うした態度は總てお松の差金だといふこともお雪には充分讀めて居たが、去ればといつて今の狀態をモルガンに知らせやうとするのは以前の我が心に愧ぢて、お雪としては到底出來ない藝當であつた、それにも拘はらず彼女は殆んど半年餘もモルガンから一言の消息も洩らして來ないのは何ういふ譯かと異むで、女として

は誰にもある普通の嫉妬心で南禪寺を横眼で睨むで居た、其の癖眞劍にモルガンの方から斬込むで來たらお雪は逸早く踵を見せて逃出すのであつたかも知れない、何には兎もあれ南禪寺町と末吉町の間には濛々と何時動ぐか知れない疑問の雪が充ち滿て居た。

お雪は化粧を終つて今しもお花に行かうとする午後の六時頃に、表の猿戸を明けて「御免」と一聲女の這入り來つた樣子にお雪の胸は波打つた、老母のお琴は未だ風呂から歸つて來ないので障子を明けたお雪はお松を座敷に上げた、お松は我が心に愧ぢて今までの經過を一々お雪に報告するだけの勇氣が出なかつた、それに今鐵面皮にもお雪を訪ひ來るといふのは彼女に取つて非常な苦痛であつた、それにはお松をして此所まで足を運ばせる丈けの理由が是非なくてはならなかつた、お松はお雪に斯う言つた。

「主人は突然明後日歸はりますと言やはつたので私共は貴女はんのこともあるさかい最う暫時居てくれはつたらと御願したけど一向聽かはれまへんので何うしたことやと心配して居るうちに是非一度貴女はんに來てもらうやうにお願ひにあがれと私を打つたり蹴たりしますかい私は直ぐと國に歸ますといふたら又機嫌を直しやはつて一時間でも二時間でも美いさかへ貴女はんに來て貰ふやう賴むで來いと言はりますのでお願ひに參りました」

「あゝさうどすか、私もモルガンさんの京都に居はることを薄々知つて居ましたけどお知らせのないのに行きましてもと思ひまして遠慮して居りましたのどす、それでは明日午後からお邪魔に出ませう、何卒よろしう」

とお雪はお松を歸して御座敷に行つてしまつた。

暮の二十六日で世間は何んとなしに騷ついて居た、お雪は島田髷を故ざと揚卷に結び直し白襟紋付の丁度仕立あがつて來たお正月の着物に金通しの帶を行儀よく太鼓に占めて帳場の車で南禪寺の別莊に著いた、何日にも似合はず大門が一杯に開かれて其附近さへ綺麗に掃除した箒の跡があり〳〵とお雪の眼に認められ

た、お雪の心は何んとなく氣憶れして居た、夫れと察してモルガンはフロック姿で白襟紋付のお松を引き連れて恭しくお雪を迎へ入れた、お雪は何んのことやら薩張り譯が分らなかつた、それであるのに豫て噂に聞いて居た島原の雛窓太夫や高等内侍のお椛や其他の女中の影などが一つも見當らず家内は寂然として誰も居らない様子にお雪は尚更驚いた、「他のお女中は」と問ふたら「今日は皆んなでお芝居に行かはりました」とお松は答へた、モルガンは極り惡るさうに迂路々々して珈琲やお菓子のお世話まで燒いてゐた、軈て二時頃になると何所かの料理屋から大變な御馳走がドシ／＼と運ばれた、床の間には雪舟の山水の幅が一對掛つてある、其の下に見事な盛花がしてある、其の右にお雪の讓つた例の胡弓が飾つてある、そして違棚の上にお雪の胡弓を彈いて居る寫眞も立てかけてある、上座に坐つたお雪は何んとなく手もち不沙汰であつた。

「貴郎明日歸なはりますさうで」

「私六月に來て一度も便りしません、貴女の蹤家に觸るとお松さん言ひますから遠慮して居ました。私明日一寸歸ります、又來年來ます、日本の新聞五月蠅さいです、亞米利加でも最う評判あります、雛窓さん落籍しました、これは人の噂取消す爲めであります、然し私の心少しでも貴女を忘れたことありません、私貴女の定紋腕に刺靑しました、旦那さん何うなりましたか」

お松はモルガンの詞を遮つて「お雪さんの身の上話し少しもしません約束しました、モーいけません」と意地惡く口出したのでモルガンは俄かに悄氣返つて「話、最うしません、私約束忘れました、許して下さい」とそれより三人で御馳走を食べカから種々と世間話をして樂しく一日を暮らし、お雪は夕方になつて「それでは御機嫌よう」と挨拶して歸つてしまつた。

二十　お雪モルガンの妻となる

モルガンの歸國は全然虛僞であつた、これはお松をして術中に陷いらしむべき表面の口實であつた、お松はモルガンに勸めて雛窓を落籍せしめ淫賣上りのお

梅を押つけて自分は純然主婦氣取りてモルガンを自由自在に飜弄して居たのである、モルガンは此の蜘蛛の巣に引掛つて悶え苦み半年餘りもお雪に會ふことが可能なかつた、斯うしてモルガンを掌中に握つて居たお松は最早これで安心といふ一寸の間隙を見せた、愈明後日歸國するから一目なり共お雪に會ひたいといふモルガンの切情をお松が同情心で受け容れたのが間違つて居た、モルガンもお松も服裝を改めてお雪を迎へたといふのは最後の會見といふ意味も含まれて居た、それが出來上つて居たお雪の正月着と偶然にも一致したものと思はれる、餘りに穿ち過ぎたやうでもあるがモルガンとお雪がお松に依て交通を遮斷されて居る中に音次郎といふ陰影が兩者の間に動いて局面一轉の動機を造らせたといふ人もある。

愈々出發といふ朝になつてもモルガンは一向平氣で濟し返つて居た、お松はこれは又何うしたことかと呆氣に取られて居た、彼女は髮を逆立て眼尻を釣り上げてモルガンに喰つてかゝつた「貴郎虛言吐あります、私最早知りません、直ぐと國へ歸ります」と呼吸も絕え〳〵聲を顫はして泣き叫むだ、モルガンはお松の此の權幕に慴れ縮み上つた「私お正月をしてから歸ります」といつて平身低頭お松に詫びて怒氣を鎮めやうと試みたけれども駄目だつた、お松は狂言にしろ皆んなの手前もあり一旦は家から足を踏み出たが夜になつて窃つと歸つて來た。

モルガンは卅五回目の新年を迎へた五日目に飄然と我家を出た切り歸つて來なかつた、祇園新地末吉町のお雪の屋形にも問題の女四萬圓お雪の影が見えなくなつた、其後二十日の日附で京都下京區役所に一通の書留郵便が舞ひ込むだ差出人は横濱市山下町六番地加藤ゆきとしてあつた、書中の文面は

國籍喪失屆

京都市下京區新橋通大和小路東入二丁目
橋本町三百八十七番地加藤音次郎妹

加藤ゆき

明治十四年十二月七日生

右は明治三十七年一月二十日北米合衆國人民同國紐育市ジョージ、デニソン、モルガンと婚姻を爲し隨つて同國戸籍を取得し日本國戸籍を喪失仕候間此段及御屆候也

右　加藤ゆき㊞

明治卅七年一月二十日

戸籍吏

中山研一殿

京都市下京區役所に提出したお雪の國籍喪失屆中に不備の點があつて其れが訂正さるゝと同時に戸籍謄本が横濱山下町十番地小林米珂方加藤雪宛で屆いた、謄本を手にしたお雪は朱筆で十文字に我が名の抹殺されたのを見て、暫らくは凝つと其れを睇視して居たがこれで愈自分も日本人でないのかと思へば何所ともなく寂しさを感じた、然うして熱い涙が一滴ぼろりと彼女の眼から搾り出された、彼女はこれ切り日本人でないといふやうな恐ろしい死の宣告を幾度も我が耳の傍で聽くやうにも思ふた、區役所に死亡屆が出ると戸籍吏は死亡本人の姓名欄を朱筆で抹殺する、國籍の喪失も戸籍面上それと同じやうに取扱はれて居るのである、此の故にお雪の血管には縱し日本人としての血は流れて居てもそれは窃つと内證で言ひ得ることで表面では彼女はモルガンの妻として立派に米國人となつてしまつたのであつた、そして昨日まで日本人であつた彼女は最早親兄弟にも日本人として語ることも出來なくなつた、東山の緑も鴨川の流れも彼女に取つては最早日本人としての眼で見ることが出來なくなつた、同じ一日の日であつても昨日と今日の境界線は彼女に取つて極めて遠い昔であつたかのやうに思はしめた、お雪は種々と斯ういふことを思ひ浮べて其日一日を沈痛の裡に暮らしてしまつた。

　卅七年一月廿二日モルガンとお雪の結婚式が横濱の小林米珂氏宅で行はれた、立會人は兄の音次郎と在横濱紐育病院長ロビー博士と小林夫婦其他數名のもので、正式の結婚式はモルガンの郷里紐育府で擧行さる

ることになつた、此のことを傳へ聞いた祇園新地は殆んど轉覆かへる樣な騷で何所でも彼所でも總てお雪の話で持ち切つて居た、お雪も到頭四萬圓で操を賣つたとか、落籍の金高が四萬圓であるとか無いとか、情夫川上の寐返りで今度はお雪の方から進むでモルガンの妻になつたとか、お雪もモルガンの三年越の戀に心から哀を催して川上の面當に今では金に眼もくれず自分の方から持かけたのだとか、何んとか乎とか云ふ人聞く人各々思ひ／＼の想像で尾に鰭を付けた評判をして居た、然しながら落籍金はお雪の最初に云ひ出した通り果して四萬圓であつたか、或はそれ以上であつたか、そして其の金が何いふ風に分配されたかといふことは當事者以外誰にも分らなかつた、然しモルガンはお雪と結婚する爲に現金十萬圓の用意をして居たことは事實であつた。

二十一　お松も雛窓も新聞て吃驚

お正月を京都で迎へてそれから直ぐと亞米利加に歸るといふモルガンの口實を夢にも知らなかつた雛窓太夫は、お松に對ひ、「旦那はん何日お歸りやすやろ、えらい遲うおますな」と心配さうに問かけたのをお松はそれに就ての事情を知り拔いて居るやうな顏付で「そりや貴女旦那はんはお雪さんと一緒とすもの何時お歸りやら分らへん」と雛窓の嫉妬心を誘き出す積りで自分も岡燒半分晤夜に想像の鐵砲を放つて見たのが不思議にも命中して居たのでお松さ、嘸吃驚りしたことであつたらう、勿論斯いふことにかけてはお松も茫やりとした女でないから今までとは變つて居たモルガンの樣子や態度に充分注意はして居たものゝ正さかに斯うまで話が進むで居たものだとは思はなかつた。

廿三日の朝早く玄關に投げ込まれた大阪朝日新聞に「四萬圓お雪遂にモルガンの妻となる」といふ看出の記事があるのを見て下女のおさよは「お松つあん旦那はんとお雪さんが新聞に出ておますぜ」ときんきら聲を張あげてお松に知らせた、寢卷の儘飛び出して來たお松は「どれ、何所に、まあ、何んちうことやらう」と凝つと紙面を睨むで居たが、續いて奥から出て來た雛

窓に新聞を手渡してお松は暫時く我が胸に打つ動悸の波を靜めやうとして居た、雛窓もそれを見てギクリと胸を跳らしたがお松ほどに動ずる氣色も見えなかつた、根が正直で、柔和で何所かエットリとした性格を有つて居る雛窓は早晩此の事件が湧いて來ると豫て覺悟を極めて居たからである、それにしても、斯うまで迅速に低氣壓が襲ふて來るとは夢にも知らなかつた、お松も雛窓も一身上俄かに不安を感じた、「此の先き何うなるのやらう」といふ疑惑の雲が二人(ふたり)の頭に往來した、然しながら雛窓にして見れば縱しお雪が落籍になつてもお松とお雪とが入れ代るばかりで自分に取つては却て其方が良さゝうにも思はれた、そして自分はモルガンから決して犬猫のやうに直ぐと追出れるものでないといふ信念を何所かに漂はせて居た、がお松は雛窓と違つて始から事件に關係して居る上に大切な金といふ問題を解決しなければならないので一層不安に感じたのであつたら。

二十二　お雪と雛窓太夫

廿四日午前七時何分かの七條驛着下り列車の一等寢臺室から、男は先きに年の若い女を護衛して何となく世間を憚るやうな態度でプラットフオムを早足に、驛の出口に待つて居た幌馬車の中へ其身を投げた、御者は馬の尻に一鞭加へて烏丸通から四條を一直線に、圓山公園を粟田口に拔けて東の坂をグイ〳〵と押上げつゝ洋館のホテルの前で馬車を停めた、ホテルの支配人始め數名の館員等は禮裝して此の二人を出迎へ直ぐと第卅一號の見晴らしの好い室に導き入れた、男は心の底から嬉しさうな顏をして客室(へや)を出たり入つたり何から何迄一人で世話を燒いて居た、女はグタリと安樂椅子(ソファ)の上に身を投げて汽車か何にかの疲勞(つかれ)を醫やして居るやうであつた、軈て一時間も經つたかと思ふ頃に五六人の盛裝した女客があつたがそれらの人々が間もなく歸つたあとで、年の頃は廿一か二の色の白い肉づきの良い中肉中脊の柔順(おとなし)さうな女が太い棒縞の御召の重ねに日本人にはない鹿の首を染拔いた五つ紋の黑縮緬の羽織を着て怖氣(おじ)〳〵と氣まり惡るさうに入つて來た。

安樂椅子の女はそれと見て直ちに起き上つた。
「使ひが届いて、あら、まあ、さう、もちつと傍にお越やす、お松はんは」といふ詞尻を受取つて今入つて來た女は
「お松はんはお腹が痛いちうて寢て居はります」
ソファの女は矢繼に問ひかけて
「皆はん知つていてゝか、まあさうどすか、昨日の新聞で、早いもんどすな、はあさうどすか」
と聽ては獨りで合點して居た女は何により先きにお松の擧動を知りたかつた、そして此際彼女は何う所置するかに就ては細心の注意も拂はねばならなかつたが、それは自分が取捌く用でもなく横濱で極めた通りにすればそれで良いのだと思つて更にまた二人で問答を始めた。
「貴女のお母はんは、粟田口に一人りで、さうどすか、おや山城の方は、妹さんと妹さんと弟の新さんと、そしてお父はんは五年前に死なはりました、へえさうどすか、貴女も隨分不幸な方どすな、私共は廿七日に此所を出て廿九日の船で亞米利加に行つて、來年の夏頃歸つて來る積りなの、それまで貴女はんはお母はんと一緒に南禪寺の方で留守番してとくれやす、貴女はんには私の方から月々三十圓づゝお小遣をあげるやうになつて居ますさかい、いゝえそれは主人も知つて居ますのやさかい何にもそんなに氣兼することはないのどす、その外のことは横濱の小林さんとピロー博士さんとが引受けてやつて與れます」
雛窓は不幸な我が身の上話をして顏も得あげず始終鼻拭で涙を拭いて居たが、月々三十圓の小遣料で一ヶ年あまり留守番の役目を授けられたので一刻も早く母に知らせてやりたいと思ひながらホテルを出た、母のすみえは此際親子二人の運命が何う成り行くものかと廿三日の一夜はマンジリと寢つかれもせず、とつおいつ二人の中に夜を明して茫然と尙火鉢の傍で考へこんで居た所へ、娘のおふさが歸つて來たので俄かに居直つて「お前はんそんな服裝して何所に」と事情を知らなか

つた母は娘に問ひかけた、「今都ホテルでお雪はんに會ふて話がすつかり極つてそれをお母んに知らさうと思ふて」とおふさはいふた、そしてホテルで聞いたお雪の話のうちには温い同情心が籠つて居ることや、ホテルでは女王のやうにお雪を取扱つて居ることや、お松は金と交換にお挑箱になつて若狹に歸りさうなことや、何にや平を言ひ開かして雛窓のおふさは先づ之れで一安心と火鉢にすり寄つて立膝の長煙管で一ぷく煙の輪を吹いて居た、が倘彼女の心の奥にはお雪に對する嫉妬の焰がちらほら燃えて居ない譯でもなかつた、殊に母のすみえに取つてはお雪と我の娘のおふさとが入れ替つて居ならといふ慾望心がむら／＼と湧き返つて居た。「お雪さんだつて新地の藝妓さん、おふさだつて島原では二と下らなかつた太夫さん」それが本妻と妾といふ掛け離れた此の運命を慾には限りのない母のすみえはもどかしく思ふて居た、「それにしてもお雪はんは豪らいもんや、未だ肩上げの取れるか取れない十八や十九で、大學生々情夫にもつて內證で月々何十圓といふお金を貢いで居やはつといふのやないか」と獨りで斯んなことを言ひながら我が娘の腑甲斐なさを隱然罵つて居たやうにも聞へた。

廿四日の都ホテルのブックにはルーム番號に次いで

Mr. G. D. Morgan
Mrs. Yuki Morgan

と英語で列べて書いてあつた。

二十三　モルガンとお雪の出發

崖の上のホテルの窓から直ぐ下に松の陰に隱れてモルガンの別莊がある、西へ降れば直ぐとお雪の屋形で、ホテルと末吉町とは眼と鼻の間である、それにも係らず二人とも我が家の方へは一歩も足踏み入れず、親兄弟の外ホテルでも面會謝絶でモルガンとお雪は出發の準備に忙殺されて居た、室內にはモルガンの晴れの衣裳として、上着は黑羽二重に鹿の首の五つ紋、下着は白羽二重の二枚重ね、羽織も黑羽二重に矢張り鹿の首の定紋、袴は仙臺平、帶は綴織、お雪の方もモル

ガンと同じ布地で三枚重ね伏蝶の五つ紋付に兩裾模樣、帶は幽谷織であつたが一層のとお雪の定紋だけを馬の首に變へたらモルガンの定紋の鹿の首と釣合が取れて良かつたかも知れなかつた、新調の婚衣の外に數十枚の四季を通しての和服、尉と姥の島臺其他のお土産物はホテルの一室に累々と山の如く積み重ねられてあつた、モルガンは紐育の東六十一街の自宅に歸つた上は純日本式で正式に結婚式を擧げる積りで儀式に關する一切の必要品を買ひ整へて居たのであつた。

廿七日は愈京都出發であるからモルガン夫妻は早朝から盛裝して二頭立の幌馬車でお雪の母や兄弟を歴訪した、それからお雪の實父の墓所である東福寺塔中同聚院にも參詣した、そして其の朝の八時六分七條驛發の上り急行で横濱に出發することゝなつた、此の日は兄の音次郎も三條の店を休むで新調のフロツクに大きなステツキなんかを振り廻はし、何うして此男が散髪屋の親方かと思はれぬ程男振りを上げて、これ見よがしに何にかの世話を燒いて居た、そして祇園新地から七條驛にかけての道路は宛然で陛下でも御通行遊ばさるゝ時のやうな騒ぎで、見物人が兩側に堵列して鹽小路署が取締の爲に巡査を派遣したといふ位であつた、モルガンとお雪を乘せた馬車が驛に着くと、見物の群集は我れ先きにお雪を見んとてワツショ／＼の掛聲で押合ひ壓合大混雜をした、モルガンもお雪も此の騒ぎでは汽車に乘ることが出來ず、出張巡査の制止で漸つと出發することが可能たのであつた、モルガンは先づお雪の手をとつて一等寢臺車に入れてから自分はプラツトフォムに歸つて來て見送りの人々に一々丁寧に挨拶して、それからお松と雛窓の手を取つて幾度も幾度も握手なんかして、そして三ケ年かゝつた戀の堅城を漸く陷め落した凱旋將軍であるかのやうに出發した。

廿九日お雪は横濱出帆に際し金五百圓を恤兵部に獻金した。

二十四　嵐山に花吹雪の一夜

嵐山の濃き綠を染分けて今を盛りと櫻が一ぱい咲いて居た、橋の河上の水は堰かれて陰暗き淵の水面の花

の影がぼんやりと浮いて居る、春の淡い夕陽を浴びて嵐山電車から降りた肥太つた男の背後に艶かしい女の影が一間も二間も離れて右に左に人を避けて附いて居た、來る人よりも歸り客が多くなつた此近邊を件の男は只ぶら〱と無意味に歩いて居た、花に誘はれて出て來たのでもないらしい、さればといつて嵐峽の景色に憧がれて居る様子でもない。

彼は女を連れて嵐峽館に入つた、其の時には最う電燈がついて居た、二階の八疊の眞中に彼は溫袍を着て氣味の惡い程白い毛脛を露はして居た、彼は餉臺の上に列つてある鮎のフライやオムレツ見たやうなものと其他二三點の日本料理などを、一つ〱味はつて見ながら、コツプに盛あがつたビールの泡を吹き飛ばして一氣にグイと飲み干しては、又一杯といふ風に女の前にこれを突出して居た、そして見る間に二本のビールを平げてしまつた、其頃には彼の眼のふちがホンノリと赤くなつて居た、彼は覺束ない日本語で女に話かけた。

「モルガンさん、エール大學卒業しました、私同じ學校、仲の良い友達ヨ、私ネ矢張日本の娘さん好きです、貴女柔順しネ、私國の娘さん大變活潑ヨ、日本の娘さん皆遠慮ありますネ、」

彼は一言いふ毎に始終俯いて居る女の顏を覗きこんで獨りで喋舌つて居た。女の氣は少しも引立つて居ない、頻りに何にか考へて居るらしかつた。彼女は仲居が運むで來た會席膳に對ひ吸物とお飯を少し食べた位で其他のものは何にも咽喉を通らないやうであつた、彼女は南禪寺の別莊を出る時に早や屠所に牽かるゝ羊であるかのやうに感じた、嵐山に來て花に醉ふた他の女を見る毎に我身を怨めしく思ふた、彼女は我が心に懸けた鐵の重りの爲に足が竦むで少しも歩けない様な氣がした、嵐峽館に入つてから今にも魔の手が彼女を鷲掴みにせはすまいかと、彼女は男の一擧一動に注意してビク〱として居た、時は移つて最早十二時近くになつた、女は怺えかねて、「お母はん案じて居やはるさかい私いなしてもらたい、」と言つた時には早や座敷に寐

床が二つとつてあつた、女は刻一刻と我が身に近づく恐怖の念に襲はれて座敷の隅に小さく體を縮めて居た、此時彼女は端なくも子供の時分に我家の裏の堤防が崩れて大洪水のあつたことをフト思ひ浮べた、泡立ち沸返つた水が見るまに床を浸し水量がズン〳〵と下座敷一杯になつて、彼女は家人と共に物置の二階から家根に避難して、今にも家諸共押流れさうになつた其の物凄い光景を恰度今夢見るやうな心持で想ひ出して居た、彼女の心は其時と同じやうな恐怖に浸染されて居た。

俄然電燈が消えて室内は眞暗となつた、同時に「アレー」と叫ぶ女の聲ドタンバタンと烈しく抵抗する物音、宛然嵐山に花吹雪の光景、隣室の襖がガラリと開いて電燈の光が煌々と室内に流れ込むだ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「横濱の小林さんからも返事がないし、あのことから月々の手當も貰へないし、ナーおふさ、最う一ぺん島原へ出るより仕方がないじやないか、明日にでも私が木村の親方に話して見やうか、なおふさ」

と南禪寺の別莊から追出された雛窓親子が三條通粟田口の自宅で首を集せての相談であつた。

「そやかて、旦那はんやお雪さんに話もせないで無斷で行くのは惡いやろう、B博士さんも見かけによらむ人どすな、始めうちは大變親切にしてくれはりましたのに」

四月の始めからB博士は監督の爲め南禪寺のモルガン留守宅に來て居た、其の當時これも矢張りモルガンの學友で精神に稍異狀のあるウイリアム、クラッカーといふ者が病氣保養の爲め京都に來て都ホテルに滯在して居た、B博士はウイリアムの保護者である關係から彼を引取つた、これが雛窓親子を放還するB博士が表面の理由ともなつた。

二十五　人形は腹て泣く

ピアモンヽ、モルガンが世界的の富豪として名高いだけに其の甥に當るジョージ、モルガンの名も米國中

普く知らない者がなかつた、殊にお雪事件から米國でも一層名高くなつた彼が今問題の女お雪の手を引いて郷里紐育に歸つて來るといふので到る所の新聞紙が何れも筆を揃へて熾んに書き立てた、滑稽なのは紐育の名高い新聞で麗々と金閣寺の寫眞を掲げて之が京都に於けるモルガンの別莊だなどと吹いた、甚だしきは手當り次第美人繪はがきの我が藝者の顔などを掲載して、花の國の花の姿なるお雪さんなどゝお雪の姿を四つにも五つにもして出した、そしてお雪の親は日本で名高い刀鍛冶で備前に生れて維新の際京都に移住したのだといふのもあつた、而も當時は日露開戰中であつたからお雪は到る所で歡迎された。

六十七歳になつたモルガンの父は諧謔に富んだ頗る面白い老紳士であつた、彼は世間の噂や新聞で評判になつて居るお雪の姿を誰れよりも先きに見たいもんだと思ふて居た、レノツクスの別莊にお雪を迎へ入れた時彼はお雪を盆栽のやうだと觀賞した、少さくて完全した綺麗なものだといふ意味だつたさうな、言語が通じなくても人情學や社交術を研究して居たお雪の眼は口よりもヨリ以上にモノ言ふた、お雪は總ての人から美しい着物を着せた人形だと言はれて居た、人形は口をきかないが腹を押せば泣いた、親兄弟に別れ萬里の波濤を乘切つて、風俗も習慣も一切變つた此異人種の一大家庭では、流石にお雪も腹で泣いた、祇園新地でお客の機嫌氣褄を取るのに比べると此の方が餘程勝手が惡かつた、お雪は日本語に熟達した一婦人を家庭教師として熱心に語學を研究した、根が怜悧な女であるから其の方の進步も餘程早かつた。

お雪は何所へ行くのにも華美な和服で押通した、それは着慣れぬ洋服を着れば工合の惡るいカラクリ人形のやうで總ての點に於て調子が取れなかつた、唯つた一度着て見た所が誰れも彼もクスクスと笑ひ出したので洋服は夫れ切りやめてしまつた。

モルガン家の人々はお雪を人形のやうに可愛がつたが只一人モルガンの繼母であつたサラ、エリザベツトのみは常に毒々しい惡しみの眼でお雪を睨らむで居

た、彼女は五十八歳で父モルガンの後妻となつてから家庭には風波の絶ふる間もなかつた、同じ兄弟の中でも彼女はジョージ、モルガンを眼の上の瘤のやうに取扱つて居た、親子の仲が斯いふ風であつたからジョージは世界漫遊の途に上り、そして京都でお雪の戀に落ちたのであつた、夫れ以前にジョージ、モルガンにはマッケーといふ婚約の美人があつた、マッケー嬢の父とモルガンの繼母とは紐育で懇意の間柄であつた、然るにジョージ、モルガンが二度目に京都から歸つた或日のこと、モルガンは此のマッケー嬢と湖上にボートを浮べてお互に久振りの戀を物語つた、モルガンは暑さに耐え兼ねて下着の薄い襯衣までも捲り上げた、モルガンの左の腕に刺青があつた、彼女の穿鑿的眼光は忽ち其を捉へて蒼白になつた、或はそれがお雪の似顔であつたかも知れない、之が爲に婚約が直ちに破棄された、そして繼母のサラ、エリザベットは父モルガンとも衝突してレノックスを去つて海風徐ろに吹くバア港灣の別邸に閑居した、それ以來彼女は父のモルガンとも子のジョージとも顔を合せなくなつた。

お雪は係る家庭の不和を聞いて非常に心を痛めた、彼女は何によりも先きに家庭の此の風波を平定ることが自分の責任であり又功名手柄であると感じた、それを決行するのには繼母の顔を立てゝ夫モルガンを抑制へ自分は三人の間に立働いて其の楔子とならねばならぬと思つた。

お雪は嫌がるモルガンの手を無理に引張つて度々繼母を訪ふた、蛇のやうにお雪を嫌つて居た繼母も、熱情の籠つたお雪の待遇を無理に刎ねつける譯にもいかなかつた、そして繼母の胸に張詰めて居た冷たい感情の氷も漸次と解かけて來た、同時に弱い女の情として彼女はお雪を可憐に思ふやうになつた、此の機を外さずお雪は夫モルガンに勸めて暫なりとも繼母と同居すべく説き勸めた、斯ふしてお雪は繼母を征服して今までに不和であつた親子三人の手を握らせた、藝者として鍛え上げられたお雪の冴えた腕は異人種の此の家庭に於て遺憾なく發揮された、此に於てか純日本式の結

婚式も行はれ、其れに次いで米國の法律に適應した公然の儀式も濟むでモルガン夫妻は新婚旅行として巴里に向つた。

二十六　お雪京都に來る

卅八年三月十日神戸埠頭にモルガンとお雪の姿が現はれた、日も麗らかに照る春の光を浴びてお雪は一年と二ヶ月目で戀しき故郷の土を踏むだ、彼女は茶色綾地御召の下着に鳩羽色無地の御召の上衣を重ね、其の上に絹絞薄羅紗の外套を着け、純白羽毛の襟卷をふはりと風に流し、そうして兩手の指には純金、寶石、ダイヤの指輪を幾つとなく光らせつゝ、左も嬉しさうな夫モルガンの腕に縋り多數の出迎人に擁せられて米利堅波止場に上陸した、老母のお琴は一目お雪の姿を見るや群がる見物人を押分けて一聲、「お雪！」と呼むだ許り其儘お雪の腕に縋りついた。

お雪は携帶の手荷物五十餘個を夫モルガンに托し、午前十一時四十三分三ノ宮發の上り列車で京都に着いた、祇園新地の舊朋輩連は小紋縮緬の盛装で驛に出迎へた、相も變らず七條驛は見物の野次連でごつた返した、人騷がせのモルガンお雪が來て又もや京都の空氣が緊張した、花柳界はいふに及ばず何所でも彼所でも寄ると觸るとお雪の話で持ち切つて居た。

* * * * * * * *

到着の夜十時を過ぎてみそぼらしい服装をした五十近くの女がお雪を尋ねて來た、ホテルに取つては大切なお客さまであつたモルガン夫婦に斯んな乞食見たやうな女を取次いで良いか惡いかと彼等の中で問題となつた、女は玄關の隅にションボリと我がみなりを恥かんで立つて居た「お雪さんは最うお寐みになりました」と言ひ聞かされて女は細目に明いたガラスの戸口から水に流されるやうにスーッと影を隱してしまつた、「おふさ、お雪さん逢やはらへん」と何か惡いことでもして逃げ出して來たやうに粟田口の我が家に歸つて來た彼女は落膽して、「明日にでも最う一度お前が行つて見たら」と何一縷の望を心の奥に繋ぎ止めつゝ母

のおすゑは貧苦に窶れ切つた娘の顔を振向く勇氣もなしに力の拔けた低い聲で言つた。

おふさはお雪の心を探ぐるべく母のおすゑを瀬踏に出したのであつた、が見事に刎ね付けられて忽ち不安と疑懼の念に襲はれた、そして一時は親子の運命も既に夫れで決定したのでないかとも思つたが、今夜は時間も遅いし、お雪さんも勞れて居るし、お負けにホテルでは母の顔も知らないで、左樣した取扱ひをしたのであらうと獨合點して、「では、お母はん明日私が行つて見ますさかい何所で着物を」とおふさは借衣の用意を母に頼むで置いた。

都ホテルの食堂はモルガン夫婦來着の祝宴を張るべく立派に飾られた、晩餐は午後六時といふので招待を受けた二三十名の盛裝した婦人連が既に控室に詰かけて居た、其の中にはB博士も兄の音次郎も居た。

お雪は別室で熱心に若い女の話を聽ながら時々眼に鼻拭を當てながら涙を拭ふて居た「さうどすか、人は見かけによらむもんどすな、あのお方はんに限つてよもやそんなことがあらうとは夢にも知りませんでした」とお雪は自分の留守中に生きた意外の出來事に驚いて其の女の强い味方となるやうに慰めて居た。

使丁に呼びかけられてB博士は何事かと思ひながらお雪の居間に入つて來た、お雪は米國にある女裁判官のやうな權威でB博士に臨むだ「おふさはんに限つて決してそないなことおまへんのや、それは誰かが妬むでいわはつたのどすやらう、留守中に情夫をこしらへて其人を別莊に引入れたりするやうなそんな大それたことをしやはるおふさはんじやおまへんのや」、とお雪は怒氣を含むでB博士の返答を促して居た、其所へコツ／＼と戸を敲いてモルガンは入つて來た、モルガンはお雪の只ならぬ顔付を見て何事が始つたかと驚きながら聞いた、そして其の事件は昨日の汽車の中でB博士から聞いたおふさの話であつたのでそれならば別に心配する必要もないといつた調子で「おふささん不都合あります、私會ふことできません」と博士の言葉を信じ切て居たモルガンはお雪に對つていふた。

B博士はおふさを落すべく昨日汽車中でモルガンに話した虚僞の事柄を今は心に愧ぢておふさを辨護するやうになつた、左なくばお雪から直接嵐山事件を話されては我身に取ての一大事と悟つたからであつた。

かつきりと時間通り食堂が開かれた、そして食卓(テーブル)の一隅に雛窓のおふさも居た。

四五日經つてモルガン夫婦はホテルを引拂つて南禪寺の別荘に移つた、同時に博士と萬歳狂のウイリアムとは京都を去つて横濱に轉じた、ウイリアムは戰爭の號外が出る毎に日米の兩國旗を携つて往來に飛び出したり提灯行列が通ると直ぐと其の列に加はつたり、そして或時には女の長襦袢を引かけて「エライ、コッチャ萬歳々々」の連中にも仲間入りして狂ひ廻つたりしたのであつた。

二十七　モルガンお梅

南禪寺橋畔のモルガン邸には十七から廿一を止めにして七人の女を使つて居た、主人夫婦の外、別に手のかゝる人があるでもなし七人とはちと贅澤だとの陰口もあつた、其の中、上京區神泉苑町姉小路上る神戸松太郎の妹であつたお梅といふのは年齢(とし)は十九で何所かに人をチャームさせる素質を有つて居た、色の白いのが七難(なん)かくすといふ女の特色を備へて居る上に、顔の造作も夫れ相應に揃つこ申分なかつた、殊に凉しい眼と左頰の靨とは容易に人を惱殺する彼女に取つての唯一の武器とも見られた、家は龜岡の舊藩士で御維新の際、慣れぬ士族の商法に手を出してスッテンてんの丸裸となつてから一家の者は已むを得ず離れ離れの情けない境遇となつた、十八歳の時お梅は京都在住華族の○○家に小間使となつた、箸豆な主人公のお手が着きお極り通りのお拂箱となつてからは有名な某骨董家の手先に使はれて、肉を餌食(えじき)に外國紳士を引張り込む所謂客引となつて居た、所がモルガン邸で氣の利いた若い女中が入用と聞いて直ぐとお目みえに行つて採用された、流石のお雪も此の小娘の被つた猫の皮を引剝がすだけの眼識がなかつた。

お梅の美貌が、忽ちモルガンの眼を惹いた、最初は

モルガンもお雪の手前を憚つて其の肉的慾望を抑へて居たが日を經るに從つて殆んどそれが制し切れなくなつた、斯くと見たお梅は誘ふ水の萍か風に靡く柳である事のやうな態度を示した、去ながら胸に一物あるお梅のことなれば滿を持さねば容易に落ちさうにしなかつた。

戀のヂレンマは斯うした工合に持續して春は逝き夏も過ぎて秋九月の萩咲く頃となつた、此の間にモルガンとお梅の肉的關係が付いたやうでもあつたがお雪には其れを確め得べき證據を握ることが能きなかつた、それにしてもお梅に對する他の女中の嫉妬やストライキで頻繁し二三女中の更迭が續き、今までは平和であつた家庭に波風たちさうな氣色のほの見ふる以上は最早お雪も無言つて居る譯にいかなかつたお雪はお梅を我が部屋に呼び入れて、

「私もこれといふ證據がないけんど旦那とお前が何うやらおかしいやうにも見えるし、それに人の陰口もうるさいによつてお前の方から綺麗に暇をとつてもらいたい」

とお雪は決然として言ひ放つた、ギクリと胸を刺いた此の詞にお梅は種々と辯解して見たが勿論それは駄目だつた、其夜お梅はモルガンに暇乞ひして歸らうとするとモルガンは顏色變つて立腹した、「私、許しません、誰がさういひました」といふ其の詞尻を押つてお雪は「お梅のお母はん病氣あります、一週間か二週間看病して恢復つたら又來るのどす」、お雪の横鎗にモルガンも漸く怒を和らげ「それなら宜しい、恢復したらすぐと又來るよろしい」と幾度かお雪に握手して歸へしてやつたものゝ、モルガンの不平は容易に治まらなかつた、そして何にかにつけて爆發しさうでもあつた。

二十八　魔の手モルガンを捕ふ

今までは滅多に外出しなかつたモルガンは、運動不足の爲に胃腸を害し、其の結果神經衰弱を起したといふ口實の下に食後は必らず散歩に出かけた、始めの内はお雪も別段異しみもしなかつたが、或時には三時間も四時間も又或夜の如きは十二時を過ぎてブラリと歸

つて來ることもあつたのでお雪はそれとなく注意をして居た。

松の枝から洩れ來る九月十三日の月を眺めてお雪は庭石傳ひに裏口の築山に足踏み掛けやうとした、其の途端に二つの影が垣根越しに彼女の足音に驚いて西と東とに別れて消え、確かに一人は六尺近くもありさうな脊の高い男で今一人は其の肩ほどにも屆かない女の影らしかつた、お雪の胸は俄かに轟いた。

モルガンは何所に風が吹くかといふやうな顔して歸つて來た。

木屋町二條下る河崎樓では異人さんが洋妾(ラシヤメン)を連れて月見に來るといふので、裏二階の見晴らし佳い一間を明けて待つて居た、が九時になつても十時になつても、それらしい人の影も見えないので、階下の一室に待て居た汚ない婆さんと職人らしい男に談じ込むだ、けれども丸切狐につまゝれたやうな話で要領を得ずにすんでしまつた、お梅はモルガンを此の家に斷え込む積りで母のおかつと兄の松太郎を其所に待たせてあつたのだ。

南禪寺橋畔のモルガンの別莊から幾らもない平安神宮の境内には今を盛りと萩が咲いて居た、お梅は母のおかつと兄の松太郎に連られて今日こそはと遠見越しに網(あみ)を張つて居た、案の如くモルガンはステッキを振りながら向ふからやつて來た、然し此の前と違つて非常に早足で急いて居るやうだつた、お梅はそれと見て風に飛ぶ木の葉のやうな恰好で摺れ寄つて來た、モルガンはステッキでお梅を追拂ふやうにして「此所いけません、私のあとついてくるよろしい」と言ひ捨てながら後を構はずドシ／＼と疏水の電車通りに出て慶流橋で電車を待つて居るやうだつたが、お梅の姿が未だ見えないのでブラリ／＼と智恩院の方へ歩き出した、一町ばかり歩いたかと思ふ所でお梅が來た、「奥さん知つて居る、私家を出るときあとから誰か附いて來たやうだ、これから私都ホテルに行つて直ぐあと田中村のB博士さんの所へ行ます、四時頃貴女來るよろしい」と

いつてモルガンはお梅に別れた。

お八重とお花は息を切て歸つて來た、そして鬼の首でも討ち取つたやうな顏をして苦しい息氣を吐きながら、

「奧さま、あのお梅はんがあの旦那さまを見やはるとじきに何所やらから飛び出して旦那はんに何にやらいはうとしたら、旦那はんがステッキでぶつやうにしはつたのでお梅はんが又其のあとから」と未だ其の詞も言ひ終らないのにお雪はこれを遮つて、

「じや何んで貴女(あんた)らが旦那のあとをつけて行かなんだ」

お雪の放つた角袖のお八重とお花が思ふた通り充分の功果を荷ふて來なかつたにしろ、對手は矢張りお梅だと聞いてお雪も今更のやうに驚いた、そしてこれから此の事件の取扱ひを最つと嚴重にしなければならないと思つた。

二十九　二つに折つた百圓札が三枚

都ホテルから使のお八重が歸つて來た、「旦那はんが一時間ほど前に神戸の副領事さんと連れ立つて何所かへお行やした」といふのであつた、其中にお花も歸つた來た、「B博士さんの所では近頃旦那はんがお越しになつたとがないと言やはります」と聞いてお雪は、「それじや領事さんと一緒に神戸にでもお越しになつたのやら」とむしやくしやして居たお雪の心もこれで漸く落付いた。

B博士は萬歳狂のウイリアムを亞米利加に送り返してから再び京都に來て田中村に住むで居た、けれども嵐山のおふさ事件をお雪に知られてから博士とお雪の間が前通りにはいかなかつた、博士は其れを非常に愧ぢて成るべくお雪と顏を合はさないやうにして居た。

モルガンは下女のお花と殆んど摺れ違ひに博士の家に來た、「たつた今貴君の家から使が來て貴君を探して居た」といふ、B博士はモルガンを應接室に導き入れた、半時間程たつてお梅も其所に來た、博士はニヤ〳〵と笑ひながら其の場を外した、門の外にお梅の母も兄も來て居た。

モルガンとお梅は何ういふ話をしたか知らないが十分も經つか經たないのにお梅は門の外に來て横封の西洋狀袋を母のおかつに渡した。

三人は何にか頻りに話合ひながら急いで家に歸つた、

「え、二つに折つて百圓札か三枚？」

翌日の正午までにお梅の服裝がすつかり出來上つた、誰が踏むでも何所かのお孃さまとしか見えない、お梅は約束の時間通り神戸の旅館吉野屋に行つて今か〱とモルガンの知らせを待つて居た。

漸く夜の九時頃になつてオリエンタル、ホテルから電話がかゝつた、そして直ぐとホテルに來てくれといふのであつた、翌朝六時の一番汽車でモルガンはお梅を伴れて東京に向つて神戸を出發した、それから先き二人は何所に何うして居たのやら一向分らなかつた。

お雪はそれぞと思ふ所に電報で聞き合せて見たが返電は一つで、「來ない」といふのであつた、日一日とお雪の心配が増して來た、あれ程までにしたモルガンの我身に對する戀が斯うも迅速く冷たくなるものかと彼女は過去の追想やら現在の狀態やらを思ひ浮べて獨りで胸を痛めて居た、三度の食事は素より進まず夜は落々と寐付れもせず、暫時まどろむかと思へば直ぐと眼が冴えて、それからそれと我が胸に浮ぶ空想を追かけ廻して居た、煩悶と睡眠の不足が鋭どく彼女の神經を刺戟して天性に潛むで居る彼女のヘステリー的性分を遺憾なく喚り出した、彼女は初戀の川上と關聯して間近き疏水の貯水池などを思ふたりした、そして一層彼の時死むで居つたらといふやうな考を起さないでもなかつた、金、そして其れが何んであるかと彼女は窃かに其れを我が心で買つて見た、平和、享樂、安心、戀愛、そんなものが金の力のみで買へるかしらと彼女は疑つて見た、彼女は左褄を取つた以前の藝者であつた方がヨリ多く幸福であつたかしらと思ふて見たりした、お雪の心は斯いふ風に思ひ亂れてそして顏の色も惡くなつて居た。

モルガンが淫賣のお梅を連れて何所かに姿を隱し、その爲にお雪が心配して病氣して居るとかの評判が一

時にパッと祇園新地へ擴つた、斯んなことにかけては神經過敏の彼等が尾に鰭を付けて此の話を四方八方に持つて廻つた、「姉はん貴女知つてゝか、お雪はんが高等淫賣に旦那を取られて氣違ひにならはつたて」左も小氣味よささうに話しかけると、「さうどすか、何うせ永くは續くまいと私等も思ふて居た」と合槌打つながら、事實は果して其の通りであれば溜飲が下つて胸がスイットするといつた風にそれからそれと話が傳つた、嫉妬や虚榮を羨む此の社會では或は事實左樣であつたかも知れない。

　モルガンは家を出てから八日目の九月二十三日の午後四時頃、ぼんやりと歸つて來た。

　我が家ながら遉かにモルガンも心に愧ぢて玄關でマゴ／＼して居た、下女のおたけが「旦那はんがお歸り」と突調子(とつぴょうし)もない大きな聲を張りあげたので、おはる、お八重、おはな、おます、おたか、小菊といふやうな丸で一流料理店の仲居然たる下女連中が一人も殘らずドヤ／＼と駈け出して來た、「まあ、ほんまに旦那はんが」「何所に何うして居やはつたのやらう」と口には言はないがお互の心の内であきれ返つて居た。

　家の内は俄かに陽氣となつた、「奥さんは何所に」とモルガンはお八重に聞いた、「奥さまは御病氣」と語尾を強く押へてお八重は飽くまでも御雪に同情して居るといつた風に答へた、モルガンは其の足でヅカ／＼とお雪の病床を見舞ふた、お雪は寐亂髮を掻きあげながら寐床の上に坐つてモルガンを迎へた、ほんの僅か許りの留守中でも顏にはお雪の心勞があり／＼と認められた、眼の落ちこんだ所が著しく目立つた上にファリとした頰の肉も幾分こけ落ちて、そして顴骨のあたりにほんのりと差して居た櫻の色も消えて居た、モルガンは心の内で一寸惡るかつた、濟なかつた、何卒か容して」と言つては居るものゝ口では辻褄の合はぬ理窟をつけて種々と辯解して居た、お雪はニヤリと凄い笑を洩らした切で何にも言はずに直ぐと晩餐の用意を命じた、餉臺に向つたモルガンの箸の先きにはお梅の姿が粘り付いて居るやうでもあつた。

モルガンは以前のやうにお雪が快活でないのを見て九月二十五日から神戸のタムソン商會の主人夫婦と一緒にお雪を連れて函根、鎌倉、日光方面へ保養旅行として出發した、お雪の姉おなをは留守番を頼まれて來て居た、二十八日の眞夜中に二人の窃盗が家人の寐息を窺ひ裏の垣根を破つて忍びこんだ、警察の取調書に依れば盗難品は全部お雪のもので衣類が八十餘點に指輪、頸飾、金時計と合せて時價四千六百圓と計算されてあつた、姉のおなをは驚いてお雪の行先〳〵へ電報を打つたが何所も皆出發したあとで十月三日まで電報はお雪に屆かなかつた、お雪は日光のホテルで始めて盗難を知つて急いで歸つて來た。

女の生命は殆んど衣服であるやうに流石にお雪もガツカリと氣を落した、此頃のやうに斯ふ頻々と種々な事件が湧いて來ては堪らない、軈て自分も其の中運の陰路を辿るやうになるのでないかと思つた、お雪は足元の明るい中に京都を去つて再び亞米利加から巴里へ行かうと決心した。

お梅は母のおかつを連れて神戸山の手に一戸を構た、其後モルガンも何かの用事に託つけて屢次神戸に行つた。

明治三十九年十一月二十九日盗まれたお雪の衣類が全部新調さるゝと同時にモルガン夫婦は京都を去つて米國に向つた。

本編は大阪朝日新聞京都支局員中神直三郎君から殆んど全部供給された材料に尚私が昨年御大典の際京都に滞在中蒐集した所の斷片的なものを附け加へて覺束なくも一枚の着物に仕立あげたのです。中神君は二十余年京都花柳界の探訪記者として有名なものです。殊にモルガンお雪のことに就て誰よりもよく知つて居ます、私は始めて斯いふものを書いて見ました、讀みにくい所は偏に讀者の寛恕を乞ひたいと思ふのです

「世界一」百種

若月紫蘭

單に世界一といつた丈けでは、或は大なることに於ての世界一もあらう、小なることに於て世界一もあらう。或はまた古きことに於て、或は又珍なることに於てなど、事々物々の種類を盡して其世界一を求むれば其數蓋し殆んど無限といふの外はなからう。殊に發明や發見や種々のレコオドの如きに至りては、時間との關係に於て其處に甚しき變遷を認める場合が少なくない。かう考へる時に所謂世界一と云ひ、乃至は世界一品といふ語も、可成に漠然たる意味となるものである。此處に蒐集した世界一百種も、實際に於ては百種を超ゆること幾十、而もなかるべからざるものにして缺けたるもあり、無くもがなのものにして有るものもある。紛然雜然、手當り次第、見つかり次第、成るべく最近の種子を材料にして兎も角も『世界一』たるに恥ぢざるものを集めたに過ぎないものが即ち之れである。

△**最大都市**　近頃私は或書の編纂に方つて、以前からの記憶通りに、倫敦を世界第一の都會であると書いた。そして之を一米國人に見せたら、彼は直ちにそれを訂正して紐育を世界第一とした。私は自分の記憶を怪んで、ある地理書を開いて見た。倫敦の人口は七百餘萬、紐育は五百餘萬とあつた。地理書の發行の日附は大正三年であつた。即ち私は更に怪しみながら之の地理の一教師に尋ねた。彼は矢張私の記憶を裏書した。ところが其後にある外國新聞の記事を見ると、歐洲戰爭の結果、此迄世界一の大都市であつた倫敦は、戰爭

以來夥しく人口が減じて、其反對に紐育の人口は日々に増加し、倫敦は今や世界最大都市なる權威を紐育に奪はれ、事實に於て紐育は世界一の大都市となつてゐると云つてゐる。けれども、米人シムプスン氏の言によると市俄古は今の紐育よりも更に大なる勢を以て發展しつゝあり、運河を設ければ海を通じて歐洲と最も近接してゐるが上に、米國内の商業中心地なるを以て、遠からず全世界一の大都市たること疑ふべくもあらず、そして斯かる時代が到達すると同時に、市俄古の全市は硝子と鐵とを以て造つた一個の建物より成り、其處には諸官省や工場や事務所などのみが設けられ、市民は凡て附近の健康地に住んで、其處から電車又は飛行機によりて市に通勤するに至ることゝなるだらうと云つてゐる。

△**伊太利の劇場**　世界中最も芝居好きな國民は伊太利人といはるゝ丈けあつて、此國は劇場の多いことに於ても亦世界一である。最近の統計を見ると、三千五百萬の人口に對して劇場千八百十一を有し、就中最も多いのはロムバルダイの二百八十六で、シシリイ島丈けにても百二十七からの劇場をもつてゐる。フロレンツのポリテヤ及ヴエルチの兩劇場、ミランのスカラ劇場リリコ劇場、羅馬のアドニア劇場、ナポリのサン、アルロ劇場等は規模の點から云つても世界中の大劇場である。

△**混凝土橋**　昨年の暮に出來た米國ラカワナ鐵道のスクラントンとビンガムトン間に出來た橋は、長さ大凡半哩二千三百七十五呎を有する世界一の混凝土橋(コンクリート)で、紐育ブルウクリン大鐵橋に比して高さに於て百呎以上の上に出てゐる。工事費は二千四百萬圓で、之に使用された混凝土の量は四百五十萬立方呎だといはれてゐる。

△**自働車國**　獨逸の工業家シユナイデル氏の調査によると昨年の世界に於ける自動車の總數は二百五十萬輛を超え、米國が百七十五萬四千五百四十輛で世界自動車の七割を占め、第二位の英國はずつと下つて三十四萬千二百五十を有し、獨逸は九萬五千、佛國は九萬加

奈陀は四萬六千、墺匈國は一萬九千、伊太利は一萬二千を有するといふのだが、戰爭の爲に此數に次第に變動が起りつゝあることは云ふまでもなからう。

△**信者の多き宗教**　最も信者の多きは基督教の五億六千萬人にて就中羅馬舊教が最も信者が多い。

△**國語**　世界の國語中最多く使用されるのは支那語を第一とすべく、其民三億六千萬に及び、英語國民は一億二千萬内外だらう。

△**大學**　生徒の多數なる點に於て世界の一位にあるは巴里大學にして、其生徒數は平時ならば一萬二千を超え、最古の大學は紀元九八八年に創設された埃及カイロの回々教大學である。

△**圖書館**　藏書の數に於て世界一なるは三百萬部を藏する巴里圖書館である。

△**新聞**　發行部數からいへば巴里のプチ・パリヂアンを押すべく、信用と勢力からは倫敦タイムスが覇權を握り、倫敦のデイリイ・メイルは規模に於て最も廣大だといはれてゐる。

△**大運河**　スエズ運河は其長さに於て、パナマ運河は其深さと幅とに於て、共に運河の兩横綱である。後者は昨年開通し、前者は一八六九年に完成したものである。

△**古代の大建築**　紐育の摩天樓などゝ異つた意味に於て、世界に雄飛する二大建築の一つは、ナイル河の上流古への帝都シイブに在るカルナックの大殿堂と、他の一は羅馬のサンピエトロ・イン・ヴアチカノ寺とである。

△**製造品**　食鹽は米國が第一位、葡萄酒は佛國、麥酒は獨逸、生絲は支那、綿絲紡績及船舶建造は英國が首位を占めてゐる。

△**鑛物**　金剛石は南亞、金は南亞トランスヴアル、銀は墨西哥が首位を占め銅、鉛、銑鐵、鋼鐵、石炭、石油等では皆米國が第一位にゐるが、硫黄丈けは伊太利が最多くを産出してゐる。

△**萬里の長城**　其名の示すが如く、長さ千里にも亘る大土工である點丈けに見ても、萬里の長城は世界一

の一つに算へなければならないものである。

△少年巡査　紐育の少年巡査も亦世界一の一に加ふべきものであらう。紐育警視廳第十五區警察のジョン・スイーネー大尉が創始したもので、十一歳から十五歳までの少年から成り同區を十二に分ち各區分に二十名宛の少年巡査を置き、特別の功勞あつたものに、大尉中尉軍曹などの階級を與へてゐるが、其功果は頗る著しいものださうだ。

△美しき女優　佛國のゲービー・デスリース孃は、歐米諸國で女優界第一の美人に押されてゐる女である。葡萄牙王マヌエルは數年前此女優に思をよせて百萬弗の眞珠の首飾を贈り、之が原因となつて國王は革命黨の爲に國を逐はれて倫敦へ逃げだしたのだといふ。それは兎に角に此女優近ごろ米國に渡つて、得意の挑發的の踊りで盛んな人氣を集めてゐるといふが、例の葡國王から貰つた首飾は常に之を携へ、首飾のある所必ず二名の巡査が附き添つてゐるさうだ。

△全山の彫刻　意匠の珍奇なる點に於て、其規模の大仕掛なる點に於て、また世界一に數ふべきものは國ジヨオジア州ストオン山の全山彫刻の企であらう。山は悉く花崗石より成り、高さ七百五十呎にして、麓に四千エーカーの空地があるのだが、米國の彫刻家ガッツン・ボルグラム氏は、南北戰爭に於ける南軍の意氣を記念すべく、此ストオン山其物に彫刻を施して、一大美術品となし、麓の空地には公園を設けんとしつゝあるのである。

進軍せる軍隊の人物は多く五十呎の巨像にして、其數百千に達すべく、而してリー將軍などの像は凡て眞の風貌を傳へんが爲に既に寫眞研究部も設けられ、事業着々として進行しつゝあるといふが、總費用は四百萬圓、八年を費して完成の豫定である。序に世界七不思議の雄である埃及の大三角塔は高さ四百八十呎にして、ストオン山の大約半分位に過ぎないのであるから、完成の上は或は世界最大の不思議として算へられるだらうといはれてゐる。

△巨大な怪象　未曾有の大戰爭はまた古代動物學上

にも亦未曾有の貢献を行つた。といふのは佛蘭西の或方面で塹壕を掘るに方つて、驚くべき巨象の骸軀と共に下顎の臼齒一枚と上顎の臼齒一枚とを發見したことである。學者の說によると、此象は少くも十五呎の高さを有するもので、現存又は滅絕せる有ゆる象は勿論、最も巨大なマンモスよりも巨大なことが明白であるさうだ。

△**十萬圓の鷄**　一昨年四月米國マリイランドのグリインスボロオに生れたクリスチヤン氏の所有する白色レクボオンは、同年十一月一日から翌年十月三十一日に至る一年間に、三百十四個の產卵をして空前のレコードを作り、爾來世界一の鷄として十萬圓の買手がついてゐるさうである。

△**大拳鬪家**　昨年四月、キユバ島のハバナに於て、千九百八年以來世界拳鬪界の選手權を握つてゐた黑人ジヤック・ジョンソンを打破つた白人キラアドは、更に此春、紐育に於て嘗てジョンソンに破られた佛國の拳鬪家フランク・モオランと戰爭ひ、見事なる桂冠を得た。當夜の入場者は一萬二千人で收入が十七萬五千弗といふから一人前の入場料は一寸十五圓近くである。

△**獨逸の潜航艇**　獨逸が此程就役せしめた五千噸の潜航艇は此種のものとしては現時世界一である。過去十八ケ月の努力になつたもので驚くべき快速力を有し、優に大西洋を往復し得る燃料を貯へることが出來、六吋砲を備附けてゐるらしいと傳へられてゐる。

△**最大の商船會社**　近頃國際商船會社の實權を握り、大平洋郵船會社をも勢力範圍とした、國民市銀行主唱の下に成つた米國放資同盟(アメリカン、インタアナショナル、コオポレーション)は世界一の大商船會社だと云はれてゐる。

△**最大の隧道**　近頃佛國のロオヌ河の底に穿たれた隧道は、幅七十二呎高さ四十六呎、長さ三哩四分の三で、世界最大といはれてゐる。

△**自働車競走場**　米國タコマに設けられた世界一の自動車競走場は、長さ二哩幅五十ヤードで、九千人の見物人を入るべく、此競走場は油と砂で硬める前に、二百萬本の材木を敷いたもので、此處では自動車が可

哩の速力を出しても安心ださうである。

△最も輕き木　コルクは普通に最も輕い樹木と思はれてゐるが、一立方呎の重量僅に七・三封度で、コルクの一三・七封度なるに比して殆んど其半分なるは、米國産のボルサと呼ぶものである。古くから浮木などに使用されたもので、木質が空氣を以て充された細胞の薄膜から成り、つまり海綿的構造なのであるが、水分吸收の缺點はパラフィン注入によつて防止し得るさうだ。

△天體圖　二十五年前から世界の天文學者によつて計畫されつゝあつた世界一の天體圖が大方完成した。此れは世界の最も强力な望遠鏡によつて觀察された一億近くの星が記されて居る。

△タイプライタア　巴奈馬博覽會に出品された世界一の大タイプライタアは普通のタイプライタアの千七百二十八倍の大さを有し、重量は十四噸で二十萬圓を投じて二年かゝつて作つたものであつた。

△最高建築の新電飾　紐育のウルウォース・ビルヂングが、五十五階建築にして七百八十餘呎の高さを有し世界最高の建物であることは隱れもないが、此建築では近頃普通の電球飾の代りに、大形の自動車用燈を用ひて電飾をやることにした。

△最長距離の電話　世界一の長距離電話は紐育から桑港に通ずる千二百五十哩のそれで、三分間の通話料が五十四圓、其れ以上は一分間に十三圓半宛である。此電話の架設者は電話の發明者ベル博士である。

△架空單軌電車　これはまだ實行されてはゐないが、巴里の電氣工學者メエル氏の考案に成れる架空單軌電車は、一時間二百哩の速力を出し、工費は一輛四萬圓一哩の軌道は十七萬圓の豫定である。

△ラヂウム鑛泉　最も多量にラヂウム・エマナチオンを含むものは、冷泉では墺國ボヘミアのヨアヒムスタアルの冷泉、溫泉では伊太利ネープルス附近のイスキヤ溫泉が世界一たるとは廣く知られてゐる。處が山梨縣西八代郡富里村下部溫泉はラヂウム・エマナチオンの含有量が三千七百マッヘで、墺國のよりは二百多い

と云はれてゐる。

△**最大の花**　スマトラに産するラフレシヤと稱する花は、瓣の一枚の長さ一尺、全體の直徑三尺ばかりあり、世界一の陸上の花であるが、水上に於ける最大の花は、アマゾン河の上流に産する女皇蓮と稱する蓮科植物である。直徑一尺から一尺五寸位の花で、咲いた時は雪白色だが、やがて紅色に變ずる、パイナップルのやうな香をもつた花である。

△**最大彫像と建築**　世界最大最古の彫像といへば埃及の大スフィンクスであるが、世界人類の遺した最古最大の建築といへば、それは其近くにあるギゼイのピラミッドであらう。大金字塔(ピラミッド)の高さは四百八十呎、基邊の長さ七百六十呎で、面積は五十七萬七千六百立方呎である。

△**日本の山椒魚**　我美濃伊賀幾内中國地方に産する大山椒魚は、世界一の動物として珍重されてゐるものゝ一つである。

△**畜産**　馬は露國、牛は印度、豚は米國、羊は亞爾然丁が其産額に於て最優位を占めてゐる。

△**穀類**　氣候や土地や人智や生活やの相違から、世界の到る處に産物の種類と産額の多少とを見るに至つたのであるが、米に於ては支那、麥は米國、珈琲は伯剌爾、馬鈴薯は獨逸が世界一で、棉は米國が優位に居る。

△**人種**　身長の最高き人種は千七百ミリ米突の蘇格蘭人で、最低なのはサハラ沙漠の直南に住む小ネクロ人の千三百六十三ミリ米突である。

△**往來頻繁の地**　往來頻繁の點に於て世界一の地を求むれば、それは倫敦ハイドパアク、コオナアを推すが普通にて、此の地の警察の報告によると、日曜外の並の日に於て、此地を通過する車の數は平均一時間に三千七百二十六といへば、蓋し一秒に一車以上の割にて、此車數を類別すると、自働車が千八百、馬車が九百九十、自轉車が五百七十、乘合自働車が三百六十六である。

△**葉と柳の時計**　一二年前瑞西で出來た時計は珍奇

なることに於て世界一で、高さ九呎文字板面の直徑十八吋を有し、内外の如何なる部分といへども悉く藁と柳を以て造り、二年の時日が費されたものださうな。

△デイゼル機關　米國新造軍艦モオミイ號に据附けらるべきデイゼル機關は、五千馬力を出し、これまで建造された此種の機關中最大のものである。

△三百萬燭光の探照燈　昨年の夏エヂソン博士は運搬の出來る種類の新探照燈を發明した。原動力は蓄電池であるが、三百萬燭光を發するといへば勿論此種の世界一であらう。

△最大の起重機　倫敦ウエストミンスタア橋の南端から新市會議事堂に至る間に新に建設された十二基の起重機中には世界最大のものが一つある。

△最大の商船　獨逸の漢米汽船會社の建造にかゝるビスマルク號は長さ二百九十一米突幅三十米突半を有し。フアタランドよりも大きな世界最大の汽船である。

△獨逸の勞働博物館　ドイツのシヤロテンブルク市に於ける勞働博物館は、他に類例がないといふ意味に於て世界一で、勞働者の智識啓發と保護とを目的とし甚しく完備したものと云はれてゐる。

△一丈の長鬚　巴里のルイ・クーロンといふ金物師は長さ殆んど一丈に及ぶ長い鬚をもつてゐる。これも恐らく世界一だらう。

△最大の水道　米國カリフオルニア州ウオエンス河の水をロスアンゼルス市に引く水道は、まだ着手されたばかりだが、完成すれば世界最大規模の水道で、工費二千五百萬弗の外に發電機費として五百萬弗が豫定されてゐる。

△最高の山　昔はヒマラヤ山脈のエベレストが、最高といはれてゐたが、今日では世界一の高山はニウギニア島のヘラクレス山で、三萬二千七百八十六呎ある。エベレスト山はそれより三千七百八十四呎低く、二萬九千二呎の高を有して第二位にあり、それから十三番目までがヒマラヤ山脈中にあり、印度は流石に世界の最高脊梁である。支那の崑崙山は割合に高くて二萬二千呎、アルプスの最高峯ブランは八十二番目で一

萬五千八百十呎、日本の新高山は百二十四番目で一萬三千二十呎、日本の靈山といはれてゐる富士山は、高さからいふと實に世界中の百三十五番目である。

△**飲酒國**　世界中最も多量に酒を飲む國民は佛蘭西人にして、一人一年の平均が一斗七合とは驚く。之に次ぐものは丁抹人で一斗五合、三番目が白耳義及和蘭人で共に八升八合、日本人は實に第四位にあつて、其量七升五合といへば英人の七升四合九勺と相似たるものである。それから順に伊太利人米人露人の割合で、露國人は最も少なくて四升二合四勺である。けれどもこれが戰爭前の統計であることは云ふまでもなからう。

△**喫煙國**　最も多く煙草を吹かすのは酒に於ても三位にある和蘭人であつて、一人一年の平均は八百三十七匁三分餘にして、米瑞英人之に次ぎ、英人の量は百五十四匁五分である。

△**砂糖消費國**　最も多量に砂糖を用ふるは、一年一人の量平均九貫七十五匁である英國人にして、米人の六貫四百十三匁加奈陀の四貫四百二十五匁之に次ぎ、日本人は西班牙人と略同じくして僅に七百五匁の消費者である。

△**最高汽車速力**　米國エツクレイとウレイ間の鐵道一時間の最高速力は九十哩七十鎖で世界一に位し、英國ハツチントン及ブリストル間が八十四哩六十鎖で第二に位し、我東京大阪の最高速力は僅に三十一哩七十鎖である。

△**收入の多き帝王**　世界帝王の中最も多額の收入を有するは、露帝の二千四百萬圓で、之に次ぐのが土耳古帝の一千五百萬圓、それからあとは墺獨伊英日の順序である。大統領では佛國のが二十四萬圓、米國が二十萬圓で、瑞西のが最少で僅に五千四百圓である。

△**最寒き地方**　世界中最も寒き地方は、西比利亞のヤクツで、極寒の際は、地下數百呎の下まで凍結して溫度は零下八十度に及び盛夏酷暑の時猶ほ地下三呎ばかり解氷するに過ぎないさうだ。

△**海底電線國**　昨年始の三十二萬二千哩中英國は六

萬二千餘萬哩を占めて世界一である。

△無線電信と電話　世界一の電話國である米國は、無線電信局に於ても世界一で、昨年の始既に世界の無線局五百六十九中の百七十八局をもつてゐた。

△自働車の速力　米國ユタア州サルヂコロオの岩鹽地に於て得られた二十五秒に一哩即ち一時間一四二・八五哩が世界一のレコオドである。

△電車の速力　電車速力のレコオドは、千九百三年伯林ツオッセン間に於ける百三十哩五鎖が依然として續いてゐる。

△砲彈　世界一の四十二珊砲彈は、高さ五呎七吋、直徑十六吋半、重量二百五十貫をもつてゐる。

△年少大學卒業者　米國のウイニフレット、ストオナア孃といふは九歳の時加州スタンフオド大學に入り、一昨年十二で卒業した。孃は八ヶ國語を自由に操るさうだ。

△最小移動劇場　紐育イースト・サイドに於けるポルトマントオ劇場は、たしか昨年スチユワアト・ウオーアー氏の創意によつて建設されたもので、舞臺の巾は二十二呎奥行は十八呎、高さ十六呎で、十個の箱につめて運搬し得べく、其重量は千五百封度である。

△最長壽國　百才以上の長壽者を有する世界一の國はブルガリアで、人口四百萬中百歳以上のもの三千三百人を有し、ルウマニアは人口六百萬人中三千三百二十人を有して之に次ぎ、佛國は四千萬人に百六十人英國は四千六百萬人に九十四人、獨逸は六千萬人に七十人、米國は九千萬人に四十六人をもつてゐる。

△高い喬木　世界一の高い喬木は、濠洲產のユーカリ樹にして、最も高いものは五百呎に及ぶさうだ。

△最深き海　海洋中の最も廣きは太平洋で、其面積は約一億八千萬平方キロメートルに及び、世界中最も深き所はフイリッピン群島の東部グワム島の東南部で深さ九千六百三十六米突に及んでゐる。

△最大湖水　湖水の最大なのは云ふまでもなく裏海で、面積實に四十三萬八千六百八十八方キロメートルである。

△**最高及最低湖**　けれども最も高地にある湖水は南米ボリビアと伯露の國境にあるチチカカ湖にして海拔三千八百五十米突の高さに在り、最も低きは亞細亞土耳古の死海で、海面下三百九十四米突に在る。

△**最長及最大河**　ナイル海は四千百哩に及んで世界中最も長く世界最古の文明は此下流に生れたのであつて、二百八十三萬三千方哩といふ最大の流域を有する河は、いふまでもなく南米ブラジルのアマゾン河である。

△**紐育の寄席**　二百人内外の男女が同時に舞臺に現はれて歌舞し、二萬に餘る坐席が毎晩賣切れてゐる紐育のヒポトロオムは、此種の興行場としては亦世界一で、其處での呼物は世界一の水藝である。

△**樹木**　米國に產するセクオイアと稱する樹木は周圍百九十八呎、樹皮の厚さが二呎ある。これは幹の大なることに於て世界一だが、葉の大なることに於て世界一なるは大葉椰子である。葉の長五丈幅一丈六尺もあるものがある。

世界一の香木でありまた高價なる樹木は、亞細亞から濠州に產する伽羅の木で、一匁が一圓五十錢から二圓位にして、黃金の三分の一位の價をもつてゐる。古木に於て世界一なるはカナリイ群島中のテネリフ島に產する龍血樹と云ひ、高さ七丈、幹の周圍五丈に及び六千年を經てゐる、我國の日光街道の杉並木は其大さと壯嚴と高齡などの點から見て又世界一で天龍川邊にある杉の木は其軟きことに於て又世界一たるを失はないと本多博士は云つてゐる。

△**大瀑布**　瀧に於て世界一を求むれば先づ其指をナイヤガラに屈するが普通であるが、高さに於てはアルプス山のオココ瀧は二千四百尺あつて最も高く、水量に於ては亞弗利加ザンベジ川のヴクトリヤ瀑が最大である。而も一秒よく五十萬噸の水を落下せしむるナイヤガラは、よし世界一にあらずとするも蓋し世界二を下るものではない。近年此水を引いて四十萬馬力の水力電氣を起し、年々の觀客七十萬人を數ふるといふに至つては、又世界一の瀧たるに恥ぢないものといはれ

よう。

△大沙漠　地理學者は之に色々な說明を與へるが、猶其茫漠たることに於て、地球上第一に押すべきものは、サハラの沙漠であらう。長さ約五千二百吉米突、幅凡千五百吉米突にして、面積實に六百十八萬平方吉米突に及べども、其處に大凡二百五十萬の住民を有し、晝間の溫度は華氏二百度にも達すれども、夜間は其の反對に氷點下四度を下る地方があるといふに至つては又世界一の珍地たるに背かざるものといつてよからう。

△極小發動機　大なるものに世界一があると同樣に小なるものに於ても世界一がなければならない。小なるもの丶世界一として先づ眼についたのは、白銅貨よりも少さい發動機である。高さは一吋の十六分の五、長さは一吋の八分の三、車輪の直徑は一吋の三十二分の一、轉換器の直徑は一吋の八分の一、其長さは一吋の十六分の一、ブラッシュの長さが四分の一吋、其の厚さは千分の一吋といふ風に、悉く一吋の分數から成なつたものである。

△最小の時計　瑞西のショオ・ド・ポンで出來た眞珠時計は、時計の中に眞珠を入れたのでなくして眞珠の中に時計を入れたものである。眞珠の大さは直徑半吋で、重量四十五グレーン、それでゐて時計の細工は悉く備なはり、十五ヶ月を費して完成されたもので、實價は一萬二千圓であつた。

△最大の蒸氣槌　英國ウールキッチの工廠に在るスチーム・ハムマアは殆んど一千噸の打擊を與へることが出來る世界一の大槌である。

△最大金庫　紐育モルガン會社の大金庫は一二年前最新智識を盡して、製造されたものにして、其の價實に四十萬圓、世界最大の金庫と記錄されてゐる。

△植物園　英國のキウ植物園は溫帶地方のそれとしては世界一の名に背かないが、植物の種類の最多にして完全なる點に於ては熱帶地たる瓜哇のボイテンゾルグ植物園が世界に冠たるものである。此植物園の面積は二十萬坪を超へ、一八一七年の創設である。

△**富豪**　黄金界に於て世界の大王たるはロスチャイルド一家にして、其本家は倫敦に至り、獨佛墺伊にそれ〳〵分家を有し、此一族の富を合計すると少くも四十億を超えてゐることは確實であらう。

△**最高低地**　高山や深海を除いて、人類の住せる世界最高地點は海拔五千六百米突の智利チユピクイニア山にして、其反對に人間の居る最低地は、パレスチナのヨルダンの谷で、海面下實に三百九十四米の低さに及んでゐる。

△**動物園**　世界の動物園は凡て百四十近くであるが、就中設備の完全に規模の宏大に、動物の數の頗多なる點に於て、世界に覇を唱ふるものは紐育の動物園である。面積三十三萬坪を有して動物は五千餘の多きをもつてゐる。

△**大男と小男**　小男の方は伯林の見世物パノクチムに出てゐるプリンツ、アトムといふ獨逸人で、普通の人間のズボンの丈位で、大男の方はフレデリック・ケムプスタアと呼ぶ英人で身長八呎十一吋ある。

△**通信販賣**　市俄古のシーアス・ロオバツク商會といふは、通信販賣に於て世界一と云はれ、一日の注文が四萬で年々の賣上が二億圓に上るといふ。

△**大西洋往復者**　加奈陀大西洋汽船會社のチルリア號の船長フランク・カレーといふは、一二年前に退隱したが、彼はそれまでに太西洋を往復すること六百回、其延長距離實に百四十萬哩。

△**登山者**　男子としては二萬四千呎のヒマラヤに於けるアブルッチ侯、婦人としては印度カシユミイルのナン・カレ山脈に於ける二萬三千呎を登つた米人ワアクマン夫人。共に世界一の登山者。

△**大水車**　和蘭アリースランド・ハークケンに於て、一二年前建造された大水車は、直徑五十六呎を有して、一時間に六萬四千乃至七萬立方呎の水を汲み上げて、亦世界一。

△**麥酒王**　レオポルド・フエデルマンといふ男は、一二年前のミユンヘンに於ける麥酒鯨飲會で、三時間に麥酒一斗六升九合六勺を飲んで一等賞を得た。

△**細工人間**　細工人形でなくて全身が寄木細工から成つた人間である。手と足とはコルクより成り、耳はゴム眼球は硝子、それでゐて頭は全禿であるといふ此世界一の不具男は、嘗て化學實驗の際に負傷して斯の如き不具となつたので、それが先年米國から歐州に向つて嫁搜しに出かけたといふが、其結果はさて如何であつたやら。

△**大機關車庫**　市俄古郊外の大機關車庫は六十八輛の機關車を入れるに足る直徑二千二百十六呎あつて、此種類では世界一の大建築である。

△**望遠鏡**　米國ウイルソン山の天文臺の世界一なることは誰も知つてゐるが、其處には直徑百吋の望遠鏡がある、勿論これも世界一。

△**西瓜喰ひ**　一二年前米國にショオトと呼ぶ世界一の西瓜食ひがあつた。彼は堵によつて七十五封度の西瓜三つを見る〳〵平げてしまつた。

△**巡査一人の國**　アイスランドには裝飾の爲に只一人の巡査を置いてゐる。これも珍なる點に於ては世界一品でなければならぬ。

斯くの如く列擧し來れば、世界一も殆んど際限がないが、それをまた、だら〳〵と此處まで書き續けた自分は、世界一のなさけない馬鹿者であるかも知れない。

西洋醫學と東洋醫學

文學博士 醫學博士　富士川游

一

こゝに、西洋醫學といふのは、現に、英國、佛國、獨逸等の歐羅巴文明諸國に行はれて居るところの醫學のことで、その歷史は希臘醫學に始まるのである。そ

の年代は耶蘇紀元前凡そ一千五百年乃至一千年であるが、この頃の醫學は神及び魔の信仰を本とし、疾病は神又は魔の所爲なりと信ぜられ、從てこれを治療するの方法も祈禱であつた。アポロ、パラス、アルテミス、ヘカーテ、メデアなどの神が居り、それ等の神の信仰からアスクレピオスと名づけらるる特別の療病の神があらはれた。そのアスクレピオスの子にヒギエイアと名づけらるる女の神が居つた。これは衞生の神で、現に用ひられて居る西洋の衞生といふ言葉はこの女神の名に基づいて居る。

紀元前六世紀の頃になりて、醫學は漸次に神及び魔の信仰の外に立つやうになり、自然哲學の影響を受るやうになつた。この時代には哲學者で、同時に醫家たりしピタゴラス、エムペドレクスなどが居つて、醫學も追々、宗教の迷信を離れるやうになつた。この頃、希臘國民は、盛に近隣の諸國に遠征し、バビロン、アツシリア、フエニシア、セミチツク、埃及などの諸國の文物を取り入れたのであるが、醫學も、これ等、小亞細亞地方及び埃及の醫學の影響を受けたことは疑のないことである。希臘醫學の最も古き時代に用ひられたる「フアバ、エギプチカ」(豆科植物)「アカシヤ、エギプチカ」(荊毬花屬)、桝、明礬、アンチモニー、河馬、コロコダイルなどは、いふまでもなく、埃及から輸入せられたものである。胡麻、小豆蔻、オガルカナ、薑、樟、纈草などは印度から小亞細亞を經て、希臘に輸入せられたものである。

此の如く、バビロン、フエニシア、埃及などの諸國から傳へたる醫方をば、希臘人の微妙なる才能にて融會し、足らざるところを補ひ、暗いところを明にしたるために、古代諸國の人民の雜駁なる見聞は、希臘の國民のために、まとめられて、希臘の醫學となつたのである。

二

希臘の醫學は、此の如く、古代文明諸國の醫學をまとめて大成したものである。殊に希臘の醫學の發展にあづかりて、功績のあつたのはヒポクラーテス二世である。ヒポクラーテス二世は紀元前四百六十乃至

四百三十三年の頃に生まれ、前代諸家、殊にエムペドレクスの說をうけ、すべての物體は四種の元素から出來て居るといふ、自然哲學の見地から、その說を立て、論ずるところも、爲すところも、すべて、經驗に本づき、その頃まで、全く經驗的なりし醫方に、學術的の基礎を與へ、所謂經驗的醫學を創めたのである。それからアリストテレス、テオフラスツス、ヘロフイルス、エラジトラーツスなどの諸家が出て、ヒポクラーテスの醫學を發展せしめた。

しかるに、紀元前四世紀の頃より、羅馬が勃興しはじめ、紀元前二世紀の頃になりては、希臘の醫學も遂に羅馬に移り、殊にアスクレピアーデスの固體病理學につぎて、守法學派、靈氣學派、折衷學派を生じ、各種の流派が樹立して、互に主張するところを異にしたために、醫學は幾多の方面に向ひて分散して、殆ど統一することのない有様であつた。

然るに、紀元後二世紀の頃になりてガレーヌス出て、解剖學及び生理學を以て、醫學の基礎となし、その基礎の上に、古來の諸家が唱へたる病理學說を應用して、醫學の革命をなし、ヒポクラーテス以後の第一人と云はれた。

ガレーヌス以後、第十六世紀に至るまでは、醫學の中古期で、ビサンチン帝國の醫學、アラビアの醫學、歐羅巴の醫學といふやうに、文明の中樞の場所に、それぞれ、醫學の隆盛なる狀況を呈した。その內で、歐羅巴の醫學には僧侶醫學、サレルノ時代の醫學、煩瑣哲學時代の醫學、人文學時代の醫學などの區別があつて、種々の論說もあらはれたが、これを要するに、所謂經驗的醫學の內に、一括すべきものである。

三

第十六世紀になりてから、所謂文藝復興の時代となり、醫學の上にも解剖學をはじめ、幾多の學科に革命的の變更があらはれ、それから第十七世紀、第十八世紀と、世紀を經るに從ひて、自然科學の漸次に勃興せるにより、醫學はその影響を受ること著しくなり、第十九世紀になりてから、醫學は觀察と、實驗とを根據

として、論を立つるやうになつた。これは實に醫學上の大改革であつて、今日の醫學は全く、その源をこゝに發したと言つてもよろしい位であるが、此革命的學派の起つたのは佛國である。佛國のブルッサイが、所謂生理的醫學を唱道したるに嗣で、ナポレオン第一世の侍醫たりしコルヴィサーが所謂病理解剖學派を立て、疾病の占居する所とその原因とを解剖的に研究することをつとめ、これを臨床上に應用することにつとめたのである。殊に聽診、打診等所謂理學的診斷の方法を醫學の實際に應用せるはこの學派の力で、これがために、殊に實際の醫學はその面目を一新するに至つた。

此の如く、佛國には巴里解剖學派興りて、一新旗幟を立てしが、それに嗣で、マッケンジーの實驗病理學の新派が起り、病にかゝれる有機體の生理を說くのが、すなはち病理學であると論じ、單に解剖上の所見にのみ偏せず、疾病の症狀の生理的發達にも目を著け、病にかゝれる身體の全體を觀察すべきことを主張したのである。

四

西洋の醫學は、これを歷史的に見れば、經驗的時代と、自然科學時代とに大別することが出來る。經驗的時代といふのは、希臘から始まり、羅馬を經て、各國に渡り、それぞれ、發展して十八世紀にまで及むだのである。自然科學的時代は、十八世紀の頃から、漸次にその端を發し、第十九世紀になりて、大に隆盛の狀況を呈したのである。もとより、經驗的時代の醫學の素地の上に、自然科學的醫學が生長したのであるから、斷然、兩者を分離することは出來ぬが、しかし、今日の西洋の醫學は、全く自然科學的のもので、觀察と實驗とを主とするのであるから、これを十八世紀以前の經驗的時代のものとは分離して見なければならぬ。

十九世紀以後の西洋醫學をば、此の如く、十八世紀以前の醫學と分離して見るときは、今日の醫學は、全くその源を佛國に發して居るのである。所謂巴里病理解剖學派の努力により、病理解剖及び病理學の知識に

本づきて、病機を判定することをつとめ、又病機を認識するに、理學的診斷法を應用することを創めたるにより、こゝに醫學に關する舊時の思考と、方法とは、全く一新せられたのである。

されば、今日の醫學は、十九世紀の始に、新に佛國に生まれたるものと見ても差支ない。所謂巴里病理解剖學派がその祖であると言てもよろしいのである。佛國からして、その學説は、英國と獨逸とを始め、近傍の諸國に波及し、いまだ二百年ならずして、すでに、今日の盛況に達したのである。

五

佛國に於ける所謂巴里學派の論説が、英國に傳はつたとき、英國にはその國の先進者たるシデンハム、フンチル、カルレンの學説が相續きて行はれて居つたのであるが、佛國學派の學説が這入てから、その病理解剖學派の所説が、英國人の實際的思想に適合したために、病理解剖學及び理學的診斷法は、此國にありて、大に發展し、チエーンス、ストークス、グレーヴスなどの有名なる學者が出て、この新しい意味の醫學は、ユヂンバラと、ダブリンを中心として、勃興したのである。しかしながら、この新學派は英國にありては、あまりに發展することが無かつた。英國の醫家は、知識が多方面で、著述も甚だ澤山であるが、この新學派の大成の上に、貢献せることは甚だ尠なかつたのである。

獨逸國では當時、自然史派が盛であつた時代で、スタルク、ホフマンなどの大家があらはれて、自然哲學的の思索によりて、醫學上の論を立てて居つたのであるが、その自然史派の一人たるシエーンラインに至りて、始めて、佛國學派の說に傾き、自然科學の研究方法を醫學に適用することに努力し、病理解剖學及び理學的診斷法の價値をも認め、又病機を判知するには顯微鏡的及び化學的檢査方法の必要なることを說いた。これが所謂伯林學派の發端で、その首領たるシエーンラインは佛國の醫學を獨逸に移した人である。シエーラインの論説は、佛國に興りたる病理解剖學派の花を採り、これを自然史派の素地に移植して、美果を結ば

しめたのである。

六

佛國病理解剖學派の所説は、此の如く、英國に渡り、獨逸に移り、大にその勢力を逞くしたのであるが、墺太利に入りて、大に恢弘せられたのである。當時維也納大學の教授として、第一流の大家たりしロキタンスキイは巴里學派の説を採りて、醫學及び醫術の基礎は全く病理解剖學にありとなし、而して、單に解剖的所見を自然史的に記載し、類別することに滿足せず、死亡したる後に、その臟器に發見せられたる變化を見て、その病の經過の中にあらはれたる症狀を説明しようと企てたのである。ロキタンスキイに併びて、スコーダが、病理解剖學上の所見に本づきて、理學的診法の革新を企てたために、所謂巴里學派の學説はこゝに始めて大成したのである。所謂新維也納學派のために、巴里病理解剖學派は大に恢弘せられたのである。墺國醫家のために大に恢弘せられたる巴里病理解剖學派は、此の如く、新維也納學派を生じ、この新維也納學派はトラウベのために獨逸に移され、さきにシエノンラインが佛國から輸入したるものと融合し、こゝに病理解剖學派の醫學は大に發展し、遂にウイルヒヨウの細胞病理學説が現はれて、病理組織學及び實驗病理學の大成を致し、これによりて、吾人が、疾病の本態を解するの所見は、根柢から一新せられ、從來行はれたる液體病理、神經病理及び生活論は排斥せられ、これに代りて、細胞病理學があらはれたのである、すなはち病機の占居せる所を、身體の根基原素たる細胞にありとして、これによりて、輓近の理化學的研究方法を病理學に適用することをつとむるやうになつた。これが輓近の西洋醫學である。

七

輓近の西洋醫學は、此の如く、佛國にその源を發したもので、その基づく所は自然科學である。十八世紀までは、自然哲學上の思索が、醫學上の立論の根本となつたのであるが、十九世紀になつてから、それが自然科學に代はり、實驗と、觀察とによりて、歸納的に

この論を立つるやうになつたのである。

この西洋醫學、すなはち自然科學に基づいたところの西洋醫學がまだ興らなかつた以前、十六世紀の頃に、すでに東洋に傳はり、我邦にも葡萄牙人及び西班牙人のために、その方術は傳へられしが、後に至りて、英國人及び和蘭人のために、その醫方は引き續きて傳へられて居つた。殊に、徳川氏の末世、我邦の醫家が、西洋の文字を讀むことが出來るやうになつてから後、親しく西洋の醫家から、又西洋の醫書から、傳へられたるものは、經驗的時代の醫學で、當時我邦に行はれたる醫方と格別の差異はなかつた。もとより傳譯が十分で無かつたために、十分に西洋の醫學の眞相を窺ふことが出來なかつたのは言ふまでもないことであるが、たとひ、傳譯が十分であつたとしても、自然科學時代の醫學は、西洋のものと雖も、東洋のものと、雲泥の差があるとは云はれないのである。

八

西洋醫學に對して、東洋醫學といふものには、印度にその源を發した醫學と、支那にその源を發した醫學とを區別することが出來る。印度の醫學は、凡そ耶蘇紀元前一千五百年に始まつて、紀元前八世紀から五世紀の頃には、名高い醫家も澤山居つたといふことで、その醫學は、ヒポクラーテスの醫學に類似して居る。それで、印度の醫學と、希臘の醫學との間には直接の交通があつたに相違ない。その印度の醫學が先であつたか、希臘の醫學が前であつたかは、固より疑問であるが、紀元前三百二十七年、アレキサンデル大王が印度遠征の頃に、印度の醫學と、希臘の醫學とが、互に相接觸したことは事實である。支那の醫學はその文明と共に、世界の中で、最も古いものの中に屬するもので、その論説は陰陽及び五行（五行は後から加はつたものである）に基づいて居る。これは印度の醫學の四元素説によく似て居る。それで、印度の醫方と共に、支那の醫方も、そのむかし、中央亞細亞の一地方に居つた古代文化人民から傳はつたものであるといふことが唱へられて居る（フオン、リヒトホーヘン氏）、或は

耶蘇紀元年代の頃に、印度の醫方が、佛教と共に、支那に傳はつたものであると說くものもある（リエタルド氏）。

印度の醫學は、その後、發展しなかつたから、今は論ずるに及ばぬ。東洋の醫學としては支那に興り、日本に移りて發展したる支那醫學を指すものとして差支ない。

九

支那の人民は最も古い時から文字を有し、自然科學的の研究、殊に天文の研究に力を致し、農業も、陶器ならびに、火藥の發明なども、他の國民に先んじ、詩歌及び哲學上の思索には、甚だ堪能であつた。從て、その醫學も、哲學上の思索に基づきたる論說に富み、自然の觀察にも甚だするどきものがあつた。その最も古い時代のことはさて置き、隋唐時代、醫學全盛の時代のときに就て考ふるに、たとへば、隋の大業六年（西洋紀元六百十年）に著はされたる病源候論の中に、種種の疾病の症狀を記載したる所は、かなり、精細で、支那の醫家が自然を觀察するところの力の銳かつたことが推測せられる。病源候論の內に疥に數種あることを說き、その濕疥の部に『常有レ汁出、並皆有レ蟲、人往往以二針頭一挑得、狀如二水內瘑蟲一』と書いてある。これによりて見ると、病源候論時代にまでに疥癬の蟲は認められて、居つたかと思はれる、西洋ではアラビアの醫家の中に、すでに疥癬の蟲を發見したといふことであるが、しかし明かにこれを認めたのは一千八百十何年、佛國のガールスである。これは固よりわづかに一例を示したのであるが、支那古代の醫學が、自然を觀察して、これを記載することの緻密であつたことは實に驚くべきことである。

一〇

支那の醫家は、かなりに、發明の力があつた。獨創の力があつた。自然を觀察することも精細であつた。從て疾病を類別し、その症狀を記述することも精細であつた。治療の方法をも工夫した。殊に自然界の諸物を取りてこれを治療界に應用することに努力した。彼

の大黄の如きは、古代、支那から中央亞細亞を經て、西亞細亞及び歐羅巴に傳はつた藥品の一つである。本草の學も早く開けて、記載的自然科學は古い時代から已に支那には行はれて居つた。

しかしながら、ここに、考ふべきことがある。支那人は一方に於て發明の力に富むと共に、一方にありては空想に耽るところの人種である。自然を觀察して得たるところのものも、すなはち、詩化するの傾がある、いろいろと考へ出し、種々の事實を發見するが、それを直ちに詩化して、實際と離れたるものに取扱ふ。從て折角の發明も、その美果を結ぶことがない。この點は佛國人の性行に似た所があるやうに思はれる。佛國の人民は種々の事項に就て、獨創の力をもつて居るが、動もすれば、これを詩化するために、その結果は常に他國に渡りて得られる。今日の西洋醫學は佛國醫家の創始したものであるが、その果を結ばしめたものは獨逸醫家であるやうに、支那醫家も種々の點に於て、獨創の見を有し、發明の説を立てたが、その果は我邦の醫家の手にて結ばしめられたのである。

二

東洋の醫學と、西洋の醫學とを比較して、論ずべき點は固より、經驗的時代の西洋醫學と、東洋醫學とである。東洋にありても、今日は、西洋醫學を用ひ、その西洋醫學は自然科學的時代のもので、以前の西洋醫學とは別の物と見て差支ないものである。

經驗的時代の西洋醫學と、東洋醫學とは、共に單一の經驗を據として自然哲學上の思索に基づいて説を立てたものである。從て、その論説を對照して見ると、互に符節を合したものがある。ただ說明の言語の相違したる位に過ぎないものがある。支那でも古く解剖したことがあつたといふことで、古い所から傳はつた五臓六腑の説があるが、これは大部分、犬か何か動物の解剖に基づいて居るものらしい。西洋でも、十六世紀ウエーザルの解剖があらはるるまでは、犬か何か、動物を解剖して見たる所によりて人の解剖を説いて居つたのである。ヒポクラーテスが自然の良能を說いたや

うなことは支那の醫書には古い所に已にあらはれて居る。我邦の永田德本の如きは最も力をこの點に盡して居る。治療の方法として、按摩を用ひ、體操を用ひ、灌腸を用ひ、鍼灸を用ひ、麻醉藥を用ひ、溫泉を用ひ、灌水を用ひ、臟器療法を用ひ、食養療法を用ひ、傳染病者を隔離し、癩病院を建て、皮膚病に水銀を用ひ、貧血に鐵を用ふる等の方法は、早く唐以前、すなはち、西洋の紀元七世紀以前にこれを實施して居つたのである。殊に、近頃、西洋で八釜敷、論ぜらるる性慾衞生のことが、唐時代に、十幾種の專書を有することなどは、學問上注意すべき事であると信ずる。

而かも、此の如き東洋の醫學が、西洋に傳へらるるに至らなかつたのは交通の不便といふことも確かに一因をなしたものである。その內に、鍼術と、按摩とが西洋に傳はりて、鍼術から「シャウンチスムス」と名づくる一流派を獨逸に生じ、又此れから電氣刺針法と、皮下注射法とが考察せられたといふ點から考へると、若し條件がよかつたならば、東洋の醫學も、もすこし西洋に傳はつたかとも思はれるのである。

二

自然科學を基礎とせる西洋醫學は、今や、已に、世界の醫學である。最早、西洋と東洋とを區別すべきではない。しかしながら、歷史的に考ふれば、西洋と東洋とはこの學術の素地たるべき、學者の思想の發達の具合が相違して居る。そのもとは佛國に出たものでも今日では獨逸の醫學と佛國の醫學とは大にその趣を異にして居る。英國の醫學にもまた相異したる面目がある。これと同じく、おなじくその根源は西洋醫學にありとしても、我邦の醫學は、おのづから、西洋諸國の醫學と、その趣を異にする譯である。

世間には、我邦の人民に獨創の力がなく、模倣のみを事とするのを心配する人がある。私は敢て獨創の力が乏しいといふことを心配せぬ。却て獨創の力には詩化の力が伴なふて、動もすれば事實を離れて、思索に耽るの弊があるのを心配する。今日は西洋との交通も開けて居るから、我邦の學者も、西洋の學者から、種

々の刺戟を受けることが出來る。この刺戟に應じて、觀察と實驗とを據として、研究を進むれば、その結果は模倣ではなく、同化である。私はこの同化の力によつて、我邦の醫學が、宇内に冠たることを得るの時期に達せんことを希望するのである。

世界に於ける日本民族の分布

某外務官吏

日本帝國の版圖内に住する我民族の總數は最近の統計に依れば約七千萬人にして其内朝鮮人約千三百萬人臺灣人約三百萬人を包含す、而して現今の增加率を以て增進するときは二十世紀の半頃迄には帝國の人口は殆んど一億に達すべし現今に在りても我帝國は人口の點に於て支那英、露、米、佛等に次ぎ世界大國の一たる實を備ふるものなり、帝國の版圖外に住する我民族の總數は大正四年六月現在數五十四萬餘人（朝鮮人及臺灣人を含む）に達し每年多少の增加を示す而して此增加は世界に於ける日本人の活動發展を數字的に記錄するものにして其主要なる地理的區域を示せば支那滿洲南洋等なりとす、但し米國方面に於ける日本人は出生兒童の外新なる增加を示さず。

第一　地理的區域より觀たる分布

今海外在留本邦人總數五十四萬人の世界に於ける地理的分布を見るに最も多數なるは支那に於ける三十萬人及米國に於ける十七萬五千人（布哇を含む）なりとす之に次ぐは伯剌西爾一萬六千。加奈陀一萬二千。海峽殖民地六千二百。秘露六千。比律賓五千七百。濠洲五千二百。東部西比利亞四千。蘭領印度三千二百等に

して伯剌西爾を除く外皆太平洋の潮水に洗はるゝ沿海地域なるを見る故に日本人の分布より之を觀察すれば亞細亞大陸最多く之に次ぐは南北兩米大陸にして濠洲之に次ぎ歐羅巴には其數極めて少なく約一千人を算するのみ（獨墺及び白の三國には目下在留者殆んど皆無の有様なり）然かも其過半は倫敦及巴里に在り、則ち在英本邦人は約六百八十人。在佛本邦人約百七十人なり阿非利加大陸には本邦正式領事の駐在するものなきを以て其統計の徴すべきものなきも在住者の數極めて少なきは疑を容れず。

日本人の最も多數在住する支那地方中集團をなせる著しき地方を擧ぐれば間島十七萬五千、關東州、四萬八千。奉天地方一萬六千。上海地方一萬一千、安東八千、長春及牛莊地方各六千等にして滿州方面最多く之に次ぐは楊子江流域なり。

南北兩米大陸中日本人の最多數在住するは北米合衆國にして就中カリフォルニヤ州を最多しとすカリフォルニア。ネヴアダ。ユータ。コロラド。アリゾナ。ニユーメキシコ六州に在住する本邦人の總數は約七萬人にして出生兒童の數毎年約三千人あり。

布哇群島に住する日本人は其數約九萬三千にして出生兒童の數毎年約四千人に達す。

兩米大陸に於ける日本人は要するに太平洋沿岸に密集し北に在りては「アラスカ」更に南して加奈陀に於ては「コロンビア」州、米國に入りてはワシントン州（「シヤトル」、及「タコマ」の兩市を含む）、オレゴン州（ポートランド市を含む）、カリフォルニア州（桑港及「ロスアンゼルス」の兩市を含む）墨西哥（在留者約二千七百人）、秘露等の沿岸地方に居住せるものなり、太西洋にありては紐育市及其附近各地に約二千七百及南米伯剌西爾に約一萬六千の日本人を見るのみ。

第二　人種別より觀たる分布

海外在留者を(一)内地人　(二)朝鮮人　(三)臺灣人の三類に分ち之が分布を觀察するに内地人三十六萬二千。朝鮮人十七萬八千、臺灣人二千五百なり而して朝鮮人及臺灣人の主として居住する地方は支那南洋及米國なる

が先づ支那在留者を此三類に分別すれば內地人約十二萬朝鮮人約十七萬餘、臺灣人約二千四百なり則ち在外朝鮮人の大部分は支那就中間島地方に在住するものにして其數十七萬其他の朝鮮人は米國加州、布哇、浦鹽地方等に散布せり、又臺灣人の大多數は厦門、福州、蘭領印度、佛領印度等に在住す。

米國に在留する本邦人十七萬五千は殆んど全部內地人にして其內朝鮮人二千人內外を包含すと推測せらる故に內地人の數のみに就て之を見れば米國最多く之に次ぐは支那(十二萬人)なり。

第三　男女別より觀たる分布

海外在留者五十四萬二千人中男子の數三十三萬七千女子の數二十萬五千なり則ち男女の比は三と二の割合を示す。

在留者男女數の殆んど平均せるは支那地方にして合計三十萬人中、男十六萬二千女十三萬八千にして男女の割合は殆んど九と八に近し。

在留者男女數の極めて不平均なるは濠洲にして五千二百人中男五千女二百にして男女の割合は二十五對一なり。

在留者中女子の數男子の數より多きは柴棍(男、百三十、女三百五十)カルカッタ(男二百九十女三百五十、)孟買(男、百三十、女百六十)にして男女數殆んど相均しきは新嘉坡地方(男三千百餘、女三千九十二)なり。

米國本土在留者の男女の比例は極めて不平均なる一例にして男七萬八千に對し女一萬三千則ち男女の比は殆んど六と一に近し此の如きは決して健全なる社會狀態となすを得ず加之太平洋沿岸に於ては日本人と米國人との結婚は現狀の下にありては寧ろ稀有の例外に屬するを以て勢ひ日本人の妻女たる者の渡航を催進することとなり又不健全なる日本人社會の狀態は此の妻女の渡航によりて著しく改善せられたるの跡歷然たるものあり今後も尙ほ此不平均を恢復するため妻女の渡航することは當分其跡を絕たざるべし唯玆に注意すべきは妻女の渡航をして可成不自然ならざる方法に依らしめ漸を以て男女の均衡を得るに近づかしむるを期せざる可

からず。

布哇群島にありては男女の數は本土に於けるが如く懸隔著しからず、則ち男五萬五千に對し女三萬八千なり。歐洲に關しては在留者約千人中二百人の女子あるを以て男女の割合は四と一なり。

第四　職業別より觀たる分布

海外在留者を職業別より觀察するに最も多數なるは農業者約二十萬人(男女合計)にして其大部分は間島在留朝鮮人及米國在留內地人なり之に次くは農園勞働者にして其數約七萬六千(男女合計、以下倣之)、にして主として米國在留者なり次に會社、商店、及銀行等の事務員一萬六千、雜種勞働一萬六千、家事被傭人一萬四千、此外商工業に從事するものも亦其數極めて多し。

然れども要するに現今海外在留本邦人の最大多數は各種の勞働階級に屬するものにして材能技藝又は專門の學術を以て海外に生計を立て或は獨立の商工業者として事業を經營するものは比較的少數なり今後海外に雄飛せんとする本邦人は單に勞力を基礎とすることなく資本及智能と相竢て活動する底の人物ならざる可からず。

勞働を唯一の目的として海外に渡航するものに關しても最近に於ては其出發前外國生活に關する基礎的智識及相應の訓練を必要とすること識者の間に漸く承認せらるゝに至れり況んや空手空拳を以て何等の準備なく徒に一攫千金を夢むる未熟なる青年の漫然たる海外渡航は往々にして失敗に終るのみならず可惜有爲の青年をして其前途を誤らしむることあり最も注意すべし。

然れども古今東西一國の將に興らんとするや國力自ら內に充實して其民族を國外に進出扶植すること恰も水の低きに就くが如きものあり、彼の十九世紀の中葉米國民が「ミシシッピー」の流域を距へて漸次西部及南部に新天地を開拓したる事跡の如きは最も著しき歷史上の事實にして開拓者として其氣魄其準備、其忍耐は吾人の大に學ばざるべからざるものあるを見る、吾人は宜しく滿蒙其他の地方に於てアングロサクソン民族の祖先に學ばざるべからず。

日本に於ける世界的人物

鐵拳禪

一

我が日本は、日清戰役に於て東洋的となり、日露戰役に於て世界的となり、日獨戰役に於て世界的地歩を占め、露國に供給せる日本重砲の威力に由りて世界の視聽を聳動し、今後大に世界的發展を試みんとしつゝあり。從て世界の評判となり、歐米の人名辭書に牢記さるゝ所謂世界的人物の、今後續出すべきは勿論なるも、島國的日本の急激なる膨脹は、其の內容の充實を缺くが故に、其の世界的人物を有するに於て大に遺憾あり。

島國的日本と雖も、素より世界的人物たるの實質を有する人物なきに非ざるも、未だ世界に普く知られざる小國なりしを以て、世界の認むる所とならず、可惜世界的偉人、世界的英雄、世界的藝術家と稱するに足るの徒も、空しく島國的人物として埋沒せり。世界の之を研究するに冷淡なりしに非ずして、殆んど研究の價値なしとされたるなり。寧ろ價値なしとされたるよりも、世界研究者の眼中に無かりしなり。然るに近時其の人物の掘り出されて、世界の驚異となるものあるに至れるは、島國的日本の漸く東洋的となり、世界的となれるの後なりとす。日本に於ける世界的人物の、世界の評價に上れるは、日露戰役以後ならずんば非ず。尤も其の以前にありても、少數の學者の歐米の學界を刺戟し、若くは世界の學界に貢獻せる者なきに非ざるも、今日の如き權威を有せりとは信ずる能はず。

日露戰役の我が勝利は世界の驚異に相違なきも、邦人の想像せるが如く驚異せるに非ず。驚異の眼を輝かすと同時に、冷笑の小皺も亦鼻頭に浮べるは蔽ふべからず。然れども、世界は此の新興國に對して、最早舊時の如き態度を以て接するを得ず。其の制度文物は言ふも更なり、其の國民性を研究せざるべからざるに至れり。而して他面には英雄崇拜熱の昇騰して、我が勇將を景慕し、賞揚し、世界的人物たるの評價を附するに至れり。人氣に投ずるに機敏なる商賈の所業とは云へ、東郷ペン、兒玉ペン等を發售せるに徵し、如何に大將東郷平八郎及び兒玉源太郎の當名の轟けるかを知るべきなり。當時名聲の世界に布けるは、啻に此の二人者のみに非ず、大將乃木希典及び黑木爲楨等も亦世界の血を湧かしめたり。大將奧保鞏の如き、又一軍を統帥して勇戰し、後年元帥となれるも、海外の名は大將黑木の下にあり。或に大に顯はれずと云ふの、當れる

やも知るべからず。兎に角奥は不人氣なり、黒木は人氣あり。其の人物性格に於ても亦、黒木の遙かに武將らしきを見る。而して其の地位に於ては、遂に奥に若かず。是れ軍閥の情弊の纏綿する所、如何ともすべからずと雖も、之が爲めに却て彼れが性格の光を發揮す。兒玉、乃木、既に世を去りたるも、東郷は元帥に進み、倚衆望の上に名譽を保持しつゝあり。其の人短軀なるも、性平靜圓滿にして、常に春風の前に微笑す。威ありて猛からず、宛然豐年に鼓腹せる好々爺の慈あるも、何處やら腹の知れざる所あり。沈毅宏量、正に將帥の器なり。英人、彼れをネルソンに比すれども、其の性格稍異なれり。唯皇國の興廢此一戰に在りと自覺し、力戰して勝を制せるは即ち相似たり。一は死して護國の鬼となり、一は生きて東宮傅育總裁の重任に膺る。彼等は國難に際して喚發せるの名花、一國の士氣を表象する者ならずんば非ず。

二

現時我が邦に於ける世界的人物の何人なるかを問はば、世人の躊躇なく答ふるは、伯東郷平八郎及び伯大隈重信の二人者なり。公山縣有朋は元老の筆頭、元帥大將にして、樞密院議長なり。軍閥を擁して政界に顧眄し、內閣の起倒一に其の掌中にありとさへ思はしむる程國內に勢力あり。然れども、國民の信望は必ずしも彼れの上に非ず。却て彼れを目するに藩閥の擁護者、官僚政治家、非立憲の巨頭たるを以てす。彼れの偶ま海外に知らるゝも、元老なる特種の人物として知らるゝのみ。其の政治家たるの名聲に至りては、到底伯大隈の敵に非ず。伯大隈は夙に立憲政治家として知られ、世界的巨人として尊敬されしも、一たび朝に立つや、在野當時の主張を裏切り、其の言論は實行に伴はず、徒らに官僚の鼻息を窺ひて言論を抑壓し、非立憲行動を敢てして憚らざるが故に、近時漸く不人氣となり、海內の信望以前の如くならずと雖も、歐米の人名辭書より今更抹殺さるべしとも思はれざれば、海外の相場は聞く下落せりとは斷ずべからず。殊に近く日露協約を締結し、世界の外交舞臺を賑はしたるを以て、日本重砲の威力と共に、尠からざる刺戟を與へたりと信ずべき理由あり。其の言論の大風呂敷なると共に、其の遣り口華やかなるを以て、一時の興を唆るには充分の魔力あり。其の魔力は即ち人氣を煽りて、實質以上に買ひ被らしむるの利益あり。伯の世界的名聲は、條約改正の爲めに隻脚を失ひたるに由らずして、其の大法螺に在り。早稻田の邸に盛んに歐米の來客を招致し、無遠慮に吹き立て、得意の大風呂敷を展開して、政界に嵎を負ふ虎の如く感得せしめたるに由りて、今日の高名を致せり。縱令其の交際華やかなりと雖ゝ、彼れを元老一羅と同視し、進歩的政治家と認知せざるに於ては、其の大法螺より世界的名聲を吹き出すこと能はざりしなり。彼れは幸にも、國民よりも毛唐よりも進歩的政治家と認知されたるが故に、實力以上の虚名を博せり。信望以上の人氣を集め得たり。其の辯舌の巧みなる、其の山師肌なる、未だローズベルドに及ばざるも、其の人氣を煽る事の上手なる、何程か相似たるものあり。人氣を煽る事上手なれば、從て無責任なるを免れず、其の局に當りて政策を行ふ場合に、支障尠からず。伯大隈の如きは、在野

當時の言論に祟られて、今日の不人氣を買へりとも見られざるに非ず。彼れにして、眞面目に政界を批評し、其の言論を可能的範圍に節約したらんには、今日の攻擊を受けざりしやも知るべからず。言論の人大隈の、武勳赫々たる東鄕の襃貶の外に超立せるに反し、毀譽紛々たるは、現下の政界に活動せるが爲めなり。

伯大隈に比すれば、世界的光明稍薄きも、男加藤高明、男本野一郎の如きは、外交家として歐米に著聞す。男本野は久しく駐露大使となり、日露戰役後の感情を融和し、今次協約の締結に就ても努力鮮少にあらず。男加藤は、英國化せる外交家なりとの評判あるほど、英國贔負にて、英國に持て囃さる。英國に誘はれて、卒然として獨國に開戰し、歐洲戰亂の渦中に投じ、英國に頤使さるゝの傾向ありしかば、當時非難の聲高く、四面楚歌の聲を聞くの感ありしも、自信力に富める彼れは、斷乎として當初の所信を曲げざりき。大浦問題に關し、連帶責任を主張して内閣を去りたるも、彼れの名聲は毫も毀損せざるのみならず、却て立憲的行動なりと反對黨の稱讚を得たり。之が爲めに局面展開の運動に參加するの機會を作り、政治的生命を伸べたり。彼れや高顴隆鼻、狀貌魁偉、歐洲紳士の態度あり。唯白晳ならざるが故に、歐米の外交家の間に伍して、東洋的色彩を蔽ふ能はざるのみ。彼れの英國化せりと惡評さるれども、其の全く英國化し得ざるは、東洋的色彩の自覺に基く。彼れの外交家として持すること極めて高く、其の手腕の割合に其の自負の鼻に付くもの無きに非ざるも、其の狀貌と云ひ、其の辯舌と云ひ、目下東洋出色の外交家なるは疑ふ可からず。

三

聯合諸國の經濟會議は、世界の耳目を聳動せるが如く、其の實大したものに非ざるも、決して無力無意味に非ず。本邦より此の委員として列席せるは、曾て藏相たる男阪谷芳郎なり。彼れの經歴は經歴なるも、吏僚の才にして、大臣の器に非ず。前藏相若槻禮次郎と共に、次官級の人物なり。財界の學者として出色の者に、子田尻稻次郎あり。其の人物奇骨あり、多年會計檢査院に立脚して勢力あり。大臣級の人物なるも、大臣として果して失敗なきを得るやの疑問なるが如く、世界經濟會議に列りて、克く使命を全うし得るやも疑問なり。若槻は計數の頭腦あり、事務を裁斷するの能力凡ならざるも、風采辯舌、世界的たるに遜色あり。男阪谷の美貌必ずしも列國委員を魅すべしとは思はれざるも、何となく世才に長け、悠揚たる紳士の態度あり。列國委員と折衝して、何とか都合よく取り纏める程の手腕を有す。伯大隈の之を推薦せる、彼れの岳父たる男澁澤榮一の好感を買ふの意味もあるべしと雖も、滿更情實にのみ因はれたるの人選には非ず。彼れは既に會議の使命を終へて、歐洲の戰時狀態を視察中なり。聯合國の歡迎する所となりて、世界の指目を惹く、尋常の觀戰武官と同一視すべからず。

男澁澤は、我が實業家として世界の記憶に上れり。日本富豪としての三井、岩崎の著聞するは言ふを須ゐざるも、個人としては何程の聲譽もるに非ず。男澁澤の富は、多く誇るに足らざるも、個人として名聲あり。

彼れは幕府の末葉、佛國に航して丁髷を切り、率先して歐洲の開化に浴せる人なり。爾來金權の蔑視すべからざるを知り、遂に官を罷めて野に下り、銀行を創立して範を示し、諸種の事業を計畫して、實業家と成り濟ませり。先年渡米實業團を率ゐて米國に航し、諸州を觀察して平和の使命を傳へ、昨年再び渡米視察せるが如き、常に眼を世界の趨勢に著眼するを忘れず。伯大隈の大風呂敷なしと雖も、歐米の來客を招致し、膝を交へて快く談ずるは、伯の平生に異ならず。其の交際の範圍、伯の如く廣からざるも、其の世界的の心掛に至つては、尋常富豪の企及する所に非ず。

邦人にして海外に成功せるもの尠からずと雖も、其の著名なるは、北米の三人男なりとす。一を葡萄王長澤鼎と云ひ、二を馬鈴薯王牛島謹爾と云ひ、三を發明王高峰讓吉と云ふ。長澤は薩摩の人、往年森有禮と共に英國に留學し、米人ハリスに從ひて渡米せるも、地位を得る能はず、紐育の硝子製造所、葡萄釀造所にありて勞役に從事し、刻苦精勵の結果今日の事業と富とを贏めり。現下彼れの釀造する葡萄酒の價格百萬弗以上に達し、白人の尊敬する所となり、彼れの爲めに一小停車場を設けたる程なり。牛島は暫時福澤の塾に學び、二十七歳にして北米に渡り、幾多困難と戰ひて馬鈴薯の栽培に成功し、一年の產額六十萬弗乃至八十萬弗に及べり。一は米國氣質に化されて、邦人の爲めに氣焔を吐かざるも、一は俠氣を有するが故に邦人に尊敬され、推されて日本人會長となり、同胞の爲めに盡瘁す。博士高峰は、帝大の出、醫藥タカヂヤスターゼ、血止劑アドリナリン等の發明をなし、之を賣出せる結果僅に數百萬弗の產を作せり。更に排日防止の策を講ずるに於ては、其の功勞單に一家の富に止まらざるなり。

四

博士高峰は發明によりて富を成したるが故に、世人の知る所となれるも、其の科學的發見に於て、世界の學術界に貢獻し、獨創の見地を開拓せるを世界に誇り得る者、獨り彼れのみに非ず。否、其の發見の價値に至りては、彼れを凌駕若くは雁行するもの、十指の上に出づる幾許なるを知らず。從來我が邦人を以て模倣に長ずと做し、模倣以外何物もなきが如く自ら嘲ける者は、泰西の心醉より醒めて、眼を獨創の天地に開き、日本科學界の世界的位置を自覺するを要す。

醫博にして世界に名あるもの、ペスト菌を發見せる北里柴三郎あり、赤痢菌を發見せる志賀潔あり。二者多少の批評なきに非ざるも、其の發見の名譽によりて博士を得たり。梅毒の注射劑たる六百六號の發見助手には、秦佐八郎あり。彼れは獨のエールリッヒと共に研究に從事し、其の發見の名譽を分擔する者、彼れ一人の功に歸すべからざるも、其の世界的名聲に至りては、前二者の上にあり。田原淳の心臟結節の研究も亦、世界に名あり。學士院受賞者には、藥博高峰讓吉の副腎內分泌物質アドリナリンの發見あり。野口英世の蛇毒及び黴毒の純粹培養の發見あり。稻田龍吉の黃疸出血性スピロヘータ病に關する研究あり。助手井戶泰と共に其の研究の名譽を荷へり。

醫博野口はペンシルベニア大學に於て蛇毒研究中、誤つて右手の指を毒蛇に噛まれ、之を切斷治療せるに由りて終世の不具となれり。而も之が爲めに、蛇毒の新發見をなし、更に進んで黴毒の純粹培養の發見をなすに至れるなり。醫博稻田は九大醫科の教授、曾て青山外科の助手たると三年、後獨逸に留學せり。夙に農夫土工間に流行する熱性黄疸病の研究に從ひ、一昨年末其の病源體の發見を完成し、英米の學界に向つて之を發表せり。若し歐洲の戰亂なかりせば、獨逸の學界に向つて發表すべきこと勿論なるも、戰亂の渦中にあるが故に敵國に向つて發表せざりき。然るに八個月の後、獨逸人に依りて彼れと同一研究の發表されたるを見る。暗合か、剽竊か、或は研究の發足點の同時なるやを知らずと雖も、其の先鞭の名譽は彼れにあり。日獨戰爭の勝利の我に歸せるは罰ふ迄もなく、學界の戰爭に於ても我の勝利となれるを賀せずんば非ず。蓋し青島攻圍軍の大將神尾光臣と、熱性黄疸病源體の發見者たる彼れとは、今次の戰爭と關聯して世界の記憶に殘るべきの人物なり。

五

戰爭に就て想起するは、銃砲及び火藥の創製者なり。世界的人物と云ふと雖も、學界の人物の學界に止まるが如く、世界陸海軍の視目を惹くに止まるも、或意味に於て世界的ならずと云ふ可からず。少將村田經芳は村田式單發銃及び連發銃の發明者として知られ、今次の戰爭に於ても、此の銃器の鋒鋩を利しあるは疑ふべからず。中將有阪成章は有阪式野戰砲の創製者なり。藥博下瀬雅允に下瀬火藥の發明者、海軍下瀬火藥製造所長たり。既に鬼籍に入りたりと雖も、其の火藥の爆發力の强烈なる、世界の驚異たるを失はず。少將村田と共に、地下に相語らふあらば、互に手を拍つて哄笑せん。緒方式重砲の獨創者に、中佐緒方勝一あり。彼れ重砲は六十三度の射角を有し、射程八千米突に達するの逸品にして、現時獨佛の有する射角四十五度を限度とするの重砲に優越す。青島の役、敵の心膽を寒かしめたるは是れなり。大佐南部麒次郎は、三八式步兵銃の創案者にして、南部式自動短銃の發明者なり。南部式の特色は、引金に指を掛けたる儘連發し得るにありて、佛國の尤物ブローニング式に勝れり。彼れは銃器に對して甚深の興味を有し、其の獨創的頭腦を以て、片ツ端より我が銃器を改良せんとす。而して彼れは、目下飛行機搭載用機關銃の考案製作中なりと。彼等を有する我が陸軍は、聊か世界に向つて誇るに足れり。

再び學界に立ち戻りて、理博を一瞥せんか、世界的地步を占むるもの、動物學の石川千代松、外山龜太郎、渡瀨庄三郎、五島清太郎、飯島魁あり。植物學の池野成一郎あり。物理學の田中館愛橘、長尾半太郎、田中正平、本多光太郎、日下部四郎太、北尾次郎あり。醫博の夫れの如く、廣く知られずと雖も、其の研究に於ては、生物分布上の便宜、又は地理上の關係により、日本的特色を濃厚に發揮せり。

理博石川は東大農科の教授、其の研究の熱心にして眞摯なる、嶄然頭角を顯し、其の研究の方面又多種多樣に亙す。獨逸留學以前、既に小笠原島の蟹の種の起源を研究し、揚羽蝶の氣候的變化を研究せり。其他諸

海老の發生、金魚の研究あり。蛙の發生に就ては、故理博箕作佳吉と共に研究し、其の結果を公表せり。獨逸留學中は、ヘイドラの反頭實驗を試み、先人の不充分なる所を補正せり。歸朝後、彼れは夜光虫も研究し、ミヂンコを研究し、エフエローダの一種の發見をなす等、原生々物に關する精細なる研究を遂げたり。殊に夜光虫の研究は、彼れをして世界の學界に重からしめたるものなり。理博外山は學界の奇物、金魚乃至目高の雜交試驗に從事し、生物の遺傳研究に獨創の見を吐けり。彼れの始めて動物界に遺傳原則の行はるゝを發表するや、蘭のドフレース、獨のコルレンス、墺のエルマックの三學者も亦同樣の研究を、殆んど同時に發表せり。之が爲めに、彼れの名聲は、本邦より以上に海外の學界に高し。飯島の海綿の研究、渡瀨の筋肢動物の複眼の研究、五島の魚類の寄生蟲の研究等、何れも有名なり。又、理博池野は蘇鐵の研究に於て、世界の蒙を啓けり。

生物學の研究者に比し、物理の人々は多少不振の觀なきに非ざるも、田中館の帶磁に依る熱の發生と、長岡の磁歪に關する研究三種並に岩石彈性試驗と、田中の純正調とは、世界學者の研究に比して遜色ある者に非ず。就中田中は、早く其の名を世界に知られ、公伊藤博文が獨帝に謁せし際、彼れの名を問はれ、公は知らずと答へ赤面して退出せりとの逸話すらあり。以て如何に、田中の知名なりしかを知るべき也。彼れの音樂に趣味を有し、其の批評に聽くべきものあるは人の知る所。學士院受賞者には岩石彈性試驗に成功せる日下部、及び鐵の研究の本多あり。工博鳥潟右一、鯨井恒太郎等は、無線電信電話に使用する電氣振動間隙の研究に關し、電氣學界の權威なり。從來遞信省式の特色とせる檢波器の金屬裝なりしを、紅亞鉛鑛に代へたるにあり。最初鯨井の着想に萠し、彼れの歐洲留學の途に上るや、工博鳥潟其後を承けて研究を持續し、遂に其の完成を見るに至れり。一は創意の人、一は努力の人、其の何れの將來多望なるかは、今日輙く斷言し易からず。

六

理博菊池大麓は、其の專門よりも寧ろ教育家として知らる。先年彼れは英國より招かれ、教育勅語を中心として日本の教育に關する講演を試みたる事あり。當時英國は我が邦の戰勝に驚嘆し、强露を破れる原因の國民教育にありとせるが故なりき。男加藤弘之逝いて、學者にして教育界に重きをなすものは彼れなり。彼れは大學總長及び文相たるの閱歷を有し、事務的手腕の見るべき者あるも、未だ達眼の指導者を以て許す能はず。法博穗積陳重は、英文にて『祖先崇拜と日本の法律』てふ著述を公表し、祖先崇拜に關する新研究として世界に知らる。其他著書に依りて歐米に著聞するもの『武士道』の法博農博新渡戸稻造あり。『肉彈』の大尉櫻井忠溫あり。『不如歸』の德富蘆花あり。詩人野口米次郎あり。其の純文藝の作品の歡迎されざるは、日本文の不便なるに由ると云ふものあるも、其の罪文章に非ずして、日本的特色の稀薄なるに歸せざるを得ず。洋畵の何等世界に誇るべきなきは、其の作品の未だ模倣の域を脫せざればなり。現代日本畵の指目を惹かざるも亦、日本的特色を缺如し、

獨創の見るべきなく、徒らに新樣に走りて、靈魂の充實するもの無きが故ならずんば非ず。

獨創の見るべきなきも、日本的特色を髣髴し得るを以て、歐米に多少の評判あるもの、音樂家三浦環あり、稍下つては高折壽美子あり。女優川上貞奴も一時彼地に持て囃され、今何人名辭書中に其の芳名(?)を流すと聞けり。大將福島安正は、中佐たりし時、獨逸の歸途單騎旅行を試み、西比利亞を橫斷して勇名嘖々たりき。宗敎家には大谷光瑞あり、河口慧海あり。一は印度研究者として、其實力寧ろ其名聲を超え、一は多少山師的なるも西藏研究者として、世俗の耳目を動かすに似たり。七寶の濤川惣助は故人となれるも、近年の名人なり。毛耳雁お雪は、米國富豪の夫人たるに由りて著はれ、山田浩二は玉突の名手として、其の妙技を世界に擅にす。同じく世界的人物と云ふも、其の人物樣々あり。餘りに列擧し過ぎたるの嫌あるも、亦洩れたるもの無しと云ふべからず。世界の廣き、其の人物の多き、隱れたる偉材なしとも限られず。之を發見して紹介する、他に其人あるべきを以て、一先づ玆に擱筆す。



人物評論（七十四）

駐外大使公使評論

▽駐外大使公使

石川半山

目下海外に駐劄して居る日本の大使公使の事に付て、我輩の知る所を語れとの要求で有るが、實は餘り多く知らない方で有る、然かし其の中で知て居る分だけを話すとしよう。

駐支公使林權助男

我輩は林男の顔を見ると、其の風骨が品川彌二郎先生に似て居る樣な氣がする、顔の似て居る所から推して、心意氣も多少似た所が有りはしないかと考へて居る、一種の氣骨が有て、而して腹の綺麗な人で有る、眞に武士らしい良い人物で有る、其の人格は國家の大事を委託するに足ると思ふ。

彼れは朝鮮公使として成功した人だ、伊藤公の如きも彼れの人物を褒めて居られた、支那公使としても決して惡るいは無かつた、辰丸事件では大分強硬なる態度を執つた爲めに、支那の當局者から畏敬されたが、然かし決して嫌忌されることは無かつた、若しも袁世凱氏が健在で大總統に留任して居たなら林男が公使となつて大に手腕を示す意氣込みで、歐洲を出發したのださうだが、相手は誰れにしても爲すべき仕事は十分に有るから、彼れが腰を据えて、やる積りになつたら、相當の成績を收むる事になる

で有らう。

前に支那公使の時には、時々途方もない豪傑振りを發揮したことが有る、或る時外務大臣那桐の所へ宴會に招かれて、大分醉ふて居ると、那桐は酒が强いから、更らに一杯を過ごす可しと勸めた、彼れは『此上頂戴すると歸ることが出來ない』と云ふと、那桐は『お休みになればベッドの用意は有るから御遠慮なくお過ごし下さい』と言つた、之を聞くや林公使は醉眼を開き『ベッドばかりでは泊まるのは御免蒙むるが、若し令夫人迄拜借が出來るなら泊まつても良い』と言ひ放つた、然かし彼れは支那語が出來ないから、隨行の通譯官が之を通譯しなかつたが、彼れは通譯官に向て、此の言を其儘に通譯しろと頻りに迫つて、通譯官を困まらせたと云ふことだ、コンな所は普通の外交官と違ふた所で、頗る豪放な所が有て、支那大官の荒膽を挫く呼吸は、手に入つた者だ、我輩は彼れの將來に向て、大なる望を懸くる者で有る。

駐英大使珍田捨巳子

珍田駐英大使は實は我輩も曾て其の生徒として其の講義を聞いた事の有る一人で有る、明治二十三年頃東京文學院に於て、スペンサルの社會學を讀んで貰らうた、英語は讀む事も書く事も話す事も、十分巧妙に出來る先生で、人格は立派な君子人で有る。

米國に於て學問をして、米國のゼンツルメンのタイプに出來た人だから、桑港の總領事の時にも、先日迄駐米大使としても、內外に受けが良くて、兎に角成功した、眞面目で正直て忠實だから、其の外交も堅實で有る。

外交官と云へば何か機略縱橫の人でなくてはならぬ樣に誤解して居る者も有るが、それは舊式の思想で有る、マキアベリズムは十九世紀の外交で有て、二十世紀になつてソンな舊式の外交を用ひて居ると、思ひも寄らぬ失敗に陷るかも知れぬ、人と人との間に信義が必要なるが如く、國と國との間にも信義が必要で有る、既に虛僞の外交が排斥されて、信義の外交が尊重される時勢が來たとすれば、駐外大使も亦『信義の人』が選任されて然る可きで有る、珍田子が此の意味に於て、帝國が最も重要視する英國大使となつたのは、蓋し其の人を得た者と謂て宜しからう、我輩は彼れが米國に於て成功したるが如く、必ず英國に於ても成功を收むる事と信ずる。

英國と米國との差は、米國に於て Baggage と云ふ所を、英國に於て Luggage と云ふ位の者だ、僅かに ba と lu の差が有る、ba に於てアレだけ成功したる彼れが、lu に於て失敗するとは思はれない、特に前任井上侯の如きも、決して機略縱橫式の人でなくて、文明式の人で有つたのだから、珍田子がセント、ゼームスの朝廷に受けの良い事は、疑ふ可くもない、而して英國に對する外交は、參事官の本多熊太郎君が其の淵源たる才氣から搾り出して來る者へ、珍田子が適當の制限を加へて、意外に良い成績を收め得るかと思はれる、本多君が工夫をして作つた團子へ珍田子が適當なる分量の黃粉をかけたら、アスタキス氏やグレイ氏お喜ぶ樣な、甘まい物が出來るかも知れぬ。

駐米大使佐藤愛麿君

佐藤大使は珍田大使と同じ東北出身で、而して又同じ米國育ちで有る、英語の巧妙なることも珍田大使と相讓らない位だ。

小村大使がポーツマスへ出かけた時、多くの隨員が往つたが、其の毎日の會議へ列席したのは、高平男の外には佐藤、安達、落合の三君のみで有つた、然かし此の三君が列席したのは、全く通譯の爲めで、佐藤君は英語、安達君は佛語、落合君は露語と云ふ役割で有つた、會議中の發言は、露國はウキツテ伯、日本は小村侯のみで、高平男もローゼン男も發言せず、其他は唯通譯として列席して居たのだ。

佐藤君は此の會議に於て、英語の通譯で有つた上に、米國上陸以來、會議の間から歸朝する迄、小村大使一行のスポークスマンで有つた、到る處で内外の新聞記者に接見して、其の間に答へて居た、ポーツマスではウエントウオース、ホテルに於て、毎日會議の經過を聞く可く、内外の新聞記者が押しかけて居たが、日本側から來て報告するのは佐藤君の任務で有つた。

ウキツテ伯は自ら新聞記者に面會して、種々の話をしたが、小村侯は之を面倒なりと考へて、一切面會を謝絶し、佐藤君をして應接せしめた、ポーツマスの會議に對する米國の人氣が、露國に傾いた爲めに、アンな失敗になつたなどと、馬鹿な批評をする奴が有るが、一國の盛衰興亡に關する外交が、相撲では有るまいし、外間の人氣で決するワケの者ではない、新聞記者操縱の巧拙に依て、會議の一條も一節も乃至一字も、之を動かすことの出來る者ではないが、全く國力の不足せし日本が、アンな失敗の結果になつたのだ、而して失敗した時には、種々の惡評の立つ者で、佐藤君が新聞記者の操縱を誤まつた事も其失敗の一として、彼れを責めて居る者も有る、然かしながら當時の事情を目撃して居る我輩には、佐藤君の記者に對する態度は、實に能く務めた者で有つたことを明言し得る者だ、大體に於て何等の失策は無かつたと信ずる、一行中の山座政務局長などは『佐藤が餘計な事を言て困まる』などと言つた事も有るがそれは小村、山座一流の沈默主義から來た事で、此の沈默主義の人々からは、新聞紙上に現はれたる金子堅太郎子の談も盛に批難されたるのみならず、實は我輩自身も米國の各新聞記者に自分の所見を語つた爲めに山座君から時々一本やられた者だ、而して我輩共の目から見たら、佐藤君の談話は何も山座君の非難すべきほどの事ではなかつた、ポーツマス會議中は勿論、小村一行の到る處に於て、内外の新聞記者は佐藤君の應酬に對して、十分滿足して居たので、其の應接振りは頗る巧妙な者で有つた、ニウヨルク市滯在中は、午前と午後一定の時間を定めて、新聞記者を接見して居たから、時々我輩も佐藤君の室へ往つて、親しく其の問答を聽き、我輩も其の中に交じつて何か言つたりしたが、其の應接振りの巧妙な事は、一點の非難すべき所が無かつた、少くもウキツテ以上で有つた、ウキツテは極めて素撲な人で、外交家と云ふ風采ではなかつたが自ら各人に應接して、其の眞氣の人を動かす者が有つたばかりで有る。

我輩は佐藤君が米國大使として、決して珍田子に劣るとは思はない、

同じ東北人で、同じ米國育ちで同じく英語が巧妙だから、珍田子と同じ様な成功を收むるかことは、少しも疑ふ所はない。

駐伊大使伊集院彦吉君

伊集院君は現代外交官中に就て我輩が最も親しく交はつた人の一人で有る、明治四十一年の冬、我輩は報知新聞の北京特派員となつたが、殆んど同時に伊集院君が林君に代て公使となつた、我輩は北京へ往く前に一應滿洲を視察した者だから、北京へ往つた時には、彼れは既に公使館の主人公で有つた、小村侯は我輩を彼れに紹介する書面を書かれた、爾來五年間、我輩が北京を去る時も、公使は依然として伊集院君であつたから、我輩の北京に於ける五年間の生活は、所謂伊集院時代であつた、而して日本人の少ない、從て交際社會の狹まい北京に於ては、在留同胞はマルデ兄弟でも有るが如く親しく交るので其人格の全部を知る事が出來るが、伊集院君の如きは其人格に於ては、多くの人を推服せしむる人で有ツた、政府の命令を受けて行ふ外交に對じては、往々非難を加ふる者も有ツたが、其の外交を非難する者も、彼れの人格に對しては、常に敬意を拂ふて居た、伊集院時代に北京へ往ッた人で、彼れに面會して不快を感じた者は、極めて稀れで有ッた、在留の同胞で彼れに對して惡感を抱いた者は、殆んど一人も無かッたと言て宜しい、彼れは才の人ではないが德の人で有る、而して頗る威嚴の有る男で有る。

日本人の間に評判が良いのみならず、支那大官の間にも畏敬され、時に北京外交團の間に於て、何人からも尊重されて居た、露國公使コロストヴヰッツ氏が曾て我輩に向て、彼れを評して曰く、『彼れは一種の力を有し、無言にて坐する時にも、一種の壓迫力を有す』と、其の通りだ、彼れは何等格別他人に優さッて居る學術技藝を有するワケではないが、其の人格の力が、人を壓迫する者が有る、彼れは外務大臣として、國家の外交を委託しても良い人物で有る、伊太利などへ遣ッて、シロッコ風の中に暴らして置くのは勿體ない様な氣がする。

駐佛大使松井慶四郎君

松井君は其の經歷上から考へても、其の人格の上から言ふても、立派な外交官で有るが、唯一の缺點は其の風采で有る、其の風采も決して惡るいワケではないが、男振りの良い爲めに、年齡よりも若かく見え、所謂狀貌魁偉と云ふ所がない、然かしながら外交は敢て風采に依らない、小村侯なども風采は至て良くなかッたが、其の威嚴は犯かす可らざる者が有て外交家として第一流で有ッたから、松井君の風采を見て直ちに彼れの外交手腕を侮るワケには往かぬ。

初めて日英同盟の成立した時、林董公使の命を奉じて、伊藤公の日露同盟を中止させる爲めに、英國から大陸へ急行し、憤激せる公の綱猟玉に、第一にブッかッて能く之を融和し、終に公を倫敦へ引張て來て、日英同盟に盡力せしめたのは松井君で有る、米國大使館參事官としても、相當の働らきをなし、近かく外務次官としても、加藤外相の補佐役として良い働らきをした、公使館員として支那に居た事も有り、第一革命の時には、臨時に北京へ來て暫らく滯留して居た、佛國は日露戰爭後大使

館參事官として、暫らく就任して居た所だから、今回大使となッて往ても、佛國大官の間に馴染も多く、外交上少しも困まる事は有るまいと思ふ。

駐露大使本野一郎男

本野男は文久二年二月の生れて、本年五十五歳になるが、歐洲に生活する事は、二十年以上で有る、佛國のリオン大學を卒業して歸朝後、外務省の飜譯官や外務大臣秘書官、外務省參事官等を務めて居たが、明治二十九年に露國公使館の一等書記官に任ぜられて以來、伯國公使、佛國公使等を經て、今の露國大使となる迄、常に歐洲に生活して居た、露國大使となッてからでも、既に十年を經過して居る、其の間には時々賜暇歸朝をした事も有り、一度は歸任の途次支那へ廻はッた事も有ッたが兎に角二十年以上歐洲生活をした人は、外交官中に在ても珍らしい方で有らう、佛語は日本語よりも巧妙で有るが、露語の如きも十年間の滯在中に覺えて、今では佛語と同じ樣に巧妙だと云ふことだ。

我輩は本野男が佛國公使の時代に、巴里に於て面會し、其後北京に於て面會したばかりで、餘り永く交際した事はないが、確かに良い紳士で有る、彼れに會して居ると、普通の日本人に面會して居る樣な氣がしない、歐洲大陸の紳士と對して居る樣な心地がする、此の日本離れのして居る態度は、彼れが永く歐洲に居た結果で有らうが、然かしながら其の精神に至ては決して日本武士たることを失ふて居らぬ、日本武士の精神を以て、歐洲文明の中に育つと、彼れの如き人格が出來る者かと思はれる。

我輩は不幸にして未だ露國に遊んだ事がないけれど、ウキッテ伯を知り、ココウツォフ氏を知り、其他露國の名士と對話した事が有ッたが、其時の感じから考へて見ると、本野男の如き風采、態度、及び其の思想は、露國の貴族と親善なるに適して居ると思ふ、彼れが大使として十年間露都に留まり、日露の國交を增進するに務め得たのは、全く彼れの人格が之を成すに適して居たからで有る、吾人は邦家の爲めに此の駐露大使の重任に、其の人を得たる事を喜ぶ者で、出來得る者なら、尙永く此の人をして此の重任に在て、極東の平和の鍵を握らせて置きたいと思ふ。

其他の公使

公使の間では日置益君、內田定槌君、安達峯一郎君、落合謙太郎君、陸奧伯等も知らないワケでもないが、何れ又機會を見て何か語る事にし、今回は是れだけにして置く。

要するに世間では「外交官に人材が乏しい」と云ふ評も有るが、我輩も決して之を否定する者ではないけれど、人材の乏しいのは外交界ばかりでなく、日本の各方面一齊に乏しいので、外交官でも一人一人に列舉して、其の人を評して見ると、何れも相當の人物が選任されて居る、而して我輩が知る限りに於ては、林男と伊集院君の如きは、出色の人物で有る　他の方面に於ても、此の兩君の如き人物は、餘り多くは有るまい、又露國向きとして本野男の如き人物は、天下一品で有る、往年西德次郎男が露國公使として成功したが、本野男の成功は西男以上で、之れは有

易からざる適材を適所に置いた者て考へる。

▽現時の遣外大公使

鵜崎鷺城

上　駐外五大使

嘗てシーワードといふ米國國務卿が或人を駐外公使に任命すると、アンナ人物に米國を代表させるのは國の恥辱であると國人の間に非難が起つた。其時シーワードは同じ公使にも必要の爲め外國に出すものと、本國に置くも不必要の爲めに出すものとの二種類あると言つたが、日本の駐外使臣の中にもやはり此二種類あるようである。有體にいへば外交部面には人材が揃うて居るようで案外人が居ない。翩々たる外交官としての部分的才能を具へるものはあつても、國際關係の上に眞劍の働をする外交家としての頭腦、識見、力量あるものは餘り見當らない。外交中樞を支配する外務大臣でも、國を代表して直接外交の衝に當る大公使でも大概一定の順序を經て段上りに進んだ官卓主義、機械主義の人間で、稍ゝ話せると思はれるものは十人に二三人有るか無しである。力士にも幕下に却て掘出者がある如く、外交家も無名の若手中に案外天才が潜んで居るかも知れぬが、上の方は大概相場が定り、單に香附面丈けが一流といふに過ぎぬ。

現役大使は英の珍田捨己、米の佐藤愛麿、露の本野一郎、佛の松井慶四郎、伊の伊集院彦吉で、此外に支那公使になるべき林權助が大使格で居るが、世界の一等國に駐剳して居るは此五人である。小村壽太郎、林董、青木周三、栗野愼一郎、高平小五郎等が外交部面に活動して居る時代は後輩扱ひされたが、彼等の或者は不歸の人となり、或者は退役した今日、是等の人々が外交界の先輩に推されるようになつた。此中でも珍田が年輩閲歴に於て第一の先輩株であり、又た大使職の筆頭である。此人は元と弘前の東奥義塾——故本多庸一翁の起したる基督教主義の私塾——を出てから米國のインデアナ大學に學び、歸朝後外務省飜譯官になつたのが外交生活に入る始まりで、それ以來殆んど三十年餘り外交の飯を喰つて居る。彼の外國生活は明治三十四年より四十一年まで、小村外相若くは林外相の下に外務次官であつたのを一つの境界として前後二期に分たれて居る。即ち上海領事、桑港領事、南米伯剌西爾總領事を經て白耳義辨理公使、和蘭公使、露國公使が第一期で、獨逸大使、米國大使及び今度の英國大使が第二期である。其出使國は佛、墺、伊を除けば東西兩半球に亘り、今の大公使中此人程足跡の多方面に及んで居るものは無からう。隨つて外國の事情に通じ、特に米國は元と留學した土地でもあり、領事及び大使として一番に長く居たから、有數の米國通に數へられて居る。

此人は小村の系統を引き、曾て外務次官になつたのも小村が特に露國から呼寄せたので、日露戰爭中は政務局長の山座と共に小村の片腕であ

つた。風采堂々として押出は好し、外國語殊に英語は達者だし、ドッシリして貫目もあるし、人間は圓熟して人格も立派である。緻密に物をやる方でないけれども、經驗家である上に細心にして注意深いから、失策をする心配はない。英國大使としては勅參の本多熊太郎が居なければ、大使館が時間であつたといはるゝ好人物一點張りの井上勝之助侯に勝るとも劣るまいと思ふ。

珍田の駐英大使はへの字なりに勤まるにしても、佐藤の駐米大使は心細い。加藤前外相が日置を支那に差向けたのと、石井外相が佐藤を華盛頓に出使させたのは、蓋し人物の選叙を誤つた好一對であらう。此人は珍田と同郷同學で、米國留學も同時代同大學である。此人は在米公使館書記官、智利總領事、本省電信課長、和蘭公使等を經て一昨年歐洲戰亂前一寸墺國大使になつた位のもので、格別大した閲歴もなければ、又た外交上の功績もない。墺國大使になつてから少し世間に知られるようになつたけれども、夫れ迄は主に外國の田舍廻をしてたから、外交家として水準以上に出てなかつた。一番長く居たのは和蘭で第二回平和會議も、前韓國皇帝の海牙密使事件も其間に起つた出來事である。何でも和蘭時代は酒を飲むのと、釣をするのと、時々賭博道樂に耽る以外に仕事がなかつた。

此人の長所は秘密を嚴守する事と、周到の用意を以て客を遇し、熟心に人の面倒を見ることである。其小心翼々として事務に當るといふ點は一箇の循吏で、其代り人間は奥行も間口も狹い。小村が石井の後に彼を電信課長にしたのは、此律義と小膽とを見込んだからで、電信課長としては各國の電信暗號に通じ、極端に秘密を守り、恰好の適役であつた。恐らく歴代の電信課長中、石井と彼とが最も適任であらう。日露講和談判の時、彼も小村全權の一行に加つてポーツマウスに行き、新聞記者係を命ぜられた。是れも秘密主義の上から特に彼を選んだものと思はれる。當時露國のウイッテ側は務めて歐米の新聞記者に接見して巧みに新聞を利用したが、日本側は例に依つて例の如く啞政略を取つたから、一般に同情の露國側に集つたに反して、日本の一行は大分評判が惡かつた。當時新聞政策に失敗していろ〳〵不利を招いたのを佐藤一人の罪に歸するのは少く酷かも知らぬが、元來彼が如き秘密即ちベストと心得る小膽家に此大役を仰付けたのが惡いのである。

一口にいへば彼は官僚式外交家の型に嵌つた一人である。それ故に外交といふものを常に大きい廣い見地より解釋せずして、單に小さい狹い尺度で取扱ふのである。言ひ換へれば外交を政治的に見ずして事務的に扱ふのである。南米若くは和蘭の如き面倒なる國際問題に觸れない場所では、是れでもお茶を濁して行けるかも知らぬが、目抜きな場所ではソンナ流儀で意味のある外交が出來るものでない。特に米國は現時の國際間に一種特別の地歩を占め、歐洲戰亂に就ても將來支那との關係に就ても、外交上興味と注意に値ひする土地である。其大舞臺に此人の如き無經驗にして實力の疑はしき外交家を大使として立たしめるのは險呑千萬である。彼に取つては晴れの出世である丈け役者が貧弱である。蓋し石

井外相が特に彼を此位置に推擧したのは類型の人物であるから、自然故負目の加つた結果であるまいか。

最近數年間駐外大公使に屢々更迭があつたれども、四十一年以來駐獨地の變らないのは本野である。此人は佛國留學より歸朝後飜譯官として外務省に入り、外務大臣秘書官、公使館一等書記官を經て白耳義公使に進み、日露戰爭中前駐佛公使を勤めそれから栗野と入代つて駐露大使に轉じた。留學中は專ら國際法を修め、外交官中の學者である。昔から系統は別に是れと定まつたものが無く、歷代の首相とも外相とも善い。取別け佛國遊學時代の友人といふ關係から西園寺と親善のようである。此人には今まで餘り世間に知れない情事がある。昔し巴里の大學に居る頃、フトしたことから金髪美人と戀に落ち、博士論文通過の後に結婚して相携へて日本に歸る約束をしたが、双方の間に戀を遂げ難き事情があつて彼は失戀の悲を抱きつゝ歸朝した。當時故あつて萬里小路家より出戻つつた故野村靖子の息女は本野の戀物語を聞て同情し、彼の爲めに新夫人を周旋しようとしたが、思はしいのが得られなかつた結果、失戀の人は破鏡の人を迎へるといふ奇縁を結ぶに至つた。是れが今の本野男爵夫人である。

本野は若い時から佛國に居た丈けあつて佛國張りの紳士で、佛人の思想感情を解し、佛語を巧みに操り、輕快洒脫にして調子が好い。露國には久しく居て大分地盤も出來たから、勢ひ其地を離れ難いといふ事情もあるらしい。此前日露協約に骨を折つたが、今度の新協約に就ても折衝の功がある。外交官中此人程西洋の事情に精通したものは無く、それだけ東洋の狀勢に暗いかと思はれるが、人物の貫目も外交上の知識もあり常に何事をか爲さうとの積極的氣分もあり、自ら負ふ處ある丈けに案外强い點があつて、比較的外交家らしい外交家である。

松井は石井より後に次官となり、更に石井が大臣になると此後を襲ふて佛國に行つたが、大學は二十二年の卒業であるから、石井よりも一年先輩である。次官になつたのは牧野伸顯が山本內閣の外相になつた時でそれまでは首席書記官として支那に久しく居り、大使館參事官として米國に居り、內田康哉の外相時代に參事官として本省に居た。此人は一時有望の外交官の如く期待を囑せられたけれども、次官になつて此案外なるを暴露し、マヅイ外交或は靑二才外交などと惡口を言ふものさへあつた位である。以前支那に居たといふので殺された阿部守太郎と共に支那通と稱せられ、第一次革命の時本省から北京に出懸けて時の公使伊集院の氣を惡くしたことがあるが、支那通といつても單に一小部分の事を知つて居る丈けで、支那に對する經綸などはない。唯だ次官として何年か働ひたといふ廉で大使に進んだのだらうが、外交家としてはボンクラである。尤も富豪より妻君を迎へて居るから、外國人との交際に不足を感ずる心配はあるまい。

一時外交界には薩人が多かつた。古い處では寺島宗則、森有禮、鮫島尙信、吉田淸成あり、近代では西德二郞、牧野伸顯、荒川巳次などが居る。現役では伊集院が唯一の薩出外交家である。此人は初め農林學者に

なる目的で、攻玉舍を出てから札幌農學校の試驗を受けたが、學力不足の爲めに落第した。が、此落第は却て彼の爲めに幸福となり、それから大學に入つて二十三年卒業後直ちに外務省に入つた。駐外官としては初めから支那方面で、一度英國大使館參事官を一寸勤めた外は、芝罘領事天津總領事、及び全權公使として二十年餘の久しきに及び、從て支那人の間に知己も多く、特に故袁世凱と親密であつた。それ故に公使としては餘りに袁贔負に傾いたとか、北方中心主義に偏したとか、不徹底の對支外交とか、いろ／＼非難もあつたけれども、兎に角有數の支那通と稱して好く、支那人に對して押も利いたし、特に天津總領事時代は最も令名があつた。或は公使時代よりも此時の方が外交上貢獻する處が多かつたかも知れぬ。專管居留地經營の如き、日露戰爭の際支那が遼河以西を中立地帶として最後まで嚴正中立を守りしが如き、彼の盡力と信用の結果である。一昨年支那から歸つて久しく無任所で遊んで居たが、何處か外國に出使するとせば無論大使になるべき順序で、遂に林權助に代つて支那公使となり、今度また伊太利大使として林の後へ行つたのは偶然ながら妙な廻り合せである。蓋し此人は東洋向で歐羅巴向でない。

形貌魁偉にして態度重々しく、如何にも豪傑然たる風があつて、西洋人などは餘り喜ばぬかも知らぬが、確に支那人の眼には大人物の如く見える。彼が支那人の間に重んぜられたのも一つは中味よりも此外形が餘程與つて居る。一寸見た處では人物印象が不明瞭であるが、鈍重の如くにして緻密の分子あり、又鐵骨稜々たる如くにして案外如才ない點がある。伊集院のやうな風格は薩摩人に好く有る型である。

以上五大使中佐藤、松井、伊集院の三人は大使の新米で、まだ／＼大臣の呼聲を立てらるまでに手が屆かない。又た伊集院は兎に角他の二人は其器でない。尤も石井が大臣になる世の中だから、何とも分らぬがそれにしても珍田、本野といふ先輩が居る。此兩人は從來屢々外相候補者に擬せられ、現に珍田は昨年加藤が外相を罷める時、其後任の交渉を受けた位であるから、此次には兩人の中孰れかが外相に任ぜらるべき順序になるだらうと思ふ。

下　林公使以下各公使

林權助男が伊太利から歸れば、支那に行くだらうとは、豫て世間に噂された處であるが、いよ／＼本月四日を以て支那駐劄を命ぜられ、而も是れに先ちて政府は大使を以て公使を兼任し得るの勅令まで發布した。是れに據て見れば、林の新任は尋常一樣の更迭と趣を異にして居る。即ち政府の方に林でなければならぬといふ意味があれば、林も縱令ひ特に親任官の待遇を賜ふとの但書があるにしても、大使を以て公使になつたのであるから、對支政策上の自信に加へて餘程の奮發と見るべきである。林としては思ふ存分に腕が揮へる點からいふも、又た世間から什出ずんばと期待される上からいふも、想に外國の大使よりも支那公使の方が却て會心の位置と思ふ。

三寓首の會同も對支政策の根本的確立が外交問題の焦點である。今度の日露協約も主として支那問題を目標とした取極めである。實政後の支

那の權力中心なり政治の局面なりが如何に移動するにしても、日本としては東亞百年の大計より打算して方策を定め、日本が主人公の位置に立て支那を指導し、少くも北京外交を支配するの抱負と實力がなければならぬ。今までのような盲目主義、今日主義、豆自働車式のペラボーな遣口では駄目である。是れは外交中樞を支配するものも其人を得なければならぬが、常に直接外交の衝に當る公使其人を選ばなければならぬ。此意味に於て今日の如きな重大なる時機に、日置に代ふるに林を以てしたとは何よりの事である。佐藤の駐米大使に比すれば意味のある更迭で、是れに依て何程か一方の無意味を補ふことが出來る。日置は加藤前外相が特に推擧したのであるが、初めより適材でないことは十人が十人認めて居た。人間が執念深いからネバリ強い外交をするだらうと言ふような點を取柄として、此大任を負荷させたとすれば選叙の理由の薄弱なるに驚く。彼の在任中は膠州灣征伐といひ、昨年の日支交渉といひ、帝制問題といひ、南方派の旗揚げといひ面倒なる問題の最も多い時代であつた。此多事多難の時に南米から飛込んだ日置では唯マゴマゴする許りである。實際此二年間は荷の勝過ぎた爲めに人知れぬ苦勞をしたらしい。政府は日置無能の聲に對して表面いろいろ辯解して今日に及んだけれども、其實政府もアレでは困ると自覺したに相違ない。今度特に勅令を發布してまで林を起たしめたのは、公使の選擇を誤つた事と日置の無能とを自白する何よりの證據であるまいか。

林が支那に乘込んだからとて、オイソレと世人を側目せしめるような放業も出來まいが、兎に角日置などと役者の段が違ふから、何等か意味のある仕事をするに違ひない。又た支那行を承諾するに就ては自分の意見を披瀝して、當局者より後來此寸法で支那に臨むといふ保證を取つて居るように察せられる。此人は最近六七年間伊太利に釘附されたけれども、伊太利へ赴任するまでは在英公使館書記官、通商局長になつた外、上海、芝罘、仁川の領事、朝鮮及び支那の公使として外交生活の大部分を東洋に送り、特に支那公使としては權助式外交を以て表面にも裏面にも働いた。羅馬に居る間にも常に支那問題の研究と注意を怠らなかつた。それ故に彼は歐羅巴向よりも寧ろ東洋向の外交家である。又た外交家として相當の頭と腰と用意と手段とを具へ、貫祿も十分に出來て居る。人間はブッキラボーで外交的でないけれども、無愛嬌丈けに辛味も滋味があつて一種底光りのする外交家である。日置に對して附け得なかつたものも、此經驗あり一隻眼ある林の支那公使には安心して保險を附けるだらうと思ふ。彼なども近き將來には必ず外相候補者に擬せられる一人である。

現役公使は瑞典の内田定槌、和蘭の落合謙太郎、智利の飯島龜太郎、伯剌西爾の畑良太郎、瑞西の三浦彌五郎、羅馬の西源四郎等で、獨逸には戰爭前まで杉村虎一が大使であり、白耳義は陸奥廣吉が公使であつた。又た墨西哥は法學博士安達峰一郎が公使であつたけれども、昨秋動亂の爲めに歸朝して以來其儘になつて居ると思ふ。此には主として現駐外六公使の短評をしよう。

此六人中西一人を除けば皆な大學出身で、內田が二十二年であるから一番先輩である。內田は多年濠洲邊の領事を勤め、それから紐育總領事となり、瑞典公使に轉ずるまで久しく伯剌西爾の公使をして居た。同期に大學を出た松井が大使となり、一年後の石井が外相になつた今日、南米拉典國やスカンデネビア邊に廻されて居るのは隨分出世の後れた方である。福岡の人丈けに一種の肌合を有つた論客で、山座などは常に袵を斂めて居た。落合は江州邊の人で、二十八年濱口雄幸、下岡忠治などゝ同時に可なり好い成績で大學を出て居る。元獨逸に長く勤め、次で本野の下に露國大使館參事官であつたが、其後奉天總領事をして居たと思ふ。幣原喜重郎が昨年外務次官になるに就て、和蘭公使に轉じたのである。此人は頭も好く仕事も出來るけれども、非常に神經質で何でもない事に腹を立て、隨つて態度が傲慢に見え、一體の調子が非外交官的に出來て居る。公使になつたのは榮轉に相違ないけれども、和蘭のやうな處ではノロ〳〵遊んで居るより外に是れといふ面倒な仕事がない。却て奉天總領事の方が腕を揮ふ機會が多い。併し珍田にせよ佐藤にせよ幣原にせよ、和蘭に居たものは不思議に出世をして居るから、落合も其中に晴れの舞臺に出る時節が來るかも知れぬ。兎に角妙な癖はあつても、少壯外交官中では未來ある一人と認めて好からう。

飯島は二十六年に大學を出て、一寸本省に居たこともあるし、方々の領事にもなるし、別けて濠洲シドニーの總領事を久しく勤めて居たと思ふ。此人は必ずしも原敬の乾兒といふ程でないが、原が通商局長及び次官として外務省に居た頃に幾分か引立てられ、其後外交官を罷めて古河家に入つたのも原の推薦であつた。然るに其原と衝突して古河家を飛出し、永らく浪人をして居たが、一昨年六七年振りに外交界に返咲して日置の代りに智利へ行つたのである。外交官として格別取立てゝ言ふ程の人でないが、南米邊ならば無難に勤まる。此人の妻君は交際術に長じて居る上に、英語でも佛蘭西語でも西班牙語でも自由に話せるといふ才媛で或は主人公よりも一枚上手の外交家であるかも知れぬ。

畑といふ人は信州が出した唯一の外交官で、二十三年の卒業であるから石井と同期で、現公使中內田に亞ぐの先輩であるが、其名も人物も餘り世間に知られて居ない。此人は有數の獨逸通で、珍田が獨逸大使をして居る時、大使館參事官として其片腕であつた。伯剌西爾のやうな處では手も足も出ないが、使途に依ては相當役に立つ人らしい。

瑞西は從來在墺國大使の兼轄になつて居たが、本年から特に瑞西公使館を置くことになり、一時通商局長の坂田重次郎が公使に新任せられるだらうとの噂であつたけれども、三浦彌五郎が是れに任ぜられた。三浦は千葉の人で二十九年の卒業であるから、公使中一番後進である。日露戰爭前までは公使館書記官として外國に居たが、伊藤公が韓國統監になつて以來統監府書記官を以て京城の理事官に擧げられ、今日でいへば總領事といふ格で朝鮮の理事官の筆頭であつた。四十五年石井が佛國大使になつた時、安達峰一郎に代つて大使館參事官に進み、其後在米大使館參事官に轉じて瑞西に赴任するまで其職にあつたと思ふ。頭もあり腕も

あり殊に氣分の面白い男で、三分のハイカラに七分の豪傑肌を加味して居る。それ故に盛んに氣焔も吐くし、氣に喰はぬ時は罵倒もするがそれで餘り敵を招かない。京城時代は隨分不平であつたが、其後は比較的順調に進んで行つたから餘り不平もあるまい。兎に角一種の快男兒である。

西は俗に西ゲンといつて故伊藤公の二番婿で、白耳義邊で上すべりの學問をした男である。伊藤の威光で外務省に入つて白耳義公使館書記官となり、久しく大使館一等書記官を兼ねて居たが、秋月左都夫が墺國大使になつた時勅任參事官に進み、最近吉田作彌に代つて暹羅公使になつたのである。元來此男は今の末松謙澄夫人生子の方を貰ふ筈であつたが、白耳義留學中、末松が英國より歸朝して大分持囃されたから、鹿鳴館の夜會に飛んだり跳ねたりした當時の新しい女たる生子女史は、西よりも末松の方が頼もしいと思つてかトウ／＼自由結婚をして了つた。西は白耳義から歸つてヒドク失望して居るのを見て伊藤も氣の毒に思ひ、妾腹の女を彼に配したのである。兎に角伊藤の女婿といふので大得得となり、或時外務省高等官室で、一番別嬪の妻君を持つたものが今日の茶菓子を驕ることにしようと發議するものがあると、西はイキナリ頭を抱へて、ソイツは困つたナーと言つて菓子を買つたといふ奇談もある。大した馬鹿でないが無論悧巧といふ方でなく、西ゲンの名は一種の輕侮を意味して居る。たとひ伊藤の婿にせよ、此男が今まで無事に外交界に首を繋いで來たのは不思議である。蓋し佐藤愛麿の駐米大使といひ、西の暹羅公使といひ、適々外交界に然るべき人物の少いといふ事、言ひ換へれば下らない人物が要路を占めて居るといふ事實を語る何よりの證據であるまいか。

▽駐外大使公使の人物

早川鐵治

○人物を品評するには親しく交際して其人の公生涯私生涯を知り悉くして居なければならぬ。吾輩は是迄折々「中央公論」の需めに應じて人物評論を試みたが皆知り合許りであつたから遠慮なく露骨に其等の人物を解剖月旦し來つた。所が今度の御註文たる駐外大使公使論に就ては、大使の方には友人や同僚であつた人も有るが、公使となると馴染の人は少い。之で見ると吾輩も何時か老人の仲間に入つて了つたやうだ。

○例へば瑞西の公使三浦彌五郎君の如きは、吾輩が公使時代に外務省に入つた人である。何でも外交官補で珍田捨巳君と伯刺西爾（ブラジル）に赴任した折の事で時の外相大隈が一夜送別の爲めに晩餐會を開いた。三浦君はフロックコートで濟まして出席したが、人の注意で俄かに狼狽し、大隈の僕（ボーイ）の燕尾服を脱がせて漸く其場を濟した事があつた。此出來事で吾輩は三浦君を今に記憶して居るのであるが、夜會に燕尾服を着用するのかフロックコートを着用するのか知らなかつた其三浦君が、今では風光明媚

な瑞西で公使になつて居る。吾輩の老込むのも無理はない。一松二浦君は學校時代には然う上々の成績ではなかつたやうだが、然し外交事務に掛けては敏腕であるや否やは吾輩には判らない。

○今の大使で一番故參なのは前の英國大使井上勝之助君だらう。吾輩は嘗て井上と三年も獨逸に同勤して親善であつた。殊に井上の細君に十四五の時から知つて居て、吾輩などは大いに弟扱ひにされたものである。井上夫婦は半生と言ふよりも半生以上生涯の九分通りは海外で送つて居るから、日本の行政官としては如何かは知らないが、外交官としては經驗も豐富だし手腕もあるし立派なものである。細君は英、佛、獨語に通じて仲々男勝りである。井上雷侯（馨）の姪であるが最もよく公の氣質を傳へた人で、もし細君が男であつたなら勝之助よりも榮達して第二の井上侯となれたであらう。勝之助も仲々出來た男で癇癖の強い井上の養子となつて長年よく仕へて來た人である。機敏とか膽略とかには欠けて居るが、身體は丈夫だしコツ〳〵勉强はする。それに近頃こそ老けて來たが日本人としては立派な色男であるから、細君と並んでセント、ジェームスの宮廷へ出ても決して恥かしくなかつたらう。

○井上君の後を受けて英國に行つた珍田捨巳君は事務の才があり、根が東北の人だから穏かで柔和である。それに緻密な質で、仲々思慮に富んで居る。殊に亞米利加育ちだけに英語は達者で、外交官中では佐藤愛麿君に次いでの英學者である。加藤君（高明）の如く覇氣はないが、然し同盟國の代表者として、英吉利の政治家に對しては却つて受けるかも知れない。

○佛蘭西大使の松井慶四郎君も巴川で仲々才氣はあり、一通り外交の手腕もある。唯惜しい哉風采が揚らないで、如何にも子供染みて居る。尤も松井君が駐在する佛蘭西には同じく風采の揚らないので有名なチエールが居る。一八七〇年普佛戰爭が終つて講和の折衝の任に當つたのが佛ではチエールで、普魯西からはビスマークがやつて來た。所でビスマークは六尺豐かなブルドックの樣な男なのに、此チエールは五尺に足らぬ小男なので、先づ立合はない内から摑み潰されて仕舞相であつた。然るにチエールは泣いたり口說いたり凡ゆる外交の秘術を竭くして敵手を飜弄し兎も角も餘り不利でない講和を結んで後には大統領にまでなつた。松井君も風采は惡いが、チエールの本場に居るのだから、折角チエール程の手腕を磨いて貰ひたい。

○駐露の本野君（一郎）は佛蘭西仕立の如才のない人、此細君がまた極めて如才がなくつて本野君より悧巧で、夫唱婦隨の良家庭である。殊に本野君は非常に可愛らしい人で本國でも氣受けが善いが、其爲め露西亞でも上下に親任極めて厚いものが有ると云ふ。今日の所では本野君などは立派な全權大使で、而も大隈伯などの關係で藩閥の後見もあるから未來の外務大臣としての資格は充分ある。石井菊次郎君などは珍田君や本野君よりも後輩であるのに今は外相として時めいて居る。石井君に外務大臣が勤まる以上は珍田君や本野君は立派に大臣になれる資格はある。

○伊太利の大使は伊集院彥吉君である。是人は容貌魁偉であるが、柔和し

い極く品の良い外交官である。伊太利と云ふ國はエラク日本と利害關係が多い處て、平凡な一通りの外交官では不向な事もある。日淸戰爭の時伊太利には高平小五郎が公使として行つて居たが、戰後三國干涉が起つた。當時獨逸には獨逸通を以て任じてゐた靑木周三が居たが、道の彼も發表された當日までは全然知らなかつた。それを前以て日本に知らせて來たのが伊太利の高平であつた。尤も高平と云ふ男が元來小手の利いた人間だつたが、伊太利其ものが其時三國と利害が薄かつた爲め、そんな機密も容易く通じられたのであらう。今度の戰爭でも伊太利は聯合軍に加はつては居るが、獨墺英佛の如き密接な關係に立つて居ないから、講和會議でも起るやうになれば、關係の同じやうな日本と共に手を携へて或は異議を唱ふる機會も起らう。伊集院君には其際に處すべき充分なる手腕ありや否やは知らないが、兎も角く高平に似て高平よりも慷慨家的の處が尠ない人であると思ふ。

○支那の公使林權助君は出身當時から東洋に多く在任した。支那朝鮮に長年勤めて晩年伊太利にも長く居た。元來林君は東洋向の人で、西洋の貴婦人達を取扱ふには稍堅カラである。支那人や日本の支那浪人を取扱ふのは林君の御手のものである上に、外務總長唐紹儀とは同じ仁川領事をして居た關係がある。唯唐紹儀程小手が利かない。然し今日の支那には機敏や小手の利いたものより、誠意を以て善隣の道を盡くし之を誘導するやうな重厚な人が必要である。林君などは先づ適任者であらう。

○新任米國大使の佐藤愛麿君は最早引退すべき時期であらう。英文を書かせれば今の外交官中の一番であらうとは思ふし、亞米利加の事情は早くから米國に留學したり、大使と共に前後三回も赴任したりしてゐるから能く知り拔いて居る。其點から云へば佐藤君が亞米利加に行つたのは可いが、然し何分にももう老境に入つた上に、元來が鈍い方の人である。尤も亞米利加で成功するには目から鼻へ脫けるものよりも、幾分鈍い方が善いと言ふから或は大した失敗もなからうとは思ふけれど、それにしても米國ではテーブル、スピーチが上手でないと可けない。佐藤君は自國の語よりも英語の方が巧みではあるが、スピーチは餘り上手ではないやうだ。今日では霞ヶ關にも若い頭腦が出來たらうから、佐藤君も此際引退して後進を曳立てゝやる方が可かつたらう。佐藤君と同時代の高平や栗野は既に引退したし、佐藤君が公使館書記時代の下役であつた內田康哉は先を越して出世して今では矢張身を退いた。然るに老年の佐藤君が亞米利加へ行くのはいさゝか氣の毒の感もする。米國が日本を二等國である、可愛らしい國、世話をやいてやるべき國であると思つた時代には、或は佐藤君の如きは適任かも知れないが、今日の米國は日本を恐れたり忌み憚つたりしてゐる。軍備の擴張も日本を想定敵國と目して計畫する有樣で、カリフオルニア洲に排日問題が起れば政府は極力之を抑へて事なきを得てゐるものゝ、早晩恁んな問題から爆發して日米開戰が實現されないとは云はれない。斯う云ふ六つかしい所に駐劄して、米國の政治家を籠絡するのは蓋し佐藤君の柄にない事ではないか。寧ろ潔よく後進に路を讓つて引退すべきが、此際佐藤君としては一番賢明な爲

り方では無かつたらうか。

○南米地方や暹羅に行く公使は歐洲などの大國に大使や公使として赴任する事の出來ない人が多いやうだ。尤も日置益君の如く智利から拔擢されて支那公使となつて日支交渉に腕を振つたものもあるが、是は蓋し異數と見るべきである。唯墨國に在る安達峯一郎君はあの位にして置くのは惜しい。佛語なども巧みであつて、歐洲の大國へ出しても決して差支のない人物である。伯剌西爾（ブラジル）の畑良太郎君は外務省出身であるが、元來身體の強壯でない人だから、まア伯剌西爾邊りでゆつくり靜養するのも宜しからう。暹羅の西源四郎君は嘗て外務省で外交官を仕立てる爲め歐洲各國へ留學生を出した時、白耳義へ派遣された一人である。細君は伊藤公の娘であるからもう少し榮達してゐて居てもよいのだが、暹羅の公使位で居るのはよく〳〵の事であらう。伊藤公在世中には好かつたらうが是からは下り坂であらう。正直一遍な律氣な人であるが、仕事をする人ではない。西班牙の荒川己次君は今は待命仰付られて居るが、此人は外務省出身ではない。鑛山業から日本鐵道に入り、閥力で外務省に入り久しく領事の地位を占めて居たが、今は老境に入つて最早花やかな仕事をする時期は終つた。荒川君の代理堀口九萬一君はも少し出世してゐる筈の人だが、三浦觀樹の王妃事件や細君が白耳人である爲めに官歷が遲れたのである。堀口君に限らず外交官が外人を細君にして便宜を得た人は尠ない。旨く行つたのは青木周三位なものであらう。尚其他の公使諸君に就ては吾輩も平生餘り傳聞する所がないから品隲する限りでない。

○一體日本の外交官は英國の制度を眞似て居るのであるが、外交官の試驗は日本の方が英國よりずつと六つかしい。而かも其試驗は外交官を皆同一鑄型に嵌め込まうとするから六つかしいのである。所謂霞ヶ關流で、小器用で辭令に巧みで、交際上手の派手好きで、男振が好くつて藝當のある人物を養成する。所で是等の人物を人種學骨相學の上から觀ると、皆片々たる薄ぺらの才子である。太平無事の日にあつては、霞ヶ關流の此の着物の着こなしや頭髮の分け方や踊りの蹈り方に浮身を窶す者でも間に合ふが、一朝列國と樽俎の間に折衝する場合には矢張り膽斗の如き人物が必要である。吾輩も若い時には外交官の席末を汚して居たが朝鮮に暴徒が起つた時には腰を拔かしたものを見た。伊藤公が哈爾賓で遭難した時にも腰拔け隨行員が居た。北支那戰爭の時にも隨分臆病なものがあつた。如何（どう）も今の外交官には一喝を食はせるとヘロ〳〵する者が多い。國を代表していざ事ある場合に起つて折衝の任に當るには膽力が足りない。昔は外交と言へば欺いたり騙したりしたものであるが、今では誠意を以て堂々折衝するやうになつた。然し元より外交であるから機敏に相手の腹中を看破し、又時には權略も必要である。前に論述した人々の中に果して如何程の外交的手腕を有する人が有るか吾輩には判らない。今日までは幸にも國難に逢遇する場合が無かつたから可いが、一朝事の生じた場合善處して國を誤らない程の膽略ある者が果して幾人あるかと考へると轉た寂寥と杞憂の念に堪へないものがある。

本號に寄稿せられたるものにして頁數超過のために八月號に掲載するの已むなきに至れるもの左の如し。切に寄稿者及び讀者の諒恕を乞ふ。

時勢の要求に應じたる

定價金廿三錢
郵稅金壹錢五厘

婦人公論

東京本郷區西片町十
中央公論社
振替東京二十四番

■愈々其特色を發揮せる八月號の豫告■

新長編小說 **捨兒**（親の手から捨てられた可憐な女の兒の運命は名人氣質の職人の手に拾ひ上げられて、數奇なる運命の幕を展開する。）……森田草平

- 續々カチユーシヤの話……島村抱月
- 容貌美の普及……湯原元一
- 一家和合の秘訣……鳩山春子
- 日本婦人に與ふ……澤柳博士
- 夏の女の裝ひ……遠藤波津子
- 主婦の家庭衛生の知識缺乏……吉岡女醫
- 南湖日記……平塚明子
- アメリカから歸つて……某女
- グラットストン夫人……矢野良曉

女の富士登山志願者へ（諸名媛）

- 役者の妻……鈴木秋風
- ヒステリーの話……福來博士
- 若い女の墮落の徑路……山室軍平
- 蟲の聲……西村醉夢
- 蹴西の女……田村俊子

新短編小說

- 金魚……近松秋江
- 若妻（愈々佳境）……小栗風葉
- お政……岩野清子

- 妖怪變化夜話……井上博士
- 大正新女大學……安部磯雄
- 職業調べ藝妓……一記者
- 金魚の話……若草蝶太郎

新長編小說 **兩國の秋**（蛇つかひの女役者が身に蛇のやうにまつはる戀のいきさつは濃艶凄艶の限を盡して讀者を悩殺せずんば已まざるべし）……岡本綺堂

大學講義全集

文學博士 谷本富先生著

宗教教育原論

第三輯

洋装美本箱入
菊判七七〇頁
價貳圓參拾錢
送料拾貳錢

▼附錄 現今諸大哲學者の宗教觀

時勢一變宗教の必要漸く認知せられんとす谷本博士は宗教と教育の關係を卒先主張せられたる斯道の泰斗なり本書は其の帝國大學講義の稿本を增訂せられたる者宗教教育の基礎、標準、內容並に方法の四篇に分れ間々既成宗教革新の方針に及び尚は現今諸大家の宗教觀を附錄とす宗教學として亦空前の名著也

■第壹輯 道德革新論 價壹圓五拾錢 送料拾貳錢

■第貳輯 歐洲教育の進化 價壹圓八拾錢 送料拾貳錢

東京京橋區銀座
大日本圖書株式會社
郵便振替・東京二一九番

賜天覽台覽

岡本米藏君著

牛

木島櫻谷畫伯裝畫 ‖ 富岡鐵齋畫伯口繪

湯淺半月先生作歌 ‖ 米野鹿之助先生作曲

全一冊 四六判裝幀 清酒函入美本

正價壹圓 郵稅八錢

〔第二十七版〕

相に操り巧に人を敎ふるは著者が豐の[illegible]日の成功を獲たり其强固なる自信あり偉大なる力を所有し尙自ら其生を牛の歩みに譬へ此書を編む文章簡にして而も意充てり

大阪每日新聞評

「牛」と題せるは思ふに彼の禪の十牛の圖の意を酌みたるものなるべく我國民性の缺陷ともいふべき點を是非論評し新しき處世法を提唱し併せて我靑年に對し大に海外雄飛の志を起すべきを慫慂す著者は貧兒より身を起し今は紐育土地建物株式會社の社長たる奮闘努力の人なり。

太陽評

題して「牛」と云ふと雖も畜牛のことを書きたるに非ず古くは西國立志編近くは福翁百話などにも較べつべき教訓書である引例該博內容富瞻古今に亘り東西に通して日本國民として立つべき心得を說示すること極めて詳かで啻に教育家の良參考書たるのみならず苟くも子弟を有する家庭には必ず一本を備ふるを要する良書である其牛と名づけしは牛に牽かれて善光寺參りの意を寓したるものであるとい ふ。

茗溪會審査評

牛といふも「牛に牽かれて善光寺詣り」といふ所より呼べるのみ、國家と人生とを主眼として、民族發展と海外事業とを諸方面より論究す植民事業に鞅掌する著者の私費出版にも近き本書の必ず青年壯年を誨へ勵ます所あるべきを信ず、文章簡易明晰、中學三年以上、(修養書)

發賣所 東京本町 博文館

中央公論世界大觀號創作

小説　孤鸞鏡中影……有島生馬

脚本　日本倶樂部……坪内士行

小説　積丹の少女……長田幹彦

小説　拉典區の秋……與謝野晶子

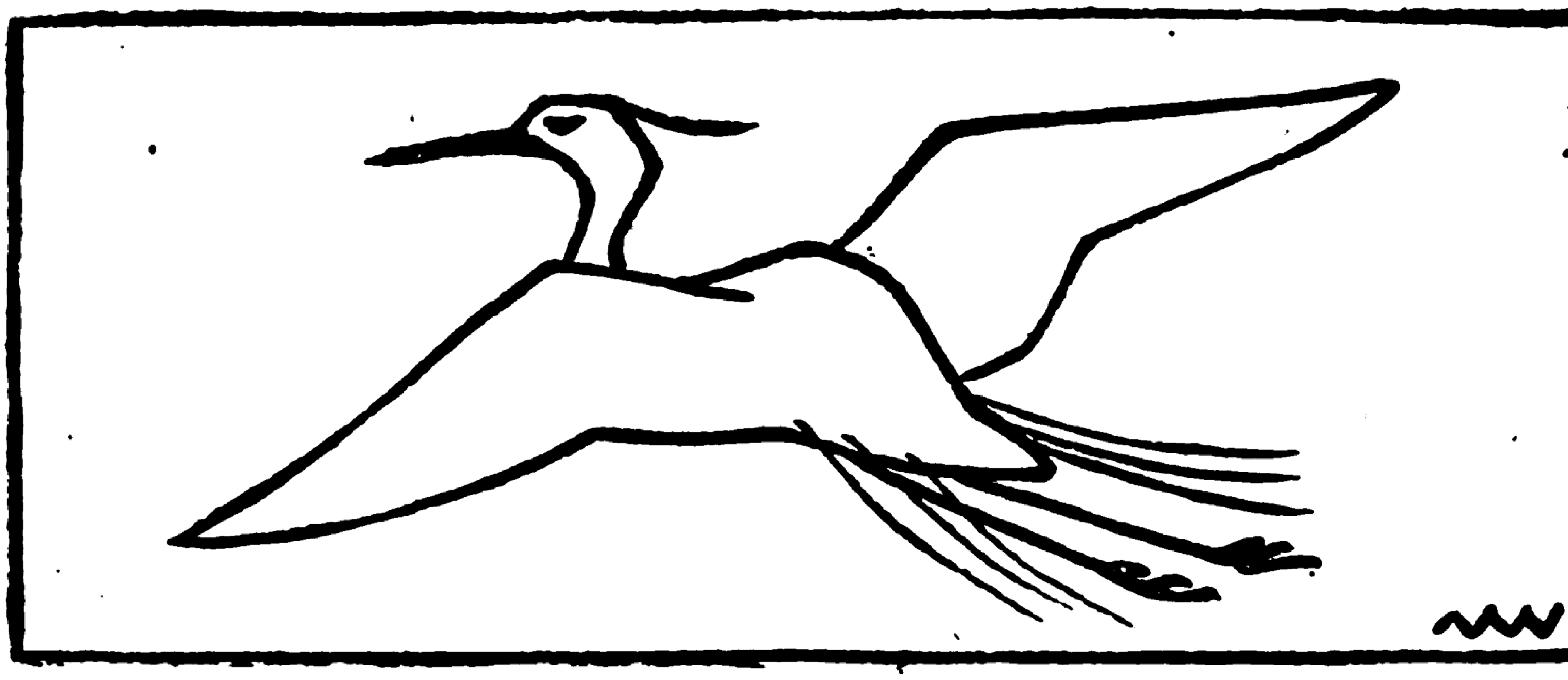
小説　内地の海邊より……高濱虚子

脚本　帽ピン……中村吉藏

小説　錆びし鍵……生田葵

小説　蕃地から……中村古峡

小説　モスクワの第一夜……小山内薫



孤鸞鏡中影

有島生馬

一

長春行の朝の急行が大連停車場のプラツトホオムから揺ぎ出したとき、山田辰雄は一等室の窓から首を出して、もう一度見送の人々に挨拶した。彼を見送るためそこに集まつて來た人は五六十人もあつたが、一様に帽子をとつて御機嫌ようを繰り返した。賑かではあつたが何となくこんな場合に起るざわついた快活はなかつた。少くも彼にさう思へた。丈の高い巌丈な頭蓋骨を持つた關東都督、莞爾な丈の低い滿鐵總裁を始め、大連の主立つた人々が斷れ斷れに彼の目を掠めて通つた。驛員や旅客も不思議相に彼を振返つた。列車が二三間づれた時、實弟沖鐵三の視線が彼の眞面に表はれた。儀式張つてゐた心は慌てゝそれを迎へ無量の感慨に打れた。感激に充ちた鐵三の眼には衝くやうに泪が溜

つて來た。その泪に頭を振つて答えた彼の心は辛かつた。然しまだ是非見落してならぬものがあるやうにしてゐた。二重にも三重にも並んだ人垣の後ろにやつと鐵三の妻君を見付け出した。赤く泣き腫した彼女の目が心の働きを央失つたやうに彼を見てお辭儀した。彼は八分の憐愍と二分の輕侮を混へた心持で、頭を下げたまゝ、他の見送人へ目を轉じた。列車の震動は漸く規則正しくなつて、プラットホオムの柱が忙しく目の前を過ぎた。見送の群はもう黑い一つの塊になつた。最後の列車もプラットホオムの端を離れた。やがて長細いその屋根の上に日本橋から北廣場に連なる露西亞風の洋館が表はれて來た。

大連の街は波止場から、西本願寺の建つてゐる山へかけていかにも新開の商工業地らしい姿を見せてゐた。西公園から電氣遊園にかけた比較的樹木の繁つてゐる岳の下に來た時、やつと辰雄は身を引いて煤煙の入つて來る窓の硝子をたてた。

「これを敷きませう。」

從者の外山良一はさう云ひながら重ねてある荷物の上から毛布を取つて、彼の席へ近づいた。彼は默つてするまゝにさせた。

「とうく大連にもお別れだな。」

「さうでございますね。」

「來てから何日目になるだらう。」

「恰度四十五日になります。」

「一月半、驚いたな。案外延びたものだ。時間もなにも忘れて終つてゐた。」

さう云ひながら過ぎ去つた多忙の日を胸の中で考へるやうだつた。

「兎も角これで一安心だ。一時はたまらなかつたな。」

「左様でございますね。随分今度はお骨が折れました。御同情致します。」

彼の心は其時泣いた。何から何まで親しく知つてゐる外山のこの一言は何物よりも強く心を刳つたのである。目を背けて右を見た。眠つたやうな穏かな海が近くにあつた。沖に連る大小三山島の石山が海洋の吐き出す薄靄(ウスモヤ)の中に崎嶇たる姿容を沈めてゐる。近い小さな島嶼も、シャヴアンヌの「昔の幻」に描かれた調子で「岩礁の荒寥」を示して物淋しい。世人に顧られない、然し驚くべき力と大さを備へた目前の自然を眺めながら、彼の心は外の事を考へてゐた。

「総裁がさつきさう云つて呉れたよ。山田さん貴方も辛かつた。然しこれからは観光客ですね、まあゆつくり支那の御馳走でも喰べて元氣をつけてお歸りなさいつて。さう思はれて置くそれより仕方がない。」

外山は何んと慰めていゝか分らなかつた。答に窮してゐる外山の顔を見ると、愚痴を並べて悪かつたと思つた。

「満州は殺風景だと一概に云ふがね、大連の風景は悪くないじやないか。私はさう思ふ、老虎灘(ラオホオタン)や、星ケ浦もいゝが、西本願寺の山の上から市街を眼下に見て、廣く海を望んだ心持は大きな風景だぜ。山が禿げてゐる、そんな事は實利的な感情が自然の観照にまで邪魔をしてゐるのだ。」

「見給へ小崗子(シアオカンツウ)だ。大連の舊市街だ。」

二人は左側の窓から波の背の起伏するやうな岳に建つ一帯の支那市街を見渡した。それは丈の低い鼠

と青黒い色彩の町であつた。大概の家の表には何々油坊(ユウフワン)と書かれてゐる。大豆油の搾造はこゝの主要な産物なのである。

「君、君はこんな市街をどう思ふ?」

「穢いと思ひます。」

「それから?」

「それ丈けですな。」

二人は聲を出して笑つた。然し彼はかうやつて一つの町が目前を過ぎるのを見る丈けでも、少しづつの支那人の生活に觸れてゆくやうな心持が嬉しかつたのである。

彼等は下關から釜山に渡り、朝鮮を縱斷して奉天に出、大連へ來たのである。朝鮮人も、その自然も、その青磁白磁も彼にひどく氣に入つた。いかにも可愛らしく、いかにも手頃であつた。日本の爲に朝鮮は最上飛切りの殖民地であると思へた。然し興味を持つ事は出來なかつた。總てが餘り簡單で、餘り根帯がなかつた。國民としては勿論、自然としても徹底した何等のキャラクテエルを備へてゐなかつた。一の他種の文化が入つてくれば朝鮮といふものは必ず煙のやうに消へて終ふに異ひない。過去の殘骸を飾るに過ぎない儚い美に對し、彼の性格は深い興味を持つ事が出來なかつたのである。

鴨綠江を渡り安東縣に入ると既に支那人の生活が目前に展けてゐた。彼は驚いた。彼等は朝鮮人と全く異つて獨特な生活の意義とその形式とを完全に備へてゐた。彼は直ちに競爭者として彼等を觀察し初めた。力と興味とは自ら湧いて、有ゆる事物に注意が惹付けられた。

奉天に着いて日本人と支那人の個人的生存競爭を目のあたりに眺めた。國威と大會社の資力とを除けば滿洲に於ける日本人の發展は强ち樂觀を許さないと思つた。北廟と舊市街と胸壁と演劇と遊廓を見て廻つた丈けでも、何千年の傳統はいか程根帶の廣く深いものか察せられた。

彼は京城から手繰り始めた今度の事件に引かれて大連に行つた。日本人の新智識によつて經營されつつある、所謂「最新式の日本市街」を見た。さあこれを見て呉れと土地の人々は云つた、內地よりもより新式な諸設備があると云つた。

ホテルに泊つてみると何から何まで英語で書いてある。メニユでもなければ食事の出來ない位の人は英語を知らない方が多いのだ。銀行に行つてみる、總ては英語で取引されてゐる。研究所に行つてみる、總ては獨乙語で用が便じられる。公園に行つてみる Hoshigaura garden と許り書いてある、見たくも日本字は見られない。外國人にとつては甚だ都合のいゝ町だ。夫れだけ日本人に不都合だ。波止場に行つても、停車場に行つても絕對な拜歐米熱が漲つてゐる。其間を葉卷や金口を燻らしてニウフアシヨンの洋服を着た人々が得意氣に通つてゐる。でも料理屋と藝者屋だけは繁盛してゐた。

大連につくと直ぐこれが日本人の經營になる殖民地なのだらうかと彼は自問した。創造といふ尊いものは何にも見る事が出來なかつた。歐米に於ける二流三流の都會の模似模倣のみであつた。然し彼はそんな外部の批評をしてゐるには餘り多忙だつた。早速鐵三を相手にし晝夜兼行の有樣で、紛糾に紛糾を極めた事件の整理に着手した。鐵三が當面の責任者として經營して來た鐵道材料及び諸機械業の合資會社は最近の二年間に約五百萬圓の欠損を生じ、その結果會社を中心としてゐた中小幾つかの商店がば

たく／＼破産し初めた。鐵三は告訴された。もう一歩で會社は營業停止を喰ふ許りの危地に陷つてゐた。

京城、奉天、大連で費した二ヶ月の彼の努力は決して無益でなかつた。調査に調査を重ね、幾人かの罪人にも繩をかけずに、兎も角揃へ上げたその整理案によれば五百萬圓の損失を凡三百萬内外まで減少する事が出來相であつた。彼は弟を社會的に葬つて終ひ度くない許りに、半生の汗と油で贏ち得た財產の大部分を擧げて之に投じ穴を塡めやうと決意した。金は再び獲る事が出來る、弟は二度ともう持つ事は出來ない。此道念の外には何物も彼を動かす事が出來なかつた。

大連の外觀形式以上に彼が卑み輕んじつゝあつた事業界の人々もこの義俠と勇斷とには舌を捲いた。中にはその至誠に動かされ、反對側から反つて彼を救けやうとする者すら出て來た。月餘の間に知らず識らず多くの知己を作つた。夫等の知己友人を通じて彼は大連の實業界にもつと人道的な理想と民族的な自意識を覺醒せしめやうと極力努めた。

默想にそんな記憶を辿つてくると云ふに云はれない精神的の慰安が彼に溢れて來た。いつか列車は金州に着いて、群る支那人の間を制服をつけた日本人が威張りながら歩いてるのが目立つてゐた。細い雨が降り出して來た。

二

十月九日十日十一日の三日は風が吹いたり曇つたり、雨が降つたり霰が降つたり、日の目を見る事は絕えてなかつた。寒暖計は急に十度二十度に下つた。昨日まで薄い外套の用もなかつた奉天の人々は一足飛びに毛皮の必要を感じた。舊市街の道路は地獄の繪卷にある針の山のやうにでくぼくした泥濘をそ

のまゝ氷らせて終つた。

夏が冬に接續するやうな寒暑の激變と、一物に遮られず、方向を變ぜず、絶えず北から北から吹きつけつゝゐるこの風とで、抑も奉天が滿洲平原のいかなる位置に投り出されてゐるかよく分る。鉛色の空は物寂しい北廟の粗林の上にかゝつた、冷い霧は愛親覺羅の舊蹟の朱の門を濡した。

奉天での折衝は大連から辰雄が豫期して來た計畫を少し裏切つた。然し大體に於てさしたる重大事でなかつた。彼　は人に托し十二日には愈々北京に向け出發する事が出來た。彼は此旅行を記念する爲にと思つて、黑豹の毛皮を裏にした外套一着を外山にも贈つた。毛皮は奉天市場の一名物である。

三日の滯在中開原の倉田は態々出て來て彼等の事務を手傳つた。日露の戰後彼は空手滿洲へ來て數十萬の富を作つた自助傳中の人物である、語學校支那語科の出身丈けに支那語には非常に堪能であつた。思へば彼に離れた二人の旅はあはれにも覺束ないものだつた。北京まで一緒に行つてもいゝと彼は好意を見せた。然し非常に多忙な人を一週間でも十日でも煩はすに忍びなかつた。山田は固辭した。固辭したものゝ車中には彼等切り日本人が一人もゐないのを確めた時少し後悔した。奉天を離れると直ぐ言葉のために異鄕といふ心細さを深く感じ出した。

「おい君、此會話の本で數や簡單な單語位覺えて吳れ給へ、茶一杯飮む事も出來ないからね。」

辰雄は奉天で買つて來た日支會話初步といふ小册子を、外山の膝の上に抛り投げた。外山は手にそれを取上げて見てゐたが、突然笑ひ出した。

「とても駄目です、さう早く出來るもんぢやありません。第一私は語學の才がないんですから。」

「そりあ、さうだ。無理だと思ふから君に頼んだんだ、さう易しく出來るものなら僕がやるよ。」

「隨分人が惡いんですな。」

二人は面白相に笑つた。

「然し之でも讀んで置くと「火車小心」が「汽車に注意すべし」だ位は見當がつきますね。」

「有難い事に文字の方はどうかかうか分る事もある、然し數位覺えられ相なものじやないか。」

彼は外山の方へ身體をすり寄せて、會話書を窺き込みながら、

「イゴ、リャンゴ、サンゴ、スウゴ、ウゴ……。」

と發音して彼の膝を叩いて笑つた。

「イゴは一個だ、リャンゴは兩個だ、サンゴは三だと覺えればいゝ。なに露西亞語よりは易しいやね。勇氣を出して北京までに是非百まで覺え給へ。」

辰雄は戯れながらそんな事を云つて兩手を頭の後ろに組んだまゝ窓の硝子に椅りかゝり向側の窓を見た。風は吹いてゐたが、時々低雲の切れ目から日光が頭を出し、茫々何十里何百里となく續いてゐる黄黍の耕地を斑に照した。黄黍ももう收穫の時節で、黄色といふより褐色になつてゐた。道路といふべきものは見當らなかつた。耕地の中をどこでも縦横に、一番近相な道を工風しながら人も馬も車も通り拔けて行つた。

極く稀に樹木が黄黍の中に立つてるのを見かけた。樹木の數は墳墓の土饅頭より却つて少い位であつた。墳墓は畑の中でも、家と家の間でも、川端でも、どこといふきまりなく勝手に土を盛り上げて作

つてある。とさう見える、然しその勝手が實は勝手でないのだ。「爲二人子一不レ可レ不レ知レ山、不レ可レ不レ知レ醫。」と云ふ諺がある位で、親を葬るべき山を知らないやうなものは孝子とは云はれないのだ。風水先生の命ずる方位を嚴守して地を選び、例の八釜しい櫃柩の上に土を盛り上げるのだと云ふ事である。

見渡す限り山はなかつた、從つて川もなかつた。地圖の上の大河も實際通つてみると廣い窪んだ耕作地で、普段はその白い砂地の間を僅か水が流れてゐるに過ぎない。鐵道は枕木を並べ、其上に線路を通せばそれで足りた。土堤も、隧道も、橋梁も要らなかつた。若し洪水があれば全線浸水する許りだらう。此地方の交通機關は今後容易に發達し得ると彼は考へた。

單調な風景は彼に沈滯と疲勞と冥想とを强ひた。どんな小さな沼池や村落でも彼は一つも見逃さなかつた。この偉大な單調の世界で稀に出逢ふ楊柳の葉の軟い動きや、角張つた民屋の影と光の正しさ、家や羊の群の不秩序、水面に見られる鏡の光等は僅かに彼を慰め得る潤ひであつた。詩經の「豐年多レ黍多レ稌。亦有二高廩一萬億及秭。爲レ酒爲レ醴。烝二畀祖妣一以洽二百禮一。降レ福孔皆。」この秋は黍がよく出來た、稌がよく出來た豐年に異ひない。然し詩にあるやうな華かな景氣はどこを見渡しても想像さへ出來ない。「驚沙四邊起。寒日慘欲レ昏。」と云つた風の人影もない古戰場を驢馬か何かで通り抜けてゆく時の落漠さが感じられると彼は思つてゐた。

其時四十格好のボオイが白い支那服の襟に赤く待役と書いたのを着、手もつけられないほど暑く絞つた手巾を五六本持つて來て、一つづゝそれを旅客に勸めた。二人は顏を見合せてどうすればいゝのだらうと思つた。それとなく脇の人を見ると、蒸したての手拭を受取つて、顏から鼻から兩の頰から、襟首ま

でさも心地よげに拭いて直ぐそれを待役の手に返した。彼等も少し氣味惡げにその眞似をしてみた、手拭には思つたほどの臭氣はなかつた、使つた後も惡い氣持はしなかつた。西洋人が三人と支那人が二人、この應接間と食堂を兼ねたやうな客車の中に乘つてゐた。七人の中で唯一人の西洋人がこの手拭を斷つた丈けであつた。

驛から驛の間は厭き／＼するほど長かつた。折角心待ちにした立派な名前の驛も停車してみると百軒か二百軒位の寒村である事が多かつた。こんな廣原の中で馬賊にでも襲はれたらと誰れも思ふ、實際又黄黍の立つてゐる期節は殊に危險が多いと聞いてゐる。その護衞の爲であらう、大小樣々の短銃を六挺もひしと肩から胸から腰の周りに結へつけた兵隊が二人時々廻つて來た。一人で短銃六挺と藥盒幾卷を身體に縛りつけてゐる有樣は何んとなく支那流で滑稽の感が起る。

待役が今度茶碗と急須を持つて來て嘗つて彼等の飮んだ事のない茶をついで呉れた。紅茶のやうで香氣が非常によかつた。茶が濟むと又手巾（ショウチン）を持つて來た。殆ど三十分ごとにそれが繰返された。

午食の時間になるとその車室全體が食堂になつて、襟に飯事（メンチヨウ）と書いた白衣のボオイが西洋料理を搬んで來た。支那料理もあつたやうであるが、支那人の多くは各自の部屋に引込んで食事を濟せた。

長雄に向ひ合つて食事をしてゐた外山は突然、

「おや、あの婦人が來ました、一昨日そら一緒に北廟に行きましたね。」

彼はナイフとフオクを握つたまゝ後ろを振返つてみた。哈爾賓（ハルビン）で語學敎師をしてゐるといふお嬢さんは、例の紺の着物を着て、にこ／＼しながら近づいて來た。いつの間にか食堂は滿員になつてゐた。

等は食卓の隅を彼女の爲に讓つた。

「貴方方も乘つてゐらしつたのですか、私一向知らないものですから、一人で厭き〳〵してゐました。」

「ほんとに此線は厭きます、なんて單調な風景なんでしやう。」

辰雄が答へた。

「私風景に對してはさうも思ひません。馴れてゐます。奉天から北へ行つてご覽なさい、もつともつと單調です。朝鮮へ行つて私は極樂を歩いて來たやうな氣がしました。」

「さう思ふなら今度日本へ來て、どんなに私達が自然から甘やかされてゐるか、それを見て下さい。」

「さうですか、行つてみたいと思つてゐます。來年はきつと行く積りです。旅費はたゞですから。佛蘭西語を敎へてゐる生徒に鐵道の方の高官がゐて、今度の旅も其人から全線のパスを貰つて來ました。私は貧乏ですから北京にも長く滯在は出來ません、二三日ゐて直ぐ哈爾賓へ引返します。授業も始めねばなりません。」

彼はこんなに少しも隱し立てをしない露西亞の若い女の習慣を面白く思つた。彼女は自ら佛蘭西人だと稱してゐた。然し之れを信ずる人間は世界中に一人もゐない位粗野な大膽な露西亞型の娘だつた。彼女は牛乳と紅茶と果物丈けしか注文しないで、持つて來た籠の中からビスケットを取出し平氣で喰べてゐた。待役は酷く輕蔑の目で彼女を取扱つた。

「此間は夜明しをなさいましたか？」

北廟を一緒に見物した時、彼女の揚言して、私は胸壁の上で今夜一晩夜を明す、と云つた言葉を思ひ

出して尋ねた。彼女は笑ひながら否と答へた。尚ほ彼は北廟に對する彼女の批評を思ひ出した。北廟は堅固な壯麗な建築である、然しピラミットのやうな永遠な記念物とは異ふ、幾十年か、幾世紀かの間には壞れて終ふと。日本の男でも目のあたり石と煉瓦で築き上げた頑丈な北廟を見てこんな批評は思ひ付くまい。永遠に對する日本人の思量は薄弱である。彼女は又こんな事も云つた。一體日本人には性格（キャラクテエル）といふものが皆無だといふが本當かと。それは單に揶揄するためではなかつた、極めて眞面目な質問的の態度で聞いたのである。こんな無躾ではあるが、卒直な言葉は露西亞人でなければ決して云へない藝當だつた。

「幸ひ貴女の目の前に二人日本人がゐます、貴女自身研究なされば、そんな質問をするまでもないでせう。」

辰雄はある自信を以つてさう答へた。

午後は先刻手巾を受取らなかつた愛蘭士の商人だといふ極めて溫厚な紳士を混へ四人でトランプをして時を過した。彼の絕間ない焦心と瞑想はかうして暫時忘れられてゐた。

窓の外にはいつまでも同じ風景許り續いた。

錦州に着いた時盛んな鼓笛の奏樂に驚かされて旅客は皆窓から首を出した。綿の這入つた鼠色の軍服をきた兵隊が停車場の內外に所狹いほど整列してゐた。幾流かの華かな大旗が風に吹かれてゐる。軈て將校連と思はれる十數人が構內へ表はれて來た。巧妙な獨逸式の奏樂が起つて一齊に捧銃をした。將校連は極めて無關心な態度でぶら／＼列前を通り、汽笛が鳴つてからやつと其中の四五人が乘車した。

それでこの業々しい儀式が高級將校の見送りだつた事が初めて知れた。唯でさへゆつくりした停車がその爲二十分も遲れてやつと發車した。

至る處の停車場で軍人らしい人々の送迎を受けた。將校連は其都度プラツトホオムに下車する事もあり、窓から首丈け出して挨拶してゐることもあつた。將校の中に未だ三十五六の幽靜な表情と聰明な相貌とを備へた一人の支那服の男がゐた。彼こそ此一行の主人で、袁世凱から關東都督に贈つた勳章傳達の使命を果し、今北京へ歸りつゝあるのだ、他は皆彼の隨行員であるといふ事が知れた。

曇つた空はいつとなく夜になつてゐた。八時二十分山海關着の豫定がやつと九時近くになつて着車した。いかに天津北京まで直行したくも、直通列車は一週に何度といふ規定で、其日は旅客全體山海關泊りといふ譯であつた。

でも幸ひホテルが一軒、日本旅館が一軒あると聞いて來てゐた。彼等は眞暗なプラツトホオムに降り、雜然たる支那の群集に取圍まれ、宿屋の男でも來てくれなければ、どうしやうもないと話合つてゐた。露西亞のお孃さんも彼等と運命を共にして當にならない宿引を待つてゐた。

外山は大和館といふ提灯を見付けて嬉し相に叫んだ。然しその提灯の主はやつぱり支那人で言語不通だつた。これが私達の荷物だと外山が念を押してみても、分つたのだか分らないのだが、向の返事が分らない、夫れが不安であつた。苦力も困つて、頻りに連を呼んでゐた。軈てもう一つ大和館の提灯が表はれた。カアキイ色の小倉服をきた十五六の日本の少年であつた。

「今晩は。」

二人の耳にこの今晩は懷かしかつた。彼は支那語で何か苦力と話した。二人は不思議相に少年の横顏を見て急に心强く思つた。

眞暗な空の下に、眞暗なでくぼくした道を、窓のない壁に沿つて歩いた。一種の臭氣は鼻を衝いた。やがてぼんやりした街燈のある家並の間に出た。

「もう直ぐです。」

少年はさう云ひながら、可成長く暗闇を引張つて行くやうに三人には思はれた。

「萬里の長城を歩いてゐるんじあないでせうか？」

ヴエラ孃は戲れた。

「こゝです。」

少年は薄暗い門を潛つた。中庭には何んの樹だか二三本立つてゐた。各房の間にある踏石の兩側には草や秋の花が日本風に植えてあつた。

正面の棟の右房に山田と外山が、左房にヴエラ孃が案内された。靴を脱ぎかけてゐる所へ日本服の下女が八分芯のランプを持つて來て呉れた。大きな室の半分は磚敷（かはらじき）で、半分は床（ゆか）を設け、疊が十五六疊敷いてあつた。

「隨分酷ひ宿屋ですな、これが有名な大和館の奥座敷ですか。」

「木賃宿と思へば何んの事はない。でも日本語の通じるのが何よりじやないか。」

辰雄は慰め顏に云つた。

「ヴェラさんどうしてゐるでせう。」
「何に胸壁の上で夜明しがしたいといふ女だもの面白がつてゐるに異ひないよ。」
彼等は洋服を脱いだり、荷物を解いたりして入浴の仕度をしてゐた。扉をこつ〳〵と叩く人があつた。
「お這入り！」
「ああ！」
と意外な叫聲に振返るとそれはヴェラ孃だつた。彼女は顏の色を變へてぴしやりと扉を立てゝ逃げて行つて終つた。
「どうした人でせう。」
「だつて私達がシャツ一枚になつてゐたんだもの、西洋婦人は泥棒よりも裸體が怖いんだ。」
「さう云ふもんですかね。」
外山は不審相にしてゐた。
風呂場は案外清潔だつた。もう一つ案外序に案外だつたのはお膳の珍味に滿ちてゐた事であつた。鶏の照燒、鼈の味噌汁、黒魚(ヘイテイ)の煮附、二の膳附で中には名の知れないものも多かつたが皆な甘く喰べられた。ヴェラ孃も鶏や鼈は好んで喰べた。
この宿屋は舊稅關の一部であつたといふ。成程檐や朱の丸柱の具合が民家とは思はれない。然し今はその正殿の裡に下等な壁紙と不調和な硝子で芝居の道具建のやうな日本座敷が出來てゐる。支那に這入つての第一夜はかうした假座敷の中で夜具蒲團をきて、南京蟲にも攻められず更けて行つた。辰雄は外

山の寢息を聞いて頭の向を變へ、いつまでも執念深い一つの考へに沈んだ。北京に着いてからの運命は近づくに從つて一刻一刻重苦しく思はれて來る許りであつた。

三

吉星普照。

美事だと感歎しながら辰雄は山海關東門樓上の大きな金文字の篇額を見上げた。

「何が書いてあるんです。」

ヴエラ孃が直ぐ尋ねた。

「歐羅巴人には分らない事が書いてあるんです。東洋人の文字に對する特殊な幻と暗示です。」

彼は揶揄しながら答へた。

柱と柱の間には遠く白づんだ朝の海が見える。近くには城内城外の屋根瓦が目の下ある。此門こそ萬里の長城が起る所謂「天下第一關門」である。

昨夕の小倉服を着た少年を案内で、八騎を並馳せしむるに足るといふ域壁の上を逍遙した。石垣の間から生へた草や木が重い大きな石塊を容易に傾けてゐる。幾十丈と高く積んである煉瓦の崖を霜や氷は豆腐のやうに脆く崩してゐる。匈奴の爲には破壞されなかつた長城も、自然の力にはもう見る影もなくなつた。朱車（屯小屋）の蹟かと思はれる所もある、軍神でも祭つたかと思はれる八角な樓臺も殘つてゐる。城壁は百足蟲の匍ふやうに山から山へ曲線を描きつゝ蜿蜒として霞に連らなつて消へて終ふ。奴隷の汗と油が何百年たつてもそこに喘ぎ執着し、瞑目が出來ずにゐるやうに思はれる。

「いつまで行つても同じですもうこの邊で下りませう。汽車の時間もありますから。」

少年が促した。

「そりやさうだ、千里行く譯だものね。」

辰雄が賛成して道のないやうな崖を滑り下りた。そこらにゐた豚が驚いて、菜園でも、低い土塀でも飛び越え、踊り越え、小さな尾を振りながら逃げ出した。

士族町らしい往來の街門と街門の間を通りぬけた。門の前には必ず對立のやうな厚い壁が建てゝある。直接烈風が門内を襲ふのを防ぐ爲めだらう。市場に出た。獸類の有ゆる内臓の部分部分が血の下垂るまゝぶら下つてゐる。東門の一部を塞いで牢獄にした所から宿屋へは直ぐだつた。

歸つて朝飯を濟せ、九時といふ呑氣な一番に乗込んだ。昨日の愛蘭士の紳士も亦一緒になつた。秦皇島は英國の一殖民地丈けに多くの英人が乘つて來た。數十人の外國人に對し僅か數人の支那人が一等客室にはゐた許りだつた。

日本では決して見る事の出來ない、斧で刻んだやうな連山が巍峨として平野の彼方に屹立してゐる。樹木の一本もない石山を蜿蜒たる長城が攀登しながら所々の望樓に支那流の畫趣を示してゐる。

線路に沿つては黄黍が相變らず穰々として續いた。待役も相變らず匂のいゝ茉莉花(モオリイホワ)の茶と手巾(シヨウチン)とを交はる〳〵持つて來て呉れた。一人の英國人は誰れに頼まれた譯でもないのにテエブルの毀れた片隅を、さも大切相にナイフ一挺で念入りに修繕してゐる。外山はイゴ、リヤンゴを繰返してゐる。辰雄の瞑想はやゝもすれば家鄉へ走つた。

彼には八年この方湘南の松林の中で臥たぎりの病妻があつた。十五になる辰馬、十四になる康雄、十二になる夏子の三人の子供は、四つ六つ七つの頑是ない歳から母親の顔さへ見ず彼の手一つに育てられた。其上五年前から夏子と同年の正子といふ孤を引取つて養つて來てゐる。その寂しい人々の運命を彼は一時も休む間なく考へた、中でも正子の事が今は一番强くその心を掻き亂して來た。思はずその眼は潤つた。眼をそむけて窓の外を見た。黄黍の廣い畑の上を何千羽となない水禽類が群がつて、濁つた低い海——渤海の方へ飛んで行く。何に驚くのだか、時々列を亂しては或は高く或は低く、行きつ戻りつ、伸びつ縮みつ、それでも一定の方向へ列を整へては又進んで行く。

「雁が來る時分だ。」

と思ひながら、見とれてゐると、牧人の目にも珍らしいのか、繪にある蘇武のやうな老人が一人岳の上に立つて、羊群に取圍まれ右手を額にあてたまゝ鳥の行衞を眺めてゐた。

既に海からは遠くなつた。遠くなれば遠くなるほど空を翔る鳥群を見る事が少くなつた。彼は又窓硝子に頭を持たせかけて考へに沈んだ。冷々する硝子がうれしかつたのである。正子は六つの時その母に捨てられ、七つの時その父に生別れた。其後は伯父に當る辰雄が引受け、祖父祖母の膝下に育てられて來たのである。辰雄は正子の爲にも兩親の爲にも再び弟の勝次を探出し、里に歸つてゐる文子を引戻すのが自分の責任と覺悟してゐた。責任といふより信仰であり、道念であり、その性格から溢れ出る不得止唯一の要求であつた。「莫レ非レ命也。」然し「順ニ受其正一。」すべきである。盡すべき道を盡し、眞の天命、所謂正命に達せしめねば止まぬと云ふのが彼の意地であつた。夫婦親子三人のこの運命を彼は正命とし

て放棄して置く事が到底出來なかつたのである。此事件には惡魔の意志が働いてゐる、然し自分の意志はそれより強い、必ずそれに打克つ力がある、自分は善である、彼の自信は絕對であつた。

午食には愛蘭土の商人が彼等二人とヴエラ孃を御馳走してシヤンパアニユなどを拔いた。同じやうな西洋料理でも料理人によつて日本のと、支那のと、愛蘭土のと、露西亞のとでは皆な味の組立が異つて來るといふやうな話が出た。ヴエラ孃は露西亞人が佛蘭西でよく仕込まれたのが世界第一の料理人になるのだと主張した。夫れはさうかもしれない、然し孃のやうなざはついた感情を持つた婦人に味などは本當に解るまいと彼は思ひながら聞いてゐた。「咀味得大藥。」といふ心境はもつと微妙な內面的な感覺世界の經驗を持つた人でなければならない。支那人の味覺が世界で一番發達してゐるといふ一つの事實でも忽略に聞き流すべきでない、そんな鑰を通じて精神生活の一面を窺ひ得る便りがあるものだ。

天津に近づくに從つて停車場は段々多くなつた。食事時には小買賣人が様々な商品を肩から釣つて賣りに來る、その中で一番彼等二人を驚ろかしたのは鷄、家鴨などを丸燒にして賣つてゐる事であつた。すると大概一人でそれを一羽づゝ買つてゐる。日本の辨當に二切れ三切れ鷄肉の添へてあるのと比較すると彼等は非常な肉食人と云はねばならぬ。一種の强制肥養法で油づいた鷄や家鴨の黃色ゝ丸燒にされたのが十も二十もずらりと並んでゐるのを見るといかにも食慾を唆られる。殊に天津地方は鍋燒鴨の名物と云ふ事であつた、

日の海に沈む一瞬間前、列車は幸ひにも天津附近の鹽田にかゝつた。遠くの低い潮にきら〳〵瀲するのを見た。鹽田の廣漠たる地積は實際彼等二人の想像に餘りあつた。限のない沙漠の中を堀割が規則正

しく縱横に走つてゐる。縱に帆をかけてた風車が幾十幾百となく連りながら潮水を堀割から鹽田へ汲み上げ汲み上げ注いでゐる。その白い帆の一つ一つに最後の西日は桃色の光を投げて、影になり、光になり、轉々してゐる。中でも遠い風車はもう霞んで歸帆のやうに次第に消へて行く。

辰雄は默然窓にもたれ鹽田を掩ふ寂寥のいか許り深いかに見とれた。白帆が消へて終ふと夕闇がひつたり窓硝子の表に逼つた。其裏には車内の電燈が臭橙色（だいだいいろ）の月のやうに空の中へ映つた。振返へると車内は見違へるほど明るくなつて、まるで別な世界を見る心地がした。煙草の煙と一日の旅に疲れた亂雜さとがそこには漲つてゐた。殊に支那破落（ごろ）らしい四五人の英人が支那人に對してそれとなく振舞ふ傍若無人な態度は見るに堪へなかつた。彼等の目前で支那人の侮辱されるのは、彼等二人が直接侮辱されるよりも尚ほ苦しいやうな心持がした。

キップリングによく似た一人の男は腰かけたまゝ、鐵鋲の一杯打つてある大きな靴を二足揃へて高く机の上に載せ、悠然とパイプを吸つてゐる。

恰度北京へ着くのも間がなくなつた頃だつた車掌が切符を集めに來た。

キップリングに似た男は威嚇するやうに鋭い英語で怒鳴つた切り空嘯いて知らん顏してゐる。

「なに！　お前の英語は分らない。」

「切符？　切符がどうしたんだ！　俺は英國人だ、英國人に切符が要るのか！」

さう云つて彼はぎろりと山田を見た。辰雄は明かに侮辱を感じた。若し切符を持つてゐないならと身構へた。

車掌は返す言葉なくすご〳〵行過ぎて終つた、すると彼等の連中は一度にどつと嘲り笑つた。キップサングは胴着のかくしから切符を取出して車掌の背中に向つて見せびらかした。

辰雄は目を背けた。外山は口惜しがつて足をがた〳〵云はせた。愛蘭士人は見ない振をした。

呼びとめられた車掌は戻つて來て、苦笑しながら切符を受取つて行つた。彼等は面白げに又嗤つた。

二十年前彼等の或者は日本に來て同樣の態度をとつてゐた。支那よ二十年の後、彼等をして羊の如く溫順ならしめなければならないぞ。心の內で囁きながら彼は窃かに亢奮してゐた。

闇を走つてゆく汽車が一層暗い隧道のやうな下に來た。注意して見ると夫れは北京の高さ三丈五尺基の厚さ六丈二尺といふ尨大な城壁の陰を過ぎつゝあるのであつた。城壁は二十分餘も續いたかと思はれる。右手の內城の燈火は無論壁に遮られ見るよしはないが、左側に展けてゐる外城內の市街も死骸のやうに暗かつた。駱駝に乘つて沙漠の中の長いあき〳〵する旅をして來た、それは辰雄彼自身であつた。その彼が亞剌比亞百夜物語の中の奇異と神秘と魔術に充ちた或る古の都へ着かうとしてゐる。其門は夢のやうに暗く閉されてゐる、然し心は踊る。城內に燦爛たる怪燈鬼燈の目を掠めてくる心持がされる。彼の想像はとりとめなく亂れた。

遂に京奉線の終點である前面（チエヌメヌ）の停車場に着いた。一度に客車を飛び出した旅客と、驛で待構へてゐた群集と、手荷物の山とで、公開されてゐるプラットホームは阿鼻の雜踏を演じ出した。旅客は我勝ちに自分自分の手荷物を渉つて、貨車の中へまで割込んで行つた。彼等は直ぐヴエラ嬢や愛蘭士の紳士をも見失つた。

此異常な光況は暗い場内の電燈よりも古風な大提燈の火に照されて居た。圓や、楕圓や、四角や、八角な提灯が各自に旅館、商店の人々によつて持込まれ、プラットホオムにずらりと並べられてゐた。提灯には赤、朱、黑、緑種々な色で支那一流の文字が書かれ、ひどくデコラテイブな感を與へた。彼はその大提灯の火影で思ひかけずも舊友安田に捕へられた。

「やあ暫らく、御機嫌よう。」

「やあ君、暫らく。」

二人は無意味に笑ひ交はして握手した。

「誰かのお迎えですか?」

「君のだよ。」

「僕の?……どうして知つてゐたんだい。」

「どうしてもないぢあないか、端書一本呉れもしないで。」

「惡かつた、實は極く内々でやつて來たんだからね。」

「さうか。然し公使館にこんなに電報が來てゐるんだ、隱さうたつてそりあ無駄だね。」

安田はさう云ひながら、ポッケットから八通の電報を出して彼に渡した。中には二枚續きの長いものもあつた。

「君は小寺君を覺えてゐるかね。今僕と一緒に公使館にゐられるんだ。君とは小學校で同窓だつた相だぜ。」

「小寺源一です。」

「あゝ小寺君ですか。」

辰雄はさも懐かし相に、その快活な顔を一層明るくして、三十年前の竹馬の友と握手した。

もう一人は中原と云つて十五年から支那にゐる辰雄と同郷の然し未見の人であつた。辰雄は又同行の外山を皆んなに紹介した

外山は宿屋の番頭にこれこれが手荷物であると告げて置いて、出口で待つてゐた四人の方へ急いでやつて來た。停車場前の廣場は構内よりも尚ほ暗かつた。そこには密集した群衆が一面に動いてゐる。馬車轎車、東洋車(人力)の何百といふ流が直ぐ前に聳え立つてゐる、荘嚴な正陽門所謂前門に向つて注ぎ、そこら渦巻いて押出されて來る。この密集した群衆から起る一種の喧騒は塵の立つやうに闇を亂してゐる。

五人は二つの馬車に分乘した。馬車は絡繹たる車の流に沿つて徐々進み、屢々停まつた。辰雄の耳には全で解らない言葉で叫び嘲る聲が絶えなかつた。それ等が彼をして甘い瞑想に富んだ異國情調の夢のやうな心地にした。

右に折れ曲ると漸く靜かな往來に來た。馬は快走し初めた。

「こゝらが大公使館のある租界區域です。」

と安田が一々説明した。小さな堀割に沿つた日本公使館及び兵營の前をも通つた。

再び町の間に來た。突然闇を破つて蹄鐵の荒ましい響が起つた。五六騎から十騎位の従者に前後を守

護させ、族姓を明記した提灯を高く振りかざしながら馳けて行く業山な行列に一度ならず擦れちがつた。一寸した官吏などでもあゝして外出するのだと安田が説明した。

停車場から宿屋までの暗闇に辰雄は殆ど何を見たといふ事はなかつた。然し北京のいかに理論的に設計された大都であるか、それがいか程まで獨創的な特相を備へてゐるか、何となく分るやうな氣がして本能的にある感激を促された。

常に彼はその豫覺に自信を持つてゐた。北京を見ない内から、一種の憧憬をもう感じ初めたのである。北京へ導いて來た運命は彼に明るく感じられた。大きな希望は心を喜ばせた。

日本旅館××は恰度普請最中であつた。漆喰臭い荒壁と塗りたての敲土の上に渡して材木の上を奥へ通つた。言葉も部屋も、座蒲團も、女中も諸て日本內地を旅行するのと同じ感を與へるやうな設備になつたゐた。二月餘の長旅をホテル生活に過して來た辰雄等二人には便利であり、懷しかつた。然し又一方には又少し物足らなくもあつた。北京へ來れば客棧（コオチャン）とか客店（コウテヌ）とか云ふ種類の旅屋に泊らねばならぬやうな氣がしてゐたからである。折角の會話の練習も毛皮の外套と同樣無駄になり相だつた。

香のあせた日本の綠茶が出た。福袍が出た。皆んな窮屈相に洋裝のまゝ疊の上に坐つた。辰雄はざつと電報に目を通して終つてから、朝鮮以來の旅の話をした。三人は北京の話をした。然し惡い消極な方面の話しが出なかつた。要するに北京は劣等國の首府で、そこにある文物は悉く（骨董品を除いては）無價値なものに思はれてゐるのであつた。

九時になつて膳が運ばれ、銚子が來た。安田は三度目の盃を啣みながら、

「何日位滯在の豫定なんだい。」

と訊いた。辰雄は一寸目を眠つて默つてゐた。

「見出すとこれで中々見る處の多い處ですからな。」

中原が一番の支那通丈けに主立つた名所を說明した。

「さう、幾日といふ事もないんだ。勿論一日も早く歸りたいんだが。」

辰雄は珍らしくも曖昧な返事をした。

「流石金持は呑氣なものだな。」

安田が揶揄した。

「さう云ふ譯ではないんだ。今度實は少し用があつて來たんで、觀光の爲許りではないんだ。早速だが勝次ね、僕の直ぐの弟の勝次ね……山田勝次といふのですが……、あれがこゝに來てゐるらしいゝんだ。僕はそんな雲を握むやうな事を當に遙々やつて來た。若し御心當りはないでせうか。」

「勝次さんですか。僕は知つてゐますよ……。」

さう小寺が返事した時、急に辰雄の胸は波打つた。

「然し二十五六年も前の事だから、もう顏も判然は覺えてはゐません。こゝでは習つて勝次さんらしい人を見たとも思はないし、噂にも聞いた事はありません。ねえ中原君。」

辰雄は豫期した事ではありながら今更ら心細いあるものが胸を襲つた。

「山田勝次さん、聞いた事もありません。」

中原は三千の日本人がゐるといふ北京の戸籍帳を暗じてゐるやうに直ぐ斷言した。
「まあ私もさう豫期して來ました。本名を名乘つてはゐないでせう。然しこの邊にきつと潜んでゐます、もしくは潜んでゐたと思つてゐます。」
「一體どうした不思議な話なんだい。」
安田はやゝしんみりした調子で尋ねた。
「何れ話すが、一口に云へば勝次は五年前に支那へ來たんだ、半年もすると音信を故意と絶つて終つた、僕は文子といふ孤を七つから預つてゐる。勝次のその一人娘が今年はもう十二になる。五年の間僕は絶えず彼の消息に注意して來たが、巧に彼は遁げ廻つてどうしても在家を知らせない。」
「不思議な人だな。」
不平相に安田は云つた。
「處が近頃出版されたラウダアといふ英國人の「新東洋主義（ネオ・オリエンタリズム）」といふ本ね、知つてゐるだらう、立派な獨創的の大著述だ、あの序文の中にそれとなく勝次の俤が出て來る。僕は興味を以つてあの本を研究的に讀んだよ。讀んで「禮、宗敎、美術の究極に於ける融合」といふ題目に來て、勝次の俤が一層明瞭になつた。此一章は確かに勝次の書いたものだ、勝次でなければ書けないものだと一人で極めて終つた。それにラウダアといふ男は彼の日本からの古い友達で、僕も度々逢つた事がある。詰り勝次を探す爲に態々ラウダアに會ひに來た譯だ。だから勝次を探して貰ふ前に、先づそのラウダアの住所が知らせて貰ひたいんだ。」

「それは何んでもない事だらうな、公使館に問合せたら直ぐ分り相なものだ。……どんな事情があるか分らないが君の弟も餘程變つた人だな。」

安田は好きな酒を獨酌でやりながら云つた。辰雄はそれとなく話を轉じた。七八年逢はない間に安田は益々肥つて、益々樂天家然として來た、然し舊友は舊友だ、話して見れば少しも變つてはゐなかつた。

隣室には明朝立つといふ客があつて、荷拵へをしてゐる。そこへ支那商人が二人も三人も來て翡翠や玉細工を賣りつけやうと執念深く坐り込んでゐる。暑くも寒くもない秋の夜が酒間に更けて行つた。

四、

幸な十月の夜が明け渡つた。辰雄は二階の欄干に出て初めて北京の空氣を日のもとで眺めた。日本で見られない沈靜な大氣は深く日輪の姿を包んで、匂ふやうな金色の霞の淀みを動す微風の一つだに絕えてゐた。

障子の內では外山がまだ快げに眠つてゐる。彼はそつと下に行つて顔を洗ひ、日本服のまゝ往來へ出た。そこは東單牌樓の通りで、中央に甬道(車道)を設け、左右の便道に沿つては飯莊、麵館、油鹽店乾果店、菜床子、などの小賈が軒を並べてゐた。嘗つては盛んであつて町の久しく衰微した有樣がどこにも窺はれる。普通支那人の食事は十一時と六時の二回だといふが、苦力等はそこらに群つて其時分から饅頭(パンの代用品)や麵飩類を盛んに喰つてゐる。饅頭の製法などのいかにも合理的な事が彼の注意を引いた。

そこらに群る下級民の服裝は紺淺黄白の綿服が普通で、群集として見れば美しかつた。百に一人位の割で婦人もゐない事はなかつたが、それは極く卑しい奴婢の老婆位で、中流以上の婦人や、若い娘は往來には勿論、店の内にも絶對に見かけなかつた。それは彼の目に不思議な現象であつた。蒜と油の臭の中に立停つて時々彼は群衆の動くのを面白げに見て歩いた。諸ての支那人の働作は彼の興味を充した。ある者は白菜や、菠菜や、荸薺を入れた竹籠子を下げ、ある者は鶏や家鴨を、ある者は鰓から糸を通して釣るした鯉魚などを下げて行つた。又枝木に跨らせたり、綺麗な籠子に入れたりした小鳥をさも大切相に持つて行く人々の餘り多いのと、夫れが苦力のやうな賤民も同じなのに一驚したが、何となく優雅な風俗であつた。聲を樂むためには紅靛頦兒、藍靛頦兒、白翎、藝を見るためには老西兒、燕兒などを養ひ育てるのだが、秋になると殊にかうして戸外に出さなければ肥え過ぎて小鳥を惡するのだと後で通辨から聞いた。

大鳥居を二つも三つも並べ、これに簪を載せたやうな朱色の柵が甬道(ヨオンタイ)の中に建てゝあつた。それには中央に東單牌樓(トンダヌパイロウ)と大書し、外にもまだ色々な文句が書かれてゐた。不思議な柵と云ほうか、高い門と云はうか、此市街の目標であり、裝飾である建物は各街(チエー)ごと、各衚衕(ホオトヌ)ごとに立つてゐて北京に特殊な一つの幻を形造つてゐる。

彼は東單牌樓から踵を廻らして、反對の方面に行つてみた。こんな寂びれた町にも大きな茶店(チヤテヌ)などが遣つてゐたり、古玩舖(クウワヌチンプウ)が豆腐房(トウフウフワン)と並んでゐたりするのは不思議に思はれた。どんなけちな古玩舖にも金銀細工や、玉や、翡翠や、磁器類の轉がつてゐない事はない、夫れが支那生活の富んだある片面を暗示した。

彼のぶらついて行く面前に花崗石で造つた極めて惡趣味な石頭牌樓が表はれた。之は故獨逸公使ケェツネルが虐殺された時、獨逸政府が謝罪の印として作らせた得意な紀念碑なのである。碑の額にはその由來が細かく書いてあつた。

「木ででも造らせて置けば朽ちるといふ事もあつたらうに、彼等はなぜこんな藝術上の恥辱を永遠に曝らさねばならなかつたのだ。」

辰雄は心に囁きながら宿屋の方へ歸つて來た。外山はさつきから待ち兼ねてゐた。

「大連から電報が來てゐます。」

彼は二通の電報を見てから、昨夜の分まで取出し、外山と商議し初めた。外山は手を鳴らして電報用紙を取寄せ、辰雄の云ふまゝを筆記し出した。

朝飯が濟んだのは九時過ぎてゐた。辰雄は楊子を使ひながら、

「公使館から何かもう知らせ相なものだな。」

と云つてゐた。そこへ中原が來た。間もなく安田も來た。彼は坐らない内から、

「駄目だ、英國公使館では知らない相だ。夏田舍に避著した事と、もう歸つて來た事とは分つてゐるが、住所は屆けてない相だ。話の樣子では公使館と喧嘩でもしてゐるやうな鹽梅だつたぜ。」

「さうかい、それは有難う。……さあ、さうしたらどうしたものかな。」

「英國人倶樂部といふやうなものはないでせうか。」

外山が云つた。

「さう、所が倶樂部などへ行く人ではないが、でもあれば聞いてみたいな。」
「そんなものはないね。」
「では寺は。」
「青年會館が直ぐそこにある。」
「聞いてみたいな。」
「譯はない、出掛ける序に寄つてみやう。」
二人も洋服に着替へ、四人で一輛の馬車に乘つて出掛けた。二三町で洋風な青年會館の前に下ろされた。洋裝したり支那服を着たりしてゐる信者が三四人出て來て叮寧に應待し、帳簿など調べたがラウダアの名はなかつた。
「中原さん、もしや牧師などで分つてゐる人はないでしやうか。」
辰雄は通譯をしてゐる彼を顧みて相談した。この先に英國の施療病院があつて、其構内には牧師の住宅が二三軒附屬してゐると敎へられて、そこを出た。
彼等の馬車は後戻りして敎へられた病院の門前に停つた。赤煉瓦の正門は閉されてゐたので潛戶から這入つた。芝生と花壇との間に獨立した家屋が四軒並んでゐた。第一の家では牧師自身が出て來て知らないと斷られた。第二の家では支那人の下女が取次ぎに出て、やがて三十格好の細君がアドレスブクツを繰りながら表はれた。
「私確かにアドレスがあつたやうに思ふのですが、今どうしても見當りません。」

と氣毒相に云つた。あとの二軒は無住なのか誰もゐなかつた。辰雄は少しも失望しなかつた。

「よし、北京にゐる事さへ確まればどうしたつて見つからない事はない。……中原さん、英國人の商店には一つ殘らず寄るやうに、よく馭者に云ひ付けて下さい。」

「君は私々と異つて溫厚な君子かと思つてゐたが案外烈しいな。」

辰雄の語氣が餘り强かつたので安田は笑ひながら冷した。彼は思はず苦笑した。

公使館に行つて安田を下し、玄關に名刺を殘して馬車を引返させた。

中食をしにヷアゴンリイ・ホテルに這入るまで、彼等は二十近い商店を一々辭を低ふして尋ねて歩いた。遂に辰雄の强情も此方法が無益であるのを覺つた時は少し氣の衰へを感じた。ホテルでもラウダアの名を知つてゐる人は多かつた、然し現在の住居を知つてゐる者も一人もゐなかつた。

「いやどうかなるよ。」

反つて辰雄が探捜に倦み初めて來た二人の氣を引てゝ勵ました。

「今からでよければ宮城を案内して頂かうか、外山どうだらう。」

無理だが一通り見られない事もあるまいと中原は答へた。いつか歐洲風の租界路を出て、廣い甬道を馳りながら、軒の傾き屋根に草の生えた商家や、往來する男女の群や(午後からは婦人の數が增へて來るやうに見える)推車(一輪車)敞車(大八車)幌馬車、自轉車、自働車、驢馬、騾馬、滿洲馬、駱駝の絡繹たる有樣を送迎して行くのは非常に快かつた。何一つ辰雄の目に新らしくないものはなかつたのである。東華門で拜觀券を求め、大小の門を潜り、諸官衙の前を過ぎて行くと午門と太和門との間に挾

まれた廣場に出る。太和門は停車場前の前門から數へると六番の大門で其間の離りは半里もある。紫禁城（禁闕）は一丈八尺に達する高壁で二重に取圍まれ、外廓は實に三千六百五十餘丈の延長があると云ふ事だ。

太和門の石段の前には元代に鑿つた通惠河の堀割から一つの小溝が分れて來て、天下第一と稱せられる玉泉山の水を湛へてゐる。然し今は流が停つて濁つてゐる。

小溝には大理石を彫めたる石橋が三間位づゝの間隔をおいて五つ並べて架けてある。これを内金水橋といつてゐる。周圍の諸てが偉大なのに比ると其細工は非常に纖弱、華奢に過ぎるかと思はれる。然しそれでゐて決して豪壯な全體の趣を破つてゐない、蓋し絶妙な獨創的の調和である。

彼等は太和門を潜つて太和殿に面した。御殿は三重の豪奢な露臺の上に黃色い釉藥の甃瓦を戴いて乾立し、目暈しいほどの威嚴を保つてゐる。露臺は磚と石で一面に敷詰められ、雲龍を刻んだ大理石の欄干で圍まれ、林の枝のからみ合ふやうに密集してゐる。有ゆる大理石は時々石灰で白く塗られるため、遠く見ると三段の欄干は白妙の紗の網で包んだ小陵の觀がある。彼等は一つ一つ露臺に登つて行つた。どの階段も中央に五爪を供へた天龍を深く刻んだ一枚石を挾み、その左右に唐草模樣を彫つた石段が並んでゐる。其の技巧の妙、模樣の優雅は穢れた靴で踏んで登るに堪へない氣がする。

左右から支へられた帝輿が此中央の一枚石の上を登降して雲上を行くと云ふやうな仕掛けになつてゐるのだといふ、中原の說明を聞いて二人は初めて成程と思つた。

頂上の露臺には燒香壇、日時計、方位盤、銅龜の鑄物、渡金した大金魚鉢などが一種の装飾品として

大業に配置されてゐる。實用を超越した所に云ふに云はれない雅趣が保存されてゐると彼は思つた。

宮殿輪奐の美、結構の美は今更ら云ふまでもない。朱丹で彩色した楠の丸柱、紺碧金銀で色どつた綺模樣の欄間と合天井、壯紙張りの格子、華麗崇嚴を極めてゐる。

太和殿の次には中和殿あり、保和殿あり、乾淸門を越えて宮禁になつてゐる。之等を取卷いて無數な宮殿、舘閣、廂廊が次ぎ次ぎに連立してゐる。彼等は足にまかせて見物して歩いた。そのうち知らず知らず後宮に出た。細腰蓮歩に堪へ得ない宮女等が住んでゐたらしい細く區劃した宮房には、窓掛一つなく曲甍には雀が巣をかけてる有樣、淺間しいほど荒れ果てたまゝになつてゐる。金桂花も、晩香玉も、丁香も伸びるまゝ伸びて、鉢には草が一杯生へた。院子(敲土で中庭みたやうな處)も寒に破れ、雨に叩かれて見る影がない。ある奥まつた宮房に心持のいゝほど小じんまりした南向の一房を見付けた。何心なく二間ほど裏へ廻つて行くとポムペイの家屋に似た石造の一室があつた。天井のアーチは低いが、均齊がいかにも裝つてゐた。今は風呂桶もなくなつてゐるが、盆湯（蒸風呂）だつたに異ひないと中原は云つた。目の高さに幅廣く出來た北の窓から靜かな光が磚の上に落ち主人まちげである。艶かに刺繍のしてある鞋や褲子がどこかそこらに脱いでありはしまいかといふ風情が漾つてゐる。

中原は彼等を美術舘の方へ急いで連れて行つた。それは袁世凱が淸朝の寶物を國家へ寄附させた結果出來たもので、主なコレクションは陶磁器、古銅器、御物、玉座、書畫皆な貴重なもののみである。然し辰雄は夫程興味を持ち得なかつた、なぜならば宮内省御買上品向なものゝみ餘りに多かつたからである。非常に高價なものだらう、然しそれだから美術品とは行かない。高價と云へば寶玉、寶石類の多い事とそ

の細工の發達してゐるには驚かされた。有ゆる高價な名玉重寳を集めて鏤め作つた果樹花卉類が何百鉢となく二部屋の中に並んでゐた。

「行きませう。もう恰度いゝ時間です。」

と中原が時計を見ながら促した。其晩は安田の私宅で御馳走があつた。初めて辰雄は彼の妻子や小供にも會つた。

五

萬壽山、頤和園の昆明湖はヴエルサイユの十字池よりも遙かに廣く、明快な美を備へて、十月の暑過ぎるやうな日光の下に展けてゐた。かの有名な石舟は水棲の一種であるが、畫舫を模し今にも浮び出相な空想を基に築かれてゐる。その石頭船の樓上に桌を圍んでゐた辰雄は飲みさしたビイルの盃と眺めながら水に醉はされたやうな舟遊の氣分になつた。

弟勝次の身上話をすると安田に約束した事は忘れなかつたが、つひぞいゝその機會に出逢はなかつた。今こそと彼は思つた。

彼はその日その日を徒らに忙がしく暮して、第一の目的たる勝次の搜索がちつとも捗らないのに少しいら立つて來てゐた。宮城を拜觀した翌十五日には北京市街から遠く自動車を馳つて、明の十三陵を訪ね、そのづぬけて規模の偉大なのと形式の莊嚴なのに驚き、素朴、至純、元一な藝術的の威嚴にすつかり心を打たれた。彼は十三陵天壇その他を見、急に明時代の文化に特殊な憧憬を抱くやうになつた。その晩餐には公使館に招かれ、公使初め五六の日本人と新しく相識になつた。

十六日には朝の半日を電報や手紙の整頓に費した。鐵三に宛て三間もある手紙を書いた。そんな忙しい中でも彼は半時も家郷を忘れなかつた。兩親の膝下には孤のやうな四人の子供が一日千秋の思で彼を待つてゐる。湘南には病妻がこれも同じ思ひで彼を待つてゐる。そんなこんな事務上の繁雜と精神上の苦痛とを一身に負ひながら、どうして鋭敏な多感と正確な把握とを外物に對し彼が失はないか、それは殆ど一種の奇蹟であつた。常子……その妻に必ず一日一信を怠らなかつた。手紙には滿洲旗人の女が五六十になつても兩把頭(リャンパアトン)といふ大髷に結つて七八寸もある笄や、日本なら十五六の娘でも挿しそうな大きな花簪を飾つてゐる風俗の面白さや、漢人の纏足(チャンチウ)も度々見ると中々優雅な趣を見出す事や、衣裝、帽、鞋の細事まで書き送るやうな事もあつた。

其日の午後からは錆びれた鼓樓(クーロオ)の層樓に攀ぢ、後門大街(ホウメヌタアチエー)から三年間の籠城を支ふべき石炭を蓄へてあると云ふ景山を左に望んで、三海のある禁苑を見に行つた。公使館の簡單な手續で直ぐ夫れは許された。三海とは北海(ペエハアイ)、大液池(タイイーチイ)、南海(ナヌハイ)を指すのであるが、實は玉泉山(ユイチユエヌシャヌ)から運河によつて導かれた央人工的な一つの大池に過ぎない。袁世凱の總統府は大液中の瀛台にあつて必ず水を渡らねば行かれない。そこで光緒帝は西太后の爲に幽囚され、戊戌の亂に際してはその愛妾珍妃、董妃の內殊に寵愛の深かつた珍妃が太后の命で、絹袋の中に入れられ、八月十五日蒙塵の夜、明月の光で生きながら井戸に投げ込まれた。西太后は血緣のある帝を愛したり、憎んだりした。酷愛したのも事實なれば、憎惡に堪へなかつたのも事實である。例令へ一日でも帝の參內がなければ其日が過されない位執着してゐたかと思へば、盛大な六十萬壽節式を行ひ、大政は皇帝に返與すると公言したにも拘らず、生涯垂簾の政を把り、萬機を親裁し、外

國使臣等をして欽賞崇拜せしめながら尚ほ慊らず、常人の到底想像し得ない意地の惡い樣々の手段で善良な帝を虐め通した。彼女の嫉妬はいかなる女性をも幽閉後の帝に近づけしめなかつたといふ程である。彼が最も愛し、又彼を最も愛したといふ唯一の理由で、珍妃は井戸に投げ込まれた。然もそれは遠い將來を掛念した彼女の鋭い嫉妬と陰謀とであつたのである。

中原に此逸話を聞いた辰雄は震へた。井戸らしいものでもあると一切近寄らうとしなかつた。さうして皆んなから笑はれた。

勝手に觀覽の許されてるのは北海中の瓊島(クエイタオ)許りであつた。この池中の岳巒は恐らく池を鑿ち、その土を積み上げ、遠い地方から搬んで來た石でそれに衣を着せたものだらうと思はれる。小徑は羊腸、苔に包まれ、蔦蘿の絆(から)んだ怪岩奇石の間を上下迂廻して幾十とない亭、榭、泉、石に彼等を導いて行く。亭榭泉石一つとして風雅な命名のされてないものはない、きつと扁額か對聯が掲げてある。その中には乾隆帝の優雅な筆蹟が多かつた。

頂上からは眞平らな北京の市街が一眸の裡に鳥瞰視された。東西南北に通ずる、大路小街井然(メイシユン)たる間に楊、柳、槐、楡、楸の樹木が枝々擴げて繁つてゐる。彼等はそこで支那にしかないといふ白松の林をも見た。葉は普通の松に似て三葉であるが、その幹を遠く望めば白樺(しらかんば)に最もよく似てゐた。

下り道は薄暗い岩窟の中を通つた。「曲逕通幽」などゝ書いてある。汀に近く散在してゐる幾つかの樓閣は恰度皆修繕最中であつた。大工の作業も異つてゐる有樣も興味があつた。禁苑を出て、觀象臺(コワンシヤンタイ)(天文臺)に天文學上の博物館を一覧し、彼は世の盛衰を想ひ悲しい心を一層淋しくして歸舍した。

宿屋の通辨の林源が彼等の座敷に來て、今日英國郵便局と新聞社に行つて來たがどちらでもラウダア氏の住居は分らなかつたと氣毒相に云つた。流石の彼も初めて困つた、とそれを口に出した。

その晩は五六の人々と散歩に出て、前面の茶館の雅座に連れて行かれた。何んの事はないカフエのシャンブル・パルティキュリエの組織である。彼等は曲班（藝者）や、相好（男優）の話をして辰雄を誘つたけれども、嚴格な性質と潔僻な習慣とはその醜惡を想像してすらたまらなかつた。

「そんなに君等の遊振りが見せたいなら、外山でも連れて行つて呉れ給へ僕は眞平だ。」

彼はさつさと俥にのつて快い星の空を歸つて終つた。

翌日は天壇と先農壇を見物した。

共に北京外城内の永定門の右と左に向合つてゐる。天壇は繞垣九里の密簇した柏樹林の奥深い木蔭に建てられてゐる。柏とは日本で言ふ伽羅の名木にあたるとか、極めて生長の遲い木といふのに拱餘なのがいくらもある、それらは一本千金にも値するといふ事である。

壇は天を象つて三重に大理石で積まれてゐる。頂上での直徑が九丈、環甃は五尺七寸、石欄の數は三百六十、皆な周天の度を象徴してゐるのである。唯見れば大きな圓い石壇が森の中に建つてゐるに過ぎない。皇帝が夜を徹し自ら贄を供へ天を祭ると云はれても或は何んの感も起らないかも知れない、然し辰雄の目には無量の意味が讀まれた。

その直ぐ北に皇穹宇がある。星辰でも齋る宮殿でもあらうか。そこから尚ほ五六町離れて祈年殿が聳へてゐる。豐年を祈るための齋場である。殿は八角で、屋根どりは圓形である。これ等の屋根の葺いてゐ

ろ甃瓦も天に象り皆な深い瑠璃色の釉薬が施してある。輪奐の整均莊嚴と相和し、蓋し一大傑作である。此苑内の建築物は總て九の數で支配されてゐる。九を陽數とし天を象徴せしめ、かの地壇（北京市街の北、反對の城外にあり）の總てが六といふ陰數と土を表はず黄色の甃瓦とで出來てゐるのに相對せしめてある。

天地の兩壇が市の南北あるやうに、日月の兩壇も東西の城外に双翼をなしてゐる。先農壇(シエンヌンタン)は天子自ら民に先ち親耕親蠶の範を示す處でその周圍六里、天神壇、地祇壇、太歳壇、先農壇、耤田等がある。然し天壇の崇嚴には到底比すべくもなかつた。

二時頃になつて林源は二人を廣和樓(コワンホウロオ)といふ前面(チエヌメヌ)の飲舘(フワンコワン)に連れて行つた。櫃房（店）茶房（仕度部屋）を横ぎると中庭の周りに四階樓がぐるりと建つてゐる。小さく仕切つた客間がそこに並んでゐる。柱にはぺたぺた月並な空虚な詩文が粘つてある。

客は少なかつた。辰雄は室の名を楣間の額に讀んで歩いた。どれも氣に入らなかつた。「鷲夢」これにでもして置かうかねと云ひながら、先に立つて這入つた。室はどれも殆ど同じ大さで、同じやうに穢なかつたから、せめてはその名で選んだのである。

室の中央に角な紫檀の桌子(チヨチウ)と四脚の櫈子(テンチウ)が備へてある外、中庭を背にした窓際に廣い烟床がある。烟床とは横になつて鴉片や煙草を喫するためのディヴァンの一種で、枕などが添へてあつた。

彼等は珍らしげにその烟床に上體を休め横へた。跑堂兒(パオタンルウ)と稱する男給仕人が三四人替る替る出て來て例の茉莉花(モオリイホワ)の茶を注いでくれたり、手巾(チヤオチン)を進めたり、瓜子兒(ファチウルウ)（西瓜の種子）を運んだりする。その應挨振が

日本のボオイなどゝ異つて非常に氣持がいゝ。分らないから料理の注文は一切林源に任す。酒は大連以來飲みつけた紹興酒の燗の暑いのを頼む。薄いチヨコレエト色で香がよく、味もいゝ、日本酒よりも弱い。

卓子の上に盃、筷子（はし）、匙子（ちりんげ）、碟子（さら）、などが並べられると同時に唐紙などの紙片を持つて來る、ナフキンの代りにそれで盃や、口邊を度々拭ふのである。料理が二品づゝ搬ばれた。青い色の卵子や、香春豆腐などはいかにも澁い味のもので確かに進歩した料理法である事を思はせる。冷葷單、大件、炒菜といふ種類に屬する色々むづかしい名の料理が大皿に盛られたまゝ出てくる。それを各自の筷子でつゝいて喰べる。そこに情味がある。

壁や天井は仕入れものゝ書畫で埋まつてゐた。聯の一つに「酒池肉林超ゝ度樂。」といふのが目についた。流石の辰雄も夫れを見ては吹出さざるを得なかつた。向の室には二人の曲班（チユイパン）が來て三四人の男を相手に小鳥のやうによく囀つてゐる。

食事は二時間半もかゝつた。局と稱し往來に店を張らず、私宅のやうな所で商賣してゐる内へ行つて、土產の緞子、綢布、紗、毛皮などを見た。客が來さへすれば直ぐ茶を注で出した。それを飲んで終ふと直ぐまた後を注いだ。又後を注いだ。辰雄は北京に來て茶許り飲まされてゐるやうな氣もする。……あゝ、時は一日一日過ぎて終ふ。大連にだつて日本にだつてさう打捨ておけない事許り溜つてゐる。……と考へて彼は胸苦し相に石頭船（シイトウチヨワン）の樓上から昆明湖の水の上を渡つて行く微風を見詰てゐた。風は湖畔全體に繁つてゐる。楊や、槐や、楡の裏葉を輕く蹴つて白く耀がやかせてゆく。

彼は突然ビイルの盃を取上げ、前に坐つてゐた安田を見た。

「乾盃をしやう。」

六

六年前の二月八日の朝、勝次の妻文子は突然生家に歸つた。二十二歳で山田家に嫁いでから七年目であつた。結婚の翌年に生れた正子は六つになつてゐたが、見かけは年より大きかつた。

辰雄は今安田に勝次の身上話を始めやうとして、思はずその朝の事が思ひやられた。

今になつて考へてみると文子が生母から離縁を迫られ、止むなく其意志に從はうと企てたのは一朝一夕の事ではなかつた。現にその決心は二度までしたが斷行が出來なかつた。此間の消息は文子の生母自ら親類に向つた相談した度々の言葉でその意志が明かに伺はれる。私が一人で死ぬやうな寂しい思をしてゐるのに、平氣でお前は他家に嫁いでゐられるのか。お前は親が大切と思ふか子が大切と思ふか、親を捨てゝも、夫や子につく積りか。私が二十四の時から後家をたて通し、お前等二人の兄妹を育て上げた苦心をどれほどの事と思ふ。その一人の母親の恩愛も無にし、母を捨てゝまで山田家にゐたいのか。これに類した、全て理由のない無理、然し腸を刳り、血を絞るやうな言葉は間斷なく文子の耳に囁かれた。お前はどうしても歸つて來ない積りか、といふ詰問に對しては、斷然歸りませんと文子は答へた。然し親を捨てる積りかどうかといふ難題には、いつも一言も返答しなかつた。唯だ袖を嚙んで泣く外なかつた。文子は此秘密を深く胸に隱して勝次にすら一言も云はずに苦しい月日を過した。その五六年の間田中未亡人の謀つた邪な心から割出される有ゆる非常識な言葉と行爲に二人は絶えず苦みぬいた。

文子自身の言葉を借りて云へば、今までは正子が餘り小さかつた、これから先きになれば餘り大きくなり過ぎる。若し離縁を斷行するならば、今度こそ最上の時機である。と思ひ定めたのであつた。

肺炎を病み病院で一月を過してから直ちに鎌倉へ轉地してゐた彼女は五ヶ月目で歸京し、六ヶ月目に久々で里に歸つた。それは二月の五日であつた。その日彼女は最後の決心を生母に促されたものと思はれる。五日から八日までの三日間は轉地先から歸つたといふ口實の下に、家の隅々、土藏の中まで片附けた。夜は手紙や帳簿類を整理した。彼女はいつになく元氣がなかつた、而痩せもした。然しそれは腸胃加答兒のためであると云ひまぎらしてゐた。其の頃勝次はある著作で非常に忙がしく、朝早くから、晩は一時二時まで書齋に引籠つてゐて彼女の容子にもまるで注意してゐなかつた。

二月八日といふ悲しい日が來た。それは八年前に文子が水澤正一との婚約を破棄した日である。彼女は山田家へ來ない前、十九の歳から三年間、母親の意志に從つて水澤と交際し、婚約まで結んでゐたのであつた。處が未亡人は偶然山田勝次に會つて、識るやうになつてから、その移り氣は急に水澤を疎み出し、有ゆる卑劣な手段と、有るか無きかの傷とを針小棒大にし、無理に二人をして破約を承諾せしめた。二人は一生結婚しないと契りながら、未亡人の無法な然し鐵のやうに冷酷な意志の犧牲になつた。田中家にはこの非人道的な行爲に對し强ひて未亡人と爭ふほどの人は一人もゐなかつた。

かくて互に取交はされた愛の手紙は今は悲しい無言の通牒となつてその日相方から送り戻され三年の婚約も遂に空しく破棄された、その二月八日の日が來た。

その朝九時に文子は齒醫者に行くと云つてコオトを着、襟卷を手に持つたまゝ、玄關から下女に下駄

をまはさせ敷石傳ひに庭へ下りた。普段はよく見た事もない小さな食堂、その隣の六疊の間、手水鉢を庭から振返つた。七年を過した家、もう二度と再び見る事の出來ないで死んで終はねばならぬ家である。

裏から裏へ拔けて本宅（勝次の兩親の住んでゐる）の内玄關脇まで來た。勝次の下駄が共踏石の上に無雑作に脫いである。彼女は正子を心當にして態々庭からこちらへ廻つて來たのであつた。

彼女は何か重い氣持で格子戸を明けて内へ這入り、べつたり上り框に腰をかけた。二三分間ぢつと泪を飲んで爲た。やつと泣聲でない聲が出相な自信がついた。

「もし中川さん（執事の名）正子はそこらにゐませんか。」

「はい、御機嫌ようございます。……唯今までおゐでになりました。西洋館の方でございましやう。お呼び致しませうか。」

「どうぞ。」

さう云ひながら何氣なく又、勝次の下駄を眺めてゐた、まあ何んて亂棒な脫ぎ方なのだらうと思つて上體をかゞめきちんと正しく向け變へて揃へた。その下駄をいぢつた手をハンカチイフでちよつと拭いた。

又悲しさが込上げて來た。泪をその手に持つたハンカチイフでかんだ。

「まあ。何に、べべちやん今辰ちんや、康ちやんと自動車ごつこしてゐるのよ。」

と元氣よく云ひながら給仕盆をハンドルに見立てゝ兩手でまはしながら走けて來た。文子は急に氣を

取直した。
「まあはね、歯醫者に行きますよ。一緒に行きませんか、御療治の間山下（勝次の姉の嫁入り先）へ行つて待つてゐて下さればいゝわ。」
正子は房々した切下げの髪を女中にこすりつけて、身體を反し、行き度くない意志を示しながら、
「べべちやんいや、お内で遊んでゐたいの！」
「さう、本當にいや、お内の方がいゝの？」
正子は遊んでゐたいので山々であるが、置いて行かれるのも不平相にかぶりを振つた。
「それぢや、大人にしてゐらしやい。春やよく賴むよ。」
彼女はかうして正子と別れた。本宅の門を出て二三間行くとどうしてももう一度正子が見たくなつた、押へに押へてゐる感情は今にも狂ふかと思はれた。蔦の生へた石屏の上からは西洋館の二階しか見えなかつた、もしやそこの窓から正子が首を出しはしまいかと佇んで伸び上つて見た。兩親、義理の兄弟、良人、子供その人々の群が住まつてゐる家、その門から彼女はもうよろめき出て終つてゐた。
山田辰雄の心頭にはこの怖ろしい瞬間に於ける文子の心情が響いて來た。そうして口では安田に逼つて、
「乾盃をしやう。」
と云つた。
「此間から弟の話をしたいと思つてゐたが、いゝ機會がなかつた。まあ聞いて呉れ給へ、かう云ふ譯だ。」

彼は勝次の結婚當時の事から順々と說き出した。水澤正一と文子との婚約を紙屑のやうに破り捨てた田中未亡人は半年もたつと口を拭つて、そろ〳〵勝次に近づき結婚の瀨踏みを初めた。世の中を知らない感情一篇の勝次を手中に丸め込むのは彼女の敏腕には餘り容易であつた。
十日許り箱根へ旅行したゐた勝次が歸京すると、田中未亡人から至急逢ひたい事があるといふ電話がかゝつた。彼の留守中に彼女は四方八方から山田家へ公式に緣談を持ち込んでゐたのである。
「あの通り父もなくつて育つた娘で、とても貴方の奧樣になる資格などある者ではありませんが、どうぞ吾々に同情すると思つて貰つて下さいまし、この通り私がお願ひ致します。」
彼女は言葉通り膝まで頭を下げて賴んだ。勝次は豫期して行つた事とは云ひながら此極端な態度は意外であつた。水澤との關係も極く簡單に、一度は婚約した事もあつたが、お話にならない卑劣な人間である、然しもう一切關係はないと、田中家に出入する多くの學生、書生等と大差なく思はせる位輕く巧に話された。勝次も其事については一度も不安を感じた事はなかつた。勝次は書中で文子の心情を確めた上兎角の返答をしやうと云ふ事で其場は別れた。
山田側のみならず、田中側でも、未亡人の評判は極めてよくなかつた。結婚を申込みに來た田中家の使の一人さへ、母親は御承知の通りな人ですが、文子は母親と異つて、中々よく出來た人です、さう云ふ言葉を殘して行つた。山田家及びその親戚では勿論少さい時から文子を知つてゐた。本人がよくつてその健康に掛念がなければ、いゝぢあないかと云ふのが大體の意嚮であつた。外國から歸つた許りの勝次自身の判斷はまるで皆んなと異つてゐた。文子そのものは殆ど眼中にない位だつた。未亡人を崇拜して、日本

にもあんな賢婦人がゐるかと思つた。

さうかうして婚約が整ひ、結納が交はされた。文子の祖父の健康の氣遣ひから、豫定より半歳ほど結婚の式が早められた。結納してから四ヶ月目で二人は家庭を作つた。

未亡人は嫁入道具の山田家へ搬ばれるのを見て病的な寂寥からおい〳〵云つて泣いた。彼女は直ぐ持病の頭痛で半病人になつた。結婚の當日は既に咒はれた日になつた。太神宮、華族會館、山田家の私宴それ等に連り歸宅した時、彼女は倒れん許りに泣き崩れた。翌日新夫婦が旅立した後で、附けてやつた彼女が歸つて來ると、根ほり葉ほり昨夜からの様子を訊問した。衣物を疊みながら云つた勝次の母の僅かな言葉女中部屋の陰口にまで既に山田家に對し色々な怨を含んだ。此調子で總ては押して行つた。双方に一日一日云分が増えて來る許りであつた。

翌年正子の出産に際し、未亡人は色々な口實の下に産の前後を通じて六ヶ月間文子を押へて歸さなかつた。夫れ以來兩家の間には目に見える滞が出來た。彼女はも早や断然山田家へ顔も出さなくなつた。三年後には勝次が田中家を訪ねても未亡人は彼を避けて面會しなかつた。遂に勝次はそれから以後一切田中家へ足踏みしくなつた。

文子が無断で山田家を出て終つてから一週間目に、勝次は初めてその戸棚の中を調べてみた。一物も亂れず片づいてゐる。會計簿は殊に目立つ場所に置いてあつたが、一月七日できちんと計算がしてある。用箪笥の鍵のある引出は皆な錠が下りてゐたが、ハンカチイフの入れてあつた引出に、指環の箱がたつた二つ這入つてゐた。何氣なく取出してみると、一つにはエンゲエヂリングと普段使ひにと思つて近く

勝次の買つて來た時計の鎖が入つてゐた。もう一つのには彼女の一番小さな指環が「べべチャンに」と鉛筆で悲しげに書かれた紙に包んであつた。

文子が歸つてから一ヶ月間兩家の間には何人の人々が何度往來して調停和解を試みたか知れない。田中側ではどうしても本人に歸る意志がないのだから、親兄弟でも此上どうする事も出來ませんといふ挨拶一天張りで押通した。

翌月の十三日には文子の荷物が馬力二臺に積まれ九段の櫻の咲いてゐる下を通つて田中家に送られた。勝次は淋し相な正子を憐みながら多くのものを犧牲にして暮した。仕事に熱冲し得る熱烈な藝術家的本能はよく彼の危機を救つて、その全感情を仕事に向けて活す事が出來た。文子は再び七年前のピアノの研究者に戻つた。然し二人には時々寂しい日があつた。勝次はぼんやり二階の窓から長屋の屋根にかゝる雨や、電線を傳つて行く雨垂を眺めて泪ぐんだ。文子は人知れず戸棚に隱れて正子の寫眞を眺めては泣いてゐた。二人の間には別れてからもまだ樣々の中傷が行はれた。或者は來て、文子はもうすつかり元氣を恢復し樂しげにピアノをひいて暮してゐると傳へた。彼は笑つて、そんな事は人面獸心の無情漢か推理力の欠けた馬鹿なら信じられるだらうと答へた。或者は來て、未亡人は此間中から再三水澤氏と山の家で密會してゐると告げた。見へ透いた中傷とは知つてゐたが、其頃になつて田中水澤兩家が公然又交際を初めた事實を知らされてゐる彼はもう笑ふ事は出來なかつた。散々之等の中傷が行はれた後田中家から返籍屆の捺印を持込まれた。勝次は中傷の誘惑に惱みつゝあるのを自覺しながら、やはり腹を立てゝやがて調印を承諾した。それは荷物を返してから四ヶ月目の事であつた。

勝次が支那へ行つた動機については兄ではあるが性格を異し、職業を異にする辰雄には全く理解が出來なかつた。然し一番有力な源因は、漸く學校へ通ひ初めた許りの正子に對して田中の未亡人が樣々な手段を用ひ、彼女の頑是ない心を亂さうと謀つた事ではなかつたかと思はれた。

正子は春休みを辰雄の子供達と一緒に鎌倉の別莊に行つて暮してゐた。その留守中勝次は京阪まで旅行すると云つて出た切り支那へ行つて終つた。彼が上海から送つた手紙には「自分はもう自分の事すら正しく考へる力がなくなつて行くのを日々感じてゐる。正子は私の生命である。然しもし私が自分を失ふならば、自分の生命である正子も用はなくなつて了ふ、正子も亦かくの如き私から何物をも享受し何物をも期待する事は出來ない。そんな事が書いてあつた。

辰雄がそこまで話した時、跑堂兒(ポオタンルウ)は又茶を注いで來た。一緒に辨當を喰べた三組の支那人客と二組の西洋人はいつの間にか石頭船を出て行つて終つたし、外山は林源と小舟を漕ぎに行つたし、樓上には彼等二人切りになつてゐた。日影は横に廂から這入つて來た。

「隨分人を馬鹿にした腹の立つ話だな。まるで西太皇のやうな女だ。僕の伯母に恰度さう云ふのが一人あつて一家一族困らせられるから、割によく僕には分る積りだ。然しかうしたヒステリック型の婦人を一度も見た事のない人間にはあゝした辛辣な心理は到底見當がつくまいよ。やつくばり非常に目先のきく、口の甘い、交際上手な、人の世話なんか實によくみてやる女だがね。虛榮心、嫉妬心、貪婪心、そりや中々強い。虛言、詭辯、中傷、捏造、探偵、買收そんな能力には先天的にたけてゐる。目上でも、親類でも直ぐ丸めるんだから、女中なんか操縱するのはなんでもない。まあこんな女ぢあないか。」

「僕にはさう云ふ風に人を冷酷に解剖する事は出來ない。どんな人の立場にだつて同情すべき點はあるものだからね。僕も窃かに田中未亡人の不幸な生涯には同情してゐる。氣毒な人だと思つてゐる。だけれども夫人が最愛の娘を水澤氏から裂き、勝次から裂き、正子から裂いた一事は遺憾ながら辯護すべき何等の餘地を見出せない。之は確かに夫人一生の失策で重い罪惡だ。道德上の殺人だ。僕は勝次親子三人のため態々北京三界まで來たが、一面から云へば夫人の犯した罪の償を僕が夫人に代つてする譯だ。」

「それは君の考へ方だ、僕ならば訴訟する。そんな無法な人權の侵害は道德的に解釋なんかしてゐられない。君が立派な人だから、他人も立派なものだと思ふであらうが、さうは行かない。だから世の中に裁判所の必要があるんだ。」

「だから裁判所の必要があるさ。僕に云はせればあり過ぎるさ。然しいくらあつたつて人の心に平和は戻つて來やしないぢあないか。僕の求めるものはそんなものではない。勝ちたいとか、負けてゐるのが口惜しいとか、腹が立つとか、復讐がしたいとか、そんな事ではない。皆んなの心に消へかゝつてゐる愛をどうかしてもう一度叫び醒まさせたいのだ。僕の心にはその愛がある、その溫味を勝次にも分けたい、文子にも分けたい、田中の未亡人にも分けたい。さうして皆んなの今迄知らなかつたもつともつと深い大い、本當の愛の經驗をさせてみたい。然しそれは言葉でなし遂げられる事ではない。至誠があれば人の心をどこまで動かし得るか、唯だそれだ。それは豫め計る事は出來ない、唯だ盡せる丈け盡してみたいのだ。「信而後諫、未レ信則以爲レ謗レ己。」それは人情ではないか。」

「處がそんな人に限つて決して動かないよ、信じないよ、反つて間がよくば君まで騙さうとするよ。」

「それは勝手だ。でも僕にはそれ以外の事をする譯に行かないのだ。」
「それはさうだらう。君は君の事をする、僕は僕の事をする、それで世の中はいゝのだ。」
「處が僕にはさう諦められない。君にも僕のやうにして貰ひたい。僕は善をするのだ。だから、君にも僕のやうな善をして貰ひたいのだ。」
「相變らず自信の强い事だ。」

遂に二人は笑ひ出した。そんな話をしてゐる内に外山と林源も歸つて來た。

彼等は石頭船を出て、欄に沿つて水鏡に寫つる樓閣の影を見ながら歸り初めた。池水は淸冽で藻の間を游泳する細鱗も人に驚かない。蓮は遠く地平線と一つに消へ、倒映沈橋その影共に遙である。樹と樹と枝を交へてゐる下、草と石と苔と調和してゐる幽苑の間を、何百間の長廊が勤政殿の方へ連らなつてゐる。朱欄、彩廂、畫梁、色櫓いかにも西太后好みの豪奢である。こゝの裝飾に描かれた風景畫には既に西洋畫の感化が著しく看取される。

勤政殿の背後玉蘭堂、樂壽堂、宜春館等豪莊な御殿の甃瓦、曲甍相重る上に金山が高く聳え、何千階の石段が左右から中央を大理石の一大絶壁を抱いて攀ち上る有様は蓋し無双の莊觀である。山の上には萬佛樓を初め、全部赤銅で鑄造した閣樓、圓門、高樓等が所々に趣を添へてゐる。怡養堂のほとりでは西太后の愛人李蓮英の房だつたといふ軒を覗いた。その耳房の窓の前には合歡木や櫻桃などが林をなしてゐて、「柳髮鳳眸、皓齒紅唇、其態悠揚、委委無双」と云はれた當時の美少年を忍ぶにふさはしく、辰雄を不快にした。

萬壽山北京の間の二里の道は太后のために出來た坦々たる石道で、道路の兩側には楊、楡、楸などが茂つてゐた。太后は好んで半路を通惠河(トンキイホオ)の運河により、數艘の畫舫に或は管弦を備へ、或は明月を樂み、置酒して萬壽山の離宮に往復したといひ傳へてある。彼等四人を乘せた自働車は運河に添ひ、圃園や、耕地や、村落の間を快走して瞬く暇に怪物のやうな北京の城壁に達した。

七、

萬壽山から宿屋に着いて夕食を濟せると、用事があると云つて珍らしく安田は早く歸つて終つた。辰雄も久しぶりで暇になつたやうな氣がした。秋の夕日の落ちるのにもまだ一寸間があつた。少し散歩しやうと云ひながら外山を促して彼は戸外に出た。

東單牌樓(トンタヌパイロウ)の建つてゐる角から租界地の練兵場の方をぶらついて來ると、辰雄の目の前に外國人の經營らしい大きな馬車自動車會社が立つてゐた。彼の心はある思付きで急に踊つた。

「おい外山、君一つあの會社の事務所に行つて、ラウダアの處を聞いてみて呉れ給へな、或は事務所で分らなくつても、馭者なんかが反つて知つてゐないとも限らないぜ。僕は先きに歸つて待つてゐるからね。」

宿屋に歸つた辰雄は不安な心持で外山を待つてゐた。ラウダアの搜索に關しては彼は既に思ひ付いた丈けの事は總て試みた。もう思ひ付く事もなくなつてゐた矢先に突然馬車會社が彼の目を引いた。犬も歩けば棒にあたるだ、今度こそといふ氣がした。彼は座蒲團の上でもぢ〳〵してゐた。

外山は障子を明けて電燈のついた座敷へ這入つて來た。どこへ帽子を置かうかと一寸まごついた。

「おい君分つたかい。」
「いゝえ、分りません。」
彼は溜息をしながら座蒲團へ坐つた。
「えゝ？　分らない。」
辰雄の顔には嘗つて見ないほど暗い失望がかゝつて來た。外山はもう氣毒でたまらなくなつた。
「行きますとね。外國人が二人、支那人が一人ゐました。私の甘い英語で訊きました。西洋人は二人とも考へもせず直ぐ知らないと云ひましたが、支那人は確かに聞いたやうだから、一寸調べて上げやうと云つて、次の部屋へ私を連れて行きました。こんな厚い帳簿を引繰り返し、引繰り返し見て呉れましたがとう〳〵それでも分りませんでした。然しどうしても覺えがあるからあすの朝まで待つて呉れと申しました。二十三四の悧口相な親切な支那人でした。私が宿屋を知らせやうとしたら、貴方は知つてゐます、毎日貴方の御乘りになる馬車や自動車は自家から行くんですからと云ひました。或は分るかも知れませんよ。」
彼は慰め顔に云つた。
「然しその帳簿を調べて呉れたのが却つて何んだが嫌だな。もう望の切れたやうな氣がするから。」
外山は返す言葉がなかつた。
「まあいゝ、總裁の云つたやうに本當の北京見物になつた。……明日でもう一週間になるね、さあどうしやう。東京や病人の方も心配だ、鐵三から云つて來たあの件も打捨つてはおけない、……明後日あた

りは立つ事にしやうか。今度は天津から大連汽船の御厄介になるか。」
「さうですな、汽車も隨分あきましたから。」
「さう、君一寸下女を呼んで出帆を調べさせて吳れ給へ。僕は手紙を書くから。」
辰雄が八通の手紙と三十枚餘の繪端書を書き終つたのは二時過だつた。枕についても中々眠れなかつた。とう〳〵孤兒にならねばならぬ正子の憐れな運命がひし〳〵と胸にこたえる。眠つたと思ふと正子と夏子の夢を見た。半身起上つて彼は夢に泣いた涙のあとをふいた。鞄、毛布、杖、帽子等が薄暗くした室の中に無秩序に置かれて、遠い北京の旅の空にゐる自覺が今更ら彼を淋しく思はせた。
彼はいつになく八時までぐつすり眠込んだ。幸ひ其日も亦快晴だつた。北京に來てから一日でも雨に降られた事はなく、恰度日本の小春日和のやうな日が續いた。洗面場から座敷に歸つて來ると、外山が待ち兼てゝ云つた。
「公使館から手紙を廻して吳れました。」
「あゝさう、澤山來たな。」
彼は嬉じ相に直ぐ手紙の表面を一つ一つ眺め、端書から讀み始めた。中には辰馬や康雄が描いた繪端書や、夏子、正子の可愛らしい手紙があつた。彼は子供のやうに喜んだ。常子の手紙には此一週間は氣候もよく、氣分も優れ、毎朝三十分位づゝの散歩が出來ると書いてあつた。それも嬉しかつた。
「君今日はいゝ日に異ひないぜ。馬車屋から返事はまだ來ないかい。」
「いゝえ、もう來相なものですな。」

手紙を讀んだり、朝飯をしたり、新聞を見たり、ぐづ〳〵してゐると十時頃、馬車からの電話がかゝつた
外山は慌てゝ飛び出さうとした。

「君一寸待つて呉れ給へ僕が行くよ。」

辰雄はさう云ひながら、片跛(かたちんば)なスリッパを突かけて長い廊下を走け出して行つた。受話機を耳にした。
明快な英語が彼の鼓膜に傳つて來た。

「御約束した通り、ラウダアさんの番地を見出しました。お知らせしますよ。」

「有難う、大變有難う。」

彼は嬉しさに胸が一杯になつて繰り返した。

「サ……チ…　ホオトン。………。」

「何んですか。」

「サ…．チ…．ホオトン。………。」

辰雄は三度も四度も熱心に聞取らうとしたがホオトンの外はどうしても分らなかつた。先方ではもう
面倒臭くなつてゐる樣子だつた。

「一寸待つて下さい。」

さう云つて置いて林源を呼んだ。彼は一口きいたと思ふともう電話を切つてゐた。紙切れに「三條胡同(サンテイアオホウトン)十六」と書いて直ぐ辰雄に渡した。

「遠い所かい。」

「いゝえ、直ぐこゝです。」
さう云つて電話室の中を指した。
「俥で何分位かゝる。」
「二分。家のこの裏です。」
彼は二本指を出して見せながら云つた。
「そんなものだ、總て人間のしてゐる事は。」
彼は腹立しくもあり、にこ〳〵しながら部屋に歸つて行つた。
外山も跳り上つて喜んだ。
「やつぱりいゝ日だつた。」
さう云ひながら辰雄はもう洋服に着替へ初めた。
外山や林や女中等に見送られながら辰雄は勇んで玄關から、地上三尺許りの低い人力車に乘つた。日本病院の前を通り、荒れ果てた親王家の阿思門（オスウメヌ）の空地を横ぎると、すぐそこに同じ構造の花墻門（ホアシャンメヌ）がずらりと兩側に並んでゐた。十六番地といふのは三軒あつたが、ぴか〳〵光つた西洋人の眞鍮の表札はどこにも出てゐなかつた。然し念のため下りてみた。眞中の家に拉烏達と書いた赤い新らしい表札が出てゐた。彼は念のために扉をあけて門内に這入つた。
門内は所謂三層房（サンチユンファン）で一つの中庭を圍み四方に御殿か寺院のやうな前廊、格子を備へた正房（チエンファン）、廂房（シヤンファン）、前房（チエンファン）の四棟が額を突合せて建つてゐる。彼はどこへ案内を頼んだらいゝのか一寸見當がつかなかつた。彼

の跫音を聞きつけて、門房の中から一人の日本の青年が上着もきないで飛び出して來た。意外にもそれは龜井であつた。龜井はラウダアに十四五の時から世話になつてゐる書生であつたが、辰雄の顔は見忘れてゐた。

「どなたです。」

彼は怪訝相に彼を見てゐた。

「龜井さんでしたね、暫らく！　私はね、山田です、勝次の兄の辰雄です。」

彼は本當に驚いた。顔の色が變つた。

「どうして貴方はこゝが分りました。」

「直ぐこの裏の方の馬車屋で聞きました。」

「あゝ、さうでしたか。……十日前に田舍から引越して來たんですが、引越すと直ぐ御奥さんが御產をなすつて昨日洗三（出產後三日目に行ふ湯餅會）が濟んだやうな始末ですから、まだどこにも通知なんかする暇はなかつたんです。成程引越しの時あの馬車屋を賴みました。」

「ラウダアさんは？」

「先生ですか今一寸出ました、午食には歸る筈です。」

「山田さんですか。」

と右側の廂房の格子を通して聞き覺のあるラウダア夫人の聲が弱々しく響いた。

「どうして貴方北京へ來たんです。少しも想像しなかつた事です。……私は四日前三番目の子を生みま

した今度は女です。」

「さうでしたか、それはお芽出たう。私は勝次を探しに來ました。」

「さう私も思ひました。勝次さん御丈夫です。北京にゐる事を大變喜んでゐます。」

辰雄はまだ色々話したかつたけれども、産婦の健康を氣遣つた。

「お疲れでせう、お休みなさいまし、私は又改めて上りますから。」

「さうですか、お目にかゝれないで本當に殘念です。ラウダアが貴方の來た事を知つたらどんなに喜ぶでせう。」

「どうぞ宜敷云つて下さい、又上ります。失禮ですが、龜井さんを勝次の家まで案内に借して下さい。」

「どうぞ、左樣なら。」

障子を離てたまゝ二人は話をして別れた。辰雄の心はもう喜びに充ち充ちてゐた。

龜井は車に乗つて前に行つた。そこから十五分も北へ行つた、翠花胡同といふ町に杜璉寶といふ表札の出た過道門があつた。龜井は車から飛び下りて、辰雄を門内に導き、一寸御免下さいと云ひながら前房の中へ隱れた。

辰雄は正房に對し西面して立つてゐた。その左右には一段低い屋根取りの耳房が續いてゐる。柱も、梁も、檐も皆な朱色で、扉は色彩が施されてゐる。院子（中庭）は四十坪もあるだらう、支那風な盆栽や、奇怪な形をした石灰岩の破片や、片石の五六尺もある塊などで飾られてゐる。

若い一人の支那人が出て來て極めて掬躬如なる態度で二人を正房に導いた。正房は二十疊敷位あつた中央に紫檀の大案を据ゑ、それを圍んで炕桌や、茶桌や、樣々形の椅子が並べてある。磚を敷いた床の

上には雲と鶴と草花の色毛氈が伸べてある。寂かな室内は水のやうに沈んで、前廊で遮られるためか格子の紗を通して來る外光は軟く房櫳の壁紙を照してゐた。

辰雄は龜井と對坐して、話しながらも高い天井を見上げたり、壁にかゝつてゐる油繪や、錦繪を見たり、八仙桌子の上の古玩、筆墨、文具類を眺めたりしてゐる中に香のいゝ蘭を活けた花瓶の陰に三枚の寫眞を見出した。一枚は一家打揃つて寫したもの、一は彼と正子とが二人で寄り添つて寫したもの、もう一つは文子のそれであつた。辰雄には弟の心中が深く憐れまれた。

さつきの跑上房的(ペオシャンファンナ)は早速茶を搬んで來たまゝ、そこに待し龜井の通辨で話などした。勝次は乘馬しに行つたのだから間もなく歸るとの事であつた。勝次が今にもそこへ歸つて來る、これは夢ではないか、もしや過ぎた五年が夢でないか辰雄には疑はれた。彼の胸は悲み喜びで一杯になつた。

ふと面前にかゝつてゐた刻字の聯に目を止めて讀んだ。右には「新華發二兩樹一。分レ香遍二一林一。」左には「迎レ風轉二細影一。向レ日動二輕陰一。」彼は印象派の書のやうだと思つた。然し詩の意味は少し氣にかゝつた。

對聯の間には一軸の支那畫がかゝつてゐた。紅の紐に飾られた黄金の籠の中で一尾の大きな鳥が籠にかけてある古鏡に向つて悲しげに啼いてゐる。籠の下には玉蘭、牡丹、迎春花などが華々しく描いてある。さまでいゝ畫とも思はれないが、何となく情趣の溢れた幅であつた。畫の意味は解らなかつた。

「これは君一體何が描いてあるんでせう?。」

龜井に訊いたが龜井も知らなかつた。支那人から彼は暫らく説明を聞いてゐた。

「これは「孤鸞鏡中影」と題する幅で、昔峻和(チインホオ)といふ山へ罽賓王(ワヒンワン)が網獵に行つた時、一羽の鸞を生捕にして歸つた。美しい鳥であるから必ずその啼音もいゝだらうと、三年も大切にして待つたけれどもちつ

とも啼かない。王妃は考へた、鳥は番ひを見て啼くものであるから鏡をかけてだましたならばきつと啼くに相異ないと、そこで籠へ鏡をかけてやつた。

處が鸞の番ひは同じ鸞ではなく、鳳といふ鳥だつた。憐れな鸞は悲しさの餘り啼くには啼いたが、その哀調は到底聞いてゐられなかつた。啼いて啼いてその晩とう〳〵死んで終つた。と云ふ古事を描いたものだ相です。」

「さうですか。成程面白い話ですね。」

辰雄は何氣なく答へた。なほ此支那人を通じて勝次の日常を知りたいと試みたが、彼は要領を得させなかつた。

さうかうしてゐる門内に馬蹄の響を聞いた。辰雄は今更らのやうに動悸を感じて、急に椅子を立上り閾を排してつゝと前廊に出た。

門房の前に立停つてゐる一匹の白い滿洲馬があつた。黒ずんだ海老茶緞子の馬褂兒を着、支那風の長靴を穿ち、帽頂兒を被つて今や馬を下りやうとしてゐるのが勝次であつた。手に持つた拂子の長い白熊の毛は正午の日光にきら〳〵光つた。

何んにも知らない勝次はその次の瞬間、いやでも應でもその兄と顔を見合せねばならぬ運命に逼つてゐた。辰雄はその後姿を見て思はず熱い泪をはら〳〵と流した。勝次は拂子を持ち替へた手で馬の首をぱた〳〵叩いた。



日本倶樂部

坪内士行

存である。

倫敦市内ではあるが、西部のリヂェント公園に近い、云はゞ山の手に寄つた小路の日本倶樂部は、比較的靜な所で、その表通りに面した一階の客間では僅にかなたの大通りを行交う辻自動車や、合乘自動車の音が聞えるか聞えぬかである。

部屋は新らしく出來たもので、いづれは在倫敦日本人中でも通を以て任ずる人が、日本の大工に命じて指させたらしい好み。即、床の間があつて、その違ひ棚ともあるべき所を、下部はストーブに設へ、上部には黄銅の置物などを置き、窓は、大きさは普通の西洋窓の大きさであるが、そのガラスに小い棧を置いて障子に見立てた磨硝子入り。入口が一つある。欄間、鴨居とも云ふべきあたりに、或は釘隱し、或は透彫をあしらつて、覺束ないながら日本の空氣を此の西洋間の中に籠らせんとした苦心が見える。但し、書卓や、安樂椅子、腰掛などは普通の西洋物。

飾箪笥には「日本法制史」とか「近代偉人列傳」と云つた書籍や「太陽」の臨時增刊などが疎らに並んで、その間に漱石著書、荷風著書の類が手垢に摩れた表紙脊を露してゐる。中央の卓には一と月程前の「時事時報」、「朝日新聞」などゝ、「文藝倶樂部」、「太陽」、「中央公論」其他の雑誌が、これも頁の端

を纏れ〳〵にされて積まれてある。

午後三時

午後三時である。

倶樂部員の集つて騷ぐ時刻では無い。しんとした此の客間の向うから、昇降器の扉をヂャランと閉ぢてこなたへ出て來る日本人が二人。一人はうつとりとしたやうな、顏の大きい、然し瘦せた四十位の男で、今一人は眉毛の薄い、まばらな髮の毛を長く延ばした三十四五の小柄な男である。入つて來ると小柄な男はどつかと安樂椅子に身を落して、息を吐く。瘦せた方ものつそりと腰を掛け、肱をついて天井を見上げる。一寸沈默。

開け放した入口から給仕女が入つて來る。廿位の美人。色が白いので、黑い給仕服、白い前垂(エプロン)が非常に似合つて、一層魅力を生ずる。來客二人の方を見たが、その小柄な方のと目を見合はせると、ニコリと笑つて、片目を瞬(まばた)きして秋波を送る。

服部　山座君、これが僕の(マイ)メーブルだ。ね、メーブル、さうだらう。一つお茶でも持つて來て呉れないか。他(ほか)の奴等はどうした？

メーブル　今日は私一人。

と、山座にも色氣のある挨拶をして去る。挨拶されると、山座もうつとりとした目を見張つて、辭儀を返す。

山座　服部君、あれが君の所謂日本語學者のメーブルか？　なる程、日本人好きのする顏立だ。

服部　その日本人向きな所で有象無象が思ひを寄せるから滑稽さ。日本へ歸ると萬事西洋崇拜で、身にも適(そぐ)はぬ洋服を伊達に着て、細身のステッキを抱へて歩いてさ、それで時たま銀座邊で不美人極る西洋人に逢つても、「あれは伊太利の女に相違ない。あの胴衣(ボディス)の形がいゝ」などゝ云ふ奴等が、案外、君、外國に居る中は日本戀しやで、日本の女や日本式の物ばかりに目をつけるから妙ぢやないか。

山座　この部屋も大分日本式だな。

服部　これは倶樂部の副會長、領事何某君の案だがね。

山座　道理で。

服部　領事なんと云ふものは、その派遣先の國へ行つ

て其處へ日本まがひの物を左右に集めて得意にしてゐるのが多い。云はゞ小間物屋の手代だね。それに加へては外國都市私娼制度研究か。僕等のやうに私費で無くて、官費でやるだけ羨しい。

山座　官吏は命令を受けない事を官費でやるので立身するのだ。君等畫家が、繪を描かない爲めに洋行するやうなものだらう。

服部　自分の專門の事を調べる位なら洋行しない方がいゝ。若し自分の專門を調べる爲めにしか洋行しないものとしたら、君等文學者なんかゞエッチラオッチラ外國くんだりへ出て來るには及ばない。日本に居る方が餘程豪くなれる。僕なぞは繪は描かないとしても、私娼制度研究に至つては敢て官費で活動する領事に劣けは取らん。西洋の女でも結局日本のと人情は同じさ。

山座　人情論を君と僕と二人きりでしても詰らない。さう云ふどうでもいゝ論はなるべく大勢の前でする事。

服部　うむ。大いに領事の前なんかで論じてやらうと思つてゐる。奴はあのメープルに非常に熱心なので、それが、理由はと云ふとあの女の顏が日本式だからだと云ふのだ。憐むべき男だね。

山座　それを君が憤慨するにも當るまい。

服部　憤慨！　勿論憤慨なんかするものか。米國のやうに周圍が人足の集り、我利々々亡者の塊りならば喧嘩も憤慨もする機會があるが、此處ぢや駄目だね。英國人その者が寐てゐるんだから、來てゐる日本人もみんな寐てゐる。勉强するのも、戀をするのも、酒を飮むのも寐てゐながらしてゐる。吾々は他と同化し難い人種だと云ふが、一面吾々程己が田に似た穴を見つけて潜り込む人種も無い。え、今倫敦にゐる奴で誰がハキハキした行動を取りうる？　何奴も此奴も「全くな！」などゝ女の使ひさうなお上品な英語を喉からスーッと出して、うつかりぽんとして

る奴ばかりぢやねエか。

山座　（うつとりとした目を上げて）大分卷舌になつたね。それが君の佛蘭西仕込の達辯かね？

服部　巴里も面白くはないが、倫敦よりやいゝ。あながち淫賣宿(オアー・ハウス)が多いと云ふんぢやないが、此處よりや公然許されてるだけでも心持がいゝからな。一般に認められてる。此處の奴ア、土地の奴も日本の奴も妙に表面(ウワベ)を紳士氣取りでゐるのが氣障(キザ)だよ。

山座　表裏のある所に道德の生命はある。

この時メープルが盆の上へ急須茶碗二つ載せて持つて出る。その手を輕く服部取つて、

服部　ね、メープル。この山座さんは僕の親友で、日本では有名な小說家だから大いに尊重しなくちやいかんよ。何時もお前の事を褒めて話してゐるんだ。（メープルは腰衣(スカート)を捷取つて古代な氣取り方をしながら、打笑んで兩人に改つた挨拶）　お前を女主人公にして巧(うま)い小說でも書いて貰つたら嬉しからう。名が日本へまでも傳はるわけだ。

メープル　（山座に）宜しく。服部さんは私の肖像を描(か)いて下さいます。

服部　ね、君、可憐な少女だらう。

山座　（じつとメープルを見詰めたまゝ）　うむ。

服部　（メープルに）　今度の土曜はお前の非番だね。どうだ、デェーリー座(セヤター)の晝興行(マチニー)へ行かないか？　行くなら切符を明日(あした)買つて送つてやらう、え？

メープル　（服部の椅子の肱に腰かけて）　嬉しいわ。

服部　（その手を握つて）よし、ぢや定(きま)つた。山座さんも一緖にするから、誰か今一人友達を連れて來ないか？　それから四人で角茶店(コーナー・ハウス)へ行つて茶を飮まう、え、よからう？

メープルは椅子の肱に腰かけたまゝ服部の頭を抱へて、身體を前後にゆすつてゐる。山座は手持無沙汰に卓上の雜誌を手に取上げたが、何か興味ある物を發見したらしく熱心に見入る。

メープル　角茶店(コーナー・ハウス)の音樂は餘(あんま)り上等ぢや無いぢやありま

せんか。

服部　ぢやハッチエットへでも行かうか。然し、あそこへは懐ころの持合せが無いので、ハイド公園の散歩もしたくないと云つた風のクシヤ〲令嬢が氣障な男を連込んで來るので胸糞が惡くなる。いつそ支那料理屋へ行かうか？

メープル　眞平、眞平！　支那料理屋へは副會長さんと一緒に行つて、二三日お腹を痛くしました。それに印度人が澤山來るから胸がなほと、惡くなります。何故東洋人は獸物見たいな無作法な人が多いのでせう？

服部　印度人と一緒にされちや溜らん。

メープル　（思出したやうに）あなたの繪はアキヤデミーへ出ますか？

服部　（薄ら笑ひをして）まだわからない。（すぐ話頭を轉じて）副會長は近頃も來るか？

メープル　昨夜も見えました。

服部　歡迎會でもあつたのか？

メープル　いゝえ。

服部　又カフエ・ド・ユーロツプで飲んだ歸りだらう。

メープル　でせう。

服部　夕方になるたア彼處で女を探してゐる。奴等全體一日何を暮らしてゐるのだらう？

メープルは一寸肩をすくめたが、折から雜誌の上越しに二人を見てゐた山座と目を見合はすと、テレ隱しの笑顔を見せ、二人の飲干した茶碗を取上げて去る。

山座　吾々も何をしてゐるか分らないぢやないか。十時過に起きて、新聞を讀んで、晝飯を食つて、公園か河岸を散歩して、お茶を飲んで、活動寫眞を覗いて、夕飯を食ふ。夜はお定りのやうにピカデエリーを歩く、と相場はほゞ定つてゐる。たまにハムステツド丘に公開共同密會所の設場かあると發見する位が新事象。凡俗吾々にして然りとすれば、公務多端な仁に至つては尚更ら何をして暮らしてゐるのか分

らなくなるわけだ。
服部　然し倫敦には實に活氣が無い。女の戀にも熱が無い。例へば今のメーブル如きにしても、あれ程僕を慕つてゐるに拘らず、僅に椅子の肱に腰かける位が關の山。あれが佛蘭西の女でゞもあらうものなら、君がゐようが何しようが、すぐに首つ玉に噛りつくのだが、溫厚ぶつた英國人氣質の餘弊は戀にまでも及ぼしてゐる。
山座　あの女は專門家(プロフエツシヨナル)ぢや無いぢやないか？
服部　そこが可憐な處でもある。
山座　あの女とはどうして知合になつた？
服部　女と知合になるのは一種の神秘だ。
山座　兩親はあるのか？
服部　有るだらう。有るとしても地方に住んでゐるに相違ない。僕の所へモデルに來た時分から知合つたのだ。
山座　「花は育つる事難く、摘む事易し。」
服部　まだチェルシーの畫室にゐた頃だつた。雨のる日コト〳〵僕の畫室の戸を叩く奴がある。まだ起きたばかりで寢卷のまゝでゐたから鍵の穴から覗いて見ると、寒さうな姿をした娘が三人揃つて立つてゐる。金は無し、どうせ描く氣も無いから斷つてやつたのだが、どうか云ふ拍子で來るやうにしてしまつた。
山座　あの娘一人に熱心な程初心(うぶ)な君でもあるまい。
服部　勿論無い。瞬間に燃え、瞬間に消える戀。君も文學者だから解るだらうが、外國に遊ぶものゝ心意(こゝろい)義(き)はそれで無くちやなるまい。この娘を思ふと云ふのも、彼(あれ)が僕に對するその純な戀に感ずる當分の感謝だ。僕は嘗て貴婦人に戀した事もある。
山座　日本でか外國でか？
服部　外國で。手に入れられる者を戀する必要は無い。伯林の夏の湖上に、夕日を脊にして輕羅を纏つて棹さす美人の四肢は云ふまでも無い、薄毛迄も見え透

く姿を女神の如くに眺めて、我が筆及ばずと感じた事もあつた。その時に僕が取つた寫眞が何處かの隅にまだ藏(しま)つてある筈だ。

山座　大分アナトール式だな。

服部　え？

山座　目下の戀の對象は此の娘だね。

服部　可憐な少女！　シェフワードブッシに移つて、僅に一志(シリング)を漁つたり、或はケニントン公園街(パークロード)に六片(ペンス)の安女(コスダース)を見つけて喜んだ時分にも、メーブルは別物だつた。モデル臺から降りて、そのまゝ水道栓を扭つて茶の支度をして呉れた事もあつたつけ。

山座　聞ひてると畫家の生活は羨しさうに響くね。

服部　繪の鑑賞には東西の別が無いやうに……

山座　畫家の戀にはモデルの別が無い。

服部　君は日本では大分發展してゐたのに、英國(こちら)へ來てからは一向に活動しないぢやないか？

山座　(苦笑して) 言葉も通じないし、それに金が十分無くちや何にも出來ない。得んとして得られざる苦しみだね。

服部　心細い事を云ふね。言葉の出來ない位が何だ。僕の知つてる男で、伯林で友達に案内されたが、獨逸語が解らないで、おひけになつてから、女の云ふ事を一々隣室の友人に通辯して貰つたと云ふのさへある。まして金！　金を持つて洋行する者が有るか？　有れば陸海軍人か、牛津(オックスホード)入りの華族の低能兒だ。現に僕を見給へ、英語は更らに分らず、金は更らにない。ところが藝術の難有味だ。

山座　畫室の難有味だらう？

服部　あのメーブルを讓らうか？

山座　お古は御免蒙らう。

服部　日本人を相手にする女にお古で無い者があらうなど丶思つたら間違ひだ。外國の事は僕の方が委しい。

山座　然し、あの女は可憐だとか、領事如きにとか云

つてたぢやないか？

服部　いや眞實僕を思ひ、信じてゐるからさ。勿論あれだつて今迄に他の者に接吻した事もあらう、これからも接吻するだらう。

山座　君に對してと同樣に。

服部　いや、屹度違ふ。僕が女の心中を探りえぬ程初心な者でも無い。

山座　それをどうして棄てるのだ？

服部　棄てるのぢや無い。彼に新を求めさせるのだ。僕は今夜巴里へ行く。

山座　巴里へ？　どの位？

服部　分らない。

山座　然し美術院へ出した繪の結果はもうすぐ定る頃だらう？

服部　左樣。然し當選の氣遣ひは無い。

山座　當選の氣遣ひの無いものをなぜ出したのだ？

服部　當選しなくても僕の故ぢや無い。

山座　何故？

服部　ページに描いて貰つて、僕が署名して出したのだから。

山座　無名で出したら當選したらうに。

服部　それで今日は引合せるつもりで君を此の日本倶樂部へ連れて來たのだ。

山座　いゝ氣なものだ。承諾も無しで。

服部　不承諾な君でもあるまい。

山座　それで君は巴里へ行つてどうしようと云ふのだ？

服部　わかるものか。

山座　何時行くんだつて？

服部　今夜。

山座　もう四時近くだ。支度はしてあるのか？

服部　してある。

山座　見送らうか？

服部　いや。

山座　メーブルは知つてゐるのか？

服部　どうだか。

山座　それで僕を見込んで女を頼むのだね？

服部　まアさうだ。君なら大丈夫だらう。兎に角領事なんかに近づかさせないように、多少可憐な趣を殘すやうにしなければ、僕が多年佛英を漂浪した中で發見した唯一の花の幻像（イリユージヨン）が破れるからね。

山座　幻像（イリユージヨン）は破れるから樂しいのだ。

服部　（鈴を鳴らして）宜しく賴む。

山座　然し僕の借した金は返して呉れないと困るぜ。僕自身借りてる位なのだから。

服部　それは巴里へ着いてから屆けるよ。あちらには仲間も多いんだから。ぢや僕は失敬する。

メーブルが出て來る。

おい、山座さんにコーヒーを持つて來てお上げ。それから僕は歸る。土曜日には晝興行（マチニー）を忘れちやいけないぜ。

脱兎の如くに服部は去る。

山座　メーブルさん、服部さんはあなたの肖像を美術院（アカデミー）へ出したんですか？

メーブル　（卓上の雜誌を片づけながら）えゝ。

山座　當選しさうですか？

メーブル　當選しますまい。

山座　何故？

メーブル　日本人のは大概當選しません。（雜誌の一つを取上げて、寫眞を見つけ）この寫眞はあなたのですか？　ミスター山座？

山座　さうです。

メーブル　此の雜誌へ何かお書きになつたのですか？

山座　ふむ、小說を書きました。

メーブル　日本の？　外國の？

山座　倫敦を中心として。

メーブル　どの位倫敦にゐらつしやるのです？

山座　二た月。

メープル　その短い間によく倫敦の事情がおわかりですね？

山座　詩人は居ながらにして名所を知ると云ふ諺が日本に有ります。

メープル　ではわざ〳〵來ないでも小說位書けさうなものですね。

（山座暫らく默したが、その雜誌を投出して、）

山座　服部さんは今夜巴里へ行くさうだ。

メープル　さうですか？

山座　土曜に晝興行(マチニー)へ行けないよ。

メープル　さうですか？

山座　服部さんは隨分いろ〳〵な女の經驗があるらしいが、あなたが一番氣に入つてると云はれてゐたよ。

メープル　さうですか？

山座　巴里へ行くのも何か都合があるからだらう。

メープル　巴里と倫敦を行つたり來たりして稼ぐのは畫家と娘(ガールス)等です。

山座　倫敦の畫室はどうして行くのだらう。

メープル　家賃も何も拂はずに逃げて行つたのでせう。

山座　へえ？

メープル　繪具屋にも額緣屋にも澤山借りがある人です。

山座　そんな人を賴みにしてゐたのかね？

メープル　賴みになんかしてゐやしません。

山座　では何故親しくしてゐたのだ？

メープル　日本人は親切ですね。女の云ふ事は大概聞いて吳れますね。可愛らしい人が多う御座いますね。

山座　姉(ねえ)さん、君は何歲(いくつ)だ？

メープル　十八。

山座　君の家(うち)は何處だ？

メープル　王の辻(キングスクロス)。

山座　服部がゐないから、今度の土曜には私がデェーリー座(セヤター)へ連れて行かうか？

メープル　どうぞ。今日(けふ)は之から私は暇(オフ)になります。

山座　うむ、ぢや今日も何處かへ一緒に行かう。

メープル　難有う。けれども今日は先約が有りますから御免下さい。

山座　何處へ？

メープル　何處へですか。

山座　誰と？

メープル　領事さんと。ぢや御免下さい。

メープルは服部に云ひつけられたコーヒーを持つて來るのを忘れたか、そのまゝ去る。持つて來て貰つても、どうせ其の代は山座が拂はねばならぬのであるから、勿論欲しくはなかつたらうが、殘された山座は以前の雜誌を取上げ、さて自分の書いた外國小說らしい處をぢつと見てゐたが、やがて卓上に投げ出して、首を振り〳〵之も出て行く。

午後十一時

日本倶樂部の門限を尋ね給ふな。兎に角同じ部屋の夜十一時過である。卓上に在る日本の丸行燈に似せた笠の冠つた卓上電燈だけが一つ光つてゐる。

給仕女メープルが忙しさうに卓上のコーヒー茶碗を取片づけてゐる。向ふでは昇降器に乘つて歸つて行く日本人の聲々、扉の開閉の音、待ちかねて階子段を驅下る靴音などが聞える。

暫くあつて若い廿歲位の面長な、色の蒼白い、而し目はどんよりとした青年が醉歩の態で入つて來たが、餘程の酩酊と見えて、長椅子までやつと辿り着くと、そのまゝゴロリと横になつて寐てしまふ。

續いて、戶を蹴飛して入つて來る赤ら顏の肥つた男が、これも醉歩の態でメープルの方へ近寄ると、突然猿臂を延して女の肩をつかむ。

都筑　おい、もう皆歸つたか？

メープルは笑つたまゝ男の顏を見てゐる。

歸つたかと聞いてゐるのだ。え、何故返事をせん？

肩を両手でゆする。女はその劇しい衝動に快感でも覺えるかのやうに、矢張り笑つたまゝ立つてゐる

おい、默つてゐないで返事をしろ。

イラ〳〵して手ひどく突飛す。女は危く若い男の寐てゐる長椅子に倒れかゝらうとしたが、やつと踏止つて、摑まれた肩を撫でゝゐる。

馬鹿め！

と、安樂椅子にどつかとなる。

メーブル　都筑さん、又始りましたね。自動車を呼びませうか？

都筑は深い溜息をついて、じつとメーブルの顏を見詰めてゐる。

お歸りなさい。

都筑　（又溜息をついて）歸つても詰らん。

メーブル　おや、何處かへお泊りなさい。

都筑　泊つてもつまらん。

メーブル　變手古（ファンニー・ボーイ）な人！　まだ足りないんでせう。向うでもう少しお飮みなさい、え？

醉つた目を見据ゑてゐた都筑は、頭を搔きむしつて、立上ると、矢庭に今コーヒー茶碗類を持つて去らうとする女の髮の毛を引摑む。不意なので女も思はず聲を上げて、持つてゐた盆を落す。髮の毛は亂れた。そのすさまじい物音に、長椅子に寐てゐた若者は目を醒まして首を上げる。戸口からは廿四五の血色のよい日本の女が顏を出した。都筑は身を持て餘したかのやうに兩手で膝を叩いて、又どつかとなる。顏を出した若い日本の女が口をきる。

青井　（誰にとも無く）どうしたのです？

メーブル　いえ、何でもないのです。一寸お盆を落しました。さ、都筑さん、あちらへ行きませう。

と、壞物を拾ひ上げて何氣なく戸口から去る。都筑は顏を上げて、今まで氣附かなかつた若者に目を止めると、非常に驚いて、

都筑　や、七條君、君はまだ居たのか！（戸口の日本娘にも驚いて）や、青井さん、あなたもまだ歸らなかつたのですね？

青井　はい、手袋を何處へだか置忘れましたので、探してをります。

都筑　はアさうですか。餘り遲くならん中にお歸りなさい。

青井　難有う御座います。

都筑は去る。青井孃は部屋に入つて椅子の上などを探してゐたが、七條に近寄ると、

どう遊ばしました？　お苦しう御座いますか？

七條　えゝ、少し飮み過ぎましたから。

青井　お靡り申しませう?

七條　（身を引いて）いえ。

青井　御遠慮遊ばしますな。

と、搖椅子（ロッキング・チェヤー）を長椅子の傍に引寄せて座るので、七條は起直る。

都筑さんも大分お醉ひのやうで御座いますね。あの方がどうしてあんなに手荒な事をなさるか御了解が出來ますか?

七條　手荒な事と云つて?

青井　今もあの女給仕の髪の毛をお引毟り遊ばしたので御座いますよ。

七條　さうですか、寐てたもんですから氣がつきませんでした。

青井　お可愛さうで御座いますね。あゝして重大なお役を持つて倫敦へ派遣されて行らしつてゝも、それは人情で御座いますものね。殊に近頃のやうに薄ドンヨリした春の日になりますと一層お淋しくつてゐらつしやるので御座いますよ、屹度。それに此の日

本倶樂部にまで副會長として御盡力では並大體では御座いますまい。どうしてあゝ云ふ奥さん思ひの方を外國へなんかお出しになるのでせう?

七條　あの人は僕の父が眼鏡に叶つたと云つて英國へ遣した人です。

青井　おや、左様で御座いましたか?

七條　今も僕の監督者の地位にゐて呉れるんです。

青井　お豪いお方に相違御座いませんね。けれども矢張り外國に來ると、淋しい故で御座いませうか、氣候の故で御座いませうか、どうも何んな方も多少心理狀態に變化を來すやうに存ぜられます。若様のやうにお若くつてゐらつしやれば格別で御座いますけれど。

七條　都筑さんが特に變つてゐますか?

青井　いゝえ。勿論私は日本ではお目にかゝつた事も御座いませんから、どう昔とお變りになつたかは存じませんで御座いますけれども、たゞ、あゝ責任は

有りなさるし、戀しい奥さんをお國にお殘しですと、淋しさの餘りについ御酒も召上りませうし、求めて得られない愛情の缺乏にイラ〱して、居ても立つても居られない、何かから思ひ切り手荒い、殘酷な事をしないでは落着かれない氣分になるものだらうと思ひます。さう云ふ變調を來すのは都筑さん位の年齡の方に多う御座いませう。

七條　平常(ふだん)はそんな事はありませんがね。

青井　御酒を召すとで御座います。私が日英博覽會へ參つた頃には今程激しくは無かつたやうに存じます。強い外國の御酒を上りますと、矢張り多少性質上にも西洋式の血液が增加致しますものかも存ぜられません、オホヽヽ。

七條　あなたは博覽會に見えたのですか？

青井　日本音樂の彈奏に參りました。音樂學校を卒業致しますと、すぐ選拔されまして博覽會へ參りましたが、どうも品性の下等な者ばかり多いのには驚きました。あゝした無教育な者を海外へ出すのは國家の爲めに愁ふべき事だと存じます。その時參つた者で歸りもやらず今も倫敦市中に止つてをる者も御座いますが、米國ならいざしらず、英國では比較的紳士らしい日本人ばかりゐますだけに、非常に目立つやうに存じます。

七條　あなたもずつと當地(こちら)に？

青井　いゑ、私はその後露西亞、佛蘭西、墺太利邊に招かれまして彈奏致して參りました。日本の女の藝術家は滅多に歐洲へ參らないもので御座いますから、何處(どこ)へ參りましても停車場迄新聞記者が詰めかけて參りまして、寫眞を取つて麗々と新聞に掲げますので御座いますよ。切拔帖が三冊も出來てをります。何時か御散歩のおついでも御座いましたら、どうぞ是非お立寄り下さいまし。お笑草にお目にかけませうで御座います。只今は、ハムステッドの地中鐵道(テューブ)の終點でお降りになつて左へ〱とついて行らつしや

いますと庭園市街(ガーデンシチー)と呼びならはされてをります區劃の五十八番にをります。當分倫敦においてゞ御座いますか？

七條　まだ分らないんです。此の次の月曜あたりに歸らなくちやならないかも知れないんですが。

青井　牛津(オックスホード)は今は宜しう御座いませうね？

七條　いゝ景色になりました。

青井　日本人が餘程在學してをりますか？

七條　五人程居るようです。けれども餘り交際しないからよくは知りません。

青井　左様で御座いますね、その方が大丈夫で御座いますね。兎角外國にをりますと日本人が怖ろしう御座います。日本にをりました頃には、外國へ行つたらさぞ日本人が戀しからう、途中で逢つたら、よしんば全く見ず知らずの者同志でも、同國人のなつかしさに握手をするだらう、位に存じてをりましたが、さて、參つて見ますと丸で逆で御座いますね。何となく馴れ〳〵しく言葉でもかけて利用でもされやしないかと心配の方が先に立ちます。殊に私共婦人になりますと心細さも御座いますし、腕に藝があるとは申せ、そこは女の事で御座いますから、何となく淋しくつて、本當の音なしいお友達が一人でもいゝから欲しいものだとつく〴〵考へ込みますの。栗(チエスナット)の花がホロ〳〵と散るのを眺めながら、から自然と涙を流す時もありますわ。女づて者は弱いもんですわね。

話し續けながらも青井孃は、その座つた搖椅子(ロッキング・チエヤー)を靜に前後に搖る。卓上の電燈が思ひなしか少し暗くなつたやうである。七條は止むをえず口をきく。

七條　さうですかね。僕は若いからかまださうつく〴〵感じた事はありません。

青井　でも、おいでなすつた當座はお淋しかつたでせう？　今だつてお國の姉さまやお妹さんや、お母ア(かあ)さまのお優しい胸を戀しいとお思なさる事がたまに

は御座いませう？

七條　そりや無いでもありませんけれど‥‥

青井　お有りでせうとも。それでも殿方はよう御座いますわね、あなたのやうに御苦勞も何もない方になりますと何を御覽なすつても愉快でせうね？　本當に活々としたいゝ御血色をしてゐらつしやます。

七條　あなただつていゝ血色ぢやありませんか？

青井　あら、いけませんの。これは腦溢血になる性質ですつて。今日此頃の春先はなほと熱せていけません。（近寄つて）外國に來てゐらつしやる中はお身體をお大事に遊ばせよ。あんまり御酒も上らないでね。（七條の手を取つて）こんなに柔い、白い手をしてゐらつしやるのですもの。朱に染みもし、黑くもなりますわ。ですから心配ですの。

七條　（手を引いて）僕あ大丈夫ですよ。

青井　本當にお愼しみなさいね。でないと折角の若樣が臺無しになつてしまいますわ、オホヽヽ。（立上つて）御氣分はいかゞ？　何でしたら自動車で御一緒にお宿までお供しませうか？

七條　いえ、餘程よくなりましたが、まだ少しふらついていけません。

青井　（又座つて）ぢやも少　お話してませう、いゝでせう、ね。

暫く兩人氣味合で無言。もう夜も更けて行くので、ピカデエリー邊の酒場は知らず、この日本倶樂部は森閑としてゐる。青井は手に觸れた「太陽」を取上げて見る。七條は少し寒くなつたかして洋服の襟を立てゝ、ソフアの上に掛けた縫模樣のある絹布を取つて兩膝を包んだ。

青井　（ゆるやかに椅子を揺りながら）「太陽」の浮田先生の御論をお讀みになりましたか？

七條　いえ。

青井　流石に浮田先生はお豪い方ですね。

七條　何故です？

青井　此處には國家の人口繁殖に就いての御論が出て

ゐますが、目下の日本では一寸珍らしい御意見で、私は誠に卓見だと存じます。あの方のお講義は女子大學にゐる時承りましたが、日本にもあゝ云ふ先生がゐられるかと思ふと心強く感ぜられます。

七條　女子大學で？

青井　えゝ。

七條　その「太陽」の說と云ふのは何です？

青井　餘り國家の人口を繁殖させ過ぎるのはいけないから調節の要があると云つた大意です。實際さうですね。どうも日本ではまだ避姙と云ふ事を頭から罪惡のやうに感ずる習慣があるのは、つまり社會道德の根底が判定してゐないからでせう。避姙の研究は歐米(こちら)の社會では大變に發達して、大概の婦人がその知識を持つてをるやうで御座いますよ。日本の婦人も人種上の見地からしても、もつと其れに深い注意を拂つてよいと存じます。

七條　（いよ〳〵膝を縮めて）さうですか？

青井　もつとも日本から行らしつて、すぐ牛津(オツクスフオード)へお入りになつたお若い方では十分まだ西洋の御事情を御觀察なさるお暇(ひま)が御座いますまいね。私だつて十分には存じませんけれど、これからは御一緒に研究致しませうね。

七條　（咽が詰って）は、はア……

青井　倫敦のお宿は皇后門(クヰーンスゲート)のホテルでゐらつしやいましたね？　ホテルの方が自由でよう御座いますね。素人屋や何かですと、內面では隨分いかゞはしい事をしてゐても、世間體(てい)があるので、若い男の所へ女の訪問客でもあると妙な顏をして見せます。そこへ行くとホテルは自由でよう御座いますね。どんな遲くに、どんな客が來ても迂散臭い顏もしなければ、小理窟も並べませんから。（立上つて）本當に自動車(タキシ)を申しませうか？

七條　いえ、澤山。地下鐵道(アンダーグラウンド)で行きますから。

青井　もう十二時半過ぎましたでせう？

七條　いえ、まださうはなりますまい。

青井　（七條の座つてゐる長椅子の端に腰かけて、わざと横向きで）夜風に當つてお風でも召すといけませんよ、お大事なお身體(からだ)でいらつしやいますからねえ。

七條　（固くなり切つて）難有う。

青井がもう少し七條の方へ身を寄らす時に、都筑が前よりも醉態で、蒼い顔になつて、然し、機嫌はよく入つて來る。青井は立上る。

都筑　ハヽヽ。いや、今日は滅法醉つてしまつた。（兩人を見て）二人ともまだゐるね。どうだ調子直しにもう一杯飲んで、そろ〳〵出かけようぢやないか？（手を叩いて）おい、メープル、酒、酒。それから自動車(タキシ)だ。

メープルが何か利久酒(リキユアー)を捧げて持つて出る。髮にはなほ亂れた後を殘すが、頬の桃色なのが暗い部屋の中に浮いて見える。酒を置くとすぐ出て行く。

（七條に）ね、君、今日(けふ)のやうな成功した懇親會は蓋し稀だよ。殊に今日は青井孃の如き藝術家の加はつたのは全く珍らしい。青井孃は我輩昔からの知合だからね。（グッと飲んで）さア、兩君も飲んで一緒に歸らう。おい、車はまだか？

返事が無いので、イラ〳〵して戸口へ出やうとする所へメープルが入る。

來たのか？　ぢや行かう。メープル、お前も歸るなら途中迄載せてつてやらう。

メープル　いえ、もう他の者は歸りましたし、私が跡片づけをしますから。

都筑　さうか、ぢや仕方が無い。君、七條君、さア行かう。

七條　僕は頭が重いから、散歩かた〳〵歩いて歸らうと思ひます。

都筑　さうかね。然し途中で引つかちやいけないぜ。これから君の所へ歸る町々は丁度變化(へんげ)出沒の所だから。いや、無邪氣な君にこんな事は餘計な忠告だ。

さうすると殘つたのは僕と青井さんだな。青井さん、如何です、御迷惑でなければ地下鐵道迄お供しませう？

青井　私こそ御迷惑でなければお供致させて頂きます。

都筑　さア〳〵どうぞ。（メープルに）車は來てゐるんだね？（七條に）ぢや七條君、その中やつて來給へ、例のすき燒でもやらうぢやないか、醬油と米が大分屆いたから。

七條　難有う。

都筑はメープルに助けられて、覺束ない足元を踏〆めながら去る。青井孃は又思出したやうに手袋を探し出す。その手袋は七條の座つた長椅子の片隅にある。七條はそれに氣がついて手をやつたが、さて渡さうかどうしようかと考へる。やがて思ひ切つて、

七條　手袋なら此處にありました。

と差し出す。青井孃は禮を云つて手を延して握る、と、七條はす早く手を引いて元の姿に戻る。

青井　まア、そんな所に！　道理で見つからなかつた筈ですわね。ぢやお先へ御免下さい。その中是非お遊びに行らつしやいな、可愛い坊ちやま。おや、失禮。若殿樣。（手袋を自棄に握り〆めながら、小聲になつて）單純な若樣！

と、云ひさま戸口から去る。取殘された七條は今の小聲を判然聞取らなかつたので、少し小首を傾けたが、やがて冷笑のやうな苦笑をする。

メープルが入る。金髮を垂らした阿娜姿。

メープル　ミスター七條、今日は大分お醉ひのやうですね？

七條　（青井に對するとは別人の如き態度で）醉つたよ。けれども醉つたなア僕ばかりぢや無い、都筑だつて大分醉つたらしいね。彼奴は醉うと手荒な事をして氣をまぎらすと云ふぢや無いか？　お前何だつてそんな目に逢はされて默つてゐるんだ？

メープル　弱い者が他に仕樣も何もないので、自分より

弱いと思ふ者に當る憐れな心持を察してやれば、どんなに虐遇(いぢめ)られてゐても勝利者の心を持つてゐられます。

七條　若い娘の癖にお前は利口だね。だから僕はお前だけは好きなんだ。それにお前は本當に僕の妹見たいで、日本式だよ。だから好きなんだ。好かれちや厭かい？

メーブル　（わざと思切り娘らしく）いゝえ、若様。

ほの暗い日本倶樂部の電燈の傍に、この日本式なメーブルと、若様の七條とが接吻せんとする時に、都筑何某と青井が乘込んだらしい自動車の喇叭の音がブー／＼と聞える。

メーブル　さア歸りませうね、ね？　自動車で一緒に歸りませうね？

七條は返事はせず、疲れたらしい目に笑みを含んで女を見返す。自分の鳩のやうな胸に男の頭を抱へ込みながら、亂れかゝる髪を片手で撫で上げて、メーブルは戸口へとかゝるのである。

午前十時

掃除の濟んだばかりらしい日本倶樂部の部屋は同じ部屋ながら、一杯に開けた窓からは珍らしく日本の空のような青い空が見えて、春の朝の日先が容赦なく室内に照り込んでゐる。

取片附けられた卓上から一束の日本新聞紙の封を切つてゐるは、當倶樂部の理事(マネーヂヤー)肥塚である。頭の禿上つた脊の低い四十男。そこへ名刺を持つて入つて來たのは給仕女メーブルである。肥塚が新聞を讀んでゐる後から忍び足で近寄つて、突然その禿げた頭の上へ延しかゝるやうにして接吻し、驚いて振向く男の前へ立直るとわざとらしく直立の態となつて、恭しく名刺を差出す。

肥塚　（讀んで）もう來たのか。こちらへ。

メーブルは去る。肥塚は新聞の一つを取上げて悠々と安樂椅子で讀む。暫くあつて導かれて出たのは二人の日本人である。一人は小柄な卅位、一人は腰の低い商人體の卅七位の年輩。戸口から入る時にも此の腰の低い方のはメーブルにひよこ／＼と辭儀をして「如何です？」(ハウ・ドユー・ユー・ドユー)と其の女の肩を叩いて愛嬌笑ひをする。メーブルも瞬(またゝき)をして笑つたが、すぐ去る。

肥塚　（立上り）やア、近江君、正宗君、大變お早いですな。

近江　お邪魔さま。

正宗　（氣さくを示すが如くに、叉腰を曲げて）どうもお疲れの所を失禮します。相變らず夜は御活動で、エヘヽヽへヽ。

肥塚　まアお掛けなさい。此の頃はどうです？

近江　どうも不景氣でいけません。段々諸式が高くなつて來ますね、驚いてしまいます。

正宗　然し、肥塚さんあたりにおなりですと一向御關係は御座いますまいね？　エヘヽヽ。今も南(サウス)ケンシントンにお住居で？

肥塚　さうです。

近江　倶樂部へは毎日おいでゞすか？

肥塚　いやなーに、理事(マネーヂャー)と云つたつて何もする事は無いから、ほんの遊びがてら氣の向いた時に來るばかりです。

正宗　それでも多少會員方(がた)のお出入がありませうし、會計其他のお扱ひが大變でせう？

肥塚　さア少し面倒な事がたまには有ります。

正宗　女給仕(ウエートレス)の方は如何で？　エヘヽヽ。

近江　大分艶聞が有るやうですね？

肥塚　さア、三四人も女給仕(ウエートレス)が居るといろ／＼苦情が起り、問題も起つて隨分厄介だ。殊に今のメーブルはあの通り日本人好きのする顏だし、誰も彼も目をつける。

正宗　さうでせうな。あの女は私共の近所にゐる頃から評判の別嬪でした。

肥塚　さう／＼、あれは兩君の所にゐたのだね。

近江　私共の所にゐたのではありませんが、すぐ裏にをりました。

正宗　私共の裏の窓から目と鼻の所にあります部屋で仕立屋の手傳仕事をしてをりました。近江君が大變に夢中で……

近江　僕の事にしてしまつちやいけない。

肥塚　そりや兩君とも大變だつたんだらう。

正宗　エヘヽヽ、左樣ですね、まア二人とも噂に夢中

でしたが、何分二人が女氣なしで自炊の生活と云ふ貧乏所帶でしたので、高根の花と眺めてゐましたが、どう云ふ拍子かハツミか私共の家へやつて來るやうになりましてね、いろ〳〵手傳つて貰ひました。

近江　男を知らしたのは正宗氏ださうで、大變な威張り方です。

正宗　馬、馬鹿を云つちやいけない。どうも近江君は戯談を云ひ過ぎるので困ります。苟も宗教研究に來てゐる身で、そんな事をしては大變です。ほんのハンプトン・コートへ短艇（ボート）を漕ぎに連れて行つたゞけです。

肥塚　それにしても大奮發だ。それで君等の宗教研究の方はどう進歩してゐるんだ？

近江　さア、それで實は困つてゐます。

肥塚　いゝ研究方法が無いと云ふんですか？

近江　いえ、さうでは無いんですがね。

正宗　お話しすると長い事になりますが、どうも人の心程賴みにならない物は御座いません。どうにもかうにも仕樣が無いんです。

肥塚　何か出來事でも起つたんですか？

近江　えゝ。

正宗　私共今度パトネーを引拂ひました。

肥塚　へえ、ぢやどうするのです？　下宿屋へでも行くんですか？

近江　さア、それで御相談に上つたのですが……

正宗　どうも諸式が上つて參りましたね。エヘゝゝ。

肥塚　然し、君等のやうに二人で自炊してゐれば、恐らく倫敦へ來ての生活としては一番安價にやつていけさうなものぢやないか？　全體どの位づゝかゝつてゐる？

近江　隨分ひどいもので、お耻しい事です。

正宗　まア週に十二志（シル）見當になりませうか。

肥塚　（目を丸くして）二人で？

近江　えゝ、二人でそれなんですから、大概お察しが

つきませう？

肥塚　十二志と云つたら、君、一人前三圓、月にしても日本の十五圓とはならんぢやないか？

近江　勿論家賃は別ですし、米、醬油、鑵詰類は日本から送つて吳れます。

肥塚　それにしてもさう云ふ生活をしてゐれば倫敦生活も安いものだ。

正宗　私共のは自炊だからですが、一人で下宿してる日本人にも一週十二三志でやつてゐるのがあります。部屋代が一週四志か五志で・・・・

肥塚　どんな處に部屋を貸りてるのだらう、そんな人は？

近江　チエルシーの裏通りです。

肥塚　それでも外國にゐたいのかね？

正宗　日本にゐてもする事が無いからです。

近江　いえ、歸りたいにも歸る旅費が無いからです。

正宗　私共がそれなのです。

肥塚　然し、君等僕に金を貸せと云ふのぢやあるまい？

正宗　エヘヽヽ、お貸り申したいのは山々ですけれど、まだそれ程御迷惑はおかけ申したく御座いませんので。

近江　お金には・・・ねえ、正宗君。

正宗　全く。

肥塚　ぢやその他の事で何か相談があるんだね？

正宗　まアざつとお話しゝなければならないのですが、私共が宗教研究の目的で固い決心で、近江君と共々妻子を殘して十年計畫で乗出して來ましたのも國元から多少の送金があるから。まア一斤のバタを半斤で濟ますと云ふ風に儉約して行く決心でをりました。

近江　隨分苦しい時があります。

肥塚　それは大體は知つてゐるが、急にさう切迫したわけは？

近江　それは少し前に日本から私共の友人がやつて來ました。

正宗　夫婦連れで。

近江　私は神戸に居る時分に一寸英語を教つた關係もありますし、夫婦連れではあり、幸ひ私共の家は二階も空いてゐますから、正宗君とも相談の上家へ泊めました。

肥塚　はア。

正宗　ところが其の男と云ふのが仕樣の無い者で、細君と一緒の癖に、英國へ來るとすぐ妙な西洋婦人と關係をつけて、殆んど家へは歸つて參りません。

その時メーブルが茶を持つて出て來る。女が出ると三人とも口を噤んでその顏を見詰める。女は茶を卓上に置いて、つゝましやかに、誰にも目をくれずに去る。暫く沈默。

肥塚　メーブルは諸君の所にどの位手傳ひに行つてゐた？

正宗　ほんの少し。兩親が「外國人と立入つて交際するのは反對する」とか申して、參らなくなりました。

肥塚　成程。（話を元に戻して）それで今の君の所に來た男の名は何と云ふ？

近江
正宗　山田。

肥塚　それで？

近江　私共は出來るだけの事は盡して、自分等の部屋も山田夫婦に讓り、食物も注意して世話をしてゐましたのに、段々威張り出して、私共の持物も何も買始めると云ふ有樣になりました。

肥塚　その女とは何處で知合になつたのかな？

正宗　何でも例の烏龍茶店の給仕をしてゐた女とか云ひます。

近江　私共は彼處へ入つた事がありませんから知りませんが、日本の娘が給仕をしてゐるとか聞いてゐますが、西洋の女もゐるんですか？

肥塚　日本の娘は今は二三人で、あとは皆西洋人だ。

あのメーブルもつひ近頃迄あの店にゐたんだが。

正宗　さうださうですね。

肥塚　それで?

近江　細君と云ふのが之も妙な女で、亭主の肩ばかり持つて、有る事無い事を云ひます。

肥塚　山田と云ふのは毎日出歩いて、細君ばかり殘して行くのですね?

正宗　(氣味惡げに近江と顔を見合せて)左樣で。(と云つて、突拍子も無く附加えて)エヘヽヽヽ。

肥塚　(聰明な顔)成程。

近江　段々私共の金も諸道具も、無い上に尙無くされて遣切れませんから、兎に角別居する事にはしましたが、日本の方へも何か無根の事を吹聽したらしく、どうやら送金も無くなる鹽梅。

正宗　全く大變だ。

近江　全然困り切らない中に、何とか方法を講じたいと思つてゐます。

肥塚　方法を講ずると云つて?

近江　何か仕事をえたいと思ふんですが……

肥塚　成程。

正宗　近江君は少しは英語も出來るんですから、米國へでも行つたら宜しいのですが、費用は兎に角、手續や何かが大分面倒らしいやうですね。

近江　今手元にある金をすつかり使つて、自動車の學校へ入つて、運轉手にならうかとも考へたのですが、若し此の倶樂部に何か役はお有りではありますまいか?

正宗　私は又若し何處かお心附きがあつて、御紹介を願へれば格別、さも無くば仕方が御座いませんから、何處かへ料理方(クツク)に入らうかと思つてをります。

肥塚　米國ぢや働き口が多いようだが、倫敦あたりではどうかな。それに日本人の勞働者が增すのは領事や何かゞ喜ぶまい。

近江　けれども、どうも「脊に腹は」で仕方がありま

せん。日本への旅費が出來れば格別。

肥塚　さア、かうつと。勿論僕にも分らんが……一寸待ち給へ。

と、出て行く。正宗と近江とは立上つて室內をあちこち見廻したり、窓から首を出して、春の光を浴びながら往來する人々を見下ろしてゐたが、床の間の前に立止つた正宗は振返つて、

正宗　かうした日本風の所へ住込んで、あゝした日本式の女と話し合つてゐたら、それこそ外國の苦勞も忘れるだらうね、エヘヽヽ。

近江　(嬉しさうに) さうなりやいゝがな。

正宗　メープルは肥塚とも (手眞似をして) これか知らん？

近江　何とも云へない。けれども僕等に對してた程の眞實さは持つてやしまい。倶樂部の會長だとか理事だとか云つても、一皮剝けば同じ穴だし、殊に宗敎心も何も無い連中の洋行者はみんな旅の耻は掻き棄てとやるんだからね。

正宗　あれは肥塚さんぢやないか、何處かで飮んで醉つた揚句に、自動車で一緒にホテルに乘込まうとした車の中で懷中の物根こそげ取られて突放されたのは？　鼻の下の長さうな男だね。

近江　そりや此處の副會長の事だらう。副會長だから成るべく內密にしてあるのださうだ。肥塚のは、例の電車の中で横目を使はれたので女の後を追つてシエフワード・ブッシ迄追いて行つて戸口へ入らうとすると、中から亭主が出て來て面喰つたと云ふのさ。馬鹿な連中ばかり揃つてる。日本だつたらとてもお話にも何もならない。

正宗　然し、その外國だから僕等もあんな男に口入れを賴んでるんぢや無いか。あの男はつひ先日迄山中の店で働いてたよ。これで都合がつけば毎日々々雇入周旋所へお百度を踏んで、日本人の顏を汚さなくても濟むわけだが……

肥塚が入つて來る。二人は默つて其の顏を打守る。肥塚は考へなが

ら青草へ近寄り、座つて、書き始める。沈默が續く。
やがて下から昇降器の音がすると、二三人の氣合がして、ガヤガヤと物語りながら帽子や杖を置く一種の化粧室兼帯の次の部屋に入つた樣子である。

近江（待ちかねて）如何(いかが)です？

正宗　何かうまい事は御座いませんか？　エヘヽヽ。

肥塚　兎に角此處にはありません。

近江　では、どちらへか御紹介を願へますので？　難有う存じます。やるとなつた以上十分努力してやります。「身を殺して仁」と云ふのは畢竟宗教の本義で御座いますから。

肥塚　いや……

と、云ひかける所へ若樣七條と都筑と、文學者山座とが入つて來る。何れも朝禮服(モーニング・コート)に手袋の出立ち。
都筑を見ると肥塚は立上つて恭しく挨拶する。

お早いおいでゞ御座います。

都筑　僕は時間は正確な方だ。まア外國へ來て得る一番いゝ習慣の一つは時間の正確と云ふ事だらうね。何しろ今日の午餐會は遲延すると七條君の出發に間に合はんからな。それで君、一寸話があるんだが……

と、肥塚を連れて去る。近江と正宗とは直立の姿勢で室の片隅に立つてゐる。山座は七條と向合つて座り、

山座　まア、しつかりおやんなさい、くよ／＼しないで、ね？　若い中は花でさ。

七條　そりやあなたのやうに詩人的に世の中を冷眼視してりやいゝんですけれど……

山座　詩人は世の中を冷眼視しやしませんよ。

七條　けれども大概洋行してる日本の文學者は僻見を抱いたり、先入見に囚れてます。

山座　さう云ふのもありませう。（傍の二人に氣がついて）や、お座りなさいな。あなた方は會員ですか？

近江　いえ。

正宗　私共はこちらの肥塚さんにお願ひがあつて上つたもので、エヘヽヽ。

山座　あゝ、さうですか？　何か御研究ですか？

近江　宗教研究。

山座　さうですか。宗教研究と云へばつまり人情研究に外ならない。どうです倫敦の美人研究は？

正宗　御戯談を、エヘヽヽ。

七條　美人研究と云へば、書家の服部君はどうしたでせう？

山座　さアどうしたでせう？　自稱音樂家の才媛青井孃も何處かへ移つたさうです。寄席藝人と河岸を歩いてゐたさうですが。いや、心に任せて漂々と來去する所に在外國の愉快は有るのです。兩君も宗教研究なんか止めて、實地研究をし給へ、その方が爲めになりますよ。

正宗　難有う御座います、エヘヽヽ。

肥塚が、苦い顏をして出る都筑の後から恐る〳〵從ふ。

都筑　どうも共んな風ぢや困るね。今日の七條君の送別會にさへ手間を缺く事になるだらう？

肥塚　いゝえ、それはもう必ず大丈夫お間に合せます。

それでも都筑は苦い顏をしてゐるので、手持無沙汰に肥塚に頭を掻き〳〵書卓に向つて書き續ける。沈默。

やがて給仕服を脫いで、派手な平服に着換へたメーブルが、ニコやかにお茶を捧げて出るが、一座の白け渡つた樣子を見て多少樣子を造つて、卓上に置いたまゝ、無言で去る。

都筑　茶などを持つて來をる、人をつけ！

一同樣子が分らぬので顏を見合せ續ける中に、近江は靜に肥塚の書卓に近附いて、

近江　あの何んな所へ御紹介を願へますか？　お邪魔になるといけませんからお暇致したいのですが……

肥塚　さア、少し待つて下さい。

近江　今お書きのが御紹介狀で？

肥塚　違ひます。

又暫く沈默が續く中に、帽子や輕い襟卷を附けたメーブルが靜に出て來る。一同思ひ〳〵にその方を見る。

肥塚　（手荒く書狀を差出して）さア之をやる、メーブル！

メーブル　（打笑み、丁寧に辭儀して）難有う、これを頂いて置

きますと、萬一夫を助けて他（ほか）へ奉公でもする時に大變役に立ちます。

肥塚と都筑を除いて、何れも段々中央へ集る。

近江　（肥塚に）さうすると只今お書きのは？

肥塚　此の女の證明書（レフエレンス）です。

正宗　しますと、メーブルさんは？

肥塚　今日で此處を退（の）きたいのださうだ。

一同各自の思入。

七條　（メーブルに）何處を行くのだ？

メーブル　當分山田さんの所へ參ります。

近江 正宗　山田さん！

山座　山田と云ふのは聞かん名だが……

肥塚　宗教家ださうです。

都筑　それでお前は其の山田と云ふのに雇はれるのか？

メーブル　いえ、ペーヂさんと結婚する約束になつてをります。

都筑　ペーヂと云ふのは？

山座　服部と一緒に巴里へ行つた畫家だらう？

メーブル　よく御存知です。

山座　その英國人と結婚するのか？

メーブル　これから登記所（レヂスター・オフィス）へ行きます。

正宗　メーブルさん、日本人にだつていゝ人が有りさうな物だがね。俱樂部にゐて澤山知り合も出來たらうし……

メーブル　お知り合は澤山出來ましけれど、つまり日本人は日本人同志。こちらに居らつしつてる方はどなたも一時のお遊びな事は分つてゐます。皆さん、お世話になりました。又その中お目にかゝりませう。左樣なら、左樣なら。

と、右手を上げて振りながら戸口に近づいたが、把手（ハンドル）に片手をかけると、片手で皆々に接吻を投げて、優しく其の姿を隱す。昇降器の降つて行く音が聞える。

近江と正宗とは顏を見合せて居たが、やがて戸口から去らうとす

るのを見付けて肥塚が、

肥塚　あ、兩君、いづれお頼みの事は後刻ゆつくりお話しますがね、今日は之からすぐ七條樣の御送別會が食堂であるので、少し手が足りないから臨時に手傳つて下さい。

近江　（正宗に）君やり給へ。

正宗　いや、君が頼み手だ。

肥塚　御兩君共手傳つて呉れ給へ。

兩人澁々承諾するので、肥塚は先に立つて、三人は去る。

都筑　七條君、今日は大いに愉快に別れやう。もうそろ／＼人數も集るだらう。

山座　（誰にとも無く）どうも西洋の娘は達觀してゐる。

都筑　娘？

七條　音無しさうな娘でしたね。

山座　七條さん、矢張り下宿の娘に岡惚れをして芝居へでも連れてつてる方が吾々には相當ですね。生涯手に入れやうとしてゐるので無い事を先刻御承知なんだから。

七條　（何か思出して殘念さうに）避姙の研究。

都筑　え？

七條　（同じ調子で）青井さんは又倫敦へ歸つて來るでせうか？

都筑　さア、どうかな。

昇降器の音、人の足音、話聲。

さア追々來たやうだ。娯樂室へ行つて一つ將棊でもさそう。七條君、送別會だと云つていゝ、しよげ返つちやいかん。行かう／＼。

と先に立つて七條を導く。

殘つた山座は窓の所へ行つて表通りのあちこちを見廻したが、ただ見知らぬ人々の往き來のみなので、すぐに首を引込め、頭を掻いて一寸部屋の眞中に立止つたが、自らを嘲るやうな笑ひを漏らし、首を振り／＼七條等の後を追ふ。

日本倶樂部の人氣（ひとけ）無い客間（パーラー）には祭は眞晝の日光がいよ／＼十分に差し込む。

・　・　・　・　・　・　・



積丹の少女

長田幹彦

「ゴー、へエッ。おい、松井。早くその下つてるロップを巻かねえか。えらいいや、なぐりだ、さらはれつちまうぞッ。」古びた耳隱しのある大きな鳥打帽を眼深かにかぶつた赭顔の老船長は、ブリッヂのところから眞鍮のレイリングに體をあづけながら下の甲板の方を見下ろして叫ぶ。甲板ではまるで石炭礦の坑夫のやうな風装をした水夫達が頻に錨を巻く準備をしてゐる。漁場から漁場を枠曳きの傭船になつて航海してゐる百五十噸ばかりの此の「エナヲ丸」は、今山のやうなうねりに搖られながらもう十分ばかりでこの積丹の余別を離れようとしてゐるのである。

その日は北海岸には珍らしくない陰欝な空模様で、灰銀色にしぐれた雲の脚がもくもくと沖の方からしつきりなしに流れて來る。陸地へ近づくに從つてそ

の雲は深いガスのやうに低く垂れ下つて、その裾はいつのまにか積丹岳につゞく連山の中腹まで凄まじく立罩めてしまふ。じつと見てゐるとその山塊が後から後から詰め寄せて來る雲層をすうつと吸ひ込んでしまふやうにみえる。そしてその裾野につゞく貧しい耕地や部落にはまた雪が降りだしたのか白い靄のやうなものが横なぐりに蠢めいてゆく。

海は鰊の漁期の特徴としてひどく荒れてゐた。殊に昨夜はこの部落でも二百石からの大漁で、さうした厚群來がつくとその夜は大方シケになるのがならはしになつてゐるので、深夜から曉方までいつものやうに風を伴はない荒れが一帶の海岸へ押寄せて來た。朝から漸次と凪ぎては來たものゝ、それでも外洋から寄せてくるうねりはエナヲ丸を木の葉のやうに弄んでゐた。

海岸を眺めると岩礁の多い濱つゞきには打寄せる波浪が雪のやうに砕けて、そこでは絶えず吠えるやうな物凄いどよみが聞えてゐる。昨夜の大漁は今陸上に戰のやうな混雜を湧き起させて、引き寄せた枠の袋から鰊を陸上げする漁夫の群がその怒濤の間でまるで蟻のやうに立働いてゐる。鰊棚のつゞく傾斜地の裾のところには廊下から溢れた鰊の山が白く輝いて、赤毛布の外套を着たデメン（勞働者）がぞろぞろ出たり入つたりしてゐる。

濱からは三丁ばかりの幅で、一帶の海は神威岬の方まで乳白色に濁つてゐる。それは昨夜この海岸へ群來した幾百萬とない鰊の群が射精した名殘りで、その間には網にもまれた魚の鱗や、骨や、肉も混じつて流れ漂つてるのである。海水を差し覗くと網に洩れた魚群は今もなほそこらをさまよひ歩いてゐて、それを狙ふ海鷗の群が波と摺れすれに飛びちがつてゐる。その啼き聲は北の國らしい何處となく寂しげ

な哀調をもつてゐて、殊に葡萄色をした斷崖や、岩礁のうへに翼を休めて、少し首を捻げながら啼いてゐる鳥の姿は四邊の荒寥たる風物に一層寂しく悲しい心持を添へるのであつた。

　私は此三日間といふもの人氣の荒い漁場から漁場を歩いてゐたので、もう身も心も底の底から疲れきつてゐた。大漁の晩には大きな爐傍でこじやこのおひたしや鰊の胞兒の煮たのを肴に拳を打つて湯呑で灰汁の强い新酒を呑ませられるので、平常酒にはめげない私ももうすつかり弱りきつてゐた。見るもの聞くものが妙にセンチメンタルな感情に包まれて心に映つて來て、心持ちは常に張りきつてゐながらそれでゐて何かなしに悲しさばかりが身に迫つて來る。朝に夕に接する人間は皆荒くれた熊のやうな勞働者ばかりで、怒濤の音、怒罵の聲、それに海鳥の悲鳴とで寂しい一日が暮れてゆく。私は今そんな心持ちを渾身に包んで、岩内の漁港へ歸る途すがらエナヲ丸の甲板のうへに立ちながら波荒ぶ一帶の海を眺めてゐるのであつた。

　もう機關の準備も出來て、煙筒からは盛んに眞黑な煤煙を吐きだしはじめると、その時私は汽船から三丁ばかりの海上を、眞驀に此方へ向つて漕いで來る一艘の小船をみた。それは此邊で鰊枠の見張りに用ゐられる輕快な小船で、構造は土人の丸木舟のやうに粗雜ではあつたが、それでも櫂（オール）で漕ぐやうになつてゐて、八丁だて十丁だてになると船脚は汽船も及ばないほど早かつた。

　その小船のうへにはたつたひとりの人影がみえてゐるきりで、そのひとりは大きな二丁の櫂を操りながら一生懸命に此方へ漕ぎ寄せようと躁つてゐる。大きなうねりが來る度にその舟は人影と一緒に波の底へ沈んで、今度姿を現はす時には船の底もみえるほど高々と波頭のうへへ突き上げられる。

老船長は默つてそのさまを眺めてゐたが、その時ブリッヂへ上つて來た水夫のひとりをつかまへて、
「おい、あそこへ來るなあ何處の漁場の船だあね？　何か用でもあるやうぢやねえか。」と、呟く。
水夫はその言葉で氣がついたやうにそつちへ眼をやつたが、やがて、
「ありや何んでさあ、丸三のうちの持ち舟だあ。昨日鰊棚の丸太を賴まれたゞから、そのことでゞも來るんですべ。」と、云つて、船の行方へ注意をしながら、「だが、恐ろしく腕ッ節の强え奴が乘つてるぢやねえですか。この波を縱に乘切つて來やがる。あれ、あれ、まるで波乘りをしてるやうなもんだあ、危ねえことをしやがる。」
老船長は
「ふむ……。」と、云ひながら枯草色の穢いジヤケツのポケツトからバツトの箱を出して、そのなかゝら一本ぬいてパイプにつめながら面白さうに海をみてゐる。大きなうねりが來る度にエナヲ丸もふわりふわりとトツプの方から空へ持ち上げられてゆくので、マツチを持つた船長の手は幾度となく風を遮りそこねて、チユッと燃えあがる焰は節くれだつた眞黑な掌のなかで消えてしまふ。やがてそれでも船長の鬚だらけな口からはぱッと一沫の紫色の煙が流れ出だ。
小船はエナヲ丸に漸次と近づいて來たが、彼方からは何も合圖をしないので、老船長はメカパイプに口を當て、出帆の命令を下してしまつた。と、同時に水夫のひとりは汽笛のハンドルの傍へいつて、吠えるやうな二聲の汽笛を長くながく吹き鳴らした。その聲は陸地の方へ遠くとほく反響して、岩礁のうへにとまつてゐた海鷗の群はまるで雪のやうになつてぱつと舞ひ立つた。それと一緒に船は艫の方から

眞白な泡を卷き起しながら徐々と進航しだした。

とみると、小船のうへの人影はつッと起ち上つて、此方を振向きながら兩手をあげて何ごとか二聲三聲大聲で叫んだ。私は眼早くそれを見付けたので、老船長に向つて、

「船長、あの小船で何か呼んでるぢやないか。」と、注意した。

船長は羅針盤のうへへ倚り懸つて遠い沖の方を眺めてゐたが、それを聞くと、

「え？」と、云つて振顧りながら、「あ、矢張り何か用があるんだな。」と、じつと小船の方をみつめてゐたが、そのまゝメカパイプへ口をもつていつて、スロウをかけさせると同時に、舵手に向つて、その小船の方へ轉舵させた。

船はすうつと航路を轉じて、横波にあほられながらその小船の方へ近寄つていつたが、小船のなかをみると男と思つた先刻の人影はまだ十八九の若い女で、體には赤毛布の外套を着て、頭は毛絲でつくつた襟卷のやうなもので包んでゐる。そして頭と云はず體と云はず赤毛布の外套は海水に濡れしほれて、銀色に光る鰊の鱗が一杯に振り懸つてゐる。

老船長は船橋のところからじつと小船の方を見下ろしてゐたが、やがて傍に立つた水夫の方を向いて、

「おい、松井。ありやアイヌでねえか。お前知つてるだか？」

水夫はこれも一心に眼を据ゑてみてゐたが、「いや、ありやアイヌぢやねえでかすペ。丸三とこの出面だあ。何の用で來やがつたゞかねえ。」さう云ひながら水夫はそのまゝ默つて船橋から鐵の立梯子を下りて甲板の方へいつたが、そこから大きな聲を出して小船を呼ぶ。

小船では波の音にかき消されてその聲が聞えないのか、乘つた女は立つたまゝ力の限りに櫂を操つてゐたが、小船は大きな波に乘つて、やがて艫の舷へ來てごとりと强く打衝つた。

水夫はそれをみると又大きな聲を出して、

「おい、船を打衝けちや可けねえでねえか。氣をつけねえとそれ又波を喰ふで……。」

さういふうちにも又大きな波が來て、小船をづしんづしんとエナヲ丸の舷へ打當てゝゆく。乘つた女は危く足先をとられさうにしてよろよろしながら舳のところへやつて來たが、そこにあつた纜を口にくわへたかと思ふと忽ち汽船の欄干から垂れさがつた鋼索に武者振りついて舷へ攀ぢのぼらうとする。

水夫達ははらはらして、

「あれ、危えッ。」と、いひながらそつちへ集まつていつたが、女は平氣でまるで猿のやうにするすると欄干のところまで登つて來て、そこからひらりと甲板へ飛び込んだ。そしてそれと一緒に纜を欄干の鐵柱へ結びつけるとその綱の延びるだけ船を流して、にやりと笑ひながら水夫達の方を振顧つた。その口の周圍にはアイヌの特徴を示す醜い刺靑がしてあつた。

アイヌの女はそのまゝ水夫達と何ごとかしばらくの間云ひ爭つてゐたが、やがてそれを打棄てゝ突如ブリッヂへ上つて來て、老船長に、

「船長さあ、昨夜この船さあ乘つて、おらとこの後藤が、いきやあしねえだかね？」と、口に馴れぬ吃々した言葉で問ひかける。

老船長は怪訝な顏をしながら、

「後藤？　後藤たあ誰だね？」と、問ひ返す。
「龍さんだあ。丸三の船頭をしてるだあ。知らねえだかね？」
「丸三の船頭？　そんなもの知らねえ。昨夜は鰊樣の船積みだけで、人間はひとりも乗らなかつたゞあ。」と、老船長は煙草の煙を吐きながら云つたが、ふつと好奇心が燃えたやうにアイヌの方を見ながら、
「お前何處だ、矢張り丸三かね？」
アイヌの女は腑に落ちないやうな顔をしながら唯合點く。その眼色で見ると何か外のことでも考へてゐるらしかつた。
私には何だかさつぱり分らないので唯船長の傍からその女の横顔をじつと見てゐた。その顔は色こそ黒けれ、アイヌにしては決して醜い顔だちではなかつた。顎が張つて、打見たところは男のやうな顔をしてゐたが、眼のまはりには何處か小供らしいしほがあつた。船のなかにゐる時にはもう十八九にもなるやうに見えてゐたがかうして近くでみるとまだ十六か七らしく、厚い唇のまはりの刺青が少しもその顔にそぐはなかつた。これが我々とは血の違ふ異人種かと思ふと、四邊の光景が凄まじいだけに私には何とも云へない不思議な心持ちがした。
女はそのまゝ逞ましい腕をレイリングに凭せかけて少時の間考へ込んでゐたが、やがて又打沈んだ聲になつて、
「船長さあ、この船は今日のうちに岩内さ歸るだかね。」と、訊く。
「うむ、今日の晩方に岩内へ入らあ。泊の魚の都合で遅くなるかもしんねえけど。」船長の口からはそれ

と一緒に眞蒼な煙がすうつと吹きちぎられてゆく。船はゆるい速力で駛つてゐるので、すうつと傾斜するたびに水沫がさつと雪のやうに甲板を濡らす。

女はうつかりしてゐたのでよろよろと蹌めいて見張窓の板壁へどしんと突當りながらてれたやうに笑つて、

「船長さあ、おらあこの船に乘せてつてくれねえだかね？」と、吶りながら云ふ。

老船長は煙草の吸ひ殼を捨てゝ甲板から上を振仰いでゐる水夫達の方を見ながら、なあんだといふ顏をして、

「錢もつてるか？」と、訊く。

「錢はもつてねえだが……」女は一寸云ひそびれて、「あの、鰊なら持つてるだあ。」

「はゝゝゝ。鰊ぢや船賃にやならねえよ。家へ歸つて錢を持つて來な、そしたら乘せてやるべえ。」

女はさも當惑したやうに眉を寄せてゐたが、やがてなんと思つたのかつかと立梯子を下りて、もとの纜を結んだところへいつて、力一杯に小船を手繰りだした。水夫達はそのまわりへ行つてがやがや笑ひながら揶揄つてゐたが、女は小船を舷へ曳きつけてしまうと、そのまゝ又鋼索を傳つてそれへ降りてゆく。そして舳からつぃと胴の間へ下りると、その時水夫の松井が眼で合圖をしたので、水夫のひとりは鐵柱へ結んだ纜をといて力一杯に小船の方へ投げてやる。

女は鰊で船賃を拂ふつもりと見えて、胴の間のところでかいますをいぢつてゐたが、それをみると愕然として兩手をあげたまゝ大きな聲で船をよんだ。エナヲ丸はもうその時にはいつもの速力にかへつてゐ

た。で、さういふうちにもその間は刻々離れてゆく。女は何とも分らない言葉で幾度か船の方へ呼びかけたが、その聲も殘酷な水夫達の嘲笑ふ聲と波浪の音にかき消されてしまう。

　私は罪なことをするものだと思つて、そゞろに滅びゆくこの哀れな人種に對する哀憐の念を覺えずにはゐられなかつた。持つて生れた運命のためにこの地球上から漸次と生存競爭に敗けて廢滅してゆく憐れな種族、それは無智な畜類に對すると同じやうな哀憐の念であつた。生れながらにして姿貌は我々と寸分違はなくても、彼等は既にもう暗い運命を己の脊に脊負つてゐるのである。ひとたびは榮えた彼等ももう落日のごとくに寂しく地の底へ沈んでゆかなければならない日が來たのである。その運命はやがて又我々のうへにも掩ひかゝつて來るのではあるまいか。日に月に我々は無上の誇りをもつてすべての動物を支配し、自然を征伏して、地球上にあらゆる言葉をもつてしても形容の出來ぬ黄金時代を建設しようとしてはゐるが、果たしてそれが何百萬年の後まで續くものであらうか。空には太陽の火熱が衰へ、地には堅氷張りつめ、この太陽系が無限の暗黑と沈默とに包まれてしまふ時果たして我々は無邊の宇宙の放浪者となつて、曾つて榮えた人類の幸福を追懷しずにゐられるであらうか。歴史がなんだ。文明がなんだ。私は暗い心持ちで夜の世界に惻々たる悲痛の哀調を彩つてゐるかの死滅せる世界の殘骸たる月を思ひ起こさずにはゐられなかつた。大きなうねりからうねりに搖られて、一片の扁舟のうへで手をあげてわめいてゐるあの憐れなアイヌの少女、それは私に月を思ひ起させたのであつた。蒼ざめた絶望を思ひ起させたのであつた。

　水夫達は無智な瞳に殘酷な色を浮べて扁舟の漂つてゆく先を指さしながら頻りに笑語してゐる。

「はゝゝゝ、だがアイヌにしちやめんこい（可愛いゝ）顔をしてゐるでねえか。あれなら俺あ我慢しるぜ。」と、ひとりが高聲で笑ふと、又ひとりが卑猥なことを云つてその言葉に應ずる。女を弄ぶことよりほかに樂しみのない彼等には單なる動物慾の外には何もないのであつた。

アイヌの少女の乘つた小船はいつの間にか波間に消えてしまつた。鼠色に濁つた海上には推進器に掻き亂された一條の水尾がくつきりとうねりのうへに漂つて、鬼の牙のやうな巉岩の聳えたつた岬角を曲ると僅か百五十噸ばかりのエナヲ丸はそのまゝ茫漠たる外洋へ乘り出していつた。

低く垂れ下つた密雲のなかゝらはいつの間に煙のやうな粉雪が濛々と降つた來た。私は寒氣に耐へかねて船室へ下りたが、そこの丸窓から荒れ狂ふ波浪を眺めながらアイヌの少女のことばかり考へてゐた。唯雪のひと色にかき暮れた四邊の光景はそんな小さな出來事から私に世界絶滅の日の恐怖を思ひ起させた。

岩内港へ歸つてから一週間ばかり經つた或日のことである。

私は夕方になると所在なさに、その町で知合ひになつた新聞社のS氏を訪ねると、いろいろ雜談の末に、彼はふと思ひついたやうに私の顔をみて、

「ねえ、あなた。あなたはアイヌの女を知つてゐますか？」と、つかぬことを聞く。

私はそんなことは思ひもかけないので、知らないと答へると、S氏は好奇心の燃えた顔になつて、

「私もかうして長いこと北海道にゐますが、まだアイヌだけは經驗したことがないんです。札幌にゐた

時分に、あそこで有名な商人がアイヌの女を妾にしてゐましたが、そいつは水の垂れるやうな美人でしてね、今でもその顔だけははつきり覺えてゐますよ。私達の仲間で經驗して來た奴の話をきくとアイヌの女ぐらゐ情緒纒綿な奴はないさうですな。なんでも犬の匂ひのやうな體臭があるつて云ひますけど、どうせ種の違つた劣等な人種なんだからそれくらゐは我慢しなけりやね。はゝゝ。」S氏は腹の底まで見えるやうな笑ひかたをして、「實は昨日警察であげて來た種なんですがね、此の町にもそのアイヌのゴケ（淫賣婦）が出來たんですよ、ものはためしだ、兎に角これから行つて見ようぢやありませんか。どんな面白い種があるか知れませんからね。」と、云ふ。

私はもうその翌日か翌々日は岩内の町を去らなければならなかつたので、一つでも多くその町の秘密を知り度さに、又ひとつには積丹でみたアイヌの少女から少なからぬ好奇心を挑發されてゐたので、つひ行つてみる氣になつた。

暮れを急ぐ夕陽は間もなくイワヌプリの彼方へ落ちて町のうへには暗い夜が來たので、S氏は支度もそこそこに私を連れて戸外へ出た。

町にはまだ根雪がところどころに殘つてゐて、春先に吹く東風は頬を刺すやうな冷たさをもつてゐる。行く先はもう悉く鰊の山で、身欠きにしたのや、數の子を乾す家々からは胸の惡くなるやうな異臭が紛々と匂つて來る。私達はそのなかを互に愚にもつかぬ話題を追ひながら歩いていつた。

とある小流れの板橋を渡ると、そこの角のところでS氏はふと立止まつた。そして表は湯屋で、その横手が蕎麥屋になつてゐる穢らしい二階づくりの家を指さしながら、

「實は此家なんですがね、どうです、入つてみる勇氣はありますかね？」と、笑ひながら訊く。
折角此處まで來て入つてみないのも飽氣ないので、恐ろしく穢い家のつくりにはさすがの私も閉口したが、それでも兎に角合點いてみせた。S氏はそれをみると腹を据ゑたと見えて、そのまゝつかつかとその家の硝子戸を開けてなかへ入つていつたが、なかではそれと一緒に二三人の女の聲が、「いらつしやい。」と、口々に迎へる。私もS氏の後について入口を入ると、とつつきのところは板の間になつてゐて、そこには束髮に結つたのやら銀杏返しに結つたのやら樣々の風姿をした女がいづれもあくどいほど安白粉を塗りたくつた顏を薄暗いランプの光のなかに並べてゐる。私の眼にはそれ等の女が淫賣婦といふにしても餘りに醜すぎるほど奇怪に映つた。
蒸場になつた奥からはやがて女將らしい大年增が出て來て、蒼黄い瘦せた鳥のやうな顏に愛想笑ひを浮べながら、
「どうぞお二階へ。」と、云ふ。それと一緒に板の間にゐる女に眼配ばせすると、そのなかの若いのが二人、女將の云つた「どうぞお二階へ。」を訛のある言葉で繰り返しながらどたばた正面の階段を上つてゆく。私達は默つてそのあとについていつた。
二階には廊下の兩側にまるでバラックのやうな小部屋が續いてゐる。女達はそのひとつを開けて、それへ私達を通した。私達は介脚のついたぐらぐらな飼臺を夾んで、女達が敷いてくれた木綿の座布團のうへへ默つて腰を据ゑた。
階下からは何も注文しないうちにもう酒を運んで來た。その酒は妙に赤茶けてゐて、私にはどうして

も鰊の匂ひがするやうな氣がして口へ入れられないので、態々ビールを別に誂へた。そして炎えのとほつてゐない鱈の切身を肴に私達は彈まない顏をしながら少しづゝビールを啜つてゐた。

女達は卑猥なことをずうずう辯で遠慮會釋もなく饒舌り散らかしながらいかにも田舍らしい月並なもてなし方で私達に迫つて來る。S氏はいつの間にか地つきの言葉になつて頻りに相手になつてゐたが、やがてふつと思ひついたやうな顏をして、

「ときに、此處には今度アイヌの女が來たさうでねえか。それをひとつ見度えもんだが、今證はあいてゐねえかね？」と、云ふ。

女のひとりはそれを聞くと何喰はぬ顏をして、

「アイヌの女？　そんなものが家にゐるもんかね。そりや演の丸金ですべ。」

「笑談ぢや云つ可けねえよ。今警察で聞いて來たんだから、いくら隱しても駄目だあ。」S氏は退つぴきさせぬやうな調子で云ふ。

「あんたも手がつけらんねえ人だねえ。あんなものを買はねえで、今日は私にして置きなせえ。可愛がつて上げるだから。ほゝゝゝ。」その女の眼は笑ふ度に左の方が大きくなつてくる。

「はゝゝゝ。いや、なにもアイヌを買はうてんぢやねえのさ。たゞ珍らしいから見度えと思ふんだが、……」

「あんなことを云つて、又新聞の種にしるだあね、それだあば見せて上げるから、玉を二本買つて下せえよ。」女はS氏の肩へしなだれかゝりながら甘える。

S氏が玉を買ふことを承諾したので、その女はやがて階下へ降りていつた。あとに殘つたもうひとりの女は頻りにアイヌのことを罵つて、

「男ちうもんはほんとに馬鹿だねえ、あんな穢え女買つて寐ていくだものね、傍へよつてみなせえ、體が臭えだあよ。」と、反感の燃えた眼つきで云ふ。アイヌ、アイヌと云つて珍らしいものを好く人間たちが客になるので、今ではこゝでも一番玉が賣れるとみえかうした朋輩達は皆そのアイヌを憎んでゐるらしかつた。

やがて廊下の方でみしりみしりと足音がすると、入口の障子のところからさつきの女に連れられてひとりの脊丈の低い女が入つて來た。釣ランプの光がそこまでは屆かないので初めは分らなかつたが、私の傍へ來て坐るのをみると私はその時悸乎としてその女の顏を見詰めずにはゐられなかつた。手織縞のやうな綿入を着て、そのうへから銘仙の羽織をひつかけ、しかも何うした譯でか卵色の紋綸子の布を襟へ巻きつけてゐて、風姿かたちはまるで變つてはゐながら、併しひとめみて私にはそれが一週間前に積丹でみたあのアイヌの少女であることがはつきりと分つた。赤茶けた縮毛の髮は小さな束髮に結つて、口のまわりの刺靑もみえないほど濃く白粉をぬつてゐる。そしてその白粉は少しも肌になれないので、まるで粉を吹きかけたやうに浮きあがつて、よくみると勤めが辛いのか彼女は無智な顏をしながらも苦しさうに肩で息をしてゐた。私は二度吃驚した。

連れて來た女はまるで熊でも使ふやうに、

「これッもうちつと旦那の方へ寄るだあよ。さうしてお酌をしてあげなつてばさ。」と、恐いを顏して睨

ひ。自分の一言一句に依つてこの珍らしい人種の女がどうでも動くのがその女には得意らしかつた。

アイヌの女は逞しいその肩をすぼめて、素直に私達のそばへ摺り寄つて來た。そしてビールの壜をとりあげながら默つて酌をした。

S氏はやがて先づ陣を立てなほして、

「おい、お前、名は何んと云ふんだね。」と問ひかける。

アイヌの女はきよとりとしたやうな顏つきをしてゐたが、稍しや嗄れた聲で、

「お玉ちやん。……」と答へる。

私はその云ひ方があんまり頓狂だつたので思はず噴笑してしまつた。S氏も腹を抱へながら、

「はゝゝ。お玉ちやんはいゝね。そして幾歳になるんだね?」

お玉ちやんはそれでも少しは羞恥を感じると見えて、しばらくの間首を垂れて默つてゐたが、周圍の女たちが口汚く罵るので到頭小さな聲で、

「十六、……。」と答へる。

「これで十六だつてさ。ほんとに呆れるでねえか。こんな犬みたいな人間でもやつぱし色氣があるだあね。年を隱してるが可笑しい。」と、ひとりが云ふと、もうひとりの女は私達の方を見て、

「旦那、まあ、この人の身上ばなしを聞いて御覽なせえ、そりや面白えから。」と、笑ひながら云ふ。

私は積丹でこのアイヌの女をみた時の光景を思ひ出しながら又何とない哀憐の念を覺えて來た。あの時には鰊で船賃を拂つてまでこの岩内へ來たがつてゐた彼女が、どうした源因でこんなところへ落ちた

來たのであらう。それが私に不思議で耐らなかつたが、この場合、私は積丹で彼女に逢つたことを妙に云ひ出しそびれてしまつたので、そのまゝ話が彼女の身上ばなしの方へ進んでゆくのを待つてゐるより他はなかつた。

　S氏は少し醉つて來たので、そのお玉ちやんを傍へ引きつけて見境ひもなく卑猥なることを云つたり、手を握つたりしてゐたが、やがて私の方を見ながら、

「ねえ、あなた。かうして體にさわつてみるとまるで男ですな。犬の匂ひがするつてよく云ふですが、私にや鞣皮みたいな匂ひがする。これぢやいくら六十錢でも手が出ませんなあ。はゝゝゝ。」と、埒もないことを云ふ。

　女達はげらげら笑つて、

「それ御覽なせえ、玉だけ損だあね。だけど話の種に一遍買つて御覽なせえよ。そして戸外へ出ると犬が後をくッついて來るだからね。ほゝゝゝ。」

　彼等は何の遠慮もなくアイヌの女を前に据ゑて置いてこんなことを云ふ。私にはそれがひどく傷ましかつた。たとへ犬の臭氣がしようが、鞣皮の匂ひがしようが、人間は人間である。それに面と向つてこんなことを云はれて、これほどの侮辱がまたとあらうか。劣等な人種の間に生れた悲しさ、それももう太古の獰猛さを失つて、なまじ文明に馴致されたゞけに臺灣の生蕃のやうに野獸性をもつてその侮辱を償ふことさへなし得ないのである。

　お玉ちやんはその言葉が分るのか、分らないのか、きよとりとした顔をして飯臺のうへを見詰めてゐ

る。煤けたランプの光の射すなかに、面を被つたやうに白粉を塗つて刺青を隠してゐるその滑稽な顔が私には實に悲慘に見えたのであつた。

玉が餘つてゐるから惜しいといふので女達は寄つてたかつて揶揄半分に彼女の身のうへを聞きだした。馴れない日本語で、とぎれとぎれに語るその話が、まるで鞭の命ずるがまゝにさまざまな藝を演ずる無智な野獸の身ぶり素振りのやうで、座敷に於ての唯一の愛嬌であるらしかつた。私はS氏が女達と一緒になつてげらげら笑ふのが寧ろ憎かつた。

アイヌの女が吃々として語つた話をまとめてみると、私の胸にはかうした悲慘な印象が殘つた。このアイヌの少女は積丹の生れで、漁場の出面になつて膽振の方から流れて來たアイヌの男と女との間に生れたひとり兒だつた。もの心つく頃にはもう兩親とも何處かへ行つてしまつてゐて、彼女は唯家畜のやうに漁場の出面達のなかで野放しに育つてきた。鰊の漁期がすむと出面達はまるで水草を追ふてゆく古代の民のやうに海から今度は耕地や山林の方へ流れてゆくので、彼女の兩親も足手まどひの子供を捨てゝ僅かな糊口の代をたよりに陸深く入り込んでしまつたのであらう。それ故この少女には親などといふ觀念はまるきりないらしかつた。

年頃になつてからはどんな生活をしたか私にはまるで想像さへつかない。彼女の語るところでみると、戸籍面さへどうなつてゐるか分らない彼女には唯ひとり良人と名のつくものがあつた。それは壽都の方からつい二三年前に漁場へ流れ込んで來た日本人の出面のひとりで、名を後藤龍太郎といふのださうである。彼女はその男のためにこの唇へ刺青をしたといかにも誇りかに云つた。

その男との仲はもう一年ばかり續いたのだが、それがどうしたものかこの十日ばかり前にふつと姿を隱したつきりまるで行衞が知れなくなつてしまつた。漁場では一漁期四十何圓の手當てを現金で拂はずに鰊で分けてやるので、出面等は暇を見て見欠き(みがき)をつくつたり數の子をつくつたりして、それを漁期の終りに金にかへるのである。彼女ももうその時には十圓ばかりの身欠きを作つてゐたが、男はそれをいつの間にか金に代て、しかもそのうへに彼女が大事にして持つてゐた着換へまで盜んで逃げてしまつたのであつた。

兎に角ほかの出面達の噂ではどうしてもこの岩内へ逃げてきた形迹があるので、彼女はどうかしてその後を追はふとした。彼女は今でも男に逃げられたとは知らないので、男戀しさにどうかしてその行衞を探さうとそればかり氣にかけてゐるのだと云ふ。さうと聞くと私には彼女が過ぐる日あのシケのなかでエナヲ丸を追つたことも初めて分つて、その日の凄まじい吹雪が急に別な心持ちをもつて思ひ起されるのであつた。

彼女はエナヲ丸が岩內へ向つて去つたその晚、あの凄まじい吹雪のなかを裸足で街道へ出た。そして積丹からは十里の山坂を越えて到頭その翌日の夕方にこの岩內の町へ辿りついたのであつた。その大膽な恐ろしい行爲は到底私達には想像さへ及ばない。

岩內へさへ來れば戀しい後藤に逢へると思つてゐたのが、扨て町へは入つたものゝ、まるで雲をつかむやうな話で當てさへつかない。で、降る雪のなかゝ今にも龍さんが出て來るかと思ひながらずつと濱の方までさまよい步いていつたが、そのうちに寒氣と疲勞と空腹でもう一足も先へゆけなくなつて、到頭

濱先の鰊納屋の裏で打倒れてしまつた。

それを助けたのが濱を荒らして歩く破戸漢の群であつた。荒くれた男達はこの無智な少女をひと晩の賭博の代にかへるためにこの家へ連れて來たのであつた。

さう語つてしまふとS氏は又事を好むやうな顏色になつて、

「そいぢやお前、今でもその龍さんに逢ひ度えだかね？」と、揶揄ひかける。

アイヌの少女は底光のする瞳でぢつとS氏の眼のところを見据えてゐたが、やがて素直に合點く。

S氏は今度は私の方を向いて、

「今の話をお聞きになりましたか。つまりアイヌが内地人を恐れるのはこの手でやられるからなんですなあ。子を生ましたうへに、肺病や梅毒をうつしてどろんを極めこんでしまふんですからいくらアイヌだつて耐りませんや。はゝゝゝ。と云つて此奴等はどうせ内地人にや敵はないと諦めてゐますから、楯つく譯にはいかず、自然性質が陰險になつて、表面はぺこぺこしてゐながら裏で仕事をするやうになるんです。併しそれにしてもアイヌは從順なもんですよ。」と云ふ。

女達は圖にのつて、

「ねえ、旦那、もうちつと話をさせて御覧なせえよ。初めてその龍さんと出來た時のことを話させるとそりや面白えだから。」と、笑ひながら云ふ。

S氏は愚にもつかぬことを先々と聞きだしたが、さすがにアイヌでも耻かしいものと見えて、はきはき口をきかない。女達はそれをみると、

「なんで云はねえだあ。云はねえと又巡査さんを連れて來るで。……」などゝ口々に威嚇しながら、兩方から迫つた。

アイヌの少女は逞ましい男のやうなその體にも似合はず、妙におどおどしながら聞いてゐられないやうなことまで開けすけに饒舌つた。女達は腹を抱へて、

「ほゝゝゝ。可笑しいねえ。龍さんて男もよつぽど物好きでねえか。こんな體ぢうに毛の生へてゐる女を何んて云つて口說いたんべえねえ。ほゝゝゝ。」

そのうちにもう玉があがつたので、アイヌの少女は次の客に出るために階下へ降りていかなければならなかつた。さつき彼女をつれて來た方の女はまた起ちあがつて、

「さあ、お玉ちやん。歸るだあ。早くお客の數をとつて借金を返して壽都さいぐがえゝだあ。龍さんは壽都さいげばおつきに逢へるだあ。ほゝゝゝ。」と、揶揄ひながら引立てるやうに起たせる。そして、首のところへ手をかけて、

「さあ、旦那がたにお辭儀をして、有難うと云はねえだか?」

アイヌの少女はこづかれるまゝに、

「ありがとう。」と、間のびた聲で云つて、頭をさげる。

「さあ、ぐるりと廻つてもう一遍お辭儀をしるだあ。」

彼女は云はれたとほりぐるりと體を廻はして、無智な笑ひを浮べながらもう一度、

「ありがとう。」と、繰り返して頭をさげる。

「ほいゝ。まるで犬の藝當だあね。」

女は腹を抱へて笑ひながら得意顔でアイヌの少女を階下へ連れていつた。

間もなくその家を出て、廣い往來へ出ると私は耐らなく不愉快な氣がして來た。その時には全く人道の上から許すべからざる罪惡を犯したやうな至純な悔恨の念が私の胸にも浮んでゐたのであつた。町の家並のうへにはいつの間にか白い月がのぼつてゐる。寒い風は海岸の方からしつきりなしに吹いて來て、そのなかゝらは又饐え朽ちてゆく鰊の匂ひが吹き流され來る。遊廓の方へ曲る小路の角まで來ると、丁度その突當のところに蒼白い積雪を頂いたイワヌプリと雷電峠が突兀と聳えたつて、その裾野に點々と瞬く町はづれの灯が耐らなく寂しい色に濕んでゐる。その奥には積雪の裾が傾斜につらなるあたりまで落葉松の疎林地がまるで痣のやうに黒く見えてゐる。

私はアイヌの少女が身のなる果てを思ふとさうした風物が却つてとげとげしく、傷ましく見えて來た。月夜の詩美を感じるよりも私は人生の悲慘をしみじみと胸に刻まずにはゐられなかつた。

私が岩内の港を去つてから丁度一箇月ばかり經つてからのことである。私はまるで渡鳥のやうに夕張の炭山から幽邃な支笏の湖畔をまわつて室蘭へ出て、到頭苫小牧から三里ばかり東へ入つたとあるアイヌの部落へ來てゐた。

その頃は東海岸にはもう滿目緑に燻る春が來てゐて、毎日毎日蓬々と吹きすさぶ風は冬の眠りに浸つてゐた荒蕪地の草木をば片つ端から呼び覺まし、ゆるい起伏をもつた原野にはもうクロバーが眞緑に燃

えだつ毛氈を一面に敷いてゐる。その間には黄いろや紅の名も知れぬ野草の花が咲きこぼれて、ところどころに繁茂した白樺の幹が明るい白さを綠の間にほのめかせてゐる。街道を歩いてゐると、思ひがけない樹立の陰から姿は見せずに飛雀が高鳴きをしながら舞ひたつたりした。

その朝は珍らしく風が凪ぎて、露を含んだ空氣が丁度初夏のやうに靜かだつたので、私は傭つた馬に乘つて、牧草地のなかを縫つてゆく細徑を次の町の方へ辿つていつた。丘陵のきれめきれめには明るい大平洋の綠が三色版の繪のやうに遠く眺められて、その間にアイヌの住む藁屋が三戸四戸づゝとびとびに建つてゐる。馬はさも心地よげに勇んで、手綱をゆるめるといつの間にか匂ひの高い牧草のなかへ首をさしのべてゆく。

とある放牧地のなかへさし懸ると、その眞中のところに大きな丘陵があつて、その片陰の樹立のなかに一軒の藁屋があつた。若い落葉松の生籬で圍つてあるのでなかは少しも見えなかつたが、ふと耳を澄ますと中庭の方で臼を挽く音と一緒にゆるい唄聲が聞えてゐる。それはまだ十六七ぐらゐの娘の聲で、言葉がはつきりしないので何を唄つてゐるのだか更らに分らない。

私は妙に好奇心を唆られて入口のところから延びあがつて圍ひのなかをみた。と、落葉松の並樹の片陰は柔かい牧草地になつてゐて、そこへ三人の少女が大きな臼を持ちだして粉のやうなものを挽きながら餘念もなく唄をうたつてゐるのである。手拭で姉さんかぶりをして、日本人のやうに棒縞の綿入を着てメリンスの細帶をしめてはゐるが、私にはひと眼みてそれがアイヌであるやうな氣がしてならなかつた。馬追の老爺に聞くと、それは正しくアイヌの娘だと答へた。

唄聲はゆるい諧調をもつていかにものんびりと春日のなかへ溶けてゆく。その聲には何處となく哀調があつて、殊に語尾をまるく流してゆくところに悲しい心持ちが響いてゐた。四邊に照り渡る日の光はいかに明るくても、無意識に唄はれるその唄は滅びゆく人種の悲しみを聞く人の耳に傳へて、頰の紅い丈夫さうなその少女達が私にはその時自然が戯れに置いた皮肉のやうに思はれてならなかつた。

馬は容赦もなく蹄鐵の音をひゞかせながら歩いてゆく。少女達はその物音を聞きつけてふと此方を振顧つたが、そのなかにひとり大きな眼をもつた歐羅巴人のやうな顏立ちをした娘がゐた。その娘は見知り越しとみえて、馬追ひの老爺の姿をみるとにつこり笑つて挨拶した。

私は明るい朝の光のなかでかの積丹の少女を思ひ出してゐた。

ゆるい唄聲は樹立の彼方へ出るまで聞えてゐた。

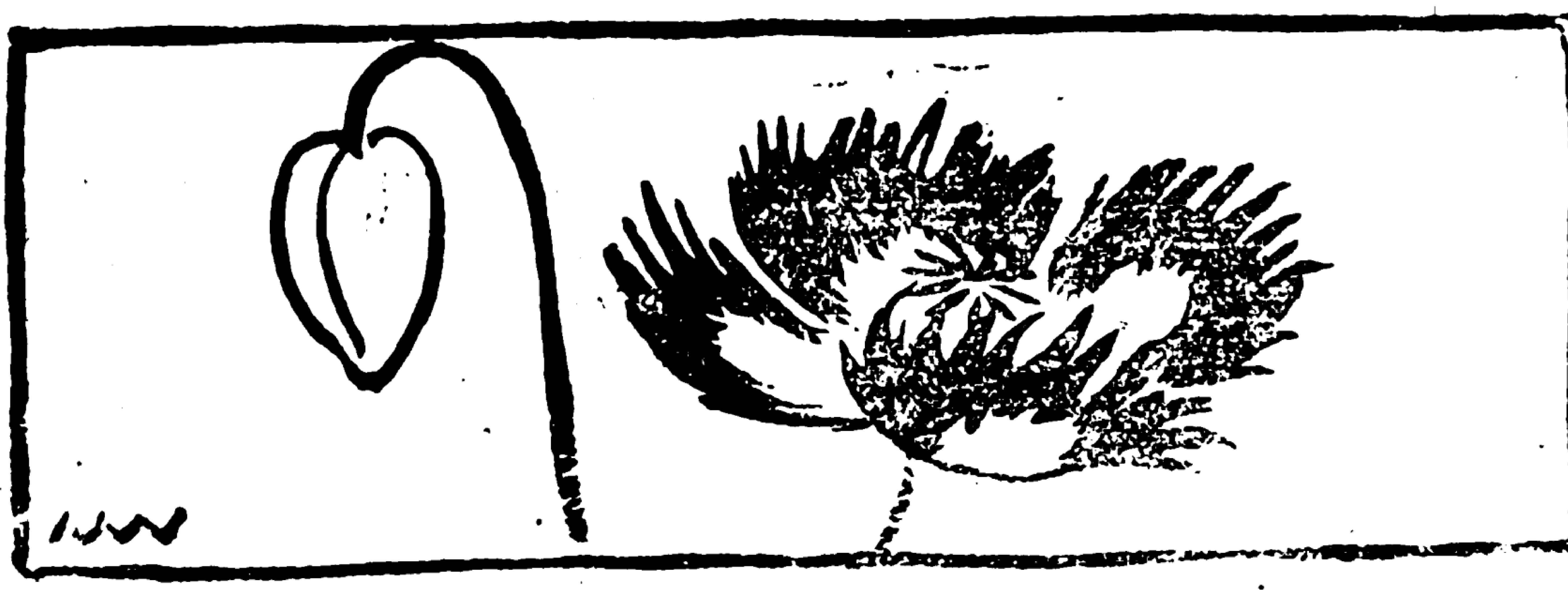
北海道を去る二三日前に、私は札幌でふとから云ふ新聞記事をみた。その時節には必ず此の地方では三面の記事の何處かに見出される「熊害」といふ特種な項目で、そのなかには不思議な事實が書いてあつた。

「去る十日岩内町に到着せる一賣藥商の談に依れば、雷電峠の頂上東寄りの雪中に熊に襲はれたる慘死體あり、年齢十八九、衣類その他よりみるに女乞食らしく、顏面及び胸部を散々に嚙み散らされ、臟腑露出し、慘狀眼も當てられずと、附近の獵夫等は寄りより熊狩の準備中とのことなり。……」

雷電峠は岩內から壽都へ通ふ唯一の街道である。いつぞやみた時には裾野まで雪に掩はれて物凄い夜

天の星影に冷たく地殻の亡霊のやうに聳えたつてゐたがと思ふと、私は何かなしに積丹の少女のことを思ひ起さすにはゐられなかつた。彼女は戀しい夫のあとを慕つて又岩内の淫賣窟を遁走し、雷電峠で敢なく熊の毒牙にかゝつたのではあるまいかと思ふと、私は何かになしにぞつとした。私にはその時「偶然」がそれほどまでに人生に附き纏ふことが少しも不自然には思はれなかつた。……

S氏に宛てゝお玉ちやんの消息を幾度となく訊ねてやつたが、その後一度も出逢はないと云つて積丹の少女の消息は杳として知れなかつた。（をわり）



拉典區の秋

與謝野晶子

（一）

戸張と佐竹が自身達の使つて居たモデル女のマドレエヌの故郷の田舎へ、其女の案内で避暑に出掛けて行くと云ふ時には、ほんの巴里から二三時間の汽車で行ける田舎のやうなことを云つて居たのが、行つて見ると其處はもう國境からずつと先の白耳義で、ミユウズ川に添つたディナン市だつたさうである。呑氣過ぎた人達だと、巴里に居る日本人の畫家仲間が噂して居た時にも、其人達は誰も戸張と佐竹の旅に女畫家のお加代さんが一緒に行つて居ることは知らなんだ。もつともグレエとか、モレエとかリモウジユとかへ二人伴れ三人伴れなどで旅に出掛けた仲間もあつて、七月の末から八月へかけて巴里に殘つて居たのは平生の半分にも足りない人數であつた。暑さにパレツトを放り出して着更へをさせたモデルを伴れ

て行きつけの珈琲店へ行つて居るやうな人達と、プロオニユの森あたりへ遊び半分の寫生に行つて來た連中などが落ち合ふ時、稀には、

「お加代さんはどうしてるのだらう、ちつとも見ないね。」

と云ふやうな噂も出た。

「松本君が巴里に居ないからお加代さんの消息も解らないのだね。」

こんなことを云ふ人もあつた。松本と云ふのはお加代さんに戀をして居ると云ふ評判のある文學士で、春の末から巴里へ來た日本の某富豪の息子の通辯になつて瑞西から伊太利に旅をして居た。

佐竹が旅に立つ日の朝、鑵詰物を買ひにモンパルナスのカンパン・プルミエエルへ曲る角の日本物を賣る店へ行くと、其處でお加代さんはパンシヨンのお内儀さんに賴まれたのだと云つて手拭地の浴衣を出させて選つて居た。

『お加代さん、僕と戸張君がモデルのマドレエヌの田舍へ遊びに行くのです、行きませんか、一緒に。』

『田舍つて何處でせう。』

『あいつの云ふことはよく解らないけれど、欺された氣で行かうつて戸張君が云ふんですよ。景色が好いのだつて。いらつしやい、一緒に。』

『ありがたう、南の方、北の方。』

『北の方だつて。』

佐竹は鼻の横に深い線を拵へて笑つて居た。

『では涼しいでせうね。』

『だから行かうぢやありませんか。あなたが行けば僕は此處で食物を澤山買つて行くし、行かなければ少しだけ買つて行くんですから、お決めなさいよ、お加代さん。』

『でもねえ。』

『厭になつたら歸つて來ればいい。行きませう。』

『何處の停車場ですか。』

佐竹の顏を見てから云ひながら、お加代さんは店番の男に、決めた買物を手眞似混りに云つて金を拂つた。佐竹にはそれがお加代さんの逃仕度のやうに思はれたので、背丈の低い割合には大きい手を上げて、襦子の縁を取つた薄色の袖の幅の狹いコルサアジユを着たお加代さんの左の腕を一寸摑んだ。

『お加代さん、厭だ、厭だ、行かなければやあ。』

『まあ。』

お加代さんは佐竹の手を自身の右の手でそつと放した。佐竹さんは子供らしい人だと思ふと、理性よりも當座の遊戲衝動が著しく先に立つて、この人の外の伴があの溫順しい巨張ぐらゐなら暫くの旅は一緒にしてもいいと思ふやうになつた。佐竹は態とらしい程澤山の鑵詰を買つた。

『今日の午後二時にノオル・ギヤアルから行くんです。來てくれるでせう。』

送つて行くと云つても濟むのだけれどもとお加代さんは思ひながら、面倒臭くなつて、

『行きますよ。』

と云つてしまつた。

「さう。」

佐竹はほんとうに店の中で兩手を揚げて踊つた。お加代さんは店番の方を見て顏を赤くして居た。

「愉快だ、愉快だ、戸張さんを驚かすのだな。」

「でも誰方(どなた)にも云はないで置いて下さいな、直ぐに歸つてくるかも知れませんから、佐竹さん。」

お加代さんはこの年下の男を伏目に見て云つて居た。

「ふん、ふん、僕はこれから村松を見送りに來させないやうにうまくやつて來ます。」

『オオル・ヺワア・ムツシユ。』

とお加代さんが先に店を出た。

一人旅のお加代さんが初めて巴里のギヤアル・ド・リヨンへ着いて、驛夫のリヨンと呼び立てる聲に、また汽車がマルセエユに近いリヨン市へ歸つて來たのかと胸を騷がせた時から足掛四年經(た)つて居る。其時停車場へ迎へに出て居た中川は日本に居た頃にお加代さんの師事して居た先輩であつたが、其人ももう二年程前に歸國してしまつた。沼田さんと初めは仲間から呼ばれて居たのが、加代子さんになり、お加代さんに變つてしまつた。兩親が續いて亡くなつた時に、其前から硝子工場の主人になつて居た弟から、一生自分等の家族が生活して行くだけの物が殘つて居ればいいのだから、姉さんも私も好きなやうに其外の金(かね)は費ひませう。姉さんは前から思つて居ることなんだから佛蘭西へ行つたらいい。西洋人と云ふものは、思ひ切り外國の長所を、遠い地境にある野蠻國の物までも吸收して置きながら、其外國人

に向つては、却てあなたの國の固有の文明を捨てて、西洋の文明に就かうとするのは方針が間違つて居るなどと忠告するものだけれど、あなたはそんなことを顧慮せずに造り掛けた西洋畫の稽古をしておいでなさい。勿論歐洲の藝術と云つても、すべてが日本の藝術より秀れて居ると迷信して一も二も無しに感服するやうな幼稚なあなたでも無いでせう、歐洲の文明にも隨分不純であり不用であるものゝあるのが私の目にだつて附いて居る。あなたは出來るだけ其れに正しい評價を下した上であなた自身の生活に役立たせるものを掴んでいらつしやい。私には四五年もすれば工場をすつかり引き受けてくれる人が出てくるでせうから、そしたら迎ひかたがた西洋へ行くと云はれて、お加代さんは直ぐに郵船會社から歐洲航路の船の發着表を取り寄せて、次の便船で日本を立つて來た人なのである。年は三十前の九であるが、小柄で美くしいお加代さんはどうかすると二十前の人かと見られた。最初に中川が見附けてホテルのスフロオから移らせたりリユウバヷンの素人下宿の三階に其儘ずつと續いて居るのであつた。お加代さんの弟が、今年の内か遲くとも來年の春には日本を立つて行くと云ふ報らせと一緒に、私が行くからと云つてあなたは焦燥つてはいけない。私はあなたの繪よりも外に見たいものが澤山あるから行くのです。あなたはもう恐しくなつて繪が描けなくなつて居る頃だと思ひますと云つて來たのは三四月の頃であつた。其時分からお加代さんの生活に少しの捨鉢が混つて來た。お加代さんは弟から聞く眞實が恐かつた。自分のやうに纎細な神經を持つて居て、そして思想と其れの表現とのまだ伴はない時に、最も恐く思ふのは無遠慮な眞實を言ふ言葉である。今の自分は僞虛だと知つて居る煩悶の中にじつと浸つて居るより外の勇氣はない。其間の自分は甘い人だと云はれて居てもいい。眞實のために狂人にされてはつ

まらないと、お加代さんは出來上らない自分を自ら庇つて病的になつて居た。弟の違つて來るのを忘れたいとするやうなことばかりをして居た。そして六月には一月のうちに大きい風景畫を三枚も描いたが、誰が見ても皆セザンヌの表面模倣をしたものばかりである。

『主客が顚倒してしまつた。』

かう獨言を云つて或朝畫室を出たきりでお加代さんは寢室の方でばかり暮らして居たのである、それから目に立つてお加代さんは人交際が好くなつた。そして心を淋しい孤獨では無しに、重苦しい孤獨に、喘がせて居た。併しお加代さんの痛い所へ觸らうとしないだけで友とされて居る男達をお加代さんは自身の所へ呼んで遊ぶやうなことはまだしなかつた。パンシヨンのお内儀さんはお加代さんのことを、二年經つても三年經つても人見知りの強い日本娘だ、最も親しい男友達の二人や三人は代る代るにでも出來て居さうなものだなどと思つて居た。

二

モデルなどをするやうなことでは巴里へ出されないと母親に止められたマドレエヌを殘してデイナンを立つた戸張と、佐竹とお加代さんの三人がもとのノオル・ギヤアルへ着いたのは九月の初めの日曜の朝であつた。戸張のカンパン・ブルミエエルと、佐竹のリユウ・ド・グラスと、リユウ・バヴンとは皆近い所であるから一臺の自働車で濟ませば濟みもするのであつたが、お加代さんは別に馬車を雇つて下宿へ歸つた。馬車から降ろした荷物を女中のマリイに手傳はせて部屋へ運ぶのに、二度程も三階の梯子の口から下へ取つて返したお加代さんは、それが濟むと廊下の三間程向うの自分の室へ走り寄つてマリイに見ら

れないやうにして薄鼠色の戸へ唇を當てた。この時胸の底から涙の泌み出してくるやうな氣がした。それと一緒に例の靴の底の見られない臆病な心は俄に中を見るのが恐ろしくなつて、已むを得なければ後向いて入りたいとも思つた。鍵を錠の孔へ當てる手が慄えた。戸の一つが中へ押されてお加代さんの足は葡萄茶色の敷物の端を踏んだ。マリイが替鍵で入つて毎日掃除をして居たので部屋の中は綺麗であつた。二三歩あるき出した時隣の畫室の方で何か物音がしたやうに思つてお加代さんは一寸顔色を變へた。机の上には手紙が三通と繪葉書が一枚載せてあつた。手提を置いて二つの鏡へ一度づつ顔を寫して見てからお加代さんは左の方の窓を開けに行つた。丁度向ひの骨董屋の門に今迄歌つて居た乞食が、歌ひ止めてマンドリンを片手に抱きながら其邊の窓々を見上げて居るときだつたので、机の所へ歸つて手提から銅貨を一つ抓み出して來て投げた。梯子口から何もかも運び入れて肩を上げ下げして重かつたと云ふ表情をして居るマリイにも、お加代さんは二フランの銀貨一枚を與へた。お加代さんは眞珠の光る帽子針を片手で拔きながら、机の上の手紙の表書の筆跡を誰と判斷するために並べて見た。一つは日本の友人ので、一つは巴里からモスコウへ歸つて行つた露西亞の女畫家のものらしいとお加代さんは思つた。一つは松本文學士のだと思つて裏返して見ると、名は書かずに「モナコにて」と日本字で書いてあつた。繪葉書は有りふれたベルサイユ宮の遠景で、それを出したのは一昨年の秋頃繪を一枚描いて下さい、そしたらお禮には犬の子を一疋貰つて來て上げますからと云つて、お加代さんの繪を犬の子一疋と替へた巡査である。靴を脱いで長椅子の下に揃へてあつた綠色の上靴に穿き變へてから、上着を取つてお加代さんは化粧臺へ顔を洗ひに行つた。そして水甕から下へ零す水の傍へ思はず鼻を持つて行つた。併し佛

關西の水の匂ひが白耳義の水の匂ひに違つたものでもなんでもなかつた。鏡を前に入れた戸棚から水色に立枠のメリンスの單衣を引き出して來てお加代さんは手早く着更へるのであつた。紫の絹の靴足袋がするりと抜けた時、お加代さんは白耳義へ立つて行くまでの巴里の暑かつた日を思ひ出した。絹縮のしごきを前で結んで安樂椅子に身體を置いた時には、豫期もしなかつた旅がへりの嬉しさがしみじみと覺えられるのであつた。赤い羽蒲團の掛つた寢臺の正面に掛つた森と海との一對の古い繪やら、金色の縁の廣い鏡やら、其の前の二つの長い花瓶やら、天井の眞中から下つて居る古く黄ばんだ水晶の蠟燭臺やらを見上げたり見下ろしたりして居るうちに、お加代さんは日本の明るい座敷で見た和蘭陀の畫が持つて居たやうな異國情調が自分の身體から邊りへ散つて出るやうに思はれて來た。暫くして窓の方を振り返つて、『秋だから寒い。』

と云つた獨言がお加代さん自身に昨日までの旅の賑かな生活を思ひ出させた。叔父さんと云ふもの、やうに親切な戸張の聲も聞いて見たく思つた。十七の年に日本を出て亞米利加やら英吉利西やら佛蘭西やらに十年を送つて居る佐竹の不束かな日本語も懐しく思はれた。

一番下へ寢間着の浴衣を置いて、肌着や下袴や、タオルなどの洗濯物を積み重ねたのを兩手で捧げてマリイが入つて來た。そして其れを置いた長椅子の横へ腰を掛けた。私と話をするのでもあなたには會話の稽古になるのだと云ふ顏をマリイはして居るのである。

『掃除が綺麗に出來て居てい丶氣持よ。』

『さうです、さうです。』

「お内儀さんはお留守なの。」

鞄の中には共人への土産もあるのをお加代さんは思ひ出したのである。

「今日は旦那が休みですからね、帽を買つて貰ふのだと云つてルウヴルの向うの角の帽子屋ね、彼處へ行きましたよ。」

「すつかり秋になつたのね。」

マリイは肩を揺つて笑つた。

「私ね今月の末に瑞西へ歸つて行くことになつたのです。」

「さう。」

「結婚を直きにしてしまふかも知れません。」

マリイはまた前と同じ表情をして笑つた。

「さう。」

お加代さんはマリイの瑞西人らしい特徴のある額のよく光る或一點をじつと見て居た。

「私の行つた所ね。」

「白耳義でせう。」

とマリイが引き取つて云つた。

「えゝ山兎が澤山居ましたよ。」

「私の瑞西の田舍にも澤山居ます。日本には居ないのですか。」

「山兎なんか居ますとも。あなたのやうな怜悧な女中が居ないだけ。」

「四階のマルゲリットさんをお内儀は山兎だと云つてますよ。」

「全くね。似て居てよ。」

お加代さんは良人に捨てられた伊太利女の血の氣の無いやうな白い顔を目に浮べて居た。

「大騒ぎをしたのですよ、一昨日の晩。」

「何故なの。」

「あの御亭主が歸つて來ましてね、喧嘩を初めてしまつたのですよ。助けてくれ、助けてくれとマルゲリットさんが梯子口から下へ云ふのでせう。亭主がまた其處へ追駈けて來て撲つやら蹴るやらで危なかしかつたことつてないのです。落つこちさうなんです。私は三階から見てましたつけ。捨てとけませんからお内儀さんが上つて行つて仲裁をしたのです。けれど亭主は出て行つてしまひました。」

「まあね。」

「亭主の云ひ分がね、フロマアジユを買つて置かないのが惡いのですつて。」

とマリイは鼻の邊りを顰めた。

「可哀相ね、あの人。」

「亭主も氣が附いたのでせう。」

「何の。」

「あの寫眞屋の技師のこと。」

「そんなことがあるの、あの人に。」
「つい近頃からです、さう、さう、あなたはお留守でしたもの。」
とマリイは點頭いて居た。
「いろんなことがあるのね。」
「戯談ぢやありませんねえ、フロマアジユどころか馬鈴薯だつてマルゲリツトさんは買へないのですもの。寫眞屋を遊びに來させたりもしますわ。あの茶色のロオヴ一枚きりになつて居るのですものね。」
「その人とまた夫婦になるのでせうかねえ。」
「駄目、駄目、駄目。」
マリイは頻りに首を振つた。
「さう。」
「寫眞屋は女たらし、名高い女たらし。」
「さう、やつぱりお金の無い人。」
「いいえ、お金はある人。」
「ぢやあ、欲な人。」
「いいえ、女によく金を遣る女たらし。」
「あなたもそんな質の人と結婚しないでお置きなさい。」
「えい、えい、大丈夫。」

「何故。安心が出來るの。」
「それはあなた。」
「なあに。」
「私は約束がしてあつたのですよ。」
マリイはさつと顔を赤くした。
「さう、いいこと。」
「ええ、いいこと。」
二人はやや暫く笑つて居た。
「あなたは約束をなすつたことがおありにならないの。」
「ありませんよ。」
「一度も。」
マリイは身體を後へ反らして驚いたと云ふ表情をして居るのであつた。そして胸掛（ダブリエ）の隠袋から細い水色のリボンを引き出して、立つて行つて暖爐の上に置いてある玩具の羊の首へそれを結んだ。お加代さんも其傍へ立つて行つた。
「いいこと、いいこと。」
「おうお、いいこと、いいこと。」
二人はまた先刻の心持になつて可笑し相に笑つた。

「誰か留守に來ませんか、この間中。」

お加代さんの背丈けはマリイより二寸程低いのである。暫く考へて居たマリイが急に頓狂な表情をしながら寢臺の向うへ廻つて枕元の小い卓の抽斗からやや大形な名刺を一枚出して來た。それは大使館の書記官の夫人ので、二十一日に巴里を立つて歸ると云ふことが書いてあつた。

「大使の奥樣ですか。」

「いいえ、いいえ。」

お加代さんはさうでないと思ひながら、また先刻の郵便物の字をこの夫人のではないかと見分けに行つた。

「あなたのお留守になつてから間も無くでしたよ。旦那は自動車の中で待つていらつしつたつけ。」

「この方だけ。」

「ええ。」

マリイは用事を思ひ出したやうにさつさと出て行つた。

お加代さんは旅鞄の中の整理の仕方を頭の中で考へて居た。附合ひに描いて來た綸挾みの箱の中の小品は出して見上ようとも思はなかつた。入口の廊下に向いて附いた隣の畫室のことなどは先刻の物音の後はまた念頭に上さうとしなかつた。

三

次の日の午後に、日本食の夕飯を是非食べに來てくれと云ふ佐竹の速達便を受け取つたお加代さん

は、其朝パンションのお内儀さんの世話で買つた葡萄鼠の大黒形の天鵞絨の帽を被て、リユクサンブルのミユウゼの壁が紫に見える夕方に其公園の鐵柵の外を歩いて居た。公園の門から右に續いた花壇の中の道へ入つてお加代さんが上を見ると、一度枯れて落ちて、また葉の出た時、黒い枝にあるのが青い絹のやうに思はれた葉に今は多くの黄が混つて居た。長腰掛(ベンチ)に休んで居るのが皆茶の色の塊りのやうな老人ばかりであるのをお加代さんは淋しく思つて見て通つた。新しい花と植ゑ替へられるのを待ちあぐんで居るやうな赤い二列の木葵も淋しかつた。ヴル・ド・グラアス寺の屋根時計が見えたので、花壇を右に出てその街へ入つて行く時、お加代さんのカシミヤのロオヴを着た姿が、花壇の突當りの噴泉の海馬の色と同じ薄墨をした艶(なま)めかしい好ましいものに見えた。日本のお社(やしろ)や寺の塀にある瓦を横に積んだのによく似た古い塀の、上の三分通りの崩れた古い家の向隣りに佐竹の居るパンションの番號を見附けた時、お加代さんは少し上氣したやうな顏をして邊りを見廻した。淋しいリユウ・ド・グラスの人通りは唯だ寺の方から一人の男の一寸法師が來るだけであつた。肩を細く窄めて門を走つて通つたお加代さんが、右の方と聞いたと思つて其方を向くと何かの青い木の下に佐竹が戸口を背にして立つて居た。

「遲かつた。遲かつた。」

と云つて佐竹が小石の上を走つて來た。

「ありがたう御座いました。」

「よく解る所でせう。」

「えゝ。木が澤山あるんですね。」

お加代さんは何か安心したやうな氣になつて中庭の大きいアカシヤの木立を眺めるのであつた。
「さあ、いらつしやい、古い家だから陰氣だね。」
佐竹は獨言ともつかずにかう云つて、燐寸で煙草の火を附けた。
「靜かでよう御座いますわ。」
「陰氣だから皆逃げ出すんだね。」
「さうですか。」
「ふんさうですよ。」
「私はこんな所が好きですよ。」
「僕はじつとして居られなくなるから外へ遊びに行くのです。」
二人は戸口の前へ歩いて來た。佐竹が戸を開けると中は眞暗であつた。
「今までどうしていらつしつたのですか、佐竹さん。」
「あなたを外へ出て待つてたのですよ。」
佐竹は室内へ入つて洋燈の傘や火屋をかたかたと言はせて居た。暗さに直ぐに馴れたお加代さんの目は正面の所に白い大きい女の胸像のあるのを見た。
「灯が附きましたよ。」
と佐竹は云つたが、まだ闇の中で洋燈の芯が橙色をして居るだけで邊りからは白い女の像の外の物の形はまだ何も顯はれて來なかつた。お加代さんは手搜りに重い椅子を引き寄せて腰を掛けた。それでも

佐竹が卓の中央へ洋燈を運んで來たために、黄昏が忽ち夜になつてしまつたやうな氣がした。お加代さんが女の胸像の方を見ると、其れは先刻よりも却て暗くなつて、灯の作る陰影が死相らしく女の顏を見せるのであつた。三間に四間程の室内は畫で充滿になつて居た。直ぐお加代さんの身體の横に大きい畫架があつて、靴の先の觸り相な所にも畫布の枠が轉がつて居た。お加代さんはふと佐竹は藝術の中に身體を小く窄めて生活して居る人で、自分は藝術の中に心を小く窄めて居る女であると こんなことを思つた。

「あなた、彫塑もなさるの。」

「僕。」

と佐竹が近い椅子でけげんな顏をしてお加代さんを見た。

「前になすつたのですか。」

「何故。」

「あれは。」

とお加代さんが胸像を指さした。

「あれですか。」

と云つて佐竹は例の高笑ひをした。

「あなたのではおありにならないの。」

「さうですよ、さうですよ。」

「お買ひになつたのですか。」

「島村君のですよ。島村が此處に居たんだから島村が移轉(しつこ)す時に餘り重いから置いて置いてくれと云つたんです。」

「さうですか、島村さんのですか。」

と云つて、お加代さんは胸像の傍へ立つて行つた。佐竹が其後から洋燈を持つて行つた。床(ゆか)の上の何かが靴の先に蹴られて音を立てて居た。白い女の顏から目を放したお加代さんは佐竹を見て、

「これ、よくないのですか。」と云つた。佐竹は默つて笑つて居た。それを見てお加代さんの心は急に淋しくなつた。さうだ、さうだ、私はこんなお座なりの笑顏をして居るだけの友達を求めて居たのだ、これでいいのだと思つてなければならないと思つたからである。

「何故おいてきぼりなんかになさるのでせうね、氣が入(はい)つて居るやうなのにねえ。」

「餘りいいからおいてきぼりにしたかも知れない。自分の物でも餘りいい物が傍にあるとしよちゆう責められて居る氣がするもの、島村もさうなんだ。僕は今迄そんなことを思はなかつたけれども、きつとさうだ。島村がこれを受取りに來る時があつたらあの人が氣に入るだけの大作が出來た時でせう。僕等はまだ思ひ切つておいてきぼりにするだけの物を持つてないんです。」

と佐竹が云つた。この人もこんなことを思つて居たのかとお加代さんは茫とした心持になつた。佐竹が卓へ洋燈を返しに行かうとするのを見て、

「ちよいとお待ちなさい。ディナンの畫を拜見します。」と云つた。

「巴里へ歸つたからつて變りやあしませんよ。」

かう云ひながらも佐竹は胸像に近い壁に立てた古城を描いた畫や、ミユウズ川の絕壁の畫やの傍へ洋燈を持つて行つた。

「マドレエヌのことを思ひ出しませんか。」

「ふふん。」と佐竹は淋しく笑つた。

「可哀相でしたわね、別れる時。」

「馬鹿な奴だ。」と佐竹が云つた。

「あなたの御寢室は此處。」と云つてお加代さんが立留つた。其手は暗い色の幕の端を持つて居た。

「さうです。狹いところ。」

「入つて見てもよう御座いますか。」

「何です。」

佐竹はふとお加代さんが自分を此處へ追込んで殺すのではないかと云ふやうな不安を感じた。

「よう御座いますか。」

「宜しい。」

佐竹のかう云つたのは、もうお加代さんに殺されてもいいと云ふ覺悟が出來た時である。

「ちよいと用があるの。」

「さあ。」

幕を疊み寄せて佐竹は寢臺の枕元の小い卓へ洋燈を載せて行つた。

「あれが奥様のお寫眞ね。」

お加代さんが笑つて居るのを笑つて居るとも見えないやうに佐竹は胸をいらいらとさせて居た。

「拜見します。戸張さんに伺つたのですよ。」

お加代さんも口元の笑にふさはしい程の柔かさは目に持つて居なかつた。枕から二尺程上に吊られた寫眞は版畫のやうに薄い色をした寫眞であつた。灯の光も十分で無いから被布を着て居ることが解るだけで、目鼻だちのよく見えないのは當然である。寢臺の上へ半身を上げるやうにして其れを見て居たお加代さんは床(ゆか)の上へ立つて苦しかつたと云ふやうな息をほつと吐いた。

「ありがたう、佐竹さん。」

「許嫁(いひなづけ)ですよ。」

「知つてます、もう。」とお加代さんは眞實に笑つて居た。

「まだ結婚をしないのです。」

腕組みをして寢臺の端に腰を掛けた佐竹はお加代さんの靴の先をじつと見て居た。お加代さんは幕の所まで歩いて行つて、疊ならやつと四疊だけ敷けさうな細長い室の中を見廻して居た。

「窓が無いのですね。奥様のお寫眞を夜分だけ御覧になるの。」

佐竹は默頭いて居た。切がないのでお加代さんが洋燈を持つて畫室の方へ出て來た。

「戸張さんはいらしやらないのですか。」

「戸張君はね、モン・マルトルへ約束があつて行くと云つてました。先刻一寸來ましたよ。」
此方へ來てから佐竹は舊のやうに元氣よくなつた。
「飯の火を附けなくちやあ。」
と云つて、佐竹は周章てゝ燐寸をストオブの前に鐵の床に置いた酒精しちりんの所へ持つて行つた。
「佐竹さん。」
「何ですか。」
「二人きりで日本食の仕度なんかしてると遣瀬なくはありませんか。」
とお加代さんは少し濕つぽい調子で云つた。
「何故」
しちりんからはしゆう、しゆうと云ふ音が立つた。
「何だか零落れた氣がしますもの。みじめな氣がしますもの。」
「さうだね。」
と云つたかと思ふと、直ぐに佐竹はしちりんの火を吹き消した。お加代さんは氣の毒になつて、
「頂くことは頂きますよ。そんなことなさらないでもいゝわ。」と云つた。
「さう。」
またしちりんが、しゆう、しゆうと音を立てゝ來た。佐竹は入口に近い方の隅に立てた畫枠の奥から大きい胡瓜を一本出して來た。そして化粧臺の上で其れを洗つてから、俎代りの描きつぶしの繪の板の

裏に載せて其れを卓の上へ持つて來た。
「切りませうか。」
「なあに、僕が。」
胡瓜に刄物の當る音がさくさくと響いた。佐竹は急に笑ひ出した。
「どうしたのです。」
「お加代さん、ディナンへ行く前にね、カンパン・プルミエエルの戸張の近所の八百屋の娘がね、あの寢臺へ來て二晩程寢て行きましたよ。」と云つて佐竹はまた笑つた。
「戸張さんの所の三軒程手前の八百屋ですか。」
「さう、さう、お内儀さんの姪です、彼處の。」
「私何時か餘りいゝ櫻實があつたから買ひに行きましたわ。知つてます。そんなことをするのですかねえ。」
「するのですよ。」
佐竹は鹽の壺から抓み出す鹽々薄青い胡瓜の山へ振り掛けて居た。
ことことゝ戸を叩く音がした。
「お入り、どなた。」
「僕。」
それは村松の顏であつた。
「描いちやつたかい。」と佐竹が大きい聲で云つた。

「描いた、描いた。」

村松は嬉し相である。

「長くお目に掛りませんでしたね。」

「えゝ、長く。」お加代さんは立つて女らしく椅子を勸めたりなどした。

「戸張さんがね、ギメエのミユウゼの傍の公設の質屋へ今日行つたつてね、時計を持つて行つたんだつて云ふことだ。」

村松は少し伸び上り氣味に身體（からだ）をして佐竹にかう云ふのであつた。

「さう何んとも云つてなかつたよ、先刻逢つたけれども。來てなかつたのかなあ、日本から金が。」

佐竹は太い眉と眉の中へ皺を幾筋も寄せて居た。

「あの人のことだからモデル料を拵へて置かないと氣が濟まないのだらう。何か大きいものを急に描く氣になつたらしい。」

「さうかい。君、飯を食ふか。」

「食べてもいゝ。眞實（ほんとう）は巴屋（ともへや）へでも行かうかと思つて誘ひに來たのだよ。」

村松は立つて行つて壁際の十號ぐらゐの人物畫を洋燈の下へ持つて來た。

「それはマドレエヌの伯父さんだよ。遣る約束で描いたのだけれど、少し惜しくなつたから外の畫を遣つて來たんだ。」

佐竹は村松の後（うしろ）へ來て居た。

「キュビズムが入つて居るね。」

「うん、うん。」

「まだ外にいゝのがあるだらう。」

「ありやしないけれど、まあ晝間見に來てくれ給へ。」

「よし。お加代さんも見せて下さいませんか。」

佐竹は村松の手から畫をそつと受取つて舊の所へ置きに行つた。お加代さんは顔を赤くした儘何とも云はなかつた。そのうち御飯の鍋が噴き上つて來たので蓋をすかせに立つた。

「佐竹さん火を消しませうか。」

佐竹は戸棚から皿を出して居た。

「あなたが女ぢやありませんか。」

一寸三人が一緒に笑つた。

佐竹が暗い寢室の中へ入つて行つたかと思ふと帽子を提げて出て來た。

「酒を買つてくるよ。」と村松に云つて佐竹は外へ出て行つた。

「一緒に旅行をなすつてお困りになつたでせう。佐竹君は亂暴ですからね。戸張さんは附いて居ても。」

「そんなこともありません。無邪氣な方ですねえ。」

「有邪氣だか無邪氣だか解らないけれど、亂暴なことだけは確かですよ。」

大阪生れの村松は佐竹に比べると非常に緩りとした調子で物を云ふのである。

「面白い所でしたよ。」
「マドレエヌは歸つて來ないのださうですね。」
「あの人は巴里の大學に入つて居ることになつたのですつてね。あの人の伯父さんの家に泊つてましたの。お母さんにはモデルをして居た話もしたのでせうがね、伯父さんなんか何も知らないのですよ。」
「さうですか。佐竹の畫はどうしても亞米利加風が拔けませんねえ。」
「戸張さんの描いていらしつたのを御覽になりましたか。」
「えゝ。あなたのも是非拜見させて下さい。」
「駄目です。」
「松本君が手紙を遣しますか。」
「時どき。」
「日本の小説をお讀みになりますか。僕の所へ前に出た物か知りませんが谷崎さんの刺靑と云ふ本を送つてくれた人があります。」
「お貸ししてもいいのです。」
「何時か拜借いたしませう。」
「遊びにいらつしやいませんか、モン・パルナスの墓場の向ひです。彼處に燒物の花瑕を賣つてる店が二軒あります。あの間を入つて行くと門があります。入口の左の階下と二階を使つて居ます。」
「お勝手がいいのですね。」

「そんなこともおまへんけれど、この佐竹君の家のやうに濕けはしまへん。」

「大阪のお言葉ね。」

「私の所の家主は若い夫婦なんですけれど縺つて居ますよ。仲は好いのですがね、奧様が僕の所へ來て村松、私は息子のジャンを醫者にするんだ。何故かと云ふと、私は良人の犯した罪が憎いから刀物で胸を突いて遣りたいのだ。けれど殺したくはないから手當てに困る。だから息子を醫者にして置いたらそんな時にうまく行くと思ふのだなどと話すんです。あなたが醫者になる方が捷徑だつて私は云つたんですよ。」

　この話をするうちに村松は佐竹の置いて行つた黄色の紙包みの巻煙草を一本取つて火を附けたが辛さうな顔をして直ぐに床の上へ投げてしまつた。

「面白い人なんですね。」

「亭主の罪つてどんなことをしたのだと聞きますとね、結婚した一年目ぐらゐにモン・マルトルのタバランの踊子を一週間情人にして居たんだと云ふのです。」

「其人は綺麗な人ですか。」

「綺麗ですね、パンテオン邊に居る黒子のルイズと云ふ女にそつくりです。黒子が無いだけです。」

「ルイズつて知つてます。いい顔ですね。そんな人ですか。」

「醫者にすると云ふ子は四歳です。」

「佐竹さんはどうなすつたのでせう。遅いとお思ひになりませんか。」

　とお加代さんは不安さうに戸口の方を眺めるのであつた。

「遅いですよ、遅いですよ。」

「ねえ、遅いですわねえ。」

『見に行つて來ませうか。』と村松が身體を起した。

『私も御一緒に行きます。』

『さうですね、行つて見ませう。』

『行きませう。誰かに引つ張られて酒を飲んで居るのかしら。』

あ『さ。まさかねえ。村松さん。』

『併し此儘出て行つたらお腹が空くでせう、御飯を上りませんか。佐竹は居ないでも箸やなんか解つて居ますよ。』

『止しませうよ。もう夕飯が出來ないでも、お菓子でも食べて置きませう。』

『さうしませう。』

『鍵げませんわね。』

『大丈夫、大切な物は細君の寫眞ぐらゐの物だ。島村君の女は重くて盗みやうもおませんわ。』

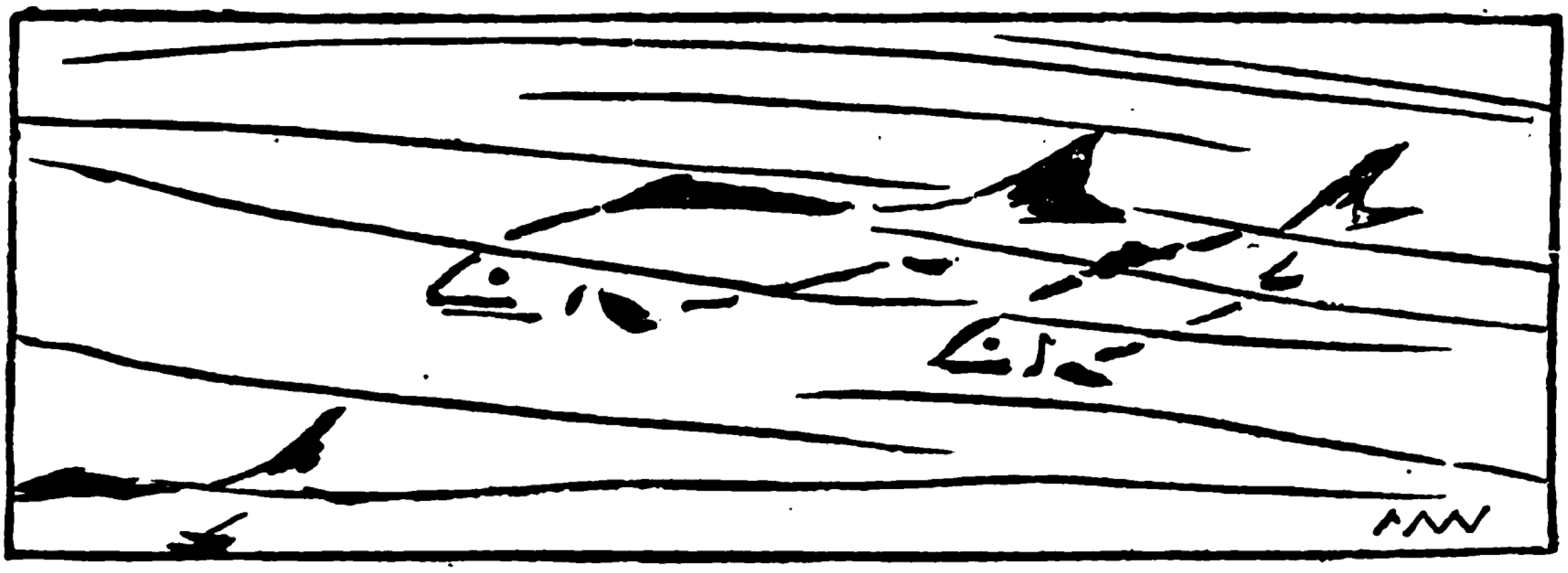
お加代さんを外へ出してから村松は洋燈の火を消した。

四

村松とお加代さんは薄い霧の中に寶石を置いたやうに見える珈琲店リラの灯を眺めながら海馬の噴泉の前を横切つたリラの店の先は中の桃色の灯と外の闇とがあやを作つて彼方此方の卓に散かつた黄色や紅や黒い色の酒の杯の上を悲しい程涼しい九月の微風が斜向に吹いて居た。テラスの一つの卓に佐竹は黒子のルイズと云ふ黒人女と、二人で飲み干した杯を七八つも中にして向ひ合つて、萬年筆で物を書いて居た。ルイズは太い腕輪の光る手で頬杖を突いて、佐竹の書いて居る大きい日本字を覗いて居た。

『佐竹君。』と村松に呼ばれて、

「うん。」と佐竹は驚きもせずに顔を上げた。
「君の眞似は出來ないね。」
ルイズが二人に椅子を指ざした。
「驚いたか、君。」
「驚くも何もあれへん。ひどい、ひどい、僕はいいとしてもお加代さんに濟まないわけぢやないか。」
「濟まないさ。お加代さん、濟みません。」
お加代さんだけはまだ立つて居るのである。
「お加代さん。」とまた佐竹は云つた。
「少し寒いですわね。」とお加代さんに云はれると佐竹は自身のしたことも、此處の何處であるかをも忘れる程嬉しがつてふらふらと立ち上つた。
「お加代さん、おいてきぼりにあなたをしたのはあなたに敬意を持つたからです。私にはあなたが島村君のあの肖像だつたのです。確かに確かにあれだつたのです。だから最上の敬意を挑つておいてきぼりにして來ました。許して下さるでせう。」
佐竹の顏はだんだん靑くなつて行く。お加代さんは村松と並んで腰を掛けた。村松が手を伸して今迄佐竹の字を書いて居た紙を引き寄せて見た。
この女は馬鹿の大將だ。二十五フランをおれから取つて行くことを忘れない。
こんなことが書いてあつた。
お加代さんが二人に別れて歸る時、其途中で思つたことは、もうこんな遊びもおしまひにしなければと云ふことであつた。



内地の海邊より

虚子

誰かに手紙を書き度いやうな心持がしてゐたが、扨て誰に書いたものか、一寸其人が思ひつかなかつた。ふと思ひついたのはあなたであつた。

時々手紙を貰つたのに其都度返事もしなかつた。御機嫌ですか。あなたの前には大同江の幅の廣い水が流れてゐる。綾羅島の烟のやうな楊柳が風に靡いてゐる。牡丹臺、乙密臺は後ろの空に聳えてゐる。永明寺の鐘は日に幾度鳴ります。あなたは今何をしてゐます。お牧さんは今何をしてゐます。私はふとあなたに手紙を書かうと思ひ立つた。

六七年前の朝鮮を知つてゐる許りで、其後の朝鮮は知らない。けれども毎日送つて來る京城日報と、其地に住んでゐる人の通信、其地に遊んだ友人の手紙

などで、私の心には絶えず曾遊の朝鮮が思ひ出される。あなたは其時以來同じ朝鮮の同じ大同江畔、同じ牡丹臺下にぢつと住まつてゐる。私は內地の海邊に移つたこともなく暮らしてゐる。お互に六つか七つ歳を取つたが、扨て其六七年間を何と考へたものか。お牧さんは何として其日を暮らしてゐます。お筆から手紙でも來ますか。素淡、洪さんの起居はいかゞです。

朝鮮もだん／＼內地化することゝ思ふ。所謂皇化に霑ふて來るので結構なことは申す迄もない。大同江畔に自働車を驅つて牡丹臺に出掛けることが出來ると聞いた時、私は愉快だと思つた。あなた所も、もうもとの板葺きと違つて、いつか送つて貰つた寫眞のやうな大建築だと思ふと自分の事のやうに嬉しい。けれども其內地化する反面に殖民地氣質といふやうなものが段々薄くなつて來はしないか。當て强く私の心を刺戟したところのものがもう大方亡くなりはしないか。私は其を心配する。其に就いてもお筆はどうしたゞらう。あのお筆のやうな女が居無くなつたら朝鮮も詰らないやうな氣がする。

私は內地の海邊にぢつとしてゐる。若し何をしてゐるかと聞かれたら何と答へていゝだらう。私は爲すことも無くぼんやり暮らしてゐると答へたらいゝだらうか。其とも斯んなこともしてゐる、あんなこともしてゐると數へ立てゝ見たらいゝだらうか。私には判らない。

そんな事を考へ出すと私は人に手紙でも書き度くなる。けれども誰に書かうかと其人を考へると、いつも容易に見つからない。今度もなか／＼見つからなかつたが、ふとあなたを思ひ出した時に私は急に勇氣を得て此手紙を書き出した。

此海邊にはいろんな人の別莊があるが、嘗て趙重應子も來て居つた。其は海岸に出やうとするすぐ手前の砂丘の上に建つてゐる貸別莊であつた。私はよく其前を通つた。二階の欄干には白毛布や浴衣が乾してあつた。海を見晴らすやうになつてゐる廊下には籐椅子が置かれてあつて、時々其處に横はつてゐる趙子を見受けた。京城で一度逢つたことはあつたが、先方は私の顏はもとより私の名さへ覺えてゐる筈は無いと思つたので私はいつも其前を素通りした。兼て病身だといふ事を聞いてゐたが、其爲め此の海邊に靜養に來てゐたのか。其とも他に何等かの意味があつたのか。

此の籐椅子の置かれてある廊下の正面に當つて、海上何十里かの沖に大島は横はつてゐるのである。天氣の晴れた日に其噴煙の見えることもあるが、何日間も其島の見えぬこともある。もと船長をしたことのある私の知人――尤も私より十歲以上の年長者で、今は此地に立派な邸宅を構へて餘生を養つて居る――は斯んなことを話した。「大島がはつきり見えたら必ず四五日うちに雨が降る。」

私は其から後ち氣をつけて見るが、果たして其人のいふ通りである。

私は此の人とよく酒を飲んで話すことがある。酒の醉ひを假りて話すので、あとから考へると、どんな話であつたか記憶に殘らぬことも多いが、好んで哲學上の話などをする。此人は佛壇とも神棚ともつかぬやうなものを其立派な邸宅の一間に拵へて居る。名前は忘れたが、何とかの命と言つたやうな名義のもので其が正面の中央に祭つてある。其は神でも無い佛でも無い、唯宇宙の本體を現はしたものだざうである。其から其兩側に樣々なものが祭つてあつたが健忘な私はもう大方忘れてしまつた。

「神といつたり佛といつたりするのも矢張り貴方が仰しやる宇宙の本體では無いのですか。」と私は其時

其人に尋ねて見た。

「さうかも知れません。けれども神とか佛とかいふ事になると其を拜まねばならん。私の本體は拜む必要も何も無いのだ。」といふのが其人の答であつた。

永明寺の和尚さんといふのはどんな人です。いつか寄せ書きの葉書を貰つた中に和尚さんの名が見えてゐた。字が旨かつたが、朝鮮人ですか、內地人ですか。

稅關橫から大同江を隔てゝ船橋里を見た夕暮の景色は忘れ兼ねる。殊にあの楊柳の柔かい丸い線は內地の柳などゝは違つた心持を與へる。たしか綾羅島にもあの楊柳が澤山あつたやうに記憶してゐるのだが、さう澤山は無かつたですか。

稅關長の鯨岡君の死は殘念であつた。あの稅關官舍に來て一夏を過ごしてはどうか。晝間は少し暑いが晚涼を追ふて大同江に舟を浮べれば一日の苦熱は忘れられる。一室を與へて勝手にほうつて置くから何か書きに來い。などゝ手紙をよこす度に言つて來てくれた。私は餘程行き度かつたが其頃から此の海邊に心を牽く別のものがあつたので到頭行かなかつた。

此の心を牽くものは遂に私に一つの建築迄させた。尤も其建築は彼の老船長をはじめ私の志を賛した財力ある多くの人の力で出來たので、私は唯だ其を思ひ立つたのに過ぎなかつた。其建築物は丁度昔此地に幕府のあつた時代に幸若や猿若の掛小屋があつたといふ邊に建てられた。其建物は、其强く私の心を牽くところのものゝ具體化であつた。私等は其中に在つて奏で舞ひ謠ふのである。

私は今迄神社や佛閣に參詣しても其神社や佛閣を唯建物として眺めてゐた。けれども此頃は其處に在る小さい辻堂一つでも、其が出來上る迄の因緣を思はずにはゐられない。今は朽廢してゐる冷めたい靜かな建物でも、其が出來上る迄の人間の血潮の騷立ちを思はずにはゐられ無い。

其に就いても氣になるのは畫舫である。これも主として鯨岡君の盡力によつたものであつたが、君が中途に斃れてから種々の人の種々の盡力のもとに出來上つた。殊に此の工事に携はつた船大工の献心的の努力を傳へ聞いた時私は初めて畫舫に生命が這入つたやうな心持ちがした。其處にも矢張り湧き立つた人間の血潮がある。一人ならず二人ならず大勢の人の湧き立つた血潮がある。

其にしても畫舫が動かぬといふのは本當ですか。舟が重くつて潮流の急な時に出喰はすと進まぬといふのは本當ですか。昔此地に在つた將軍の一人がこゝの海岸に船を作らせた。其は宋人の言に聞いて、自分の運命を前知して、遠く海に浮んで唐、天竺に渡らうとしたのであつたが、船が重くつて出來上つても浮ばなかつた、といふ話がある。大同江の畫舫も其類ですか。畫舫の保管はあなた處に託するとかいふ事であつたがどうなつてゐます。

併し乍ら大同江水に浮んだ畫舫はたとひ動かなくつてもよい。其は又私の心を牽くものゝ具體化の一つである。他日私は又お筆、素溪、洪さん等と其中に在つて奏で舞ひ謠ふ時が無いとはいへぬ。

此頃になると此地にも澤山の人が入り込んで來ます。よく子供の手をひいて歩いてゐる男がある。子供は何事をか父に話しかけるが、父は大方答へたり答へなかつたりしてゐる。大概な父は子供とは別々

の事を考へてゐるらしい。女もぞろ〳〵と澤山通る。女に二通りの匂ひがある。一つは甘いやうな匂ひがするのと一つは强烈な匂ひがするのと。甘い匂ひは白粉の匂ひで、强烈なのは香水の匂ひかも知れない。さういふ事に不案内な私は唯行き逢ふ途上の女を甘い匂ひの女、强い匂ひの女と區別する。此頃はさういふ二種類の女に澤山出逢ふ。

蔦のからまつた門がある。其は料理屋である。私は此奥でも老船長と話したことがある。老船長は、世の中に進步も退步も認め無い、唯運行を認めるといつた。其時丸い月が森の上に出て、灯取虫を防ぐ爲めの大きな篝が庭に焚かれてゐたことを覺えてゐる。

其門前を少し過ぎると其處には停車場がある。いつも相當に賑つてをる。私は三四日に一度は此の停車場を昇降する。東京に事務所を持つてゐる私は少くも一週間に一二度は其處に通勤せねばならぬのである。停車場にゐる人は皆相當に兀奮した顏をしてゐるが私は一向兀奮しない。私はぼんやりとして汽車に乘り、ぼんやりとして汽車を降りる。

思ひ出すのはあの殖民地的な粗大な汽車である。私は時々彼の黑い大きなものを思ひ出す。さうして惰眠から覺めねばならぬやうな心持がする。

私の事業は今のところ、たいして成功したといふでは無いけれども其でも不成功といふのでも無い。私の事業を背景にして世間に面出しをしても誰もさう私を輕蔑するものは無い。併しながら、これが、がらりと一變して、世間が皆私の敵になつて、私は到るところで垢罵され嘲笑されるやうな時が來たらどうであらう。必ずしもさういふ時が來ないとは限らぬ。

さういふ時が來て見度いやうな心持ちもする。其時はどんなに痛快なものかとも思ふ。私が生活の單調に飽いて、惰眠から覺めねばならぬと考へる時先づ私の耳に響くものはあの吼えるやうな釜山灣頭の汽笛の音である。二本のレールは其處を起點にして滿州の野を過ぎり、西比利亞を横斷して居る。お筆は今何處にゐるでせう。安東縣から手紙をよこした切りで私の方には消息を絶つてゐる。

私が内地の海邊の生活に飽いた時今度見出す土地は、是非共玄海を越した先で無ければならぬやうに思ふ。玄海の浪は先づ眠つてゐる私の血潮を湧き立たしめるのに最も恰當のものである。さうして落着く先は義州より手前か、安東縣より先きか。

もうあなた方のやうに十年餘りも住みなれて見ると牡丹臺程住みやすい土地は無いでせう。獨りあなた方に限らず、其地に住まつてゐる多くの人に在つては、もう今日になつて朝鮮内地の區別は無いでせう。「内地の海邊に厭いたら玄海を越す。」といふ言葉は餘程仰山過ぎた言葉に響くでせう。實際七年前私がはじめて其處を越ゆる時ですらも飯櫃を襷で縛つたのを片手に携へて背中に子供を負つた儘で乘り込んだ女を見た。其女等の爲めには玄海は表の溝川位にしか考へられてゐなかつた。朝鮮に行く位は朝飯前の仕事であつた。あなた等夫婦が大分縣から出て來て、永明寺畔に板葺屋を拵へたのも矢張りそんな心持であつたのでせう。お牧さんが三人の朝鮮人の賊と格鬪して知らん顔をしてゐたのも同じやうな心持であつたのでせう。

それはさうかも知れないが、私等のやうに内地の海邊に靜かな眠つたやうな生活をしてゐるものゝ身

に在つては、再び踰らぬ積りで玄海を越ゆるといふやうなことはこれで相當の發奮を要する。

其上其等の土地は果たして快く私等を迎へるであらうか。其處には私等の心の儘になる——私等の心を向ふに移して私等と同じものにすることの出來る——江山のみがあるであらうか。其處には今日の生活に苦しみもがいてゐる多くの人はゐないであらうか。私は其地の宿屋にあつた時に、私や同伴の友人を訪問して來た多くの人に面接した。私が其等の人から受けた印象は決して快いものでは無かつた。其等の人の額の皺には惡戰の痕があつた。其等の人の鋭い眼尻には苦闘の襞積があつた。其等の人が、尺寸の土地でも一片のパンでも其を分與せよと內地から入り込んで來たものを、どんな顏色をして迎へるか。其は決して無心の江山と同日に見ることは出來ぬであらう。

若し義州以南の土地が私を容れなかつたら、其處には別に安東縣以北の土地がある。今度又新たに長春以北の土地が出來たさうである。西比利亞にすら自由に居住し得る契約が結ばれたとかいふ事である。二條のレールは際限も無く北へ／＼と人を導く。お筆の手紙に斯うあつた。

「……天草や島原の女が一番えらいんですつてね。豆滿江を拔手を切つて泳ぐんですつてね。」

……安東線の出來る時分の事ですつて。お金は皆指輪や腕輪にして肌につけ、金目なものは風呂敷に包んで自分の背中に背負ひ、大きなものは苦力に背負はして五六人位宛か一組になつて、其安奉線のレール傳ひを北へ／＼と歩いて行くんですつて。其がをかしいのよ。皆裾をからげて赤い湯もじを出して、大きなお尻を動かし乍ら北へ／＼と歩いて行くんですつて。其が私には行く許けないけれど、其人のお話は面白いのよ。目に見るやうに話すんですもの。

其が皆第一軍ですつて。豆滿江を拔手を切つて泳ぐ手合ですつて。私何だか其女は今でもレール傳ひに北へ〳〵と步いて行つてゐるやうな氣持がするの。……」

これは前夜に新義州からよこした手紙であつたが、其翌日安東縣からよこした最後の手紙にも斯うあつた。

「……私昨日汽車の中で聞いたあの話が面白くつて。まだ赤い湯もじを出して大きなお尻を振つてレール傳ひを北へ〳〵と行つてゐるやうに思はれるの。もう長春ハルビンはとつくに過ぎてしまつたでせうね。……」

其お筆は何處に行つてゐるでせう。

此の六七年間の私の生活！　此の海邊に在つて強く私の心を牽いたところのものに殆ど沒頭して日を暮らした此の六七年間。東京に事務所を置いてやつてゐる事業は、私の勤惰に拘らず、相當に功果を收めつゝある此の六七年間。其は牡丹臺が聳え大同江が流れてゐるやうに、唯一個の動かすことの出來ぬ事實として私の前に現前してゐるだけのことである。其以上の意味は私には判らない。老船長は「物の進步も退步も認めない、唯物の運行を認める。」と言つた。

私の事業なんか詰まらぬ事業だが、其でも相當に運んで行くのは唯古くからやつて來てゐるといふだけの理由に外ならぬ。今から二十年前に始めた仕事は今日初めて著手する仕事に比して非常に安易であ

る。今日私のやつてゐるやうな仕事を思ひ立つ人は數限りも無くある。しかし其は人の蹈まへてゐる土地を更に蹈まうとするのであるから容易なことでは無い。非常な金錢と勞力をかけて其で大方失敗する。此一事を見ても維新後一時崩壞された社會組織がだん／＼と動きの取れぬものになつて行つて、古い歷史を有するもの程其位置の安固であることを證明してゐると言つてよい。——尤もいくら古い歷史を持つてゐても或物に逆行すれば忽ち崩壞を免れぬことも亦た澤山の實例に見る通りであるが。——さういふ意味に於て內地の生活よりも殖民地の生活には自由があり活氣がある。あなた方夫婦が大分縣から蹈み出して一躍牡丹臺の王樣になるやうな自由もある。お筆が私と二十分間の夫婦を約束するやうな自由もある。剛三初め男女の一連が忽ち京城に現はれ忽ち義州に現はれるやうな活氣もある。慶之助の如きいゝぐうたらですらもが尙ほ平氣で鷄林八道の山河を股にかけてをる。

けれども其殖民地でも、もう朝鮮は餘程內地化しつゝあることゝ思ふ。あなた等の茶店ですらもが、もう十年の歲月を閱するではありませんか。第二のお牧さん夫婦があつて、大分縣を出て來て、牡丹臺に足を蹈みかけたところで、もう第二のお牧の茶屋はさう容易くは出來はしない。今日の朝鮮に果たして剛三やお筆のやうなものを容易に容れる天地があるであらうか。箝口具を箝められたゞけで何百圓かの月給を貰ふ豪傑が一人でもをるであらうか。

お筆の感心した、あの赤いゆもじを出して大きな尻をふり乍らレール傳ひに北へ／＼と進みつゝあるといふ第一軍は今何處に居るか。其お筆は今何處に居るか。

其レールを傳ひ／＼行つた先きには今大戰爭がおつぱじまつてゐるではありませんか。赤いゆもじは

其邊迄行つてゐるのかも知れん。

內地の海邊の生活は單調です。庭には松が澤山生えてをる。其松が一年に一尺位宛綠を延べて行く。私の家でも私が引移つてから五六尺は延びた譯である。夏の末になるといつでも蜻蛉が其松の梢から生れ出たやうに飛ぶ。秋も半過ぎになると黑板の文字を消したやうに其蜻蛉は大空からゐなくなつてしまう。土地には赤い鷄頭がだん〱黑ずみながら突立つてゐる。其は霜が來たのである。其から雪が來る。梅が咲く。葵が咲く。松の綠が一尺宛延ぶ。

私は私の心を牽くところのものに沒頭する。每日のやうに彼の建物に出掛ける。

粗大な殖民地的な大きな汽車が釜山を出てから北へ北へと進む。長春、ハルビンを過ぎてもつと〱進む。雪の中をもつと〱進む。

…………………

しかしあなたの茶屋生活も面白くはあるまい。同情します。

赤いゆもじだつて面白くないに極つてゐる。

…………………

唯事實があるだけの事だ。

もう手紙もいやになつた。お牧さんによろしく。



戯曲

帽(ハツト)ピン

中村吉藏

登場人物

堀田吾市

その許婚の妻　二木登美枝

その情婦　金井たけ

湯屋(バス)の主人　諸岡虎吉

學生　浦中粂三

及宿屋の主婦

場所

米國カリホルニヤ州オークランド市に於ける日本人旅館の客間(パーラー)

時

現代

○景　はオークランド市のA街の日本人旅館の客間、正面には四つ許り、窓が明いて護謨樹、椰子などの茂つた、別莊風の隣家の庭が、乾いた夏の日光の下に、カン〳〵照らされてゐるのが見える、下手は暖爐に隣つて出入口、上手は中劃の、黑い、大きな、二枚扉、室の中央には安價の、派手な卓クロスの下に蔽はれた圓卓、脚の萎えかゝつたり、塗の剝げたりした椅子が數脚、その周圍に說かれて、窓に寄つた片隅には、白や巾のカヴアーの塵に染んだ安樂椅子、有合物の石版畵の掛額、輸出向に出來た色刷の日本の武者畵の版畵などが、處々の壁間に揭つてゐる。

○

堀田再市は、歲よりも五つ六つ若く、三十歲前後に見える男子、縞の襯衣の上に、背廣を引かけ、頭髮を奇麗に刈つて黑く光らせ、髥を剃り立ての頤のすべ〳〵してゐるが、眼中は何だか暗い、不安な影を帶びて、椅子に腰を卸し、シガーをすぱ〳〵吹かせてゐる、一方の安樂椅子の片端に、浦中義三は腰をかけて「日本新聞」を片手に持ち、讀むでもなく、讀まぬでもない樣子である、日本仕込の、何處か不恰好な洋服をキチンと着て、頭搔を剃つた跡にはまだ手慣れぬ、薄い創痕などの見える、渡米後、まだ月日の淺さうな二十三四歲の、色の赤黑い青年である、隣家から響いて來るピアノの音に

談話は一時、途切れてゐる模樣であつたが、堀田は又思ひ出したやうに口を切る。

堀田「惡い事を云つちや聞かせない、歸朝した方が寧ろ君の前途の爲めになるよ、アメリカは學問をしに來る處ぢやないさ」

浦中（煮え切らぬ調子で）「そりやまア然うでせうが、でも東部へ行つたら立派な大學もあるし、有名な教授も揃つてゐるんだから、行つて見度くもあるんですよ」

堀田（冷かに笑つて）「太平洋沿岸へ來る日本の苦學生は、始めは皆然ういふ目的を持つてゐるんだが、家內勞働で金なんか溜まるもんぢやアないし、食つて行くのが關の山さ、それで終了にはずる〳〵べつたりにその方が本職になつて、十年も十五年も、この界隈でゴロ〳〵して暮らすのか落なんだよ、現に君のゐる青年會なんかにも、隨分そんな連中が深山あるだらう、實に僕だつて、當初はその意氣込だつた

のが、何時の間にかとんだ横道へ外れちやつたんだよ」

浦中 （少し躊躇して）「實は僕ゃそれで、少々忌氣がさして來たんです、それに昨日始めて窓拭きに行つて、高い五階の窓口に上つて、下の方を見ると眩暈がして、クラ〳〵しさうになつたのでこれぢやァ生命掛だと思つて、金も何も要らなくなつて、中途から逃げて歸つて來ました、夫人が后から追駈けてブツ〳〵云つてゐましたよ（頭を掻きながら）これぢや、この先、苦學なんか覺束ないもんです、故國へ云つてやつたら、學資の五十弗や、百弗贈つて寄越さない事もないんですが、苦學して成功するつて、親父に堅く云ひ切つて來たんですから、まだ二月も經たぬ中に、急にそんな弱音を吹くのも少し極が惡いので、迷つてるんです、一體この加州の氣候がそぐわないのか、……體の工合もあんまり善くないので、永く居たい氣持はしないんですがね?!」

堀田 （擽つたさうに笑つて）「東部へ行つたら君、氣候は尙更酷いんだよ、大布呂敷か何か引かぶせるやうで、暑いと云つたら百度以上、寒くなつたら靜まで凍るつていふんだからね、その點にかけちや加州なんか樂なもんさ、年中、春見たいなもんで香橘は實るし、花は絕えないし、合服一着で通されるんだものね」

浦中 「然うだつて云ふ事ですね、でも東部ぢやア、ジヤツプなんかつて、兒童に石塊を投げ附けられる心配もないんでせう、婦人と交際も出來るつて話ですから」

堀田 「そりやア、然うかも知れない、金は權也つて奴さ、ぢやァ君は矢ッ張、學資を贈つてくれるやうに、親爺さんへ云つてやつたら善いだろう」

浦中 「それで貴方に御頼みがあるんですがね」

堀田 （不審さうに）「何んだね？」

浦中 「貴方から家の親爺へ手紙を一つ遣つて戴けます

まいか？」

堀田（苦笑して）「僕が手紙なんか遣つたら却つてぶち毀しだよ、第一、僕は君の父を知らないんだからね」

浦中「イヤ、貴方は加州沿岸の成効者だつて事が、縣下で評判になつてるんだから、父も信用してくれますよ」

堀田（苦笑）「ハッハ、僕が成効者だつて?!」

浦中（眞面目に）「實際です、貴方がサクラメントで、砂糖大根を作つて、大さう成効してられるつて事が、故國の方では大分、評判になつてるんです」

堀田（辯解的に）「成効！……然うさ、成効したと云へば、そんな時代もあつたらうね、併し、今日日おヤアこんな宿屋にゴロ〳〵してる仕末だからね」

浦中「でも、是非手紙をお願ひしたいんですが？」

堀田「それは御斷りするよ、僕は今、他人の事に關係つてられる身分ぢやアないんだからね」

浦中「何か御面倒が起つたといふ事を聞くには聞きましたが……」

堀田（少し、周章てた口調で）「もう彼是噂をしてるんだらうね……だがまだ新聞には書きやがらんな（てれ隱しに笑つて）イヤ斯うしてアメリカ三界へまで出かけて來て、女で苦勞するやうになつちや人間も駄目だね、君なんかもケチの附かない中に、サッサと日本へ歸つて、立派な花嫁御でも貰つた方が善いさ、ヂッとしてゝも食べて行くに不足のない御大家ぢやアないかね、君の家なんかは？」

浦中（頭を搔いて）「イヤ、實は僕には許婚があるんですが、その女が氣に喰はないんです、而もそれが父の親戚の娘で、僕は養子でせう、忌だとも云へないし、だからつて、急に結婚するのも尚更困るから、少し勉强して來るつて、此方へ出かけた譯ですよ、これで日本へ歸つたら、忌應無しにその方の始末を附けさせられるんだから、それが一等閉口するんで

す」

堀田 （同情的な口調で）「許婚なんかつて奴は困るね、實際……併し、アメリカ流の自由結婚だつて、後悔する時が來ないとも限らないから、何方が善いか分つたもんぢやない、何うせ人間の智惠つてものは底が知れてるんだよ、女にかゝつて手を燒かない男子は、まア、世界中に一人もあるまいね」

浦中 （微笑を鼻先に浮せて）「然う云へばこの新聞にも、駈落した女の寫眞が出てゐますね、捕まるへか、密と所在を知らせてくれたものには、百弗の懸賞金を出すつてありますよ、御覧でしたか？」

堀田 （嘲るやうに頷いて）「そんな人三化七でも、アメリカへ渡つて來ると女と名が附くから難有いぢやアないか？それで善い氣になつて附上つて、馬鹿な眞似をやり出すんだよ、手に了へないな！」

浦中 （新聞を覗いて）「サンノゼとありますが、この男子は何商賣をしてるんでせう？隨分鼻下長と見えますね？」

堀田 「何うせ農園の、人夫頭位の處だらう、尤も女の數が少いから、逃げられら惜しいんだよ、女旱がする國ぢやア、男子もから意氣地がないな」

浦中 「何うせ例の寫眞結婚か何かで、夫婦になつたつてんでせうね」

堀田 「まアそれ位の處だらう、併しその寫眞の面ぢやア、男子の撰好なんかせられる柄ぢやアないさ、隨分圖々しいもんだね」

浦中 「僕なんか金を附けて貰つても、御免蒙りますね」

堀田 （苦々しく笑つて）「然うさなア……併し當の男子の身になつて見ると、一生懸命なんだらうよ」

浦中 「搜し出して殺さうとでも、思つてるんでせうか？」

堀田 「ハヽヽヽ、殺す處か、舐めてやる方の口だらうな」

（入口の扉をノックする）

堀田「お入りー」

諸岡（白髪交りの、丸く太つた赤ら顔をつき出して）「ハーロー、ミスター、御客さまか？」

堀田「ハーロー、構はない、入り給へ」

浦中（起上つて）「僕は失禮します、いづれ又伺ひます」

諸岡（入つて來て）「御免なさい、御用談ぢやアありませんか？」

堀田「君、僕が紹介しやう、この方はミスター、浦中、僕の郷里の富豪の息子さんだ、二月程前に渡米したんさ……これは王府浴の主人ミストル諸岡、布哇から、加州かけて彼是三十年近くも居られる元老組の一人だ」

諸岡（頭を掻いて）「元老組はアメリカぢやアあんまり幅が利きませんよ、何卒御懇意に……」

浦中「何卒よろしく……ぢやア僕はこれで失敬します」

堀田「然うですか？ぢやア又お遊びにおらつしやい」

諸岡「チと、私の處へも來て下さい、直、この近所だから」

堀田「私の處か？相不變、布哇癖があるね」

諸岡「ハヽヽヽ、それは仕方が無いさ」

浦中「ぢやア左樣なら！」（出て行く）

堀田「グッド、バイ」

諸岡「グッド、バイ」

堀田（椅子へかけ直つて）「處で、話は何うなつたね？」

諸岡（向き合つた椅子へ腰を落付けて腕叉をして）「何うも困つたね」

堀田（眉を顰めて）「矢ッ張同じ事を繰返してるのか？丸で赤兒だからね」

諸岡（弄ふやうに）「君も色男だ、何うしても思ひ切れねえつて云ふぜ、私もスッカリ同情して了つたよ」

堀田「下らないッ、君ゞでが戯談にもそんな事を云つてくれちや心細くなつて了ふぢやアないか（吐出すやうに云つて、シガーの火を附かへて）第一、君はお

竹から頼まれて、引受けてくれたんだらう」

諸岡「ウム、そりやア引受るには引受けたんだがね、段々逢つて聞いて見ると、登美枝さんが少々可哀さうになつて來たよ、向ふぢやア三年前から許婚した仲で、アヽして遙々太平洋を渡つて來ると、十二指腸蟲で、二週間も天使島へ引留められてさ、漸つとの思ひで上陸が叶つて、それから教會で儀式まで濟ませたんだらう、ヤレ嬉しやと思ふと、直に離縁の宣告と來ちや、夢やら何やらサッパリ分らないつて云ふのも尤さ、」

堀田（不機嫌さうに）「そんな事を君に、聽きに行つて貰つたんぢやアないよ」

諸岡「そりやア分つてるさ、だが然ういふ事情で、向ふぢやア何處までも君の妻だから、五年でも十年でも、一緒になれる迄待つと云ふんだからね、そりやナカ／＼確りした覺悟を持つてるんだ、今時、感心な女ぢやアねえか？」

堀田「基督教信者だからあんな馬鹿堅い事を云つてるんさ、若い女が五年の、十年のつて、此の加州で獨身生活がつゞけて行けるもんぢやアない、第一、周圍が然うさせて置きやアしないよ」

諸岡「それもいろ／＼云つて聞かせたんだよ、嚇したり、賺したりもして見たんだが、耳にもかけねえんだ、揚句には、結婚式を擧げた晩に、君から離縁の宣告をされた時の、悲しさやら、情なさやら、しみじみ話して涙をバラ／＼こぼすんだもの、さすがの私も弱つて了つたよ、殺生だからな」

堀田（暗い眼色をして）「だつて僕の方は正直に、自分の罪を告白したんぢやアないか？他の女と汚れた關係のある體だから、汝のやうな無垢な女と夫婦になる希望はないつて、此方は下手に出てるんだ、一體あの女が渡米するつて云つて來た時から、見合せてくれつていふ手紙も度々出してあるんだ」

諸岡「向ぢや、お竹と君と手が切れて、君が正道な人

間になるやうにせずには置かぬといふ意氣込みなんだ、あんな若い娘が殊勝な心掛けぢやアないか？さすがの私も、何んだか小ッ恥かしいやうな氣持がしたよ、人間つて、妙なもんだな」

堀田「そりや可哀さうでない事もないさ‥‥併し、今更お竹を何うする事も出來ないだらう、一通りや二通りの關係ぢやアないからな、そりやア君は百も承知ぢやアないか？」

諸岡（頷いて）「ウム、そりやアお竹も君の爲めに、容易ならぬ苦勞してるさ、亭主まであつた女が、あれ程の眞似をして、君に入れ揚げて來たんだからな、ぞれを知り拔いてる私が、お竹を何うしろと、君に云へた義理ぢやアねえさ、お竹にしても私とは長い間の知り合だから、彼奴の不爲めになるやうな取計らひも出來ねえんだ、何うもとんだ安請合をやつて、これぢやアあがきが附かねえ、後悔してるよ」

堀田（嘆息を吐いて）「君が當惑してるより以上に、實は己も當惑し切つてるんだ、サクラメント溪谷の己の事業も、元はお竹があゝして酌婦稼ぎの血のやうな金を注ぎ込んでくれたのが手がゝりになつて、一時はチヨッと當つたのだが、それが去年のやうに失敗すると、善い所には信用がないから融通が利かない、己も氣まぐれだから、つい飲んだり、博つたりの病が出てさ、とう〱無一文になつて逃げ歸つてる矢先だらう、今度といふ今度は考へない事もないんだよ、己の從前踏んでた途は間違つてやしなかつたかな？何時迄斯うしてぐづ〱してゐちや、それ、あの、シーラネバダの砂漠の、死の谷にでも突當つた旅人のやうに、悶え死に死ぬんぢやアないのか知らとな、心細い氣がひよい〱この頭の隅から飛び出して來るんだ」

諸岡（思當るやうに）「ウム、然う云やア私だつて同じ事さ、旨く行つたらもう今頃は百萬分限になつて、自働車の五つや、六つ抱へ込んでる筈だつたのが、

五十幾つといふいゝ歳をして、風呂屋の亭主で人様の汗や、垢を食つて生きてるやうなもんだからな、これぢやア寧そ日本へ歸つて、百姓でもやつた方が氣が利いてるんだが、歸ると云へばあの婦の愛蘭種めが、頭を掉りよる、あんな庖婢の、鼻曲りの、何處が善くつて、私は惚れたんだろうな、罰當だよ」

堀田「眞實に罰當だな‥‥已も今から日本へ歸るつて譯にも行かないし‥‥だからと云つて、このまゝぢやア何うしても眼前に死の谷が見えて來る、出發點を變へんけりやならない、出發點を變へる時機が來たのかも知れない」（起上つて悶々して歩き廻る）

諸岡「出發點を何う變へるんだね？」

堀田「お竹と斷然、手を切つて了はふかと思ふんだ」

諸岡「然うすりやア登美枝さんは何んなに喜ぶだらう、そりやアもう躍り上つて喜ぶよ、あの娘を世話してる教會の平牧師もさぞ滿足するだろう‥‥（云つて、稍々考へて）だが君、お竹の失望する事を思ふと‥‥私は何んとも云へなくなるな‥‥私には手を引かせてくれ、一切關係無い事にしたいな、彼女とは昨今の顏馴染ていふ仲ではなしさ」

堀田（嘲笑）「ハヽ、十年前に、布哇で君と關係してたといふ事も、聞かないではないさ」

諸岡（周章てた顏色）「エ、そんな事を喋舌つたのか‥‥（苦しい笑顏になつて）そりやア昔話さ‥‥もう一昔、前の話さ、今ぢやア夢にも見た事はないんだ、お竹だつてこんな皺くちや爺を何んとも思つてやしない、イヤ、親父さんだつて云つてる位だからな、實際、君がそんな事を思つてるんぢやア私は甚だ困るよ、登美枝さんが心から氣の毒になつて、あんな事を云出した丈だからな、事實、この胸を割つてゞも見せたいよ」

堀田（手を掉つて）「ドン、ケヤーだ、‥‥そんなつもりで云つたんぢやアないさ、君も年を老つて、大分人間が善くなつて來たよ」（口元で笑ふ）

諸岡　（苦笑）「實際、年は老りたくないな、これで昔なら君、登美枝さんを些つと何うかしてやろう位の、謀反氣を起しかねやしなかつたんだからな、もうから意氣地がなくなつちやつたよ」

堀田　（戯談らしく）「然う云はれると、何んだか危險だな」

諸岡　「イヤ、此方で手を出さうとしたつて、あゝ堅い一方の處女氣ぢやア、機會がつかねえよ、何しろ君に限るつて云ふ逆上方だからな、君も罪造りだ」

堀田　「そんなのが一人限りだと、僕も身が固まるんだがな」

諸岡　（苦笑）「何うもとんだ處で惚けられるんだな……併し君、お竹も可哀さうには可哀さうだ、私は何うも彼女に、こんな相談は持出せないよ」

堀田　「君が云つてくれなけや、僕の口からは何うもね」

諸岡　（頭を押へて）「困つたなア……一體、私は折々疑る氣が起るんだよ、一夫一婦なんな窮屈な事を人間は何うして始めたんだろうな、誰がそんな厄介な法律を造り出したんだろう？」

堀田　（沈欝な口調で）「誰が造り出したつて譯もないんだろう」

諸岡　「造り出したにや違ひねえよ、現に君、鹽湖の方へ行けやア、モルモン宗の御本山があつて、彼處ぢやア何人女房を持つたつて差支無いつて云ふぜ、何んでもあの宗旨の開山樣は一時に、何十人つて妻があつて、それでいさこさ無しに治まつてたていふんだから、世の中は可笑なもんぢやアねえか？」

堀田　（輕く笑つて）「ブリガム、ヤングか！二十四人の妻を持つて、それに百何十人つて子供を産ませたお庇で、鹽湖砂漠が人間の住む國になつたつて、後の世からも救世主だの、開山樣だのつて、崇められてるんだね、然う云やア己等が、二人女房を持つ事が出來ねえていふのは、窮屈な世間になつたもんだ

な、眞實……」

諸岡 (氣輕に)「寧そモルモン宗にでも入ろうか？お互ひさまに……」

堀田 (眞面目に)「今ぢやアそのモルモン宗も一夫一婦つて、世間並にならないぢやア、周圍が承知しないつて云ふんだからな、第一、女の方で治まらないから仕方がないさ」

諸岡 「女に段々、惡智惠が附いて來やがつたんだな、お庇で世の中が治まり難くなつたんだよ」

堀田 「それも然うだ（思案して）だが、二人の女を一時に愛するていふ事も難かしいぜ、隨分苦しいもんだよ、地獄の責苦だと思ふ事もあるよ」

諸岡 (ニヤ〳〵笑つて)「又、惚けるのかい、とんだ間役だな、……だが君、男子つて奴は、一時に女の二人や三人、可愛がつて行かれないて事はねえよ、ツレ、今の、モルモン宗の開山樣のやうに、二十四人の妻で治まつて行く非凡のがあるんだからな、處が女つて奴は然うは行かねえ、唯つた一人の男子しか、心から可愛がる氣にはなれねえんだよ、それ丈、馬鹿正直に出來てるんだからな、可哀さうなもんさ」

堀田 「そりやア女つて奴は、まア偶像信者に產まれ附いてるんだね、信仰し始めたら一人の男子を偶像にし切つて、崇め奉らなけや置かないんだ、偶像にされた男子の方から云やア、信者が五人出來やうが、十人あらうが、御利益を授けてやるに差別は無い筈だが、矢ッ張、人間の心つてものは、何處か、もろく出來てるんだよ、さすがの己も此度許りは弱り込んでるんだからな」(肩から出るやうな嘆息をする)

諸岡 (屈托さうな吐息をして)「斯うなつちやア登美枝さんも捨てられねえし、お竹とも切れられねえ、私なら兩手に花つて奴だが君は何方か一人に定め了はなけや氣が濟まねえていふのなら、まアそこは君の考へ通りにするより外、仕方がねえな」

堀田 (哀願的に)「此場合、君に逃げを張られちやア困

るぢやァないか？何うかしてくれ給へ、云はゞ僕の一身の浮沈の極まる處だ」

諸岡　（當惑し切つたやうな顏色）「そんな事を云つて私の首つ玉へかぢり附いて、深淵の底へまき込まうとするのかい、もう善い加減な處で堪忍してくれい」

（扉をノックする音）

堀田　（怯としたやうに）「誰れだ？」

（扉の外で）「私！」

諸岡　（低聲に）「お竹だ！とう〳〵やつて來やがつた」

堀田　「お入り！」

お竹　（扉を明けて、輕い夏衣裳に、孔雀の羽毛の附いた帽子を着て、金歯を見せて、莞爾笑つて入つて來る）「ハーロー、デヰヤー！……」（つか〳〵と堀田の傍へ寄つて、いきなり握手して、膝の上へ重りかゝるやうに坐る）「ハーロー、ミスター、諸岡……」（握手する）

諸岡　「ハーロー、……えらくめかして來るもんだから、何處の貴婦人かと思つたよ」

お竹　「貴婦人には極つてるぢやァないかね？（調子を變へて、甘へるやうに）親父さん、何うしたのよ？あの娘の始末はもう附けて了つてくれて？」

諸岡　（首を掉つて）「處がナカ〳〵然うお手輕にや行かないや、難物だよ、向はこの色男に首つ丈なんだからな」

お竹　（わざとらしく笑つて）「ぢやァ寧そ私の方から引下つてやろうか？この罪造りめ」（堀田の頰を抓る）

堀田　「痛いッ、止せよ」

お竹　「何んだね、そんな邪慳な眼色をしてさ、……一體、何んな面をして結婚式なんかやつたんだらう、見度かつたわ、その娘つて何んな子？親父さん、可愛い子なの？一度、拜んでやり度わ、第一私より歳が若いつてから癪だわ、それに敎育もあるつてんだろう、男子つて浮氣だから油斷も隙もなりやしない、私はもう氣が氣でないんだよ、察しておくれな

ね」

諸岡「私に突かゝつたつて仕様がねえぢやァねえか、そこの御本尊様の御心持次第のもんだからな」

お竹「そりやァ然うさ、結婚式なんかやる程の了見だから、この男子もその娘に些いと氣があるんだよ、イヤ、些いとどころぢアない、大ありだ位の事はチヤンと察してらアね、私もそれが分らん様なお馬鹿さんでもないさ」（やけに紙卷烟草を吹かし始める）

堀田「然う汝のやうに、頭からガミ〳〵嚙み付くんぢやァ、相手にも何にもなれないぢやァないか？結婚式を上げたつて、それは眞の氣安めの儀式丈だつて云つてるぢやァないか？邪推が酷過るよ」

お竹「氣安めの儀式丈なら、この私と一番先に、それをしてくれても善い筈だつたよ、人を踏付にしてるんだわ」

堀田「汝とぢやァ、結婚許可證が取れないぢやァないか？分つてる癖に、今更、人を戯めるもんぢやァない」

お竹（泣目立つて）「二口目には結婚許可證だ？ハイ、私は何うせ日蔭者の、酌婦の分際ですからね」

堀田（困つた顔色で）「まァ落付いて話をしたら善いぢやァないか？」

諸岡「眞實だ、お竹さん、まァ然う一酷に物を云つちやいけねえよ、堀田君の今度の事情も、汝には善く云つて聞かせてあるんぢやァねえか？許婚つてのも大阪にゐる堀田君の叔父さんが、故郷の母等と相談して無理押付に取極めて了つたやうなもんだから、此の男子に罪があるつて譯ぢやァねえよ、堀田君の身にもなつて考へてやるが善いんだ」

堀田「もつと理解してくれなけやァ、僕は全くやり切れないよ」

諸岡（賺すやうな口調）「私まで斯うして奔走してるのも、皆汝のためになるやうにと、思つての事だよ、汝に頼まれたから、忙しい時間も潰してる譯ぢやァ

ねえか?」

堀田「實際、君には濟まないよ」

お竹（絹の帛で涙を拭いて）「御免なさい……私はこれが病氣なのよ、汝さんがあんまり平氣な顏をしてるんだから、つい、ムカ〳〵と腹が立つちやつたの…………そりやアまアお腹の中ぢやアいろ〳〵心配してるんだらうね」

堀田「心配してる處の騷ぎぢやアないさ」

諸岡「堀田君も眞實、氣の毒だよ、私は何うも判斷が附き兼ねる……彼方も此方も皆、氣の毒だらけだからな」

お竹（探るやうな眼色で）「親爺さんは、あの娘の處へ行つてまで泣付かれて來たと見えるね、汝さんも齡の加減で箍が弛んだんだらう、眞實に些と確かりしておくれ、依賴無いよ」

諸岡（頭を搔いて）「今度は私を叱るのかい、何アに、泣付かれた位でぐらつくやうな佛性の私でもねえが、人間苦勞をし過すと、慥かに意氣地は無くなるよ、まア二人でゆつくり話し合つて見な、私は一寸と歸つて、湯加減を檢て來やうよ、嬶が又、ガミガミ云ふと、うるさいからな」

堀田（困つた顏色）「君が歸つちやアいけない、まア少しゐてくれ給へ、賴むよ」

お竹（笑顏を見せて）「もう怒りやアしないからも少しゐて下さい、それから肝心な汝さんの話もまだ善く聞かせて貰はないぢやアないかね?」

諸岡（浮腰で）「それはもう堀田君によく話してあるから、聞いてくれ給へな、何しろ一寸と歸つて來る、別に手間は取らない、直と又やつて來るよ、左樣なら」（匆々に立つて出て行く）

お竹（後を見送つて、靜かに元の椅子に立戾り）「一體、何うしたつていふの?……相不變、乳臭い事許り云つてるんだね?」

堀田（深い溜息を吐いて）「世間不見で育つて來たお孃

さんだから弱つて了ふよ」

お竹（顔色を讀むやうな眼色で）「汝さんの心持次第ぢやァないかね……一旦離緣するつて云渡したらもうそれ限のものさ、承知せうが、しまいが、それは向の勝手ぢやァないか、高が日本から渡り立ての新米の小娘だもの、生意氣な事を云へた義理ぢやァないわよ」

堀田（沈んだ調子で）「兎に角、式まで擧げたんだから、事が面倒になつて了つたんだよ、向にや後楯に、牧師なんかゞ附いてるんだからな」

お竹（發作的に、眉をピクリと動かせ）「私をうまく欺して置いて、そんな式なんか擧げたのが惡いんだ、……イヤ、汝さんは口先ぢやァ、善い加減な事を云つてるけれども、胸の底ぢやアもう私に忌氣がさしてるんだよ、それでなけや戲談にも今度のやうな眞似をする氣遣ひは無いさ」

堀田（不快さうに）「お定り文句だ、もう耳胼が出來てるよ」

お竹（嶮しい眼色になつて）「それなら然うと男子らしく、乾張云つてお了ひよ、汝さんに引かゝつたお庇で、私は何れ程酷い目に逢つてるか知れやァしないよ、そりやア惡名なんか附けるのは世間の勝手だが、私は年中、素赤裸で、身の皮まで剝かれ通しぢやァないか？今でも弗箱を積まうてお客の二人や三人ないぢやァないんだが、皆、首を揮つて、相不變の酌婦風情で通して來てるのも、誰の爲だと思つてるんだね、その苦勞が少とも酌めないやうな汝なら、私だつて又考へ直さないぢやァないさ」

堀田（侮辱されたやうに感じて、ピク／＼眉毛を動かせ）「然う云はれりやア、己はいかにも意氣地無しだ、汝にこれまでさん／＼借錢をして、サクラメント溪谷で砂糖大根やら野菜やら少し大仕掛な仕事をしかけちやア、到頭ア、いゝ襤褸を出して了つたんだから、顏向も出來けない仕末さ、己よりずつと後から

渡つて來た男子で、もう千英町の、二千英町のつて、土地を借り込んで、相當の事業家になつてる者もゐるのに、己のは宛で磧の河原の石ころ見たいに積んだり、崩したり、積んだり崩したりよ、そこで今後は己も考へ出したんだ」(腕叉をする)

お竹 (不安さうに、相手の顔を見て)「何を考へ出したんだね？」

堀田 「イヤ、こりやア眞面目な相談だから汝にも善く考へて見て貰ひ度いんだ、善いかね、此際の事だから、廻り氣なんか出さないで、心身になつて私の云ふ事を聞いて貰ひたいんだよ」

お竹 (鼻先で笑つて)「フン、切れてくれつて云ふのか？」

堀田 (自棄的な口調)「然う先くゞりをしちやア、話も何も出來やアしないさ」

お竹 「ぢやアまア云つて御覽…何アに、忌になつたて云ふのなら、切れてやらんものでもないよ」

堀田 (不快な顔色で)「然う喧嘩腰で來られちやア、己ア、もう一句も出ないさ」

お竹 「何んだか、まア云つて御覧つてば？」

堀田 「又、今度の機會にせうよ」

お竹 「そんな逃腰にならないでさ、云ひ度い事を云つて見たら善いぢやアないか？」

堀田 「今は云はない」

お竹 (笑顔を作つて)「云はないつてやア尚更聞き度くならアね、さア、構はず云つて頂戴…何を云つても怒りやしないからさ」

堀田 (少し和らいだ口調で)怒らないで聞けや云ふさ」

お竹 「大丈夫だよ…怒りやしない、切れてくれつて云出したからつて、めつたに怒りやしないさ」

堀田 (駄目を押すやうに)「眞實か？」

お竹 「これで世間不見のお孃さんなんかと一緒に見られちやア忌たよ、馬鹿念を押す隙に、サッサと云つ

て御覧よ」

堀田（眞面目になつて）「實はな、私もいろ〳〵思案もして見たんだが、結局、二人がこの儘、ずる〳〵べつたりで遣つて行くんぢやア、今に蔕まで腐つて、地上で潰れて了ふのが落だらうと思ふんだよ」

お竹（強いて自制して）「それで一體、何うすれば善いつて云ふの？」

堀田「汝にだつて、先の亭主もあるし、子供の二人も持つてるんぢやアないか？それをあゝして日本へ追歸して、打捨つて置くのは、隨分罪が深いたア思はないかね、寐覺が惡くはないかね、私は今までこんな氣の弱い事は夢にも思はなかつたが、何うしたものか、この頃はそれ許りでも、胸に支へ出して來たんだよ」

お竹（嘲るやうに）「そんな事を云つてた日には、此のアメリカ三界へ來て、女の細腕一つでやつていけるもんかね？もう後は云はんでも皆分つてるよ、人を馬鹿におしでない」

堀田「イヤ、私はお互の爲めに、これから後の事を篤と相談して置かうて云ふんだよ、汝が然うして稼いでゐたつて、人間の若さが何時迄續くもんぢやアなしさ、先は知れてらアな」

お竹「その若い間丈、さんざつぱら汝に御奉公して上たんだから、これから先、もう用はないつていふんだらう、善い了見だ」

堀田（蒼白めた顔で）「まア然うブリ〳〵しないで聞いてたら善いぢやアないか？私は唯、汝が氣の毒になつて來たんだよ、もうあれ丈注ぎ込んでくれたんだから、普通なら眼鼻が附いても善い時節だのに、己が相不變、このざまぢやア、とても行末の見込が立たないぢやアないか？自分で自分に愛相が盡きて了つたんだよ」

お竹「私は何も、汝を然う甲斐性のある男子だと思つて惚れたんぢやアないよ、あの日本へ追歸した亭主

野郎には、酒と賭博でサン〲泣かされたので、終了には顔を見ても蟲唾が走る程、忌だつたが、汝が同じやうな道樂をするのは、私は知つてゝも叱言一つ云つた覺はないぢやアないか？それ程、私は汝といふ人に夢中になつてるんだよ、仕事なんか、何うせ運賦天賦だから、何うならうと、愚痴をこぼした事なんかありやアしない、それを今日に限つて、汝の方から何の彼のと云ひ出すのを見ると、私と切れて彼の娘と夫婦にならうて下心に相違ないさ、然うだらう、眞直に云つてお了ひよ」

堀田「イヤ、勘違してくれちやア困るが、汝が私のやうな無益男に、何時迄引かゝつてるのが全く可哀さうで堪らなくなつたんだ、もう此邊で日本へ歸つて、亭主と一緒になるとか、何うとかして、出發點をやり變へる方が、眞實に汝の爲めぢやアないだらうか？私にしても、あんな押付嫁同前なものを貰ふのは氣に喰はないが、此も新らしい出發點を切るんだと思つて、此から眞面目な、清い生涯を始めて見やうかていふ氣にもなつたんだよ、何卒汝もそこを潔よく承知して貰ひたいんが、何うだらう？」

お竹（見る〱血走つた眼色になつて）「この畜生めッ！何處迄人を甘く見てるんだい、そんな手に乘る私と思つてるんかい？さア白狀しろ、白狀し了へッ」（いきなり、カラーに摑みかゝる）

堀田（その手を振り放して）「酷い眞似をするな、私はお互の行末の爲を考へて云つてるんだぞ」

お竹「何が行末の爲めだ、分つてるよ、もう分つてるよ、その娘も娘だし、汝も汝だ、よくも私を踏付にしやがつたな」（怒に慄えて再び摑みかゝろうとする）

堀田（體を反して）「何を云つてるんだい、汝は直ぐに半狂になつて了ふから、云ひ度い事も聞き度い事も口へは出せなくなつて了ふぢやアないか？」

お竹（せい〱息を喘ませて）「白ッぱくれても駄目

だよ、汝はその阿魔と密通きやがつたんだ、それを隱してるんが劫腹ぢやアないか？」

堀田「私が密通いた？（輕く笑つて）馬鹿な事を云つちやアいけない、唯、儀式丈擧げたんだ、形式丈の結婚ぢやアないか？そんな眞似が出來るもんか？」

お竹「まだそんな嘘を平氣で云つてるんか？儀式を濟したらもう夫婦つて云ふので、汝も、相手の阿魔も、善い氣になつて密通いたに相違ない、それはチヤンと分つてるよ、それでなけやその阿魔が、五年でも十年でも待つてるつて云ふもんか？向ぢやア一旦然うなつたから、汝のやうな無益男でも、一生、亭主だと思ひ込んで了つたんだ、今時の女學生なんかて、大抵そんなもんだ」

堀田「そんな邪推深い事を云ふもんぢやアない、相手は基督教の固い信者なんだ、そんな間違があつて堪るもんか。」

お竹「信者だから然うなゝだよ、儀式さへ濟みや愛があつてもなくつても、そんな事をして善いと思つてるんだ、汝は私といふ者があるのに、よくまアそんな巫山戲た眞似をしたんだね、阿魔も阿魔だ　私がくつ附いてる事を知つてながら、圖々しいつたらありやアしない、汝ツ、何うしてくれやう？」

堀田（抑へ付けるやうな調子で）「オイ、あんまり大きな聲をして怒鳴るんぢやアない、汝がそんな事を云へた身分ぢやアないぢやないか？」

お竹「何うして云へないんだね？」

堀田（鼻であしらつて）「考へたら分ろう」

お竹「また先の亭主の事を云ふの？汝がそんな事を云へた義理か？もう分つたよ、新らしい女が來たからつて、私を振捨てる氣だ、薄情者、人非人……私を何と思つてるんだい、サクラメント溪谷で、金歯のお竹さんて云つたら誰にでも顏を知られてたんだよ、それが汝の爲めに何も彼も形無しにされて、今更、新米の小娘なんかに見返られて堪るもんか、畳

悟をおし……」(云ひさま帽ピンを抜き取つて逆手に持ち、喉を目蒐けて突いてかゝる)

堀田 (周章てゝ飛び退き)「まァ待て、そんな短氣な事をするんぢアない」

お竹 「汝も男子の端くれなら、尋常に生命をおくれ、汝を刺し殺して置いて、私も死ん了ふんだ」(追駈けて突きかゝる)

堀田 (逃げながら、有合う椅子を取つて防いで)「お竹……まア……待てといふに」

お竹 (凄い顔色で)「生命が惜しいのか？この無益男、人非人……」

堀田 (蒼白めに顔色、口調も慄えながら)「まア氣を落付けてくれ、私の云つた事が癪に障つたら、私は詫まるよ」

お竹 「口先で詫つたつて、何んになるものか、そんな心變りする男子なんか生けちやア置けない、私ももうやぶれかぶれだ」(又激しく突いてかゝる)

堀田 (防ぎつゝ、逃げ廻りながら)「お竹……お竹……まアチヨツと待つてくれ… 私が惡かつた、今まで云つた事は私の誤だ、取消しでも何うでもするよ」

お竹 「そのざまは何んだ、慄えてるぢやアないか、私と一緒に死ぬ事も出來ないのかい？眞實に、思つたよりもまだ意氣地無しだよ」

堀田 (宥めるやうに)「この場で死ぬ程なら、何時迄も二人一緒で行つて行かう、然うせうよ、何うせもう地獄の道連れだアな、己ももう觀念した」

お竹 (釘付にされたやうに凝立して、堀田の顔を眤めてゐる、眉の上が神經的にピリ〳〵攣つてゐる)

堀田 (額の冷汗を拭いて、恐る〳〵近づいて)「エ、もうそれで善いぢやアないか、然ういふ覺悟をしたら善いぢやアないか？その帽ピンなんか打捨つてお了ひ、危いよ、眞實に」

お竹 (帽ピンを傍の卓上に投げ出して、ぐつたり椅子に腰を卸し、吐息ばかり吐いてゐる)

堀田 (對坐の椅子へ腰をかけて)「酷く汝を怒らせて了つたな、私が惡かつたよ、堪忍しておくれ、それ程、汝が氣にするなら、あの女なんか、離婚の手續をして、日本へ送り返すやうに、早速取計つて了ふとせうよ、もう機嫌を直しておくれ、考へて見ると、お互ひ、二人の仲は、然うお手輕に別れられるやうなんぢやァないさ」

お竹 (眼に溜る涙を拭いて)「そんな事を口先で云つてゝも汝のお腹の中が見え透くやうだよ」

堀田「もう忌味なんか云はんでも善いぢやァないか、私も實は、一時迷つたよ、お互に出發點を切りかへる方が善くはないかと思つたんだ……だが併し、己の生命はもう汝に預けてあるやうなもんだつたな、己の自由には出來ないんだ」

お竹「私に預けてあるのなら、殺されたつて善い筈ぢやアないか?あの怯々した様子は何んだね?愛相も何も盡きて了ふよ」

堀田 (苦笑して)「イヤ、あんまり不意に脅かされちや誰だつて面喰つ了まふよ、それに汝、アメリカへ迄來て、心中するにも及ばないぢやァないか?まだ二人が行詰つてあがきが附かないつて場合でもあるまいしさ」

お竹「でも私は振り捨てられて、あの小娘に見更へられやうつて云ふ生死の堺目だよ」

堀田 (笑顔を見せて)「私は唯、相談を持出した丈ぢやァないか?何も汝が不承知なのを、強ひて何うせいと云つた譯ぢやァないんだ、勘違ひからとんだ騒になつたもんだ、眞實に危險だつたよ」

お竹「汝さんだつて、生きてゐたつて、この先別に、花實も咲くまいに、それ程生命が大切なのかい、考へると可笑しくなつ了ふよ、あの怯々した様子がさ……」

堀田 (頭を掻いて、苦笑)「然う馬鹿にしたもんでもない、私もまだ若いんだからな、男子盛りはこれから

だよ、加之將來何一つ仕出かさなくつても、斯うして日光を見て、息をしてる丈でも幸福でないとは云へないさ、それは兎に角、愈々然うと覺悟を定めたら、これから先の事を話し合つて置かうぢやァないか？」

お竹「何んの事だね？」

堀田「あの娘を離緣する手續を賴んで置いて、私は又、サクランメントへ出かけて行くのさ、然うした方が面倒が無くつて善いからさ」

お竹（滿足したやうな調子で）「私は始めからそのつもりで、此處に金も持つて來てるんだよ」

堀田「然うか？それは濟まなかつたな」

お竹「濟まなかつたもよく云へたもんだ（財布を取出して）さァ、こゝに百弗あるよ、これを受取つてお置き」（卓上へガチャリと置く）

堀田（お竹の手を握つて）「難有……難有……」

お竹「まァ檢めて見るが善いよ」

堀田「オーライ……」（金貨を卓上で數へて）「何うも有難う！」

お竹「カリホルニャのお金だつて、路傍に轉がつちやゐない、皆、血の汗の塊りだよ、よく記憶えて御置き」

堀田「そりやァ分つてるさ、白銅一つだつて、粗末にしやしないよ」

お竹「何うだか!?……何より先に、あの娘の方の仕末を附けてお了ひな」

堀田「早速然ういふ事にせうよ」

お竹（わざとらしい笑顏で）「序に白狀してお了ひ、結婚式が濟んで、それから汝、あの女を自由にしたんだらう、然うだらう、男子つて皆意地の汚いもんだからさ」

堀田（苦笑）「もうそんな事は聞かないで置ひて貰はふぢやァないか？話が後戾りするよ」

お竹「白狀して了つたら善いぢやァないか!?」

堀田「とんだ邪推だよ、處女(ヴァージン)だもの、堅いからね」

お竹「處女(ヴァージン)だから、氣に入つたつて云ふんだろう」

堀田「もう何卒止してお呉れ、そんな事を！」

お竹「分つてるよ、チャンと分つてるよ」

（扉(ドアー)をノックする音）

堀田「お入り(カムイン)！」

宿の主婦（顳顬に頭痛膏を貼つて、だらしなく日本服を着てゐる）「御免なさい(エキスキユース)、私は頭痛がするので、こんなざまでゐますよ……あのね、今二木孃(ミスニキ)つて方が、堀田君(ミスターほつた)に逢ひ度いつて、訪えましたが？」

堀田（どぎまぎした様子）「二木孃(ミスニキ)……尋ねて來ましたつて？」

お竹「遣つて來たの？」

堀田「何うせう？」

お竹「好い機會だから、逢つて今の事をキッパリ云つてをやりよ」

主婦「お通しゝますか？」

お竹「些つと待つて頂戴・今、私が行きますわ」

主婦「ぢやァ待たせて置きませう」（入る）

お竹（惡意的な笑顔で）「私は隣の室(ルーム)へ行つて聞いてゝやるわ、明いてるだろうね、隣室は？……イヤ、あの扉(ドアー)の鍵穴(キーホール)から覗いてやるから、汝、話して、御覧」

堀田「隣は寢室(ベツドルーム)だから、今誰も居ないだろう」

お竹（急に思案し更へたやうに）「イヤ、私は歸ろう、時間(タイム)も無いんだし、加之もう汝を疑るでもないわね……だが、その娘(ガール)の顏を一寸と見たいわ、私が宿の婢(メイード)になつて、戸口で逢つてやろう、グッド、バイ……確かりおやりよ」

堀田「大丈夫だよ」

お竹「善いかね、又明日來るわ、グッド、バイ」（入つて行く）

堀田（扉口まで見送つて、立戻り）「アヽ、困つ了ふな」

（椅子へぐつたりと倚りかゝる）

（隣の家からピアノの音が響いて來る、男女の若い聲の樂しさうな合

唱が聞える、堀田は悶々して、胸を抱いて室内を懶げに歩き廻る)

(扉をノックする)

堀田　(緊張した氣持で)「お入り!」

登美枝　(眼元に愛を含んだ髪の濃黒い廿歳許りの若い女、まだ着こなされない洋裝で、片手に小い花束、片手にスーツ、ケースを提げて入つて來る)「御免なさい、私です」

堀田　(相手の顔を見ると、柔和な調子で)「さア何卒、此方へ……(傍の椅子を指さし)……何うして突如に訪ねて來たんだね……スーツ、ケースなんか提げて、何うしたと云ふの?」

登美枝　(淋しい笑顔で)「私は此から旅行するんです。それでお暇に來ましたの……あの、是を何卒」(小い紅い花束をさし出す)

堀田　(手に取つて)「難有う……カリホルニヤ、ポピーだね」(ボタン穴に差さうとして、急に卓上に置き)「旅行するつて? 何處へ?」

登美枝　「牧師さんの友人の、英國人の紳士の家庭へ此から働きに行くんです、ダイヤモンド、ハイツの傍ですつて……それで桑港から渡船を越えると、つい途寄がして見たくなつたんです」

堀田　「働きに行くつて? ぢやア下婢奉公だね」

登美枝　(確りした口調で)、然うです、一向に慣れない事ですから先様のお氣に入るか、何うか分りませんけれども、一生懸命やるつもりでゐます」

堀田　(憐むやうに)「登美枝さんには始めての經驗だらうから、隨分辛いよ」

登美枝　(涙ぐんだ聲で)「ハイ……それはもう覺悟してゐます……貴方、善いでせうね、私は何んな辛い事でも辛棒して、五年でも十年でも待つてゐますから、その間に貴方は一方の婦人と奇麗に手を斷つて、私と樂しい家庭を作るやうにして下さいよ、私はその日の一日も早く來るやうに、神樣に祈つてゐますよ」

堀田　(一種の魔に打たれたやうに)「故さんのその

素直な心がけは忘れやしないよ、だがね、登美枝さん、私は折角、も一度汝さんに逢つて話さうと思つてたんだが、一旦、死の谷へ迷ひ込んだものは、もがいたつて、あがいたつて、唯苦を大きくする丈のもんだ、とても人間の住んでる里へ出られやアしないよ、唯このまゝぢつとして、不思議な、恐ろしい風光でも見てる中に、火の消えるやうに死んで行けや善いのさ、私はもう腹を据ゑて了つたんだ、綺麗サツパリ諦らめておくれ、私はもう此世に居無い者だと思つておくれ、汝さんのやうな素直な、信仰の固い人は、これから先、何んな立派な生涯でも送つて行けるぢやアないか？私の事なんか忘れて了つておくれ、その方が私も呑氣で善いんだ、何卒、然うして貰はうぢやアないか？」

登美枝（首を掉つて）「貴方は又そんな事を云出すんですか？もう〳〵そんな弱い事は、私、耳にも入れませんよ、私は貴方の妻です、神樣の前で、立派に結婚式まで上げたんぢやアありませんか？私は何んな事があつても、貴方を今の境遇から救ひ出さなけやおきませんわ、私の祈りと、涙と丈でも、この一念は屹度通せずには居無いと堅く信じて居ます、貴方も自棄なんか起さないで、何卒早く今の汚れの中から脱け出して下さい、それが許りが、私の一生の希望です」

堀田（苦悶の色）「イヤ、實は私も出發點を切り更へやうと思つて余つ程苦んだのだがもう遲いと分つて來ましたよ、それでスツカリ諦らめたのです、何アに、善くつても、惡くつても、短い一生だ、私のはもうこの儘にして置いて貰ひませう、汝さんに手を引張られて、一度は人間の通る途へ出て見たいとも思つたが考へて見ると、悟るのが眞實やら、迷ふのが眞實やら譯は分らないんだからね、私の事なんかもう心配しないで、唯汝さんの、身の振り方を考へるんだね」

登美枝　（眼尻に涙を浮べて）「そんな情無い事を云ふのは何卒止して下さい、何度でも繰返ますが、私は貴方の妻です……貴方の妻だからア、いふ關係にもなつたのぢやアありませんか？貴方は始めから私を汚すつもりでは無かつたでせう、まさか、それ程の惡人でもないでせう？」

堀田　（どんざいな調子で）「そりやアあの時は、汝さんを欺すつもりでも、汚すつもりでもなかつたのだが、一方が愈々面倒臭くなつて來たんだから、此場合、汝さんと緣を切るより外に仕方がないんだ、何アに、一旦儀式も濟んでるんだから、それが汝さんの罪になる譯のものでもないさ、私よりは、もつと立派な人格の男子で、汝さんの夫になる者はいくらもあるから、心配しなさんなよ」

登美枝　（凄い眼色で）「否え、一旦、貴方に許した以上は、私は決して他人の妻になんかはなりません……貴方が私を汚す氣で、あゝいふ事をなすつたのなら、私は寧そ死んで了ひます、身を投げてでも死んで了ひます」（泣噦りする）

堀田　（宥めるやうに）「そんな一酷な事を云ふもんぢやアない……私は欺さうて氣なんか微塵も持つてた譯ぢやアないんだからね……眞實、私が出發點を新らしくせうと思つての事だつたからね」

登美枝　（涙を拭いて）「それぢやア私は待つてゐます、幾年でも……何んな辛い事でも辛棒します、そして始終、貴方の爲めに祈つてゐます、世の中に一人、貴方の爲めに眞心から祈つてゐるものがあるつて事を、貴方も記憶えてゝ下さい、誓いでせうね、……ではこれでお暇します、何うも濟みませんでした」

（悄々として、重だけにスーツ、ケーツを持上げて、立去らうとする）

堀田　（默つて、ヂッと見てゐたが、急に感情に激したやうに）「まアチョッとお待ちよ……そのかよわい姿で、庖厨奉公も出來なさゝうだ」

登美枝　（悲しさうな笑顔で振向いて）「希望さへありや何んでもありませんよ」

堀田　（小聲に）「チヨッとお待ち……（次室の間隔の大扉をソッと明けて見て、吐息をして立戻り感激的な調子で）「汝さんの心の底が分つた、私も嬉しい、こんな嬉しい事はない、私は汝さんに救はれたやうなもんだ、汝さんの愛情の力で、死の谷の出口が見附かつた様なもんだ、さア私と一緒に行かう、東部へ行かう」

登美枝　（怪訝な顔色で）「エ、……東部へ……何うしたといふんです？」

堀田　（周章てた口調で）「あの女の手から逃げるには東部へ高飛する外は無いんだ、金もチヤンとこゝにあるよ（財布を見せて、獨語的に）何アに、何うせ人の血を絞つたんだから構やアしない……心配なんか要らない」

登美枝　（半信半疑に）「エ、眞實に……私と一緒に？……」

堀田　「こゝらで加州の泥足を洗つて、東部で二人これから新らしい生涯を始めやうよ、私も最初渡米した時は、仕事師になるつもりぢやア更にない、矢ッ張學校へでも上る目的でだつた、東部へ行つて、二人で働きながら勉强でもやろうか？」

登美枝　（嬉しさに堪へざるもの丶如く）「眞實ですか？……まア嬉しい、私は救はれたんです」

堀田　「イヤ、汝よりか、私が救はれたんだ、これも皆汝のお庇だよ」

（二人、相抱擁して、熱い接吻する）

（扉が明いて、諸岡がぬつと顔を出す）

諸岡　「御免……仲直りが出來たのかね、そりやアまア御目出度い」

（二人は急に離れて、もぢもぢしてゐる）

諸岡　「私は今、嬶めと喧嘩をして、飛び出して來たんだ、併し此方ぢやア、お仲直りが出來て羨ましい、

世間はさま〴〵なもんだ」

堀田　（極り惡さうに）「ア、君、實は二人、これから東部へ行かうと、思ひ立つたんだ、併しあの女には内證にしてくれ給へ、知らん顏をしてゐてくれ給へ」

登美枝　（赤い顏をして、會釋し）「今朝は桑港までわざ〴〵御出で下さいまして、難有うございました、お庇で二人は幸福になりました」

堀田　「何うも君にも容易ならぬ心配をかけたね」

諸岡　（少し呆氣に取られて）「東部へ、二人で……これは宛で水道栓から火事が出たよりも驚かされるよ、本氣かい？」

堀田　（力ある語氣で）「本氣にも何にも……此から直ぐに出發せうと思つてる處だ」

諸岡　（眼を圓うして）「然うかい、あんまり急過ぎるな」

堀田　「愚圖々々しちやアゐられないんだよ」

諸岡　「然うかい？……（嘆息を洩らして）ぢやアお竹はとう〴〵振り捨てられたんか、ヤレ〳〵可哀さうに」

堀田　「でも君、何うも仕方がないぢやアないか？二人の關係は始めから間違つてたんだから」

諸岡　「だがあの女も君故にいろ〳〵苦勞したんだから、せめて妾位にはして置いてやつても善ささうなもんだな、登美枝さんを本妻にするのはよいが、彼女にもせめてそれ位な仕向はしてやらねえぢや罪だぜ」

堀田　（眞顏で）「戲談は止し給へ」

登美枝　「妾なんて、それこそあの女を侮辱するんですわ」

諸岡　（眉を寄せて）「このまゝぢやア治まるまいよ、……矢ッ張、例のモルモン宗に限るんだが、女同士では旨く話が附かねへのかな、斯うなつて見りやお竹が一番氣の毒だよ」

堀田　（晴れやかな顏で）「お竹なんか弗箱を積まうて客

が二人も三人もあるて云ふから餘計な心配は要らないよ、兎に角、二人丈でも斯うして救はれりやア善いぢやアないか？」

(突然、次の室の區劃の大扉が左右に開いて髮は亂れ、眼尻は逆釣つたお竹が、すつくと立現れる)

お竹 (凄い、慄え聲で)「皆、聞いてやつたぞ、床の下へもぐり込りでゝ、何も彼も皆聞いてやつたぞ、二人丈救はれりやア善いんだつた……こんな人情の無い男子とは知らなんだ、汝ッ、そのまゝに置くもんか」(やにはに飛びかゝつて、堀田の喉首を掴む、片手には帽ピンが光つてゐる)

登美枝 (進み寄つて)「私の夫を何うするんだ？惡魔！」

お竹 (睨み附けて)「ヘン、何方が惡魔だ？小娘の癖に大膽な、人の男を寐取りやがつて、それで救ふも救はれぬもあるもんかい、耻を知るが善いッ」

諸岡 (周章てゝ)「コレ／＼、何うするんだ？」

宿の主婦 (駈け入つて)「まア何うするんだね、お竹さん、危險からそんな眞似はお止しよ」

堀田 (身をもがきつゝ)「コレ……コレ……私を何うせうて云ふんだ？」

お竹 「私が血の汗を流した金は、二人の旅費にしろと云つた覺えはないぞ、この性惡男め、二人で行くなら行く處が違ふんだ、さア此方へ來い、此方へ來い、二人で一緒に行つてやる」(逆手に持つた帽ピンを、男の喉首に擬しながら、堀田を引ずるやうにして、次の寢室へ連れ込む)

(忽ち、堀田の、「アッ……」と絕叫して、倒るゝ音が聞える)

主婦 (怯々して、覗いて見て)「大變です！大變です、來て下さい……來て下さい……」

(お竹の「アッ……」と叫ぶ聲がする)

主婦 (慄える聲で)「帽ピンで、堀田さんが心臟の處を刺されましたよ、お竹さんまで同じ處を刺して……大變です……大變です、來て下さい」

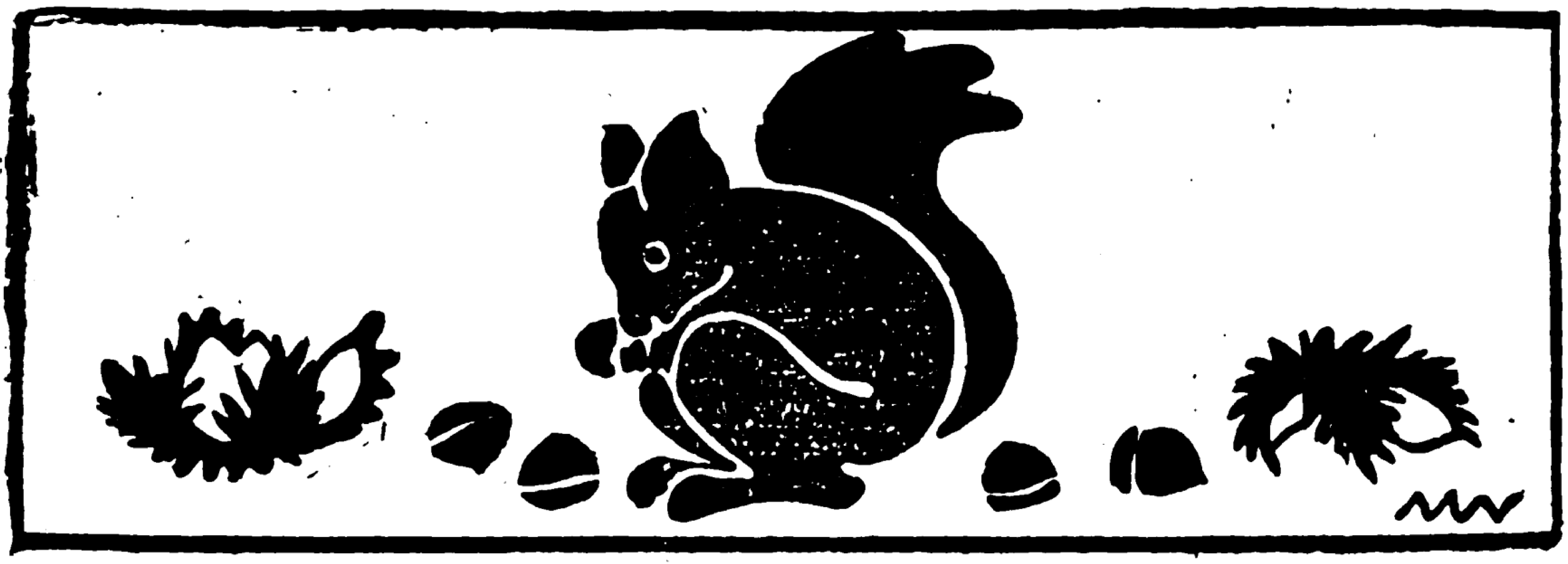
登美枝　（白臘のやうに蒼ざめた顔色、小い顫え聲で）

「ア神さま……何卒、私の罪をお許し下さいまし……」

諸岡　（登美枝の倒れんとするのを支へて）「氣を確かりお持ちよ……併し、死んだ二人は可哀さうだな」

登美枝　「ア、私も殺して下さい……私も……」（譫語のやうに云つて、身悶えする）

（カーテン）



錆びし鍵

生田葵

（壹）

梅雨明けの大掃除に旅革袋を開くと、中から小さな錆びた鍵がコロ〳〵と轉がり出た。此の鍵に就いて一つの物語りがある。

千九百十四年の初夏の事である。

「此の邊の街に住んで居る人の靈魂は、永久に天國の門の中へ這入れないのか知ら。然うして門内へ入れて貰はれない其の靈魂は何處へ落附くんだらう。」

這麼想念を思浮べながら英夫は靴店や古道具店や古着店が軒續きに並んで居るミユヘン市の猶太人街を緩い歩調で歩いて居た。兩側ともに一階毎に別々の借家人を持つ何等裝飾のない四階立の煉瓦建築で、一階の店屋の横から階上への通路として狹い階子段が人道に直ぐ取附いて居る。屋根へと四角く突出た上

層の住居の窓からは、冬瓜が萎びたやうな黄色な顔をした老婆が、何かしら口をもぐ〱さしながら往來を見降して居るのが眼に附く。

破れた穴から膝關節が覗いて居る洋袴を穿いた洗足の小兒が一人、口に喇叭を當てがつて後を回顧り回顧り馳けるのを追ふ襤褸着物の一群の小兒が、どや〱と右側の歪んだ穹窿の中へと消込んだかと思ふと直ぐ追捲られて出て來て、更に方向を轉じて走り出さうと浮足になりながらも口々に罵り騷ぐと、大きな鍵束を提げ、突き出た腹に黑光りの淺黃色の胸前懸を占めた門番らしい男が穹窿口に立顯はれる。小兒達は寢床を追立てられた豚のやうちり〱になつて横町の細路へと曲つて了ふ。

大きく切つた四角な切石を敷詰めた道路は、もう幾何の年月の風雨の痕を刻んだやら、幾何の人の涙を浸込ましたやら。無殘な凸凹になつて居て、菓物の皮や、馬糞や、紙屑やらが散在つて居るのみか、處々に水溜が出來て、何かしら一種の臭氣が立昇る間を、高く、偏平く取つた前髪を、十八世紀態にちぢらした猶太娘が、小跨の急ぎ足で歩くのも、英夫の眼には珍らしかつた。

『何か變つた好奇しい品物が恁うした街の中で發見けられないかしら？』

那麼思ひに囚へられながら一軒〱に古道具店や古金物店を英夫は立佇つて覗いて廻つた。大抵は市の人に使ひ古された我羅久駄ものばかりで、時代遲れの椅子に卓机、藥屋の看板、手の缺けた陶器の人形、ひゞの這入つた維納の花瓶などが眼に附いた。汚くなつた聖母の肖像や、十字架に懸つた基督の像なども此の異教者の店頭に亞剌比亞の人形と一所に塵埃に塗れて居た。

派手な金巾更紗の衣裳を着けた肥太つた四十女が番する店頭で、澤に積まれた古本の中から奈何やら

格夫人を翻譯したらしい猶太語の輸入小説本を發見したので、價を聽くと法外に高價であつた、英夫は其の儘にして行過ぎやうとすると、もう一遍見直せとひつこく止める。三分の一に値を附けると酷く怒つた態を見せて應じやうとも爲なかつたが、氣にも懸けず歩き出すと、ぶつ〳〵云ひながら負けた。其の隣の古金屋の店の奥には、鼠色に汚れた腮髯を持つ老人が、卓机に向つて算盤を彈いて居た。英夫には其れも珍らしい見物であつた、歐羅巴へ來てから算盤の音を聞いたのは初めてゞあつた。英夫が立佇ると老人は回顧つたが、爛々と輝く青い眼は物凄い程圓らなものであつた。深い皺が三筋程も迂る高い額の上に房々しく白髮はちゞれて、耳の後で高く捲上つて居る容子や、彫刻したやうな特色のある高い段鼻と、周圍に積置かるゝ錆びた鐵板、首鉤りのやうに垂下つて居る赤錆の鍵束や棚の上で自暴で踊つて居る片足のない銅像や曲り歪んだ青銅の飾物と、甚麼に良く調和して居たであらう。のみならず老人の座席の側には大きな眞鍮製の秤が置かれてあつた。折しも店へ這入つて來た若者があつたが、老人と話合ふ言葉は英夫には解し得るやうも無い猶太語であつた。

其の店先から離れて、二三軒往くと、英夫は其の日訪ねて往く家の番號が、麵麭屋の店に隣つた例の泥だらけの狹い階子段の上に掲げられてあるのを見て、直ぐ上つて往つた。上階の方で魚をやくらしく生臭い脂燒けの烟が其の邊に立迷うて居た。三階目に目指す家を見附けた英夫は扉の側に呼鈴も何もないので、指先でコツ〳〵と三四度扉を強く敲くと、中から重さうな木履の足音がして、戶口で佇立り、穴から外を覗くらしい氣勢がした後、扉が中へと開いて、背の低い、丸顏の老婆が顯はれた。今迄洗濯物でもして居たらしく衣物をたくし上げた腕先は濡れて、水がぽた〳〵滴る掌を拭はうともせずに、迂

散臭さうな眼附きで背の低い英夫の姿を瞶つた。

「私は伯林から來たものですが、貴方がヘッケルマン夫人ですか。」

英夫が問ふと、老婆は、

「然うです‥‥。」と頷いたが、伯林からと云ふた丈けでもう了然飮み込めたらしく、引締めた容貌を綏め、

「戸垣さんですか。さあ請願お這入り‥‥。」

徐に云つて笑顔になつた。然うして英夫の差出す掌を急いで前懸けで拭ふた掌で受けた。英夫は許されて家の中へと足を入れると、人一人がやつと立ち得らるゝ狹い廊下は眞暗であつた。と、老婆は片側の扉を押すと其處は街に面して一つ窓を持つ小さな部屋で明るい外光が流れ込んで居て、低い天井の下に置並べられた種々の家具が英夫の眼に映つた。英夫は直ぐ此の部屋はマリアンヌの從兄のコロルナ、アルトオルの室だと想つた。と云ふのは、窓近い處に今が今迄靠懸つて勉強して居たらしい形跡のある大きな書机が据えられ、其の横には可なりの分量の雜誌や書籍を載せた竹細工の書架が置かれてあつたからである。ヘッケルマン夫人が勸める腰懸けの布が破れた腕懸椅子の上へと英夫は腰を降し、其處に突立つヘッケルマン夫人へと話懸けた。

「ミユヘン市へ來たのは一週間も以前で、直ぐ御訪ね爲樣と思つたのですが、此の市には知合の日本人が大勢居るので、其等の訪問に追はれてつい遲なはりました。伯林では例もマリアンヌ孃から種々御世話になつて居ます。マリアンヌ孃は貴女にはもう拾年も御目に懸らないさうで、例も貴女の事を話して

居ます。ミュヘン市へ往つたなら御母さんが甚麼容子をして被入るか、是非訪問して呉ろと頼まれまし
たもんですから、其れでお伺ひしました。」

「有難う存じます。良う訪問て來て呉ました。ほんにマリアンヌとはもう拾年も逢ひません。機嫌よく
して居る事は始終呉る手紙で知つて居りますが。」

　恁う云つて老いの眼には早や眼が潤むのが見えた。英夫は此の老婆は顔に顯はれた通り、涙脆ひ、心懸けの優しい婦人か知らと思はれた。聲が妙にかすれて居ながらも肝高い調子を立てるのが、厭はしく感ぜられた。青い眼の瞳の底に何處か利かない氣らしい鋭さか潜み、其れでジロ〳〵と凝視めらるゝのも餘り善い心地は爲なかつた。

「マリアンヌさんの妹さんのカアトシエンカさんは今御家に被入らないんですか？。」

「彼女は毎日勞働きに帽子店に往つて居りますから毎日八時過ぎでなくちや歸らないんですが今日は土曜日ですから一時間早く歸つて參ります。」

「從兄のアルトオルさんは？。」英夫は恁う云ひながら持つて來た土產の絹手巾二枚を老婆にと渡した。一枚を老婆に、一枚をマリアンヌの妹のカアトシエンカに、近頃日本から送つて寄來したものだからとの言葉を添へた。見る〳〵老婆は顔を嬉びの表情に崩して幾度も禮を述べ、幾度も贈物を手に取つて翳して見た。

「アルトオルは其處の咖啡店に往つて居るんですよ。もう歸らうと思ひますが、其れでも呼んで來ましやうよ。私では貴方のお對手になりませんから……些つと待つて居て下さい。」

往きに懸らうとするのを英夫は止めて。

「咖啡店つて何處です。老年の貴方を使ひに往つて貰ふより私が一人で往きましやう。」

すると老婆は今這入つて來た扉の方へ出て往つて英夫を呼んだ。其れは暗い廊下から眞正面に這入つて往つた部屋で、其の右手の方の窓にと老婆は立ち寄つて、下を見降して居た。英夫も其の側へ往つて下を見ると、四方壁に取圍まれた薄暗い中庭が見え、其の前方に閉め切つた扉が一つあつた、老婆は其れを指差し、

「彼處です。アルトオルはいつでも今時分は彼處へ咖啡を飲みに往くんです。」

其れを然も贅澤でもするかのやう大袈裟に云つた。英夫は頷いて、直ぐ往かうとする意を見せると、老婆は其儘先頭に立つて案內した。咖啡から直ぐ歸る心算で、帽子も洋杖も英夫は手にした。表の階段から降りるのでなく、臺所を通つて裏梯子から降りて往くのであつた。這麼拔け道があるのが英夫には面白くもあり、又不思議に感じられた。

（貳）

暗い中庭に面した扉は押すと直ぐ開かれ、其處から又狹い廊下になつて、便所の側を通つて往くと又一つ低い扉があつた。背後から附從て來た老婆がトン／＼と敲くと應へる聲は無くて直ぐ開かれ、靑い色の衣裳を着けた美しい眼の娘が立ち顯はれたが、老婆の顏を見ると些つと會釋して、部屋の中を回顧うとしたが、背後に續く英夫の姿を見ると又眼を据えた。

其處は咖啡店の一室となつて居た。露出しの木の長い臺が三列に並び、長い木の腰懸臺が其れを狹ん

で置かれてあつた。餘り心地の善くない臭氣が英夫の鼻をうつた。係はず老婆が室内へ足を歩入れると彼方の机の端に新聞を讀み耽つて居る若者の一人が、其の時顏を擧げて老婆を看た。

『あの男らしい。』英夫は直ぐ心で思つた。鐵椽の眼鏡を稍々黄色く見える容貌(かほ)に懸けて居るのが最初の印象であつた。地の透いて見える薄いちゞれた髮が、妙に赤く光る額に懸つて居た。果して老婆は其の男の側に往つて話懸け、然うして扉の口に佇立つて居る英夫を嫣然(にこやか)な眼で招いた。英夫をば見降す程の大男で、其の容貌から派手な交際社會へ出て往かれぬ不平と、遠慮して世の中を渡つて行かねばならない悲哀と苦痛が滲み出て居ると英夫に感じ得らるゝ程の陰鬱な影が漂ふて居た。紛れもない猶太人特調の節鼻の上に、唇の赤い色迄が濁つて見えた。

貳人はもう參度も手紙を取交して居るので、逢つたのは初めてゞあるが未知の人とは思へない親しさで談話は初まつた。

『私の從妹から三週間も前に明日は出立して往かれるからと云つた切り音沙汰が無いので、奈何なされたかと思つてました……ミユヘン市は御氣に入りましたか。普露西(プロイセン)の人達と比較(くら)べると、此の巴威國(バイエルン)の人種は性質が從順(すなほ)で、溫味があります。何しろ舊敎國ですからね……何處かの御寺へ參詣して見ましたか、私は貴方が乾度此の市を御好きになるに違ひ無からうと思ひます。人民一帶に美術を尊重もし、愛好もして、令孃としては繪畫を習はないのが恥辱となつて居ます位ですから。其れに音樂も盛んです。例年の夏期のワグナアの歌劇には世界中の愛音樂家を集めるもんですから。ミユヘン市は全獨逸中の唯一の藝術市です。』

アルトオルは顔を生々とさし、少し吃り調子の歯切れの善くない言葉ではあるが力強く語つた。其の談話の間にヘッケルマン夫人は、アルトオルに英夫を渡して了つて安心したと云つた態で、英夫に笑顔で挨拶し、其れから隔たつた處に不思議さうに此方を凝視つて突立つ先刻扉を明けた青色の服の娘に一言二言口を利いて、出て往つて了つた。

貳人は對向つて腰を降した。アルトオルが青色の娘に對ひ御客さんに麥酒をと注文爲懸けるのを斷つて、英夫は自身で支拂ふ態度を見せて珈琲と菓子とを注文した。アルトオルはもう僅に底に殘つて居る珈琲茶碗を前に置いて居たが、菓子は取つて居なかつた。其處で英夫は更にアルトオルの珈琲も持つて來るやう青い服の娘に命じた。

「貴方はミユヘン市にはさう永く御出でゝすか、何の位いになります……此市へ御住居になつてから。」

「今度來てから三年にしかなりません。此市へ來る以前はずつと伊太利の羅馬に居ました。其の以前は維納、其の以前はプラアグ、其の以前はレンベルグ、小兒の頃から隨分漂流して來ました。今も漂浪の民です。此の後とてもでしやうか……。」と云つてアルトオルは面白げに笑つた。

「で國籍は?。」

「伊太利です。父は伊太利の猶太人だつたもんですから。母はヘッケルマン夫人の眞實の妹でレムベルグ產の生粹のガリシヤ人です……姉は獨逸猶太人と結婚し、妹は伊太利猶太人と結婚したんです。私の父も母も今でも羅馬に居るんですが、ヘッケルマン夫人は二度良人を持つて、二度共に死別れて了つたのです。貴方と伯林で御馴染になつたマリアンヌは初め結婚した獨逸猶太人の子で、今家に居るカアト

シエンカの父親は匈牙利猶太人の子です。隨分入組んでましやう。」

自分自身を冷笑ふやうな調子で云つた時、靑服の給仕女は、あつらへたものを運んで來たが、アルトオルの言葉を解したやう、アルトオルと眼を見合して笑つた。

「然うださうですつてね。マリアンヌさんから聽きました。羅馬は佳い處でしやうね。私は此の秋に參らうと思つてます。」

「まあ善い處でしやうよ。ですが私等猶太種族には獨逸が一番可いです。一番寛大で、能く保護して吳れます。無論猶太人が獨逸國に流通して居る巨額の資本の關係からでもありましやうが。」

「伊太利では然うは往きませんか。」

「否んと云ふでもありませんが、あの民族は無教育者が多いに關はらず、露西亞人と同じく猶太人を侮蔑したり、迫害するのを忘れないんです。」

「其れが面白くないので此の市へ御出になつたのですか。」

「否え。外の理由です。伊土戰爭の折り兵士に徵發されたので、其れを避けて瑞西を超えてやつて來たのです。私達は私達の民族に何等の保護をも與へず、單に侮蔑する事のみ知つて居る國の爲めに、よしや異教徒の土耳古人に對しても殺戮を行ふのは忌ですからね。其れよりも私には私等民族の神が命じた使命があるんですもの、異人種を殺しに往くと云ふやうな消極的の爲事よりも、もつと積極的な一般人類の幸福を計る爲めの仕事があるんですもの‥‥。」

態とらしい冷然とした容子で恁うは云ふものゝ、何かしら一種の不安に襲はれて居るらしく、落附き

のない眼附きで英夫の顔色を覗つた。其れが妙に英夫にはくすぐつたい感じを與へ、其れから引いては英夫の胸の中に絶えず働いて居るアルトオルの人物に對しての判斷の秤の量目を動かした。
「其れで伊太利は貴方を奈何も處分しなかつたのですか。」
「處分しましたとも、私の國籍を削つて、再び入國を禁じました。入國すれば直ぐと牢獄の鎖の重さに纏はれる身なのです。」此の言葉をいとも誇り氣に云つた。
「其れで貴方は今は獨逸の國民となつて御出でになるのぢやありませんか。」
「處が然うぢやないんです。國籍の無いと云ふのも可笑なものだからと云つて、私等と同じ心地で伊太利を脱出した連中が一團になつて此の國へ歸化を願ひ出たのですが、此の國では不思議な國際關係の義理を立てゝ許可して呉れないんです。」
「でしやうね、國民であつても國民の義務を果して呉れない人達を國内に抱擁しても國に取つては不充りませんからね。」
英夫は不思議にも恁うした言葉を對手の感情を顧慮する事なしに云ひ出し得る程の寛然とした心持になつて居られた。然うして珈琲を取つて一口啜つた。
「然うでしやうかしら……。」
アルトオル君は恁う呟くやうに云つて同じく珈琲を啜り、英夫の顏を凝視したが、思回したやうに微笑を浮べた後、肩を聳かして。
「私達は國籍の無い漂浪の猶太人です。此の方が眞實に現在の境遇にある猶太民族の意義に叶つて居る

んです。猶太人が然うした境遇にあるのを基督教の國民は嬉ぶんです。ねえ貴方。一體國と云ふものは平和な事業を愛して、懸命に努力して居るものよりも、殺戮を好む思想を愛する人間を保護する權利があるんでしやうかしら、若し然うだとすれば人殺しを敢て辭せない人達のみが國家と云ふものを形成つて居ると云ふ理論に到達するぢやありませんか。」

アルトオル君自身で大きな眞理を云當てた、と思ふらしい滿足の笑聲が、ほの暗い珈琲店の汚い、陰欝な空氣を震動がした。向ふ側の窓の下に取附けてある腰懸けの上に、ろくでなしらしい態度の、猪首で頭の禿げた男と、深靴を穿いて、皮の前懸けを締めた荷馬車の馭者らしい男とが并んで、切りとさい轉がしをして勝負を爭つて居る外に、もう一人、新聞紙で包んだものを持つた小綺麗な身裝をした若い男が、青い服の給仕女に切に調戯つて居たが、アルトオルの眼は兎もすれば其の方へと注ぐのであつた。給仕娘はアルトオルが眼を注いだと知ると回顧つてアルトオルと眼を見合して笑ひ合ふ。這麼事も初對面の英夫の頭腦にはアルトオルを評價する資料となつた。

伯林の下宿の女中をして居るマリアンヌは、英夫の部屋へ掃除に來ては、いつも此の從兄に就いて恁う語つた。

「英夫さん。あの男に請願逢つて話して下さい。貴方が私の從兄と一時間御談話なさると、もうあの男が甚麼立派な思想を持つて此の世の中に勞働いて居るかゞ御判になります。從兄は眞正に立派な男です。私等一族の譽れになる男なんです。大學を終へて學位を取つた人です。然うして月々送つて來て吳る雜誌には、いつも猶太人の地位を高め、猶太人の立派な種族である事をのみ世界に紹介しやうとして書い

て居るんです。」

　マリアンヌ嬢は顔にはいつでも既に咲き過ぎた花の哀みを連想させらるゝ物思はしげな陰影が漂ふて居た。大きな口を他人に見せないやうに引結び、眦の下にある大きな黒斑を白粉で塗隠しヒヨロ〳〵と日蔭の木のやう背高い腰に更紗木綿の裳裾を着ける下から思ひ切つて大きな靴が覗いて居る。英夫の下宿の後家さんに勧められて、加持利敎に改宗し胸には銀色の十字架を垂下げて居た。其のマリアンヌを英夫は此の時何と云ふ事なしに思ひ浮べた。自分の部屋の鏡の前に置かれた胸椅子の腕木に骨立ちのする痩せた腰を下し、前で腕組しながら。

「私達が血族でなかつたならもう疾くに結婚したでしやう。アルトオルは私を愛して居るんですもの。伯林に半歳程居た時は朝夕に逢つて居たんです。ですがあの人の將來の出世を考へると、私と結婚しない方が善いんです。ですが妹のカアトシエンカとも血は繋がつて居なくとも結婚しては否けません。カアトシエンカは餘り善い性質の婦人ぢやありませんから。其れにアルトオルもカアトシエンカを嫌つて居ます。カアトシエンカの眼は、精神的の事業に對しては鉛と一つなんです。アルトオルが此間呉れた手紙にも然う云ふ態の事が書いてあつたのでした。」

　何かしら希望を追ふて居るやうな中に、嫉妬の思ひに悩まされて居るらしい容子も交ぢつて語つたものである。恁うした言葉をマリアンヌの口から聞かされて英夫は今迄に種々に對手の男のアルトオルを思描かない譯には行かなかつた。併し其れはアルトオルを思描くと云ふよりも、基督敎に改宗した、ヒヨロ〳〵と背高い猶太娘の頭腦にどんな形ちで其の男が彫附けられて居るであらうと云ふ事の方に餘計に

興味を持つたのである。

「私マリアンヌさんから始終貴方達の同志の方が目論んで御出になる新しく猶太王國建設の談話を聽きましたが、其れは奈何う云ふ態に建設なされやうと御思ひなんです。今の貴方の御話の容子では國が兵備を持つのは罪惡のやうに考へて御出になるやうに思はれましたが？。」

英夫はアルトオルが菓子を嚥下さうと口を動かす度毎に唇の間から見ゆる黄色く染つた汚い歯を見ながら尋ねた。ゴクリ〳〵と嚥下す度に、突出た咽喉佛が動くのも忌な心地がした。

「えゝ、然うですとも、私達が新しく建設しやうとする猶太の王國は、少しも劍、火藥、飛行機、大砲、要塞、軍艦と云ふやうなものゝ庇護を受けずに立つんです……。」

稍前屈みになり、强いて落附いた容子で語り出した時、先刻英夫が這入つて來た扉が明いた音がしたが、直ぐ女の聲が聞え、續いて急ぎ足の靴音は英夫の背後へ近づいて來て佇立つたと思ふと、眼を上げたアルトオルにと話懸ける。回顧つた英夫は肉附きの豐かな頰に、薄化粧を施し、大きな青色の眼を活々と輝かした若い婦人の姿が其處に立つて居るのを見た。直ぐカアトシエンカだと思つた。ヘツケルマン夫人に面影は能う似て居た。アルトオルは笑ふた眼をしながら立上り、英夫にと紹介した。

姉のマリアンヌとは全く異つた性質の婦人だとは直ぐ感じられた。身體の態度が粗雜で、身體全體を精神で支配して居るよりも肉で支配して居るやうに見え、然うして盛春時の肉の惱みに堪へ切れないやうな誘惑が着物を透して外に顯出れて居る。英夫に差出す掌に貴夫人らしいやうな嬌態を裝つたものゝ瞳には權威のない媚が浮び、遠慮會釋もなく女の肌の脂臭い臭氣を周圍に發散する。其れでも店から歸

つて來て着物を着換えて訪ねて來たものらしく、上着は白絹で、裳裾は紺色の新しいものであつた。

『有難う御座います。立派な手巾を頂いて、眞正に有難う御座いますわ。』

と云つて英夫と並んで腰懸けに座り。

『姉のマリアンヌが手紙を寄來すと屹度貴方の事を書いて寄來すんですよ。私は姉は屹度貴方を戀慕して居るんだと思ふんですよ。然うぢやないんですか。』

卓机の上に突いた肱に身體の重みを持し、少し横向きになつて英夫にと話懸けた。其れで英夫は怒る氣にもなれなかつた。微笑んでカアトシエンカの眞赤な潤ふた唇を瞶めた切りであつた。少くとも清瀟に浄められた庭へ泥足の儘な狼籍の犬が這入り込むだやうに思はれたが、違つた世界の婦人を一人見ると云ふやうな事で新な興味が湧かぬでもなかつた。

『否けないよ、カアトシエンカ、マリアンヌは御前と違つて、誰の身の上にも幸福のあるやうと誰何にでも温い愛を捧げて居るんだ。御前とはまるつきり思考が違ふよ。』

アルトオルは笑ひながらも、多少は英夫の心を察したらしく怎う云つてカアトシエンカの言葉を防いだ。

『然う。でもマリアンヌはいつでも私の英夫は今日は圖書館へ往つて五時でなくては歸つて來ない事だの。今度の日曜の午後には二人で湖水へ船を漕ぎに出懸ける事だのつて書いてあるぢやありませんか。』

英夫はカアトシエンカの話して居る中に青い服の娘を呼んで、カアトシエンカの珈琲を持つて來るやうに吩咐けると、カアトシエンカは其れと聞いて居ないやうな容子を取繕つて居たが、滿足氣な色々頬

に見せ、一層親しく英夫にと話懸ける。

「貴方はマリアンヌは御嫌いなのですか。然うぢやないでしやう。マリアンヌが貴方に優しくする丈け貴方もマリアンヌを優しく爲さるんでしやう。でなきやマリアンヌがあんなに云つて寄來しますものか。」

自分はもう丁然此の東洋人に氣に入られて了つて居ると云つたやうなカアトシエンカの語調や身振りを英夫は見逃さなかつた。

「貴方は御金持ちなんでしやう。でなきや外國へ學問に來ると云ふやうな贅澤は出來ないんですからね。御家は何か御商買をして被入るの、其れとも何か御役人？ 未だ御兩親が御有りになるんでしやう。御兄妹はあつて。御幾歳なんです？。」

「幾歳に見えます。」英夫は恁う云つて猶太娘の顏を見た。

「さあ、幾歳でしやう……。」と云つて英夫の顏を熟視して胸算用をする時、珈琲を運んで來た青い服の給仕女はカアトシエンカの耳の端で笑ひながら二言三言猶太語で呟いた。するとカアトシエンカは同じく笑ひながらチエッと舌打して、手を振つてアルトオルを視る。アルトオルも笑つた眼で見回してから側を急いで立去る給仕女の姿を追たが、英夫が凝視る眼に出會ふと、何か惡い事柄を發見けられたやうに笑を引込めて了つた。其れには頓着なくカアトシエンカは英夫への談話を續ける。

「貴方は伯林にもう永く被入るんでしやう。マリアンヌの外にも懇意にして御出でになる婦人は澤山おありになるでしやう。お氣を附けなさい貴方。普露西の女は傲慢な癖して、薄情で、お金を欲しがるん

です。其に較べるとミユヘン市の婦人は萬事に深切で、情深いものばかりです。奥様になさるのでなく戀人にしても巴威國(バイエルン)の婦人をお持ちなさいね。」

「カアトシエンカお前は男子に對して萬事に深切で、情深いか知ら?。」今迄默言つて居たアルトオルが口(くち)を入れた。

「えゝ、然うですとも、然うぢやなくつて。でも貴方には然うでないかも知れない。私と貴方とは仲惡だから。永久の仲惡る。昔時から親戚と云ふものは仲惡るに定まつて居ますわ。ねえ……」と云つて給仕女の方を回顧つたが給仕女が見回らなかつたので、再び、英夫の方に向き直つて、「然うですわね私の英夫さん。然う云つても可いでしやう。貴方今晩お閑暇(ひま)。明日は日曜で私達休みなんです。今晩之から寄席か活動寫眞へお越しにならなくつて?。」

白色の天鵞絨製の薔薇を二輪突差した麁末な帽子の下に輝く二つの眼は潤んで。

「もう奈何なつても可いんです。貴方のお心の濟むやうに私をして下さい。私の心も身體も貴方の所有なんですもの……。」と云つたやうな媚びと誘惑が潜んで居る。

英夫は談話の進行が極めて露骨で、無雜作で、何だか自分を安價に見積られて居るやうな氣がしたが快樂と放縱とを待焦れた女が恰度餌物を持つ蜘蛛のやうに張つた網目の中へ引懸つた者が受ける當然の成行きだと思つて格別苦にも想はなかつた。いつの間にかもう青白い瓦斯の光りで部屋は照らされて了つて居て、夕食を取りに來る勞働者態の男や、下級な勤人らしい若者が其處此處に座して、持參の新聞紙の小包を解き其の中から麵麭や豚肉を取出し、珈琲のみ買つて夕食を取るのが見えた。時計を見ると、

もう七時半であつた。

「アルトオル君一所に往きませんか。失禮ですが今夜は私が總て‥‥お招待したいと思ひますが。」

「さあ。今夜私少し用事を持つて居るんですが‥‥格別大した用事ぢやないんで往つても可いですが‥‥。」

アルトオルは然う云つて、考へる態に躊躇つてカアトシエンカの顔を看た。

「用つて甚麼用？ 一所に行つたら可いでしやう。でもお嫌なら來なくても可いわ。あゝ來ない方が可い。英夫さん二人限りで往きましやう、其の方が樂みですわ。アルトオルは又勝手に自身で樂む事があるんですもの。」

意味あり氣に云つてアルトオルを嘲笑るやうな眼で見る。アルトオルは少し憤つとした様子を見せたが、格別口には出さず、まじ〱とカアトシエンカを睨つてから、立ち上つて壁の釘に懸けてある帽子を取り。

「其れでは僕は之でお別れします。家へ歸つて夕食を取つて友人の許へ出懸けますから。明日又被入いませんか、明日は一日身體が閑暇ですから朝からでも、貴方の甚麼お誘ひでも受けます。では左様なら‥‥。」と云つて掌を差出す。

「まあお待ちなさい。私達は時間がありませんから此家で食事を取つて出懸けたいと思ひます。お一所に食事を爲すつては‥‥。」

英夫が云ふと、カアトシエンカは密つと卓机の下から手を延ばして、英夫の膝の上に置き那麼ことを

云ふなと相圖するやうに動搖るのであつた。其れと心附いたらしくアルトオルは引込ましかけた掌を再び差出し威勢よく別れ言葉を述べ、其れから側に立つ給仕女に態とらしく勘定を聞いたが、英夫が拒んだので、輕く禮を述べた後、裏口の扉の方へと出て往つて了つた。

カアトシエンカは直ぐ首を縮め、英夫へと偸笑ひを見せてから、給仕女を呼んで夕食を注文した。

カアトシエンカの顏には、

『もう此の人は了然私に征伏せられた人？。』と云たやうな誇りの色があつた。然うして其れを見せひけらかすかやうに食事中にも四邊の座席を回顧り、知合ふ男達に無暗と話懸けて見たり、給仕女と猶太語で戯言を云ひ合つたりした。食事を濟してから其の珈琲店を出て、細い道を拔けて表通りに出て、其れから又横町へ曲り、燈火が連なる街の半程にある活動寫眞小屋へと二人は這入つて往つた。女が二等の切符で可いと云ふのを態と一等席にした。其の席で餘り善い身裝束でない彼女を、周圍の人がジロ〱と一種侮蔑したやうな眼で見るのを英夫は面白がつた。其れでも映影中の暗がりの中では、女は密つと英夫の掌を握つたり、溫かい膝を靠せ懸けたり、帽子を取つた顏を觸れさしたりした。

十一時前に終了て往來へ出ると、カアトシエンカは之から表通りの珈琲店へ往かないかと云ふ。實際英夫は疲勞て居たので斷はると、其れでは家へ來ないかと云ふ。其れも斷はると、もつと一所に散歩しないかと尋ねる。昨夜少し寢不足で那麼元氣が無いと應へると、默言り込んだが、家へ歸る道の圖ある横町に、赤い行燈にHotelと記して掲げられてあるのを見ると。

『貴方知つてゝ、此のHotelを、誰が往つても宿まれるのよ、私もう歩くのが嫌になつたから一時間程

此處で休んで往きたいわ。」

　貳人はもう手を組合して歩いて居た。

「那麼事してアルトオルは怒らないの？。」

「アルトオル。あんな男私には何でもないんですよ。あんな男、ろくでなし、意久地なし、男地獄、あの男には外に情人（いゝひと）があるんですよ。私に何の關係があるものですか。奈何して貴方は然う御思ひになるの？。」

　英夫は別段此の女と關係を作らうとは思はなかつた。只管今宵は安靜を欲する旨を述べた。

「貴方の持つて居る鍵は錆びて居るのね。」

　此の言葉が些つと解らなかつたので、英夫は女の熱（ほて）つた容貌を街燈の灯で見上げると。

「然うぢやありませんか、女の愛情の心を開く事が出來ないんですもの。貴方の心の鍵は錆び附いて居んるですわ。」

　其れでも英夫は默言つて居た。併し女を其の家の邊迄連れ歸る途すがら、明日の日曜をアルトオルも一所にスタルンベルグ湖へ遊びに行く約束をさせられた。女の家の前迄來て、別れしなに。

「では、左樣なら、明日又停車場で、御機嫌ようお休みなさい。では……。」

　と云つて、掌を差出したが、更に近寄つて、灯の燈つて居る自分の家の窓を要愼深く見上げながら不意に熱い接吻を英夫に與へてから家の戸口の方へと馳けて行つた。英夫は朧々の光りの中にカアトシエンカが扉をカチ〳〵と鍵音を立てゝから家の中へ沒し去るのを見屆けた後足を家の方へと回した。

「私達猶太民族の目論んで居る王國と云ふものは、單に同血族、同宗教の民族が聚合して、他から何等の迫害と侮蔑とを受ける事なしに、大陽の輝く地球の表面の一部分に、他の民族が生活して往くのと同じ様式で、土に實る五穀を食し、家畜の乳を搾つて生活し往かうと爲るに過ぎないんです。神は猶太の民が此の地球の上に繁榮るのを約束せられたのですもの、他の異宗教信者の迫害に依つて滅亡するものぢやないんです。私等は種々の種族が種々な宗教を信じて、御互に爭鬪ひ、戰ひ、滅亡したり、滅亡されたり、血まぐさい殺戮を繰回し行ふて、其の實質に何物も殘らなかつた恐ろしい人間の歴史を永い間傍觀して來ましたから、もう那麼淺間敷い過誤りを私等種族の上に經驗しやうとは思ひません。私等の組織しやうと爲る猶太の王國は、全く猶太の神の命じ給ふ……若し現代の言葉で云へば無抵抗主義とでも云ひましやうか、兵卒や兵備を少しも持たない、其處に住む人民は何等然うした事に負擔を持たずに幸福も安易とを亨受して住み得る王國なんです。」

　アルトオルは柔い青草の上に兩足を投出し、股の間に兩掌を置き、其の黄色い色艶の無い顔をこゝろもち輝かして述べた。

「何だか私には空想のやうに思はれますが……。」

　對向に足を投出す英夫は身體を支えるやう片腕を背後に廻し、片手で身近く咲く黄色い花の花辨を弄りながら云つた。眼下に擴大る南獨逸の大きな湖の中に數えらるゝスタルンベルグ湖は、水浴後の乙女の肌を想起さす程に滑に光澤を帶びて、向岸に烟れる綠の野の裾を浸し、南へ〳〵と小村を持つ入江の

一つ〳〵に優しい媚びを捧げて延びる終局には、白雪を頂くアルプスの屈折の多い連峯が瑞西國との空を劃つて聳つて居る、其の山腹から南獨逸の裾野へと、紺色の山襞、綠色、茶色の山襞と濃く淡く、然うして其の山襞の處々に白い烟が立上つて居るのは、其處に村があつて、人が勞作いて居るのが想像される。

初夏の空は紫色に能く晴れて、微風ぐ空氣の中には、木の薫り、花の匂ひ、若草の日光に蒸された薫りと交つて、身近の白い小さな花を持つ樹の葉の茂みからは密蜂の迂鳴り聲が聞える。太陽の光線は溫く身體を包み、湖から吹上げる風は冷氣を含んで肌に觸れるので、誰しも豊麗な自然の恩寵を感謝せずには居られない。然うして其の潤澤な甘味の中に靈魂を溺らして眼を蒼空へと向ける。

今朝英夫が停車場へ少し遲刻したと思ひながら到着すると、二人は未だ來て居なかつた。三人分の切符を買つたもの丶無駄になるのではないかしらと入口の方を凝視つて居ると、發車の五分前になつて漸くやつて來た。英夫の顏を見ると貳人共ににこやかにして話懸けたもの丶、汽車に乘つてから窓の外に擴がる郊外の別莊町、小村、森林と變つて往く景色を眺めながら小驛を過ぎて行く中に、貳人の間に何かしら蟠りがあるのが英夫に感ぜられた。カアトシエシカの方で賑はしく話懸けるとアルトオルの方で鼻であしらふ樣な態度を示し、アルトオルの方で面白げに話題を繰り出すと、カアトシエンカが受附けない。其の間に立つていつも英夫が貳人の間の楔子となつた。奥齒にもの丶狹つたやうな貳人の容子は英夫に煩はしかつた。然うして其の爭ひの原因は何かしらと考へて、

「若しや昨夜貳人で活動寫眞へ往つた歸途の容子をアルトオルが發見けて、其れに原因して居るので

いかしら？。」と思ふと、氣拙い想念が英夫の心の中に湧いたが、少しも疚しくない自分を思ふと、那麼事は考への外に追出して了ふが可いと云つた思考になつた。

列車が一時間半程で湖の北岸のスタルンベルグ町へ着くと町の背後の丘陵の上に殘つて居る舊いお城や教會堂を、列車から吐出された自分達と同じやうな日曜遊散の人達と一所になつ見て歩き、其れから街の南の方の湖に沿うた公園を歩き廻り、公園の果の小徑に巴威國特有の外側の廊下の隅に聖母を祭つた木造の百姓家などを見物した後、停車場の前の湖を周航する汽車の發着所へと引回した。

平生は一日二回しか發航せぬ汽船も、土曜と日曜には六回も往復して、其れが夏期に向ふに連れて猶も茂くなるとカアトシエンカは英夫に湖に突出た棧橋で船を待つ間に話した。ミユヘン市の人達の避暑場で盛夏には此の湖の沿岸の何處にも水浴場が出來ることも話した。汽船が歸航して來て新に乘客を乘せた中に交つて、船の上の人になり、軈て今歩き廻つたスタルンベルグ町を背後にして船が進み出すと、甲板の上の程善い場所に貳人と肩を幷べて陣取つた英夫は、沿岸の風物、往手のアルプスの峯、湖に沿ふた赤色の街道と、何處か日本の琵琶湖の景に似て居ると思つた。只アルプスの峯は比良や比叡の山よりも遙に峻嶮な畜趣を持つて居る丈けであるとも思つた。

湖の沿岸を周航して、入江〳〵に在る景色の美しい小村を訪問れるのは此の次として今日は巴威國朝廷の離宮のあるレオニイ村へ往かうと初めから約束したのであつた。其處はスタルンベルグ町から二つ目の寄航地であつた。

英夫が未だ少年の頃、鷗外先生の水沫集の中のうたかたの記を讀んで、先生の麗はしい筆致に魅せられ

甚麼に其の小村の靜閑な風物に胸を躍らしたらう。物語りは此の小村で幕を閉ぢて居るのである命が自身を其の地へ運んで往くと思つ丈けで胸は怪く騷ぎ立つた。汽船は岸近う進むので、湖邊の村街道を馬車や人が行くのが眼に入る。うたかたの記の畫工巨勢とハンスル孃とが馬車を馳つたのはあの道筋だと思つたりした。

レオニイで汽船を見捨てた三人は街道筋を左へ、別莊町を通つて離宮へと達した。卅と部屋の數は無からうと思はるゝ小さな宮殿は平生は、見物客を迎へるんだが、其の日は内親王の行啓で入れなかつた。併し御庭は開放されてあつた。湖に沿うて石垣が築かれ、其れからだらだら〳〵登りの傾斜面との間に三條の白砂を敷いた小徑が通じ、處々の雅趣のある植込みの下に置かれた腰懸には人は自由に休息して居た。水蓮の咲く小池や、金網を張つた小禽小屋の前を通つて行くとルウドウヰヒ二世の大理石の紀念塔の前へ出た。其の前面の蘆の生えた汀で王は千八百八十六年の夏に溺れ死んだのである。

離宮の庭を通り拔けてから湖水に臨んだ料理店を見出して三人は輕い晝食を取り、其の家の前から急高配の山上へと電車で登り、少し歩いて、湖上を眼下に見降すロットマン丘のビスマアク紀念塔を見物し、其れから少し側道に這入つた處の芝生の上へ寢轉んだのである。カアトシエンカは貳人の座して居る處から四五十歩程離れた處に、日曜を同じく此地へ遊びに來た友達の婦人を見附け、もう大分永く立話して居るのであつた。

『空想？決して、私等は現在着々と一歩一歩に然うした王國を顯出しやうと努力して居て、事業は次第に進行して往つて居るんです。』

「奈何う云ふ順序で、奈何云ふ組織で、少し御談話し下さる譯には往かないですか。猶太民族が猶太の王國を造らうと云ふ事は最早三世紀に渡つて噂されて居る様に思ひますが……。」

英夫は少し改まつた口調で云ふと、アルトオルも少し改つた容子を作つて語出した。

「一つの王國を武器の力を籍らずに創造するのは過去の歴史には無い事ですから永い準備が必要なんです。若し出來上れば世界の他の民族は羨望の眼を聳立てずには居られないでしやう。然うして世界の思想は此の王國の成就と共に一轉回せねばならないでしやう。私達同志は昔時の猶太國を現在の所有主から買戻さうとの思考に一致して、其の計畫の下に勞働いて居るんです。關係の諸帝國の思想を動かし、全世界に散在して居る猶太民を糾合せねばありません。人間には臥床が必要と同じ程度に故郷が無くてはなりません。故郷が持つ傳説や祖先の功業は、人間の心に臥床と同じ丈けの休息を與へます、猶太民族が現在のやうな物質主義に偏したのは、故郷を失つて漂泊の旅人となつたからです。」

此の談話の中途にカアトシエンカは朋友と別れて、貳人の側へ歸つて來て、同じく草の間に座し、何か云はうとしたが餘りに英夫が熱心に聽いて居るのを見て默言つて了つた。

「諸國に散在して居る猶太民族が首尾よう其の王國の中に包擁されましやうか知ら。猶太民族は黄金と寶石とを集めん爲に常に富貴なる他種族の間に住居を造る。彼等は世界の人類の文明と幸福に何等の貢獻を爲さんとも希はずと云ふ評論は能く聞くのですが……。」

「莫伽な。其督教國民の嫉妬です。猶太人の富に對しての嫉妬です。世界に散在して居る猶太人の中から大哲學者も、大藝術家も、大科學者も顯はれて居るぢやありませんか。」

アルトオルが稍勢込んで云ひ放つと。カアトシエンカは不思議に冷笑の影を頰に浮へ

膝の上を續け打ちしながら。

「お止しよ。アルトオル。御前さんの猶太王國建設の夢も久しものよ。無論其れが御前の山師的に麵麭を得る爲の仕事だが、私の前丈けでは、那麼僞善的な虛僞は云つて貰ひたくないわね。伯林から來なすつた日本の方にいくら御前さんが尤もらしい容體をして云つても、御前の財布は膨れないんだよ。其れとも何か英夫さんに對して計畫があるのかい。」

宛ら女犬が男犬に追立てられて吠え附くやうに汚く罵つた。服裝は昨日の儘であつたが、帽子は遙に立派なのに取換え、兩掌の指に幾つもの指輪を飾つて居た。

アルトオルは此の不意の襲擊を豫期して居たかのやう、初めの程はカトシエンカを些つと睨つた限り意にも止めぬらしかつたが、英夫の顔に愕きの表情が強く顯はれたのを見ると、其の眼は憤怒の色に顫え頰も赭く輝いて來て、カアトシエンカを睨み附くるやうな面差を爲たが、口を堅く引結むで突と立上ると其の儘、英夫に挨拶して、彼方へ急ぎ足に立去らうと爲る。英夫も直ぐ續いて立上り止めやうと其の腕を捕へると、アルトオルは丁寧に謝絕して更に行懸ける。嘲笑の影を頰に浮べたまゝ凝と此の態を見て居たカアトシエンカは何と思つてか此の時稍顔色を直して猶太語で何か二言三言云ふと、アルトオルも少し機嫌を直して、行きもやらず佇立つた。カアトシエンカは馬鹿にしたやうな顔色で立上つて側に行き、四邊を憚るやうな低い調子の猶太語で親しく話し續けた。

英夫は貳人の關係に就いて考へぬ譯には徃かなかつた。何か不快な事情の紛議が二人の間に横はつて

あるにしても餘りに女の不作法な惡罵は女の今迄の生立を承認するとしても、其の圏内に捲込まれた自身に取つては矢張不愉快なものであつた。然うして此の女が慥う云ふ事を口に出す下に、自分に對して好意を持つて居るのであらうか其れとも自分を利己的の發作感情に利用して居るので無からうかと云ふやうな考へも頭腦の中に閃く、伯林に居る瘠せたマリアンヌのアルトオルを評論した言葉と、カアトシエンカの罵り言葉の内容の根本相違も考へらるゝ。

三人共に立ち上つて了つたので、誰が歩み出したと云ふ事なく、傾斜面を下の方へ導く小徑を緩い歩調で歩き出した。四邊には大勢の散歩客の姿が見られた。一つ林を拔けると、湖邊から一崖に空立つた急な坂の上に達した。カアトシエンカと肩を並べて悶着後の解決をひそ／＼語うて居たアルトオルは何と思つてか前へ進み出で、一氣に下へと馳り降りるのであつた。英夫も危險だと思つた。カアトシエンカは。「危險い。」と口に出す程であつた。其處を降りて往く人は誰も無かつた。大抵は迂回り路の緩い坂を降りて往つた。カアトシエンカが要求したので、英夫は其の緩い坂を腕を籍して湖の邊へと降つた。カアトシエンカの重い身體を靠せ懸けられたので割合に時間が費つた。降り果てゝ其の邊を瞰したがアルトオルの姿は見えなかつた。

「多分一歩前に汽船の乘合場へ往つたのでしやう。」

カアトシエンカは呟いて氣にも懸けなかつた。一度公園で見た巴威國特有の聖母を棟木の下に飾つた家は其處此處に見られた。大抵は清灑な別莊で、うたかたの記の中の老漁師ハンスの家と云ふやうな質素な建築はもう見當らなかつた。岸近う自動艇や三角帆が浮いて居る。

乘合場へと逹し、其處を見たが矢張りアルトオルの姿は見當らなかつた。念の爲め近所の料理店を覗いて廻つたが居らない。其の中に汽船が來たので二人は其の上へと乘り込んだ。スタルンベルグ町へ歸り附いた時はもう町に灯が點火つて居た。湖の面は暮れて居ても、遠くアルペンの峰の頂きのみ薄色の空の下に暮れ殘つて居る幽暗な景色を眺望し得られる湖邊の料理店へ上つて貳人は食事をした。湖から捕れる魚の清鮮な味は英夫を嬉ばした。食事中にカアトシエンカは恁う云つた。

「あの男の心の鍵はもう錆び切つて居ます。磨いても磨き切れない程にです。あんな男の云ふ言葉を信じちやいけませんよ。」

汽車に乘つてミユヘン市に歸り附いたのは拾時過ぎであつた。停車場からカアトシエンカの家の方の近く迄電車に乘つた。降りてから二人は又肩を並べた。猶太人街は暗く眠つて居た。見上げるカアトシエンカの家の窓は總て閉ぢられて灯は無つた。

「有難う御座いました。ほんとに今日は面白う御座いましたわ、併し貴方には御金を澤山使はして濟みませんでしたわね。貴方明晩家へ遊びに被入いね、御待ちしてますわ……。」

握手してから又昨夜のやう熱い接吻を與へるのであつた。蒼い辻瓦斯の光りは、其の肉の豐な頰を水中から覗く妖女のやうに照し出すのを英夫は見逃さなかつた。

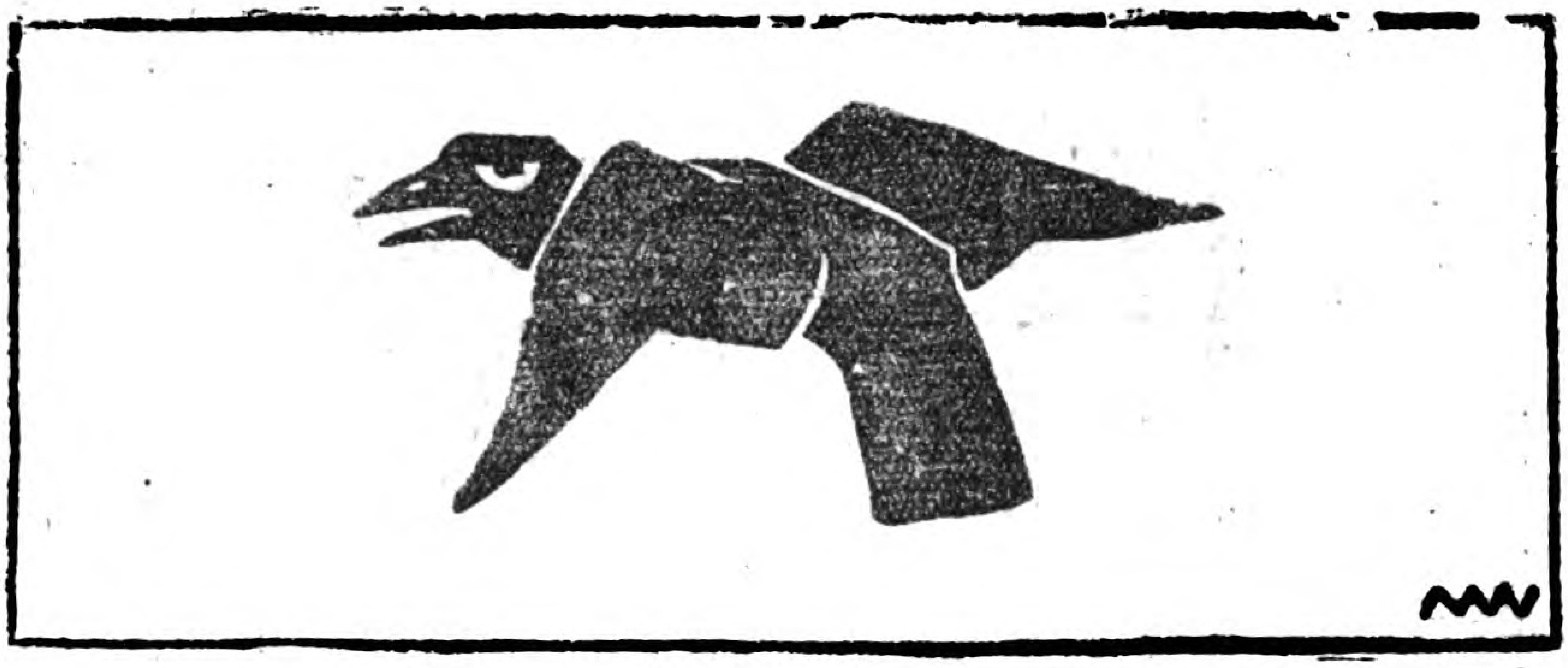
カアトシエンカに別れた英夫は何と云ふ事なしに、暫時其の家の前に佇立んでから歩き出した。向側の家の軒下に達した時、カアトシエンカの家から出て來る人の姿が見えた。家の壁に沿うて歩く姿が朧に認められたが、家に附いて曲る細い横町へと這入つて行つた。英夫は直ぐ後を追ふと、前に行く姿は

猶店を開けて居る昨日の珈琲店の軒の灯でカアトシエンカであるのが知れた。然うして其の珈琲店の前で停立り、少し延び上つて窓の中を覗込んでから扉の中へと急いで這入つて往つた。英夫が其の珈琲店の前へ歩み寄つて、窓から未だ覗はぬ前に内部で烈しい人のわめき聲が聞え、器物が床に落ちて破れる音もした。

「畜生〳〵。」叫ぶのはカアトシエンカの聲であつた。

英夫が足を爪立て丶中を覗き込むと、カアトシエンカが卓机の前に座して居るアルトオルの頭髮を摑んで拳を打下さうとするのを止めて居るのは家の主人らしい肥太つた男であつた。可愛い眼をした青い眼の給仕女は其の側に突立つて、何かしら罵つて居るのが見えた。と、アルトオルへの掌を放したカアトシエンカは今度は、其の可愛い眼の給仕女の方へと喰つて懸つて往つた。二人の婦人は直ぐ摑み合ひを初め、カアトシエンカが打下す拳を給仕女は二つ三つ受けたが、其の代償には下から大分蹴り附けたらしい。外に二三人あつた客は總立ちになつて二人を止めた。騷ぎを聞き附けて家の前にはもう集る人もあつた。裏の扉から息を切して這入つて來たヘツケルマン夫人の姿も見えた。亂髮になつた娘を庇護つて、アルトオルを罵る恐ろしい形相は昨日見た溫容な老婆と全く異つて居た。

英夫は騷ぎを終り迄見ずに足を上げた。其の横町を廣い道へと歩み出ると、晝間とは打變つた靜かさに猶太人街は眠つて居る。處々に窓に灯が殘つて居た。電車通りの方へ往かうとした時、不圖足に觸る丶物があつたので、拾上げると小さな錆びた鍵であつた。街燈に翳して見て、一旦は捨てやうとしたがカアトシエンカが屢々云出した言葉から引いて此の街で拾つた事が何かの紀念でもあり、意味あるやうに思はれ、其のまゝ隱袋へ入れて家路の方へと步出した。（完）



蕃地から

中村古峽

一、蕃地からの第一信

K君。

とう〳〵蕃地まで入り込んだ。內地にゐた時は名を聞いただけでも薄氣味の惡かつて蕃地まで、僕はとう〳〵入り込んでしまつた。「何の爲めに?」など、問ふことを止めよ。只僕の例の一時の氣紛れな好奇心に過ぎない。今僕が月桃草とか云ふ草の葉で編んだざら〳〵する莫蓙の上に腹這になつて、君に此の手紙を書いてゐる處は、慓悍の名を以て夙くから我が歷史にも知られてゐる高士佛蕃社——と云つても君には一寸見當が付くまいが、明治七年の征臺役に牡丹蕃社と力を協せて、頑强に我軍に抵抗を試みたと云ふ高士佛蕃社の公學校の一

隅だ。此處へ來る途すがらも一二軒の蕃人家屋を覗いて見たが、何れも「竹の柱に萱の屋根」と云ふ君のお得意のあの博多節其のまゝの薄暗い掘立小屋の中に、頭に草の葉を卷付けたり、耳朶(みゝたぶ)に大きな環を嵌めたりした、短褐裸足の眞黒な生蕃が、眼ばかりぎろ〳〵とさせてゐた處は、あんまり氣持の善い圖ではなかつた。斯う書いて來ると君は定めし、「止(よ)せば善いのに！そんな危險な處に入り込んで、生蕃にかけ替へのない首でも取られたらどうするんだ！」と心配して呉れるだらうと思ふ。實際僕自身でさへ、今日の午過(ひるすぎ)頂高里得(テンマリトン)と云ふ部落を過ぎてから二時間あまりの間、折から又降募つて來た雨の中を、わざ〳〵此の公學校長のI君から山の麓まで迎へに寄越して呉れた十二三の蕃童と、それから今朝蚊蟀(マンス)から附(つ)いて來て呉れた、いやにしんねりむつゝりと默りこくつた（たとへ物を云つたところで僕には一語も通じないんだ）土人の巡査補とに導かれて、細い、急峻な坂路を、ぐん〳〵と深い山奥の方へ引張つて行かれた時は、こりや大變なところまで踏出して來たと思つた。高さ二丈から三丈に達する大木が路の兩側に立重なつて、おまけに雨雲が四邊(あたり)を閉籠(とぢこ)めてゐるので、谿も峰もさつぱり見えない。さうして其の大木の蔭には、名も知らぬ草や雜木が冬を嘲つて、青々と爛熟した廣い葉を高くさし上げ、氣味の惡いほど繁り合つてゐる處は、流石に熱帶地と云ふ感じを深くさせた。路は雨に濡れて一歩一歩にずるずると滑る。處が件(くだん)の蕃童は、僕の荷物を肩に背負ひながら、裸足で其の赤土の坂路をぴよん〳〵と飛んで登る。まるで犬ころでも迎へに來たやうだ。巡査補もこれに劣らずとつとと歩く。僕も負けまいと一生懸命について登るが、雨と汗とでびしよ濡れになつた身體は、連日の疲勞で綿のやうになつてゐるので、どうしても思ふやうに足が進まぬ。稍もすれば二人の姿を見失つてしまふ。雨雲は頻に目を掠めて

飛ぶ。猿が時々高い梢から不意に木の實などをほうり投げてはきい／＼と啼く。誠に心細いことであつた。然し來て見ると天下は至つて太平無事だ。蕃地も平地も別に異つたことはない。公學校の宿舍に着くや否や、I君の好意で濡れた洋服を氣持の善い和服に脱替へ、乾き切つた咽喉へ此の山中に思ひも寄らぬミルク入の紅茶を勸められた時は、僕は急に蘇生つた心地になつて、こんな甘い茶は蕃地でなければ到底も味はれまいと思つたくらゐだ。殊にI君から種々と生蕃に關する興味ある物語を聞かして貰つて、其れを君への土産話に持つて歸ることの出來るのが何よりも嬉しい。——然し僕は餘りに蕃地の吹聽を急ぎ過ぎた。僕は最初からの君への約束に從つて、僕が此處へ着くまでの道筋を、今少し詳細に報告しなければならない。

K君。

僕が此の前臺灣の最南端鵞鑾鼻の燈臺から君に出した、あの長い手紙はもう見て呉れたゞらう。僕が其の燈臺に別れを告げたのは、昨日の朝の入時であつた。其時はからりと晴渡つてゐた空が、林投の生茂つた林を分けて、其處から小一里ほどしか隔つてゐない東海岸の望樓に出た頃は、大分怪しくなつて來た。然し雨にならうなどゝは誰も豫期してゐなかつた。一行——と云ふのは其日特に僕の案内に立つて呉れる鵞鑾鼻派出所のM巡査と僕と、其れから前夜燈臺で泊り合せた總督府のT技師と其の從僕との四人——は、望樓に立寄つて其處に装置してある複雜な機械の説明を聞いた。此處は其名の示す如く我海軍の無線電信所になつてゐるのだ。さうして所長S海軍技士から不意に「芳名錄」をつきつけられて、草鞋穿で玄關口に佇立つたまゝ「望樓やマストに動く春の雲」と云ふ出鱈目を、句同樣の拙い筆で走り

嘗さした時は、曇りながらもなほ雲煙模糊たる海の彼方に、紅頭嶼がぼんやりと見えてゐた。

處が望樓を出でゝ稍暫し、林投の林も大分疎らになつて、路が廣い草原の中に細く右左に岐れる處まで來ると、急に雲が低く海面に下りて來た。鵝仔角の方へ出るT技師と其の從僕とは左を取り、又M巡査と僕とは海岸に出るべく其の右を取らねばならなかつた。

「これは事によつたら今日は降りかも知れませんよ。」

其時M巡査は斯う云つてT技師に別れの挨拶をした。間もなく小雨は、さつと横しぶきに降つて來た。見るとたつた今別れたT技師と其の從僕との後姿がつい目の前に時雨れて、雨は斜めに前日僕達が水牛の一群に惱まされた頂埔の牧場のあたりと思はれる方角へ走つてゐた。M巡査は外套の頭巾を冠つた。僕は又東港以來ステッキ代りに持つて來た洋傘を初めて用立てた。

高さ四五間もあつたらうと思はれる急な砂地の崖を駈下りて、漸く海岸に出た時は、雨は小止みになつてゐた。けれども紅頭嶼はもう見えなかつた。僕は行く〳〵小供のやうに、砂濱に打上げられてある珍らしい貝殼や、紅頭嶼あたりから流れて來たらしい椰子の實の殼などを拾ひながら歩いてゐると、足許から一匹のやどかりが匐出した。僕は何と云ふことなしに、これも今日の旅の紀念物だと云ふやうな感じがしたので、其れまで捕へて例の背の生蕃袋の中へ入れておいた。

嘗てI理學博士が四林格山の視察に見えた時、其護衛警部が流されて溺死したと云ふ港口溪の河口で僕はM巡査に別れて、更に港口の派出所から特派された土人の一巡査補に案内されることゝなつた。やがて路は次第に山に入る。程なく一部落に出合した。村の名を聞くと小琉球と云ふ。小琉球とは西海岸

の枋寮沖に見えた島の名と同じだから、不思議に思つて問糺すと、此村の住民は元小琉球島の漁民であつたが、往年此地に漂着して終に定住することになつたのださうだ。戸數は僅に十六戸しかないとのことであつた。

猪勝束と云ふ部落のあたりから又激しい雨に叩かれて、僕も巡査補も濡鼠になりながら、漸く蚊蟀支廳へ駈け込んだ。

其夜僕は蚊蟀支廳長の舍宅の一室に泊つた。夜になつて二三の廳員の訪問を受けた。さうして其の人々の話から、僕は此地方の生蕃の言語や風俗と、內地人特に鹿兒島地方の其等とが非常に類似してゐる點の多いことを聞いた。今記憶してゐる二三を書いて見ると、此邊の生蕃は舌のことを「ツマ」と云ふが鹿兒島では唇のことを「ツバ」と云ふ。（一般には唾液のことを「ツバ」と云ふぢやないか。）又他人に返事をする時は、此邊の生蕃も鹿兒島人も共に「オイ」と云ふ。（アミ蕃族の如きは「ハイ」と云ふさうだ。）又「無い」は此邊の生蕃では「ヌカ」と云ふが鹿兒島では「ナカ」と云ふ。又琉球や大島（鹿兒島縣下の）では女の手の甲に入墨をするが、恒春の上蕃でも同じことをする。又紅頭嶼の蕃人は椰子の實の皮から作つた丁度兜のやうな形の帽子を戴き、又桶川胴に似た帶を腹に卷いてゐる。彼等は又船のことを「チンマ」と云ふが、これも內地の傳馬に似てゐる。こんなことから押して見ると、昔し日本の婦人が鐵漿で齒を染める習慣のあつたのも、檳榔子の實を嚙んで絕えず口唇や齒齦を紅くしてゐる此邊の蕃人の風習を傳へたものではあるまいか——などゝ云ふのであつた。

此處まで書いて來た時、急に天井からばつたりと物の落ちる音がしたので、ふと見ると五寸に餘るた

きな蜈蚣が平べつたい頭を持上げて、敷物の上を僕の方へ突進して來るのであつた。覺えず聲を立てゝ立上ると、I君が早速火箸で抑へて戸外へ捨てゝ呉れた。氣味が惡くなつたので仰向いて仔細に見廻すと、天井も何もない屋根裏には、其處にも此處にも守宮がくつついてゐた。

二、テポ・サドガイと其の口風琴

「風呂が沸いたからお入りなさい」と、カベツ・カルルと云ふ少年が、可なりアクセントの好い日本語で知らせに來た。日はもう疾くに暮れ果てたが、雨はまだ頻に降つてゐる。僕とI君とは薄暗い洋燈の下で、食後の雜談に餘念もない時であつた。

カルルと云ふのは口許の何處やらに愛嬌のある蕃童であつた。年は十八とか云ふことだが、高々十四五位ゐにしか見えない。最初僕は此の少年をI君の給仕か小使だと思ひ拔いてゐたが、後で聞くと二三年前の當公學校の出身で、今は同校の雇を拜命してゐるさうだ。道理で日本語も分ると思つた。

「風呂は戸外です。少し寒いかも知れませんが入つていらつしやい。」I君は斯う云つて僕に勸めた。

戸外へ出ると成程寒い。臺灣へ來て始めて感じた寒さである。其れに何時の間にか風が吹添つてゐるので、雨は激しく顏にかゝる。僕は戸口に立つたまゝ、暫く入るか入るまいかと躊躇してゐたが、昨日以來の雨と汗とで身體は非常に氣持が惡いので、思ひ切つて入ることにした。I君の持つて來て呉れた洋燈が幾度か風に消えかゝる。風呂の下の火も絶えず風に煽られて煙いこと夥しい。しまひには目が痛くなつて來る。僕はそこ〳〵にして風呂を出た。

手早く着物を着て戸口を振返ると、I君は眞暗闇の中でじやぶ／＼とやつてゐる。とう／＼洋燈が吹消されたのであつた。燐寸を搜したが、勝手が分らぬので容易に見當らない。

「カルル！カルル！」とI君の眞似をして呼んで見たが返事がない。今一度呼ばうと思つたが、何だか氣が咎めたので其のまゝ聲を引込ませた。

向うを見ると暗の雨の中へ微に一道の燈火が漏れてゐる。僕は雨を衝いて其方へ走つた。戸の隙間から中を覗くと、土間の眞中へ小さな豆洋燈を置いて、寒さうな七八人の蕃童が痩犬のやうに固まつたゐた。然し僕は此の哀れな寄宿生の中に、遂にカルルの顏を見出し得なかつた。

「今夜は貴方への待遇に、一つ小供に歌でも歌はせてお聞かせしませう。」風呂から上るとI君は斯う云つて、カルルを呼んで何か云つた。やがて先刻の連中がずらりと土間に並ぶ。年頃は何れも十一二にしか見えない。頭はみんな河童に切つて、耳朶には既に小さな木の片や硝子玉を篏めてゐた。

「彼等は生れると間もなくみんな縫針で耳朶に孔を穿けられるんです。さうして其れへ細い粟の穂の莖を通されるんです。母親は日に何度となく其れを左右に引張つて孔を擴がらせます。やがて穂を二本にし、三本にし、四本にし、終に十五六本になると粟の穂の代りに木片を嵌めるんです。御覧なさい、これなんかはこんな貝殼まで嵌めてゐます。」I君は小供の一人の耳を指しながら斯う説明して呉れた。

「さあ、みんな何か歌つて内地の大人にお聞かせなさい。」I君は先づ日本語で斯う云つて、其れから蕃語で又長く附足した。やがてカルルが先に立て歌ひ出すと、一同も聲を揃へてそれに合せた。勿論僕には何の事だか一切分らないが、其の音調が如何にも悠長で、間が抜けてゐて、原始的の氣分が溢れて

るので、僕は熱心に聞いてゐると、これは此邊の蕃人が、粟祭の時に歌ふ歌だとI君が注意して呉れた。彼等は續いて同じやうな歌を二つ三つ歌つた。I君は更に僕の爲めに、何とか云ふ生蕃踊を踊らせようと大いに骨を折つて呉れたが、彼等は互に顏を見合つてくすくす笑ふばかりで、其れはどうしても踊らなかつた。

此時戸外にばさばさと物を拂ふやうな音がして、間もなく變手古なマントを肩から羽織つた、赤ら顏の一人の蕃人が、

「せんし(先生)こんばんは」と怪しげな日本語でI君に挨拶しながら入つて來た。

其男は年頃四十ばかりの、丈の低い、顏の丸い、鼻のびしやげた、そして始終汚い齒を剝出してる蕃人であつた。頭は土人のやうに辮髪で、其れをぐるぐると額に巻付けてゐた。顏の紅いことは猿のやうである。頸には猪か山豕かの毛皮を巻いて、手首には銀の腕輪を二本も嵌めてゐた。

「これが先刻お話しました日英博覽會に行つて來た男です。」I君は口早に僕に注意した後、「どうだね、近頃は一向顏を見せないが變つたこともないかね。」さうして直ぐ其後へ蕃語で何か附加へながら、今來た蕃人に傍の大きな洋盃を與へた。

I君の話によると、先年日英博覽會が開かれた時、此地方の蕃族から廿四名の生蕃が出品(?)されて半年ほど彼地に滯留して居つた。八瑤社から四名、高士佛から八名、內獅頭社から三名、內文社から二名、草山社から三名、蘇芒社から四名、其のうち高士佛の三名を除く外は悉く男子ばかりであつた。滯英中草山社の一名は彼地で病死したが、其代り高士佛社の一女は彼地で分娩したので、歸る時も矢張り

廿四名であつた。其生れた兒は博覽會の名に因んで日英博と命名して貰つたさうだ。僕は臺灣の蕃地の山奥に入つて、洋行歸りの蕃人に會はうとは思ひがけなかつたので、此の珍客に對して非常に好奇心を煽られた。

「此奴は酒を飲まないと何にも話さないんです」と云ひながら、I君は頻に酒を勸める。テボ・サドガイ(其蕃人の名)は甘さうに一口飲干しては頻と唇を窄めて、ふうと深い呼吸を吐く。そしては何杯でも引受ける。彼の紅い顏がます／＼紅くなる。

「此男の親父はカベツ・フラルヤンと云つて中々悧巧な奴らしかつたんです」と、I君は暫くして僕に云つた。「其れで明治七年の征臺役には、迚も日本軍には敵はないと思つたと見えて、早くやら我軍に歸順して、大分味方の内情を知らせたらしいんです。其れで當時の都督西郷中將から保護旗章なんかも貰つてゐます。今はもう死んで居りませんが——」と云つて、又テボ・サドガイに一杯注いでやつて、

「あの旗は持つて來ただらうね。見せて御覽。」

「旗、此處にあります」と、サドガイは片手で洋盃を握つたまゝ、片手で外套の内衣嚢を掻廻して、細かく疊んだそれを出した。擴げて見ると旗は方一尺五寸許の、皺くちやになつた古ぼけた日の丸であつた。さうして其白い處に鈍染んだ墨色で、『この御旗を賜はるものは我皇國の大稜威に順ひ奉るあかしなれば假染にも汚すなかれと云ふこととしかり。明治七年第五月』と書いてあつた。テボ・サドガイはフラルヤンの子だが、分家したので父の姓を襲いでゐない。彼は今小供が四人ある。長男は今年十六になるさうであつた。

「有難う(マッサロ)、有難う(マッサロ)」と、僕はたつた一つしか知らない蕃語を繰返しながら其旗を返すと、彼は嬉しさうに旗を受取つて、丁寧に疊んで又元の內衣嚢に納めた。

「ちつと日英博覽會の時の話でも聞きたいもんだね」。僕の問の意がI君の通譯によつて傳へられると、テボ・サドガイは洋盃を下において臺灣を出た時からのことを話し初める。先づ基隆から門司に渡つて船を乘替へて、上海、香港、新嘉坡、孟買、古倫母、蘇士、馬耳塞――と中々道順を能く記憶してゐる。さうして門司と上海は寒かつたが、新嘉坡は「ペリ・ホット」だつたなど〻折々は英語の片言まで交ぜる。英國に居る間に臺灣へ歸りたいとは思はなかつたかと、I君が尋ねると、少しも歸りたいとは思はなかつた。却つて妻子を臺灣から呼寄せて何時までも向うに住んでゐたかつたと答へたさうだ。

「滯英中、彼等は何に一番驚いたでせう」と僕が重ねてI君に問を出すと、I君は直ぐ又其れをテボ・サドガイに傳へて吳れた。其れに對して彼は身振や手眞似を加へながら半時間も熱心に雄辯を振つた。勿論僕には陳紛漢の蕃語だから、彼の口吻を寫すことの出來ないのは殘念だが、彼は街も家も大きくて綺麗で立派なのに驚いた。又見たところ田や畠は少しもないのに蜜柑や野菜物の澤山あるのに驚いた。又英國婦人がみんな腰の細いのに驚いた、あれで能く立つて歩けることだと怪んだ。地下鐵道にも驚いた。眞暗(まつくら)な處をずん〳〵走つてゐると何時の間にか又街の眞中に出てゐた。巡査の身體の大きいのにも驚いた。探照燈の眩しい光にも驚いた。一番驚いたのは、或日博覽會場內の廣場でパタパタ〳〵と物の爆發するやうな音がしたので何事かと見てゐると、大きな箱のやうなものが空に舞上つた。見る〳〵うちに高くなつて鳥の飛ぶやうに小さくなつた。しまひには其れも見えなくなつた。箱の中には二人の人間が

乘つてゐた。大方死んでしまつただらうと思ふ――と云つてゐた。蓋し飛行機を見たものらしい。

サドガイの耳には直徑八分ばかりの大きな耳飾が付いてゐた。一寸外させて手に取つて見ると、丁度闘球盤の白球のやうな丸い木片の中央に、貝殼で何か譯の分らない模樣を彫込んだものであつた。其れを取外した時の彼の耳朶は變に縮れて見苦しかつた。けれども彼が其の耳飾の周圍をぺろりと舌で甞めて、再び其を元の位置に嵌め戻すと、耳朶は急に膨れてだらりと垂れて、丁度繪に書いた大黑樣の耳を見るやうに福々くしなつた。支那人が彼等蕃族を總稱して「大耳國の人」と呼んだのも無理はないと思はれる。

「此男はパザエンの名人です。一つ吹かせて聞きませう。」I君がパザエンと云ふのを聞くと、テポ・サドガイは又例の內衣嚢の底を探つて小さな樂器を取出した。見ると其れは先刻からカルルや寄宿生等の頻りに吹いてゐたものであつた。長さ二三寸の鐵の薄板の眞中に細長い穴を穿けて、其の隙間へ同形の銀板のやうなものを釘で貼付け、又鐵板の兩端には各一個の穴があつて、一方の穴には絹糸の房やら南京玉の繋いだ飾紐を結び、他の穴には細い麻糸を結び付けた極めて原始的な樂器である。其糸と房とを兩手で引張つて、銀板を貼つた部分を唇端にあてがひ、息を引いたり出したりすると、銀板が微妙な音を立てる。而も其糸の引方の強弱に由つて音にも大小高低が生じて、ハアモニカなどよりは遙に感傷的な韻を傳へるのだ。蕃人同志が聞くと其の音調によつて互に意思を通ずることが出來ると云ふ。

テポ・サドガイは輕く唇にパザエンを宛て丶、眞紅になつた頰を暫く脹らせたり窪ませたりしてゐたがやがて一曲を奏し終つたと見えて、パザェンを外して指先で銀板のあたりを拭つた。

流石のI君にも此の樂音は通じなかつたと見えて、カルルに其の意味を尋ねてゐる。

「今晩は先生に御馳走になつて、好い心持に醉つて、大變に有難い——といふ體の意味です」と少年は答へた。

サドガイは引續いて又一つ長い一曲を奏した。I君が重ねてカルルに其意味を問ふと、カルルはもぢ〳〵してゐて容易に答へない。强いて迫られて、——今夜は先生に何時までも引止められて、雨は降つてゐるし寒くはあるし、さて〳〵遲くなつて困つたことだと云ふ意味です、と恐る〳〵答へる。

「なにが困ることがあるものか。此の通り好きな酒も肴も宛てがつてやつてゐるではないか」と、I君は、つい勃として腹を立てる。此のやうに何でも其時の感情其のまゝを歌にするのが、彼等蕃人に通有な習慣だと云ふことである。

K君。

今はもう夜の十二時だ。テボ・サドガイはもう疾くに歸つた。I君も既に床に入つた。僕も疲れてゐるから今夜はもう之で止めにする。明日は愈々牡丹蕃社に入つて、琉球漂民が遭難の跡を弔ふ積りだ。多分泊りは牡丹路蕃社の駐在所になることだろうと思ふ。

三、草埔後の一夜

うと〳〵として目が覺めると、下腹が頻に痛んでゐる。手をやつて探つて見ると、不安な個所が其處にも此處にもある。

戶外は大變な風の音だ。其れが又恒春以來大分聞慣れて來た音とは全く違つて、非常に淋しい尖がつた響を神經に傳へる。丁度內地の木枯に似てゐる。其の音を聞いただけでも肩のあたりが悚々として來る。

横を見るとF警部は、先刻の晩酌がまだ心持善く廻つてるやうな紅い頬に、黑々とした濃い髭髯を漂はせながらすや〳〵と眠つてゐる。洋燈か其の枕許をぼんやりと照してゐる。

其折の警部の話であつた。――草埔後は此の邊りの蕃社の中でも一二を爭ふ高地で、海面を拔くこと二千四百尺、氣候も平地とは十餘度の差があつて、嚴冬には氷を見ることも珍らしくない。其れに地勢の關係か氣流の加減か、殆ど年中風が吹いてゐる。つい隣りの何とか云ふ蕃社では決してそんなことはないのに、此處だけが丁度風の通ひ路に當つてゐるらしい――など〳〵云つてゐたが、此の音を聞くに付けても成程と思ひ合される。

腹は益々痛い。寢返りを打つと、肩の骨がぢかに床板に當つてるのではないかと思はれるほどこつこつする。足の先も先刻床の中へ潛り込んだ時からちつとも暖まつてゐない。丸くなつて身體を縮めてゐると、煎餅蒲團を通してしん〳〵と寒さの肌に徹して來るのが感ぜられる。

程なく便が催うして來た。困つたことだ。寒さは寒し、其れに便所の勝手も分らぬ。最初はどうかして紛らさうとしたが、どうしても紛れて呉れさうにない。止を得ず枕許の牛蒡袋から塵紙を取出した。さうして出來るだけ靜に大戶を開けて、兎も角も戶外へ出ることにした。

外には寒の月が物凄いほど明るく冴え渡つてゐた。家の横手から裏の方へ廻つて見るく、其處に二坪

ばかりの空地があつて、其一隅に番小屋めいたものが立つてゐる。中を覗いて見たら幸に便所だつた。勿論左右から葦を斜めに倚せかけて屋根を作つただけで、前も後もがら明きだから、寒いことゝ云つたらお話にならない。覺えず齒の根が合ひさうになる。用を足しながら向うを見ると、空地の先きが直ぐ崖になつてゐて、ずつと目の下に波浪の其のまゝ氷りついたやうな連山が、月を浴びて白々と並んでゐた。さうしてどつと風の吹き去る毎に、其の山の背がぶる／＼と顫えてゐるやうに見えた。月は丁度空地の向ひに立つてゐる樟だか欅だか知れない木の梢にとまつてゐた。

用を足したので、少しは腹工合が善くなつたが、さて手を洗ふ處が見當らない。其處此處と捜し廻つたがどうしても見當らぬ。其のうち身體は氷のやうになつた。氣持の惡いことゝ夥しいが、此上風邪でも引いてはと、其のまゝ中に入つて再び床に就いた。腹の痛みはまだ何處やらに殘つてゐる。

確かに冷込んだに相違ないと思ふ。二日間の雨が禍をなしたか、但しは今日途中で飲んだ川水が中つたか。何れにしても早く服藥をしておくに限ると、又枕許の生薑袋の底を探つてヘルプを出した。座敷の中を見廻したが此處にも水がない。家の人を起すのは氣の毒である。とう／＼ヘルプの錠劑を四つばかり、硝子の管から直接に口に入れた。さうして唾液と一緒に飲下さうとしたが、藥はみんな咽喉に塞へた。重曹かビスミットかの鹹つぽい味が咽喉に泌み渡る。やつとのことで飲み下した。

暫くすると又便が催うして來た。忌々しいくらゐである。仕方がないので丁度人の寢息を窺ふ盜人のやうに、又ぞろ怯えた手付と足取とを以て戸外に出た。目の下の連山は矢張り波浪の氷りついたやうであつた。月は依然として樟だか欅だか分らない木の梢にとまつてゐた。

今度も手を洗ふところが見付からなかつた。まるで他人の手を借りてゐるやうな不愉快さを忍びながら、再び戸に辛張棒をして床に入つた。

やがて晝の疲れにうと〱とする。

風の音と寒さに又目が覺めると、下腹が再び痛んでゐる。時計を見るともう三時に近い。こんなことでは明日は愈此の駐在所の厄介にならねばならないかとも思ふ。再び生蕃袋からヘルプを取出して、硝子の管から直ぐ口に五六個を入れた。さうして唾で飲込んだ。今度は先刻の熟練で、前よりは工合善く咽喉に通つた。

暫くすると又便が催うして來た。殆ど泣きたいやうである。寒さに顫へながら又裏の空地の一隅に蹲んだ。眼下の連山は依然として風にわなゝいてゐた。月は樟だか檜だか分らない木の梢をずつと離れて其の連山の峯の一つに近づいてゐた。

不意に後方の茂みの中で、がさがさ、がさと云ふ音がして、やがて鉈か何かで物を打ち落すやうな響が二聲ばかり聞えた。突差に僕の目の前には、昨夜F警部と一緒に此處へ着いた時、警部の歸りを待受けて、玄關口に蹲みながら何事かねち〱と訴へてゐた屈竟な三人の蕃人の姿が浮んで來た。警部の話によると、道普請の事で彼等と隣りの蕃社との間に葛藤が出來て、其れを訴へに來てゐるのだと云ふことであつた。若しや其の生蕃の一人が――僕は心臟が胸の中で其のまゝ石になつたやうな感じがした。

部屋に戻つて再び床の中に潜り込むと、間もなく何處やらで鷄の鳴く聲が聞え出した。

四、恐ろしき一時間

後ろから呼びかけられて振向くと、案内の番丁は僕の荷物を肩から下してゐる。さうしてつと路傍の番舍に入るので、僕も何の氣なしに續いて入つたが、今しも其の土間の眞中の爐の側に腰を掛けながら、ぎろりと僕達の方を見返した恐ろしく眼の鋭い一人の生蕃を見た時は、僕は覺えず一種の寒氣が突差に僕の全身を射て走るのを意識せずにはなられなかつた。

其の男は年頃四十五六とも見える、額の廣い、頬の大きい、肩幅のがつしりとして生蕃であつた。鹿の皮の頭飾、貝殼を繋ぎ合せた頸輪、腰には無論例の蕃刀を一本ぶら下げてゐた。僕の顔を見るとつと立上つて、「大人――」と一言云つたまゝ直ぐ案内の蕃丁の傍へ進み寄つた。さうして丁度戸口の一隅に据ゑてある大きな石板石に座を替へながら、何事か彼と蕃語で話し始めた。其の態度が如何にも鷹揚で且つ落着いてゐる。何處かに人を威壓する一種の風貌を具へてゐる。僕は其後も大分多數の生蕃に會つたが、まだ此時ほど底氣味の惡い感じをさせられたことは無かつた。一見して之は只の蕃人ではあるまいと思つた。卷狩の歸るさ路を踏迷つて、圖らずも敵將の山寨に分け入つたダグラスの昔語りがふと胸に浮ぶ。角笛の音やら矢叫びの聲が遙かの谿間から木魂に返して響いて來るやうな心地がする。

其れは草埔後を出てから丁度一時間餘り經つた後のことであつた。駐在所に人手が足りなかつた爲め、僕は止を得ずまるで日本語の分らない蕃丁に送られることゝなつたが、其男は見た處まだ二十歳を多ゝは出てゐまいと思はれるのに、其年頃の人間には似氣ない曇つた顔をしてゐた。これが今日の案内者で

す」と、F警部から紹介された時から、僕は彼の此の陰欝な顔が何となく無氣味でならなかつた。其れに彼は途中どうしても僕より先きには立たなかつた。――普通に案内者と云ふ者は、案内される者よりも先に立つべきものだと思つてゐる僕には、これが又更に無氣味を增させる他の原因となつた。路は相變らず嶮しい登りであつた。僕と蕃丁とは全く無言の行を守りつゝ其の嶮しい山路を登つて行つた。彼は常に僕から約三步ほどの間隔をおいて僕に從いて來る。一步だつて僕より先に立つたことがない。何かの拍子で僕が一寸立留りでもすると、彼も亦必ず立止つた。そしては時々腰の蕃刀を引抜いて、恰も試切でもするやうに路傍の木の枝をとん／＼と拂つた。

生蕃と云ふ者は人にさへ會ふと屹度先づ其の頸を見ると聞いたことがある。そしては之は切り易い頸これは切り難い頸と判定する。又人に切り付ける時は必ず其後方から不意を襲ふと云ふことも聞いた。東海岸の何處とやらの支廳長もつい近頃其の傳でやられたさうだ。――後の方でとん／＼と蕃刀の鳴る毎に僕の無氣味さは云ふまでもない。

けれども僕は決して此の案内者を疑つてはならない。丁度此の蕃社へ着く少し手前であつた。僕は一陣の山風に帽子を吹拂はれて、あつと云ふ間に谷底へ持つて行かれてしまつた。其時此の陰欝な顔の持主は、わざ／＼萱や雜木の生茂つた中を搔分けて、深い谷まで下りて行つて、其の帽子を拾つて來て吳れたくらゐだもの！

然らば何故に彼はこんな無氣味な蕃舍で態々僕を休息させるのだらう？

或ひは此處で又例の案内者の引繼にでもなるのかと考へたが、其れにしては新しい案内者らしいもの

が他に見えないではないか。

ぼんやり立つてゐるのも餘り器量が無さ過ぎる話なり、殊には相手に此方の腹の中を見透される恐れもあると考へたので、僕は宛ら敵地に踏入つた人の如き油斷なき心を持しながら、戸口の他の側に置いてある石板石の上に「内地の大人！」らしく豐かに腰を下した。さうして小屋の中を一渡り見廻した。

此時初めて氣の付いたことだが、此家の構造は今までちよい〱覗いて來た番人の小屋とは大分違つた處があつた。高士佛あたりの蕃社が平地の土人家屋を模倣して、低いながらにも兎に角地面の上に家を立てゝゐるに反し、此邊のは寧ろ地面を掘下げて造つてゐるので、正面の一方と萱葺の屋根だけが露出してゐる外は、他の三方とも全く地中に埋まり、一寸見ると大きな炭燒の竈でも見る觀がある。其れは草埔後でも既に目に付いたので、別に珍らしくも思はなかつたが、今僕の目の前に展開された有らゆる調度は、貧しい蕃人の住家としては中々に贅を盡してゐるには驚かされた。先づ土間が普通の蕃舍よりは餘程廣い。さうして假令凸凹であるとは云へ、其れがすべて大きな石板石で疊まれてある。其れから左右の壁と天井には樟だか欅だか分らないが、見るから丈夫な厚板が一面に張詰めてある。其が又何で削つたものか非常に滑かな面をしてゐる。見渡したところ禿山勝ちなる此の蕃地で、何處からこんな大きな木材が得られることかと怪まれる。殊に天井には緩く弓形に撓めた最も大きい厚板が用ひられてあつた。其から其左右の壁板に彫つてある彫刻が頗る面白い。先づ其腰の部分には、高さ三尺ばかりの變手古な恰好をしたものが十ばかりも並べて彫つてある。一個の不正な小圓形の下に一本の線を引いて、其線の兩端から又左右に各二本の線を描き、其が又幾に屈折して先端が何れも五本の短い線に岐れてゐ

る。察するに人間の骸骨を模寫したものらしいけれども頭が非常に小さい處へ手足が不釣合に細長いので、一寸見ると大きな蛙が踊つてゐるやうに見える。これが薄ぼやけた墨色に彩られて、左右に十ばかりづゝもずらりと並んだ處は頗る奇觀で、如何にも生蕃の彫物らしい原始的な感じを與へられる。更に左の壁の欄間とも云ふあたりには、人間の頭蓋骨が五つ六つ彫つてある。これは彼等のお手の物だけあつて、目鼻の位置も可なりに寫生が行屆いてゐる。之は白く彩つてあつたやうに記憶してゐる。又右の壁の同じ位置には、大きな毒蛇(ボワロン)がとぐろを巻いて鎌首を立てゝゐるのを幾つも彫つてある。これは何から取つた繪具を用ひたものか、如何にもあくどい群青色(ぐんじやういろ)に塗り立てゝあるので、一見毒蛇らしい不快な感じを與へられた。

　正面にも左右の壁と同様な厚板が一面に張られて、其の兩隅に三尺ばかりの入口が二つ開けてある。其奥にまだ部屋があるらしい。此處の欄間には大きな角附(つのつき)の見事な鹿の頭骨が七つばかり飾られてある。無論此家の主人が獵の獲物に相違ない。其の下の長押とも見るべきあたりに氣味の惡い折釘——五本の指を擴げた手の骨に型どつたもの——が幾本も立てゝあつて、其れへ種々のものが吊下げてある。蕃刀が二本、弓が三本、竹の柄の槍、古ぼけた火繩銃、鍬のやうなもの、斧のやうなもの、中にも殊に目立つたのは、鋸の一種か、長さ五尺からあるやうな大きな鐵器が、長押から土間まで引摺られてゐることであつた。見るものがどれもこれも生蕃の住居に應(ふさ)はしいものばかりで、僕の胸には益々無氣味の念が募り行くのみであつた。

　二人の會話は此の間もなほ頻に續いてゐた。番丁は折々相手の顔を見上げるばかりで、大抵は下を向

くか傍を見ながら話してゐたが、此家の主人はいつも眞正面に番丁の額を見下し、時々私の方に稻妻のやうな視線を投げては、「大人――麻裡巴――」と云ふ語を繰返した。其れが彼等の會話の中で僕の耳に理解され得る唯一の言葉であつた。麻裡巴と云ふのは確か今日の僕の行程の中に入つてゐる一番社の名前であつたと記憶してゐる。其處には駐在所もあると聞いてゐた。彼等は僕と麻裡巴とを結び付けて、何を話し合つてるのだらう。早く僕を麻裡巴まで案內するやうにと云つてゐるのだらうか、或は――或は僕を麻裡巴まで行き着かないうちに所置してしまへとでも諜し合せてゐるのではあるまいか。

時計を出して見ると先刻からもう優に廿分は經過してゐる。けれども番丁は一向に立上るけはひもない。僕は早く此の無氣味な小屋を去りたかつた。さうして何かして其意を案內者に傳へたいと思つた。然し蕃語を解し得ぬ僕には、却つて其れが先方の誤解を招く種になりはすまいかと考へたので、矢張り立上ることを敢てしなかつた。

土間の爐には天井から自在鍵が下つてゐて、其れに大きな鍋が釣るされてゐる。其中には內地の苣の葉に似たものがぐら／＼と沸返つてゐた。僕はマクベスを誘惑したウィッチの鍋を思ひ出して、あの中には猿の骨やら蛇の肉やらが一杯に塞つてゐるのではあるまいかと考へた。

又十分は經つた。

二人の話は依然として止まなかつた。僕は石板石で尻が冷たくなつた。

不意に薄暗い奥の部屋から七八歳の蕃童が現はれた。眞黑な顏の中から大きな眼玉をぎろつかせて蚊の脛のやうな足を二本立てゝゐた。跣足であることは云ふまでもない。肩幅のがつしりとした此の家の

主人の子供としては、餘りに痩せ過ぎた少年であつた。其れが僕の前まで來ると、ぴたりと留まつて不思議さうにぢろ〳〵と僕を見詰め始めた。すると其後からのそ〳〵と從いて出て來た、これも小供に劣らない痩せた一匹の黑犬が、僕の姿を見るや否や、急に頸でも締められたやうな苦しい聲を絞り上げながら、いきなり戶外へ飛出したが、其のまゝ向うの番舍の屋根の頂邊まで駈け上つた。さうして其處から更に僕に嚙みつくやうに吠え續けた。其の狼狽さ加減が誠に滑稽を極めてゐたので、番童は大きな聲を出してはヽヽヽと笑つた。

犬は屋根の上から尙頻に吠えた。少年も同じく笑ひ續けた。彼の笑ふ時は顏中が只口になつてしまつた。其の表情が如何にも一切の邪念を超越してゐて、潔白其物を見るやうな感じがしたので、僕は何となく此小供が可愛くなつて來た。さうして何かを彼に與へて、彼に喜ばせてやりたくなつた。けれども旅の身に何一つ與ふべきやうなものを持つてゐなかつたので、僕は終に內衣囊へ手を入れようとした。其時ふと今朝F警部から聞いた『番人には無暗に金を與へないやうにして下さい。其れが却て間違ひの原になりますから』と云ふ言葉を思ひ出して、急に又無意味になつて來た。僕は不本意ながら蕃口の代りに又しても時計を出して見た。

針は更に十餘分を廻つてゐた。

僕はもう凝としてゐるに堪へなかつた。さうしてつと立上つて往來へ出た。其時丁度僕と殆ど摺違ひに、突然何處からか又一人の番丁が肩を窄めてこそ〳〵と此家の軒先を潜つた。僕はどう考へても此男が往來から入つて來たとは思はれない。今まで隣りの小屋の軒か何處かに身を匿してゐたのが、僕の立

上るのを見て急に忍び込んで來たとしか思へなかつた。
僕はもう何時でも逃げ出す覺悟をしてゐた。すると草埔後から從いて來た僕の番丁は、二言三言此男と言葉を交へた後、僕の荷物を彼に渡してしまつた。僕は初めて、矢張僕達は此處で新手の案内者の來るのを待つてゐたのだと云ふことを知つた。さうして鋭い目の主人と陰鬱な顔の番丁とに一寸目禮した後、僕は直ちに此の新らしき番丁と共に此處を立つた。
後で聞くと、僕達の休んだ處は驅獵遊蕃社の頭目の家で、あの肩幅のがつしりとした男こそ、同社の頭目ガルジグジ・チュヂュイ（明治元年生）と云ふ者であつた。さうしてあの壁の厚板の腰に彫つてあつた骸骨の舞踊のやうな彫刻は、たゞ頭目の家にのみ許されてゐる、蕃人仲間では非常に八釜しい象徴になつてゐるものだと云ふことであつた。

五、頭目の家の寶物

蕃地へ入つてから三日目の夕方、僕は内文社と云ふに着いた。さうして其の翌くる朝の九時頃、僕はO警部の案内で、同蕃社の大股頭目の家を見に行つた。二三人の巡査も從いて來る。
駐在所から蕃人家屋の間を辿つて、細い石から道をだら〳〵と降りると、程なく頭目の家の前の廣場に出る。折りしも其廣場の片隅で、月桃草の葉で敷物を編んでゐる愚鈍さうな、然し何處やらに陰險な相を具へた男があつたが、警部の顔を見ると何か譯の分らない戯談らしいことを二言三言云つて、へゝゝゝとしまりのない笑ひ方をした。「野郎相變らず朝つぱらから醉つてるな」と、O警部は口の中で呟き

ながら、あれが大股頭目だと教へて吳れる。

當代の頭目は少し愚物なので從つて蕃社に對する威嚴も大分失墜したが、古から內文社の頭目は素晴らしい勢力があつたものださうである。彼等の口碑に傳ふる所に據ると、此の內文社の頭目の先祖は太陽の子だと云ふ話である。其の由來を云へば、昔し天から太陽の卵が二つ、今の潮州支廳管內のカビヤガン社に落ちて來て、日を經て其中から男女の二人が孵化したさうである。男の名はカジツ、女の名はマアカイ。此の二人が夫婦となつて、自分達の脫ぎ捨てた卵殼を携へ、南の方肥沃の地を追うて力々社に來り、其處で地を拓いて家を建て、持つて來た卵殼を屋內の石棚に納めて、十數年居住するうち數多の子供を設けた。彼等は其子供を諸所に派遣して到る處の總頭目に任じ、自分等は更に南に進んで此の內文社附近の地に來り、自ら大股頭目となつたと云ふ。だから今も此の頭目は、此邊りの數部族から五年目每に租稅を徵收してゐるさうである。

此家にはいろ〳〵な傳說的の面白い由緖ある寶物(?)が傳はつてゐるので、其れを見せようとてO警部は僕を其の屋內に導いた。

戶口を入つた處が土間になつてゐて、石板石などで壁を疊み、欄間や天井の面には例の髑髏や蛇の彫物のしてある處は、全く驅獵遊社の頭目の家で見たのと同樣である。其天井の中程に太い大きな丸太の木が、土間と次の間との障壁に半ば隱されて、塵埃まみれになつて屋根を支へてゐる。これが此家に取つては大變な重器の一つである。其れは昔し此家の祖先の一人にサラカツ(ラカツとは蕃語で英雄の意)と云ふ、女ではあるが非凡の豪傑が居つた。彼女は最初チヤヂヤカボスと云ふ蕃社に住んでゐたが、更

に適當の地を相して此の内文社に移住する際、長さ約七尺幅約五尺厚さ約二寸の石板石に、表一面に蕃畫を彫つたのを團扇とし、其れから長さ約八尺廻り約五尺の欅の丸太を杖としてやつて來た。さうして此家を建てる時に、石板石は寢臺の圍ひとしてスバイザン(團扇の義)と名け、欅の丸太は棟木としてトコザン(杖の義)と名けた。だから此家の一族は此二物に祖先の靈が籠つてるとて非常に尊敬してゐる。其のトコザンが即ちあの棟木である――スバイザンは奥の間にあると云つて、○警部は僕を中へ伴れて入つた。

奥の間に入ると塵埃臭い匂が冷やりと顔にあたつて、急に目の前が眞暗になる。何しろ狹い一方の入口だけからしか入らない乏しい光線が、八坪に餘る土間を照して其の餘りを僅に障壁の兩隅に開けた空間から迸るのみで、其外には窓は勿論一寸の隙間もないのだから暗いのも無理はない。其でも暫くじつとしてゐると、大分目の前が明るくなつて來た。何だか其處いら中塵埃だらけでごた／＼してゐる。此の塵埃は彼等の祖先が此處へ移住して來て以來、長い年數をかけて蓄積した、彼等に取つては貴重な塵埃だと僕は思つた。足摺りしながら○警部の後から從いて行くと、成程障壁にぴつたりと密接けて寢臺が置いてある。さうして其の寢臺と障壁の間に例のスバイザンがおいてあつた。けれども其の面に彫つてあると云ふ蕃畫などは無論見えなかつた。

丁度寢臺の枕許にあたる處に、石板石で嚴重に蓋をした高さ約四尺周圍約五尺の丸太の器がある。一寸見ると內地の水桶のやうである。蓋を取ると、中は厚さ二寸ほどの縁をおいて丸く刳つてあつて、其中には溢れんばかりに古い粟の穗が藏られてあつた。之はベブァブァンと云つてゐるもので、此家の祖先

以來毎年收穫したる粟の中から三把づゝ納めることになつてゐるさうだ。其の順序は本年收穫の粟の中から三把だけを翌年の收穫時まで屋内の柱に吊しておいて、翌年の收穫が済むと同時に之を採擯して實を採り去り、穗穀だけを此中に收めるのである。蓋は其時一年に一度開ける限りで、其他に於ては決して開けない。だから若し此器を引繰返して、其中の穗穀を勘定さへすれば、彼等の祖先の年代もほゞ判定することが出來るのであるが、頭目は決して其れを許さないさうである。

パブァブァンと直ぐ隣り合せに又其よりは少し小さな丸太の器が二つあつて、一つは高さ二尺餘り、今一つは高さ一尺五寸ばかり、中を圓筒形に刳拔いて石板石で嚴重に蓋をしてある處はパブァブァンと異らない。之はパラリグリグトと云つて其小さい方を彼等は特に尊重してゐる。さうして其中には此家の祖先并に豚、猪、鹿、蛇等の骨が納めてあると云ふ。昔し或る白人が當社を攻めた時、敵が多數で到底抵抗が出來ない、今にも全滅しようとした。其時突然此の器を戸外に出した處、中なる諸々の靈魂が怒つて敵に向つて發散し、敵軍は見る〳〵其の毒氣に吹かれて全滅し、生還者僅に二人であつたと云ひ傳へられてゐる。又大きい方の中には祖先の靈魂が入つてゐると云ふ。若し社内に何か變化の多い時は、此器に厄秡の祈禱を捧げると、變化は忽ちに消滅する。其厄秡の方法は、少壯な男子が多勢此の社の外れの處まで出て、萱の穗先を結んで之を矢で射ると共に其の穗先を切取り、わつと一齊に喊の聲を揚げて頭目の家まで引返し、其穗先と矢とを此中に納めるのである。之に用ひる鏃は古鍋を碎して其破片を以て作るさうだ。巡査の一人が是等の器の一つの蓋を取ると、冷たい塵埃臭い匂ひが鼻を打つて、中には土だか骨だか譯の分らない黒く固まつたものが底の方に見えるだけであつた。けれども誰も其の汚物に

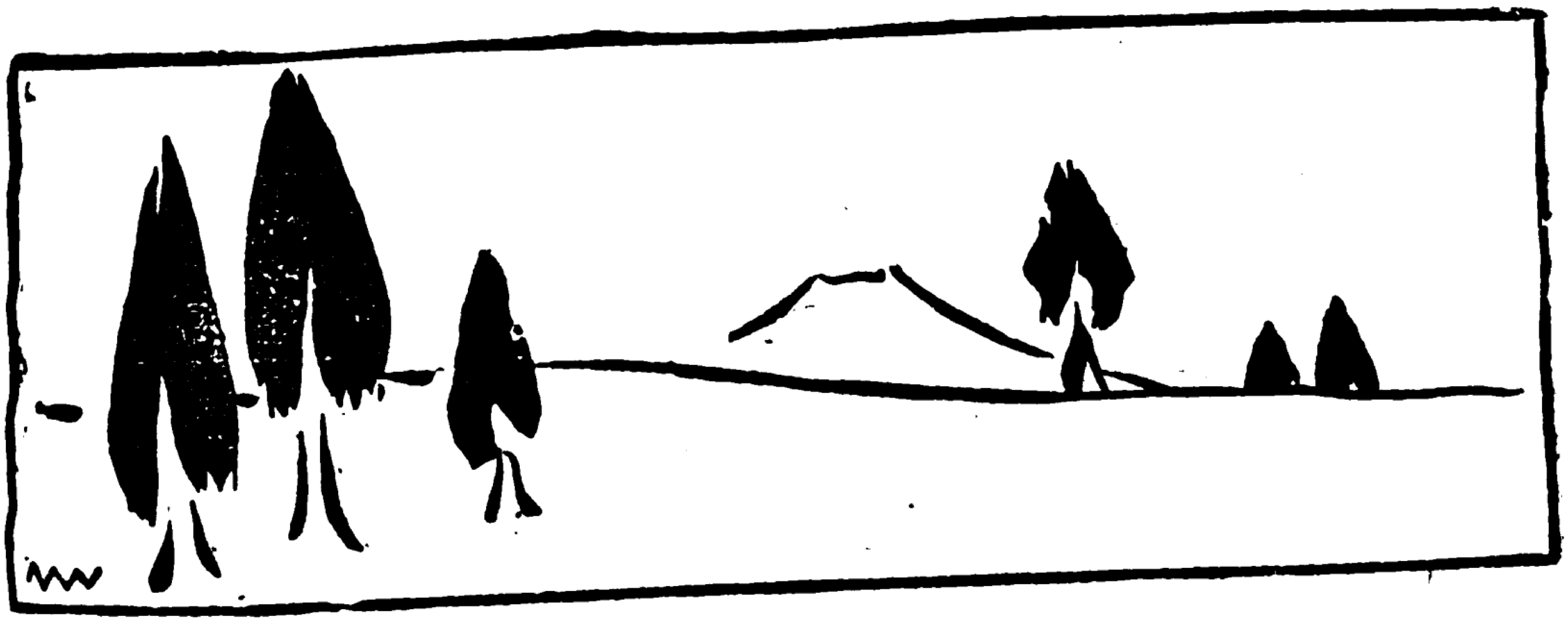
觸れて見ようとするものもないので、蓋は又元の通りに戻された。

戸外へ出ると、酒に沈湎した頭目は、豐かな朝日を背に受けて、ぐにや〳〵と身體を扭りながら、まだ月桃草の敷物を編んでゐた。

家の前から左手の少し小高くなつた林へ入ること半丁ばかりで、其處に幹が二股にも三股にも分れた大きな榕樹の蔭に、今まで寫眞でしか見たことのない「生蕃の首棚」があつた。原さ三寸幅二尺五寸からある大きな石板石を幾段にも重ねて、丁度人頭を入れるに足るだけの空間が規則正しく設けられてある。一寸見ると漢法醫の藥棚を見るやうである。さうして其れが又斜向に二つまで並んでゐた。一つは生蕃同志の首棚で、其れには五十個ばかりの頭蓋骨が容れてあり、今一つは土人の首棚で、其れには六十五六も入つてゐたやうに思はれる。何れも下顎骨を失つてゐる。さうして上齒の完全に殘つてるものも稀であつた。試に其中の一つを出して見ると縫合線が非常に單純である。其れから土人と蕃人のとを比較して見ると、蕃人の方が更に單純である。中には前頭縫合などは全く硬化して、殆ど痕跡をも止めないものもあつた。又其頭蓋骨の大部分が、顱頂部に穴を存してゐる。而も其れが蟲に喰はれたとしては餘りに銳利に骨質を削つてゐるので不審に思つたが、之は彼等が他の首を取る時餘りに急いで辮髮を切るため、丁度水瓜のヘタでも切るがやうに、骨の一部をも共に切落すのだと聞いて成程と思つた。蕃刀とは其れほど銳利な物かと、今更又恐ろしくなつて來た。

K君。僕はこれから更に旅裝を整へて、獅頭蕃社の方面へ出掛ける積りだ。まだ二三日は蕃地を出らない。

東京へ歸つて半年經つか經たないうちに、銃器引揚の一件から、恒春地方の數蕃社が突然に叛逆を企てて、先づ枋山支廳下の大茅々駐在所を襲撃し、續いて巴野衛支廳下の浸水營駐在所を襲うて、警察官數名及び家族を殺害し、更に力々社方面に轉じて行く〳〵電線を切り、電柱を倒し、工夫を屠り郵便配達を首斬り終に同社駐在の警部補以下家族十一名を虐殺し、風を望んで余が曾遊の各蕃社は大部分此の暴動に加はり、不穩の兆候日に益々加はるとの記事が、臺灣日々新聞の紙上に初號活字の標題を以て報道されてゐるのを見て、余は飛び上らんばかりに驚いた。殺害された人々の中には、余を案內して吳れた巡査の名もある、又巡査補の名前もある。殊に氣にかゝるのは、內文社駐在のO警部が其家族一同を擧げて、同社の頭目の家に潜んでゐると云ふ一節である。あの酒に沈湎した大股頭目――一見愚[illegible]の如くにして何處やらに陰險の相を隱してゐた、あの大股頭目――彼れ能くO警部の一家族を其の部下の暴擧から保護し得ただらうか。其れにしてもI君はどうしたらう。F警部は無事に逃げ落ちたか知らん。あの肩幅のがつしりとした馴獵遊蕃社の頭目の面影がまた目の前に浮ぶ。――余は長い間其の新聞を見つめたまゝ、斯る危險の境地にあつて、日々其の職務に忠實に働いてゐる、尊敬すべきわが同胞の運命を思うた。(完)



モスクワの第一夜

小山内　薫

とう〳〵一人になりました。

私の最後の道づれであつた日本人のA氏も、つひさつき私のまだ知らぬ歐羅巴の奥の方へ立つて行つて了ひました。様々な國民の混合であつた敦賀以來の Fellow passengers にも、いつどこで別れるともなく別れて了つて、今ではもう顔だけの馴染さへ、私の廻りに見られなくなりました。私は全くの一人ぼつちになつて了つたのです。私は日本といふ小さな國から、露西亞といふ大きな國へ、十二日間運ばれて來て、モスクワといふ見知らぬ都のホテル、メトロポオルといふ旅館の五階の小さな一室で、たつた一人投り上げられて了つたのです‥‥

Via Siberia といふ二つの詞は、今まで私が歐羅巴へ送る郵便物の表に、幾度となく無意識に書いた指定です。その Via Siberia を私は今實際やつて來たので

す。さう思ふと、如何にも遙々と旅をして來たやうな氣がします。

實際長い旅でした。浦鹽須徳からここまでは僅か九日なのですが、その九日の日の立つのを私はどんなに待ち遠しく感じたでせう。廣い廣い西比利亞の野。いつまでも變らない白樺の林。時々見えて來てはやがて後へ消えて行く寂しい野原の村や町——そこには山の圍ひもなければ、森の塀もないのです。家と家との間の幅の廣い道の盡きる所が行きなり廣い野原になつてゐるのです——さういつた同じ景色を、私はどんなに單調に感じたでせう……

東京からここへ來るまでの事が、夢のやうに思ひ出されます。ほんとに夢のやうです。長い長い間の「夢」が急にそして一度に實現されたので、私はまだはつきりそれを實際だと思ふ事が出來ないのです。繪や寫眞で見た露西亞の風俗、本で讀んだ露西亞の都、それが今私の目の前で動いてゐるのです。けれども、私はまだそれを本當に見てゐるのだとは思へないのです。私はまだ夢の中にゐるのです——幸福な、愉快な、未來に富んだ夢の中にゐるのです……

東京を出たのは十二月十五日の晩でした。寒い雨のびしよ〳〵と止まずに降る晩でした。ステイションでは私を送りに來た人達の足駄がカラ〳〵と物寂しく鳴りました。それが何だか日本との別離を唄ふやうでした。どういふわけだか、あの晩私を送りに來てゐた人はみんな醉つてゐました。みんな一つ樂しい場所から來たやうに赤い顏をしてゐました。それは私の外國へ行けるのを喜んで呉れてゐるやうにも見えましたし、私の日本にゐなくなるのを祝つてゐるやうにも見えました。私はさういつた幸福らしい友達の多くを後にして、たつた一人立つて行くのが、勇ましいやうにも思へ、寂しいやうにも思へま

した。

賑かな顔ばかり集まつてゐる中に、唯一人悲しさうな顔をしてゐる若い美しい女性がありました。それは丁度九州へ行つてゐるので會へない私の親友Tの妹でした。Tの妹は汽車の窓の外へ來て、聞こえない位な小さな聲で二言三言私に何か言ひましたが、やつと言ひ終ると堪らなくなつたといふ風で、涙をはら〳〵と零しました。私はTの妹が何を言つたのか、なんで涙を零したのか分かりませんでした。併し、その美しい頬に美しい涙の玉が流れるのを見ると、急に自分も目の縁が熱くなつて來て、危なく聲を上げて泣き出しさうにしました…

明くる朝、米原で汽車が二つに分かれました。吾々の汽車には露西亞行の人ばかりが殘つたのです。長い汽車が吾々の短い汽車を後へ殘して、西の方へ段々小さくなつて行くのを見た時、私は愈々別離が來たやうな氣がしました。同行の若い露西亞の婦人は、誰に別れを告げるでもなく、遠ざかつて行く汽車に向つて、頻にハンケチを振つてゐました。

器量の惡い、身なりの汚ない婦人でした。その古びた手鞄には日比谷ホテルの荷札がついてゐました。そして、手には小さな木の箱に泥を入れて植ゑた小さな菊を絶えず放さずに持つてゐました。私はこの女を少し前に東京へ來た露西亞の觀光團の居殘りだらうと想像しました。女は露西亞語の外なんにも話しません。女は顔に似合はない優しい美しい聲で、外國語學校の出身だといふ眞面目な顔をした「乘客取扱」と頻に何か話してゐました。

私の同行にはこの露西亞の婦人の外に、英吉利の或老紳士がゐました。髮の毛が白くて髭の黑い、文

の高い、金持らしい、立派な人でした。三菱に用があつて、始めて日本へ來たのだが、用が濟んだので直ぐ又英吉利へ歸るのだと言つてゐました。會社の重役ででもあるのでせう。如何にも旅馴れた、落ちついた人でした。

勿論日本人の連れは一人もないだらうと思つてゐましたのに、私は偶然この敦賀行の汽車の中に一人の同胞を見出だしました。それは目金をかけた、チヨボ／＼髭の生へた、髮の毛の薄い、會社員か商人らしい人でした。私はこの紳士を新橋を出る時から見かけてゐたのですが、この人が私の露西亞行の連れであらうとは夢にも知らなかつたのです。

「あなたも露西亞の方へお出かけですか。」

「いゝえ、私は倫敦まで參ります。併し、勿論西比利亞鐵道のお供はずつと出來ます。」

こんな事から、私は直ぐこの紳士と打ち解けて話をするやうになりました。紳士は名をA君と言ひます。高等工業の出身で、歐羅巴へ行く用務は、織物器械の買ひ入れだと言ふ事でした。

「失禮ですが、始めて西洋へ入らつしやるのですか。」

私がかう聞きますと、A君は快濶に笑つて――

「いゝえ、二度目です。前には農商務の學生で行きました。金が足りないので隨分閉口しましたよ。今度は或織物會社に頼まれて行くのですが、商賣敵があるので極めて秘密に歩いて來なければならないのです。勿論、大使館や領事館には一切顏を出しません。日本人との交際も絶對に避ける積りです。」

私はA君のこの利己的な主義を大層面白いと思ひました。私もA君とは全く違つた意味から、成るべ

く歐羅巴では日本人とつきあふまいと思つてゐたのです。私は歐羅巴に於ける限られた短い月日を全く自分自身の爲に費したかつたのです。私は何等の妨げなしに、何等の顧慮なしに、自分の思ふ儘の事がしたかつたのです。私は私の周圍に同胞の――殊に歐羅巴通な同胞の――垣根を置かずに、自分一人で直接に歐羅巴の總ての印象が受け入れたかつたのです……

同行四人を載せた寂しい汽車は、間もなく寂しい金ヶ崎の港に着きました。ほんとに寂しい港です。人聲一つしません。車の音一つしません。馬の嘶き一つ聞こえません。つひ向う岸だとは言ひながら、外國からの船着き場らしい「動搖」が何處にあるでせう。總てがしいんとしてゐます。石一つ動いてゐません。

村の郵便局のやうな露西亞領事の出張所で、私達は私達の旅券に檢印を捺して貰ひました。それから、村の說教所のやうな稅關を右手に見て、私達は海岸に出ました。そこには露西亞文字の看板を出した汚ない珈琲店が一軒ありました。私とA君と露西亞の婦人とはそこで一杯宛珈琲を飲みました。

"Souvenir de Tsuruga!"

露西亞の婦人は覺束ない發音で、目を細くして笑ひながらかう言ひました――相變らず菊を植ゑた汚ない木の箱を大事さうに抱へながら。

やがてランチが來ました。私達は直ぐそれに乘つて、本船へ行きました。本船は "Poltava" といふ露西亞の義勇艦でした。私とA君とは隣り合つて艦尾の方に船室を取りました。露西亞の婦人は何處へ部屋を取つたか知りません。英吉利の老紳士は一等船客ですから、君達とは全く交通のない、前の方の

部屋へ行つて了ひました。船へ來て見ても、私達の同行はやつぱりこの四人だけらしいのです。

私とA君とは部屋をきめて、手荷物をそこへ入れると、直ぐ又シャンパンで波戸場へ歸つて來ました。そして、大黒屋とかいふ古びた宿屋を一軒見つけて、そこで湯に這入つたり、名物の蟹で飯を食つたり、前の晩の睡眠不足を補つたりしました。朝から曇つてゐた空が、日が暮れると靜かな雨になりました。明かりのない暗い港町を、そぼ降る雨に濡れながら、二人は宿の男に送られて又海岸まで來ました。東京ではあんなに大勢の人に送られた私も、愈々日本を離れるといふことでは、もう誰にも送つて貰へないのです。

「寂しい船出だ。」

私はさう思つて、心を暗くしました。快濶なA君も流石に默つてゐます。

「洋行といふと、ひどく景氣の好いものゝやうに思つてゐましたが、かうして見ると隨分不景氣なものですねえ。」

私が暫くしてから言ふと、

「いや、この方が煩さくなつて却つて好いのです。私などは新橋へさへ本の極近しい人が三四人送りに來ただけでした。」

A君は極めて磊落にかう答へましたが、その詞の調子には隱し切れぬ「寂しさ」がありました。

ランチへ乘り込むと、老巡査が一人乘り込んでゐて、私共の名を聞いたり旅行の目的を聞いたりしました。

「ほほう、お二人とも珍らしいお名前ぢやな。」

巡査は薄暗い船の燈で二人の名刺を興ありげに眺めながら、さも大事件のやうに二人の名の讀み方を研究するのです。それも私には寂しい氣がしました。

本船の甲板で、私は日本の郵便配達から電報を一つと小包郵便を一つ受取りました。これが自分と日本との最後の別離だと思ふと、私は愈々寂しくなりました。私はもう日本の金を一文も持つてゐなかつたので、配達夫から請求された料金を露西亞のカペエクで拂ひました。それも、何だか寂しいやうな氣がしました……

やがて、寂しい、音の太い、長い汽笛が眞つ暗な空に響き渡りました。誰一人見送り手もない暗い船は寂しく暗い海の方へ動き出しました。

私達の部屋についてゐるボオイは支那人でした。彼れは自分の國語と露西亞語との外は何も解しません。私達は唯手眞似で話をしました。

その晩は船が大分荒れました。併し、私は勞れてぐつすり寢込んで了つたので、それも夢のやうに知つただけです。明くる日は好い天氣でした。私は船には强い方なので、その晝から食堂へ出ました。私はそこで不思議な日本人に會ひました。目の鋭い、八字髭の黒く太い、頑丈な小男で、平氣な顔で和服を着てゐるのです。私はこの人がいつこの船に乘り込んだのか知りませんでした。私は四人だとばかり思つてゐた私の同行が、こゝで急に一人殖えたのを驚きもし、不思議にも思ひました。

A君は船に醉つたのか出て來ません。露西亞の婦人も顔を見せません。食卓についたのは、私と事務

長と今の不思議な日本人とだけです。三人は誰も口を利きません。唯座る時互に輕い目禮を交したゞけで、默つて食事を續けて行きます。給仕は例の支那人一人です。食卓の上にはウオツカもあり、ザクスカもありましたが、寂しい食事でした。

　夕方、甲板へ出て見ると、船に醉つてひどく弱つた例の露西亞婦人が、病人のやうな顔をしてベンチの上に横になつてゐました。その枕元には小さな卓が置いてあつて、その上には飮みかけの茶と喰べかけのパンが汚ならしく散らかつてゐました。婦人は横になつた儘自分の喰べかけたパンを船で飼つてゐる痩せた犬にやつてゐます。婦人は優しい聲で犬の名をチハイ、チハイと呼んでゐました。

　私は慰め顔に會釋をしながら、婦人の側へ寄つて行きましたが、露西亞語に無學な私は挨拶一つ言ふ事が出來ません。それでも婦人は喜んで、無理に私と何か話さうとしました。片言の獨逸語に自分の國の語をまぜて話すのです。私も怪しげな獨逸語で話しました。私が芝居の研究に行くのだと聞くと、婦人は突然 Kommissar zlevskain の名を口にしました。そして『もう死にました。Grosse Artistka（名女優）でした。』と、形容詞を獨逸語で言つて、名詞を露西亞語で言ひました。

　そこへ制服を着た船員が笑ひながら一人やつて來ました。二人は忽ち流暢な母國の語で面白さうに話し出しました。私は寂しい氣がして、逃げるやうにそつと甲板を下へ降りました。

　その晩、眞暗な甲板の上で、私はさつきの不思議な日本人と懇意になりました。その日本人は漁業家でした。浦鹽からカムチヤツカへかけて、もう十何年から漁業をしてゐるのださうです。私の知人に三年ばかり前まで同じ商賣をしてゐたのがあるので、その名を言つて見ると、漁業家は直ぐ笑つて答へま

した。

「[illegible]さんですか。知つてゐます。あの人もとう〳〵失敗しましたなあ。露西亞語はいけるし、學問はあるしするのだが……どうもこの漁區といふ奴が巧く當らんと飛んだ目に會ふんです。なあに、私だつて成功してゐるといふわけでもないんだが、露西亞人の操縦が巧いんで、まあどうにかかうにかやつてるんです。」

さう言つて、暗い海を寂しさうに眺めました。

もう露西亞の婦人は甲板にゐませんでした。A君も相變らず姿を見せません。英吉利の紳士にはその晩前の方の甲板で一度會ひましたが、『ひどく搖れますな。船が惡いのです。』と言つたきり、別に話はしませんでした。寂しい航海です。海はその晩も可なり荒れました。

明くる朝、目を覺ますと、船の丸い窓の外に眞白な雪をのせた島が時々見えます。もう陸に近いなと思ひながら、着物を着換へて甲板へ出て見ると驚きました。人馬織るが如き浦鹽須德の港が、活動寫眞か何かのやうに、直ぐ目の前に開けてゐるのです。私は金ヶ崎のあの寂しい港から、いきなりこの賑かな浦鹽須德の前へ連れて來られて、暫くは夢のやうな氣持でゐました。

きのふまではシャツ一枚で働いてゐた船員が、けさはみんな厚い毛皮の外套をむく〳〵と着て、羅紗の深い長靴を穿いて、毛皮の帽子を耳の隱れるまですつぽりと冠つて、ミットのやうな大きな厚い手袋をはめて働いてゐるのです。私はそれを見ると、急に寒くなつて來ました。忙てて船室へ取つて返して、外套を着たり、帽子を冠つたり、手袋をはめたりして、また甲板へ出て見ました。

浦鹽須徳には雪とも霜ともつかぬものが、寒さうに全市を氷らしてゐます。車が坂を上がつたり降りたりしてゐます。大勢の人が蟻のやうに動いてゐます。大きな建物が蜃氣樓のやうに海の上に浮んでゐます‥‥

長い檢閲が始まりました。本願寺のO師から私の所へ二度も名刺が來ましたが、私はまだ船を降りる事が出來ませんでした――O師は私の未知ですが、私の友達からの手紙で、態々波戸場まで迎ひに出てゐて呉れたのです。

やがて、制服をつけた税關吏らしい男が、勞働者のやうな汚ない裝をした巡査を二人ばかり連れて、私共の船室へ這入つて來ました。前の晩折角整理した私の荷物は、この巡査達の大きな手で滅茶苦茶に掻き廻されて了ひました。本を倒に見ます。齒磨を嘗めて見ます。たまに寫眞か繪でゝも出て來ると、さも大事件らしく、愚鈍な目を大きく開いて、ぢつとそれを見詰めます。私は可笑しくもあり腹立たしくもありました。

「早くしないかなあ。」

私は思はず日本語でかう獨語を言ひました。

「クリスマス前なので賄賂が欲しいのです。」

突然、後にかういふ聲がするので、振り返つて見ると、見馴れぬ一人の日本人がすつかり露西亞人めいた裝をして、笑ひながら立つてゐるのです。段々聞くと、この男も漁業の失敗者で、今では浦鹽須徳へ這入つて來る一切の日本人のガイドのやうな事をしてゐるらしいのです。やはり目の鋭い、髭の濃い、

何處かに凄味のある男です。そこで、私はこの男に荷物の事を一切賴んで了ひました。

英吉利の紳士はいつ船を降りたか知りません。露西亞の婦人は例の菊を植ゑた木の箱で、ひどく稅關吏に惱まされてゐました。漁業家もさつきまで日本服にどてらを着てゐたのが、いつの間にか似合はない洋服姿に變つてゐました。二日間顏を見せなかつたA君もやつと甲板へ出て來ました。

二時間程してやつと上陸が許されました。私は先づ寒い所に長い間待つてゐて呉れたO師とその從者に感謝しなければなりませんでした。O師は私にもA君にも直ぐ寺へ來るやうに言つて呉れました。併し、私は領事館に是非會つて行かなければならぬ人があるからと言ふと、そんなら領事館へ一寸寄つて、それから寺へ來れば好い、領事館の人も何なら一緒に連れて來ても好いからと言つて、直ぐ從者に馬車を命じさせるのでした。

韃靼人のやうな裝をしたO師の從者は直ぐ手を擧げて、「イヅヲオシチイク」と辻待の小さな馬車を呼ぶのです。私達はO師に一時の別れを告げて、O師の從者と三人これに乘ると、でこぼことした坂道をあつちへ搖られこつちへ搖られして、やつとの事で日本領事館に着きました。

領事は不在でしたが、尋ねるT君は直ぐと笑ひながら出て來ました。それから四人で又馬車を驅つて——勿論どういふ道を通つたのだか私には分かりません——本願寺へ參りました。寺は領事館よりもつと高い所にあつたやうな氣がします。表から見た建物は全然露西亞式の木造でしたが、中には疊も敷いてあり、佛壇も立派に飾つてあつて、少しも日本の寺の中と違ひがありません。O師の美しい夫人は薄い紫の被布を着て挨拶に出て來られました。

先づ、こゝの名物だからといふので美しい菓子が出ます。それから晝の御馳走で、これは日本食でした。

「もう暫く喰べられませんから、どうか十分に上がつて下さい。」

O師はかう言つて、聲高に笑ひました。

食堂は飾りのない灰色の壁に取り圍まれた部屋で、こゝには疊が敷いてありません。私共は椅子に腰をかけて、別れの日本食を喰べたのです。部屋の一隅には見上げるやうに大きなペチカ（煖爐）があつて、衣を着た役僧が襷がけて大きな薪を惜しげもなく焚べてゐます。食事が濟むと、O師は私共にクワスを勸めました。私は本で度々讀んだ事のあるクワスといふものを始めてこゝで飲んだのです。黄いろい透明な飲料水で、日本のサイダアよりはずつとうまいと思ひました。

四時頃から私共は市中見物に出かけました。Albers といふ獨逸人の店では、その規模の大きいのに驚きました。郵便局では汚ない乞食が戸の開け立てをして、一錢二錢の合力を乞うてゐるのを不思議に感じました。軍服を着た軍人が女と手を組んで大道を濶歩してゐます。韃靼人が歩いて來ます。支那人が馬車を驅つて來ます。土耳古人がゐます。キルギス人がゐます。その中を日本の婦人が平氣でお高祖頭巾を冠つて歩いてゐます。

「世界の人種の混合ですねえ。」

私がかう言ひますと、O師の從者は、

「さうです。世界の下等な人種の混合です。詳しく言ふと、百何十といふ人種の寄り合ひださうです。

汚ないと言つたらお話になりません。」

と言つて、態とらしく眉を顰めました。

明かりのつく頃、私とA君とはT君の官舍を訪ねました。官舍は下が物置になつてゐる中二階風の木造で、そこへ上がる階段のランプの下で犬が頻に吠えてゐました。寂しい住居です。併し、中は鳥の巣のやうに暖い小さい家庭でした。T君の夫人は私の舊知なので、いそ〳〵とサモワルから茶を作つて呉れたり、うまい露西亞の菓子を出して呉れたりしました。

本願寺では總てをO師に任して、餘り口を利かなかつたT君も、この自分の家では遠慮なく話しました。

「浦鹽須德を露西亞だと思つてはいけません。こゝはほんの入口です。殖民地です。本當の露西亞はこんなものではありません。」

T君はこんな事を言ひました。

「西比利亞の旅行を心配する事はありません。露西亞人は恐いやうに見えて、實は可愛い人種です。何でも分からない事があつたら、度胸を据えて默つてゐるに限ります。それが露西亞式なのです。こつちの子供は學校で口頭試驗などがあつた時、答が出來ないと徹頭徹尾默つてゐるのです。始から終まで一言も口を利かないのです。出來るとも出來ないともてんで返事をしないのです。それが露西亞式なのです。」

T君は私の心細さうな顔を見て取つて、又こんな事を言ひました。

暫く話して、それから三人でステエションまで歩いて行きました。ステエションに[illegible]O師の夫婦が、もう先きへ來て待つてゐました。ステエションにはプラットフオオムがありません。私達は地面の上から行きなり丈の高い大きな汽車に乘り込みました。厚い外套をむく／＼と着込んだ見送り人が、薄暗い寒い空氣の中に、こつちに一かたまり、あつちに一かたまりゐます。理解の出來ぬ別れの詞や叫び聲があつちこつちに聞えます。やがて發車合圖の鐘がカン、カン、カンと凍てついた空氣を動かして、物寂しく鳴りました……

　私はとう／＼A君と二人きりになりました。日本から來た連れでは英吉利の紳士が乘り込んだきりです。露西亞の婦人は船を降りる時、浦鹽の親類へ一月ばかり泊つて行くのだと言つてゐました。勿論、例の漁業家はこの浦鹽が目的地なのでした。

　私とA君とは同じ二等室を當てがはれました。そこにはT君の說によると鑛山技師らしい一人の露西亞人と、外にもう一人肥つた露西亞人が既に乘り込んでゐましたが、吾々の這入つて來るのを見ると、直ぐ車掌に掛け合つて、二人とも外の部屋へ移つて行つて了ひました。吾々が向うを氣味惡がる前に、向うでは吾々を氣味惡がつて呉れたのです。お蔭で二人は一室を占領する事が出來ました。

　ニコリスクへ來たと思ふ頃、電燈に故障が出來て、汽車の中はすつかり眞つ暗になつて了ひました。部屋附きの列車ボオイが蠟燭に火をつけて持つて來て呉れました。列車ボオイといふと、可愛らしうございますが、丈の異常に高い、肩幅の廣い、肥え太つた、グスタアフ、アドルフのやうな立派な顏をしたボオイなのです。しかも、彼は極めて無學で、自分の國の詞の外には、英語も獨逸語も佛蘭西語も丸

でいけないのです。併し、そのむつつりとした、媚び諂ひのない所が私にはひどく氣に入りました。
電氣は暫くの間ついたり消えたりしてゐました。電氣の工夫は忙しさうに汽車の廊下を行つたり來たりしてゐました。それが又何となく旅の寂しさを思はせます。二人は暗くなつたり明くなつたりする部屋の中で、東京からの思ひ出やこれから先きの旅の心配などをしてゐました。

電氣がすつかり直ると、私はA君を誘つて食堂へ行きました。そこには同車の客が大抵集まつてゐました。モオニングを着て、白いハンケチを胸の衣兜から覗かせた氣取り屋の若い露西亜の學生。一人旅の物寂しさうな英吉利の老夫人。新聞ばかり讀んでゐる、つまらなさうな獨逸人。喧嘩でもしてゐるやうに何事か早口に論じ合つてゐる二人の若い瑞典人……

食堂のボオイは三人とも好個のカリカチウルでした。一人は大きな白い頭のてら／＼と禿げた、顏の外へ出る程長い八字髭を生やした、丈の低い肥つた四十恰好の男で、一人は頭の毛の縮れ上がつた、鼻の先の上を向いた、阿弗利加の土人のやうな若い男で、一人は髮の毛も眉毛も目尻も髭も、總て愚鈍らしく下の方へ垂れ下がつた、運動の鈍い若い男でした。

併し、食堂は立派なものです。日本の汽車などには見る事の出來ない、廣さと高さとがあります。部屋の一隅には文庫があつて、そこにはモオパッサンだのラウダンだのアンドレエフの物などが一杯詰まつてゐます。

私はA君と向ひ合つて座つて、二重になつた硝子窓の外の暗闇を覗きながら、茶を飲んだり炭酸水を飲んだりしました。

部屋へ歸ると、もう二人の寢床が片側の上下に出來てゐました。私はA君に下を讓つて、上の方の寢臺に寢ました。私達は朝からの氣勞れで、直ぐぐつすり寢込んで了ひました。

夜中に部屋の戸を棒のやうなもので、タ、タ、タ、タと叩く者があります。A君が戸を明けると、丈の高い痩せた男が"Customs!"と尻上がりに言ひながら這入つて來て、寢臺の下を覗いたり、上の棚を見上げたりして、"All lugginges?"と又尻上がりに聞きます。二人で"Yes"と答へると、"Good night!"と言つて、どん〳〵行つて了ひました。

「ボグラニツケチナイアですね。」

「さうらしいです。」

「馬鹿に簡單ですね。」

「これが本當です。浦鹽のやうなのはありません。」

二人は又浦鹽の愚痴を言ひながら、寢て了ひました。

明くる日の晝にはハルピンへ着きました。私とA君は伊藤公の狙撃されたといふプラットフオオムの方まで歩いて行つて見ました。繪端書を賣る子供がゐました。その首に下げてゐる箱の中にはコロレンコオの短篇集がありました。ステエションには大勢の汚ない支那人がごろ〳〵してゐました。

ここで、私達の隣の部屋へスコットランド人の若い夫婦が赤ん坊を連れて乘り込みました。英吉利好きのA君は直ぐと懇意になつて、頻にこれと倫敦の話などを始めました。

その明くる日はマンチユリアを通りました。零下三十度といふ寒さでした。プラットホオオムを往つ

たり來たりしてゐる内に、なんだか目がぼんやりして來たので、手をやつて見ると、いつの間にか睫毛が氷つてゐるのです。この檢閲も『倫敦へ。』の一言で簡單に濟んで了ひました。

何處のステーションでしたか、支那人が大勢鷄を持つて出て來て、頻に食堂に賣りつけてゐるのを見ました。

その日の夕方、私は今まで一度も出會つた事のない落日の壯觀を見ました。木もなければ草もない廣い灰色な海のやうな野原の果に、光輝を失つた眞赤な太陽が濁つた空の中を靜かに沈んで行くのです。から書いて了へば極めて單純な景色です。併し、一度見た者でなければ、とてもその雄大な景色を思ひ浮べる事が出來ません。

汽車は段々と露西亞深く這入つて行きます。雪が段々深くなつて來ます。時計の時間がステエション毎に違つて來ます。

その明くる日の晩には、待ちかねたてゐたバイカル湖へ來ました。汽車の窓から暗い湖の方を見ると、湖は果てもなく氷に閉ざされて、所々に大きな龜裂の跡が見えてゐます。寒い寂しい景色です。湖水の縁に寂しく立つて居る材木の儘で組んだ堀立小屋のやうなものが、汽車の進むに連れて、時々目の前を横切ります。

その晩、食堂では鮭と鳩と「モスクワの雪」といふ菓子を出しました。もうこの列車も今夜がお別れなので、最後の御馳走をしたわけなのです。氣取り屋の學生は食事が濟んで部屋へ歸ると、頻にワイオリンを彈き始めました。私とA君とは廊下に出て、暫くそれに聞き惚れてゐました。

夜の二時頃に汽車はイルクウツクへ着きました。私達はこゝで同じ線路の上に待つてゐる外の列車に乗り換へなければならないのです。私達は列車ボオイに祝儀をやつたり、ナシルシチイク（赤帽）を呼んで荷物の積み換へをしたりするのに忙しうございました。乗換の全部終つたのが午前四時でした。

新しい列車は前のそれより部屋が狹く、窓が小さく、何となく汚ないやうにも思へました。併し、食堂だけは前の列車より餘程歐羅巴風で、ボオイも三人ともしやれてゐます。詞も英、佛、獨を巧みに操ります。A君と私とはそこで葡萄酒を一杯宛飲みました。

食堂の一つの卓を露西亞人が大勢重なり合つて圍んでゐました。中心になつてゐるのは、眞赤な着物を着た猶太人らしい美しい女と水膨れのしたやうに肥つた髭のない男とです。この男の命令で値段の高いシャンパンがどし／＼拔かれます。廻りの連中は振舞酒に醉つて、だみ聲を上げてゐます。きつと鑛山か何かの成金が土地の若い者か何かに取り巻かれてゐるのでせう。

更に離れた一つの卓には、金の這入つてゐるらしい小さな鞄を紐で首から下げた男が、凄い程ウオツカに醉つて、兩手をぶらりと下げた儘ぢつと自分の目の前を見詰めてゐます。

「段々露西亞らしくなつて來るな。」

私はかう思ひました。

その明くる日からは、大分見知らぬ顏が食堂に現はれるやうになりました。朝からウオツカの瓶が食卓の間を廻るやうになりました。お晝にA君と食堂へ出ると、ゆうべの肥つたのが、二日醉といつた風で、居眠りをしながら食事してゐるのです。その喰べこぼしをしては、時々目を覺ます樣子の可笑しさ

と言つたらありません。

ニズニユウヂンスクといふ驛では、始めて露西亞らしい綠青色の Cupola を持つた寺を見ました――午後の四時頃にはもう日が暮れました。ポドゴル――マリンスク――タイガ。タイガでその明くる日からは段々人家が多くなつて來ました。は美しいウラルの鑛石を賣つてゐました。

段々食堂へ出る人が少なくなりました。隣りのスコットランド人の赤ん坊をあやす唄が眠さうに響いて來ます。白樺の林、白樺の林、又白樺の林、私もA君もそろ〳〵倦怠を催して來ました。

その明くる日は雪が降りました。大きなオムスクの町を通り過ぎました。ヤロシエンコオの繪にあるやうな囚人の列車とも幾度か行き合ひました。移住民を滿載した露國政府の三等列車とも行き違ひました。

その明くる日は二十五日で、西歐羅巴の人にとつてはクリスマスに當る日ですが、十三日遲れの露西亞人にはまだ何でもない日なので、汽車の中には何の變りもありはせん。A君は朝起きると、直ぐ隣りのスコットランド人と "Merry Christmus!" を交してゐました。雪が段々と深くなつて來ました。併し、氣候は段々暖かになつて來ました。

チヤリアビンスクでは汽車を降りて、ステエションを遠く離れた市場の方まで行つて見ました。長靴ばかり賣つてゐる店があります。外套や帽子の店があります。道端の本屋にはレルモントフの輸入の詩集がありました――私はステエション、ステエションの名を讀んで來る内に、やつと露西亞字の讀りだ

けが讀めるやうになつたのです。

ミアスを通り過ぎると、汽車は始めて七日間の平坦を破つて、名高いウラル山に差しかかります。併し、それも決してトンネルを潜つたり谷を渡つたりするのではありません。山の廻りを迂廻に迂廻して、ゆつくりゆつくり登つて行くのです。私はこゝへ來て愈々露西亞人の根氣の好いのに驚きました。

汽車がウラルにかかると雪がちらちら降つて來ました。落葉松だの樅だの白樺だのに降り積む雪の美しさは驚くべきものです。汽車は登り登つて終に最高地點のウルジユムカへ來ました。人一人出てゐない寂しい驛です。それから少し降ると、亞細亞と歐羅巴の境界を刻んだ大きな白いピラミツトがあります。列車中の人が窻の側へ寄つて、それを見逃すまいとしました。

その明くる日の朝――即ちきのふの朝――私は廣い野原に何十臺といふ橇の續いて歩いてゐるのを見ました。サマラを過ぎると間もなく、汽車はヲルガ河の鐵橋にかかります。ヲルガ、ヲルガ、懷しいヲルガ。私は汽車の窻からいつまでも飽きずにその海のやうに廣い河の上下(かみしも)を眺めました。鐵橋は渡り切るのに五分かかりました。

橋を渡つて了つても、汽車はまだ中々ヲルガを離れません。今度は河について走るのです。ヲルガ、ヲルガ、露西亞の象徴のやうなヲルガ。

ゆうべは都近いせいか汽車が頻に留まりました。愈々あしたはモスクワだと思ふと、嬉しいやうな心配なやうな氣がして、私は少しも寢られませんでした。A君はひどくはしやいで寢臺の上で得意な琵琶歌をいつまでも飽きずに唸つてゐました。

夜の明けるのを待ちかねて、私は寢臺を降りると、早速顏を洗つて着物を着換へました。汽車の窓の外には時々町が近く見えます。西比利亞で毎日のやうに見飽きたあの灰色をした板葺や茅葺の家ではありません。ほんとに人間の住めさうな家らしい家です。私は同じ線路の上の一つ汽車がかくも違つた人生の中を走るのが不思議でなりませんでした。學校通ひの子供が汽車の線路に近い所を幸福に笑ひながら歩いて行きます。郊外から都へ通ふ官吏らしい嚴めしい顏をした紳士が乘り込みます。或小さなステエションでは背虫の女の子が一人で寒さうにプラットフォオムを歩いてゐました。

併し、まだ／＼モスクワには間があるだらうと思つてゐる内に、汽車は早くもクウルスキイ停車場に着いて了ひました。

「莫斯科なのでせうか。」

「さうらしいですよ。大分大きなステエションです。」

「みんな降りる樣子ですね。一つボオイに聞いて見ませう。」

私達は實際こんな會話をしたのです。私達は待ちに待つてゐた目的地に着きながら、不思議にそれを信ずる事が出來なかつたのです。私達はそんなに忙てゝゐたのでせうか。そんなに無知だつたのでせうか。

プラットフォオムには既に通辯のPと領事館のW氏とが迎ひに來てゐて呉れました――浦鹽のT君が親切にも電報を打つて置いて呉れたのです。

それから、忙てゝ汽車を降りると、直ぐホテルの自働車に載せられて、夢中でこの宿まで連れて來て

了はれたのです。このホテルはモスクワの繁華の中心にある一流の宿屋なのださうですが、地理の分からぬ私には、まだ自分がどんな土地のどんな部分にゐるかを、はつきり理解する事が出來ません。私は唯生れて始めて、こんな立派なホテルへ這入つたので、唯まごくしてゐるばかりです。リフトで自分の部屋へ上がつたり降りたりするのさへ、まだ何だか氣恥づかしい位なのです。

朝鮮人に特有な陰欝を帶びた通辯のPは、直ぐ私達をクレムルの宮殿へ案内しようと言ひます。クレムルがこの舊都の中心であり、或意味に於いてこの國全體の中心である事は私も聞いてゐます。寺院と僧房と宮城とを含んだクレムルが古い露西亞の最も美しい紀念である事も私は知つてゐます。『モスクワの上にはクレムルあるのみ、クレムルの上には天あるのみ』といふやうな諺も私は案内記で讀んでゐます。併し、今の私にはモスクワ河を壓して聳え立つ宮殿よりも西比利亞の廣野に寂しく世を離れてゐる一軒家の方が遙に深い感動を與へさうです。私はまだ荒漠たる西比利亞の偉力に全盛を押されてゐて、一歩もその外へ出る事が出來ないのです。それに私は又、自分の研究の目的から言つて、觀光客の誰もが一度は訪づれるクレムルなどをさう急いで見る必要もないと思つたのです。そこで、一度は斷りましたが、夕方にはもうこゝを立つて行かなければならぬA君を、一日ホテルに閉ぢ込めて置くのも氣の毒だと思つたものですから、節を屈して又Pにクレムルの案内を頼みました。

Pは得意になつて私共を連れて出ました。濃い淺葱のカクタンを暖かさうに着て、牡丹色の帶を締めて、毛皮の帽子を深々と冠つた、パステルナックが『復活』の口繪に書いてゐる通りの馭者が大勢、ホテルの前に立つてゐて、頻に私共に馬車を勸めます。併し、私共は態と歩いて行く事にしました――尤

も距離も近いのですが。

往來を歩いてゐて目につくのは、極めて質素な裝をした女が歩いてゐるかと思ふと、極めて田舍めいた派手な裝をした女が歩いてゐる事です。一體、男も女も餘り服裝には構はぬ土地らしうございますがそれでも防寒の用意だけは誰もしてゐます。靴の上にガロッシュを穿いてゐない者は殆ど一人もありません。どんな粗末な外套にも裏には毛皮がついてゐるやうです。學生か巡査か勞働者か軍人かの外は、大抵フラアジュカといふ毛皮の帽子を冠つてゐます。私は町を歩いてゐる内に、如何にも自分の身なりが貧弱に思はれて來ました。

Ｐは得意になつて色々な說明をしました。併し、その說明は饒舌に過ぎて、却つて私の第一印象を薄くしました。クレムルの宮城へ這入つてからは、更にそれがひどうございました。私共は唯慌しく引つ張り廻されたといふだけで、一瞬間も自分自身の感情に訴へて物を見るといふ事が許されませんでした。それ故、私はもう一度自分一人で行つて見るまでは、何一つ印象らしいものを書く事が出來ません。ゲオルギイウスキイとかアレクサンドロウスキイとかアンドレエウスキイとかいふ有名な勳章に因んだ廣間がありました。各の部屋の壁が各の勳章の綬で張り詰めてありました。ウラル山で得たとかいふ何とかいふ美しい青い石の柱がありました。柱が一本何萬圓するとか言つてゐました。ナポレオンが一夜を明かしたとかいふ、支那風な裝飾のある狹い寢臺も見ました。レピンが描いた「アレクサンデル二世の前に農夫等誠忠を誓ふの圖」も見ました。宮殿を出ては、世界第一の大きな鐘だといふムッアアルの鐘も見ました。强烈な色彩の放膽な配合なる聖バジリウスの寺院も見ました。それから、ニコルスカアヤと

いふ聖像だの厨子だのを賣る店の澤山列んでゐる通りへ連れて行かれました。何とかいふ勸工場へ連れて這入られて、莫斯科名物の説明もされました。併し、私は何一つ印象らしい印象を得る事が出來ませんでした。Pはどんなものを見ても『歐羅巴の何處にもこれと同じ物はないです。』と言ひます。勸工場で皮の細工物を見た時も、クレムルで青い石の柱を見た時と同じやうに、『歐羅巴の何處にもこれと同じ物はないです。』と言ひました。

一通り町を歩くと、私達は又ホテルへ歸りました。間もなく歐羅巴行の汽車の出る時刻が迫つて來たので、PはA君を送つてブレスト停車場の方へ行つて了ひました。

A君は別れに臨んでこんな事を言ひました――

『もう歐羅巴ではお目にかゝれないかも知れないから、隨分身體を大事にして下さい。私は何處へ行つても、決して日本人に在りかの分かるやうな事はして置きません。倫敦の宿は極まつてゐるのですが、それも申し上げずに置きませう。』

さう言つて、私との間の一錢二錢の細かい貸借まで綺麗に勘定をして立つて行つて了つたのです。私はA君のこの思ひ切つて獨立的な態度が慕はしくてなりません。

私はもうあしたから通辯などは斷らうと思ひました。

夜になつても、好い鹽梅にPは歸つて來ません。私は殆ど半月振りで頭を刈つたり湯に這入つたりしました――勿論、まだ様子が分からないので、兩方ともホテルの中でしたのです――それから、思ひ切

つて一人で町へ出て見ました——若し、出來たら、外で飯を食はうと思つて。勿論、私はまだステエションからホテルまでと、さつき歩いたクレムル附近の外は丸で道を知らないのです。そこで、クレムルの方は夜は寂しいだらうと思つて、ステエションの方へ歩いて行つて見る事にしました。

ホテルを出ると、つい一二軒先きに烟草屋がありました。私はここで「サフオオ」といふ紙卷の小さい箱を買ひました。主人は猶太種の獨逸人らしい爺さんで、煩さい程いろんな煙草を出して來て勸めましたが、私は日本で一度飲んだ事のあるボグダノフの煙草の外は見向きもしませんでした。

町は流石に賑かです。浦鹽や西比利亞の寒村の外にはまだ何處も知らない私には、流石に大都會だといふ感じがします。辻待の馭者が煩さく馬車を勸めます。乞食が追つても追つても後に附いて來ます。何處の店の飾り窓にもクリスマス當て込みの趣向がしてあります。石膏細工の基督やマリアを籠に入れて道端で賣つてゐる男があると、その前に立つて値段をつけてゐる髮の毛の長い坊さんがあります。道のそこゝに日本で言へば辻堂のやうな聖像の祭つてある所があります。いづれも中は薄暗くて、お燈明の柔かな光が色彩の强い裝飾のこつてりとしたイコン（厨子）を微に照らしてゐます。往來の人は高きも卑きもその前で十字を切つて行きます。中にはお堂の內へ這入つて、暫くは頭も上げずに禮拜して行くのがあります。爲事の歸りらしい勞働者がバラライカを彈きながら、平氣で賑かな町を通つて行きます。何處からともなく「歌」の節の聞こえて來さうな、「踊」の足どりの見えて來さうな、樂しい露西亞の都の冬の夜の景色です‥‥

私はさういつた町中を、確にステエションへ行く方角だと思ふ方へ歩いて行きました。私の目的物は料理屋かカフエエでしたが、それが中々見つかりません。うまさうな麵麭の列んでゐる店はあります。赤い大きな玉になつた、うまさうなチイスの列んでゐる店はあります。併し、人の賑かに出這入りをしてゐる食ひ物店は一つもありません。

私は少しも横町へは這入らずに、大きな通りばかり歩いて行きました。町が段々暗くなつて來ました。道が段々狹くなつて來ました。それでも、私は構はずにどん〳〵歩きました――ステエションの近くまで行けば何かあるだらうと思つて……

ふと、私は或繪看板の前に足を留めました。赤い着物を着た目の大きな若い女が、綱渡りをするやうに大砲の上を渡つてゐる繪です。小さな入口の上の電氣の這入つた額には、TEATPЪ（劇場）といふ六字が光つてゐました。私はこの小さな入口の家をまさかに劇場だとは思ひませんでしたが、Sensational な繪看板から想像して、何か烈しい見世物だらうと思ひました。眞面目な芝居を見る機會はあしたから澤山あるだらうが、かういふイカモノを見る機會は今夜きりもうないかも知れない――私はかう思つて、直ぐ二等といふ切符を一枚買ひました。

狹い梯子段を上がり切ると、そこは可なり廣い待合室らしい部分で、立派な長椅子や肱掛椅子がそこゝに置いてあります。部屋の一隅にはチョコレエトや菓子などを賣る臺があつて、その向うに暗綠色の厚い天鵞絨のカアテンが、天井から床まで一ぱいに垂れてゐます。菓子の店の側には黑い服を着た婆さんが立つてゐて、カアテンの前には眞赤な着物を着た蓮葉らしい娘が立つてゐました。

私が這入つて來ても、誰も案内をしようとしません。私は爲方なしに長椅子に腰をかけました。その内に又客らしい紳士が一人上がつて來ました。子供を連れた中流の奧さんらしい人が這入つて來ました。みんな默つて直ぐ椅子に腰をかけるのです。赤い着物を着た娘は、天鵞絨のカアテンを出たり這入つたりして、何か面白さうに菓子屋の婆さんと話をしてゐますが、それは私には一向分かりません。

暫くすると、汚ない身なりをした勞働者らしい大きな男が、細い紐で縛つた大きな白い紙の箱を抱へて、私逹の待つてゐる部屋へ上がつて來ました。

男はニヤ〳〵笑ひながら、私の隣りにどかりと腰をおろしました。目の小さな、鼻の低いそれでゐて恐ろしく手の大きな男です。私はその大きな身體を私の小さな身體の側へ持つて來られた時、水でも浴びたやうにぞつとしました。

併し、男はニヤ〳〵笑ひながら、いきなり親しげに私に何か話し出しました――酒臭い息が頻に私の鼻を襲ひます。

勿論、男の言ふ事は一言も私に分かりません。それでも、男は私に分かるものと信ずるらしく、熱心に飽きずに話を續けます。その内に、私はふと、この男は何か私にねだつてゐるのではないかと思ひました。(誰もがかういふ場合、かうした人に對して直ぐ起す考へです。併し、それは屡々取り返しのつかぬ侮辱を人に與へる憂のある考へです)そこで、私はさつき買つた「サフオオ」の箱を男の前に出しました。併し、男は容易に手を出しませんでした。再三再四の無言な勸めで、男はやつと一本煙草を取りました。私はたつた今自分の起した考へを恥ぢながら、男の煙草に火をつけてやりました。

私が何一つ答へないのも構はずに、男はやつぱり一人で話してゐます。いつまでも、いつまでも話してゐます。その内に、私はふと「トルストイ」といふ詞を聞きました。「ソシアリスム」といふ詞を聞きました。私は急に耳を立てて、少しでも男の言ふ意味を聞き取らうとしましたが、それはやつぱり徒勞でした。私は泣きたい程悲しくなりました。

赤い着物を着た娘は、さつきから頻に私達の方を見て、なぜか眉を顰めてゐましたが、暫くすると、カアテンの中から一人の男を連れて來て、その男に私の隣りに座つてゐる勞働者を外へ連れ出させようとするのです。おとなしくしてゐる者をなぜそんな事をするのだらう。同じ客だらうのになぜそんな虐待をするのだらうと、私は不思議に思ひましたが、悲しい事に口が利けないので默つてゐると、勞働者は別に反抗もせずに、おとなしく外へ連れ出されて行つて了ひました。

勞働者が外へ出て了ふと、赤い着物の女はさも私に親切な事でもしたやうに、私の顏を見て得意さうに笑ひました。

「露西亞といふ國は不思議な國だ。」

私がかう思つてゐる途端に、天鵞絨のカアテンがさつと左右へ開いて、大勢の人がどや〳〵と出て來ました。そこで、私はやつと分かりました――「先様は入れ替り」になるので、私達は待たされてゐたのだと言ふ事が。

私は勞働者の一件から大分氣が進まなくなつてゐたのですが、それでもまだ多少の好奇心が殘つてゐたので、人の後に附いてカアテンの中へ這入つて見ると、それは豫期したやうな芝居でも見世物でもな

いのです。唯の活動寫眞なのです――私はがつかりしました。

氣抜けのしたやうに私のぐつたりと腰かけてゐるベンチの前では、カタ〳〵と不愉快な音を立てて、フイルムの芝居が無言に場面を重ねて行きます……ドブシユカといふジプシイの踊り子が或國事探偵に頼まれて、色じかけで或城内の秘密を探るといふ極めて實感的な寫眞です。ジプシイの女が城内の或士官をたぶらかす場面などは、迚も日本などでは見る事が出來ますまい。女に城砦の圖を奪はれた士官は銃殺されます。國事探偵も捕縛されます。士官の銃殺される事を新聞で讀んだジプシイの女は、急に男が可哀さうになつて、刑場へ驅けつけます。そして、士官の硝烟の中に斃れるのを見ながら、自分も縛されて獄へ投ぜられます……

寫眞が濟むと、私は急いで又往來へ出ました。そして、今來た道を又ホテルの方へ取つて返しました。やつぱり料理屋らしいものは見つかりません。酒場らしいものさへ見えません。さうかうしてゐる内に、道に迷つたものと見えて、いくら行つても見覺えのある通りへ出ません。横町へでも這入つて見たらと、或横町へ曲がると、益々道が分からなくなりました。そこで、とう〳〵辻馬車の厄介になりました――勿論、好い加減な値段で。

すると、乘るが早いか、馬車は直ぐホテルの前で留まりました。私は狐にでも化かされたやうな氣がしました。

兎に角、腹が減つて堪らないので、帳場で食堂はまだ明いてるかと聞くと、まだ明いてると言ふので、急いで行つて見ました。

私は食堂へ一足踏み込むと、覺えず後へ下がりました。私にとつては餘りに立派過ぎる食堂です。眞白な布をかけた食卓には花や果物が堆高く盛られてゐます。美しい明かりが眩いやうについてゐます。丈の高い棕櫚の木の大きな鉢がそこゝに置いてあります。廣間の中央では、オオケストラの一團が今を盛りに音樂を奏してゐます。身綺麗な給仕人が忙しさうに食卓の間を驅け廻つてゐます。シャンパンがポン〳〵拔かれます。男の客はみんな燕尾です。女の客はみんなデコルテです――私は汚ない背廣で迚もその中へ這入つて行く勇氣がありませんでした。

私はがつかりして、一度明けた食堂の戸を又締めました。そして、リフトにも乘らずに、重い足を引き摺り引き摺り、やつと五階の部屋まで辿り着きました。そして、部屋附きのボオイを呼んで、ココア一杯と麵包とバタとを持つて來させて、それで減り切つた腹を僅かに充たしました。

ボオイはボレルの描いたゴオゴリのやうな優美な顔を持つてゐます。燕尾服がしつくりと身體に合つて、丈の高い美しい姿勢がまるで彫刻か何かのやうに見えます。

ボオイは獨逸語を達者に話します――

「どこへ行つて入らつしやいました。」

「町を散歩して來た。そして、活動寫眞を見た。」

「ワチカンへ入らしたのですか。」

「何といふのか知らない。唯、通り道にあつたから這入つたのだ。」

「晩の御飯はお濟みになつたのですか。」

「うむ、町で喰べた。」

ボオイが部屋を出て行くと、私はほつと熱い息をついて、額の汗を拭きました。

もう午前の四時になりますが、私はまだ眠る事が出來ずに、寐臺の中でもぞ〳〵してゐます。けふ一日の事が、廻り燈籠のやうに私の頭の中を廻つてゐるのです‥‥中でも、あの活動寫眞で會つた勞働者の優しい目つきが忘れられません。ホテルの食堂へ一足踏ん込んだ時の恥づかしさが忘れられません‥‥若し、あの勞働者がこのホテルの食堂へ這入つて來たとしたらどうでせう。併し、あれも露西亞人です。これも露西亞人です。そして、私は‥‥

（一九一六、七、七）

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町	東京堂
仝　神田區裏神保町	上田屋
仝　京橋區銀座三丁目	東海堂
仝　京橋區元數寄屋町	北隆館
仝　京橋區西紺屋町	良明堂
仝　日本橋區本石町	至誠堂
大阪市北區梅田町	盛文館
仝　東區京町堀	太華堂
仝　北區東梅田町	宮內立盛堂
京都市七條停車場前	三共社
仝　間之町七條	大盛社

○定價　金參拾錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾貳錢但支那を除く）

冊數／國別	內國	國外	
六冊	金壹圓八拾錢	金貳圓四拾錢	以上郵稅共
十二冊	金參圓六拾錢	金四圓八拾錢	

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、卽ち一ケ年通計十七册分の割合なれば一ケ年分御註文の方は內國は金五圓拾錢外國は金六圓八拾錢の割となる

●本號特價　金六拾錢　郵稅金四錢

送金注意

一誌代郵稅は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし

一郵便爲替にて御送金の場合は指定を本鄉區西片町十番地中央公論社とし、拂渡局を東片町局と指定あれば途中盜取さるる虞なし

一振替貯金口座は東京三十四番なり

一郵劵代用必ず一割增の事

一集金郵便の便法を利用せらるゝ方は、坐ながらにして誌代の拂込をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる共總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし

一金一圓迄　金六錢（集金委託料
一金五圓迄　金七錢　及送料共）

一受領證請求は必ず返信料を要す

大正五年七月十四日印刷納本
大正五年七月十五日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　高木酉三

東京市本鄉區駒込西片町十番地
發行所　中央公論社
電話長下谷九一一九
振替東京三十四番
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 5.25; Single copy 37 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

明治三十年十一月二十九日第三種郵便物認可